

---

# リセット

塚田和輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リセット

### 【Nコード】

N2245P

### 【作者名】

塚田和輝

### 【あらすじ】

俺の記憶は、半壊した街の中でのエリスとの会話から始まった。それ以外の記憶を完全に失っていたからだ。恐らく異世界であるこの場所で、俺は勇者候補生として生きていた事を知り、過去の自身を知る為、存在理由を得る為に魔王討伐の旅に出る決意をする。俺は強力な武器を召喚する魔術をいつの間にか会得していた。その力を駆使し、なんとか旅を続けていく。その魔術こそが記憶を蝕んだ原因だと知りながら。

基本的に主人公は最強ではありません。

只今、現代編執筆中。諸事情により、更新が遅延しています。

## 最初のリセット

気が付くと、突然の頭痛に襲われた。膝を着き、両手で頭を抱え込んでいた。

……息苦しい

動悸が激しく、息をする事さえも困難な状態だった。

痛みを伴う深呼吸を何度か行くと、自分の状況を把握していないことを思い出す。

緩慢な思考のまま周りを見渡す。

どうやら街の大通りの真ん中に座り込んでいたようだ。街の風景にはあまり馴染みが無いような感覚がした。自分が見知った場所ではないらしい。

時代でいえば中世あたりの西欧建築がそれに近い。

とはいっても俺自身、専門的な建築、建造に対する知識はないので、推測の域を出ないが。

現代の主だった建造物に多用されている、鉄筋コンクリートによる建築ではなく、レンガ作りや、木造の家屋が目をつけた。

それよりも、異常な情景が目の前に起こっていた。正面の通りに沿う建物全てが、ズレていた。

まるで、尋常でない切れ味の、途轍もない長物の刃物で視界に入るすべての建物を切り崩したかのようなだった。

なんなんだ、これは現実なのか。

耳鳴りがするほどの頭痛も、隙間風のように甲高い呼吸音を奏でる肺さえも忘れそうになる。

瞳が揺れる。焦点が合わない。動悸が激しくなる。ただ、怖かった。

「あ、あんた」

空耳かと勘違いするほどのか細い声だった。声の主を探す為に、辺りを見回す。俺の少し後方にその少女はいた。プリーツスカートに落ち着いた色合いのカットソー。アウターには黒のジャケットを着ていた。下手をすれば、どこぞの制服に見えそうだが、うまく着崩している様だ。

体格はお世辞にも大きいとは言えなかった。座り込んでいる自分の位置からでもそれほど視線を上げなくても顔が見て取れた。

気付けば、脇腹を押さえながら此方に近づいてきていた。怪我でもしているのだろうか。

少女との距離は会話をする長さになった。少女の顔を見る。顔の輪郭は少し丸みを帯び、あどけなさを残している。微風に揺らされる金色の髪がその可憐さを映えさせていた。線は細いが、少女から女性に成長する変化を見て取れる。

絵画を見ているようだった。

それは絵で描かれている様な、と言うよりは、絵でしか描けない想像上の生き物を連想させたからだ。

思わず瞳を凝視していた自分に気付く。魅入られていたのではないかと錯覚してしまいそうなほど、少女の澄んだ翡翠色の瞳を見ていた。

記憶には無い顔だった。けれども、懐かしいような安心感をもった。

それで居て落ち着かない自身の心を感じ取る。

「な、なによ。じっと見て」

頬に赤みが差している。やはりの年頃の娘は羞恥心が強いのだらうか。

……俺って何歳なんだろう。

「ごめん。なんか頭が上手く働かなくて」

無難に返答した。少女の態度からして、どうやら俺たちは知り合いらしい。それも、ある程度は見知った仲である、と言った所か。

ここに来てやっと自分の置かれている状況を整理しだした。そもそも、混乱していたし。今も冷静とは決して言えないけれど。

まず、どうやら俺には記憶が無い。それに加えて、今普通に会話が出来て、ある程度の知識があるという事は自分が経験してきた思いつき出とか、そういう物だけが、キレイさっぱり無くなっているみたいだ。

生活していく分には問題無さそうだ。

正直、不安しか無い。

それに、この娘。多分知り合いつて事は分かったんだけど、信用できるかまだわからない。

もっとまともな状況だったら、間違い無くすぐに、俺記憶ないんです、って言ってたけど。

建物は崩れかけだわ、頭痛はするわ、肺は痛いわ、目の前には見た事も無い可愛い少女が怪我してる。なにより俺はここが何処なのか分からない。俺の知識上、俺が住んでいた場所は現代の日本。でも、ここは中世あたりみたいだ。突拍子も無いけど、タイムスリップしたのではないかと疑いたくなる。

とにかく、こんな状況じゃ、軽はずみな行動は出来ない。

俺が臆病者なだけかもしれないけど。

「だいじょうぶなの？ やっぱり、あんな力使ったから反動が来たんじゃない」

数秒のうちにここまで思考していた為か、会話の途中だったことを完全に忘れていた。

ん？いま会話が変わったような。

「え？ 力って…」

「…それよ」

少女が指し示した場所には、先ほどの崩れかけの建造物があった。なるほど。俺が、やったのかあれは。すごいぞ俺。……物理的に無理でしょうが。どのくらいの距離を切断してんですか。

「あんま、覚えてない…」

「そう…。やっぱりその力の代償みたいね。あんまり使わないほうがいいかもね」

そういうと、心配そうに眉根を寄せた。行動すべてに気品が漂っている事から、育ちの良さが感じ取れる。

自分には無いものを持っている為か、少女の一挙手一投足で鼓動が早くなる気がした。

「ああ。ありがとう。そうするよ」

使い方なんかわかりませんしね。恐らくその力とやらのせいで俺の記憶が無いらしい。少女がウソを言っているようにには思えないし。ただ、半信半疑なのは仕方ない。

「とりあえず、城へ行くわよ。敵がもう来ないとは限らないし」

敵？誰、それ。周りを見渡しても、何も居ませんが。そもそも、さっきの俺の攻撃らしきものしかない。想像したくはないけど、死体も、血の跡も何も無い。そんな俺の胸中など想像もしないだろう、少女は俺とは反対の方向に歩を進めた。

「痛っ……」

痛みで膝を崩しそうになった少女を支えた。思ったより、体が機敏に動いてくれた。いつの間にか体調も治っているし。どうやら、時間をかければ回復するみたいだ。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫よ！自分で歩けるから！」

俺の手をやりわり押しつけて再び歩き出した。だが、その足取りは平衡感覚を失っているかのように危うかった。嘆息を漏らす。あんまり、お節介はしたくないのだが、あの状況を放っておくほど冷血漢にもなれない。少し強引に手を引っ張った。

「きゃっ！ ちょ、ちよつと！」

甲高い抗議を無視してそのまま抱え上げた。要するにお姫様抱っこである。動揺している少女を無視してそのまま歩き出す。

「このまま真っ直ぐだっけ？」

「……そうよ」



どれ程抗議しようとも、俺が折れるつもりは無いと悟ったのか、或いは知っているのか、無言で俯いていた。赤面している顔を見ると、先ほどの怪我が目に入る。赤く滲んでいた。よくよく見ると、額には汗が滲んでいる。

「どうやら、かなり我慢していたらしい。状態から察するに、緊急を要するわけでは無さそうだが、軽んじても良い訳でも無さそうだ。あまり揺らさないよう、できるだけ早く歩いた。」

\*\*\*\*\*

たしかに城だった。目の前には想像していた通りの城があった。ただ一つ違うのが思ったより庭の部分が広がったという事だった。この街の市民らしき人達が庭で犇き合っている。皆、一様に疲弊しているようで、そこかしこに座り込んでいる。

周りには金属で武装した兵士が百人程立っていた。城の警護と言った所か。その割には人数が少ない気もするが。

「…中に…入って」

か細い少女の言葉に頷いて場内に歩みを進めた。やはり、すぐにも医者に診せないとまずそうだ。城門付近の蔽つた髭面の、いかにも兵士一筋といった顔のオヤジがその歩みを止めた。

「止まれ！」

聞きなれない、金属の摩擦音を鳴らしながら目の前に立ちふさが

ったオヤジと俺の視線が交錯する。

「……ってか、眼がこええ……。殺意つてやつだろうか。ただ単に訝しげな視線を送って来ているだけなのだろうが、筋骨隆々なオヤジを目の前にすると気後れしても仕方ない。そう、自分に言い訳した。」

「何人も入城することは叶わん！ 見たところ、旅人が、冒険者と云ったところだろう。早々に市民避難所に戻れ！」

市民避難所とはその庭の事だろう。

冗談じゃない……。

「この娘は怪我をしています。早々に医者に見せたい」

自分でも驚く程、はつきりと意思を伝えることができた。内心ビビっていたとは思わないだろう。

思わないよね……。声震えてなかったはずだし……。

「医者……？とにかく、怪我云々は関係ない。市民の中にも怪我を負っている者もいる。そのような者も避難所滞在のヒーラーに掛かっている。例外は認められん」

ヒーラーってなんですか？

いや、それより、そのお医者さんみたいなヒーラーさんって庭で走り回っているあの人が？数百人いる庭でその人一人じゃないですか。そんなの待っていたら間に合わない人も出てくるじゃないか。

現に、怪我を負っている市民は一人では手が負えないほどの人数がいるし。

「一人だけのようですが、城内にはいないのですか？」

「……城内には掛かりつけのヒーラーが数人居る」

なるほど。市民より、皇族の方たち優先って事ね。どこも一緒だね。腐っているね。

あー、なんかムカついて来た。このまま、強行突破でもしようかと無謀な考えを抱いていた時、凜とした声が聞こえた。

「彼は勇者……です」

辛いはずなのに、その声は辺りの人間に確実に浸透するほどの大きさを保っていた。うん。勇者ってなんですかね。触れないでいいよね。ってか、触れたくないよね。勇者の後にボソボソと何か言っていたように聞こえたが、聞き取れなかった。

「…証は？」

「……」

症状が胸元に手を入れると、朱色の首飾りが出てきた。その色合いはなぜか弱弱しい光を放っていた。

オヤジは髪飾りと俺の顔を交互に見てきた。だから、眼がこええって…

「ふむ。やや名声が弱いようだが、間違いは無さそうだな」

意味の分からない独り言をつぶやくと、相変わらずの金属と共にその巨軀を端に退けた。

「良かるう。通るがいい」

「…どうも」

なるほど。わからん。まあいい、とにかく今はこの少女の容態が

心配だ。振り返ると、避難所では多くの怪我人と一人のヒーラーが眼に入った。少しの罪悪感を抱きつつ、急いで城内に入る。

「あつちよ」

少女の指し示した道をしばらく行くと木造の扉が眼に入った。重厚感のある扉を押し開けると、やや開けた場所に出た。部屋の端には少々豪華な飾りの施された、寝具が並んでいた。胸がムカムカした。ここに外の市民たちを寝かせていれば、幾分かマシになるはずなのに。

正面奥には女性が座っていた。

想像と違った。格好は私服っぽい。外套を羽織っている意外にはそこに居る女性と違いは無さそうだった。ただ、なぜかフードを被っていた為に顔の造詣を窺い知る事は難しかった。たぶん、美人だと思う。む、胸が大きいからじゃないよ？

「あら。どちら様かしら」

説明するのも面倒なのか、首飾りをちらつと見せると、女医さん（なんかこの呼び方しっくり来た）もすぐに察したように此方に寄ってきた。

「ふーん。ま、この分ならすぐに治せるわよ。内臓には達していないようだし」

怪我の具合を、ちらつと見ただけでそう言い放った。寝具に横にならせる様に促される。

怪我に響かないように、ゆっくり少女を寝具に横たわせた。

その時、限界が来ていた俺の腕から力が抜けた。

……言い訳していい？

元々記憶が明瞭になつていた時から感じていた体調不良は治つたんだけど、完治つてわけじゃなかったんだ。体は気だるさが残つてたし、力もそんなに入らなかった。この娘を抱えて結構歩いたのね。うん。軽かった。けどね、さすがに腕限界だったわけ。抱えているだけならまだしも、下ろす時つてもつと力使うじゃん？だからさ…

この娘に覆いかぶさるような格好になつても仕方ないよね？

「ななななっ、何するのよっ!!」

「ご、ごめっ!!」

自身の傷の事も忘れてばしばし頭を叩いてきた。しまいには、拳骨で殴つてきて、脳が揺れた気がした。なんでこんな状況になつたのか……。焦つて頭の中は混乱していた。腕も限界だから体起こすのもきついんだけど。

痙攣する腕に叱咤しながら、なんとか体を起こす。

「あら。終わり？ 若いっていいわねえ。続けても良かったのに…」

残念、と言わんばかりの表情で嘆息を漏らす女医さんを軽く睨んだ。自分の顔も熱を持っていた。顔が赤くなつていただろうそれ以上、少女のほうは真っ赤になつていたように思えた。頬をやや膨らませ、目じりには涙が少したまっていた。

「じゃ、治療するから。外出ててね」

ん？あー。そりゃそうか。服脱いだりするもんね。おれは軽く頭を下げて、部屋を出ようとすする。

「そこを出て、正面の通路を真っ直ぐ言って突き当たりの部屋が待機室よ。そこで待つてなさい。終わったら、教えに行くわ」

「分かりました。ありがとうございます」

背中から声を掛けられ、再び一礼してから部屋を後にした。肩口から覗いた少女の顔はまだ赤かった。

\*\*\*\*\*

はつきり言おう。もう、めんどくせえつえええ！！

頭を掻き毟りたい衝動に駆られ、寸前で思いとどまる。今俺の状況を説明するには少し前に遡らなければならない。

俺が待機所に入った瞬間、まず眼に入ったのは厳つい奴等の顔。例えるなら、裏路地の酒場に入ったら、客全員が厳つかった、みたいな。想像の事ね。まだ酒飲めないから。……たぶんな。

んでそいつら一斉にこっち見てきたわけ。中には女の人もいるみたい。でも大体が厳つい男達だったわけだ。門番のオヤジ並に圧力を持った眼と体躯。

もうビビっても仕方なくね？

しかし、入ったからには、失礼致しましたとは言えない。仕方なくそのまま、歩を進めると、床に座っていたモヒカン厳男が声を掛けてきた。

「ようお嬢ちゃん。ここはオマエみたいな小娘がくるところじゃないぜえ？」

絶対最後に（笑）が入っているだろう口調で俺に話しかけてきたニヤニヤと此方を見てくるモヒカンの瞳には侮蔑の色が濃く現れていた。

「俺は男ですが」

内心ビビっていた俺だが、意外にも口調は冷静だった。門番の親父の時も思ったが、意外に肝が据わっているのかもしれない。

「おお、そりやすまなかつた。あんまりちっちゃいからよう。それにその細腕。そこの街娘のほうがよく太いんじゃないの？」

イライラしてきた。

だが、ここで争ってもこいつには勝てそうも無い。自分の小さい誇りのために命を賭ける気はない。

モヒカンの腰に携えている剣をちらつと見てその考えに至る。

どうやら、俺は結構短気みたいだ。

「はあ。そうですね」

曖昧な返事で、その場をやり過ごそうとした。それが良くなかったらしい。

「ああ！？んだよ、その言い方は。舐めてんのか！？」

あれ？こいつ沸点有り得ないほど低くないか？

もう、面倒くさい。そもそも、ただ視界に入っただけで実害ない

のに、なんでこうも吹っ掛けてくるのか。小さく嘆息する。こういう輩はどこにでもいるのか。

って事で、いまに至るわけだが。さてどうするか。

案としては

一、謝り倒す。うん現実的で堅実だね。でも、非常に腹立たしいです。そもそも、許すかな、あいつ。

二、殴り倒す。無理じゃね？

三、逃げる。脱兎の如く。

んー、三かな。これなら、そこまで腹は立たないし自分の身は無事だ。でも、問題なのは、モヒカンの位置が俺と扉の間なんだよね。モヒカンが立ち上がり、抜刀しようと腰に手を当てた。仕方ない、玉碎覚悟で、突っ込むかと覚悟した。

「やめな」

その時、数少ない女性の一人が声を上げた。一言で言えば。美人印象は創作物の女盗賊みたいな人。

自分の体に自信があるのか、体を覆う布が少なく、露出が激しい。凜とした佇まいは、姉御と言いたくなる程だった。

なんか、失礼な説明したような気がする…。

「自分の出番が無いからって、人様に当たるんじゃないよ。ニワトリ。」

言い得て妙だった。心の中で拍手した。許されるなら、よっ！さすが姉御！と言いたかった。いやいや、言わないよ？

「コッコッ……このがきや！」

ニワトリ（改名）が狙ったように泣き声の真似をすると、周りか



ら失笑が漏れた。

「コ、殺してやる!!」

顔を真つ赤にしたまま姉御に向けて帯刀しようとする。あ、やばい。と思ったときには、体が動いていた。突然、自らの体の動きが頭に明確に浮かぶ。なぜだろう、自分が思ったより、思った通りに体が動いた。想像出来る自分の動きを寸分狂わず行う自分の動きに違和感を覚えた。

ニワトリの抜刀が済む寸前に、柄尻に手が届いた。その瞬間、体重を柄尻中心に向け瞬時に移動すると共に全力で鞘へ差戻した。その反動で自分より明らかに巨躯のニワトリが片膝を着いた。右手は帯刀しようとした位置で空を掴んだままだった。

「城内で抜刀するなんて。死にたいんですか？」

これは自分の声なのか。自分の意思なのか。あまりに冷徹な自分自身の声に、身震いしそうだった。

「う、うるせえ」

虚勢を張っているのが丸分かりだったが。素直に元の位置に戻るニワトリにそれ以上何か言う気にはならなかった。

それよりも、さっきの事だ。一瞬で体が無意識に動いていた。人間の動きを超越していたかのように、周りの人間の動きがひどく緩慢に見え、全てが予測できていた。と、言うより、頭に浮かんだ情景のまま事が進んでいった。予測や予知のようなものではなく、自分自身の能力の掌握。自分はこれほどの能力を持っているのだと無意識に感じ取っていたのか。あの一瞬だけはこの部屋全てを俺が掌

握っていた。そう考えた。

俺はいつたい何者なんだろう。少なくとも、俺の知識の中にあんな動きをする人間は物語の中だけしか存在しなかった。やはり、失った記憶の中に答えがあるのだろうか。

……ま、考えたって仕方ないか。

切り替えの速さは、人生を楽しむための基本的能力だと思っている、らしい俺はすぐさま思考を中断した。

とにかく、開いている空間に座って、少女の治療が済むまで待つことにした。周りの好機の目が痛い、出来るだけ気にしないように目を瞑る。

喉が渴いた、腹減った……

そういえば結構長い間、何も口にしていない気がする。

「飲むかい？」

目の前に差し出された手には、橙色の液体が入ったグラスが握られていた。部屋の奥の方で、テーブルの上に水差しに飲み物が入っているのが見える。「ご自由にどうぞ、と言った所か。

今更気付くとは余程回りに気が配れていないのだろうか。姉御のグラスを受け取ると、笑顔で礼を伝えた。

「ありがとう。貰うよ」

受け取ると一気に胃に流し込む、久々に潤った喉は緩慢になって意識を正常に戻してくれたように感じた。疲れを感じていたらしい体に今になって気付く。

「ふーん。結構礼儀正しいんだ。他の奴等とは違うみたいだね」

「他の奴等？」

「あのニワトリみたいな奴等」

顎でニワトリ集団を指し示す。意外にもニワトリにも仲間らしき人間は居るみたいだ。人相の悪い男と、小柄な少女が見えた。ひそひそ、此方を身ながら話をしている。言いたいことがあるなら面と向かって言えよな。

「最近はおあいう奴等ばかりで辟易していた所さ」

「あね：あなたは違うみたいですけどね」

あやうく姉御と言いかけた自分を瞬時に止まらせ、なんとか言い直す。一瞬言い淀んだ俺を訝しげに見つめてきたが、すぐに思い直したように言葉続けてきた。

「まあ、あいつらよりはマシな部類だと思ってるけど。少なくとも、勇者候補生として名を汚すようなことはしないよ。」

勇者候補生。ってなんですか？って聞きたい。もう、俺の脳は限界を超えそうです。

そんな俺の胸中を知るわけも無く、姉御の話は続く。

「最近はお勇者って名乗る詐欺師まで出てきているらしいし。何のために私たちが居るのか分からなくなってきたね」

「そんなのまで、出ているんですか？」

「ありや、知らなかった？ うん。前々からその手の偽者は居ただけ。最近はお候補生の多様化が進んできたからね。そういう奴らもやりやすくなったんだろ。目に余るくらい横行しているらしいよ」

深い嘆息を漏らす。姉御はどうやら、真面目に勇者とやらになり

たらしい。よし、整理しよう。今日一日で何回目だろうか。とにかく、ここにいるということは俺も勇者候補生らしい。少女が門番に診せていた証とやらは、候補生の、ということだろう。候補生って言うくらいだから、勇者になる為の人員だろう。

って事は、俺は勇者になりたかったのね。それじゃ、あの少女は俺の仲間って事か。

「まあ、その結果がこれさ。最近じゃここみたいに、魔物に襲われる国も少なく無く無い。こんなんじゃ、魔物に殺されちまうよ。今も、役に立たない兵士が魔物と戦って無駄死にしているんだ。うちらは皇族護衛のためにこんな所に閉じ込められてる。市民達は放って置いてな」

ああ、それであの避難所ね。んで、戦える候補生で自分達の護衛をさせて安全圏にいます。

最悪だな。この国だけじゃないんだろうなこういう状況は。

っていうか、魔物、来ました。今の俺が聞きたくない言葉ベスト8に入る言葉来てしまいました。

ちなみに1位は魔王だ。勇者と来たら、魔王が浮かぶでしょ。あ、聞きたい言葉ベスト1位は聖剣ね。

「まあ、魔王復活も間近だし、魔物も活性化してきているから、勇者を育てようと必死になるのは分かるけどね」

さっそく1位来ちゃった。今俺の思考を喋ってたかな。いや口をひよつとこの様に噤んでいたはずだ。

「魔王ですか……」

「ああ、えと数ヶ月の内に起こるらしい。詳しい日付は預言者でも

分からなかったらしいけど」

「預言者？」

聞きなれない言葉に、聞き返してしまう。というか、大体が聞きなれない言葉だけど。姉御は、信じられないという表情で此方を見てきた。

「知らないの？ 大預言者メシヤ様だよ」

「し、知っているさ」

ふーん。といいながら再び此方を訝しげに横目で見てきた。

ば、ばれたか。俺がモグリだって事が。いや、それはそうじゃない。少なくとも、前の俺は知っていたはずだ。

とにかく今は適当に相槌を打つ事に専念するべきかもしれない。

「まあ、いいか。んで、メシヤ様の予言でも分からなかったらしい。だから、余計に各国、勇者選出に躍起になっているんだよ」

「なるほどね……」

よかった。姉御は細かい事には拘らない人みたいだ。すつきりした性格の持ち主らしい。そこに好感を持った。あまり、ネチネチ探りを入れられると、疲れるからな。しかし、各国という事はここもどこかの国なんだろうか。

「それよりさ、あんた。強いんだね。体は小さいのに」

「え？ あ、そ、そうかな」

あ、やべ。いま多分引きつった表情をしてる。

さっきの事を説明しろとか、言われたら、動揺すること請け合いだ。なにより、自分自身にながなんだか分からないのだから、そこ

は無かったことに、してくれないよね？

全力でこの場を去ろうか考えていた時に扉を叩く音が聞こえた。扉の向こうには先ほどの女医さんが立っていた。部屋に入ると、あたりを見回しながら此方に歩いてきた。俺を探しているらしい。というか、周りの人達の視線がおかしい。

女医さんを見る目が、畏怖、敬愛、蔑視の感情を滲ませている気がした。

なんだ？ あの人、なんか危ない人なのか。

「いたいた。探したわよ」

「あ、どうも。」

「もう、治療終わったから。戻ってらっしゃい」

にへら、と笑いを浮かべて此方にひらひらと手を振ってきた。とにかく、姉御の質問攻めフラグを回避出来たことに安堵した。

「あ、じゃあ行きます。色々ありがとうございます」

「あたしや何もしてないよ」

姉御は苦笑いを向けてきた。その表情には本当に自分は何もしていないと言っ意思が汲み取れた。

「助けようとしてくれたでしょ？ だからありがとう。それじゃ」

ぼかんと口を半開きにした姉御が少し可愛く思っ、クスッと笑い背中を向けた。いい人だったな。出来たらまた会いたいものだと思っった。

「変な奴」

部屋を出る瞬間姉御が何か 言った気がするが聞き取れなかった。  
けどまあいい。放った言葉には親しみが籠っていた気がするから。

## 1日の終わり（前書き）

今日分かった事

俺は記憶喪失、エリスと言う女の子と仲間らしい、この国はローウエル、人間は魔道が使える、預言者メシヤ、俺は勇者候補生、なんか変な力あるみたい



## 1日の終わり

治療を終えたエリスを迎えに行った後、俺達の今後の動向を話し合っていた。

ああ、エリスってのは少女の名前ね。いや、会って随分経つのに名前知らなかったって、俺ってお馬鹿さんなのかな。まあ、でも、記憶を失っていることは秘密だから、直接聞けなかったけどね。女医さんとの会話で名前を知ったんだけどね。

とにかく分からないことだらけだったのだが、何とかいくつかの情報は手に入った。

- 1、今は魔物に襲われてこの国、ローウェルは今の状況に陥っているらしい。
- 2、エリスと俺は勇者候補生として名声を上げるために旅をしているらしい。
- 3、この世界は科学ではなく魔学で成り立っているらしい。

んで、補足すると、名声ってのは要は、勇者としてどのくらいの人に認められたかって事らしい。

勇者は人間と違って神に擬似的に隷属している存在になるんだと。だから、人々の認知の仕方によってその力が増すって事らしい。一応勇者候補生も勇者になる素質があるものじゃないと成れないらしい。

まあ、一人間だから、名声が上がっても勇者自体の力はさほど上がらないらしい。ただ、神との繋がりには深くなるから、神の恩恵を強く受けたり出来るらしい。

どこかの国にもそういう言い伝えあったな。祈る人間がいなくなると、神の力が使えなくなったり、存在自体危うくなるとか。まあ、未だに半信半疑だけど……

ちなみになんで勇者になれるのかとかは聞けなかった。

んで、魔学。魔法じゃなくて魔学っていうらしい。魔法ってのは、一部の神族しか使えないものとの事。人間が使うのは、魔導っていうらしい。違いがよく分からんが。

魔導は2つに分けられる。

- 1つ目は自然界に存在するマナの力を使う方法。
- 2つ目は体内のオドを使う方法。

マナってのは自然界すべてに存在するものらしい。それを使うにはそのマナが隷属する精霊に許しを請わなきゃならないらしい。よく分からんが面倒くさそうだ……

オドってのは誰しも持っている生命力に近いものらしい。マナには制限があるが、オドには制限が無い。ただし生命力を使うって事は使いすぎると死んでしまうという事と同義らしい。マナは精霊さんが制限するからそこいらの自然物の生命が無くなることはまず無いらしい。

まあ、要約するとこんな感じだ。

らしい、ってばかり言ってしまったが、あまり深く踏み込めないから、会話の中で読み取ることしか出来無かったんだ……

とりあえず、今の状況把握するには時間が掛かりそうだ。エリスと共にローウエルの状態を知るため城内で話を聞くと、魔物たちはもう周辺には居ないという事が分かった。エリス曰く俺の一撃で多くの魔物が倒されたので撤退したのだろうということだった。

今日は色々な事があったから、早いところ休みたいところだった。街中にゾロゾロと市民達が帰って行く所が見えた。庭ではまだヒー

ラーの人が走り回っていた。ふと見ると女医さんもその中に加わって治療しているようだ。なるほど、魔物の危機が去ったから城内にいた者も自由に出来るようになったのか。

魔物がここまで攻めてきたらどうするつもりだったのか、甚だ疑問だった。

\*\*\*\*\*

一先ず、宿を取る事になった。

腹減ったし、眠いしな。

エリスと共に街中を歩き宿を目指す。この町に俺よりは詳しいだろう、エリスに付いて行く。

うん、会話無いね。そもそも、俺記憶無いし。何話していいか、分からない。

思っただけけど、もう話してもいいんじゃない？エリスいい子だよきっと。可愛いし。

しかし、何故か話す気にはなれなかった。こんな状況なのに、少しでも自分の事も、今までの事も知りたいと思うはずなのに。エリスは、俺達がいた通りとは逆の方角に向かっている。まあ、あの切断された建物じゃ、泊まれないだろうし。というか、今更ながら、罪悪感が出てきた。過去、家屋を立てるにはどのような工程で費用がどのくらい掛かるか、とか書物で読んだ気がする。俺って、何十世帯の人達を路頭に迷わせたりしてるんじゃない……。

「あのさ。あの、切断された建物に住んでた人ってどうなるんだろ？」

少々どもりながらエリスに声を掛けた。沈黙を破るのにも少々勇氣がいるし、何より返答如何では、おれの人生お先真っ暗だからだ。

「だいじょうぶよ。魔物のせいになるでしょうから。国が保証金を出すでしょう」

「そ、そうか」

「本当はあなたがやったって言いたい所だけど。名声も上がるだろうしね」

背中に冷たい汗が流れるのを感じた。冷や汗とは正にこの事。突然の言葉に動悸が激しくなっていく。

「そ、それは」

「まあでも、不利益になる事も多そうだし、止めておくわ」

俺の心情を察したのか、エリスは俺の言葉を遮って、自分の意見を否定してくれた。

いや、やっぱりいい子だよな。この子。笑わないけど。

だけど、会ったその日に人の評価を決定するのもどうかとは、思う気がする。

「着いたわ」

俯いて、うんうん唸りながら色々葛藤していた俺の頭に向かって声を掛けて来た。顔を上げるとそこには、安宿です、と言わんばかりの建物が聳え立っていた。意外に高い造りになっているようで、3階建てだった。木造で出来た、いかにもなその建物を何とはなしに観察していた。さっさと、進むエリスに慌てて着いて行った。

中は意外に広く、受付周りにテーブルが乱雑に置かれていた。席

はほぼ埋まっております、多くのものが食事中、祝杯中といった感じだった。まあ、自国の危機は去ったのだから当然かもしれない。宿というよりは、酒場に近い。エリスは店主らしきおっちゃんに声を掛け、なにやら小さい硬貨のような物を渡してから、すぐに戻ってきた。

「はい。これ」

「ん？」

鍵らしきものを手渡される。どうやら、部屋の鍵らしい。まあね、一緒に部屋だなんて思ってませんよ。そんな、期待してませんから。ちよっとしか。表情に出してしまっていたであろう、俺に向かって可愛らしい声が、耳に響いた。

「食事代も払ったから、好きな時間に食べれるわよ。食事したい時は店主に言ったらいいから」

「ん、わかった。ありがとう」

そう、笑顔で返した。どうもエリスとは必要事項しか、話していない気がする。いや、元々仲間だった訳でしょ？あんまり話すと、地雷踏みそうだし、ちよっと気遣いするんだよね。もっと話したいとは思っているんだが。

「そっいえば、あなたの荷物無くなってるけどいいの？ 結構大事にしてたみたいだけど」

荷物？俺が持っていたものだろうか。気付いたときにはそんなもの無かったが、気付かなかっただけかもしれない。エリスの口ぶりからすると、過去の俺は荷物の中に何か大事なものを入れていたようだ。記憶を戻す、足がかりになるかもしれない。

「んー、まあ、探してみるよ」

「そう……しばらくは、ここに滞在するでしょうし。その間に見つかるといいわね」

今日一日で気付いたのだが、エリスはあまり表情を表に出さないようだ。普段、会話中も笑わないし、治療のときに見せた表情以外ほとんど変化が無かったように思える。俺に心を許していないだけなのかもしれないが。

「じゃ、また明日」

「ああ、おやすみ」

さつさと自分の部屋に向かうエリスの後姿を見つつ、嘆息する。これからどうしたらいいのか、その悩みが浮かんでは掻き消しを繰り返していた。

— 先ず腹減ったし、飯食うか。店主に一言いい、腹を満たした。食事は肉山盛り、飯大盛り、野菜丸ごと、いった感じだったが意外に美味かった。食事をさつさと終え、部屋に向かった。部屋に着くと早々、寝具に横になる。

「疲れた……」

睡魔が頭の中で囁いていたが、まだ寝るわけにはいかなかった。これからどうするか、それを一人のときに考えなければならなかったからだ。まずは、荷物探しだろう、いまの情報では分かることは限られている。

あとは、出来るだけ自分を知らない人間から、もしくは書籍からの情報収集か。

自分が記憶喪失だと勘繰られない状況での情報収集だとそれくらい

しか思い浮かばない。

記憶を失ったこと以外にもおかしなことは多くある。城内での待機室でのニワトリに対する行動。記憶喪失を頑なに隠す自分。そして、目覚める前の俺が何をしたか……。

全ては、謎に包まれていた。だが、なぜか、それほど焦っても、不安でもなかった。エリスのおかげなのだろうか。あの少女を認識してから、不思議と様々な柵が緩和された気がする。過去の自分にとってどのような存在だったのか、今のところは知る由も無いが。

こんなところか。今日はこれ以上思考する力が無い。何より、眠気が限界だった。気付けば、瞼は閉まりかけ、意識は遠いていた。

## 終わりと始まり

「……………」

誰かに呼ばれている気がした。視界がぼやけて正面が認識できない。何か居る感覚はするのに認識できないもどかしさを感じる。瞼は開いているのに、視界が明瞭ではない。

「……………るか？」

何かを尋ねて来ているようだ。言葉尻のみしか聞き取れなかった。寝起きに感じる、意識がおぼろげな感覚に近かった。

緩慢な思考を繰り返す頭を、目の前の人物らしき者から発声される言葉を聞き取るように集中させた。

「覚えているか？」

直後に目が覚めた。変な夢を見た。何故か、寝汗を多量に掻いていた。

悪夢にしては、些か不明瞭な部分が多く、理解に苦しむ内容だったが、心音は数えるのが億劫になりそうな程の速度で鳴り響いていた。

呼吸を整えるため、深呼吸を繰り返す。

なんだったんだ、あの夢は。

夢に理由など無い、と思うのだが、何故か最後の言葉が耳から離れることは無かった。

何とか平静を取り戻し、気を取り直して身支度を整えた。といっ



ても一張羅のみ、荷物は皆無な俺にとって、さほど時間は掛からなかったが。ふと、入り口の扉のほうを見ると隙間から、何やら紙のような物と小さな麻状の袋が目に入った。表面には綺麗な文字羅列されていた。

・ ・ 調べ物があるから先に出るわ。お金は置いて行くので、今日は自由に過ごして。

なるほど。エリスの書置きだったようだ。一緒に置いてあった、袋には、銀色の硬貨が2枚入っていた。たぶん今日一日分に事足りる金額だろう。ここの金銭感覚がまったく分からない俺は、そう勝手に結論付けた。

ん？待てよ。なんかおかしくないか？

そう思い、文章に目を落とす。

文章自体に対するモノではなく字に対して違和感を覚えた。あれ？何で、読める訳？いや、そもそも言葉が通じること自体おかしいだろ。何故、今まで気が付かなかったのか、自分の阿呆さ加減に腹が立つ。

そもそも、俺はこの世界に対してまったく知識が無い。俺が知っている知識は確実にこの世界とは異なった世界での知識だ。魔法、魔道、勇者、魔王なんてものは架空のもので、俺が居た世界では科学を基に人間社会が成り立っていたはずだ。

何がなんだか分からない。

やはり、ここは俺が住んでいた世界では無いのか。過去に飛ばされた、なんて結論も突飛だが、異世界に飛ばされた、なんてことを現実的に受け止めるだけの適応能力は持ち合わせていなかった。

まあ、考えても仕方ないよね。分からないんだし。楽観的に考えることに思考を移行させた。

深く考えると、頭が混乱しそうだ。頭にちらつく不安感を振り切つて、当初の目的の荷物を探すため町へと繰り出した。

外に出ると、比較的人通りが多い事が分かった。昨日はあんな事があつたから、解らなかつたがローウエルは中々の規模の国らしい街中では、屋台の様なテントが多く並んでいた。上手そうな匂いが鼻孔を燻る。その誘惑に負けそうになるも、まずは目的の荷物を探すことを思い出し、歩を進めた。すごく、後ろ髪引かれたけど……。

\*\*\*\*\*

結論から言うと、荷物は見つかった。ただ道程は長く、困難なものだった。

まずは、最初に俺が気付いたあの場所に行つてみた。辺りは、大工らしき人達で溢れ、とても、落し物があるようには見えなかつた。おざなりに探してみたが、やはり見つからなかつた。

次に、城へ行つてみた。最初に現場に行つたであろう人物は恐らく兵士だろうと考えたからだ。

とりあえず、嫌々だったが、門番の親父に話しを聞いてみた。その後が大変だった。どこの誰かが、最初に向かつた。という話を延々と全て、違う人間から聞いたから、その度にその人を探す羽目になつた。

要は盪回しつて奴だ。まあ、みんなわざとやった訳じゃないと思うんだけど、情報が交錯している実情を見て、この国への認識を新たにしていた時に、門番のオヤジが小走りで此方に近づいて来た。

俺に焼け焦げている小さめのポーチを渡し、お前のだろうと手渡してくれた。見つけたときは、この状態だったらしい。中身が疑わ

しいほど、半壊してしまっている。

何故俺の物と解ったのか聞くと、勇者候補生に支給されている物品だった事が解った。

今更ながら思うが、俺は少々物事を楽観的に考えすぎる帰来があるらしい。探し物の特徴も全く解らない状態で他人に尋ねる事が如何に考え無しの行動なのか。少々気恥ずかしさを感じながら、オヤジにお礼を言っつてその場を後にした。

小腹が空いていたので、そこらにある飲食店に入り、食事をしつづ、中を拝見することにした。まあ、俺の荷物なだけどね。なんとなく、実感がわかないせいも、中身を探るのに多少抵抗があったりする訳で。

店のテーブルに着くと愛嬌のある店員さんがやって来て、注文を聞いてきた。メニューを見ても何がなんだかよく解らなかったので、お勧めを聞いて注文した。注文の品が来るまでに中を探る。というか、ほぼ中身見えてたけど。中には、万年筆が入った入れ物と、半分焼け焦げた一冊の日記が入っていた。

とりあえず、日記を開いてみる。中は俺の字らしき物で、紙面は埋められていた。書き始めが異様だった。

- - 俺へ。まず最初に言っておくと、この日記は俺が記憶を無くした時、自分を省みるために書き記しているという事を解つて欲しい。おまえは今恐らく記憶を無くして右往左往しているんだろ？混乱していると思うが、この日記を見れば俺の事が解る。まあ、前は自分の事は関心が薄いかもしいないが、我慢して見てくれ。

まずは、俺の力についてだが、お前も気付いているだろう。力を使うと、記憶を失う。ただ、全てを失うわけじゃない。また、力の

程度によつて記憶の失う時間も変わってくる。使い方は簡単だ、お前が使いたいと思えばそれだけでいい。簡単だろ？ただ力の強弱はコツがいるから慣れておく必要があるみたいだ。注意しろ。詳しくは後に記載する。

次に、お前と一緒に居るエリスの事だが、あの子はお前の従者だ。一応だけどな。

従者つてのは、付き人みたいなもんだな。まあ、名ばかりなものだから、仲間と思つていい。従者になつた詳しい経緯も後にしよう。

あと、お前の事だがな、恐らく気付いていないだろうが、お前は自分に関心が薄いはずだ。あとは、日常における必要不可欠な情報を遠ざけて、あるいは他者でさえも遠ざけているはず。それには理由があるみたいだが、今の俺でも覚えていない。俺自身も自覚が薄くなつて来たみたいだな。

お前はもつとか。たぶん、自分でも違和感、矛盾に気付いていないんじゃないか？

いいか、なんでもいい。お前の事を綴る機会を作れ。日記がいいだろう。きつと、役に立つ。

ここまで読んで信じられないか？まあ、いきなり、こんな事知つても納得は出来ないよな。じゃあ……

その後が続いた言葉を見た瞬間能を直接揺さぶられるような拒絶感を覚えた。解らない。解らないが体が、頭が目の前の現実を全力で否定している事はわかつた。吐き気と身震いするほどの悪寒を感じつつその言葉を反芻した。

「お前の名前を言つて見ろ」



## 名前を呼び合う仲

先の出来事から、部屋に戻るまでの記憶が曖昧だった。たった、一つの文章が自分に多大なる影響を与えた事が未だに信じられない。今も尚、頭痛と嘔吐感尾を引いていた。

ちなみに、日記にはあの言葉以降はほとんど読み取ることが出来なかった。その所為で、詳しい事は殆ど解らなかった。

ベットに横になりながら、物思いに耽った。そう。そうだ。記憶喪失の自分が何故、自分の事を蔑ろにしていたのか。

俺の、容姿は？年齢は？……名前は？

記憶が無いのならば、解らないであろうが、その考えに一切思い当たらないのはおかしい。それに、今の俺の状態。異常だ。

部屋に据え置き之机が置いてある。その上にあつた手鏡が目に入る。何故か息を呑んで、鏡面を除いてみた。男が写っている。おそらくは、10代中頃、成人男性とは言えないだろう。

中肉中背よりはやや痩せ気味。少々長めの髪が瞳に陰りを落とすしていた。髪も瞳も黒かった。この国ではあまり見ない顔立ちだった。恐らく俺はこの世界の住人ではないのだから、当然か。

「いまさらだな……」

丸一日自分の顔さえも知らなかった自分に心底呆れた。過去の自分が記した日記にも書いていたが、自分への関心が薄れているらしい。原因も理由も解らないが、すべき事は解っている。だが、身を起こる異常に気力は失せかけていた。先ほどの食事で空腹感はない。今は何も考えたくは無かった。

俺は、再びベットで目を瞑った。

\*\*\*\*\*

まどろんだ意識の中、何かを叩く音を聞いた。意識が徐々に覚醒してくる。気付けば、扉を誰かが叩いているらしい。

「ねえ。居るの?」

こちらを気遣うようなエリスの声が聞こえた。俺が寝ているとも思っているのだろうか。実際寝てたけど。調べ物とやらは終わったのだろうか。

窓の外を見ると夜の帳が下りていた。どのくらいの時間寝ていたのだろうか。緩慢な動きで扉に向かう。

「ああ。今開けるよ」

扉を開けると、上製本を片手に携えたエリスが立っていた。此方を見据えるエリスの表情はやや感情に欠けるように見える。というか、基本無表情なんだよね、この子。まあ、そんなに気にならないけど。

「ん? どした?」

おざなりに会話を続ける。片手の上製本を視界に入れる。なにやら、用があるようだ。

「ちよつと、入るわよ」

俺の返答を聞く前に、優雅な足取りで室内に入って行った。エリスは姿勢がいい。その所為か、歩き方も見ていて気品を感じる。さり気無い仕草にも育ちの良さが伺える。

というより、こいつすげえマイペースだよな。いいんだけどね。

そのまま、俺のベットに腰を下ろした。俺もそれに倣って、机の椅子に座ってエリスと向き会い会話がし易い位置を維持した。

……男の部屋のベットに座るのにまったく抵抗無いのはどうなんでしょうね？安牌と思われるのかね。それはそれで傷つく様な気がする。

「んで？ なに？」

「これ。見て」

そう言うと、持っていた上製本を開いて此方に見せて来た。なぜか表情は少し緊張している様に見える。紙面には様々な武器の様なものが描画されていた。

「これは？」

「やっぱり、覚えていないのね……」

その言葉に一瞬体が反応した。

ばれていたのか。心で冷や汗を掻きながら、なんとか平静を装う。動悸が激しくなる。俺が記憶喪失だと言う事は誰にも知られてはいけない。理由は解らない。名前の件と同じような理由だろう。ただ、それには確信を持っていた。



「あなたの力。ほら、あなたあんまり、覚えてないって言ってたでしょ？」

「あ、ああ。そうだったな」

そつちか。よかった……んだよな？

心の中で安堵の溜息を漏らす。エリスの口ぶりからすると、俺の力に関係のある絵みたいだ。

「あなたが召喚した武器。これだったと思うんだけど」

武器を召喚？それが俺の力なのか。

それでは、ニワトリ（城の待機所で会ったモヒカンの事だ。忘れかけてた……）との対峙したときの俺の身体能力とは別物なのか。勇者候補生だからか？しかし、勇者でも、神の恩恵を受けるのみとある。勇者でも無い俺が力を持つのも、おかしい。よく解らないな。思考を中断すると、指し示された先を見る。鎌だった。飾り気の少ない、簡素なものだ。ただ、刀身が長い。柄の部分とほぼ同じくらいの長さだった。記憶にある大鎌の比ではない。

「これだけ特徴のある形だし、間違いないと思うけど」

「……アダマスサイズ」

備考に記載されている名称を読み上げる。こくり、と可愛らしく、小首を縦に振る。何か言い淀んでいる様子だ。なにか、言い辛い内容なのだろうか。

「その後、読んでみて」

名称に続いて武具の説明が記載されている。そこには、此の世でもっとも硬い金属で精製された鎌。切れない物は無いと言われている

る。死を齎すモノ。農耕神クロノスの武器。と書かれていた。神の武器。クロノス。聞き覚えの無い言葉だった。

「おかしいわ」

訝しげに、此方と紙面に視線を交互に移しながら、そう言い放った。声色には、若干の疑念を含んでいた。

「武具防具召喚なんて、相当の熟達した、召喚士でないと出来ないはず。契約すればそれほど難しくは無いみたいだけど。せいぜい魔剣がいいところよ。神の武器との契約者なんて聞いたことも無いわ。確かに、勇者は神の恩恵を受けれるし、普通の人間には持ち得ない力を持つこともあるみたいだけど、こんな力は有り得ないわ。人間に出来ることは、神からの一方的な供給のみよ。たとえば勇者でも、神の所持品を使用するなんて、不可能なのよ。」

一息に言い切ると、エリスは深呼吸をした。

俺はと言うと、エリスの初めて見る姿に呆気に取られていた。こんなに、喋るとは思わなかった。

「要約すると、異常だった事？」

「そうよ。そもそも、召喚術も相当の年月と訓練が必要よ。習得出来る人も一握りだし。あんたの年じゃまず無理よね」

即肯定されてちょっと、傷ついたよ俺。

エリスがうーんと言いながら口を尖らせた。思考中みたいだが、その仕草が普段の表情の乏しいエリスとは違い、年相応の可愛らしさを醸し出していた。

「これ以上考えても無意味みたいね。情報が少なすぎるし、あなた

もそこら辺は覚えていないみたいだし」

「そうだな……」

そこら辺というか、全部覚えてませんがね。

とにかく、解らない事が多すぎる。だけど、今の状態では解決の糸口は見えない。今は、考えても仕方ないか。

「それより、ちょっと由々しき事態が起こってるのよね」

「ん？ なんだよ？」

なんだろう。今の所、さっきの話以上に大きな問題は無いと思うけど。怪訝そうな表情でいる俺を見て、若干引きつった笑いを俺に向けてきた。へえ、こんな表情もするんだな。

「お金無くなっちゃった」

「……は？」

そうだな。忘れていた。お金がないと生活できないもんね。

記憶が無くなってから、情けないけど金銭面では完全にエリスに頼ってたもんな。でも、二日足らずで無くなる程しか持ってたなかった……。もしかして、俺たちって、俺たちって…貧乏？

「これからどうすんの？」

完全にエリス頼りの口調で質問する。ただ、疑問を伝えただけなのだが、何を勘違いしたのか、エリスは急に焦りだした。別に責めている訳じゃないんだけど。俺の所為でもあるし。

「えと、えとね。そう。やっぱりギルドに行くのが妥当だと思うのね。名声も上がるだろうし。うん、それがいいわ」

あたふたしている。どうやら視線が落ち着かないみたいだ。気付いたが、エリスは焦ったり緊張したりするとやや早口になるみたいだ。しかも、なんか舌っ足らずだし。

「ギルド？」

「え、ええ。依頼斡旋所みたいところよ。あとは、勇者とか冒険者の手助けとか。まあ、それぞれ違うギルドだけど。私達は勇者ギルドに行く訳ね」

なるほど、そこで依頼を受けて、依頼金を稼ぐ訳か。何をするのか、なんとなく想像できるけど、背に腹は変えられない。同意するしかないか。俺は賛成の意をエリスに伝えた。俺のその仕草を見ると、やっと落ち着きを落ち戻したのか、エリスは控えめに嘆息した。

「それじゃ、今日はもう遅いし、明日にしましょう。朝迎えに来るから、準備しておいてね。」

「ん、解った」

そう言うと、エリスは入り口の扉に手を掛けた。突然、それほどの自覚も無く俺の口が動いた。

「お前さ。俺の…名前呼ばないのな」

その瞬間、エリスの動きが止まった。自分の言動に自分で驚いた。同時に悪寒が背筋を這い回る。

しまった。と、思った時には遅すぎた。次いで、慌てて続ける。

「すまん、忘れてくれ」

おそらく、俺の名前を呼ばないんじゃない。知らないはずなんだ。過去の俺が書いていた、他者が避ける必要不可欠な俺の情報についての、俺の名前が入る事は間違いないだろう。今まで会った人も、初対面の俺に名前を聞かないなんて可笑しいだろ？俺自身名前を聞くという考えさえなかったし。そういう時もあるかもしれないが、全員お互いに名乗らないってのはどうなんだ。だから、きつとエリスも同じなんだ。

「あんたも呼ばないじゃない」

此方に背を向けたまま、肩越しに此方を見据えてきた。返答は俺の思っていたモノと違った。まるで、知っているけど、呼ばないと言っているかのようなだった。しかもなぜか、ちよつと剥れている。頬を軽く膨らませて、口を尖らせている。普段は落ち着いていて、忘れがちだが、こういう時年相応の少女なのだと気付く。

「じゃあ……エリス」

なぜだか、気恥ずかしさを感じながら俺の口は動いていた。俺の言葉を聞くや否や、その足で扉から出て行こうとした。

「おやすみ。…ヤマト」

扉を閉める直前にその言葉を聞いた。ちらつと見えたエリスの頬は上気しているように見えた。言うや否や、エリスは部屋から出て行った。

俺の名前はヤマトというのか。しつくり来る様な、他人の名前の様な気がした。

それよりも何故、エリスが俺の名前を知っていたのか？恐らくは過去の俺が教えたのだろうが、俺や、他の人達の行動を鑑みるに俺自身の情報に制限があるはずなのに、エリスに至ってはその限りではないのだろうか。色々な疑問はあったが、今はこの心の安堵感に浸ろう。記憶を無くしてから、初めて落ち着けた気がして、自然と笑顔がこぼれた。

## 対峙再び

次の朝、エリスが迎えに来た後、朝食を摂ってから、ギルドに向かった。

あれから、いくつかの指針を決めた。

まずは、日記をつけることにする。なんの意味があるかイマイチ解らないけど、記憶を失くした時に読み返して過去の記憶を垣間見ることが出来る。少なくとも、今の俺は過去の俺の日記で幾分か助かったのも事実なのだから。

ただ、今は買えないな。エリス曰く、所持金はあと数日は持ちそうとの事だが、切迫している家計に日記を買うような余分は無いだろう。

あとは、自分の身体能力と召喚能力を知る事。俺は魔王討伐の旅をしている訳だから、自分の能力を知る事とその向上は必須だろう。その為にも自分の力を知るべきだと考えた。本来なら、そんな危険な旅はごめんだが、理由の無い使命感と言うか義務感みたいなものがあった。俺自身の事を知るためにも必要な行動なのだろう。おそらくだけど。

召喚魔術は記憶を失うかもしれない危険はあるが、力の調整は出来るらしい。と言うことは、記憶の喪失具合も調節できるという事ではないだろうか。そこら辺を知るためにも再度力を使う必要がありそうだ。酷く気の進まない事ではあったが、逃避することは出来そうも無い。俺自身の事なのだから。

一先ずはそのくらいか、あとは追々すべきことも増えていくだろう。

「1111よ」

エリスの声で、思考を中断した。どうやら、考え込んでいる間に、ギルドに付いたらしい。今更ながら、終始無言だった事に気が付いた。マイペースなのは俺も変わらないらしい。次からは、考え事は一人の時だけにしようと思いつつ、ギルドに入っていくエリスの後を追った。

中はむさ苦しい男達で溢れていた。ふと、城内の待機所を思い出す。ほとんど同じような風貌の男達ばかりの様に見えた。ただ、中には女性も居るみたいだ。皆同様に武装している。体格もそこらにいる一般人よりも引き締まって見える。俺とエリスは浮いているように思えた。

「じゃあ、登録してくるから、少し待ってて」

「ああ、わかった」

頷いて見送る。ギルドに登録しておかないと、依頼を受けられないっていう構造か。エリスは相変わらずの優雅な足取りで受付に進んでいく。容姿に伴ってその所作はこの空間において目立っていた。

「コココ。ここはお嬢ちゃんみたいなの、可憐な子が来る場所じゃないぜえ」

鶏みたいな笑い声を発した持ち主を視界に入れる。ニワトリだった。ああ、待機所であったモヒカン爺男ね。変な笑い声を上げながらエリスに声を掛けている。当のエリスは興味無さ気にそちらを一瞥すると、受付に向かった。



「ちょ、待てやあ！」

ニワトリが赤い顔でエリスに怒号を放った。嫌悪感も隠そうともせず、ニワトリを見据えるエリス。周りの喧騒も二人の動向に対する野次へと変わっていた。やれ、もってやれ、だの罵倒する奴等ま でいた。なるほど。姉御が言っていた、勇者候補生の質の低下も理解できる。そろそろ、間に割って入ろうとしたとき、聞いたことのある凜とした声が聞こえた。

「また、あんたかい。止めなよ」

姉御だった。相変わらずの露出の激しい格好をしている。腰には左右に短剣を帯刀していた。

「て、てめえ。あの時の」

ニワトリの目が驚愕で見開かれている。驚く事でもない、同じ国の勇者候補生がギルドに居たら、再度会う事もそう少なくないだろう。予想していなかった姉御の再来に警戒感を抱いたらしい。ニワトリは帯刀している剣の柄に手を掛けた。その瞬間、野次馬達が息を飲んだ。どうやらこの男は抜刀しか頭に無いらしい。相手は一回り自分より小さいというのに。素手で戦おうとは思わないものか。

嘆息しながら、俺は体重を前方に移動させた。

丁度良い、自分の身体能力を試す機会が出来たと思えばいい。相手がニワトリなら、変に気を使う必要性も無い。そう割り切って、喧騒の渦中に飛び込む。やはり速い。まず、最初の踏み出しから速度が常人のそれではない。エリスたちとの距離はおよそ、十五歩程その距離を数瞬で縮めた。瞬発力は上々。思っていた以上の力を発揮した。勢いを殺しきれずギルド内に響き渡るほどの着地音を発し、

ニワトリと対峙する形で到着した。

辺りの喧騒は止んでいた。周囲の人間全員が俺を凝視している。肩口に振り返ると。エリスも驚愕の色を表していた。

「俺の連れに何か？」

俺の言葉が辺りに響く。前回の時にも思ったが、俺は意外に肝が据わっているらしい。ニワトリの顔が引き攣っているのが解った。だが、剣を柄を握ったままだ。ひよっとしたら、今回は引く気は無いのかもしれない。

「て、てめえ……」

やはり、引く気は無いようだ。ニワトリは前回とは違い、滑らかな所作で剣を抜き出した。意外に熟練の者なのかもしれない。

周囲の奴等も警戒心を上げる。自分に火の粉が掛からないように注意を払っているようだ。本来なら、素人の俺が、しかも武器を所持しない状態で勝てる相手ではないのだろう。だが、負ける気は全くなかった。

さて、どうするか。

まず、後ろのエリスに後ろに下がるように、後ろ手にサインを出した。俺の意図を察したのか、逡巡する気配を感じたが、俺たちから距離を取った様だ。自分は足手まといになるかもしれないと思ってくれたのだろう。現に自分だけならまだしも、他人を守る自身は無かった。姉御にも同じように下がるように目配りをした。相手がニワトリでも、二対一の戦いは良しとしないだろうと思っていた姉御も距離を取った。

どうやら予想通りだったらしい。俺とニワトリだけの空間が出来上がった。

心音は静かだった。自分でも驚くほど冷静だった。ギルドの従業員らしき人が、慌てて出て行くのが見えた。応援でも呼びに行っただのか。対応遅すぎる……。

「てめえ。もう後には引けねえぞ」

「そりゃ、あんただろ」

肩を竦めながら言った。その間も決してニワトリの挙動から目を離さなかった。ニワトリは意外にも冷静だった。顔を真っ赤にして此方に向かって来ると思っていたが、正眼に構え此方と対峙している。やはり、警戒されている。俺を唯の勇者候補生とは違うと、そう結論付けているようだ。

俺も構える。と言っても、何の武術を学んでいない俺が出来るのは自分の身体能力を如何に生かすか。そのみしか出来ない。ならばと、腰を落とし半身になる。右拳を腰に据えた。これならば、瞬発力を殺さず、攻撃を右拳のみに集中できる。格闘経験の無いだろう俺にとって、技術的なことは期待できない。ならば、後の先を取り、相手の一撃を避け、筋力に任せた拳を捻り込む。相手は鎧で武装している。やや露出がある胴体はほぼ覆われているから、顔面か手足辺りを狙うしかなさそうだが、それくらいしか出来そうに無かった。

ギルドの従業員が呼んだ、と思われる応援が来るまで避け続ける、というのも考えたが、周りを気遣う余裕の無い俺が、エリス達を守りながら上手く避け続けられるとは思えない。

辺りに自身の呼吸音が響いている気がした。さすがに、緊張している。荒くなりそうな呼吸を必死で押さえつける。見れば、ニワトリも額に汗を浮かばせている。生死を分かち戦いに置いて、集中力

を切らせば負けてしまう。俺は素手。だが、ニワトリにとっては脅威と感じているのであるうか。俺と同じような緊張感を感じた。

お互いに構えたまま対峙する時間が経過する。

状況は俺が有利だ。このまま、時間が過ぎれば応援が来るであろう。その時点でニワトリは捕まるか、もしくは……。

それにニワトリは気付いているのか、焦燥感もあるのだろう。額の汗は止まることを知らなかった。

どのくらいの時間が経っただろう、おそらくは数分。だが、俺自身何十分も経った様な間隔だった。内心、まだかまだかという考えが浮かんでいた。それは、応援の到着の事なのか、ニワトリの所作のことなのか解らなかった。それ程、俺の思考は緩慢になっていた。

瞬間、ニワトリが動いた。俺の思考が表面に出ていたのか俺の心の際を見逃さなかった。気付けば、相手の距離だった。剣を振りかぶる動作に入っている。すぐさま俺は横に飛んだ。長距離を跳躍するには多少の溜めが必要なため力加減が難しい。俺の瞬発力でも剣が触れる寸前で避けるのが精一杯だった。少しでも力配分を間違えば俺は死んでいたかもしれない。やはり、腕前は良いようだ。

内心冷や汗を掻くもすぐに正面を見据える。ニワトリはすぐさま返す剣で横薙ぎをしてきた。瞬発力を重視すると、あまり距離が取れない。かと言って、距離を取るために溜めを作る時間を相手が取れるとは思えない。選択肢は一つしかない。相手の攻撃を縫って、一撃を加えるしかない。

横薙ぎの攻撃を体勢を低くして避ける。勢いが有り過ぎたのか、ニワトリの返す剣が少し遅れた。

今しかない。

「ふっ！」

刹那、曲げていた膝を筋力で無理やり伸ばしきると同時に息を吐

く。ニワトリとの距離が一瞬で縮まる。身長差がある為、やや俺が跳躍する形となっていた。と、同時に腰に据えていた右拳を顔面に打ち込む。俺の拳がニワトリの顔面に減り込み、そのまま後ろの壁に錐揉みしながら吹き飛んでぶつかつた。床に倒れこんだまま、ニワトリは動かない。

途端に、緊張の糸が切れた。呼吸が荒くなる。止まっていた汗も突然溢れてきた。心臓が今更鼓動を早くした。

「す、すげえ」

「なんだ、今の。吹き飛んだぞ」

辺りが騒がしくなる。また野次馬達がなんやかんやと騒ぎ立てているらしい。俺はエリスを探す。気付けば近くにいたらしい。怒っている様な、安堵しているような表情をしていた。ちよつと涙ぐんでいるのを見て、落ち着かせるためエリスの頭に手を載せた。

「大丈夫か？ エリス」

「それ、あたしの台詞だから」

そう言い、頭を撫でる。言葉に棘があつたが、俺の手から逃れる気は無いようだ。少しの間そうやって居ると、声が掛かつた。

「あら、恋人？」

姉御の声色は明るい。さっきまで結構緊迫してたはずなんだが、姉御も肝が座っているようだ。表情がニヤニヤと嫌な笑いを浮かべていた。突然、エリスが俺の手を振り払って、姉御に詰め寄つた。

「ち、違います！」

顔真っ赤。人ってここまで顔色変わるもんなんだな、と他人事のように冷静に事の成り行きを見守っていた。しばらく姉御とエリスの押し問答を見守っていると、さっきの受付の女性と応援らしき兵士達が慌てて入って来た。

「あ、あれ。さっきのニワトリは？」

ああ、やっぱりニワトリって共通名称なんだ。

見ると、ニワトリはさっき吹き飛んだままの状態から仰向けになっていた。傍に仲間らしき女の子が座っていた。あの子がニワトリを介抱していたらしい。

あんな奴でも仲間いるんだな。兵士達に無理やり引きづられて行く時も女の子も付いていつていた。顔は俯いていて窺い知る事は出来なかった。

「えげつないねえ……」

姉御が嫌悪感を持ってその様子を見据えていた。どういう意味なのか聞こうとした時、受付が声を上げた。

「あ、あの。どなたが？」

「俺です」

ひよっとしてお咎めを受けるんだろうか。まあ、あれだけ派手にぶっ飛ばした時に、ギルド内も色々破壊しちゃってるもんな。壁、へこんじゃってるし。

訝しげに此方を観察してきた。どうも、信用できないらしい。

「あなたは勇者候補生ですよね？」

「はい。そうです」

「登録はしてますか？」

「いえ、今からしようとした矢先だったので」

なるほど、と言いながら。受付へ向かった。引き出しや本棚を漁ると、書類らしきものを見つけたようだ。しばらく書類を読みふけていた。

よくは解らないが、時間が掛かりそうと判断して、近くの椅子に座った。俺に倣って、エリスと姉御も後についてくる。どうやら、エリスを弄るのも飽きたらしい。

「さてと。色々言いたいことはあるけど。また会うとは思ってたよ」  
「まあ。俺も思ってたよ」

姉御がそう言い放つ。快活な表情。見ているだけで心が躍りそうな笑顔だった。エリスが姉御と此方を交互に見やる。

「知り合い？」

なぜか若干眉根を潜め機嫌が悪そうだった。疑問を俺に投げかけるときのエリスの言葉にはやや棘があるように思えた。気のせいだと思っけどね。

「ああ。城の待機所でちよっとね」

「待機所でもあのニワトリが暴れそうになってたんだよね」

「そ、そうなの？」

「くりと、姉御が鷹揚に頷いた。

「ま、その時もその旦那が何とかしたけどね」

顎をしゃくり此方を指し示した。肩を竦めそれに応じる。エリスはふーん、と曖昧に返事をした。出会って間もないが、好印象を持たれている気がする。自然に敬語を使うことも無く、親しみを持った言葉遣いになっていた。俺も姉御の明瞭な性格に好意を持っていた。あ、恋愛感情じゃないよ。

「それよりさ。聞きたいんだけど」  
「ん？ なに？」

姉御がテーブルに頬杖を付いた状態で、口角を上げて此方を見据えてきた。また、恋人？とか言うんじゃないだろうか。同じ思いに行き着いたのか、エリスの表情が硬くなる。

「いや、ここに來たって事は、依頼受けるんだろ？」  
「そのつもりだけど」  
「じゃあ、あたしと組まないかい？」

片目を瞑り此方を見上げてくる。此方に伺いを立てる上目遣いと  
言うよりは、友好の証のように思えた。

「あなた、従者は？ 本来なら勇者同士で仲間になるなんて聞かないけど？」  
「あたしや、従者は居ないよ。色々あつてね」

表情に陰りが見えた。いつものような笑顔のはずなのに悲哀を感じてしまう。あまり、話したくない過去があるのかもしれない。俺も話せないことがあるから、気持ちはわからないでもない。姉御が言いたいことが分からないから、一方的に同調するだけだ。

エリスも深く踏み込み過ぎたと感じたのか口を噤んだ。



「あー。でさ、どうかな？」

「俺は構わないけど？ エリスは？」

なにやら葛藤してる様子だったエリスだったが。しばし考え込んだ後、可愛く頷いた。

「わたしも、構わないわ。最初に私を助けようとしてくれたし」

エリスなりに恩義を感じているらしい。律儀な性格のようだ。

まあ、俺は何も言われて無いけど。いや、望んではないけどね。ほんとだよ？

「お、ありがと。じゃあこれからよろしく。わたしはメア」

と、エリスに手を差し伸べる答えて握手をする二人。なんかいい場面だと思った。

「わたしはエリス、こっちは……」

そう言うとエリスがこっちを指し示す。

あ、やべ。名前。どうするんだ。背筋に悪寒が走る。いつものやつだ。少し慣れてきた。だけど、これで解る。俺の名前がどういう扱いなのか。追隨して、俺自身の状況も少しはわかるかもしれぬ。

「ヤマトよ」

「そか。よろしくね」

あれ。曖昧だな。聞こえてた？ 聞こえてたよね？

なんか、もやもやする。もっと、なんかあると思っただのに普通す

ぎる。実は言葉として発生できないとか、は無いにしても、あれだけ俺が葛藤したのに、もっと拒絶感表すとか無いわけ？ いや、あって欲しかった訳じゃないけど。なんか、なんかなあ。

「ああ。よろしくな」

拍子抜けしながら握手する。まあ、でも、仲間が増えるのは俺としては大賛成だ。正直今からの旅が不安でしょうがなかったからねふと、見るとメアがエリスに何か耳打ちしていた。

「なななな、なにを言ってるの！」

羞恥心のようなものだろうか、あたふたと慌ててメアから後ずさりしている。ひらひらと手を振るメア。その表情はいたずらっ子のように狡猾な笑みを浮かべていた。

うわあ、楽しそう……。

「まあまあ。とにかくあたしはじゃまは…む、むう」

「わー！ わー！」

何やら叫びながら、エリスがメアの口を必死でふさいでいた。メアの方が背が高いので大変そうだったが、尚も叫び続けるエリスを見て、なぜか微笑ましい気持ちを胸中に抱いていた。自然と笑ってしまった。

「ははは」

俺の笑い声が癪に障ったのか此方を涙ぐんだ瞳で睨みつけてきた。謝罪の意を表しながらも、つい笑顔になってしまった。なぜか、メアもニヤニヤしていた。この空間は心地良く、おそらく初めて手に

入れたこの関係を何時までも保てればいいのにと思った。例え、記憶を失っても、幻だったと思えるような物でも、今の俺にはこの空間が必要なのだと思った。

## 力の脈動

三人で談笑していると、受付の女性が声を掛けてきた。

「お待たせしました」

お待たせしたも何も、何をしていたのかも聞かされていないのだけれど。余計な事を言おうと話が滞ると思いい何も言わなかった。

「えと、ですね。これなんですけど」

「なんですか？ これ」

「やだなあ。依頼書ですよ」

なるほど。此方に手渡してきた、紙面に目を通すと依頼主とその概要が書かれている。

「えと。何故に？」

どうも、要領を得ない。そもそも、さっきの件からいきなり依頼書を渡す意図が解らない。理由を求めると、受付の女性は首を傾げきよとんとしていた。次いで、合点の行った様子で手を叩いた。

「ああ。説明してませんでしたね。ごめんなさい。私、たまに、色々省いてしまう事がありました」

省きすぎだろ……。内心嘆息しながら、曖昧に頷いた。

「さっきのニワトリさん、結構評判悪かったんです。やれ、依頼人に文句はつけるわ、依頼自体放棄したり、周りに因縁吹っ掛けたり。

でもあの人結構腕利きでみんな困ってて。本部で候補生剥奪の話まで出てたんですけど。あなたがぶっ飛ばしてくれたので色々手間省けちゃいましたあ」

超絶笑顔でものすごい言葉を羅列していく。呆氣にとられながらも抑揚に頷いた。

「それで、あなたの腕も解ったし、まあ、信頼できそうかな？　って思ったんですよ。それで、これ！」

依頼書をばしばし叩いた。すごい音してるよ。若干ヒートアップしてきたみたい。

「この依頼、結構難易度高くて、適当な人いなかったんですよ。それで、私閃いちゃった訳です。丁度いいじゃん！　ってね」

閃きと言うか思いつきの気がする。

「で、どうですか？　どうなんですか？　受けますよね？」

そう言い放つと、ぐいっと顔を近づけてきた。妙に迫力がある。しかし、眼鏡を掛けている所為か気が付かなかったが、近くで見ると中々整った顔立ちをしていた。

「ってか、登録まだしてないんですけど……」

「ああ、そうでしたね。」

と、どこから出したのか登録書らしき物をテーブルに、ばんつ、と叩きつけた。別にいいけど、一々動作が仰々しい。普通に出せばいいのに。

その後、エリスが登録書を記載した。考えてみて。と一言告げると受付の女性はそくさと仕事に戻ってしまった。

依頼内容を見てみると、どうやら魔物退治みたいだ。標的はゴブリンらしい。依頼主が住んでいる町の近くの森に最近現れて迷惑しているみたいだ。俺が知っているモノだと、弱いイメージだが、実際は意外に狡猾で戦闘能力も高いらしい。人間に近い戦い方をするとの事。それに一番厄介なのが、集団行動を取ると言うこと。一匹で行動することは稀だとか。ちなみに、報酬は金貨2枚。約2ヶ月は何もせずに暮らせる額らしい。

三人で話し合った結果、受けることにした。

難易度が高いモノほど、危険だという事は周知の事だったが、前金で報酬の3割を得られるとの事から、最初は渋っていたエリスも渋々納得した。俺たち貧乏だしね。

メアはなぜか乗気だった。好戦的なのかな……。

受付の女性に伝えると、依頼主に確認を取るから1日待つて欲しいと言われた。誰でも良いって訳じゃないみたいだ。まあ、前金払うわけだしね。嘘でも失敗しました。って言っても報酬の3割は貰える訳だし。明日の昼頃また来るように言われると、了承の意を伝えた。しばらく時間が空いたので、各自自由時間と相成りました。宿の違うメアは明日ギルドで待ち合わせすることにして、解散した。

\*\*\*\*\*

さてと。俺は周囲を見回し人気の無いことを確認する。宿屋の親父の言った通り、ここなら都合が良い。辺りは、岩や樹木と言った

自然物が目に付く。親父に人気の無い場所を尋ねた瞬間、白い歯を覗かせて、親指を立てながら、教えてくれた。俺も若い頃は、なんてぶつぶつ言い始めたので放置して来た。

って訳で、始めますか。

取り敢えず、日記を取り出す。さっき二人との別れ際にエリスにお金を借りたのだ。まあ、それで、この日記を買った訳だ。なんかヒモっぽいな。少しのお金を借りるのにも凄い申し訳が立たない気持ち一杯だった俺には無理だ……。まあ、でも数日の生活費はエリスが出していたんだけどね。

無自覚って怖いね。ごめんなさい。

日記を開く。中には俺の文字が綴られている。先程、この二日間俺の記憶の限りの情報を書いて置いた。但し出来得る限り時系列に合わせて記載している。つまり、力の使用に対する記憶の喪失はどのくらいか知ることが出来るって訳だ。ただこの世界には細かい時間を計測する方法が無いみたいだった。時計も無いし。なので、大まかにしか分類できなかった。まあ、無いよりはマシだろう。

日記の最後に召喚を行う旨を記載した。思い返して、最小限の力での記憶喪失の具合を調査する、と補足した。

そもそも、最大は俺の記憶全部を喪失するのだから必要無い。たぶん街中を破壊していたアレだろう。使えば忘れるなら事前に知ることは無い。使う必要は無いのだから。使いたく無いだけなんだけど。

過去の俺はなんで使ったのかな。切羽詰った状況だったのだろうか。

とにかく、今は出来るだけリスクを減少させることが出来るかが重要だ。

日記を脇に置きそつと瞼を下ろした。どうすれば良いのか解らない。だが、望めば使えるはずだ。俺が俺に嘘を吐く必要は無い、と信じたい。

力を使う、それだけを心中で呟いた。刹那、力の脈動を肌で感じた。目を開くと其れを視認した。黒い深淵。楕円形の其れは目の前の空間に出現していた。よくよく観察すると表面がざらついていた。例えるなら、ノイズの様な乱れ。

恐る恐る手を伸ばす。表面に触れると抵抗感が全く無くそのまま俺の腕はノイズに呑み込まれた。

言い様の無い嫌悪感が脳を掠める。後退ろうとする理性を無理やり抑え付け、意を決して肘辺りまで突っ込むとそこで止まった。障害は全く存在しないはずなのに何かに引っ掛かった様に、それ以上は進まなかった。歯を食い縛り嫌悪感に耐える。望めば良い。ただそれだけだ。

俺は最小限の力を望みつつ手を引き抜くために力を込める。さっきまで全く抵抗感を感じなかったのに、引き抜くときは何か腕に纏わり付く感覚を覚えた。ぞわぞわと鳥肌が立つ。なんとか手を抜く、と同時にノイズがなんの痕跡も残さず消失した。

俺の手には短剣が握られていた。刀身は曲刀のように反っており、何の素材で作られているのか薄藍色で出来ている。刃渡り30センチほどとやや長い様に思えた。手に握っているだけで、込み上げる力を感じた。通常より身体が軽い。

鎌じゃない？ 召喚する対象は一つではないのか？

当初の目的を思い出し頭を振る。

正面の岩石を見据える。これで試すか。

両手を目一杯左右に開いて丁度同じくらいの長さ。常人なら、巨大なハンマーを用いても砕くことは困難だろう。

俺は中腰に構え、やや右肩を引き、短剣を逆手に構えた。この武器の使い方を身体が知っているようだ。構える動作から繋げるよう



に岩石に猛進する。一瞬で視界半分を岩石が埋め尽くした。驚嘆に値するほどの脚力だった。流水の如く無駄を省いた一閃する。他人事のように客観的にその一連を眺めた。一息置くと、岩石が崩れ落ちた。俺の一撃で、巨大な岩石を完全に切断していた。

まだ短剣は手の中に在った。なるほど、おそらく記憶を失う時は、召喚した時でも武器を使用した時でも無く、武器を戻した時のようだ。

手が震えた。

短剣を所持したまま、日記に 召喚対象は一つではない、記憶喪失は武器を返した時。最小限の力使用時には短剣が召喚される模様。 召喚から現在まで1分程度 と記載した。

気を落ち着ける為に深呼吸をした。どのくらいの記憶を失うのかわからない。言い知れぬ恐怖を覚えた。怖い。身震いがする。自分で行動を起こしたのに、今更ながら後悔を覚えた。

何故こんな目に遭わなければならないのか。姿無き対象に憤った。

「ちくしょう！」

激昂した。どうしたらいいのか解らなかった。俺には家族も、友人もない。自分の過去も無い。意識が混濁しそうだった。今まで鬱積していたモノが溢れ出したようだった。今まで平然としていたはずなのに。けれども、選択肢は一つしか無かった。毎回この後悔に苛まれる未来の自分に同情し、空を仰いだ。

……そして武器を戻した。

\*\*\*\*\*

ん？ あれ？ 何処ここ？  
辺りを見回すと岩や木々ばかり目に入る。  
なんでここに居るんだっけか？

「うおっ！ なんだ、あれ」

視線の先には切断された大岩があった。  
綺麗に二つに分かれている。

「俺が、やったんだよな……？」

ふと足元を見ると日記が落ちていた。俺のだ。って事はやっぱり  
召喚したのか……。

日記の中身に目を通す。俺の記憶では、ここに向かう途中からの  
記憶が無い。内容から鑑みるにおよそ、2、3分程記憶が無いらし  
い。これなら何とか使えるかもしれない。少しだけ、安堵を覚えた。

ただ、日記の最後に記載してあった俺の文字が歪んでいたのが気  
になった。

## 予兆

翌日、勇者ギルドにエリスと共に向かった。

「よつ。おはよ」

メアは先に到着していたらしい。長めの髪を後頭部で結って纏めている。エリスは腰まで伸びた手入れの行き届いた髪が清楚さを感じさせるが、後ろにアップにした髪型のメアは違った魅力があった。相変わらずの露出度の激しい衣服を着ている。やや抑え目の色調のキャミソールにショートパンツと簡素だが、拘りを感じさせる組み合わせだった。

ああ、所詮俺の知識での話した。この世界には違う呼び名があるんだろうけど、横文字を使うほうがしっくり来る。

その格好は豊満な胸が強調されている。動き易さを重視しているんだろうけど、目のやり場に困る格好だ。

み、見てないよ。胸なんか見てないから。

視線が痛い。右下方からの視線を感じる。小柄の少女は此方を侮蔑を含んだ視線で睨んでいた。

俺だって男なんです。仕方ないんです。

「ん？ それ、ナツクルかい？」

メアは俺の腰を指差しながら尋ねてきた。

「ん。そだよ」

腰には手首から拳に掛けて覆うことが出来るナツクルがぶら下げ

である。正式にはナツクルダスターと言うらしい。俺のは真鍮製で出来ている。どういう構造か解らないが手を通して握れば装着できる仕組みになっている。

前日にエリスと共に武器屋で購入した物だ。

事たる毎に召喚魔術を使っていたのでは身が持たない。そう思い、エリスに頼んで武器屋へ案内してもらった。俺よりは武器の事も詳しいと思っただし。

そもそも、今の俺には剣や、槍のような武具を扱う技術は無い。おそらくはまともに使えないだろう。

素人では、刃を上手く通せないと聞いたことがある。想像上の世界では、何故か主人公がすぐに使えたりするけど、そう甘くは無いらしい。それなら、身体能力を活かせる物を、と選んだのがナツクルだった。

エリスには反対されたけどね。拳で戦う勇者っていないみたいだし。ちなみに少々値は張ったが、魔術を付与させた物を選んだ。強度を上げるモノが掛かっているらしい。これなら、遠慮無く使える。ははは、前金の半分飛んじやったけどね。俺って散財家だったのかもしれない。

「んー。ナツクル使いの勇者は見たこと無いけど、旦那だとなんかしっくり来るね」

旦那、って俺の事か。

まあ、褒められて悪い気はしないな。旦那の方じゃないよ。似合っつて言ってくれたことの方ね。

「あー、ありがとう」

笑顔で返す。すこし照れた。  
誤魔化すように、早足になった俺は二人を引き連れて受付の女性に声を掛けた。

「おはようございます」

「あつ、おはようございます。お待ちしてましたよ」

ペコリと頭を下げお互いに挨拶を交わした。

「で、どうでした？」

「ええ。大丈夫でした。快く承諾してくれましたよ」

本当だろうか。若干疑念を浮かべながら曖昧に頷いた。登録したての新人に不安を抱かないわけが無いと思うんだけど。なんか、裏があるような……。

目の前の完璧な笑顔を浮かべる女性の暗黒面を垣間見た気がして頭を振った。

「じゃ、さつそく向かってくださいね」

「解りました」

そう言つて依頼書と名刺程の大きさのカードを渡された。加えて、小振りのポーチを渡された。

あー、あの壊れてたポーチの替わりか。

再配給してくれるんだな。

「これは？」

「ああ。ギルド発行の身分証明書です。それが無いと色々困りますから。ポーチはサービスです。あなた、着けてないみたいだし。便利ですよ」

まあ、ギルドに在籍する証は必要だろうからな。それにポーチは色々助かる。今までは荷物はエリスに持ってもらってたからな。俺の荷物といえば日記くらいしかないんだけどね。さっそくポーチを腰に着け、ギルドを後にした。

\*\*\*\*\*

道中メアが振り向き様に口を開いた。

「そういえば。エリスは何が出来るの？ あたしゃ、これね」  
そういうと自らの押しに帯びた短剣を指差す。

「一応魔術を少し……」

魔学⇨魔導を学問として捉えた意味合い。

魔導⇨マナ、オドを要した力の総称。

魔術⇨魔導における分類されたモノ。召喚魔術みたいな。

おそらくそんな感じだと思う。解りにくいな。統一すればいいのに。もう、魔術でいいよ。

この場合はエリスの持っている魔導を指してるわけだな。

「なんの？」

「えと、回復魔術」

突如メアが目を見開き、立ち止まり様、振り返った。

「凄いじゃん！ あんたヒーラーだったんだ」

「え、ええ。一応」

なぜか言葉が進むにつれて、消え入りそうな程か細くなっていった。

「え？ どしたの？」

「……無いの」

声が小さすぎて聞き取れなかった。

「もっかい、言ってくんない？」

「自分に使え無いの！」

今度は先程とは打って変わって、耳を劈くほどの音量で発した。顔は赤味を帯びている。何を気にする必要があるのか解らない俺を置いて二人が会話を続ける。

「ま、まあ。回復出来るだけでも凄いなと思うよ」

「そ、それに、解毒も出来ないし、解呪も無理。致命傷は治せないし。役に立たないわ」

なんかよく解らないんだけど、目も当てられない程意気消沈してるんだけど。声が消え入りそうな程に声は小さくなって行って、しゅんと小さくなっている。なんとか励ましてやりたくなくて、頭に手を置いて、撫でてやる。

「俺にはよくわからんけど。傷は治せるんだろ？」

「……軽傷だったらね」

「それだけでも凄いじゃん」

「でも、それしか出来ない」

「出来ない事を考えるより出来る事を考えたらいいじゃん。少なくとも俺には誰かの傷を癒すことは出来ない。それが出来るお前が凄いつて思うよ」

沈黙が周囲を埋め尽くした。

「教えてほしいんだけど。その解毒とかがってやつ？ 出来ないものなの？」

「あたしゃ、詳しくないけど、初歩の初歩だったはずだよ。むしろ回復の方が難しいはず」

「色々試したんだけど、何故かそれしか出来なかったの……」

肩を落すエリス。大きく嘆息する。俺には計り知れないほど努力をして、それでも習得できなかったのだらう。エリスの性格から、怠けていたとは考えにくい。

「人間誰しも得手不得手つてのは在るからな。そもそも、なんか原因があつたりするのかもな」

「原因？」

エリスが上目遣いで此方を伺ってくる。まるで、小動物のような仕草に思わず、笑みが毀れる。

「俺も魔術に詳しい訳じゃないけど、出来ない何かがあると思つても不思議じゃないだろ？ 初歩的な事つて事は素質ある人間ならだれしも出来るようになるはずだし。素質が無いなら、回復魔術も使えないだろ」



「んー、そうかな……」

気のせいか、言葉遣いが子供っぽくなっている気がする。

「まあ、こういう時は詳しい人間に聞くのが手っ取り早いけどな」

「ヒーラーに、って事？」

「そだな。信頼出来る奴じゃないと意味無いけどな」

「そっか。私ずっと一人で学んでたから解んなかった。勝手に自分は素質ないんだって思ってたけど」

「そりゃ早計だろ。まあ、その内尋ねてみよう。思い当たる奴が居たら言ってくれ」

「うん。ありがとう。ヤマト」

此方を真っ直ぐに見て、柔らかい笑みを浮かべるエリスに見惚れた。同時に鼓動が早くなる。その笑顔が見れるならどんな辛酸も舐める事が出来そうな気がした。視線が交錯したまま時間が止まった。

「あたしもいるんですけど」

じと目で間に割ってくる。メアを介在して俺とエリスは距離を取った。お互いに顔が紅潮している。まだ、心臓は静かになるうとはしない。

「完全に二人の世界だったね」

くくく、と笑いながらチラチラ俺とエリスに視線をやる。羞恥心を持ったまま、俺は先に進んだ。

「とにかく、先急ぐぞ。依頼主待ってるんだからな」

「はいはい、っと」

俺に続いてメアも後を追って来た。

「おい、エリス。行くぞ」

口を引き締めて、俯いたままのエリスに声を掛けた。

「今行く」

エリスが歩き出したのを見て俺も脚を動かした。少しだけ鼓膜をエリスの呟き声が掠めたが何を言ってるかまでは聞こえなかった。

「邪魔はしないって言ったのに……」

いつものように口を尖らせている少女はなにやら不満げな顔で後方を歩いていった。

\*\*\*\*\*

焦げ臭かった。思わず目尻に涙が溢れてきた。ただの焼け焦げた匂いではない。腹の底から拒絶感が沸々と湧き上がってくる。目の前には見るも無残な姿の廃村が存在していた。俺達は依頼主の所在を確かめる為に、いや、生存者の有無を確かめる為に中に足を踏み入れた。途中、皆口を開くことは無かった。

淡々と歩を進めているかに見えたメアの肩は小刻みに震え、俺と言えば、初めて見る惨状を受け入れる事に必死だった。

後方のエリスは大丈夫だろうか？

ふと、振り向くと、俯き加減にこちらに付いて来ているのを確認できた。表情を伺い知ることは出来なかった。

俺たちがローウエルを出発して数時間でこちらに着いた時にはもう、この状態だった。誰かに、もしくは何かに襲われたのだろうか。町中を手分けして搜索する。そこら中に村人の死体が横たわっていた。焼け死んでいる者が半分。裂傷、刃物傷がある死体が半分。やはり何者かに襲われたらしい。冷静に観察している自分に違和感を感じる。

「生存者がいるよ！」

突如、メアの声が聞こえた。声の聞こえた方向に疾走する。村の奥まった場所にメアの姿を見つける。

その腕には息も絶え絶えの少女が抱かれていた。奇跡的に火事に巻き込まれては居なかった。だが、その小柄な体には刃物傷が刻まれていた。明らかに致命傷だと分かる。

もう、助からないかもしれない。

「あんた、しつかりしな！」

声を荒げる。だが、その所作は赤子を抱く母親の様に優しい。次いで後方で足音が聞こえる。呼吸の荒げたエリスが後ろに着いた。その足で少女の横に跪き、なにやら魔術を行っているようだ。両掌から暖かい光を放っていた。先程言っていた回復魔術だろう。

「……あ、あなたは？」

「ギルドから来た。依頼を受けてきたんだ」

「ああ、やっと……来てくれた……」

少女は途中声も出すのも困難なのか、息詰まる。

「誰にやられた？」

「ゴブ…リン…に。村の…人は…生きている人は…いますか？」

皆、言葉を嚙んだ。村の状態を鑑みるに、絶望的だろう。

「まだ、村中を探していないから解らないよ。あんたも無事だったんだから、きつと他にもいるさ」

「そ…そう…です…ね」

声が徐々に小さくなる。もう、声を聞き取ることが困難になってきた。その間もエリスの魔術が途切れることはない。額には汗が滲んでいた。魔術を使い続け、体力の消耗が著しいのだろう。傷は、塞がらない。

「す…ごく…眠い…」

「ああ。ゆっくり休みな。後は私達に任せな」

「あ…りが…」

その後続く言葉は聞こえなかった。あれだけ、荒々しかった息遣いも今は聞こえない。完全な無音だった。誰しもが沈黙を守っていた。メアは少女をゆっくりと横たわせ、少女の両掌を重ねた。

「助けられなかった…」

その言葉は、自分を責めているかの様にも聞こえた。エリスの胸中を垣間見た気がした。ひよっとしたら、こういう場面に出会ったことは初めてじゃないのかもしれない。その度に自分の力不足を感じ

じていたのなら、先程の話も理解できる。想像でしかないが、辛いだろう。

遣り切れない思いを胸中に抱く。もう少し早く来ていれば助けられたかもしれない。

初めて会った少女は数分を待たず、此の世を去った。惨い。惨すぎる。なぜ、この少女が、村人達がこのような目に遭わなければならないのか。歯を食い縛る。心を占めた感情は一つしかなかった。怒り。

見るも無残な状況を目の当たりにして、恐怖よりもその感情が沸々と湧き出ていた。

「……行くっ」

沈黙を破った俺の声は酷く冷徹だった。死者を悼む前にやらなければならぬ事がある。頭の中では悲しみに浸る感情が湧き出ていた、だがもう一人の自分が居るかのようになり、ゴブリン討伐を優先するべき、と反論する。感情よりも実を取る俺は異常なのだろうか。頂垂れた様子のエリスが消え入りそうな声を出した。

「村人達を弔ってあげないと……」

「今はそれよりもやる事がある」

きつ、と此方を睨み付けているエリスを見据える。俺はどう見えるだろう。無感情で冷徹な人間にしか見えなだろうか。それでも後ろめたいとは感じなかった。目を反らさずその、翡翠色の瞳を見詰めた。

「……冷たいのね」

「行くぞ。今は魔物を討伐することが最優先だ」

そう言うと返答を待たずその場を後にした。未練があるのか、メアもエリスもその場を動こうとしなかったが、しばらくすると後を着いて来た。

二人の気持ちは解る。ゴブリンは特定の位置に住処を持つと言われている。二人ならそれくらいの情報は知っているだろう。ならば、急ぐ必要はないと考えても不思議は無い。なにより、周辺には他人間の住居する場所は存在しない。危険も存在しないはずだ。

だが、俺はそれに同意しかねた。

事前に今回の目標に対する情報はある程度、エリスや受付の女性に聞いて調べていた。その際に、魔物の習性なども享受して貰ったが、気になっていている事がある。そもそも、多くの魔物は人間を襲うものだが、規模的に大きなものはそう多くない。村、街を襲うとなると相応の知能がある魔物である、と言うことは常識であるようだ。知能の低い魔物も、危険察知能力は高い。無益な争いは行わない。

数日前ローウェルを襲った魔物も知能の高い、高位な魔物たちだったと聞いた。

ゴブリンは狡猾で凶暴性も高いが、統率が取れすぎている気がした。言葉を話す事も出来ない、ある程度の知能しかない魔物が、火を放つ事をするだろうか？

そもそも、ゴブリンが人間の村を襲った、という事実は今までに無いはずだ。

それに、目的も気になる。わざわざ、村を襲う危険を冒してまで、なにを欲したのか。ただ人間を殺戮する為かもしれないが、納得は

出来なかった。

未だ心は怒りで占めている。許せない。

けれど、その感情を差し置いて思考に耽ることが出来る自分に嫌悪感を抱いた。

## 戦いの最中

依頼書を取り出し内容を読み取る。依頼の内容は詳細に記載されていた。ゴブリンの住処らしき場所も見当が付いていたようだ。目的地は村から北東に位置する森林。広大でもない。調べ尽くしてもそれ程時間を費やさないだろう。

ただ只管、歩を進める。周囲には俺達の足音だけが響いていた。進む。自然と早足になっていく自分に気付く。冷静を装っているが、気が逸っているのか。その所為か思ったよりも早く目の前には目的の森林が広がっていた。

二人に振り返る。先程とは打って変わって、表情には確固たる決意が浮かんでいた。二人に頷いて前を見据える。まずは住処を見つける事が先決だ。鬱蒼とした森林の中を進む。樹齢を感じさせる大木が辺りに根付いていた。虫の鳴き声が鼓膜を震わせる。どれ位進んだらうか、蔓で覆われた洞窟を発見した。地面は何かで挟られている。いや、翼翼見ると足跡だ。それを見るだけでその体躯を想像するに人間の比ではないだろう。足跡は洞窟内に向かっていく。ならば、進むしかない。

「灯りある？」

「ん。ランタンならあるよ。ちょっと待って」

エリスはごそごと腰の辺りを探りランタンを取り出した。手に持った瞬間明かりが灯る。其れは、灯火の色味ではなく、淡い蒼綠色。人工的でも、自然的でもない光の色調に仄かに温か味を感じる。

「ん？ あ、これ、オドを消耗して点火する術式が組み込まれているの」



「ああ、なるほど」  
「ちよつと、こつがいるから私が持つてるわね」  
「ん、頼む」

俺の視線を感じてか、態々説明してくれた。もう完全に意識は目の前の目的に移行したらしい。平時のエリスだ。無理している可能性も否定できないが。

そのまま、洞窟内に進入した。

洞窟内は湿気の所為か、肌寒さを感じさせた。そう言えば今の季節は何時なのだろうか。俺やエリス達の格好から推測すると秋か春って所か。多少暖かい気候だと思う。ただ、この国に季節感が在るかどうかは知らないけど。

洞窟内の造りは単純だった。只管続く通路脇に幾つかの部屋がある。中を覗くと食料庫らしきと寝室部屋だった。らしき、つてのは恐らくの範囲を出ない。思い出したくない。あんな物食べれるのだろうか。

内部は意外に奥行きがある。

「あ、あの……」  
「ん？ どした？」

足音の反響音に混じりエリスが恐々と声を挙げた。  
何か見つけたのだろうか。

「その」  
「うん？ なんだ？」  
「だから、えと」

「なんか見つけたのか？」

「そうじゃなくて……さつきは、ごめん」

「え？」

「その、感情的になって酷い事言っただから」

気まずそうに俯いたままエリスは言葉を繋げた。

ああ、さつきの事か。

どうやら、気にしていたみたいだ。俺は気にしてないのに。全く、律儀と言っつか、真面目と言っつか。

「ああ、全然気にしてないよ。だから、エリスも気にしなくていい」

「……でも、ごめん」

「だから良いって。な？」

「……うん」

メアは無言で事の成り行きを見守っている。いつものように茶化す様子は全く無い。空気を読んでいるんだろう。

全く、気の良い奴等だよ。

思わず、笑みを零す俺に不機嫌そうにエリスは口を尖らせた。

「真面目に謝っているのに！」

「ごめん。茶化した訳じゃなくて、単純に嬉しかっただけ」

「嬉しい？」

「ん。そう、嬉しかっただけ。そんだけ」

「そ、そう？　なんかよく分からないけど……」

「ま、気にすんなって」

「う、うん」

若干怪訝そうなエリスとそ知らぬふりをするメアに交互に視線を送る。

うん。悪くないかもしれないな。こういうのも。

しばらく歩くと、天井に届かんばかりの巨大な扉に突き当たった。金属製の強固な扉。ここだけ異なる造形をしていた。何より今迄見た部屋には扉が無かった。

息を呑んで、取っ手を掴み力を込める。と、思ったより重みの無い扉が盛大に開いた。

勢い余って前につんのめる。平衡感覚を取り戻したと同時に正面を見据えると、視界一杯のゴブリン達が蹲り頭を垂れていた。数にして、100匹はいるだろう。その対象に視線を移す。

「あら。ご盛大な登場だ事」

不敵な笑みを浮かべ、豪華な飾り気を施した腰掛に着座していた。そいつは大部分は人間の女性。だが確実に人間ではない容姿をしていた。頭部には真つ直ぐ双対の長角が生えている。瞳は赤く深層の不安感を煽る。それだけの違い。されど、それは人間との確実な相違を表していた。

「おまえか。ゴブリン達を率いていたのは」

「あら。もう、気付いていたの？」

余裕がある。俺ではない。目の前の妖艶な魔物の方に、だ。当たり前だろう、戦力だけ見ても俺たちの勝率は零に等しい。いや、生存率の方も変わらないだろう。後方に気配を配る。二人の状況を確認する事は出来ない。冷静な状況である事を信じるしかない。

「まあな。あれだけ違和感があれば気付くだろ」

「ふふふ、そう、そうね」

「……態と、か」

「へえ。思ったより、頭は回るみたいね」

感心したかのような声色。それは本心である事を指し示すかのよう  
うに。

「恐らくは勇者、か？」

「あら、思ったより冷静ね。もっと怒ると思ったけど」

「内心はぶち切れそうだ」

「ふふふ、ごめんなさい。まあ、あれだけの惨事だもの。勇者が来  
ても不思議じゃないわよねえ」

曖昧な返答をしてくる。肯定したかのように見せて、その実、肝  
心な部分を隠す言動。こいつは厄介そうだ。次いでゴブリン達の様  
子を探る。視界の端に認めるその姿は微動だにしない。恐らく、あ  
の魔物の指示を待っているのか。

「残念だな」

「あら、何が残念なのかしら？」

「俺達は勇者じゃない。候補生だよ」

「……そ、そんな」

がくつ、と頂垂れる。その姿は人間味溢れる仕草だった。

「なんてね。そんなのどつちでもいいのよお」

「……どういう事だ？」

上目遣いに此方を伺ってくる。瞳には悪戯を目論む子供のような  
光を灯していた。

「さて、どついう事でしよう?」

やはりあちらの方が有利のようだ。言葉遊びで相手の目論見を知ることが難しそうだ。

「ちよつと、遊びが過ぎたかしら? じゃあ、そろそろ、死んじやつてくれるう?」

その一言を皮切りに一斉にゴブリン達が立ち上がり、此方に振り返る。その手には様々な武器を用いていた。どちらかと言うと農具に近いそれは武器としてはやや頼りないが、それでも一人一人の命を刈り取るには十分だろう。俺は後ろの二人に向けて声を張り上げる。

「二人とも大丈夫か?」

「う、うん」

「ああ、やれるよ」

声から強度の緊張感が伝わってくる。だが、気迫は幾ばくも薄れてはいない様だった。

ゴブリン達の足音が此方に猛烈な勢いで近づいてくる。

「エリスは後方支援を頼む。致命傷を負う前に随時体力の回復。隙を見て治療を行ってくれ! メアは俺と前衛。エリスを護衛しつつ、敵を掃討してくれ! 後ろの奴には常に気を配れ!」

傍から見れば絶望的な状況にも拘らず、俺は湧き上がる使命感に突き動かされていた。それは、勇者としての義務感なのか、それとも村人達の無念を晴らす為かは解らなかった。

戦力的には二人。俺とメアで大量のゴブリンを相手にしないとな

らない。ならば、守っていてもダメだ。物量に圧される。目標を二つに分けるしかない。

「俺は前線に出る。頼むぞ」

おかしい。俺はおかしくなってしまったのか。

自殺行為だ、と自らの言葉に反論したくなった。だが、それでもそれが最良なのだとも感じていた。

言葉を言い終える前に駆け出した。と、同時に腰のナックルを装着する。あまり、馴染みの無い感覚、されどその感触は弱まる心の後押しをしてくれた。

「ちょ、ちょっと!」

俺の後方でメアが不満の声を上げていた。だが、俺はそのままゴブリンの大群に突っ込む。力は使えない。相手の物量を一瞬で掃討する召喚を行えばどのくらいの記憶を失うかわからない。なにより、確実に一掃出来るかも解らない状況で使うわけにはいかない。

記憶消失から覚醒の後、現状を把握し、適切に対応する、など到底出来そうに思えなかった。一匹でも倒し損ねたなら、俺は殺されるだろう。ならば、今出来る俺の力で戦うしかない。

先頭のゴブリンと対峙する。近くで見ると醜悪な姿形をしていた。頬まで引き裂いた口角に持て余した牙が覗いている。肌は見るからに荒れ、その体軀は人間に比べ頑強さを表していた。やや猫背な姿は腰の曲がった老人を連想させた。

相手との距離は俺の攻撃範囲に入ろうとしていた。確実に対応出来ていない。ゴブリンは今になって漸く武器を振りかぶった。刹那俺はゴブリンの顔面に向けて拳を振るう。頭蓋の歪む感触が肩まで伝わり、そのまま後方のゴブリン達を巻き込みながら吹き飛んだ。

間髪入れず、右方に跳躍する。

「ギャギャー！」

俺の肘鉄が右方のゴブリンの鳩尾に減り込んだ。悲鳴とも雄叫びとも言えない言葉を放ったゴブリンは崩れ落ちるように膝を突く。

一撃だった。俺は尋常ではない俺の身体能力を垣間見た。

辺りのゴブリンが一斉に俺に向けて武器を振るう。俺は真上に跳躍し、済んでの所でそれを交わすと、体を捻り着地点をずらす。

「あぶなっ！」

思わず、声を漏らしてしまう。内心冷や汗を掻いた。

上空の俺に向けて、ピッチフォークを振るうゴブリン達。やや、左方に移動しながら、全ての打突を避けた。自分自身に驚嘆する。此方に触れる寸前で、全ての攻撃を避けつつ、避けきれないモノは両手でいなした。空中で。

地面が眼前へと迫ってきた。

着地点のゴブリンの頭部を踏みつける。俺の体重ではバランスを崩す程度しか出来なかった為、俺はゴブリンの頭に着地する形になった。相手は膝を崩す事無く仁王立ちする。そのまま、俺を掴もうと手を伸ばしてくる。俺は前方に宙返りしながら、ゴブリンの顎を踵で砕いた。一回転し、地面に着地する。異常な回転速度で無ければ不可能な所作だろう。

一瞬で、エリス達の方を確認する。俺の方に多くのゴブリン気を取られている所為か、あちらは問題無さそうだ。メアが一瞬にして、ゴブリンを沈める瞬間を目にし、安堵する。

「メアもやるじゃん」

短剣の扱いは練達されている。腕前は確かなようだ。複数を相手に見事に立ち回っているのを確認し再び辺りに意識を向けた。多い。多すぎる。

だが、それでも倒すしかない。調子は頗る良い。体が流れるように動く。流水の如き動作で、ゴブリンを沈め続ける。拳で、肘で、足で、身体の全てを使ってその命を刈り取る。僅かな不快感以外は何も感じはしない。体が疲れを知らない。

解る。周囲の状態が、ゴブリンの状況が手に取るように。それぞれ、見もしなくとも。

肌で感じる。次にすべき行動を無意識に理解しているのか。次第に意識が薄くなる。ただ只管、相手を殺す方法を考えた。そこには感情は存在しなかった。

\*\*\*\*\*

気付けば、あれ程存在していたゴブリンは全て居なくなっていた。肩で息をする。さすがに体力を使い果たしたのか。体中に幾らか傷を負っていたが、見る見るうちに傷口が塞がっていく。見るとエリスが遠方から魔術を掛けてくれていたようだ。それで、体力も続いたのか。だが、俺もエリスも体力の限界を迎えたのか、両者ほぼ同時に床に膝を着いた。メアも満身創痍と言った様子だった。

「あらあら。すごおい。たった三人で倒しきっちゃった」



少女のようにはしゃぐ様子を目の端に捉える。

「まあ、よく頑張りました、ってどこかしら」

指先を口元に据えて余裕の笑みを見せる。

「なに？ 負け惜しみ？」

「うふふ、さあ、どうかしら？」

嫌味にも一切応じない。メアは飄々としたその態度に苛立ちを隠せない様子だった。

「ま、回復させる時間をあげる程優しくする必要は無いわよねえ」

そう言うと、腰掛から腰を上げ、右手を振り上げ、轟音と共に壁面が瓦解した。土煙に隠れた天井寸前まで高く聳え立った影が視界に現れる。思わず息を呑む。その巨大さは建築物のようだった。生き物とは思えないほどの巨躯。その姿を明瞭に視認していないにも関わらず、その存在感を肌で感じていた。

「オーク。あいつらを殺しなさい」

土煙が晴れる。後ろから現れた其れは、ゴブリンをそのまま拡大した様相をしていた。ただ、その右腕には巨大な樹木を思わせる程の大きさの棍棒を携えていた。一振りで、家屋一棟を破壊できそうなほどの物量だった。

目の前の魔物が指をパチンと鳴らす。同時にオークが雄たけびを上げる。思わず目と耳を塞ぎたくなる。耐え難い騒音。腹の底から感じる恐怖感を感じた。

瞳の色が赤黒く変色し、異常なほど血管が浮き出ている。様子がおかしい。あの魔物が何かしたのか。

「念のため箆を外して置いたわ。ま、知能はほぼ無くなるけど、身体能力は目を見張るものがあるわよ」

何が楽しいのか、相変わらずの不適な笑みを浮かべている。不意に表情を引き締める。

「正直ここまで粘ると思わなかったわ。ねえ、あなたの名前教えて？」

「……ヤマトだ」

「ヤマト……ふふふ、不思議な響きね。とても」

この瞬間だけ切り取れば良い雰囲気の二人と思われるかもしれない。それ程、魔物は柔らかな表情をしていた。

「でも、残念ね。会ってすぐにさよならなんて」

「さあ、それはどうかな？」

「あら、自信満々なのね？」

「余裕は無い。けど、策はあるね」

心底驚いた表情を浮かべて此方に視線を送って来る。

「そう。それは楽しみね。……それじゃ、私はここで失礼するわね」

「逃げるのかい？」

「まさか。巻き添えで怪我したくないだけよ」

と、オークの方を指差す。先程より体躯が肥大化している気がする。

「じゃ、頑張つてね。ヤマト。また会えることを期待してるわ」

「待て。お前の名前を聞いてない」

「……私は魔王直属四将軍が一人、リリアよ」

その言葉を最後にリリアは姿を消した。瞬間、オークの視線を感じる。リリアが去った事を切欠に、此方に猛然と襲い掛かる。その巨軀に似合わぬ速度で轟音と共に此方に疾走して来た。

「ど、どうすんだい！ あんなのに勝てるわけ無いよ！」

「二人は逃げてくれ。俺が足止めする」

「そんな、自殺未遂だわ！」

「……大丈夫だ」

その間もオークは此方に向かってきている。後数秒で此方に着くだろう。

「信じる」

オークから目を離さず肩口から後方に向けて声を発した。数瞬後一つの足音が後方へ向かっていった。

「信じてるから」

単純だが、エリスの声で勇気が沸いた。本当は足も震えそうだし、立ってられない。恐怖のあまり嘔吐感が込み上げてくる。

「……ただ、それでも……」。

「死ぬんじゃないよ！」

そして、もう一つの足音が後方へ消えた。

「さて、やるか」

軽口を叩き目の前に迫ってくるオークと対峙する。

地面に張り付いてしまったのではないかと思えるほど重い足を無理矢理踏み出した。

## その力の代償は如何に

巨大だ。猛然と此方に迫ってくるオークの巨軀を否が応にも意識してしまふ。近距離で視認すると改めてその巨大さを認識した。俺の背丈の位置に膝小僧が見える。大凡俺の4倍ほどの体軀。腕周りなど大木にしか見えない。多少力を込めるだけで、俺をひねり殺す事も可能だろう。

オークが棍棒を振り被り一瞬のうちに振り下ろしてくる。速い。体全体の動作を見切っていたはずの俺は寸前で左に跳躍する。次いで、地盤に棍棒を減り込ませる。その衝撃で破裂した岩石が石礫となって此方に飛んできた。空中で身動きの取れない俺の右肩に衝撃を感じる。

「ぐっ！」

小粒の石礫だったが、俺の身体を吹き飛ばすには十分だった。俺の跳躍も相まって、オークからかなりの距離を取った形になった。なんとか着地時に平衡感覚を取り戻す。肩に鈍痛が走る。右手は使えそうに無い。折れては無いだろうが、ヒビ位は入っているかもしれない。激痛に顔を顰める。額に脂汗が滲む。

オークが間髪入れず距離を詰めてくる。やはり、今の俺では勝てそうも無い。そもそも、拳一つで傷を負わせることが出来るかさえも怪しい。

使っしかない、のか。

俺はナツクルを腰に付け集中する。目の前のオークは気にならな

かった。ただ、望めば良い。そうすれば、召喚出来るはずだ。

刹那、辺りの雰囲気が変わった。辺りは水を打ったかの如く静かになっていった。

オークは此方の所作を見るや否や、距離を取った。警戒しているのだろうか。

瞬間、目の前にノイズのようなモノが現れた。これが召喚に経由するゲートのようなものか。俺の日記に簡易ではあったが、召喚について記載されていた。そのお蔭か、多少なりとも冷静に対処することが出来る。

俺はゲートに左手を差し入れた。オークを倒すことが出来るだけの力を望む。肩口まで入れると感触の無い抵抗感に腕の進行を妨げられた。掌に何か握る感覚は無い。曖昧な願望だった所為かもしれない。ならば、と、最小限の力を望み、腕を一気に抜き出す。多少の抵抗感を感じるもすんなりと抜けた。手には淡い青みを帯びた短剣が握られていた。刀身の中程の刃が少し欠けている。

ゲートが一瞬にして消失した。

オークの雄たけびが鼓膜を震わす。其れは恐怖に対する自分自身への叱責なのか。

短剣を手にしたと同時に先程までの焦燥感は薄れていた。

逆手に短剣を構え、オークを正面に見据える。次いで、風を感じる。俺は信じられない速度で足を漕ぐ。右腕の鈍痛も感じない。だが、感覚が麻痺しているのか、力を込めても微動だにしなかった。しかし先程とは違い、体中に力の脈動を感じる。尽きかけたと思っていた体力の消耗も感じさせない。

そのまま、オークに猛然と立ち向かい、一閃する。疾風の如く移動する俺の速さにオークが対処する。

俺の短剣の一閃をその棍棒で噛み合わせて来た。

素材は何で出来ているのか、棍棒に刃跡を付けるだけで終わった。見るからに唯の巨木を削いで作ったかに見える棍棒はやや、薄い光を放っていた。俺のナツクルと同じ様な魔法付与が成されている、と言うことか。

刀身から衝撃波でも出ているかのように、物理的に有り得ない刀身よりも長い範囲の刀傷を棍棒の表面に刻み込む。常時ならば俺の身体が吹き飛ばされていたであろう力に俺は対抗した。お互いの獲物を噛み合わせたまま、じりじりとお互い両脚を踏ん張り続ける。

「ぐっ……!!」

「ガアアッ!!」

お互い譲らないまま時間が過ぎる。互いの力は拮抗し闘ぎあったままだった。

これでは埒が明かない。俺は焦燥感を抱き、オークとの距離を取った。この、短剣ではオークの棍棒との大差は無い。勝つことは不可能ではないだろうが、俺には時間が無い。

仕方がない、のか。そう決め付けて、短剣を戻す事を望む。刹那、短剣が消失した。

\*\*\*\*\*

目の前に巨大な醜悪な生き物がいた。雄たけびを上げて此方をにらんでいる。俺の記憶は飛んでいるようだ。瞬時に理解する。記憶はゴブリン共を一掃した瞬間で途切れている。ならば、俺の記憶が飛んでいる理由は過去の俺が召喚を行ったという事。目の前の魔物

は健在だ。むしろ傷を負ってさえもない。という事は……。

「力を抑えての召喚魔術では、ダメだったのか？」

ならば、方法は一つしかない。俺は集中しゲートを出現させる。右肩に激痛を感じる。その感覚を無視して、左腕をゲートへ突っ込んだ。厭な感覚を肌で感じ、短剣よりも上位の武器を望む。肩口まで差し入れると抵抗を感じる。気にせずそのまま一気に抜き出す。腕中に絡み付く何かの感触に肌が粟が立つ。ゲートは腕を抜き出した事を切欠に消失する。

「よ、予想以上に、不快だな」

抜き出した掌には、槍のようなモノが握られていた。

穂は5つに分かれており一般的な槍の様相とはかけ離れていた。柄の部分はやや楕円形で出来ており、掌にしつくり来る。柄の素材はなんだろうか、硬質の物のようだが、上下に振ると、しなやかな感触を手に入れた。粘りが有る。

刃先には仄かに電撃の道程を見る。それぞれの刃間を断続的に蒼い電撃が燦る。瞬時に槍の特徴を理解する。

巨躯の魔物に照準を向けて、長槍を構える。

なぜか、召喚を行う時は魔物は近づいて来ないようだ。それは、警戒心からなのか、それとも、ほかの何かに対する恐怖心なのかは解らなかった。

魔物が此方に疾走してくる。俺は冷静にその所作を見据えた。構えは微動だにしない。魔物との距離は見るうちに縮まる。刹那俺は目一杯左肩を引き、肩口に魔物を視認した。狙うは頭だ。右利きの俺だが、不思議と外す不安は一切無かった。



瞬間、筋力の限り、腰を捻る。着いてくる肩、肘、手首の順に力を入れた。慣性力を限界まで溜めた左手首を振るい、掌を開いた。一瞬で遠ざかる槍。俺の手を放たれた槍は加速し、魔物の眉間に向かった。

その尋常でない速度に魔物は反応する。だが、余りの速さに両手で防ぐ事も出来なかった。

閃光が走る。槍の軌跡に雷撃の通り道を見た。魔物の硬質の頭蓋を貫通し後方の壁面に減り込んだ。と、同時に刃先から蒼い閃光が放たれた。周囲の岩盤が破裂する。

魔物は数瞬行動を停止し、すぐさまその巨軀を地面に倒れ込ませた。

肩で息をする。一投のみでこれだけの体力を喰われてしまった。腰を折り、膝に手をつく。横目で魔物を確認する。絶命している。頭半分綺麗に吹き飛んでいた。恐ろしいほどの突力に鳥肌が立った。俺自身の力の正体に恐怖を抱く。

記憶の喪失を前に抵抗感を感じた。俺は二度、いや三度これを体験しているのだろう。頭が緩慢な思考を促す。力を使いすぎた所為か、意識が遠のき、視界を閉じそうな自分を叱咤し、槍を消失させた。

\*\*\*\*\*

気付けばベットに寝ていた。暖かな毛布に包まれて安堵を抱く。

「あ、よかった……」

「……ああ、ここは？」

「あの後、すぐに応援を呼びにギルドに向かったの。それで、戻ってきたら、倒れているヤマトと、魔物の死体があったわ」

俺の記憶は、廃村での出来事で止まっていた。そこから、今の記憶へと繋がる。記憶の飛びようからして、短剣よりも上位の武器を召喚したか、あるいは他の予期せぬ要因があるのかは、解らないが、十中八九、前者で間違っていないだろう。

端的に説明してくれるエリス。いつもより冷淡とした口調に違和感を感じる。

「どした？」

「やっぱり、召喚したのね……」

「……ごめん」

俺の記憶の始まりは俺の召喚から始まった。その際エリスには召喚に対する危険性を詳しく説明はしていなかったが、感じ取ってはいたようだ。だが、記憶喪失までは気付いていないだろう。恐らくは身体に対する危険がある、程度の認識だろうと思う。

「無茶……しすぎ」

「……ごめん」

「ローウェルでも私を助ける為に召喚して、今回も私達を逃がすために無茶して……」

「……ごめん」

そうか。以前の俺はエリスを助ける為にあの鎌を召喚したのか。少っだけ、判る気がする。恐らく俺も同じようにするだろうから。

たった、数日しか、いや、正しくはそれよりも長い時間一緒に居

ただろうが、今の俺にとっては短い時間しか共にしていない筈のエリスに対して好意を抱いているんだろうか。それともこの気持ちは過去の俺の残骸なのかもしれない。それを確かめる術を俺は持ち合わせては居なかった。

例えばどんな理由があるにしても、今の俺には謝罪の言葉しか浮かばない。結果はなんとか無事だったが。次も上手くいくとは限らない。エリスの言葉は俺への気遣いが感じられた。目尻に溜めたモノは今にも零れ落ちそうだった。胸にチクリと痛む感覚を覚える。

この娘を泣かしたくない、と心から思った。

「信じてた。けど、出来ることなら……」

「ああ、出来るだけ召喚しないようにしないと」

「……お願い。何かしらの反動があるはずだし」

「……そうだな」

俺は曖昧に頷いた。これからの旅で、召喚魔術を使用しないことは出来ないだろう。だが、回数を減らすことは常に熟考すべき議題だった。心配を掛けるのは俺も避けるべきだと考えていた。

「もう、目を覚まさないかと思った……。2日も寝てたのよ……」

「2日も……か」

エリスの言動に驚きを隠せない。2日？ それほど意識を失っていたというのか。

コンコンと扉を叩く音が聞こえる。次いで、部屋の木扉が開かれた

「どう？ 身体の調子は？」

外からメアの顔が覗く。表情は眉根を潜めこちらを心配そうに伺ってきていた。

「ああ、体調は大丈夫。ただ頭がちよつとぼーっとするかも」

「そ、そっか。まあ、今は無理しないようにね」

なぜか、そわそわとしているメアに怪訝そうな表情を向ける。だが、何かの音にその思考を遮られた。俺の腹の虫が不満げな声を上げる。

「ふふふ。私食事持って来るね。ちよつと待ってね」

「あ、あたしも手伝うよ」

エリスが、口元に手を添えて可憐に微笑をもらす。先程の憂いを帯びた表情は今は蔭っていた。二人はそう言っていると、部屋を後にした。

二人の後姿を見送って再び襲い掛かってきた眠気を感じた。そういえば、二人の様子がおかしかったな。エリスは俺を心配してくれていたからだろうけど、メアが拳動不審気味だったような気がする。

「……………まあ、いいか」

答えの浮かばない疑問は思考するだけ無駄だろう。俺は、睡魔に身を委ねた。

## 勇者誕生の瞬間？

どういう事だ。俺の疑問は当然だ。

目の前には数々の豪華な食事が並べられていた。普段では食べられない、高級食材をふんだんに用いて調理した食事が目の前に整然と並んでいる。

俺は、口を引き締め、今までの経緯を整理した。

俺が意識を失っていた二日間の中に事態は一変していた。

まずエリスは俺に付きっ切りで看病してくれていたらしい。当初俺は満身相違とは言えないまでも体力の低下と身体の至る所に傷を負っていたらしい。エリスが、回復魔術を掛け続けてくれていたと言う事をメアから聞いた。

メアはギルドの連中と共に廃村の村人達を吊った。あの廃村は復興する事はないらしい。生存者は存在しなかったからだ。それを聴いた瞬間奥歯に力を込めた。憤りを思い出したからだ。

だが、村人全員を吊ってくれたギルドの連中には感謝の気持ちを抱いた。

そして同時に魔王復活が一気に国中に知らされた。

魔王直属四將軍のリリアが現れた、らしいからだ。俺はその部下らしきオークを倒したらしい。その功績を称えて、王女直々に城に招待された、って事だ。メアの挙動不審はこれが原因だったみたいだな。俺が目覚めました報告を受けて、此方に召喚された。

右隣の席に座っているエリスは表情を頑なにし、微動だにしない。いつにも増して無表情を貫き通している。左に着座しているメアは食事に夢中になっている。意外に大食漢　いや、大食女……か？

みたいだ。

食卓は無意味に長い。俺達は上座に近い席に座っていた。周囲には、メイドらしき女性がずらりと壁際に並んでいた。彼女らは忙しなく、だが優雅に食事を持ち運んでいる。

上座に視線を移す。年端も行かぬ少女が座っていた。しなやかな肢体は今も麗美な仕草で食事を行っている。肩まで伸びた蒼髪は透明感を感じさせた。皇族の血筋なのだろうか、その毛色は類を見ない。並びに瞳も同色の色調で光を反射していた。

「お口に合いませんか？」

「いえ、ただ、まだ体調が優れないので」

俺は無難に答えた。体調は快調だったが、先程エリスと共に食事をしていた。腹具合は満たされている。

「そうですか。無理をさせてしまいましたね」

目の前の少女は王女オフィーリア・ローウエル。この世界ではミドルネームは存在しないらしい。皇族と言えど、家名と名前で形成される。

この国は産業国家である。軍事力は他国に比べて乏しい。先の魔物襲来に対しての対応を鑑みるに、防衛に戦力を割く戦法を取っていた。その意図は同盟国のグリニッジの存在にあった。

この世界では大きく四大国によって統治されている。

軍事国家クリミア。その戦力の多くは物理的な武力を持って補われている。人口も各国内で群を抜く。ただ、魔術に関してはその限

りではないらしい。剣の国家という事か。

また、産業にも力を入れている為、他国との干渉が少なめ。やや閉鎖的な印象を持つ。内乱が多く、国家統一は成されてないようだ。次に魔術国家プロルフエルド。その名の通り魔術先進国。他国とは異なつて、人間が少ないらしい。主要種族はエルフ。長寿で容姿端麗。身体能力も高めで、魔術に長けた種族。正に、生物として完璧であると言われている。だが、その内面は傲慢で、多種族を侮蔑する傾向にあるらしい。その為、この国も閉鎖的。ほぼ他国との干渉はない。

そして先進大国グリニッジ。戦力、産業共に先進している。だが、一部において問題がある。それは立地であった。グリニッジには荒れた土地が多い。加えて気候も安定しないため、農業の停滞が著しい。その為、自国において、食料を生産することが難しく、産業国家のローウェルと同盟を結んだ次第だ。ローウェルは安定した食料の提供し、グリニッジはそれに応えるように軍事力を提供した。

侵略、という手段を取る事はしなかったのか。

元々グリニッジという国は存在しなかった。ローウェルの元皇族が建国したのがグリニッジだ。その経緯は知る事は無かった。やんごとなき理由が、あるかもしれない。その為、グリニッジとローウェル間の国交は元々行われていた。同盟自体も速やかに行われたらしい。双方、自国に足りない部分を受け入れていた、という事か。そもそも、このような事例は稀で、大概は契約を反古する可能性を示唆するものだが、双方において其れは起こりえなかった。それにはいくつかの理由があるのだが、ここでは語る必要は無いだらう。

「どうなされました？」

「え？ あ、すみません。ちょっと、考え事を……」

「あら、悩みでも？」

「いえ。大した事じゃないです。気にしないでください」

俺は尊敬語とは言えない、丁寧語で返答する。

そもそも、堅苦しい物言いは舌を噛みそうだし、咄嗟に浮かばないものだ。このままの口調でもいいだろう。王女様も気にしていないみたいだし。

俺の言葉に恭しく頷くと温和な笑みを浮かべた。

「今日此方に来て頂いたのは、食事に招待するという理由もありますが、もう一つ御座います」

「もう一つ……ですか？」

なぜか厭な予感が脳裏を過ぎる。

「ええ。あなた達に自国の勇者に成って頂きたいと思ひまして」

その言葉を放った途端、食事に勤しんでいたメアも、正面を見据えていただけのエリスも同時に王女に視線を移した。

「ゆ、勇者に？」

「ええ。了承してくださいませんか？」

「何故俺たちが？」

「勇者の意義はご存知？」

言葉に困っているとエリスが助け舟を出してくれた。

「魔王を討伐する者。一国に一人が常識ですが、過去二人いた国も



在るとか」

「ええ、その通りです。では、なぜ勇者がいるのでしょうか？」

「……簡単です。魔王を倒す力を持つ者を指し示す呼称だからです。その素質を持つ者は候補生として名声を得る旅に勤しんでいます」

矢継ぎ早に質問を繰り返す王女。何が言いたいのだろうか。

「なぜ名声を得る必要が？」

「言い方は適当ではないですが、崇められる事で神に近い存在になれるからです。元々、その素質があるものが勇者候補生として活動しています。ゆえに神の力の恩恵を受けることが出来る。つまりは力の向上に繋がります。言い換えるなら多くの人に勇者として認めてもらえると、崇高な格に昇華する事が出来る、という事です」

「では、冒険者との違いはあるのでしょうか？」

「やはり、その力でしょう。冒険者はその身体能力、精神力を用いて戦いますが、勇者はそれに加えそれぞれ特殊な能力を持っています。様々な能力がありますが、総じて神から与えられた魔王を倒しえる力、ということが言えるでしょう。過去において冒険者、或いは騎士達が魔王を倒した、いえ、傷つけた事実さえありません」

瞼を閉じ、エリスの言葉に耳を澄ましている。言い終えると、人知れず嘆息する。相変わらず説明口調の時と焦っている時は早口になっっていた。

「その通りです。では、私の意図はお分かりですね？」

「……何故俺たちが？」

先程の質問を再び投げかける。当然の疑問だった。俺達が抜擢される意味が解らない。先日、オークを倒したのは恐らく俺だろうが、それだけでいきなり勇者として推薦するものだろうか？ それとも、

俺の認識が甘いだけなのか。

「簡単な事です。自国にはあなた達以上の勇者がいないからです」

「と、言うこと？」

「……現在の勇者候補生達の状態はご存知でしょうか？」

確か、メアが言っていた。質の低下が著しいと。素行不良も目に余るとの事だ。

「あなた達は、依頼主のいる廃村の状況を確認すると、すぐに討伐に向かい完遂した。単純ではありますが、決して簡単な事では在りません。多くの者なら、見て見ぬ振りをするでしょう」

「……そうでしょうか？」

「ええ。間違いなく。少なくとも現状を鑑みると。由々しき事ですけど」

そう言うのと、小さく嘆息する。

ひよっとしたら先の襲来の際、勇者候補生を城内に留まらせたのは王女の本意ではなかったのかもしれない。其れほどまでに、王女の表情に演技らしさは感じなかった。真意なのだと思いたい。

「ですから、あなた達を、と。力量も申し分無いと思えますし。信頼も置ける、とわたくしは考えています」

「即答は難しいですが……」

がちゃ、と鎧の摩擦音を奏でながら後方に控えていた護衛らしき騎士が動いた。それを、王女が視線で御する。なるほど、王女の希望に沿わないと言う事は中々問題があるらしい。だが、俺は自分の意見を変える気は無かった。真摯に王女の瞳を見た。

「急を要する事ではありませんので、すぐには言いません。ですが、良い返答をして頂くと信じていますよ」

先程とは違って表情に完璧な笑みを浮かべ此方を見据えている。今はその表情に虚実を感じる。駆け引きはお手の物と言った感じだろうか。それとも、俺が断るはずが無いと高を括っているのか。その場は平穩を装って、その実恐喝じみた迫力を後方と、正面の王女から感じた。

「返事は必ずします」

是非は問わないけど。そう言うと、満足げにこくりと頷いた。そのまま何気ない会話を挟みつつ食事を終えた。

## 一 先ずの休息

「で？ どうするんだい？」

帰り際メアに問いかけられた。俺は間髪いれず返答した。

「断るよ」

「うっそ！ 本気！？」

急激な声量の変化に思わず顔を顰める。其れほどまでに意外な答えだったのだろうか。俺の表情を見て、機嫌を損ねたとも思っただのか、慌てて謝罪してきた。

「あ、ごめん……」

「や、別に気にしてないよ。ただ、吃驚しただけだから」

俺の言葉を聞くと安堵の表所を滲ませた。メアは姉御気質のようで実は気を回すことが多い。それが少し悲しくも感じる。まだ出会う間もないが仲間としては、気遣いはあまりして欲しくないと思わないでもない。

「そか……。でも、いいのかい？」

「何が？」

「国お抱えの勇者は優遇されるし、お給金も出るよ。相当な額って噂だし。名声も上がる、危険も少ない。至れり尽くせりだと思うけど」

「あー、そういうの興味無いし。そもそも、勇者なのに国に滞在するってどうなんだ？」

「そういう事例も多くあるわ」

エリスが口を挟む。何やら思考に耽っていたように思えたが、解決したのだろうか。

「勇者つて、魔王を倒すべきじゃないの？」

「そうね。それこそ、勇者の存在意義だと思うわ。けれど、国は国で事情があるのよ」

「事情？」

訝しげに俺が問いかける。国の事情に勇者が関わる。それは、魔王討伐以外に思い当たらないが。

「魔王は勇者でしか倒せないの。なら、魔王が国に侵攻してきたら？」

「王自ら進軍してくる、と？そんな馬鹿……いや」

確かに人間の中でも領主自ら戦争に参加する者もいる。魔王ともなれば、対抗できる戦力は勇者のみ。自ら進軍することは効率が良いのかもしれない。

「そうになると、勇者を傍に置くことは必須だな……」

「そういう事。そもそも、勇者自体一人ではないのだから、どの国も優秀な勇者を自国に置きたいと考えても不思議じゃないでしょ？」

大勢の勇者候補生がいるのは、唯一人を選抜するためではない。その育成に重きを置いている。つまりは、何人でも勇者が選出される可能性もあるって事だ。

「成る程……。確かに。でも、それじゃ、魔王は倒せないじゃないか。侵攻してくるのを只管待つのか？」

「誰も、身の安全の保障を得たがる物でしょう？ならば、魔王討伐は後回しに考えても仕方ないかもね」

「解らないでもないけど……しつくり来ないな」

「まあ、私もそうだけど……」

ならば、あの村人はなぜ殺されたのか？俺がローウエルの勇者でいたとしても助けることが出来たとは思えない。頭では解る。其れは別問題なのだ。勇者も万能ではない。多くの者を救う事が出来るわけではない。けれど、それでも、目の前の誰かを救うことは出来るのかもしれない。

「そもそも、なんで魔王に対抗できるのが勇者だけなんだ？」

「それは、力の質の問題ね」

「質？」

「ええ。勇者とそれ以外の人の違いがあるでしょ？」

「あゝ、その特殊な力、ってやつ？」

「そう。魔王には何故か、その力しか有効じゃないの」

「って事は倒す以前に、他の攻撃は全く効かないって事が」

「ええ」

即答だった。至極当然とでも言いたげだ。

「眉唾物、だな。そんな生物がいる事が信じられない」

「でも、事実だし、史実でも有るわ。原因や理由が知りたいなら本人に聞けば？」

「冗談だろ……」

「冗談とも本気とも取れる物言いだった。表情からはどちらとも判断が付き難い。」

そもそも、魔王本人に聞くなんてどんな状況だよ。

「そついえば気になる情報があるのよね」

小首を傾げ俯いている。先程物思いに耽っていたようだが、同じ内容だろうか。

「気になる情報？ 勇者に関係がある話か？」

「ええ。あなたが意識を失っている間、色々調べてみたの。伝手のあつた情報屋から得た情報んだけど、どうやら、勧誘していたのは私達だけじゃないみたいね」

「他に勇者として誘われている奴がいる？」

「ええ、信用は出来る情報よ。だから、余裕の態度だったのかもね」

「ああ、それで、か」

王女のあの表情の理由がわかった。俺たちに断られてももう一人候補がいるのなら、余裕も出てくるだろう。

「なら、断っても問題無いな」

「だと、思うけど……」

「ん？ なんか気になるのか？」

「んー、何でも無い。たぶん大丈夫」

「そか」

言葉尻に詰まった感が否めないが、深く追及する気は浮かばなかった。後ろで、もったいない、とメアが呟くのを聞いた。

\*\*\*\*\*

俺は王女の誘いを断った。そもそも、お抱えになれば自由が効かない。今は自分自身を知ることが最優先だ。目的を持って生活するには情報が足り無さすぎる。自分は何をすべきなのかを知るべきだ。すべきにしても理由が無ければ行動できない。記憶が無い俺にとつて、安穩に生活することは最善とは思えない。ならば、自ら示された、勇者の資質。そして、俺の力の要因を知るべきだろう。

その為には魔王討伐の旅に出る事が効率が良い気がした。いや、そうしなければならぬと考えていた。常に感じている使命感、義務感、焦燥感……。それは何を意味するのか今は知る由も無い。

俺達はこれからの行動をどうするか話し合うため酒場に来ていた。この時間空いているのは酒場位しかなかったからだ。周囲は酔っ払いの喧騒で溢れていた。

外は夜の帳が下りかけてる。肌寒さを感じさせる気候に若干の身震いを起こす。

「寒いのか？ そんな格好しているから……」

やはり夜は若干肌寒い。

俺は薄手の綿織物上のVネックを着ている。下はよく言うチノパン。抑え目の色合いでやや地味だ。肌着の上を着てない所為かやや保温性に欠ける。それにしてもほぼ一張羅である。そもそも、俺は衣服をあまり持ってない。

肌着は変えてるよ。さすがに。

女性陣はいつも違う服装をしているようだ。詳細には記載しないが、毎回会う度にお洒落に気を使っている事が垣間見える。

今、エリスは落ち着いた色合いのポンチョに厚手のワンピースと可愛らしさを演出している。かなり似合っている。メアは昼間は軽



装だが、今はショートジャケットを羽織っている。ファアのついたやや男気を感じさせる造りだが、そちらも非常に似合っていた。

「二人はお洒落だね」

「服装に気を使うのは当たり前でしょ」

「こっに見えても女なんだね」

どう見ても女しか見えませんが。特に胸の辺りとか。ええ、大変よろしゅうございますね。

いえ、見てませんよ。ええ決してね。

「で？ どうするんだいこれから」

「それなんだけど、メアはいいのか？」

「なにがだい？」

「いや、俺たちと一緒に居てっ事だけど」

「ああ、あたしとしてはあんた達と一緒にいようと思ったんだけど……。迷惑だったかい？」

此方に伺いを立てるように少し上目遣いをしていた。その表情には不安感が露になっている。俺は慌てて言葉を返した。

「いや、まさか。俺としてはずっと、仲間であってくれたら嬉しいけど」

「なら、よかった」

嬉しそうに満面の笑みを浮かべる様はまるで無垢な少女のようだった。と、言っても少女と言える年齢なんだろうけど。メアは大人びている所為か、年上を感じるが、容姿はやや幼さを思わせる。恐らくは俺と歳はそんなに変わらないと思うけど。

しかし、勇者候補生同士で徒党を組むのには問題は無いのだろう

か。勇者って一人の印象強いけど、そうでもないのかな。

俺は自身の疑問を問いかけるのは気が引けて口を噤んだ。何か理由があるのかもしれない。

「で、これからの事なんだけど……」

「選択肢は幾つかあるな」

「そうね。まずはブロルフエルドへ向かうというのが一つこのままローウェルで依頼をこなして名声を得る事と資金補填するって所かしら」

「ブロルフエルド？　なんで？」

エリスの問いに俺が疑問を問いかける。俺とは考えていた選択肢が違うようだ。俺は各国を回りその情勢と魔王の影響具合を知る、という選択肢を考えていたんだが。人差し指を立ててこちらに向けてくる。

「大預言者メシヤ様がいるからよ。魔王復活は確定したのだから、その居場所を知るべきだと思う」

「でも、直接会う必要があるのか？　魔王が復活したら、各国に通達するもんじゃ？」

「ブロルフエルドは閉鎖的っていうのは知ってるわよね？　それは、メシヤ様の予言も例外ではないわ。魔王復活の予言もかなり遅くこちらに浸透してきたの」

「早く知るには会いに行くしかないって訳か。でも魔王復活は世界中の問題なんだからそこは協力的でもいいと思うんだが」

「それほど、エルフ達は多民族に嫌悪を抱いている傾向にあるって訳じゃないかしら？　私もエルフに会ったことは無いから一概には言えないけど……」

「あたしは一度会ったことあるけど、最悪だったよ。出来るならお近づきにはなりたくないね」

メアの表情は硬い。それほど嫌な印象だったのだろうか。俺の知識が無い所為かもしれないが、エルフ全員に同じ印象を持つ必要も無いと思うけど。人間でも、エルフでも良い奴はいるだろ。

とにかく、これで俺の主張は必要なくなったわけだ。助言をくれる人がいるなら手っ取り早い。

「まあ、そういう事よ。でもあくまで閉鎖的なのであって、完全に外からの干渉を拒絶しているわけでもないわ。人間の行商人とか結構出入りしているし。でも、問題があるのよね」

「勇者に対する差別意識の高さだね」

「そう。人間、特に勇者を毛嫌いしているのよ。プロルフエルドには人間の勇者は入国できない」

「じゃあ、俺とメアは入国出来ないじゃん」

「そうね。まあ、方法は幾らかあるから、其れはどうにでも成るでしょう」

したり顔で凄いこといったよ。この子は。頼り甲斐のある発言に素直に頷いておく。と、俺は先の会話に対する疑問点を上げた。

「所で、なんで勇者を毛嫌いしてるの？」

二人が怪訝そうな顔で俺を見ている。何言ってるのこいつ、と言わんばかりの顔だ。

しまった。地雷を踏んだか。

俺は自分自身の立ち位置を忘れていた自分に胸中で舌打ちをした。しばらく共に生活していた所為で気が緩んでしまったのか。俺には一般常識的な記憶さえ欠落しているのだから、曖昧しておくべきだったと後悔の念を抱いた。

「そこまで世間知らずだとは思わなかったわ……」  
「まあ、その片鱗は偶に見えてたけどね」

だが、俺の思いとは裏腹に二人は勝手に納得してくれたらしい。  
若干腹立たしいけど。腹立たしいけどね！

「いい？　そもそも勇者が世間に知れたのは約千年前だと言われているわ。それまで、勇者の存在は人に知れることは無かったのよ」  
「それが、エルフに嫌われる事となんの関係が？」

「様々な経緯を経て、勇者と共に魔王討伐に向かったのは、人間の従者、ドワーフ族、エルフ族の四人。それぞれ種族代表の者が共だつて居たの。詳細までは分からないけれど、得る付属の代表者は当時の第一皇女だったらしいわ」

「お姫様が」

「ええ。まあ、今はその位もないんだけどね。そのお姫様は魔王城で亡くなった。勇者を庇つてね」

「……それで？」

「当時のエルフ族の王は憤慨したわ。それはそうでしょう。大事な娘が亡くなつたんだから。その姫様は民衆にも大変慕われていたそうよ」

「それ以来、人間を、特に勇者を毛嫌いしている、と」

「原因はそれだけじゃないらしいけど。それ以上は知らないわ」

「成る程、ね」

単純だが根深い。

エルフ達からしたら、人間に裏切られた、と思うかもしれない。  
だが、危険だと承知していた筈なのに、全て勇者の所為にしてしまつのも何か違う気がする。

どちらにしても、当事者じゃないし、過去の事だ。何が正しくて、間違っているかなんて確かめようもないんだけど。

ん？ 勇者が現れたのは約千年前？

「ん？ その勇者が現れた時に魔王も現れたのか？」

「いや、魔王は其れより前にいたらしいよ。長い間、魔王が世界を統治する時代が続いたんだ」

想像するに難しくない。きっと其れは地獄だろう。詳細を聞く気にはなれず、口を開くことはしなかった。

でも、魔王が居た筈の時代には勇者が居なかったんだよな。或いは、居たけど、知れ渡っていなかったのか？ それもおかしな話か。なんで突然勇者が現れたんだろう。ありがちな話だと、魔王の暴虐を見るに見かねた神様が勇者に力を与えたとかになるんだろうけど、そこら辺が全く伝わっていないのは何故だ？

なんか、曖昧、というか、穴だらけというか。

どちらにしても答えは出そうに無い。

自問自答を繰り返す思考を中断させて、二人の話に耳を傾けた。

「最初の勇者は第一勇者と言われている人物。千年前、人知れず魔王を討ったと言われているわ。その後、勇者の素質のある者が次第に現れていって、今があるって訳」

「色々疑問はあるが、聞いて良い？」

「ヤマトは質問好きよね……。どうぞ」

好きっていうより、今聞くしか機会が無いと思ったからなんだが。疑問を声にすることは大事だと思う。その場で聞かないと記憶が風化してしまいそうだから。

「なんで第一？ 名前は広まらなかったのか？」

「人知れずって言ったでしょ？ どんな人物が魔王を討ったのかは語られていないわ」

「じゃあ、なんでその第一勇者が魔王を討つたって解るのさ？」

「預言者の言葉よ。メシヤ様のご先祖様が予言したの。魔王が統治する時代は終わる。一人の勇者の手によって、ってね」

「あれ？ おかしくないか？ 仲間が三人居たんだよな？ 従者とエルフとドワーフ、だっけ？」

「え、ええ。そうね。でも、その三人は道中で亡くなってしまったらしいから」

「勇者だけが生き残った？」

「……分らないわ。ただ、魔王は倒されていたから、勇者は生きているだろうって事だと思っけど、生死に関しては記述は残っていないし。だから、預言者の言葉がそのまま史実になったのよ」

それ程預言者の言葉は重いものだろうか。ただ、予言の後、魔王が存在しなくなったのなら、そう信じざるを得ないのかもしれない。

何か釈然としないけど。

「じゃあ、次。勇者の素質って、どうやって見分けたのさ？」

「其れは今とそんなに変わらないよ。診断士が勇者の素質を見抜いていったってだけ。今も、冒険者も勇者も診断士に適正を判断されてその職に就いている奴も多いだろ？」

診断士。なるほど、その人物の適正職業を言い当てる訳か。勇者って職業になるのかな。

まあ、今と変わらないと言われても、その今を知らないんだけどね。

さすがにそれを言う事は出来ない。言葉は慎重に選ばないと。

「成る程。従者もその時にいたのか？」

「いや、居ないね。今は当たり前だけど。その頃は居なかったよ。」

ある時を境に解った、いや気付いたのさ」

「気付いた、つてのは？」

「そもそも、勇者の素質を見抜かれても、魔王を倒せるほどの力を持ったものは現れなかった。名声の事はその時点で周知の事実だったけど、それだけでは力が足りなかった。その時すでに魔王復活の予言は出ていたし、勇者を探すことは急務だったわけだね。そこで、各国の首脳陣で出した結論が、勇者の相乗効果」

「なんだそりゃ？」

「簡単に言えば勇者一人にもう一人の勇者の力を与えるって事さ。今の手法と一緒さ。一方、つまり従者側に相性の良い宝石を身につけさせて、契約者に勇者の資質を与えるって術式を組む。具体的には知らないけど、プロルフエルドの長老達が開発した術式らしいよ。けれど其れは失敗に終わった。」

「失敗？」

「勇者の方。つまり力を与えられたものが力の供給に耐えられなかったのさ。一人の器では御しきれない程の力だったんだろ？ね。それに従者の方も様々な障害が出ていた。その、具体的にはあんまり言いたくないんだけど……。で、色々試行錯誤して、従者にはある一定の制約をつけた」

「制約……」

鸚鵡返しを只管行っていた俺の耳に最後に聞こえた言葉はあまり響きのいいものではなかった。それは、何かしらの制限を負わせられていることなのだろうから。エリスに気を使っているのだろうか、メアが答えに迷っているとエリスが変わりに口を開いた。

「感情の抑制よ。なぜか、力の供給には感情が大きく左右されるの。従者は出来る限り感情を揺さぶられないように訓練する。拷問に近い事もされたわ。あまり効果は出なかったけど。けれど、それはあくまで、一時凌ぎにしかならないわ。だから……」

そこで、言い淀み、胸元の首飾りを弄りながら何か考えているみたいだ。

それまではスラスラと言葉を羅列していたエリスの表情に陰りが見える。その表情はおれの胸をちくりと痛ませた。俺はその先を促すことは出来なかった。そもそも、話の根幹がずれて来ている。俺が聞きたいのは、エリスの辛い過去などではない。他にも疑問はあったがエリスの過去を詮索する可能性があるのなら俺は閉口する。

「ごめん……。無理に言わなくてもいい」

「……そう」

そう言うエリスは悲しそうでもあり、安堵感を抱いているようでもあった。それは、感情を抑制する事を学んだ少女の表情なのか。今迄、色々な表情を見てきた気がするが、表情を垣間見ることが少なく感じたのはこの所為だったのか。どうしようもない思いを抱え、目の前の少女を見据えた。

俺はこの少女から支えられている存在なのだ。いまさら知る。ならば、俺の力も、この少女のおかげなのか。俺は沈んだ空気を払拭するために会話を元に戻す。

「えと、そもそも、契約する相手って決まってるのかな？」

「今は従者自身で決める形が主流だね。契約の方法は幾つかあるけど、大体はお互いの相違が必要だしね。昔は一方的な契約が主流だったみたいだけど」

「一方的って、あまり聞こえがいいものじゃないな……。その方法って？」

「宝石を常に身につける、ってやつ。んで、最初に出会った勇者と契約するんだよ。資質がある者が近づいたら宝石が反応するように



なってるしね。まあ、昔はお互いの名前も同意も必要なかったしね。今は従者が選んで勇者に誓いを立てるのが主流かな。契約の証は同意だけでも言いし、深いつながりを持つなら、血を飲むとか、あとは口づけとかもあるけど」

「ん？ 最後辺りすごい言葉聞こえましたか？」

「いやいや。今時そんな契約してる奴いないよ。ジnkス的な要素強いし」

俺とメアが淡々と会話する中、エリスが突然赤面しつつ俯いた。

その様子に気が付いたメアが数瞬置いて、にやあ、と嫌な笑顔を浮かべた。と、俺の方に向き直り間髪入れず問いかける。

「で？ キスしたのかい？」

「はい？」

反射的に聞き返す。何を言ってるんだこの女は。そもそも、記憶が無い俺に返答できるわけも無い。だが、否定も出来ない。いや、もししてたら忘れてるとか最低だと思っよ、俺。

「というか、したの？ したのかな？」

思考が混濁している。俺自身困惑気味だったのか。ずっと、えと、あの、と意味の解らない言葉を羅列していた。エリスはエリスでますます身体を小さくし、俯きを深くしていった。耳まで真っ赤だ。その様子をひたすら楽しそうに笑っているメアに若干の苛立ちを覚えたが、其れを悪くないと思う自分が居た。

何か忘れてる気がしたけれど。

## 旅の軌跡は波乱の始まり

前日の話し合いで俺達はブロールフェルドに向かう事を決定した。

魔術国家ブロールフェルド。気候は湿度が低い、いわゆる冬に近い。年中気温の低いその国は防寒着を常に着衣することを余儀なくされる。

ちなみにブロールフェルドはローウエルの北北東に位置する。距離にして、馬車で10日ほど。エリスに地図を見せてもらったが、オーストラリアに近い面積を持つような形。それがこの世界の全てだった。

俺達はまず防寒具を購入した。と、言っても俺以外の二人は準備は出来ていたんだが。俺だけが薄着のみしか持っていなかったの、やや厚手のセーター数枚と、細身のトレンチコートを購入した。双方とも防寒を魔術付与しているので中々の値段がしたのだが、エリスの勧めで購入を決めた。

ちなみに、ゴブリン討伐の報奨金は全て貰うことが出来た。依頼主は事前にギルドに報酬を預けていたらしい。もともとそういう構造みたいだ。俺達は気が引けたので、断ったが、受付の女性に強引に渡された。依頼を達成したのだから当然、といったもの完璧な笑顔で押し切られてしまった。

なので俺たちの懐は潤っているわけだが、今までの様に考え無しに使うのは気が引けた。いや、今迄も必要なものしか買ってないけどね。

出立の為、馬車の手配を終え、俺達は宿に戻った。

俺はいつもの様に、日記を書く。と、言っても俺の記憶は廃村以降ないのだから、又聞きでの記憶を加味して、だが。やはり、気になるのは俺が意識を失ったことだ。力を使いすぎた所為なのだろうが、記憶喪失以外にも危険を孕んでいるとは思わなかった。それに、それほど力を使つてやつと倒したのは四將軍の部下だという事実が俺を悩ませる。ならば、四將軍を倒すにはどれ程の力必要なのか。魔王を倒すには……。そこで俺は思考を停止した。その答えは一つしかないのだと、それでも他に方法は在りはしないのだと思つたら。少なくとも今は。

俺は自身の未来に対する羨望を感じた。それは今の俺では無い俺がいるのだろうか、それとも……。

沈む心に叱咤する。今は考えても仕方の無いことなのだ。そう思い込む事にし、ベットに潜り込んだ。

明日から、俺の旅が始まるのだから。今はそれでいい。

次第に意識が薄れる中、俺はひたすら同じ言葉を胸中で繰り返した。

\*\*\*\*\*

ローウェルを出発して、6日目の昼頃、その事件は起こつた。

俺達は只管、馬車に揺られながら到着を待つていた。正直、唯只管に馬車に揺られる事は苦痛以外のなんでもなかった。暇だし、お尻は痛いし。会話したりはしてたけど、ずっと話すのは難しいもんだ。それぞれ、寝たり、外を見たり、物思いに耽つたりしていた。

ローウェルとは気候が変わつて来始めたな、と思つていた矢先だった。

「なんだい？ あれ」

突如耳に入った声は、やや焦ったような疑念を含んでいた。声の主のメアが指差す先に緩慢に視線を移す。その先には、黒馬に跨った外套を羽織った人物が走っている。その後方には数頭の馬に跨った男達がいた。位置的に追いかけているのか。後方の人物の様相は、冒険者に近い。ただ、それぞれ手には獲物を持っている。

「盗賊か山賊かもね」

「どうする？ こっちは馬車一台だし。助け様が無いよ」

やや、無感情にエリスが呟く。だが、その声には緊迫感を感じる。メアももどかしそうに声を張り上げた。二人は兎にも角にも助ける気らしい。自分の危険は考えに無いようだ。

こいつらしい奴等だよな。

緊迫した二人を他所になんともなく思ったことに自分に苦笑する。

「何笑ってんだよ！ 不謹慎だろ！」

「ヤマト……」

自分の事のように憤るメアに暖かい気持ちになる。エリスもそんな俺を責める様に睨み付けている。

ああ、そうだ。だからこそ俺はこいつらと共にいるんだろう。俺は自暴自棄にならないでいれるのだろう。俺は支えられている。なら、俺の出来る事は決まっている。

傍から見れば責められている俺の胸中は二人への感謝の気持ちで溢れていた。

「ああ、悪い。ちょっと覚悟決めてた」

「覚悟つて、な」

エリスの言葉が終わる前に俺は馬車後方から背中から飛び出す。それは自殺行為に近い。二頭の馬に引かれている馬車の速度は決して遅くない。

「ちょっと！ なにやってんだい！」

そんなメアの言葉を聞きながら、俺は空中で姿勢を低くする。着地と共に平衡感覚を失う身体を無理やり引き起こし、前に体重を移動する。俺は前方の一行を追うために、太腿に力を集中した。

大丈夫だ。俺には出来る。

そのまま地面を思いつき蹴った。俺の身体が前方に跳躍する。そのまま、足を漕ぐように力を殺さず機械的に動かす。その速度は馬車を上回り、一瞬で追い越した。鼓膜を揺らすのは風の音だけ。俺は意外にこの音を気に入っている。一部の人間に見られる、速度に魅入られる気持ちが解らないでもない。ただ、俺の場合は自分の身体のみで、その境地に達することが出来ている。その事実が俺に多少の愉悦を感じさせた。

視界に移る移動物達との距離を縮める。俺の速度のほうはやや速い。

前方の盗賊たちが此方に気付いた。と、同時にその中の一人が弓を構える。刹那、矢が此方に放たれた。それは一直線に俺の額に向かってきていた。俺は矢の軌道を逸らさず、そのまま首を横に傾げ避ける。驚愕の色を浮かべる盗賊達の瞳を見据え、そのまま追いつく。飛び道具が無駄だと思ったのか、俺を介在する形で二人の盗賊が併走する。剣と槍で同時に此方を攻撃してきた。

俺は速度を一瞬緩め、鼻先三寸で避ける、と同時に槍の柄の部分をつかみ強引に引っ張った。

「なっ！」

槍持ちの男は言葉を繋げる事無く、そのまま転倒し後方へと落馬した。刹那、斜め後方から矢が飛んでくる、気配を感じた俺はそちらに視線を送らず右手で其れを寸前で掴む。

「ば、化け物か！」

俺はその言葉を見無視し、距離を保つため前方に思いつきり跳躍しながら前方宙返りをする。一瞬、併走していた剣持の男と距離を持つ。

俺が乗っていた馬車が視界を掠める。距離は然程離されていないようだ。頭が逆さになった瞬間、斜め後方の弓矢持ちの腕に向けてそのまま、矢を投げ返した。矢を腕に受けた男は、平衡感覚を失って転倒した。

空中でやや速度を失った俺は前方に跳躍して稼いだ距離を失う。

丁度、剣持の男の横に降り立った。

「なんなんだお前は」

剣持の男は苦々しげに口を開く。その声は恐怖で掠れているのか、それとも蹄の音に遮られているだけか。俺は相手に見えているかどうかの確信さえ持たず口角を上げ笑みを表す。

「勇者さ……。候補生だけだ」

その言葉を放った瞬間、氣勢を上げながら此方に剣を振るってきた。軌道は横。切り払い。俺はその軌跡を跳躍して避け、次いで剣持の男の顔面に回し蹴りを放つ。そのまま、馬だけ走る形で、男のみ後方に吹き飛んだ。俺は蹴りの反動を利用してそのまま横に回転

し剣持の馬に跨る。

ふと、前方を見ると追いかけられていた人物が此方を視認している。速度を緩め、此方との距離を近づけてきた。外套に身を包んでいるので、容姿を垣間見ることは難しかった。お互いの距離が詰まり、終には停止した。

「あの……ありがとうございました」

その声は透明感のある少女の声だった。たしかに小柄の体格は女性と考えてもおかしくないのだが、俺は全くその考えが無かった所為で、面食らった。

「あ、いや。大した事じゃないよ」

どぎまぎしながら答える俺。なんか、格好悪いな。

次いで、後方の仲間達も追いついていた。後方で、ふたりの声がある。と、目の前の少女らしき人物がフードを取ろうとしているのか、やや落ち着きの無い拳動で手を上げたり下げたりしていた。

「あの、どうかした？」

「あ、いえ。恩人に顔を見せないのも失礼だと思うんですけど……」

何を迷っているのか、少女は葛藤を口にする。律儀にも、相手に対する礼儀を重んじての行動を取ろうと思ったのだろうか。

「別に気にしなくていいよ。俺が勝手にした事だし」

相手に無駄な気遣いをさせまいと思った上での言葉だったが、逆にそれが背中を押してしまっただけらしい。

「いえ、やはり失礼ですし」

毅然とした言葉だった。其れほどまでに必要なのか。少女の言葉には確固たる決意が滲んでいた。と、フードに手を掛けその造形を露にした。同時に二人が俺たちに追いついたようだ。

「やっと、追いついた。ちょっと、あんたさっきの人間技じゃないよ。あれ…あ、あんた」

指先を震わせながらメアが、少女に指を刺す。動揺のためか身体が震えている。

「エ、エルフ」

目の前の少女は困惑の表情を浮かべながらぎこちない笑顔を浮かべた。その両耳は人間とは違い、長く尖っていた。



## エルフと人間と魔王

少女の銀髪は微風に揺られていた。

透明感のある肌はその神秘性を感じさせた。人間とは異なるほどの、完璧な造形。そして、目を引くのは瑠璃色の瞳と耳の造形。瞳の透明感は思わず溜息を漏らすほどだった。耳は人間とは異なる形。長い、と感じる形を思わず視線に入れる。

俺の視線を感じたのか、少女は苦笑を浮かべている。

「あ、ごめん。失礼だったね」

「いえ。慣れてますから……」

その表情に憂いを浮かべる。慣れたとしても平気ではないだろう。俺は自分の軽んじた行動に嫌気が差した。時折、無意識に行動を取ってしまう自分に胸中で舌打ちする。

「それより、なんで追われていたの？」

「えとそれは……私誘拐されて……」

エリスの問いに言いづらそうに口を開く。やや、警戒心を思わせる。それはそうだろう、助けられたとはいえ、俺達は他人なのだから。すぐに信頼するのは、考えなし過ぎる。

「誘拐、って……」

「その、奴隷商に売られそうになった……みたいですよ」

「人身売買かい」

少女は自分自身の事柄に、まるで他人事のように俺の疑念に答えた。実際、こういう時って、売られるときまで気が付かないものな

のだろうか。

しかし、人身売買とは穏やかではない。

「人身売買って？」

「知らないのかい？」

「知ってるよ。ただ、実際に起こっているとは思わなかったから」

「まあ、表沙汰にはあまりなっていないかもしれないわね……。私も似たような境遇だったけど」

俺とメアとの問答にエリスが突然言い出した内容は俺の度肝を抜いた。あまりに淡々と話すから、思わず流してしまう所だった。

「というより、従者はそういう境遇の子供が多いわよ」

「話には聞いたことあったけど、まさか本当だったとはね」

エリスの表情はまるで興味の無いことを垣間見たかのように変わりが無い。其れに対してメアは苦々しげな表情を浮かべている。まるで境遇が真逆だ。その表情をすべきはエリスなのだ、思わずにはいられなかった。

「あなた達は勇者……ですか？」

少女の問いに思わず、ぎよっとした。そうだ。エルフは人間、特に勇者が嫌いなはず。俺は胸に生まれた焦燥感を感じていただけからといってごまかす事は難しいだろう。だが、俺の思いと裏腹に少女に嫌悪感を抱いているような印象は抱かなかった。

「……そうだよ」

「お願いです！助けてください！」

少女は突然腰を曲げ礼を尽くす仕草を見せた。頭を垂れる、少女を見つつ、なぜか平静に対応する自分が居た。

「ん、まず話し聞かないとなんとも言えないし、頭上げてくれるかな？」

「す、すみません」

慌てて直立する。あたふたとする所作にあどけなさを感じた。ただ、容姿からその年齢が解らないのがエルフだという。なら、本当は俺より年上なのかもな。完全に敬語無視の言葉遣いだけど、まあいいだろう。とにかくここで話続けるのもどうかと思う。俺は一先ず、馬から降りた。後ろには気絶した盗賊たちがそこ等に倒れている。

俺は馬を盗賊の近くに連れて行ってやった。盗賊とは言え、馬を奪い取るのは気が引ける。まあ、扱いに困るし。

「とりあえず、一緒に町に向かおうか。そのまま馬で行く？ まだ数日掛かると思うけど」

「あ、大丈夫です。慣れてますから。このまま付いていきます。それにこの子良い子ですから」

そういうと騎乗している馬の首筋を撫でてあげていた。その優雅な仕草に気品さを感じる。俺たちは一先ず、馬車に乗り込み少女と道程を共にした。

俺は馬車の荷台に腰をかけると、後方を付いてくる少女に声を掛ける。

「さっきの話だけどなんの用件かな？」

「あ、はい。その、私達エルフの事はご存知ですか？」

「えと、どついう意味かな？」

「ごめんなさい。曖昧でしたね。エルフの政治形態といいますが、国の成り立ちをご存知なのかと思ひまして」

エルフの国というとブルフェルドの事。その、内部の事など解るはずも無かった。そもそも、閉鎖的な国家なのだから俺はもちろん、メアもエリスも知らないのではないだろうか。俺の思惑通り、二人に振り返つても首を横に振るばかりだった。

「そうですか。では、説明いたしますと、私達の国ではあなた達人間の国の構造とは違い、統治者が一人ではありません。また、一国における首都もありません。国内には三つの集落があり、それぞれの長老が統治している形になります」

「要はそれぞれの村の長老が同じ力を持つという事かしら？」

「はい。国においては三名の意見によつて動向を決めています。以前は他国と同じ様な携帯だつたんですが……」

エリスの問いに答えるエルフの少女は明瞭に声を発する。  
なるほど。奇数に分けているのは意見が分かれた場合に必ず、可決出来るようにする為か。ただ、統治者がいないのはまた問題があるだろう。必ず意見が分かれるからだ。ならば、たとえ意見を多数決で決めた場合でも否決された当事者の摩擦は生まれるのではないだろうか。まあ、こつう問題は最善はあつても、正解は無い。今の構造が一番良いと考えられて形成されたのだろう。

「でも、それぞれの意見が完全に分かれたらどうするんだ？」

俺の言葉を聞いて、少女が渋面を浮かべた。

「助けていただきたいのはその事です。三名の意見が完全に分かれ

た時、エルフは勝者の意見を尊重します」

「勝者…という事は何かで競うのかしら？」

「単純な話なんですけど……。それぞれの村から代表者を選出して戦わせるんです」

率直な競わせ方を意外に思った。エルフってもう少し温和な種族だと思ってたし。目の前の少女も決して好戦的な雰囲気は感じない。だが、エルフも人間と一緒になのかもしれない。それぞれで考え方が違うのだろう。

「それで、俺達に頼みたいことってのは……？」

「私達の村の代表として戦っていたただきたいんです……」

予想半分、意外性半分といった思いだった。話の流れから言つてその答えは容易に想像できた。だが、なぜ、俺たちがエルフの問題に参入するのか。それに、人間に頼るつてのは考えには無かった。

「疑問に思いますよね。エルフがあなた達人間にこんな頼み事をするなんて。実は私の村には選出できるような力量の者がいないのです。ですので、外で力量の高そうな方を探していたのですが……。その、さっきの人達に攫われてしまつて……」

「まあ。エルフは珍しいしね。奴隷商に売れば大金になるだろうさ。人間のエルフに対する認識も、印象の良いものじゃない事くらい分かつてそうなものだけだね」

やや、棘のある言葉を言い放つ。メアには珍しく蔑んだ表情を浮かべていた。其れほどまでにエルフに嫌悪感を抱いているとは思わなかった。面食らう俺の横で、エルフの少女は複雑そうな表情を滲ませていた。困惑、あるいは妥協、だろうか。人間にどのような仕打ちを受けるか。その覚悟を持っているのかもしれない。

「そうですね。迂闊でした。まさか、ブルルフェルド周辺でこのような被害にあうとは思わなかったのだ」

落胆を浮かべている少女の胸中には自分に対する叱責かそれとも人間に対する失望なのか分からなかった。

気持ちに区切りがついたのか、一拍置いてこちらに向き直る。

「それで、いかがでしょう？」

「そもそも、不躰過ぎるんじゃないのかい？ 助けてもらっておいで、いきなり戦えなんて。噂通りエルフは人間の事なんてどうでもいいと考えてるとしか思えないね」

「すみません。礼を欠いているのは重々承知の上です。ですが、こちらも時間が切迫していますので……。それに、これはあなた達にも無関係という訳ではないです」

「俺達に関係がある話なのか？」

「はい。あなた達人間にとっても最悪の事態に成り得ます。この争いの原因はそれぞれの人間に対する差別の差です。魔王復活の勧告を聞き私達はこれからの動向について話し合いました。ノース村の長老は魔王側に付くと主張しました」

「魔王の傘下に入る気なのかい？」

明らかに憤りを浮かべているのが目に見えて分かった。メアで無くとも、その感情を抱くのは当然だろう。人間をなんだと知っているのか。

「ノース村の長老だけです。イースト村の長老は現状維持を進言しました。彼はもともと魔族に対しても人間に対してあまり興味を持っていませんから。ただ、彼も人間に対する嫌悪感を抱いてはいます。そして私達の村、サウス村では人間と協力して魔王を討伐しよ

う、という意見です」

毅然とした所作でその主張を言葉にする。次いで言葉を繋げる。

「ですが、先程も言いましたが、私達の村では他の村の代表者に勝てる者がいないのです。それで……」

「今ここにいるんだろ？ それは分かったけど。そいつ等はそんなに強いのか？」

「ええ。とても。イースト村の代表は、アドラという青年です。彼は非常に魔術に長けています。最も精霊に愛されたエルフと言われている。その魔力は国内に置いても群を抜いています。ノース村からはメンテルというやや若い少女です。彼女の目を見張るところは、その神力です。魔術にも長け身体能力も同様です」

「神力つてのは？」

「人間における勇者の力に近いものがあります。特殊な力を用いることが出来る、みたいですよ。その、実際に見たわけではないので……。私が生まれてからこのような事態は初めてなので」

表情は沈んでいる。少女の言葉には嘘が無いように思えた。ならば、俺達が協力するのをもまた、必要なことだろう。ただ、一つ疑問が浮かんだ。

「一つ聞きたいんだけど。俺たちでいいの？」

「その、代表者は一人ですから、お願いしているのはあなた……えと、すみません、お名前を伺ってもいいでしょうか？」

「ああ……ヤ……」

「えと、すみません。もう一度お願いできますか？」

あ、あれ。上手く声が出ないな。まるで、意思とは逆に身体が拒否を起こしているような感覚。そういえば、俺の名前を俺自身で語

るのは初めてじゃないのか？ 記憶を無くして最初に抱いた名前への拒絶間が再び露になる。

なんなんだよ、これは……。

しかめっ面の俺を見て、エリスが心配そうに声を掛けてきた。

「大丈夫？ ヤマト」

「ああ。なんか、疲れたみたいだ」

「そうね。あれだけ動いたんだもの。少し休んだら？」

「いや、まだ大丈夫、えとごめん」

俺は謝罪の念を仕草で表した。その対象の少女は慌てた様子で頭を振った。

「い、いえ。こちらこそ。すみません。……そのヤマトさん？ でよろしいのでしょうか？」

「ああ、別に呼び捨てでも構わないけど」

「では、ヤマト。私の名前はシルフィーヌと言います。シルフィーと呼んで頂けると、嬉しいです」

「ん、わかったよ。シルフィー」

「はい、ヤマト。それで、先程の答えですが。ヤマトにお願いしたいのです。数瞬ですが、ヤマトの力量はエルフの私から見ても目を見張るものがありました。それに勇者と言うなら他にも特殊な力があるのでしょうか？」

「……まあね」

「私はヤマトで、ではなく。ヤマトがいいのです」

満面の笑みを見た。見る者が見れば其れは心奪われるものであっただろう。俺もその仕草に胸を高鳴らせた。

だって可愛いんだもん。うん、仕方ないよね。



「ヤマト。鼻の下伸びてる」

「伸びてません。伸びません」

「へー、そう……」

冷徹な感情を孕んでいるその言葉にあわてて否定する俺。なぜか背中に冷たい汗を掻いていた。

「えと、あー。俺は別にいいよ。俺でいいのかなとは思っけど。二人がいいなら」

「わたしや、あんたが戦う必要は無いと思っけど……。そう決めたのなら反対はしないさ」

「私も出来るならヤマトが戦わないようにして欲しいけど……。ヤマトは断る気は無いみたいね」

やれやれと言わんばかりに大きく嘆息するエリスとメア。俺の表情を見たからだろうか、何を言っても無駄、と思ったのかもしれない。

斯く言う俺もエリスの言葉通り断るという考えは無かった。

全くどうかしてる。自分の力を過信しているとしか思えない。けれど、不思議と不安感は全く無かった。それは、過去の俺の記憶の断片からなるものなのか、単なる過剰な自信から来るものなのかは解り得なかった。

「てことで。いいよ。受ける」

「ありがとうございます。ヤマト」

心底嬉しそうに声を張り上げる。先程とは打って変わってその仕事はシルフィの容姿相応のものに思えた。

「その、出来る限り、お礼はしますから」

別にお礼なんて要らないのだが、無報酬と言つのもお互い体裁が悪い。俺はおざなりな対応で返答した。

「あー、ま、出来るだけでいいよ」

「ええ、頑張りますね」

ぐっ、と拳を握り締めて、闘志を露にしている。別に無理してしなくてもいいのに、と思っていた俺とは裏腹に、恐らく報酬内容を考えているだろうシルフィは思考に没頭しているようだった。俺はそんな様子を見ながら、意外に疲れを感じていた身体を意識と共に休ませた。

## 開催前夜

生い茂った樹木の景観を只管視界に入れて3日後、俺達の目の前には何の変哲も無い林道が未だに続いている。突如、シルフィが俺達に止まるように指示を出した。

「少し待っていてください」

そう言うと、馬から降り、正面に歩を進めた。

表情を曇めたメアは不服そうにその指示に従った。ちなみに、馬車の運転はメアがしている。俺は操作できそうも無いし、エリスに任せるには体力的にやや頼りないからだ。まあ、先の馬に乗った経験から言うと馬車の操作もそれ程難しくは無いかもしれないけど。

突如、シルフィは足を止めた。一拍置くとしなやかな右腕を目の前に翳したと、同時に掌が触れた虚空から波紋状に薄緑色の模様が広がる。その姿を現したと同時に発光する。

視認出来る範囲を埋め尽くすと、その模様は徐々に消失した。

「結界は解きました。行きましょう」

そう言うと、淡々と馬に跨り、先に進んだ。俺たちも後に続く。

本来なら関所を敷く物だが、エルフたちは独特な結界を配置して不法侵入を防いでいるみたいだ。噂の通り中々隔絶した国のようだな。俺は先が思いやられる、と今更ながらに呟いた。

\*\*\*\*\*

その村は思っていたより小規模だった。周囲を見回すと端まで視認出来る。村と言うよりは集落のように思えた。

家屋は木造、と言うよりは大木を刳り抜いて作ったかのような造形をしている。自然と共に生きるエルフならではの住居と言えた。辺りには村の者らしきエルフが怪訝そうな表情で此方に視線を送ってくる。

俺達は其れを気に留めずに案内をしてくれるシルフィに付いていく。

「こちらです。まずは馬車を置きましょう」

そういうと、やや、大き目の家屋の前で止まった。その周囲をぐるりと回ると、裏手に馬小屋らしき場所に出た。

艶やかな毛並みの白馬が繋がれている。その横にシルフィの黒馬を繋げた。

俺達は其れに倣って、開いている空間に馬車を泊めた。約10日間の旅も漸く終わる。俺は、体中が軋む音を聞きながら、背中を逸らした。帰路を思うと意気消沈してしまいそうだ。

「まずは、荷物を置きに行きましょう、その後長老に挨拶をして頂きたいのですが」

「うん。そうしようか」

正直少し身体を休めたかったが、時間が無いといていたシルフィの思いを鑑みるとそうも言っていられない。

正面に回り、玄関から入る。中は吹き抜けて二階への階段が見える。木造に感じる温かみを感じる。

部屋という概念が無いのか、一部屋のみで作られているみたいだ。一階は台所と食卓。奥には寝具が見えた。二階は寝室だろうか。

「ひょっとして、部屋はないのかしら？」

「えと、すみません。エルフには部屋と言う概念があまり無いので……。一般住居はこんな感じなんです」

戸惑いながら問いかけるエリスに、申し訳無さそうにシルフィが返答した。

まあ、女の子が男と一緒に部屋に寝るのは嫌だろう。例え一階と二階に分かれても、妨げる物は何も無いわけだしな。

「なんだったら、暖かい毛布と防寒具さえもらえれば俺は馬小屋でもいいけど？」

「い、いえ。そこまでしなくてもいいわ」

「別にそんなに気にする事じゃないと思うよ」

「私も、ヤマトなら紳士的な対応をしてくれると思います」

女性陣全員に否定され同意せざるを得ない状況だった。正直女の子と同室と考えると気が気でないのだけだ。まあ、その信頼を拒否するのも悪いし、ここは同意しておくことにした。

「ん、そうか」

とりあえず、話し合った結果俺は二階、女性陣は一階で寝ることにした。

二階は物置に使っているみたいで、主に使っているのは一階だけらしい。俺の予想は外れたわけだ。一階ならベットも3つあるから丁度いい。まあ、俺は毛布があればどこでもいいや。

二階は物が散乱していたが、寝る場所は確保できた。俺達はそれぞれ、準備を終え、長老の元に向かった。

\*\*\*\*\*

「よく来たな。俺がサウス村長老のアガムだ」

そう言い放った青年は快活な表情を見せた。エルフの印象とは裏腹にその表情には愛嬌を感じる。だが、容姿は端麗であるところはやはりエルフと言った所か。

「彼はヤマト。勇者の資質を持っています」

俺の代わりにシルフィが俺の紹介をしてくれた。それに答えてアガムが抑揚に頷く。次いで俺の後ろにいる二人に視線を送った。

「私はエリスといます。ヤマトの従者です」

「メア。ヤマトの仲間」

長老の視線に気付いた二人が自己紹介をする。ヤマト、ヤマトと……。俺の名前の大売出しだ。過去の自分に言ってやりたい。杞憂だっつば、と。

エリスは淡々と、メアは不服そうにその言葉を並べた。

「そうか。話は聞いてるな？」

「ええ。あなた達の村の代表として戦えばいいんですよね？」

「ああ。本当にすまないと思っっている。情けない話、君達に頼るしかない」

「いえ。俺たちにも無関係な話でもないですから」

前もって聞いていたエルフの印象とだいぶ違う。俺も思っていたが、やはり、エルフもそれぞれ考え方が大きく違っているらしいな。シルフィもいい子みたいだし。

俺は、礼を重んじるアガムの行動に単純だが好意を抱いた。

「ありがとう。早速だが決闘は明日開催されるんだ」

「あ、明日ですか？」

「なんだ、話していなかったのか？」

「う、ごめんなさい。焦ってて忘れていました……」

意外におつちよこちよいのようだ。右手を口元に当てて焦燥感を露にしている。苦笑しながらその仕草を見守った。

「えと、すまん。俺の娘が……。その大丈夫か？」

「ええ、驚いただけなんで、大丈夫です。つて、娘？」

「ああ。こいつ、俺の娘だよ。これも言っただけだったのか……。まあ、重要でもないが、よく信頼してもらえたな」

「あう……」

なるほど。それならば、代表者を探す旅に出ている理由も解る。アガムにとって重大な事項を任せるにはそれ相応に信頼出来る者でないと、頼めないだろうし。

アガムはやれやれと肩を竦めつつあたふたとしている少女に視線を送っている。

「とにかく今日はゆっくり休んでくれ。宴を開きたいところだが、

エルフにはそういう習慣が無くてね。色々面倒くさいんだ」

アガムの口振りからすると、人間の事に詳しいようだ。なにか過去にその要因はありそうだが、初対面の相手にそこまで追求するのは気が引ける。俺は適当な返答を選んだ。

「いえ、お構いなく。屋根がある場所で寝る事が出来れば十分ですから」

「ああ、すまないな。シルフィは飯作るの上手いからそこは期待していいぜ」

肩を落としてしゅん、としている娘に対してフォローを忘れないアガムだった。

その言葉にシルフィが、がばつと顔を上げた。俄然やる気といった様子で右拳を握り締め、瞳は闘志に満ち満ちていた。その愛らしい仕草に思わず笑みが毀れる。

「任せてください！ 私頑張ります！」

俺の目を真摯に見据え、その闘志を言葉に乗せて喉を震わせる。それは好印象を持つには十分なものだった。俺は出会って間もない少女に親近感を抱いた。

「ふーん。結構良い雰囲気じゃねえの？」

『はい？』

俺とシルフィが完全に同時に声を張り上げた。思わず顔を見合わせる。視線が交錯すると、無意識にお互い目を逸らした。お互い赤面していることだろう。



「意気も合っているな。ヤマト、家の娘は有望株だぜ？ 親の俺が言うのもなんだが、容姿端麗、頭脳明晰、家事全般ももちろん得意だ。まあ、やや体型は幼いが、愛嬌が有るところもあるし、むしろその方が魅力が上がると思うぜ？」

「ん、確かにそうかもしれないですね」

思わずアガムの問いに頷いてしまう。はっ、と気付いたときには遅かった。女性陣全員に視線を送る。金髪の少女は此方を蔑むように見据えている。ふん、と言うようなその仕草は俺の冷や汗を流すには十分だった。

メアは勝手にどうぞと言わんばかりにまったく無関心だ。これはこれで怖いものだ。いつも人当たりの良い彼女には珍しい。

次いで、シルフィは又しても頬を染め此方をチラチラと上目遣いに視線を送ってくる。

え？ なに、この状況？ なんで俺がこんな目に遭ってるの？

俺が悪いの？ ねえ？

俺の胸中など知るはずも無く、アガムの楽しそうな笑いが響いていた。

## デュエル

迂闊だったとしか言いようが無い。

自らの力を過信していた自分に今更気付く。後悔先に立たずと言  
うが、正にその通りだと身に染みて理解した。脳裏を掠める昨日ま  
での自分に嫌気が差す。

俺は自責の思いに駆られつつ、自身に迫る雷光を済んでの所で避  
ける。髪先が焼ける匂いがした。後方で稲妻が通り過ぎる轟音が耳  
鳴りに変わる。寸前で避けすぎたらしい。

前方に注意を向ける。目の前に矢が降り注ぐ。否、真っ直ぐ俺に  
向かって雨の様に向かって来ている。俺は両手に装着したナツクル  
で前方に只管拳を繰り出す。その速さは俺自身でも視認出来ない程  
の物だったが、数が多すぎる。弾き漏らした鏃が俺の身体に裂傷を  
作る。軽傷だが無視出来るほどの物でもない。数秒間それが続くと、  
その雨が止んだ。

刹那、豪炎が視界端を掠める。俺は後方に跳躍しそれを避けよう  
としたが、如何せん広範囲に及ぶ炎の軌道から逃れるのは難しかっ  
た。俺に豪炎の半分が重なる。

俺は腰を命一杯捻った。限界まで回転させると同時に軋む身体を  
開放した。その反動を利用し、反対に捻り、空中で回転する。異常  
とも思える回転力に俺が炎を纏う事は無かった。が、それでも、完  
全に無傷とはいかず、左足に走る痛みが俺の瞬発力を奪った。

「くっ……」

呻き声を漏らす。見れば左足が黒く変色している。視界に入れる  
のを嫌った俺は痛みをすぐに思考の外に出した。

辺りには観衆の声援か、罵倒か把握できない物が右往左往してい  
る。三つの村の住人が思い思いに声を張り上げている。辺りは石畳

で舗装された大規模な決闘場だった。俺達の周りにはそれぞれの村からの応援だろうが、観客が陣を取っている。その距離は遠い。四方高い柵で囲まれている。

歓声の中には見知った声を聞いた気がしたが、意識を向けるほど余裕が無かった。

「くくく、無様だね。人間」

左耳から、嫌味な口調の男が声を発した。俺は其方に注意を向けるも視線は向けなかった。

先程の炎の名残か、辺りの気温は一気に上がっている。俺の額に汗が滲んだ。それは、気温の所為だけではないだろう。無視し切れない鈍痛を左足に感じていた。

「もう、いいでしょ？ 諦めなさい」

そう言い放った当事者は右にその存在を表した。事前に聞いていた情報通りその強さは折紙付き、と言った所か。だが、今の今まで彼女が神力を使った形跡は無い。まだ、力半分といったところか。それでも、俺は絶体絶命という位置付けに配置させられていた。

「諦める？ 二対一なんて方法を取るあんたらに白旗を上げる気は毛頭無いね」

そう、俺は狙われていた。考えてみれば、三人で決闘するという段階でこういう事態になる事は予想できたはずだ。奇数、その上三人となると勝敗を決するには一度に行うしかないのだから。それに加えて俺は唯一の人間だ。ならば、俺を標的にしてもおかしくない。考えなし過ぎたか……。

今更そう胸中で呟く。嘆いても仕方ない。今は打開策を練ること

が先決だ。

「おや、言うじゃないか。人間の癖に。今までは手加減してあげてたんだよ？ わかりますかあ？」

その端正な顔立ちに下卑た笑みを浮かべるイースト村の、確かアドラと言ったか。前情報どおり、人間に対する差別意識が強いようだ。俺を完全に見下した態度に虫唾が走った。

「やめなさい、アドラ。エルフの誇りを忘れたの？」

そう言うノース村のメンテルは予想に反してその高潔さを感じさせた。魔王と共に人間を滅ぼそうとしている者の言葉とは思えなかった。背筋を伸ばし毅然とした態度を取る少女は俺に疑念を抱かせた。

なぜ、この方法をとったのか。メンテルの性格なら断りそうなものだが。

「うるさいなあ。たかが数十年しか生きていないガキに指図されたくないんだよ」

「……そう。それは悪かったわね」

諦め、と取れるほど無気力な声質に違和感を感じた。

なにか、裏でもあるのか？それとも考えすぎか？

俺は頭を振って疑念を振り払った。今は生か死かという瀬戸際なのだ。余計なことを考えている暇は無い。今のままでは俺に勝ち目は薄いようだ。しかし、安易に召喚魔術を使うことはしたくなかった。俺の脳裏にエリスの泣き顔が浮かぶ。

泣かせてしまった。その後悔の念は俺の良心の呵責を促すには十分だった。出来ればもう見たくはない。

さてよ、召喚魔術は確か武器を戻すときに記憶の喪失するはずだ。  
ならば……

「……まあ、いい。そろそろ終わりにしよう。下手な踊りも面白いのは最初だけだしね」

その言葉を終えると、此方に手を翳す。その掌には今までに見たことのない魔力を感じる。

「さよなら」

アドラの掌の周囲にその身体に似合わない大きさの炎が纏っていた。それは一目見れば自らの死を覚悟してもおかしく無いほどの絶望を抱かせた。自然と身体が小刻みに震えだした。汗が尋常ではない。今では左足の痛みさえ感じなかった。背中に纏う死神の外套を振り払う事に必死だった。

俺の様子を見て、メンテルは顔を顰める。それは、俺が死を恐れているのを見て軽蔑を抱いたのか、それとも俺に対する同情なのか。気付けば豪炎はすでに放たれ俺に向かってきていた。瞬きを一度も許さないほどの速度で走る炎を凝視した。

「ヤマトッ！」

声が聞こえた。聞きなれた声。エリスの声。悲鳴とも言えるその声に突き動かされる。

腹が立った。自分自身に。

泣かせないって言っただろ！

恐怖に縛られた身体に鞭を打つ。言い換えれば開き直った。俺は猛然と向かってくる炎に掌を翳す。そして望んだ。ただ、力を望んだ。

瞬間目の前にゲートが現れる。俺はゲートの後ろに身を屈め、炎から身を守る。

豪炎がゲートに触れた瞬間、一瞬でその全てが消えた。ゲートも炎もそこには存在しなかった。

「な、なんだよ、今の」

驚愕の色を隠しもせず、アドラはその瞳を見開いていた。

俺自身も驚きを隠せなかった。まさか、こつも思惑通りになるとは思わなかった。記憶も失ってはいない。だが、事態が変わった訳ではない。この機会を逃す手は無い。

刹那、俺は地を蹴った。今更ながら左足に痛みを感じる。だが、構ってはいられない。俺は痛みが無いように通常通り両足で足跡を刻んでいく。

「く、来るな」

先の出来事で混乱してしまっただのか、上手く魔術を練れないようだ。掌で落ち着きの無い光の紋様が浮び、消失を繰り返している。

俺は一瞬でアドラの目の前まで疾走した。次いで、右拳を鳩尾に刺した。やや手加減をしたつもりだったが、それでも相手を静めるには十分だったらしい。俺の一撃を受けると、呻き声も上げず糸の切れた人形のように倒れこんだ。

辺りがしんと静まり返る。俺の荒い息遣いだけが空間を支配していた。

「……さすが、勇者ね。力を隠していたのね」

「隠していたわけじゃないけどな」

使いたくなかっただけ、とは流石に言えなかった。自分の命を賭

けての決闘に出し惜しみする愚か者は俺ぐらいだろう。

思い付きで行った召喚だったが、思いの他効果があった。召喚に用いるゲートは空間を隔絶しているだろうとの思いで行動したのだが、これ程上手く行くとは思わなかった。固体に限らずそれは飲み込んでしまつらしい。だが、生物に使うのは気が引ける。どうなるか想像できないしな。やはり、危機回避にしか使えそうに無い。

俺は頭痛に顔を顰める。召喚寸前までの魔術開放とは言え、何かしらの影響は身体に起こるようだ。多様は出来ないな。

目の前のエルフは軽やかな足取りで足をこちらに進めてくる。その肢体はしなやかに伸び、透き通る肌には一点のシミも傷も無い。

対する俺は満身創痍だった。体中には矢が掠めた時に受けた無数の矢傷が痛々しく現れていた。見るに耐えないほど焼け焦げた左足は感覚が無い。動かそうとすると痺れた激痛を感じる。まったく役に立ちそうに無い。

「さつきも言ったけど、もう諦めたらどう？ さすがにもう戦えないでしょ？」

メンテルの表情には俺を蔑む感情は感じない。そのままの言葉で受け取っていいのだろう。ただ、単純に俺に同情しているのかもしれない。

だが、俺は頭を振った。諦めるつもりは無い。それは未曾有の危機を起こし得る可能性を多大に秘めているのだから。

責任、とは違う。使命感なのだろうか。いつも感じる得体の知れない感情に信頼を寄せる。根拠は無い、だが、従うことは間違いない、そう自分に言い聞かせる。

押し殺せ。恐怖も生への渴望も無いものと考えれば、まだ、戦えるはずだ。

俺は自分を客観的に見据える。異常なのだろう、俺と言う人間は。

それでも、出来ることは一つしかない。

「そう……。気は進まないけど、仕方ないわね。意地でも降参させるしかないわね」

この決闘の勝敗は、相手を降参させるか、気絶させるか、殺すか。それで決まる。単純だが、それだけに圧迫を感じるものでもある。メンテルは俺を殺す気は無いのかもしれないが、負ける気も無い、と言った所か。

弓矢を此方に構える。先程は気付かなかったが、その長弓には底の知れないほどの魔力を感じる。それがさっきの無数の矢を放っていたのだろう。

どうする。さっきの様に打ち落とすのも限界がある。そもそも、俺の武器は拳のみ。どこの筋肉馬鹿だ……。やはり、剣の鍛錬をすべきだったかもしれない。自分の身体能力を過信しすぎたな。

使うか。其れしかない、か。

「ごめん。エリス」

俺は謝罪の言葉を呟く。決して届くはず無い声量で発する言葉は、言い訳がましく俺の鼓膜を揺らした。

右手を正面に翳す。瞬時にゲートが出現した。ゲートに手を一瞬で突っ込む。と同時に何かを掴む感触を得た。

「無駄よ。千の矢から逃れる術は無いわ」

「勘違いするなよ。これは防御の魔術じゃない」

「……そう。まあ、関係無いわ。何をしてもあなたに勝ち目は無いもの」

刹那、矢を番えていた右腕が震えた。其れは矢が放たれたことの



合図である事は、目の前の無数の矢が出現した事で明らかになった。放たれた矢は一本の筈なのに、指先を離れた瞬間其れは分身したかのように増殖した。広範囲に渡り出現した無数の矢は俺の逃げ場を完全に無くした。

距離はかなりある。それでもこちらに届くのは瞬き数回する時間を許さないだろう。

頭は思考を中断している。それでも、無意識に何かを望んだのだろう。俺は瞬時に手を元の位置に戻すと掌には槌が握られていた。

「……は？」

予想と違う武具の出現に素っ頓狂な声を上げる。柄から伝わる重量は見た目より軽い。だが、目の前に迫りつつある矢の大群を一掃することは難しそうだ。

短剣を出したつもりなのに、なんなのこれ。どうすんのこれ。

生死を分かつ状況にも場違いな思いに駆られる。状況は切迫している。俺は自暴自棄な思いで、槌を振り被り、無数の矢に対して振り下ろした。

「もう、どうにでもなれえ！」

俺の咆哮と共に槌が地面に触れる。物量に似合わぬほどの速度で振り下ろされた槌は耳を劈く程の轟音を響き渡させた。次いで、地面を抉り、瓦解させると同時に、爆風を生み出した。そのまま地割れを前方に飛ばす。岩盤が捲れ正面のメンテルに向かう。

槌を握り締め、両足を踏ん張る。その爆風に飛ばされそうになる俺の身体をその場に留まらせるために力を込めた。左足に激痛が走るが、構わず力を込めた。

その爆風は迫り来る無数の矢全てを弾き飛ばした。乾いた音を奏でながら墜落していく。

その間も地割れはメンテルに迫っていた。強風に動きを封じられたメンテルはその地割れを見据えるも回避の姿勢を取れずにいた、その上表情には焦燥感が現れていた。予想外の俺の反撃に余裕を無くしている。このまま行けば直撃だろう。傍から見てもその威力は命を奪うであろう程のものを秘めている。俺は声を張り上げた。

「避けるお！」

あらん限りの声量で空気を震わせた。俺の声に、はっとした表情を浮かべる。何かの魔力をメンテルから感じた、と同時にその位置が右方にずれた。メンテルが元居た位置を地割れが通り過ぎる。

硬質の物同士が擦れる音を聞く。俺の放った力は未だ地面を削り続け、後方の頑強な柵まで進んだと同時にその強行を止めた。

荒い息遣いの俺の視界に銀髪のエルフを認めた。

自嘲気味に笑みを浮かべる。敵に塩を送ってどうする。例え命を奪おうとも、負けるわけにはいかない勝負だったのに。

「なぜ、助けたの？ あなたエルフが嫌いではないの？」

「なんでってあんた悪い奴に見えなかつたし。死んで欲しくなかつたからな。それに俺にとってはエルフだろうが人間だろうが関係ないね」

「……けれど、アドラみたいなエルフは決して少数ではないわ。それでも、同じように言える？」

「それは人間だって同じだろうよ。いい奴も居るし、嫌な奴もいるよ。俺がアドラをみて思ったのは、エルフは嫌な奴等だな、じゃなく、嫌なエルフだな、って事だったしな」

「…そう。変な人間ねあなた」

「俺もそう思うよ」

自然と笑みが毀れる。自身の状態を省みることの無い己の愚かさ

に自嘲気味に言葉を並べ立てた。それでも、後悔は無かった。目の前のエルフを殺してしまうよりはマシだろうから。

「負けたわ。降参」

「は？」

「だから、私の負け。あなたを降参させるのは無理そうだし」

「ま、まあ。死んでも降参はしないつもりだったけど」

「でしょう？ それに、あなたには死んで欲しくない、って思っちやっただの。だから私の負けね」

「そ、そうか……。それでいいのか？」

「いいわよ。どうしようもないものね」

クスクスと笑う笑顔は何故か清しさを纏っていた。今まで感じていた切迫感は幾ばくも感じない。気になるが今はそのような状態ではないようだ。右腕の武具の重量を徐々に失う。

「そっか。ありがとな。それと」

「ん？なに？」

「ごめん。意識無くなりそう」

その言葉を最後に俺は意識を失った。その寸前でこちらに走り寄って来るエリス達を見た。目の前のエルフの少女は俺に手を差し伸べようとしていた。なぜか嬉しさを感じて笑みが毀れたのを感じた。

## 英雄

白い。

最初の印象はそれだった。見渡す限り、白い天井と床。奥行きはどうなっているのか見当も付かない。本来ならば、何らかの影が存在するはずだが、自身の影すら見当たらなかった。まるで、全てが発光しているかのような空間に佇んでいた。

「ああ。夢か」

そう夢に違いない。このような場所があるはずも無い。それに、俺の記憶は自らの力の使用により、意識が途絶えた瞬間で途切れている。ならば、間違いないだろう。だが、余りに鮮明な状況に困惑を覚えた。あまりに現実感がありすぎる。

辺りを見回す為振り返った。

「よう。やっと気付いたか」

そこには、全身黒色で彩られた服装の男がいた。先程は存在しなかったはずだが、赤い長椅子に仰々しく座っている。年齢にして二十代後半といった所だろうか。髪と瞳はやや明るめの象牙色でやや目立っていた。四肢は長く、それでいて引き締まった体躯をしていた。

「あんたは誰だ？」

俺は目の前にいる不審な人物に訝しげな視線を投げ掛けながら疑問を声にした。夢であろう、と定義したが、自分自身の解釈に自信が持てずにいた。それは、胸に去来する、ざらついた感情の起伏に

よるものなのかもしれない。俺は今迄に無いほど感情を表に出していた。

「まあ、そう思うよな。とりあえず、落ち着け」

「……落ち着いてはいる」

俺はその言葉の反面、落ち着きを失っている事に今更気が付いた。自分は常に冷静だと今まで思っていたが、そうでもないのだろうか。

「そうかい。そいつは悪かったな。で、俺は……そうだな。シャルでいい」

「シャル？」

「俺の名前だよ。シャルと呼んでくれ。……ヤマトだったけ？」

「呼び捨てかよ……」

存外、苛々する気持ちを抑えられない。何故かは解らないが、感情が溢れてきている。

「まあ、いいじゃないか。知らない仲でも無いんだぞ？」

「俺はあんたの事は知らないね」

「くくく、まあそうか」

なにが楽しいのか、シャルは嫌味な笑い声を上げている。不快感がじわじわ湧き出すのを感じずには居られなかった。知らない仲でも無い、それは失った記憶の中で見知った仲だったという事だろうか。

「ああ、悪い。そう睨むな。俺はお前の味方だ」

「……味方だと？」

「そうだ。色々困っているようだったからな。一つ手助けをしてや

ろつと思つてこうやって来たつて訳だ」

「何か知つているのか？」

「ほぼ全て」

相変わらず嫌味な笑みを表情に浮かべながらそう言い放つた。だが、不思議とその言葉には信頼が持てる気がした。それは、俺の知らない記憶から来るものなのか、それとも、目の前の男がそれ程の力を有しているのか。

「じゃあ、全部教えろよ」

「それは無理だな。その権限が無い」

「権限つてなんだよ……」

「それも教えられる立場に無いな」

「ちつ。じゃあ、何を教えてくれるんですかね？」

俺はいい加減イライラしていた。その要領を得ない物言いに、では無く、出所の解らない、この感情に。あからさまな不快感を滲ませた言葉をシャルにぶつけた。

「普段とは違つて感情的だな。違うか？」

「……何が言いたい？」

「それが当たり前なんだつて事さ。腹が立てば怒る。死に掛ければ、恐怖で怯える。悲しければ泣く。無気力になる。受容しきれない出来事に遭遇したら逃避を考える。当たり前だろ？　それが人間つてものだ」

その表情は、違うか？　とでも言いたげに此方の様子を探つて来ている。俺はそれを胸中で反芻し、不本意ながらも同意していた。そう、それは俺も思つていた事だったから。

「思い当たる節があるみたいだな。まあ、いい。それも詳しくは話せ無いしな。ただ、一つ言っておいてやる。今のお前が本来のお前に一番近いお前だ」

言葉遊びのように同じ言葉を違った意味で続けて並べ立てた。理解に苦しむ文章構造には深い意味合いがあるかのように感じた。だが、それは疑問以外の答えを導くことは出来なかった。

「それとな。お前の力についてだが、なぜ、記憶を糧に召喚が使えると思う？」

「なぜ、って勇者だからだろうか？ 神の恩恵と言っちゃつじやないのか？」

「はっ！ 有り得ないね。そもそも、神の所持する武器を例え勇者だろうが人間が扱える訳が無い。それこそ、触れた瞬間その力に耐え切れずに塵と化すだろう」

「……じゃあ、なんで俺は使えるんだよ」

「その発端は話せんが、召喚魔法を使用可能な要因は教えてやれる」

相変わらず解りにくい言い回しを使う。それは、こちらを試しているのではないかと思わせたが、そういう癖なのかもしれない。目の前の男にはそういう生来がありそうにも思える。

「そもそも、神の武具……まあ、神具としておこつか、を使うには多大な力が必要だ。お前たち人間で言えば、マナだったりオドだな。ただ、神具使用はマナでは補えない。なぜだか解るか？」

「……その属性が無いからか？」

「そうだ。意外に頭は悪くないみたいだな。マナって言うのは精霊の許可を得て使う自然物の生命力みたいなものだ。それぞれ属性がある。その中に、光は無い。例えば火や日の光は属性は火に属するからな。まあ、当然だが。そうになると、使用するのは……」

「オドか」

「そう。お前たち人間、あるいはエルフ。まあ。ドワーフもか。魔族以外の種族たちの持つオドでしか使用できない。神の子らの持つ特殊な力は往々にして光の力なのだからな」

「つまり俺はオドを使って召喚している？」

「そうだ。ただそれだけじゃ足りない。だからお前の記憶が失われているという事だ。お前たちの記憶はそれだけで力を持つからな」

「記憶が力を持つ……ってなんでだよ？」

「簡単だ。神が唯一干渉できないものが、お前たちの思い、記憶だからだ。例外はあるがな」

「例外については、話せないんだろうな」

「ああ。察しがいいな」

自分の思いもよらない情報の受容に混乱しそうになる、脳を無理やり稼働させる。そんな俺の様子に気付いているのか、シャルはや間を空けて言葉を続けた。

「本題だ。聞くが、記憶を喪失するのは嫌だろ？」

「当たり前だ。聞くまでも無いだろ」

「そうか。お前はそう思うのか」

意味有り気に呟いた言葉は俺の不安を駆り立てるのには十分だったが、その言葉の真意を問う事は徒労に終わるだろうと、半ば諦めの感情も芽生えていた。

「ならば、簡単だ。オドを増やせばいい。そうすれば記憶の喪失もある程度は防げるだろう」

「オドを、増やす？」

「そうだ。解りやすく言えば、鍛錬だな。そういう方法もあるのだらう？」



「いや、知らん」

「……そもそも、強大な力があれば何か危険があると考えるものだが。お前、考え無しだな。よく死ななかつたな、今迄」

「俺もそう思うから困りものだな」

お互いに何故か笑いが込み上げてきた。その原因は解らなかつたが、悪い気分では無かつた。ひよつとしたら、以前こつという風に笑い合うことも在つたのかも知れない。シャルに対して少々罪悪感を感じた。

「まあ、それはおまえ自身で見つける。それと、召喚に頼りすぎるな。お前自身が強くなる事が先決だな」

「ああ、わかつた」

オドは俺の世界では身近なものなのだから、その鍛錬の方法を探すことはそれ程難しくないだろう。ならば、シャルに頼ることも無いだろう。

「一つ聞きたいんだが、俺の身体能力は異常だと思つんだが」

「ああ、それね。それは簡単に言つと付録だ」

「付録つて……」

「それは、余計なお世話だと思つているがね。私は」

その表情は悲哀に、あるいは嫌悪に満ちているようなモノだった。少なくとも、負の感情を抱いているのは間違いないだろう。

俺の胸中を知つてか知らずか、シャルが長椅子から悠然と腰を上げた。その所作を見るだけで俺とは違う存在なのだと思わせる掴み所の知れない何かを感じた。

「そろそろ、お前の目が覚めるな」

「ん？ あ、これやっぱり夢だったのか」

「まあ、そうだな。睡眠中だと此方側と繋がり易いのでな」

「よくわからんけど。成る程」

「まあ、今は知らなくて良い。それじゃ、最後に」

「何だよ？」

そういうとシャルは俺に背を向けて歩き出した。徐々に俺との距離を取っていくその背中に視線を向け続けた。俺たちの隔たりは会話をする程短いものでは無いはずなのだが、シャルの声は明瞭に届いていた。

「俺の正体さ。俺は……」

言葉の続きを待つ。まさか、言葉がこれで終わりのはずは無いだろう。それでも、言葉間は長いものに感じられた。もったいぶっている訳でもないだろう。言い難いのか、それとも、未だに俺に伝えるか否かを葛藤しているのか。

「お前が最後に召喚した武具、大槌が俺だ」

「……なんだって？」

意味が解らないと思えるほど自身の脳の許容量を超える答えに戸惑いを隠せなかった。

武具に人格があるって事か？それとも、シャルが武具に変化するのか？ならば、様々な種の武具は全て人格があるというのか？

思考が混濁している俺の疑念をぶつける対象はもう居なかった。

## 鍛錬の日々

身体が凍える程の気温の中、俺の額には汗が伝っていた。心臓が脈打つ音が五月蠅い位に響いている。俺の両手には無骨な両刃の剣が握られており、その刃は鋭さを失っている。斬る事は難しいだろうが、当たれば無事ではすまないだろう。重みは余り感じない、それは俺の力のおかげなのだろう。両手の感触には違和感を感じる。普段慣れていない所為だろうが、あまりに馴染みの無い柄の感触は俺の心をざわつかせた。

辺りは広い空間が佇んでいる。自然物以外何も無い。アガムの後ろには様々な種類の武具が存在していた。どうやらここはアガムの鍛錬場らしい。

「どうした？ 来ないのか？」

目の前にはアガムが対峙していた。俺と全く同じ剣を握っている。両手で構えている俺に対して、アガムは片手で飄々と構えている。その立ち姿は熟練のモノを感じさせた。まったくの素人の俺でさえも実力の差を感じずには居られない。

どちらにしても、俺が何をしても敵うとは思えなかった。ならば、愚直にも前に出る事ですこしづつ感覚を掴むしかない。

俺はそう決め付けると、全力で地を蹴った。途中で剣を振り被り、肩の位置で留めた。アガムとの距離が一瞬で詰まる。俺の範囲に入ると同時に剣を振り下ろす。

「おっと」

軽口には似合わない俊敏さで俺の一撃を避ける。素人目に見て済んだのところで避けたかのように見えたが、その表情から見て、敢

えて済んでの所で身体をずらしたのだと理解した。

俺はすぐさま振り下ろした剣を斜め上に振り上げる。その速度は常人では避けることは不可能なものだった。加えて足元から切り上げる軌道は避けにくいはず。俺との距離を取るには間に合わないし、剣で受けるには近すぎる。

「甘い甘い」

あまりに場違いな口調で言い放ったアガムはその言葉どおり俺の一閃は完全に止めていた。俺は自身の目を疑った。俺の手の延長となるモノを足で踏みつけている。一つ間違えば重症を負うであろう一撃を有り得ない方法で停止させていた。足具には硬質な物でも仕込んでいるのか、刃の部分を足裏の中心で受け止めている。その圧力に耐えられず俺の剣は地面に埋め付けられた。

「無茶苦茶だ……」

「なに言ってたんだ。命のやり取りをする戦いに正攻法なんて無いんだよ！」

「はっ！　そうか、よっ！」

俺は最後の言葉を放つと同時に力を込め剣の上に存在する足ごと振り上げた。アガムは俺の意図を読んでいたかの如く体重を後ろに移動させ後ろに下がった。俺の膂力は受け止める枷を完全に失って、そのまま上空へと向かい俺の平衡感覚を失わせた。蹈鞴を踏みながら何とか感覚を戻す俺の様子を見ながら、アガムが深い嘆息を漏らす。

「はっつ。完全に素人だな、こりゃ」

「……うるさいな」

「お前、身体能力に頼りすぎだ。もっと、使いどころを考えろ」

「解つてはいるんだけど」

「それにその力は魔術によるものだろう？ 肉体強化の魔術の特化したもの、か？」

「俺自身もよくわかんないけど」

「……そうか。本来、魔術は永続しないものなんだがな。代替物を、まあ、マナとかオドだな、それを消費するものだからな。お前のその力もそうだと思うんだが。力の使用は意識しているか？」

「いや、なんとなく使っているというか、常時こんな感じと言うか「ふむ。まあ、出来ることなら要所のみを使うのがいいだろう。それも難しいなら力を抑える。おそらくオドを消費しているのだろうが、その量も抑えられるからな。力の調節も鍛錬したほうがいいな。都合の良い力というものは存在しないのだからな。当然だが、魔術無しの鍛錬のほうが効果はあるんだが……それも難しいか」

それは痛いほど感じている。召喚魔術然り。ならば、肉体強化、だっけか。その魔術も何かしらの危険を孕んでいると考えたほうが良いだろうな。

今更だな、本当に。

「ああ、解つたよ。有難う」

「へっ！ 礼を言われるほどのことじゃねえよ」

鼻頭を指先で搔きながらぶっきら棒に答える。意外に直球な物言いに弱いらしい。

「んじゃ、続けるぞ」

「ああ、頼むよ」

そう言つてお互いに獲物を構えた。

意識を失って数日、目を覚ました俺は記憶を失っていなかった。決闘の後、あの白い部屋でシャルと話した内容も鮮明に覚えていた。シャルのお蔭なのだろうか。その理由は解らなかった。

意識を取り戻した俺は傍に居たエリスの非難に満ちた表情に迎えられるつつも心底安堵した。俺を心配していたであろう少女の目尻に光るものを認めて改めて罪悪感を覚えた。シャルの言いなりになるつもりは無かったが、自己鍛錬をする必要がありそうだと考えた。

俺は頼りになりそうな相手がいないか、シルフィに尋ねてみた。それならば、父はどうだろうかというシルフィに詳しく聞いた。アガムの腕っ節は大した物らしい。昔取った杵柄だとか何とか。詳しくは知ることが出来なかったが、他に頼れる相手もいなかった。アガムに頼むことにした。実はメンテルに頼もうとかちよつと考えていた。その実力は戦った張本人の俺がよく解っているし、悪い奴じゃないように思えたし。まあ、流石に敵対している、もしくは、していた相手に助力を頼むには少々気が引けたし丁度良かったのかもしれない。

って事で今も鍛錬を行って居る訳だが、全く成長を感じなかった。実は開始から2週間たっていたのだが、初日から何も変わっていないように思える。たった2週間で急激に成長するわけも無いが、それでもこのままで問題無いように思えなかった。アガムも全く同じ思いだったのか、何か考えに耽っているように思えた。

「ん〜。やはり剣を扱うのは難しいのかもしれん」

「……というと？」

「ガキの頃から毎日のように鍛錬した奴等ばかりだからな、冒険者やら勇者は。お前みたいに全くの素人が勇者候補生だなんて信じられん。肉体強化のお蔭でなんとかなっているが、腕に覚えがある相手なら通用しないと思うぞ」

「じゃ、今から剣の練習したって意味無いんじゃ……」

「まあ、天性の素質と才能と血反吐を吐いても耐え切れる精神力、後は努力を怠らない勤勉さがあれば1年くらいでそれなりになるかもしれないが」

「全部ありませんが、何か？」

「そこは即答すんなよ」

「……ごめん」

肩を落として謝罪の意を伝えた。予想以上に武具の扱いは難しい。だからこそ、今迄ナツクルを使っていたんだが、俺の考えは強ち間違っていないかったらしい。

いや、ナツクルも結構扱いに難しかったけど。無理矢理使った感是否めなかったし。

「さて、どうするか……。やはり王道の剣を扱うべきかと思っていたんだが、違う武具を試すべきか、それとも……」

その言葉を最後に口を噤んだ。思考に耽っているみたいだ。俺の所為でアガムを困惑させていることに居心地の悪さを感じた。

「やはり、出来る限り肉体のみで戦う方法を考えるべきなのか。だが、そうすると獲物の長さで確実に不利になる場面も出てくるだろうしな……。仕方ない、色々試して適切な武器を探るか」

「色々試すって……」

「ひよっとしたら最初からしっくり来るものもあるかもしれない。無ければ、やはり剣、しかないな。大器晩成型なのかもしれない。希望的観測だがな」

俺自身何が向いているのか見当も付かない。そもそも、拳で戦うのもそれほどしっくり来ていた訳ではない。戦う、という事が身近でなかったはずの俺には自身の武器を選ぶことは難しかった。

「手間かけさせて悪いね」

「いや、これくらい気にするな。お前には恩があるしな」

「気にしなくていいけど……。というか、なんでアガムが決闘しなかつたんだ？ 俺より強いのに」

「まあ、長老は参加できないようになってるんだ。メシヤ様の提言でな」

「あ、そう言えば、メシヤ……。様ってプロルフエルドにいるんだっけ？」

「ああ。正しくはアルフヘイムにいる」

「どこ？ それ」

「三つの村の丁度中心に位置する塔だな。俺達エルフは本来はその周辺に住んでいたはずなんだが、今はメシヤ様と側近が住んでいる」

「あれ？ なんで？」

「まあ、メシヤ様は俺達エルフの先導者だからな。王とは違うが、その言葉は絶大な影響力を持っている。エルフの象徴とさえいいかな」

アガムは真摯な視線で語っている。エルフにとってメシヤはそれ程の存在なのだろう。呼び捨てしなくて良かったかも。

「さて、話はこのくらいにするか。やる事は山程あるんだからな」

「あ、ああ。お願いするよ」

そう言いつつ俺に槍を渡してきた。様々な武具がアガムの後ろに並んでいる。これから、あの量を試すと思うとうんざりしてくる。

俺は俺で目の前の問題が山積みだったが、エリスはエリスで悩んでいたようだった。そもそも、プロルフエルドに来たのはメシヤに魔王の事を聞くなって事が理由だったのだが、メシヤに謁見するのは



すぐには無理らしい。アガムに会わせて貰えるように頼んで、2ヶ月後に会えるようになった。本来なら数年は会えないとか。預言者つてのも大変なんだな。

エリスの魔術に関してもプロルフエルドならば解決できる人物が居るかもしれないと思い、その相手もシルフィに聞いてみた。ならば、ノース村のメンテルが最適だろうと進言してきた。プロルフエルドにおいてメンテルの魔力は群を抜いているみたいだ。ちなみにアドラは最初から除外されていた。なんか、それはそれで少し同情を禁じえなかったが。

そもそも、本来は村同士敵対しているわけではないのだから、他村の者を頼っても問題は無いとのことだった。

まあ、俺は当事者だから行きにくいけどね。

それ故、今はここにエリス達は居ない。一応護衛の為にメアが、案内の為にシルフィが連れ立っている。出発してから2週間経っているが、事前に帰るのが数週間掛かるかもしれないと言われていたから、心配は無用だろう。

解決するといいいけど……。

「戦いの最中に考え事とは余裕だな！」

気付くと目の前に剣の切っ先が現れた。俺は全力で身体を捻ってそれを避けた。鼻先三寸でなんとか避ける。

「あ、あぶねえ」

「鍛錬といえど、気を抜けば死ぬかもしれないぞ」

「……悪かった。集中する」

他人を気にかける余裕は無いみたいだ。今は自分の事で手一杯だ。俺は目の前に対峙している屈強な戦士を見据えた。

\*\*\*\*\*

あれから一ヶ月余り只管鍛錬をこなした。武具の使用以外に、魔術の鍛錬も行ったのだが、肉体強化の魔術は俺自身の意思に関係なく発動しているらしく、力の調節は難しかった。そもそも、通常の状態ならば力加減は出来るんだが、身の危険を感じる場面ではそんな事は出来そうも無かった。

俺達は途中で強化魔術の力調節は置いておく事にした。数ヶ月でどうにかなる物でもないと見切りをつけた所為だ。

「あゝ。無いな。無いわ」

「ああ。無いね。本当無いな」

俺達は、同じ言葉を只管反芻した。その表情には諦めと悲哀が満ちていた。あるいは、達成感のようなものさえ感じてしまっていた。

「どうするよ？ 全部試したぜ？」

「ああ。ある意味予想通り過ぎて泣けるね」

俺たちの周囲には今迄お世話になった武具達が散乱していた。剣、短剣、大剣、槍、槌、棍棒、斧、投擲、更には弓矢、果てには鞭なんてものまで試したのだが、全く向いていなかった。

「確かに時間が無さ過ぎる。そもそも、それぞれ武器において数日で扱いきれるはずも無し、ほとんどの者が一つに絞って鍛錬するものだから……。お前の素質に賭けて見たんだが」

眉根を潜め端正な顔立ちを鬩めたアガムは只管唸っていた。俺も唸っていた。二人で只管唸っている様子は傍から見れば、おかしい方々であろう。

「ダメだったみたいだな。ゴメンネ」

「ゴメンネ　じゃねえええ！」

俺の絶叫が辺りに木霊する。指示する相手を間違ったかもしれない。

肩で息をする俺をみてアガムは同情を含んだ口調で話しかけてきた。

「誰しも向き不向きってあるよね。うん。やっぱり堅実に剣の鍛錬していいんじゃないか」

「……そっすね」

「ん？　ああ、そういうえば、あと一つ試してなかったな」

「あ？　もついいよ……」

そういうアガムの掌に収まった武器を見る。それは見慣れた、否見知った物だった。確実に俺の知識に身近なものとして記憶している物。だが、実物を見るのは初めてだった為か、その美しさに見惚れた。

刀身の長さは俺の知っているものとは違い長い。だがその幅確か重ねという名称だったはず　は細く頑強さを感じない。片刃の曲がった刀身は美麗な象牙色の物質で象られている。柄の部分は飾り気が無い。握り易くするためか鮫皮は張られているが、見知った形ではない。簡易に巻き込んでいる。

簡単に言えば刀だった。長い刀身のそれは一目見ただけで俺の心を奪った。

「それ……」

「ああ。これ？ どうかの行商人から買ったんだが、扱いにくくてな。頑丈さも無さそうだし、一応置いては居たんだが……」

「……それどこの武器なんだ？ 誰が作った？」

「え？ ああ、悪い。分からないんだ。行商人も良く知らなかったみたいだし」

「そうか……」

「気になるのか？ これ」

「たぶん、それだ。俺に合う武器」

そういうとアガムから刀を受け取る。掌から伝わる感触はまるで自分の身体のようにしっくり来た。それは俺が望んでいた感触だったらしい。

「そんなんで、大丈夫なのか？」

「刀だ」

「ん？ なんだって？」

「この武器の名称だよ。刀って言うんだ。打刀、あるいは……」

「ん？ どうした？ ヤマト」

「そう、日本刀だ」

柄を握る力が増す。そう、日本の刀。おそらくは、俺の国。俺の生まれの国。そんな事さえ忘れていたのか。解っていたのに、気付いていなかった事実中空恐ろしさを感じていた。まるで、気付かせないようにしている何かがあるのではないかと思わせたからだ。

だが、俺の掌に伝わる感触は俺に安堵感を与えた。

「ふん。よくわからんが、それでいいのか？」

「たぶん。試してみたいんだが……」

「へっ！ いいぜ。来な」

その言葉を聞き、刀を構える。刀身は抜き身ではない。鞘に通したまま対峙する。鍔の部分に下緒を巻きつける。無作法だが致し方ないだろう。

獲物の長さは俺の身長を半分を超える。正眼に構えても振り回されるかもしれない。初見で正攻法を辿るのは常套ではあるが、俺の強化魔術を鑑みるならばやはり、下段、脇構だろうか。

俺は右足と右肩を引き半身になる。刀を腰下まで下ろし、切っ先を後方に向けた。脚力を活かした攻撃ならばこの形から抜き放つことと出来る抜き胴か、或いは霞の構えからの刺突だろうが、突きは一撃必殺。当れば相手を沈めるが、この戦いで使うには危険すぎる。命をやり取りをする戦いではないのだから。

俺の圧力を感じてか、先程とは打って変わって無口になるアガム。その様相に切迫感を感じる。あるいは集中しているのか。距離はそれ程遠くない。お互いが一瞬で詰める事の出来る距離。

摺り足で距離を詰めるか、それとも瞬間的に距離を詰める脚力を使うのか葛藤していた。俺の葛藤を読んでか、アガムが動いた。速い。俺の脚力に劣らないほどの速度で此方に迫ってきた。

アガムの拳動一つ一つを逃さないよう見据え、相手を迎え撃つ姿勢を見せる。アガムの距離になりそうになる寸前で瞬間的に前方に踏み込む。刹那、アガムの表情に驚愕が浮ぶ。俺が踏み込んだ瞬間は針の穴を通す程困難なものだったらしい。よほど、虚を付かれたのか、動揺が一瞬見て取れた。

俺はその機会を逃さないとばかりに抜き胴を放つ。アガムも呼応して振り下ろしてくる。本来ならば、振り上げよりも振り下ろしの方がやや速いはずだが、俺の方が数瞬速い。ほぼ同時にお互いの武器がお互いに触れる、かに見えたが、アガムの剣が突如加速する。

俺の刀が触れる寸前で右肩に激痛が走った。急激な感覚の往来に体中から力が抜けた。思わず片膝を着く。

「ぐっ！」

「や、やばかった。今のはマジで」

「おい。今の何だよ」

「わり。強化魔術使った」

アガムが強化魔術を使えることも驚きだったが、その効力は俺を超える物だった事の方が驚きだった。

「というか、魔術も使っていない状態で俺と同じくらい速いってどんな反則だよ」

「鍛え方が違う！」

「そういう問題なのか……」

仁王立ちで此方を見下ろすアガムに嘆息する。反則的な強さを持つこの精悍な青年から学ぶ事は多そうだ。右手に感じる半身のような感触に心を落ち着かせながら、身体を労わった。

## エリス（前書き）

エリス視点です。

## エリス

いつも以上に気持ちがざわつく。今迄感じることの無かった感情を彼の所為でいつも抱いてしまうのは何故なのだろうか。その理由は判らないが、その感情を抱いた原因は解る。

二度目。二度目なのだ、彼が意識を失うのは。それは、決して軽んじて良い事ではない。魔術を使用した後に意識を失うなど通常では有り得ないのだから。

本来、魔術はマナ、オドを消費して使用する。マナは精霊により制限されているが、オドは制限が無い。それはつまり、自らのオドの限界量を知る事は必須であるという事だ。通常は軽い眩暈や身体に異常を来すので本人が限界に気付くものなのだ。だが、彼は違っていた。自身の限界を超えたオドの消費によってその意識を途絶えさせている。

危険なのだ。意識を失うほどのオドの欠乏により身体に、或いはその脳に障害を齎す事も有り得る。だからこそ、召喚魔術の使用に賛同できなかった。彼の、ヤマトの事が心配だったから。

私は大きく嘆息する。これ程、心を揺さぶられるのは初めての事だった。故に戸惑いを隠せなかったのもまた事実だった。自身の感情はどこから来るものなのか、感情の波が大き過ぎて出所が判らなかつた。

「まだ怒っているのかい？」

仏頂面で足を機械的に動かす私を見て、メアがこちらを伺うように声を掛けてきた。

彼女はヤマトと知り合つた事から仲間になつたのだが、その理由が未だに解らなかつた。勇者は徒党に二人はいない。それは常識であり、逸脱することに利益を見出すことは難しかった。今のメアの



立ち位置は少なくとも勇者のそれではない。何を求め、何を望んで今ここに居るのか。それを知りたかった。けれど、積極的に訊ねる事は気が引けた。

私達に危害を加える様子は全く無いのだから大丈夫だと思うけど。

「いいえ。別に怒ってないわ」

「そうかい。まあ、あれは仕方なかったんじゃないかな。あまり責めないであげたら？」

「……そうかもしれないわね」

そういうメアは私とヤマトを気遣う感情が見える。きっと、悪い人じゃないんだろう。けれど、少し苦手意識を持っていた事は、自身には隠し通せなかった。

今私達は、ノース村のメンテルに会いに向かっている最中だった。距離はそれ程無いらしい。聞くと一両日中には着くとの事。その分軽装で出立した為、荷物は少なかった。

前を見据えると、エルフの少女の銀色の髪が風に靡いているのが視界に入る。女の私でも見惚れるほどの美貌を持つ種族。けれどその端正さの所為か親近感を抱きにくいように思えた。元々、人当たりのよくない私にとっては苦手意識を持つことは仕方なかった。

私の視線を感じてか肩口に顔を此方に向けるエルフの少女の表情は温和なものだった。口元に笑みを浮かべている様子は絵画のようだった。

私は居心地の悪さを感じてしまっていた。一方的に相手との間に壁を作っているのは私の方なのだろうけど、生来の不信感を拭うには時間が必要なかもしれない。

そういえば、ヤマトには余りそういう感情を抱かなかった。何故

だろう……。

ふと契約の瞬間が脳裏を過ぎる。それは、私の顔色を赤く染めるには十分すぎる記憶だった。あの、出来事は忘れよう。きつと、忘れることは出来ないのだろうけど、それでも思い起こすと平静で居られなくなる。けれど、なぜ、動揺してしまうのか、それはただ羞恥から来るものなのかそれとも……。

私は自身に問いかけるもその答えを私自身持ち合わせていなかった。

\*\*\*\*\*

「ええ。構わないわよ」

私達の依頼を快く受けたメンテルと言う少女は柔らかな笑みを浮かべている。

先の決闘での印象が強かったので、礼を欠いた感情だとは思ったがその表情に違和感を覚えてしまった。そもそも、ヤマトが力を使った原因はこのエルフなのだ。ならば好印象を抱けと言われても難しい。けれど、他に頼る相手が居ない私は頭を下げて礼を示す。

メアは一人距離を取って此方に視線を送っている。此方に向かう途中でもシルフィに対して無関心を通していた。やはり、エルフに対して猜疑心を抱いているようだ。過去になにかあったのだろうか詳しく聞く気にならなかった。

「えと、あなたはヒーラーなのよね？　それで回復魔術しか使えないと」

「ええ、その通りよ」

「……ちよつと、使ってみてくれる」  
「解ったわ」

そういうと、メンテルが自身の真つ白な肌に帯刀していた短剣を滑らせた。白い肌に赤い筋が浮ぶ。私は少女の行動に驚きを隠せずに居たが、メンテルが魔術を使うように促すのを見ると、いつもの様に手を翳し、回復魔術を使用した。

私の掌から淡い光を放つ。温か味を感じるそれは私自身の心も癒しているようだった。頭に相手の傷の具合が浮ぶ。やはり、薄皮を斬った程度の様で、かなりの軽傷と判断した。私が手を翳した傷の部分が瞬時に塞がる。

「はい。終わり」

「……おかしいわね」

「え？ 何かおかしかったかしら？ ちゃんと治っていると思うけど」

「治ってはいるんですけど……」

私の治療が間違っていたのか、ひよつとしたら、メンテルの身体に悪影響でも与えてしまったのかと思ひ改めて手を翳してメンテルの状態を診るが特に異常は無さそうだった。

そんな私の様子を見てシルフィもメンテルも首を捻っている。

「そうじゃないわ。あなた、回復魔術は誰に習ったの？」

「えと、触りだけ教えてもらって、その後は自己流よ……」

「やはりおかしいわ。本来魔術は総じて呪文を必要とするものよ。物に付与された魔術や、神力はその限りではないけど。あなたはただ手を翳して魔術を使った」

「つまりどういう事？」

「有り得ないのよ。使える筈がないの。おそらく回復魔術しか使えない理由もそこに在るみたいけど」

メンテルの表情は訝しげで、此方を探るように視線を走らせている。

「じゃあ、何故使えるのかしら？」

「そうね……。あなた自身回復魔術に特化した性質を持っているか、或いは神力に属した回復魔術なのかもしれないわね。けれど、あなたは従者なのよね？」

「ええ、そうよ。だから生まれながらにして神力は使えないようになっている筈なのだけれど……」

「制約に歪みがあるのか、あなたの力に耐え切れて居ないのかもしれないわね。それなら、納得がいくわ。相手の、ええと、ヤマトだっけ？ 彼に異常は無いかしら？」

ふと、昔聞いた勇者と従者の関係が浮ぶ。それは従者の力に耐え切れず勇者が自我の崩壊を起こしたというものだった。その話は現実感に薄れ、聞き流していたのだが、今となっては身近に感じてしまっ。

「大丈夫だと思うけど……」

「そう。まあ、力の重圧に耐え切れない勇者は目に見えて異常が確認できるらしいから、何か異常を感じたら強制的にでも契約を切る方がいいかもしれないわね。お互いの為にも」

その言葉は私の記憶から消える事は無いだろう。それは、私とヤマトが近くに居ることが出来なくなる前提のものだから。契約を解除するには強制的に解除するしかない。

私は首から下がっている宝石を見据える。これがヤマトとの繋が

りの証。それを文字通り断ち切るのだ。そうすれば契約は簡単に解除できるはず。そして、二度と契約は出来ない。それはヤマトの傍に居る必要が無いという事だ。私ではない従者と再契約するのだから。

「大丈夫ですか？ 顔真つ青ですよ……？」

私はシルフィに言われるまで自分の状況に気付かなかった。其れほどまでに動揺していたのだろうか。それは、何故……？ 今迄会って来た者全員に、無感情で何を考えているか解らないと言われ、私も他者とのつながりを出来るだけ希薄にしていたのに、何故こつも心が揺れ動くのか。

私は物ではない、人間なのだ。感情があるのは当たり前なのに、その感情を目の当たりにすると動揺を隠せなかった。

「……大丈夫よ」

その言葉はメアを安心させるには不十分だったが、それでもそう言っしか無かった。まだ、感情の抑制が出来ていない私に對して、メンテルは言葉を繋げた。

「けれど、診た所、回復魔術の効果をあげることが出来そうね」

「え？ けれど、どうやって使っているのかも解らないのに」

「ん。たぶん、基本を飛ばして応用しているから駄目なんじゃない？ まずは基本知識と流れを覚えて実践して見たら、効果は上がると思う。まあ、逆に全く使えないかもしれないけど。あなたの魔術が神力として機能しているなら、通常の回復魔術とは属性も何もかも違つし」

「試してみる価値は在りそうね……」

「ええ。それにもし効果が上がったならあなたの力は神力ではない

事も証明されるわ。ならば、契約を解除する必要も無いしね」

こくりと頷き同意を表す。どちらにしてもこのままでは問題だ。いずれ仲間が重症を負ったら、怪我以外の病気、毒、麻痺を負った時に無力でいたとき自分自身を許せる自信は全く無い。ならば、進むしかない。例え八方塞な状況に陥ったとしても、少なくとも覚悟は出来るのだから。

私の決意の表情を見て、メンテルも満足そうに頷いた。けれどその表情は同情心を薄っすらと感じさせた。

解っている。その表情はもう見慣れているのだから。私が感情を動かすことは無用だ。少なくとも今の私は己の不遇を嘆くつもりは無いのだから。

## 魔王討伐の道程は

俺が鍛錬を始めて2ヶ月、エリス達も戻ってきてお互いの準備は万端だった。

短期間の鍛錬で少なからず成長を感じた。其れは刀が上手く俺に馴染んだ所為だろう。ひよっとしたら、俺の身近な物だったのかもしれない。自然と刀を使う方法を身体が覚えていた気がした。それはアガムも同じだったようで、只管、刀を用いた鍛錬をこなした。

ちなみに刀にもナツクルと同じ魔術付与が成されて居たらしく、その強度も心強い。アガムはそこら辺気付かなかったみたいだ。魔術付与にはあまり魔力を感じないものが多いから、仕方ないことなのだけれど。

驚くべきはエリスだった。出立前とは別人のように、回復魔術の腕前を上げたらしい。以前に比べ、重症の相手にもその効果は発揮する事が出来るらしい。ただ、解毒、解呪などの魔術はやはり使えなかったみたいだが、それでも非常に心強く感じた。

俺達は待ちに待ったエシヤとの謁見を控え、アルフヘイムの塔を目の前に立ち尽くしていた。

「高いな」

「高いねえ」

「ええ。高いわ」

三者共同様に塔を見上げる。高い。この世界の建造物でこれほどまでに高層の物を建築する技術があるのか甚だ疑問だった。

そんな俺たちの様子を見て、クスクスと笑いを上げているシルフィが説明をしてくれた。

「この塔はつねに魔術によってその外装を保っているんです。このような建物を建造する技術はエルフにはありませんから」  
「というより、人間にもないんだけどね」

そうメアが付け加える。その言葉には依然感じていた棘はあまり感じなかった。一緒にいた時間が長かった所為か今ではそれほど嫌悪感を持っては居ないのだろうか。

「そうですか。この先何百年後にはそういう技術もあるのでしょうか」

「夢のような話だね」

「あら。夢を持つことは大事だと思いますけど」

「まあ、あたしもそう思うけどね」

そう話す両者の間には友情に近いものを感じさせた。こういう風に種族間のいざこざが無くなれば平和が訪れるのに。それは魔族との間には不可能なのだろうか、と思う自分はやはりおかしいのだろうか。

正門前には門番だろうか、物々しい武装をしたエルフが門前に位置取っていたが、シルフィの顔を見るや否や即座に正門を開いた。俺達はシルフィに連れられて塔の中に足を踏み入れた。

中は意外に広く、幾つかの扉が目に入った。従者達の部屋だろうか。

「こっちです」

シルフィは俺たちのを引き連れて正面に見える魔法陣へと向かった。勝手が解っているのは、以前この塔に来た事があるからなのだろうか。

足元に紋様が浮んでいるのが解る。床から発光している其れは俺



たちを下から照らしていた。どのような効果があるのか、と、考えていた所、身体の体重が一瞬無くなる感覚を覚えた。まるで、急に高所から飛び降りたときの浮遊力を感じ思わず声が出そうになる。数瞬後、周囲の景色は変わっていた。目の前、少し離れた場所に着座している相手を見つける。

「お待ちしてりましたよ。勇者様」

朗らかな笑みを浮かべ此方に話しかける少年はエルフでは無かった。顔立ちは人間に近く、だがその存在力は平凡なものとはかけ離れているかのように感じ、俺の心をざわつかせた。幼いといっても過言ではないだろう。恐らくは十代前半くらい、その顔立ちからあどけなさを感じる。

傍には仰々しい格好をした女性が佇んでいた。お付きの人なのかもしれない。

「えと、君がエシヤ……様？」

「ええ、そうですよ」

丁寧な物腰と容姿が合致していないのが、俺の違和感の原因だろう。少年からは年相応とは居えない、悠久の時を感じた。なにかを悟っているかのように、所作は落ち着きに満ち、また敵かでもあった。

「ああ、呼び捨てでも構いませんよ。こんな年下に対して様を付けるなんて、抵抗があるでしょう？ 特にあなたは」

「そんな！ 呼び捨てなんて無礼にも程があります！」

「いいんだよ。メイシヤ。僕が構わないと思っっているんだから」

メイシヤと呼ばれた女性が声を張り上げる。エシヤの言葉に納得

は言っていないが従うしかないのか、口を嚙んだ。呼び捨てにする事は余程の事なのだろう、此方を睨みつけるその瞳には殺意さえ感じる。俺は平静を保ったままその瞳を見返した。

しかし、先の言葉が気になった。その言葉には裏があるのだろうか。何かを知っていると思わせた言動に思わず問いただしたくなる。だが、今は優先するべき質問があるはずだ。

「ああ。えと、じゃ、エシヤ。聞きたい事があるんだけど」

「はい。魔王の居所と、他にも幾つかあるみたいですね。けれど、全部明確に答えることは難しいですよ？」

全てを知っているのか、その言動には確信めいたものを含んでいた。だが、俺の望みをそのまま理解しているというのも些か理解に欠ける。予言者なのに、その道理を曲げてしまっている気がするし、俺の考えすぎなのかもしれない。

「今は少しでも情報が欲しいし、手がかりになれば万々歳だと思っているから大丈夫だ」

「そうですね、解りました。では、まず魔王ですが、クリミアに居ますね」

「クリミアに？　なんでですか？」

「さあ、僕は飽くまで予言者ですから、自分が望んだ情報を全て得る事が出来る訳ではないのです。所在地は解りますが、理由までは解りません」

途中エリスの問いにも礼儀正しく返答するエシヤの表情は芳しくない。それは、魔王に対する憂いなのだろうか。

「えと、魔王に対する予言を伝えますね」

頭に疑問符を浮かべながら、事の成り行きを待った。言葉の意味が解らずにいた俺たちに構わず言葉を繋げる。

「魔王再来の地はクリミア。彼の者と相対するは同地にて。されど其れは互いの崩壊を意味するもの。忘れてはならない、それは勇者の道程である事を」

「崩壊…つて、なんででしょう？」

俺の疑問をエリスが代わりに恭しく言葉に表した。やはり、エシヤ相手には敬う姿勢を保つみたいだ。何う様な姿勢の中に不安が見え隠れしている。エリスにはいつも心配を掛けているようで、罪悪感を感じずに居られなかった。

「解りません。そもそも僕の予言は言葉通りでは無い事も多いので……」

事の真偽を知る事が出来なかったのは幸か不幸か。事前に事実を知ることが出来れば、或いは対策も取れるかもと言う、俺の淡い期待は露と消えた。

気を取り直して、浮んだ疑念を晴らすため言葉を繋げた。

「そもそもが、勇者つて沢山居る訳だろ？ それ俺たちに伝えても意味無いかもしれないよな」

「いいえ、あなたが唯一の勇者です」

そう、即答したエシヤの言葉には一片の曇りも無かった。まるで信じきっているかのように、その言葉は疑念と言う穢れを知らなかった。

「即答するね」

「彼の者。漆黒の瞳に漂うは決意の光。その力は欠乏と共にある。恐れてはならない。勇者の後ろには道など存在しないのだから」

「予言か……。文面は途中からよく解らないけど、最初の漆黒の瞳、つてのが俺つて事か？」

「ええ。この世界で恐らくあなた以外に黒い瞳の者は存在しませんから。それに一目見てあなただと解りました」

「なんでだよ？」

「勘です。というより直感でしょうか。僕こつこの外した事無いんですよ」

「なんか説得力に欠ける定義だな」

はにかんだ笑顔を浮かべる様は年相応の少年のようだった。思わず俺も苦笑を浮かべ返した。

「僕は預言者つて言われていますけど正確には違うんです。正しくは、的中率の高い占い師みたいなものだと思つて頂いて結構です」

「どこか違うのですか？」

「予言はこれから起こる出来事を提言しますが目的が不明瞭なんです。要は望んだ事全てが明確に分からないつて事です。占いは様々な部分を望んで知ることが出来ます。けれど、目的は明確なんですけど、経過が曖昧ですね。しかも必ず的中するわけでもないです。僕の占いも百発百中では無いんです」

「便利だが、不便だかわからんな」

「ははは、僕もそう思いますけど。多くの方々はそうは思わないみたいですね。困つた時には何かにすがりたいモノなのでしょうね」

俺とエリスの言葉に自嘲気味な笑みを浮かべながら返答するエシヤに対して悲哀を感じた。少年の立場を鑑みると、同情を禁じえない。年端もいかない少年には荷が重いことも多いだろう。だが、逃避は叶わない。世界が彼を離しはしないだろうから。

「それで、向われるのですか？」

「それしか無いみたいだしな。行くよ」

「そうですか……」

「ああ、ありがとう」

「有難うございました。その、本当に報酬はいいのですか？」

相談料として報酬を渡すべきなのは、という疑問は抱いていた。そもそもが、エシヤは相談に対して見返りを要求しないらしいのだ。事前に聞いていたが、改めてエリスが問いかける。

「ええ、必要ありませんよ。僕はここから出ませんし、お金が在っても使い所がありませんから」

「そうですか……」

「道中、楽な旅では無いと思いますが、お気を付けて」

「ああ、それじゃ」

その言葉を最後に俺達はその後にした。

帰り道、二人に問いかける。それは、当然の疑問だったはずだ。

俺は一拍置いて言葉を発した。

「……それで、一緒に行く？ 俺は行かなきゃならない」

そのような気がする。魔王を倒す。その思いは常に抱いている。

そして、逆を言えば其れしか無い。ならば、例え不服だろうが、従うしかない。

だが、二人は違う。其処まで危険を侵す必要は無いのだ。ならば、仲間が無くなる事も有り得る。そして、俺はそれに同意するだろう。

「え？ 行くわよ。当然」

「あたしも行くよ。旅は道連れってね」

二人の言葉は期待して居た通りの物で、俺の心を軽くした。不安だったのだ。一人で魔王と戦うのが。けれど、無理強いをする事は出来ない。だからこそ今の問いには勇気を奮わずにいられなかった。当然の如く同意してくれた二人に感謝の思いを抱き、自然と言葉に出た。

「そか。ありがとう」

\*\*\*\*\*

塔からノース村に帰るとアガムに今日は泊まる様に勧められ言葉に甘えることにした。やはり旅の出発は朝からする方がしっくり来るし。

俺達の前にはシルフィの手料理が並んでいる。最後の晚餐といったところか、豪華な料理は俺の胃袋を刺激した。

「どうぞ、召し上がってください」

シルフィの言葉を聞くや否や、メアの手が俊敏に動く。まさに疾風迅雷。食事には目が無いのは周知の事実だった。あれだけ食べて太らないのは凄い。

俺も其れに倣って、食事を進める。

「なあ、ヤマト。お前、もう、魔王と対峙する訳？」

「ん。そのつもりだけど……」

「自殺行為じゃないか？ 俺より弱いのに」

そういうアガムの言葉には嫌味は感じない。純粹に現状から考慮して、心配になったのだろう。事実俺はアガムより弱い。だが、それはただ純粹な戦闘能力、という点でだ。

「まあ、なんとかなるんじゃないかな」

「召喚魔術か？」

俺の考えを読み取ったのか、胸中を覗き込まれた気がした。だが、俺の口振りから察すると、答えは一つしか浮ばないのも事実だろう。

「そうなるね……」

「そうか……。そうだよな」

召喚魔術を使って意識を失っていたことはこの村のエルフなら全員知っている。ならば、その危険も解るだろう。あるいは、意識を失う程度で済むと思っているかもしれないが、魔術国家ブルフェルドで魔術に関して知識が乏しい者も少ないだろう。ならば、その危険性も理解しているのかもしれない。

「まあ、頑張れよ」

「……うん。ありがとう」

俺の思いとは裏腹にアガムはそれ以上追求してこなかった。内心、安堵する。ひよっとしたら、止められるかもしれないと思ったからだ。けれど、アガムは溜飲を下げた。その心を読むことは俺には出

来ない。

「所で、お前の仲間ってこの二人だけだよな？」

「ん？ そうだけど」

「じゃ、シルフィも連れてけ」

「へ？ いいの？」

「いいよ。構わんよ。役に立つと思うよ。家事は得意だし、魔術も、戦闘もそれなりにこなせるから。なんなら、嫁にでも貰ってくれてもいいよ」

「ちよおおつと！ お父さん！」

沸騰しているかの如く、顔は熱を持っているみたいだ。羞恥の余り、食卓を両手で叩いている。その拍子に美味しそうだと思っていた、スープが毀れるのを見て、メアががっくり頂垂れるのを視界に見つけた。あの人はなにをやってるのか……。

「まあ、それは冗談として。よかったら連れて行ってやってくれ」

「俺は大歓迎だけど……」

メアとエリスに視線を送る。二人とも俺に返答とばかりに快く頷いてくれた。エリスはともかく、メアも了承してくれるとは思っていなかったなので、やや面食らった。

「んじゃ、決まりだな。娘を頼む」

「あ、あれ。私の意見は完全無視なんですか？」

「え？ 嫌なの？」

「い、いやじゃないです。むしろ歓迎と言っか、嬉しいというか、頑張りますというか」

俺の問いに即座に否定するシルフィは言葉に整合性が欠けている。



しどろもどろで見ている可哀想になるくらい動揺していた。この子、  
圧迫に弱いよな……。

「そか、それじゃ、よろしくね」

「よ、よろしくです。頑張ります」

頭をペコペコ下げながら、銀髪をふわふわさせている。俺達は何  
故かお互いに握手した。とにかく仲間が増えるとは心強い。信頼で  
きる者が多いに越した事は無いのだから。

図らずも、俺以外女性なのが気になるけれど……。

目の前にはどこまでも高い塀が俺達の行く手を阻んでいる。その頑強な造りは何者の進入をも許さない確固たる意思が感じられた。大通りの中心には大門が見えた見張りが数十人程。閉鎖的な国とは聞いていたが、ここまで入国が難しいとは思っていな無かった。

俺達は息を呑んで入り口へと向かった。

「止まれ」

その声に足を止める。そもそもが、門が開いていないのだから、止まれも何も無いと思うのだが、門番は俺達に威圧的な態度で接してきた。

「入国許可証を提示しろ。それ以外は入国は認められない」

「ああ。はい、どうぞ」

そう言うと、俺はポーチから書類を提示した。それを見た瞬間、門番の顔色が一気に変わる。姿勢を但し規律正しく敬礼した。

「はっ。失礼致しました。どうぞ、お通りください」

「ども」

俺達はその言葉を皮切りにクリミアへと足を踏み入れた。

ここに来る経過を説明しよう。まずは、ブルルフェルドの魔導士達が集まって俺達をクリミアまで転移してくれた。どうやら、エシヤの指示らしい。加えて、エシヤから使節団として勅命を受けた、という体で入国させてもらったって訳だ。国王と謁見しなければな

らないのが億劫だったが、致し方ないか。

それに、世界中に魔王の事を知らせるのも大事だ。そもそもが、ブルフエルド国民は国外に出ない。それはエルフ達にとって国外の人間達に対する嫌悪の表れなのだろうか。詳しい理由は解らないけど。とにかく、シルフィは例外だったみたいだ。だからこそ、人間の俺達は適任だったというわけだな。

城門を入るとそこは、建物が混在していた。この世界に沿わない町並みはどちらかというと俺の知っている俺の世界に近い町並みのように思えたが、建物はやはり自然物を元に造られている。加えて、人通りが多い。その様相は様々で、町民の様な者から、物々しい武装をした冒険者らしき者、果ては人間以外の種族も入り混じっていた。エルフやドワーフも居た。

ドワーフは俺の想像していた髭面の強面では無く、子供の様に低めの身長にくりつとした瞳をきよきよしている。肩に担いだ体格に会わない槌はドワーフにとって大事なものののだろうか。

思ったより活気があるみたいだ。閉鎖的というよりは入国に厳しただけなのだろうか。軍事国家というから想像ではもっと厳粛とした内情だと思っただが、そうでもないらしい。

「じゃあ、早速、城へ行きましょう」

「ああ、そうだな」

「そうだね。先に厄介なことは済ませておくに限るからね」

「私も賛成だわ」

仲間達全員の賛同を得られた俺は満足気に頷いた。まずは正面奥に控えている巨大な建造物に向かった。

\*\*\*\*\*

謁見の間に通された俺達は王の到着を待っていた。どれくらいの時間が経っただろうか。しばらくすると豪華な着装をした女性が玉座の方に向かってきた。その容姿は見れば振り返るほど、整っており、まるで、エルフのように思えた。だが、人間であることは間違いない。

女性の傍には鋼鉄に身を包んだ屈強そうな兵士が数人規律正しく立っている。

「王はただいま不在です。代わりに私が伺いましょう。そなたが、使節の代表ですか？」

王妃、だろうか。その割には若いように思えたが、王の后には若い女性を迎える事もそう少なくないだろう。

俺の方に視線を送ってきている。仲間の中で俺が中心に、加えて俺一人一歩進んで位置している事からの言葉だろう。

「ええ、そうです」

「……そうですか。それでエシヤ様からのお言葉はどのようなものなのですか？」

俺は鷹揚に頷いた。そして、腰に携えたポーチからエシヤから預かっていた書簡を取り出す。広げて中身に視線を滑らせると口籠ってしまう。

「どうしました？」

「い、いえ。失礼致しました」

俺は焦燥感と葛藤しながら、目の前の書簡を握る力が強まるのを感じた。ここに来るまで中を確認しなかったのが悔やまれる。というより、その情報は俺の想像を遙かに超えた内容だった為か汗を浮かべる。俺は腹を決めて、その文面を声に出した。

「……魔王はクリミアにて世界を混沌に陥らせるための策略を練っているようです。どうか目の前に居る漆黒の瞳の少年の助力をして頂くようお願い致します。彼は間違いなく……勇者です」

勇者だと俺自身の口で述べることになるとは思わなかった。おこがましいと言うか、自信過剰なのではないか、と言う思いが胸中に浮んでいた。そもそも、魔王討伐の動機は俺自身のためなのだから、罪悪感が浮ぶのも仕方が無いことではないだろうか。

「……なるほど。わかりました」

そういうと王妃、だと思われる女性は俺達の後ろに視線を送った。後ろから徐々に迫る金属音は兵士の鎧の鳴声か。それは俺の鼓膜を揺らし、嫌悪感を抱かせた。その音が暴力の音だと感じた。当たり前なのだが、それは殺し合いを前提に考えた物なのだ。今まで幾度も聞いたはずなのに、その音は俺の心を正常にしてくれない。

俺達の真後ろで金属音が止まる。と、同時に首筋に鋭い硬質の物の感触を得た。

「連れて行きなさい」

首を動かさず、首筋に視線を送る。剣だ。その刀身が俺の頸動脈にびたりと寄り添っている。気配を感じるにエリス達も同じ状況のようだ。何がなんだか理解できない。脳の処理能力を完全に超えた

出来事に呆気にとられて事の成り行きを見据えていた。

刹那、首筋に衝撃を感じた。と、同時に意識が途切れ、視界は漆黒に包まれた。

\*\*\*\*\*

自身の荒い息遣いに目を覚ます。肺が痛む。急に空気を肺に送り込んだ所為か、掠れた声が喉を鳴らした。辺りを見回すと、其処は石造りの個室のようだった。狭く、暗い。それは余程人間の住む場所とは思えない。だが、視界の端に見える寝具の様な物を発見した時に理解した。

「……………牢屋……………か？」

想像、あるいは創造の域を出ないその空間は現実感に乏しく、今の現状を把握するには受容出来る範囲を超えていた。未だ痛みを感じる肺を無理やり働かせ、深呼吸をする。何度か行くと気持ちも落ち着いて来た。

冷静になつた脳を正常に働かせる。まずは、牢屋に限なく視線を動かす。在るのは、寝具と簡易な便所のみ。両手をなんとか広げることの出来る広さの部屋の正面には頑丈そうな扉が見える。それだけだった。

さて、どうするか。すぐさま、ここを脱出するか。力尽くで出来ないことも無いだろう。

それとも、しばらく様子を見るべきか。そういえば、腰の刀は当然の如く取り上げられている。ポーチも無い。身に着けていた服だ

けはそのままみたいだ。クリミアはブルルフェルドに比べて温暖気候だからトレンチコートも売ってしまった。今は細身のパンツにシャツと薄着だ。それでもこの牢屋では問題無いほどの体温は維持できるといい。

「しばらく、様子を見るか……。皆なら大丈夫だろうし」

そう信じる。現状を把握しても居ない状況で動くのは危険だ。俺にとっても、仲間達にとっても。

取りあえず、今は身体を休めよう。清潔な布団ではないが、無いよりはマシだろう。俺は寝具に横になり、仮眠を取った。

\*\*\*\*\*

「起きろ！」

まどろんだ意識の中、確実に聞こえた恫喝染みた言葉は俺の意識を繋げた。反射的に身体を起こす。

視線を扉に向けると、何時の間に牢屋内に入ったのか数人の兵士が俺を見下ろしている。

「立て！」

端的に命令を下す。効率が良いやり方だ。有無を言わさないその物言いに多くの者は付き従うだろう。それは、恐怖か諦めが動機だろうが、俺はどちらも持ち合わせては居なかった。内心、やっと来たか、と思っていたほどだ。これで、現状を把握することが出来そ

うだ。俺は素直に命令に従うと、成されるがまま、手錠と足に鉄球を付けられ、牢屋の外に連れられた。

しばらく、歩く。本来なら引き釣り足首を傷めそうなほどの重量を足に感じるのだろうか、ほとんど抵抗を感じる事無く歩を進める事が出来そうだが、敢えて重みを感じるように歩いた。

辺りは俺以外のものが居るのだろうか、幾つもの扉が整然と並んでいる。

「上がれ！」

目の前には階段が見える。というより、それ以外道は無さそうだが言われんでもあがるわ、と言いたい言葉を飲み込んで指示に従う。

兵士数人に連れられ、着いた先は先程の謁見の間だった。辺りは暗い。時間は夜間のようなのだが、城内に光が少ないのも理由だろう。

状況は一変し、俺は両膝を地に付け、両脇の兵士から刃物を突きつけられている。下手なことをすればすぐさま突き刺されるのだろう。だが、そんな状況でも俺の頭は安穩としている。俺は先程とは全く違う状況で何かを待っていた。

ふと誰かが玉座に向かって来るのを視線に入れた。光の存在が薄い所為で、その物の影しか確認できない。その影は玉座に座り、足を組んだ

「お待たせ。まあ、私も待つてただけだね」

馴れ馴れしい口振りに違和感を覚えた。俺の知り合いか、或いは俺を一方的に知っているのだろうか。



「あら。覚えていないのかしら？」

「覚えていないも何も、暗くてよく解らないね」

「そうね。ごめんなさい。私にはちょうどいい明るさだったから」

そう言うとその腕が動く。指先で何かをなぞる様に動かす。と同時に辺りの蠟燭に火が灯る。俺の後方から順に前方の蠟燭まで灯ると目の前の人物の顔を拝んだ。否、その頭には双対の角が生えている。人間ではない。それは、魔物の風貌だった。

「久しぶりね」

「……」

俺は沈黙を余儀なくされた。顔に見覚えが無い。口振りからすると俺の事を知っているかのように思える。だが、無闇に返答する事も出来ない。

「ふふふ。解っているわ。記憶が無いのでしょうか？」

「何の事だ？」

素知らぬ振りで返答したつもりだったが、俺の声かと疑いたくなるほど、その声は動揺を感じ取った。

「凶星みたいね。まあ、隠さなくてもいいわ。大体解っているしね。改めて自己紹介するわ。私はリリアよ」

魔王直属四將軍の一人リリア。確か以前俺が無くした記憶の中で対峙していたはずだ。

「俺の仲間はとうした」

「ふふふ。安心しなさい。五体満足できちんと持て成しているわ」

俺は胸を撫で下ろすと同時に、リアの表情を読み取る。その言葉通りに受け取る程信頼出来はしない。だが、今は信じるしか無さそうだ。

「なぜこんなところにお前が居るんだ？」

「簡単よ。ただの人間くらいなら傀儡にする事くらい容易なもの」

首を動かさず、端を見据える。その先には瞳に光を写さない。生氣を失った兵士達が居た。

「……何が目的だ？」

「そうね。人間の絶望と破壊かしら」

「ふざけんな」

「真面目なだけどね。あなた達と代わらないと思うけど？ 人間も魔物を殺すでしょ？ その為の職業まであるじゃない。一方的に殺戮したりもする」

「はっ！ そりゃ魔物の方だろうが」

「そうかしら。魔物を商売道具にしたり、無害な魔物を殺す事を趣味にしたりする人間も居るのよ」

「……だとしても、人間と魔物は違う」

「ええ。そうね。理解し合えるとも、理解したいとも思わないわ。ただ、あなた達は常に正しいと思っているみたいだから教えてあげようと思っただけよ。無駄でしょうけどね」

「……」

俺は口を噤んだ。言いたいことは解る。魔物が人間にしている事は、そのまま人間が魔物にしている事だという事だろう。大なり小なりその程度の差は在るだろうが、根幹は変わらないのかもしれない。だが、それでも、俺は人間だから。魔物の行動を認めて、人間

の過ちを受け入れることは出来ないのかもしれない。根拠の無い人間の正当性を魔物相手に主張する事ほど意味の無いものは無いだろう。堂々巡りなのだ、こういう問題は。人間の中でも起こり得る事で、その解決の方法は容易ではないのだから。

「まあ、いいわ。本題に入りましょうか」

「俺を殺さずに生かしているって事は、仲間にもなれって言うんじゃないだろうな？」

「さあ、それはあなた次第ね。今回は魔王様からの伝言を伝えようと思ってね」

「伝言……？」

「ええ。それじゃ伝えるわ」

伝言？そもそもがなぜ俺が勇者だと思ったのか。エシヤの使節として来たからか？じゃあ、エシヤが俺が勇者だと伝えなかつたらどうするつもりだったのか。一番の謎は以前リリアと出会っていた事自体が仕組まれた事なのか、それとも偶然だったのかどちらなのか、って事だ。

「俺は今から人間を支配する。お前はとうするんだ？ ……以上よ」

「なんだよ、それ」

「さあね……。で？ どうするの？」

妖艶な笑みを浮かべ此方を伺ってくるリリアは悪戯染みた、或いは冷徹な感情を瞳に秘めているように思えた。その両極端な感情を併せ持つように感じるのは、掴み所の無い魔物の性質なのか。

「決まってる。魔王を倒す」

「……そう。残念ね。あなたは人間側に付く訳ね」

「当然だろう。愚問だ」

「……そうなのかもしれないわね」

顔を沈め表情を読み取らせないリリアの考えは読めない。

「じゃあ、やっぱり殺すしかないわね」

「最初からそのつもりだろうが」

「心外ね。仲間になればそんなことする気は無かったわよ」

「はっ！　そうかよ」

その言葉を最後に俺は両手の拘束具を外し、俺を脅していた刃物を足の鉄球で叩き折った。

驚き戸惑う様子の兵士に跳躍と同時に両足で蹴りつける。左右の足でそれぞれの兵士を吹き飛ばすと正面に視線を向けリリアの動向を探る。気付けば、其処には誰も居なかった。

「……逃げた？　なんで」

俺を殺すと言っていた魔族はその姿を消していた。

困惑を隠せない俺が平静を取り戻すのを待たず、事態は急変した。俺の耳には足具と石畳とが織成す音が入ってきている。恐らくは騒ぎを聞きつけて此方に向かって来ている兵士達の足音だろう。

どうする。今の状況では話を聞いて貰えるとは思えない。後ろには地面に倒れこんだ二人の兵士がいる。

だが、謁見の間には脱出できそうな出口は無かった。本来なら窓の一つでもありそうなものだが、なぜか、ここには外を窺い知る事が出来る戸口は全く存在しなかった。あるのは蝋燭が照らす薄暗い明るみのみだった。

足音達は目の前の扉で止まる。俺は其れを合図に扉に振り向いた。刹那、勢い良く開く。

「貴様……賊か！」

予想より多い。数は十は下らないだろう。物々しい武装をしている兵士達は倒れている兵士達とは武装が異なっていた。手足を完全に鎧で覆っている。完全武装と言える。一般兵士とは質の違う様相は皇族達の身边警護の者達なのか、それとも質の高い兵士達の武装なのか、どちらにしても厄介な状態であることは間違いない。

俺を勇者だと証明できるのはエシヤから貰った書簡だけだが、それも奪い取られている。

とにかく、今は捕まるのを覚悟でこの場で誤解を解くしかないか。逃げてでも犯罪者扱いでは意味が成さない。

「いや、違います。俺は……」

「き、貴様……」

俺の言葉の途中で兵士達の怒号が聞こえる。倒れている兵士に目が行ったのか、と思ったがそうではない。兵士達は全員一点を見詰め動揺している。俺はその視線の先、俺の後方、玉座に視線を移した。

そこには、先程は居なかったはずの、恐らく王妃であろう人物が全く微動だにせず、倒れている。呼吸をしている様子は無い。全く動かないその姿は生命活動の停止の表れだった。

動悸が激しくなる。おかしい、先程は誰もいなかったはず。そもそも、リリアが消えてしばらくして現れるなんて、何が起きているんだ。

「動くな！貴様、ただでは済まんぞ。楽に死ぬると思うな」

空気が張り詰める。首筋が粟立つ。一瞬で緊張感を持った兵士達の殺意で空間が満たされるのを感じた。どうやら、選択肢は一つしかないようだ。

俺は覚悟を決めると後方、玉座の方に跳躍し兵士達と距離を取った。

数瞬後、俺の所作に反応して、此方に突撃してくる兵士が数名。その後方で、数名が呪文を唱えている。騎士と魔術師が混在していたのか。さらに厄介な状況に胸中で舌打ちする。そもそも、俺は魔術に関して知識が薄い。目に見えて現象が起こるのならば対処のしようがあるが、即時発動、回避不可能な物ならば別だ。精神に訴える魔術はその回避方法を知らない俺にとって致命的だ。

だが、それは杞憂に終わった。後方の兵士達はそれぞれ得意としている魔術なのだろうか、水、火と、思い思いの魔術を練っているようだ。その掌、或いは前方に具現化した魔術は俺の知っているものに近い。

内心安堵するも、こちらに向かってくる、兵士達は驚異的な脚力で奮然と迫ってきている。一瞬で詰められた距離はもはや、目の前

にその姿を認めるものになっていた。

俺は相手の距離になるまで、足の力を溜めていた。

戦闘の兵士が俺に両刃剣を振り下ろす。速い。今まで見たモノの中でも上位に位置するものだった。だが、俺はその剣先を見据えざりぎりまで待つ。

ふっ、と風斬り音が鼓膜を震わせる。其れを合図に俺は右方に身体をずらし一閃を回避する。皮一枚で避けた一撃は俺の髪を数本切り裂いた。間髪居れず俺は前方に跳躍する。目の前には呪文を詠唱し終えた魔術がそれぞれ、こちらに迫ってきている。上方からは無数の氷柱が、前方からは炎の塊がこちらに疾走してくる。だが、俺は物怖じせずそちらに突っ込んだ。止まることは出来ない、多対一ならば、止まっては駄目だ。

氷柱は俺の丁度真上に出現すると同時に重力を越えた速度で雨の如く降り注いできた。捌き切れる数ではない。ならば、と俺は頭部を両手で多い、致命傷を避けるだけの最小限の防御のみで氷柱の雨をすり抜ける。体中に痛みを感じる。特に左手に激痛が走った。どうやら、氷柱の一つが突き刺さったらしい。だが、視線は正面に向けたまま、豪炎を避ける事だけを考える。異常な速度で迫る炎が一瞬で目の前に立ち塞がった。否、覆い尽くしている。俺は限りなく姿勢を低くし、炎の下を通る。

俺の左手に突き刺さっていた氷柱が一瞬で溶解する。体中に感じていた痛みは失われ、体中を焼かれる痛みに代わった。ものの数秒だったはずだが、数分にも感じた激痛の嵐に意識が持っていかれそうになる。

突如、終わりがやってきた。目と鼻の先に驚愕の表情を浮かべた魔術師達が佇んでいる。内心倒れこみたい衝動に駆られたが、其れを無視して、魔術師達が占領している扉に疾走する。立ちほだかっていた魔術師は俺の突進で弾かれ吹き飛んだ。

俺はそのままの速度を維持するため只管脚を動かした。周りの景色が流れていく。あまりの速さに周囲を認識することは困難だった。

しばらく走ると俺自身の荒い息遣いを感じた。身体が重い。先程より、明らかに速度が落ちていく。少し身を隠すしかないか。近くの扉に手を掛ける。中の気配を探る。動いている者はいないようだ。念のためゆっくりと扉を開け中に進入した。

中は特に見る所の無い、平凡な部屋のようなのだが、幾つか目に付いたものがあった。

「あ……俺の刀」

偶然にも俺の荷物を発見した。囚人の荷物を保管しておく場所なのだろうか。意外に乱雑な状況に苦笑いを浮かべる。本来なら、保管所のような場所があると思っていたが。

身体は悲鳴を上げているが、休憩している暇は無さそうだ。

俺は帯刀し、ポーチを腰に据えた。やはり、この格好が落ち着く。深呼吸をし、息を整え直すと部屋の窓に目が行く。窓から階下の様子を盗み見ると、兵士達が慌しく走り回っているのが見えた。俺を探しているのだろうか。

とにかく、暗闇に紛れて脱出するしかないみたいだ。

恐らく通路には兵士達が走り回っているし、正門は警戒されているだろう。俺は時期を見て窓をゆっくり開けた。脱出するにはここが手っ取り早いか。幸いここは二階だし、さほど危険ではない。危惧するべきは俺の状態が芳しくないという所だが、今はそうも言っられない。城壁はそれほど高くないし、俺の脚力で超えられない事も無いだろう。

俺は窓に手を掛け脱出を試みた。

\*\*\*\*\*



辺りを見回す。ここなら、少しは休めそうだな。なんとか城から脱出した俺は路地裏で腰を下ろし一息ついた。まるで自分の身体ではないかのように、力が抜ける。

とにかく今は情報が足りない。エリス達は何処に連れ去られたのだろうか。恐らくはあのリアが絡んでいるという事は魔王の手中にあるのであろうが。

どうする。今は傷を治したい所だが、エリスも居ない。しかも、恐らく俺は指名手配犯として世界中に通達されているだろう。一国の王妃を殺害した疑いがあるのだから。状況証拠で言えば俺が被疑者であることは間違い無いだろう。

元々、捕まっただけに行動を起こしていれば皆を助けられたかもしれない。それを、俺は一方的な信頼で、杞憂だと決め付けていた。最悪だ。後悔先に立たずとは言いが、今迄も何度も後悔している。これからも、そうなんだろう、な。

混乱しそうになる頭を無理やり正常に戻す。深呼吸を繰り返すと不思議と気持ちは落ち着きを取り戻した。

公に行動する事は出来ない。ならば。

「ブロールフェルドに戻る……か」

それは、最善に思えた。ブロールフェルドならエシヤも居るし、今後の対策も練れる。それに閉鎖的な風土があるから俺も行動しやすいかもしれない。どの面下げてアガムに会うのか、という疑念はもちろんあったが。シルフィも連れ去られたのかもしれないのに。あるいは、無傷ではないかもしれない。ひよっとしたら……

俺はそれ以上考えないように思考を停止させた。今は考えても無駄なのだ。なら、今出来ることをするしかない。

体中が、特に左腕が痛む。その実、意識が飛びそうなほどの感覚

を抱いていたが、それでも気を保たなければ。捕まれば殺されてしまふのだろっから。

駄目だ。もう、意識を保ってられない。睡魔が俺を襲う。それは、死へと誘う死神の抱擁に他ならないが、抗う術を俺は持っていないかった。周囲の景色が次第に歪み、形を成さなくなっていく。

閉ざされて行く意識の中、微かに聞こえたのは、何者かの足音だけだった。

声。声が聞こえる。それは懐かしいような、まるで聞き覚えの無いような声。要領を得ない自身の認識に疑問を抱く。それでも、俺はその声を無視することは出来なかった。聞き覚えがあるはずなのに、だれの物なのかは不明瞭だった。

「……か？」

何かを俺に問い掛けている事だけは理解できるのだが、その内容までは認識できない。それは、重要な物なのだと思うのだが、それでも、意識が混濁して、思考に耽る事が困難だった。

「……てるか？」

前にもこんな出来事に遭遇した気がする。だが全てが酷く曖昧だ。まどろんだ意識は現実感が無い。ならば間違いないだろう。そう、これは恐らく……

「夢なんだ」

思わず声を出した自身の声は俺自身のものとは思えないほどの違和感を覚えた。端的に言えば幼い印象を受ける。それは、俺自身の声ではない。明らかに現実ではないはずなのに、言い様の無い焦燥感を覚えた。だが、意識は次第に輪郭を無くし、最後には暗闇が俺の意識を覆って行った。

瞼を開く。目の前には見慣れない天井がある。どこかの一室で、俺は横になっっているようだ。感触が滑らかな肌触りを感じ取る。それは、毛布のものだった。視線をそのまま周りに滑らせる。見た事の無い風景だった。どこにでもあるような民家の一室、あるいは、安宿の一部屋のような印象を受ける。

俺は今迄の経緯を思い起こした。クリミアの王に会う為に城に向かって、王妃が現れた。そこで、エシヤからの伝言を伝えると、なぜか捕まって、仕舞いには俺が王妃を殺した事になっていたんだ。たな。どうも、要領を得ないが、事実なのだから仕方が無い。その後城から脱出して、近くの路地裏で気絶したはずだ。

突如乾いた音が聞こえた。音の鳴る方を見ると、扉が開いていく。「あ、あの。お、起きましたか…？その、大丈夫ですか？」

おずおずと扉の影から此方を伺ってくる少女は震える声で尋ねてきた。

「あ、うん。身体は言う事聞かないけど、なんとか」

俺の言葉を聞くと、胸を撫で下ろすのが見えた。心配してくれていたのだろうか。と言う事は俺がここに居る理由はこの少女に起因すると言う事か。

「えと、君が助けてくれたの？」

「は、はい。そ、その、行き倒れになっていたの……。その、ご迷惑でしたか？」

「とんでもない。本当にありがとう。助かったよ」

俺は感謝の意を伝え、頭を垂れた。出来る限り誠意を持って行動したつもりが、少女には気を使わせてしまったらしい。

両手を目の前で慌しく振りながら、否定の意を表していた。

「そ、そんな。私、そんな大した事していませんから」

「そんな事無いよ。とにかく有難う」

真っ直ぐ少女を見て、感謝を伝えた。心から、そう思ったからだ。この少女が助けてくれなかったら、ひよっとしたら、捕まっていたかもしれないのだから。いや、命すら危うかっただろう。

少女は俺の態度を受けて、なぜか萎縮してしまっている様子だった。

「……その。聞いてもいいかな？」

「は、はい。どうぞ」

相変わらず扉の陰に隠れたままの少女は掌を差し出すと、俺の次の言葉を促した。なぜか、その指先は震えている。警戒されているのかな。

「……なんで、助けてくれたの？」

「なんで、って……？」

「言い方変えようか。俺たぶん指名手配されてると思うけど。その、知ってた？」

回りくどく聞くのは億劫だと思った。そもそも、時間の無い状況であることは変わりが無いのだから、言葉遊びに興じる気は毛頭無かった。

犯罪者である、もちろん俺はそうではないが、そうであると思われる人物を助けるなど、そうそう出来るものでもない。ならば、知らなかったのではないだろうか、と俺は考えていた。見た所善良な市民である少女を巻き込むには気が引ける。

「……はい」

俺の考えとは裏腹に、少女は肯定の言葉を発した。驚愕の表情を浮かべる俺は思考が一瞬停止していたようだ。一拍置いて、改めて疑念を口に出した。

「じゃ、じゃあなんで助けてくれたの？」

「そ、その。覚えていませんか？ 私の事」

扉に隠れて少女の全身を見る事は出来なかったが、見知った顔ならすぐに気付く位には視認出来ていた。それでも、俺の記憶には少女の顔には見覚えが無い、と思う。

だが、即答で、知らないとは答え難い。相手は命の恩人であり、自身の危険を顧みず、その危険を承知の上で匿ってくれているのだから。

だが、どうしても思い出せない。時間を引き延ばすのにも限界があると感じた俺は声を発した。

「え、えと……ごめん」

「いえ……会話したわけでもないですし、覚えていない方が当たり前だと思えますから」

そう言う少女の表情は少々憂いを帯びている。例え覚えていないのが当たり前でも、覚えていないと知れば傷つくだろう。俺でもそうなるかもしれない。

「じめん」

「あ、謝らないでください。そ、その気にしてませんから。え、えとですね、前に助けてもらったんですけど」

「俺が？ 君を？」

「正確には違いますけど、結果的には、そうですね」

その言葉を皮切りに、少女の表情が動いた。今迄は怯えていた印象を受けたが、何かを決意したかのように、何度も頷いている。暫くすると意を決したのか、少女は一歩進み出た。その所作によって柔らかな頭髮が揺れる。小柄な体軀はやや華奢な印象を受ける。瞳は大きく、滑らかな曲線を描く輪郭は小動物を連想させた。何か引っ掛かる。何処かで会った、いや、見たような気がする。

少女は俯いたまま上目使いでこちらを伺っている。

「ま、前に、ギルドで男性に絡まれましたよね？」

「ん？……あゝ、そう言えば」

「わ、私はあの人の従者だったんですけど……」

「……あ！」

そう言えば、ニワトリ（懐かしすぎて忘れていたけど、そんな風呼んでいた）を吹き飛ばした後、駆け寄っていた従者らしき少女がいた。なるほど。思い起こせばその時の少女が目の前に居る少女だったのか。

「思い出したよ」

「そ、そうですね……。覚えてくれていて良かったです」

胸を撫で下ろす所作を見ながら疑問を抱く。本来なら、俺に敵意を持っていてもおかしくないと思うのだが。

「それで、なんで俺が君を助けた事になってるの？」

「……そ、それは……」

言い難そうに口ごもる少女の表情は苦虫を潰したかのようなものだった。其れは、嫌悪感とは違う、ただ辛苦を感じた。今で言えば、従者が勇者を選ぶ形式を取っていると聞いたのだが、一概には言えないのかもしれない。強制的に契約させられたりする事もあるのだろうか。あるいは、契約の後に本性を表したのかもしれない。想像の域を出ないが、ニワトリが良き勇者であったとは俺自身も思えない。ならば、従者であった目の前の少女は俺の比ではないのだろう。俺はそれ以上追及する気にもならず、沈黙を守っていた。

不意に眠気を感じた。意識を保つのも億劫になるほどの睡魔を感じ、視界が歪んでいくのを感じる。

「あ、ごめんなさい。病み上がりなのに。ゆっくり休んでください」「ありがとう。そうさせてもらおうよ」

色々言いたい事もあったが、今は惰眠を貪る事を脳が望んでいた。少女は俺の言葉を聞くと、頷いて、そのまま部屋を出て行った。思考を妨げるほどの眠気を感じそのまま横になった。ああ、そういえば、少女と話している間中ずっと、寝具に横になったままだった。身体が重いのは怪我の所為だろうか。眠気の限界を迎える直前に身体を動かしてみた。左腕は全く動かなかった。痛みを感じることも無く、感覚を失っている身体をぼんやりと眺めたまま眠りに着いた。俺はいつも意識を失っているな、と思いながら。



俺がこの家に世話になりだして数日が経った。すぐにもエリスたちを探したかったが、身体が思うように動かず、治療の為に休養を取っていた。城で負った傷は余り芳しくないようだ。特に左腕の感覚は麻痺し、全く言う事を聞かなかった。ミリーが連れてきたヒーラーでも完治させることは出来なかった。

ああ、ミリーっていうのは助けてくれた少女の名前だ。

ちなみに全身の火傷や裂傷はほぼ完治しているが、気だるさを未だ残していた。原因は不明だったが、それでも、ゆっくりはしていいられない。

辺りは日が落ちようとしていた。

「俺、そろそろ行くよ」

「……そ、そうですか」

隣に腰掛けていたミリーにそう言葉を掛けた。これ以上迷惑を掛けるわけにもいかない。それにエリス達の安否も気掛かりだ。

この数日の間、ミリーはヒーラーの手配とエリス達の情報を探してくれていた。簡単なことではなかっただろう。それでも、ミリーは自身の危険を顧みず、俺を助けてくれた。感謝しても仕切れない恩を受けたのは俺の方だな。と、俺は胸中で呟いた。

俺は支度を整える。数日振りに刀を腰に据える。それでも、違和感は感じなかった。寧ろ落ち着く感情を抱いた。

「本当に有難う。今度会ったらこの礼は必ずするから」

「そ、そんな気にしないでください。私も助けてもらいましたから。それに勇者様の手助けをする事は当然の義務ですから」

「勇者、って俺の事……だよな？」

「え、あ、そ、そうですね」

なぜか動揺しだすミリーに疑念を抱いたが、追求するには気が引けた。

そういえば、俺が勇者であることはブルルフェルドのエルフたちと俺の仲間しか知らないはずだが、世界中に伝わっているのだろうか。ならば、俺が今追われているのは何故だ？まあ、勇者といえど犯罪者なのであれば追われるのは当たり前なのだろうが。よくわからないな。それほど重要な事でもないだろう、と決め付けて俺はミリーに別れの挨拶を告げた。

「えと、それじゃ、またね」

「は、はい。気をつけて」

そうして、俺は影を落とし始めた街へと足を踏み出した。

\*\*\*\*\*

エリス達はあの後どうなったのか。恐らくはこの町を出ていない。それはミリーからの情報で解ったことだったが、確実なものでもない。クリミア自体相当広い。ならば、人の出入りを全て認識できるかと言えばそれも難しいだろう。ただこの国は入国は厳重だから、そう簡単に外に出れるとは思えない。ならば可能性の高いのは……。

「恐らくは城の中か……」

そもそも、リリアが居たことと言い、俺達が捕まっていた事と言  
い、あの城自体が怪しい。ならば、行くしかないだろう。どちらに  
しても、それ以外手がかりは無いのだから。

俺は歩を進める。俺は大手を振って歩ける立場に無い。路地裏を  
使い城の付近に着く。クリミアの地理に詳しく無い上に、人目を避  
けつつ移動した所為で思ったより時間が経ってしまった。既に数時  
間が経過し、辺りは夜の帳が降り、日の光は全く差していなかった。  
辺りを伺う。人通りはほぼ無いが、巡回の兵士達がちらほらと見  
受けられた。特に城の周囲は警備が厳重で容易に進入出来そうに無  
い。以前俺が脱出した場所に足を進めた。そこなら、進入も容易か  
もしれない。

目の前には聳え立つ城壁が侵入を阻んでいる。辺りは茂みのお蔭  
で身を隠しやすい。ここなら、進入しやすいだろう。俺は膝を曲げ、  
力を溜める。地面を掴むかのような感触を足裏に得た。刹那、跳躍  
した。俺の目の前の壁が下方に滑る。その頂点を見る前にその速度  
を落しだした。速度が完全に停止する寸前でその頂点が目の前に来  
た。俺は必死で右手を目の前に伸ばし、城壁に手を掛けた。突如、  
右肩に体重を感じる。完全に右腕のみでぶら下がっている状態で、  
そのまま身体を引き起こす。だが、完全に身体を持ち上げることは  
出来ず途中で腕を伸ばしてしまった。

「くっ！」

身体が、思うように動かない。この城壁も以前なら飛び越えるこ  
とが出来たはずなのに、それが出来ない。

俺は焦燥感を抱きつつも、身体を振り子の要領で左右に揺らした。  
右に振り上げた身体に追隨させ右足を振り上げ、城壁に引っ掛ける。  
引っ掛けた足と右腕に力を加え身体を壁上に何とか乗せた。

俺は荒い息を吐きながら、動かない左腕が恨めしく思った。

身体が思うように動かないのはこれ程不便だとは思わなかった。いや、そもそも、今の段階でも常人では有り得ない程の身体能力なのだろうが、頼りすぎていたみたいだ。

何とか息を整え、出来るだけ身体を隠しながら下を見下ろす。周囲には人の気配感じなかった。俺は跳躍し地面に着地した。そのまゝ、以前脱出を図った部屋を探す。あそこは鍵が閉まっていなかったはずだ。

\*\*\*\*\*

城内は以前とは比べ物にならないほどの静寂を保っている。俺の足音が辺りに響く。出来るだけ音を鳴らさないように歩を進めた。ランプの明かりだけが辺りを照らしていた。

まずは牢屋だな。俺は頭の中の記憶を頼りに牢屋を目指した。

巡回の兵の目を掻い潜り、なんとか地下牢の扉までついた。そこで、俺は思い起こす。確か看守は一人だったはず。一人くらいなら騒ぎを起こさず何とかできそうだな。

俺は扉に手を掛ける。どうやら鍵は掛かっていないみたいだ。扉を開き、階段を下りた。

暫く進むと段差が無くなる。壁越しに奥を覗き込むと、看守がうつらうつらとしながら椅子に腰掛けているのが見えた。深夜まで働いているのだから、眠気を感じても仕方ないだろう。

俺は足音を極力鳴らさず、看守の目の前まで来た。起きる気配は無い。看守の腰を見ると鍵束が見えた。其れを拝借しようとして手を伸

ばした。

「……ん？だ、だれ……」

看守の言葉を聞ききる前に俺の手刀が看守の首筋に刺さる。その一撃で完全に気を失った。

「あ、危なかった」

安堵の言葉を思わず呟く。行動が安易過ぎた。危うく他の兵士を呼ばれるところだった。

気を取り直して、鍵束を手にとると、奥に進んだ。

牢屋の数は相当数ある。一つ一つ見ていくしかないか。俺は最奥部まで歩を進めた。途中犯罪者らしき者たちが俺に声を掛けてきたが完全に無視した。例えどのような事情があろうとも、俺と同じ境遇だったとしても、今の俺にはどうする事も出来ないのだから。

最奥部まで、エリス達の姿は見つけることが出来なかった。残ったのは目の前にある嚴重そうな扉一つだけだった。そういえば、俺もここに入れられていたんだった。

まずは左の扉から試す。俺は扉に合いそうな鍵を試した。数度其れを繰り返す行くと鍵が開いた。

一拍置いて扉を開く。

「あ、あんた」

「メア！」

目の前には手錠と鉄球を掛けられたメアが目の前に居た。顔は憔悴しきっている。

俺はすぐさまメアに駆け寄り、抜刀しメアの両手と足を拘束して

いる鎖を断ち切った。身体の自由を得たメアは手足を伸ばしたりしている。

「大丈夫か？」

「ああ、なんとかね。それより、エリスとシルフィは？」

「まだ、見つかっていない。隣の部屋に居るのかも。とにかく行く」

メアの頷きを確認してすぐさま隣の扉に向かい鍵を開く。そして中に入った。

目の前にはシルフィがメアと同じような状態で着座している。先程と同じように拘束を解いてやると、その口火を切った。

「ぶ、無事だったんですね？」

「ああ。シルフィも無事でよかった」

心底安心した。メアもシルフィも何とか無事だった。慢心相違では在るだろうが、身体に傷を負っている訳でもないみたいだ。

「……エリスは？」

「あたしはあの後ずっと閉じ込められてたから……」

「わ、私もです。その、エリスさんはいないんですか……？」

「ああ。捕まっているなら同じような牢屋に捕まっているはずだ。扉は二つしかないみたいだ」

「そ、そうですか」

二人に聞いてもこれ以上エリスの居場所を知る事は難しいかもしれない。

「……とにかく脱出しよう」

「エリスはどうするんだい？」

「今は探す時間は無い」

「そ、そんな……」

俺の冷淡な言葉を聞いて、不満を露にする二人。その二人の視線を真摯に受け止める。だが、俺自身も俺の言葉に不満を抱いていた。それでも、現実的に適切な判断を下すならば、俺の言葉は正しいだろう。このまま、無闇に探し続けても危険だろう。

「とにかく、一度脱出するしかない。着いてきてくれ」

俺は無言を言わず二人を引き連れて、外に出た。

\*\*\*\*\*

俺が侵入した城壁まで来ると、シルフィがなにやら呟くと淡い光に包まれた。そのまま壁上まで跳躍する。着地し此方を見下ろすと、手招きをする。

「あたしや、魔術は苦手なんだけどね……」

メアも何やら呟くと淡い光に包まれた。シルフィと同時に跳躍しなんとか壁に手を掛けた。そのままシルフィに助けられながら身体を持ち上げた。

どうやら、二人とも、肉体強化の魔術がつかえるようだ。というか、仲間なのにお互いの能力を把握してないのに今更気付いた。

俺に手招きする二人に視線を送る。俺はそれに首を振ることで答えた。驚愕の表情を浮かべる二人を尻目に再び城内を目指す。その時頭にシルフィの言葉が響いた。

『ど、どこにいくんですか!?!』

思念、というやつだろうか。魔術にはこういうものもあるのだと初めて認識した。俺は口に出さずその言葉に返答してみた。その間も城内に侵入し探索を続けている。

『エリスを探す』

『さ、さつき脱出するって言ったじゃないですか!』

『ん、言ったよ。メアとシルフィは脱出しただろ?』

『……それなら、私たちも行きます』

『行くなら一人の方が都合がいい。大人数で行動すると目立つし、何より、二人は憔悴しているからな』

『そ、そんな……』

『後一つ。今俺は指名手配されている、と思う。王妃殺しの犯人としてな。きつと俺と居ると危険だ。恐らく、これ以上一緒にいない方がいい。お前達は故郷に帰った方がいいと思う』

『な、なにがあっただんですか?』

俺は今迄の経緯を簡潔にシルフィに説明した。

『そんな事が……』

『ああ。指名手配されているのは俺だけだと思う。それに俺達が捕まったのはリアの仕業だと思っし、俺よりは安全だと思う。あの時の兵士達まともじゃなかったみたいだしな』

俺の脳裏のあの時の情景が思い浮かぶ。あの兵士の目。まるで意



識が無い、傀儡のような瞳の光の無さ。リアも傀儡にした、と言っていたし間違いないだろう。

『それじゃあ、余計に一緒に居ないと駄目じゃないですか』

その言葉は俺の心の棘を無くしてくれるほどの物だった。ぐつと、腹に力を込める。一人では不安だ、と言いそうになる気持ちを何とか抑える。それでも、それに甘えるわけにはいかない。

『シルフィには家族が居るだろ。とにかく俺より自分の事を考える。メアにもそう伝えてくれ』

『……本当に一人で行くんですか？』

『それが最良の手段だ。解ってくれ』

暫くの時間を置いて聞こえたのは消え入りそうな声だった。

『……わ…かりました』

『元気でな…』

『ヤマトさんも気をつけて』

その言葉を最後に言葉は途切れた。

さん、はいらないって言ったのに。そんな言葉を使うとまるで今生の別れみたいじゃないか。

俺は喪失感を覚えた心を叱咤し城内探索を続けた。

\*\*\*\*\*

どのくらい探索を続けていただろう。それでもエリスの手がかりは見つけられなかった。もちろん、すべての部屋に入ることは出来なかったが。

俺は最後に謁見の間に向かった。あそこが、全ての始まりだった。ならば、手がかりがあるならあそこしかない。だが、入れるのだろうか。

身を隠しながら何とか謁見のまままでたどり着く。ここまで、兵士に見つからなかったのは奇跡としか言いようが無い。

一先ず、目の前の扉に手を掛ける。予想とは反して鍵は掛かっておらず乾いた音を立てながら扉は開いた。

目の前に広がった空間には以前とは変わりが無いように思えた。俺は室内に足を踏み入れた。部屋中ごろ、玉座まで進み、周囲を見渡す。変わらない。何も無い。

「また、来たのね。あなた馬鹿なの？」

右方から声が聞こえた。聞き覚えるその声は嫌悪感を抱かせた。

「……リリア」

「あら、初めてじゃない？ 私の名前呼んだの」

「そんなことはどうでもいい！ エリスは何処だ！」

「あら、あの子がそんなに大事なの？ 予想外だったわ」

なにが、予想外だったのか。そもそも、予想するものだろうか。だが今はそんなことはどうでも良かった。俺は激昂しそうになる俺自身を抑えるのに必死だった。

「……質問に答えるよ」

「ん〜。ここには居ないわよ」  
「じゃあ、どこだ」

リリアは少し考えるような仕草を見せて言葉を放った。

「あの子のところに連れて行ってあげましようか？」

「は？」

「会いたいの？ 会いたくないの？」

「……会いたい」

「あら、会いたい、だなんて。若いつていいわね」

「お前性格変わってるぞ」

「冗談よ。じゃあ、連れて行ってあげるわ」

予想外過ぎる言葉に付いて行けない。だが、その言葉は俺には願っても無いものだった。敵であるリリアがなんの裏も無くエリスに会わしてくれるとは微塵も思わない。きっと罠でもあるのだろう。それでも了承するしかなかった。

「じゃあ、付いて来なさい」

そう言つと踵を返し扉に向かった。俺は頷くとリリアの背中を追つた。

リリアの後を着いて行くと何の変哲も無い部屋に辿りついた。間髪居れずリリアは扉を開き中へと入っていく。俺は其れに倣って後に続いた。何も無い一室。その空虚な空間に唯一つ目を引いたのは、床に描かれた淡い光を放つ魔法陣だけだった。

「隣に来て」

魔方陣の上にはリリアが佇んでいる。俺は一瞬躊躇するも覚悟を決めその言葉に従った。踵を返す理由は今は思い当たらない。例え畏だとしても、俺を殺すならばもつと前に出来たはずだ、それをしないならば、何らかの理由があるはず。俺はそう結論付け、歩を進める。

魔方陣の上に足を踏み入れる。身体に何も変調は無い。そのまま、全身を魔方陣に委ねる。一拍置いて視界が歪み、軽い嘔吐感を覚えた。数瞬後、視界は完全に暗闇に覆い尽くされ、情景は見知らぬものへと切り替わった。

混乱しそうになる意識を何とか繋ぎとめ、辺りを見回す。城の中、だろうか。だが、クリミアとは違う。その相違感は空気の重さ、匂い、あるいは視覚的なモノ、そのどれも結びつかないようで、その全てが正しいと感じる。原因の解らぬ違和感を感じる。

「こつちよ」

何も無かったかのように振舞うリリアは俺の胸中などお構い無しに先に進んでいく。慌ててその後に着いていく。

しかし、行動に一貫性が感じられない。俺たちを落としいれよう

としてみたり、殺そうとしたり。果てが今の状況。一体何がしたいのだろうか。それに、ここは、一体？

だが、ここが何処であろうと、今は関係ない。エリスに会えればそれでいい。

無言で足を動かす。無機質な回廊を只管進む。その間誰ともすれ違うことは無い。これだけ広大な建物に誰も居ない。それは、違和感というよりも寂寞の思いを抱かせた。ただ、寂しい場所だと、そう思った。

暫く進むと視界を覆いつくさんばかりの扉の目の前で足を止めた。

「……」

こちらに振り返り簡素に言葉を伝えてきた。緊張、だろうか。リリアから今まで感じたことの無い感情を垣間見た。飄々としている印象の強い現実感の薄かった魔族は、その瞬間、何故か身近に感じた。それは、俺自身にもある感情を感じたからだろうか。

「失礼致します。リリアです。勇者を連れて参りました」

「……入れ」

リリアの言葉に一拍置いて返した声は簡易的で、感情を読み取らせなかった。だが、その声は思ったより若い。俺とそれほど変わらないう年齢の少年を連想させる。承諾を得たりリリアは扉を開き中に肺って行く。その後引き続き中に入った。

予想はついている。というより、それ以外の可能性はほぼ皆無だろう。リリアの態度から恐らくは室内に居るのは。

「……魔王」

「……勇者」

玉座に座るそのモノは魔王。それは存在感の象徴であるかのよう  
に、目を逸らすことを許さない。俺もまた例外ではなく、視線を外  
すことは叶わなかった。

容姿はまるで少年。思った通り俺と変わらない年齢に思える。驚  
くべきは様相だった。人間、としか思えない。魔族の頂点にある魔  
王は異形であると先入観を抱いていた俺にとっては予想外のことだ  
った。

「カツ！ なんだよ、驚きすぎだろ」

「驚いて何が悪い」

頬杖を付いてこちらを見下す視線に苛立ちを覚えた。目の前に居  
るその少年が魔王であると、何故か一目見て理解していた。胸中  
は負の感情、憎悪、憤怒それらを掻き混ぜた感情が渦巻いていた。  
今迄に無い感情の渦潮に自我を失いそうになる。

「おやおや、怖いな。そんな目で睨むなよ」

「黙れ」

殺す殺す殺す殺す殺す。魔王に対する異常な殺意は俺自身の意識  
をも奪い、今にも身体が跳ねそうになる。ただ、魔王を殺す為だけ  
に所作を起しそうになる。

「落ち着きなさい。仲間のお嬢さんの事はいいの？」

その言葉に、何とか意識を繋ぎとめる。エリスの安否を確かめな  
いと。それだけじゃない。助けるんだ、という思いが再び胸中を占  
めた。それでも、魔王に対する殺意だけは拭い取ることが出来ず、  
歯噛みする。奥歯が擦れる音を鼓膜に伝えている。無意識に刀に手  
を掛けている右手の力を抜く。余りに力み過ぎて、掌から血が滲み

出ていた。

刀から手を離し、深呼吸を数度する。何とか平静を保つ事が出来ることを確信して言葉を放った。

「エリスは無事なんだろうな？」

「ああ。丁重に扱ってるぜ。もちろん五体満足で返してやる」

「……何が目的だ。俺を殺す為か？」

全く人質の意味を成していない。そもそも、俺の目的は魔王を殺すことなのだ。それが、その本人から呼び出しを受けているわけだ。例えばエリスが攫われていなくとも、俺は望んでここに来たはず。それに、エリスに危害を全く加えていないのが事実だとすると、余計にその意図が読めない。

「いや？ 俺の目的はお前と話すことだ」

「ふざけてるのか？」

「真面目も真面目。その為に一々回りくどい事をしてるって訳だ」

「じゃあ、目的は済んだだろ。エリスを返せ」

「まあ、待て。俺の目的はお前と話す事だ。何も話してないだろ？」

「じゃあ、さっさと話せ」

俺はいい加減苛立っていた。これ程感情を揺さぶられた事があつただろうか。夢、のような空間でシャルに感じた苛立ち。それに対しても理解できないものだったが、今の俺は異常だ。いや、正常なのか。目の前に居るのは、魔王なのだから。名も知らぬ村を滅ぼし、村人を殺した。ローウェル襲撃の際にも多くの人間が命を落としたと聞いている。ならば、目の前の少年はやはり敵視するべきなのだ。なんの異常も無い。それは正しい感情なのだ。

「カツ！ せつかく俺が直々に教えてやろうと思ってるのに、一々

棘があるなお前は。まあ、理解もしてないんだろっけどな」

「何が言いたい」

「お前の知らない事実を俺は知っているって事さ」

「俺の知らない事実、だと？」

「まあ、その前にお前の大切な仲間とやらを返してやるよ」

魔王はリリアに目配せすると、それに答えるように頷いた。リリアが指先を鳴らすと同時に大柄のゴブリンに連れられたエリスが現れた。

「エリス！」

無意識に声が出る。込み上げる感情は安堵、或いは嬉々としたものだろうか。

対してエリスの表情は俺を見つけると苦虫を潰したような表情を浮かべた。まるで、会いたくなかった人物に出会ってしまった時の反応だ。困惑する俺を置いて、ゴブリン達はエリスの拘束を解きその場を後にした。残されたエリスはその場に立ち尽くし床を見詰めている。

「……エリス？」

俺の言葉にも全く反応しない。微動だにしない。俺の頭は急激に熱を帯び、感情を露にした。

「貴様！ エリスに何しやがった！」

「ん？ 何も？」

「ふざけんな！ 何もしてないなら、なんでエリスはあんな状態なんだよ！」



そう言い、エリスを指し示す。それは通常では考えられない程、瞳に光が無い。まるで何かに操られているようで生気を感じない。

「あ、悪い。何もしてないわけじゃないな。ちょっと、話をした」

魔王の言葉にエリスが反応する。その言葉に怯えるかのような反応に困惑を覚えた。

「何を……話したんだよ」

「それはだな。お前の」

「やめて！」

突然の慟哭。泣き叫んでいると感じるほどの嬌声。その叫びにはどのような感情を含めているのか。憤怒だろうか。悲哀だろうか。それとも懇願なのだろうか。

肩を震わし、息を荒くするエリスに当惑せずに居られなかった。

「止めないぜ。其れを話すためにお前を攫って来たんだからな。その方が話が早いしな」

「なぜ、こんな事をするの？あなたに得があるの？」

「ああ、大いにあるね。そもそも気に食わないんだよ。お前から人間とエルフはな。反吐が出るね」

俺を置いて話は進んでいく。内容から察するに、エリスと魔王の知識には共有するものがある、と言う事か。それが、俺の知らないモノなのだろう。

「おい。何の事だか俺にも教える」

「ああ、すまん。もちろん話ささ。其れが目的だからな」

そう言うと、何やら呟いた。その響きは呪文だと感じたときには遅かった。その言葉が終えると、エリスは喉を押さえ口を閉口させた。

「な、何をする！」

「安心しろ。話の邪魔をさせない為に声が出ないようにしただけだ。無害だよ」

エリスに振り返ると、確かに声が出ないだけで、身体に異常があるわけではなさそうだ。内心ほつと胸を撫で下ろす。今は問題なかったが、あの呪文が身体を侵す魔術だったらと思うと総毛立った。目の前に居るのは魔王なのだ。一瞬も気を抜くことは許されない。俺は腹に力を込め再度、集中した。いつでも身体が動くように。

「さて、まずお前に聞きたい事があるんだが。お前は何処まで覚えている？」

視界の端にエリスを入れる。その話をする事はエリスに記憶喪失だと言う事が露呈してしまう事を意味する。俺の胸中を読み取ったのか魔王が言葉を繋げた。

「安心しろ。お前の思っているようには決してならない」

「根拠を知りたいね」

「話せば解る。変な言い方だが、信じる」

逸れに即答できるわけも無い。だが、目の前の少年の言葉には妙な説得力があった。魔王なのに、まるで、友人と話してるかのような感覚でいた。違和感を感じず、その言葉に頷く自身に驚愕を隠せない。それでも、その選択は間違っていないように思えた。どちらにしても、了承しない限り話は進みそうに無い。俺は覚悟を決めた。

「さっきの話だが何処まで……てのはどういう意味だ？ 質問の幅が広すぎて答えられないな」

「そりゃそうか……。じゃあ、おまえ自身の矛盾点に気付いているか？」

「矛盾点……？」

「そう。お前自身気付かない、あるいは気付けない事柄もある。客観的に見れば確実に異常だと思う事でもな。加えて原因の解らない感情、使命感、強迫観念だな。それらは粗方お前の記憶にあったものだ。まあ、俺が消したみたいなものだが」

「どういう事だ」

「前のお前は俺の話なんて全く聞かない、唐変木だったんでな。ロ―ウエルでお前を襲って召喚魔術を使わせて記憶を強制的に消した今のお前にする為にリセットさせたって訳だ」

「な！ お、お前その為にロ―ウエルを襲わせたのか！ そんな事の為に！」

「其れだけが理由じゃないけどな。まあ、全て話す必要は無いな」  
「き、貴様……」

そんなことの為に街を襲わせ、多くの人の命を奪って、今飄々と俺と話しているのか。その事実が俺の感情を呼び起こしそうになる。

「落ち着け。知りたいんだろう？ お前は誰なのか。そしてお前は何故勇者で居るのか」

「……知っているのか？」

「全て、とは言えないがな」  
「話せ」

「はいはい。つたく、立場逆だろ。まあ、いいや。とにかくそれでお前は記憶を失くし、人格も完全に変わった。以前のお前を語る必要は無いな。だが、前のお前なら問答無用で俺に斬りかかっていた

だろうな。……話が逸れたな。お前が誰なのか。其れが知りたいんだっただな」

「そつだ」

「お前は俺だ」

「は？」

「ああ、言い方が悪かったな。お前は俺の立場になる可能性もあつたっただけだ。お前は俺と同じなんだよ」

「意味が解らん。何が言いたい」

俺の言葉を聞いて聞かずか、魔王は自身の頭を指差す。その先には変哲の無い黒髪が見える。全身黒に包まれた風貌に違和感を感じず存在するそれに今更気付いた。だが、それが何だと言うのか。

「解らないか？」

「髪がどうした。そんな黒髪、珍しくもな……い？」

「珍しい所か、この世界には俺とお前しか黒髪の人間はいないぜ」

「どういうことだ」

「だから、言っただろう。俺は勇者になる可能性があつた。そしてお前も魔王になる可能性があつた。俺達はそついう境遇だったんだよ」

「な、何を言っているのか判らない……」

「そりゃそつだ。お前のは記憶喪失じゃなくて記憶消失だからな。」

失った記憶は決して戻ること無し。その片鱗を残していたとしても、その全貌までは思い出せないのさ。だから例え俺の言葉に聞き覚えがあつたとしても、その全てを思い出すことは出来ない。其れがお前の力の原動力なんだからな」

「召喚魔術が使えるのは記憶があるから……」

「そつ。当たり前だが。記憶を消失し尽くせば使えない。まあ、そもそも記憶を完全に消失する前に力のことを忘れてしまつんだから、実質は消費し尽す事はあまりないだろうな。あるとしたら、強大な

力を使った場合、か。それでも、お前の経験の記憶と知識の記憶全て消失する事は難しいだろうけどな」

「なんで、お前が其処まで知っている？」

「言っただろ？ お前と同じ立場なんだよ俺は」

肩をすくめる様子を唯眺めた。その時の俺は何を考えていたのか。ある意味放心に近い状態でただその様子を眺めた。

「まあ、そこは俺も詳しくは覚えていないけどな。俺達は記憶操作されているみたいだな。俺もおぼろげにしか覚えていない。……話を戻すか。お前、俺の黒髪に中々気付かなかったな。何故だと思っ？」

「何故って……あまりに普通だからじゃ？」

「まあ、その可能性も否定できないな。自分の髪の色の人間を見ても、変わっているとは思わないだろう。だが、自分と違った髪の色の人間はどうか？」

「そりゃ、変わっているとは思っだろう」

「じゃ、お前の周りの人間はお前のことを変わっていると云ったか？ 或いは、表情や仕草に出さなかったか？」

思い起こす。そうだ、確かに俺の容姿は変わっている。現に魔王に会うまで幾人の人間エルフに会ったが、俺と同じ髪の色の人に会った記憶は無い。

「そう言わなかったのはなぜか？ 簡単だ。お前以外全員が、お前の事を知っていたからだ」

「どついう事だ？ エシヤが事前に俺の事を広めていたと言っ事が？」

いや、それならば、俺の事を勇者と告げられたとき、メアやエリ

スが驚愕の表情を浮かべる理由にはならない。ということ……

「……最初から決まっていた？」

「正解だ。黒髪の人間が勇者だと言う事は、大昔から決まっているんだよ。魔王の俺も例外じゃない」

「なんでだよ。それじゃ、なんで皆黙ってたんだ？ それに黙っているならエシヤが俺に直接勇者であると告げた理由がわからない」

「さあな。えと、エシヤ、だっけ？ 確か預言者だったか。そいつの意図はわからん。だが、お前に黙っていた理由なら判る」

「理由って何だよ？」

「お前なんで勇者候補生がいるかわかってるか？」

「……魔王を倒す戦力育成じゃ……ないよな？」

「無いな。そもそも、黒髪の者が勇者であることは大昔から決まっている。そしてそれは事実なんだよ。じゃあ、候補生は何のためにいるか？ それは勇者を騙すためさ」

「騙す……為だと？」

「そう。勇者は一人ではないのだと。そう思い込ませるためにただ擬似的に存在するもの。それが候補生達だ」

突如大きな足音が聞こえすぐに聞こえなくなった。振り返ると、何時の間に戻ってきたのか大柄のゴブリンに羽交い絞めにされたエリスがもがいている。

それを止めようと言葉を出そうとする。

「何度も言わすな。危害は加えない。ただ邪魔をさせないためだ。俺は話をする事しか興味が無い」

「……判った」

渋々頷く。確かにエリスを羽交い絞めにしてているゴブリンはただ動きを止めているだけに見える。今も、じたばたと動き回るエリス

を拘束している。

「理由は簡単だな。勇者にただ、魔王を倒させる存在にするため。以前、今のシステムが出来る前は勇者だけが魔王を倒せる唯一の存在だと勇者自身が知っていた事もあった。だが、その為に問題が起きたみたいだな」

「嫌な予感しかしないが、先を話してくれ」

「まあ、先は予想できるな。ただ、平和を望む勇者だけとは限らない。もし、それ以外の目的を持つていたなら、人間やエルフ、果てはドワーフにとって脅威なのは魔王より勇者の方だつて事だ」

「だからこそその、今のシステムつて訳か……？」

「それだけじゃない。従者、その娘の存在意義はなんだ？」

「仲間……。それに、俺に力を与えているんじゃないのか？」

「逆だ。あれは勇者が魔王を殺すかどうか監視しているんだよ。従者とは名ばかりで、実質は監視者さ。おかしいとは思わなかったか？ お前以外の勇者候補生の従者はあの宝石を身に着けていたか？」

指差す先にはエリスの胸元に光る宝石があつた。蠟燭の光を反射しその存在を強調している。

俺は自身の少ない記憶を辿った。

「……たぶん、付けていない」

「そういう事だ。あれはお前との盟約と制約の証。勇者の力を抑え、果ては強制的にその意思を変える力を持つ呪いの触媒だよ。今迄、お前はこう思っていたはずだ、魔王を殺す、其れが俺の使命だ、とな」

そう、確かに俺は魔王討伐を使命だと、それが義務なのだと、思っていた。それはあれが原因だったのか。判らない。どれが正しいのか。ひょっとしたら、魔王が言っている事は全て嘘なのかもしれ

ない。けれど、今の所否定すべき点は見当たらなかった。

「つまりは人間達はお前をただ魔王を殺す道具として騙し、利用して、そして終いには見捨てるつもりだったのさ」

「……例えそうだとしても、見捨てるとは言いすぎじゃないか？」

「いいや、見捨てるつもりさ。間違いないね。人間達は知ってるんだ」

「知ってる、って何をだよ」

「俺達が」

「……や、やめて！」

声が言葉を遮る。喉から何とか搾り出したかのような声には切実さを感じた。魔術で抑えられた声を無理やり出した成果咽てしまっている。エリスは其れほどまでに俺に話を聞かせたくないのだろうか。

再び声を上げようとするエリスの口をゴブリンの掌が押さえた。もごもごと声にならない音が漏れている。

「話を戻すぞ。人間達が知っているのは俺達の末路さ」

大昔から繰り返された勇者と魔王の戦い。それは後世に受け継がれている。だが詳細は伝えられていないと聞いたが、それも嘘なのだろうか。

「俺達は、いやお前は魔王を殺した後どうなると思う？」

「……」

「殺されるんだよ人間達に。魔王を殺せるのは魔族と勇者だけ。勇者を殺せるのは魔王と人間達だけだからな」

「な……なんだと？」



そういえば、今まで受けた傷は全て人間、或いはエルフたちによるものだけだった気がする。それは偶然なのか必然なのか。

「理由は先に言った事だな。対象を失くした勇者程扱いに困るものは無い。その力は魔王を倒すほどのものなのだからな。反旗を翻したとあっては人間にとって害悪でしかない。まあ、俺もそれを知ったのは最近だがな。人間達がひたすら隠し続けていたその事実を知ることが然程困難ではなかったのだがな。情報は漏洩するものだしな」

「い、意味がわからない。お前の言っている事を信じろって言うのか？」

「まあ、全ては難しいだろうな。だが、考えてみる。お前、全くおかしいと思わなかったのか？」

「な、何のことだ」

「ローウエルでの召喚魔術の傷跡が全く騒がれなかったこと。お前の黒髪、容姿に触れられなかった事。まるで魔術を使用せずにて得ているお前の身体能力の事。明らかに異能である召喚魔術を追及しない事。勇者の詳細が伝えられていない事。今のシステムの目的。それ以外にも色々在りそうだが。お前自身のお前自身に対する矛盾もあるな」

「そ、それは……」

「なにより、もし身近な人間が記憶を失くした場合気付かないと思うか？」

エリスを見る。一瞬だけ互いの視線が交錯した。だが、すぐさまエリスは俺の視線から目を逸らした。

「人間達がお前にした事とお前が召喚魔術を得た理由は恐らく一緒ではないがな。俺自身も力を有しているが、その理由は不明瞭だ」

「じゃあ、俺は……俺はなんなんだよ？」

「強制的に勇者をやらされている、哀れな少年だな。……俺も変わ  
らないがな」

瞳に憂いを帯びている。悲哀、だろうか、或いは自嘲とも思える  
笑みを浮かべる魔王に今は殺意を抱いては居なかった。ただあるの  
は、無気力な感情だけ。エリスの行動を見れば嘘ではないのだと判  
る。全てを信じる事は難しいが、それでも、エリスが俺を騙してい  
たことは事実なのだろう。

「まあ、大体俺が知っている事は話した。さて本題だ」

「まだあるのか……」

「質問と言うか、これは頼みかな」

「なんだ、言ってみろ」

今迄同年齢の少年だと思いついてきた魔王の表情は一変し、薄ら  
寒いものを感じさせる笑みを浮かべた。それは、悪戯を思いついた  
子供の表情であり、だが、その内容は鼓動を早くするには十分すぎ  
るものだった。

「一緒に人間を滅ぼさないか？」

## 揺れる心

俺の思考は暫く停止していた。以前に仲間には誘われた事があったが、まさか率直に言葉に表してくるとは思わなかった。完全に虚を衝かれ、瞬きを繰り返す事しか出来なかった。

「なんだよ。反応薄いな」

「……当たり前だろ。何を言っている？ 俺は勇者だぞ」

「そんな事知っている。その上で話してるんだ」

「何故だ？」

「俺はお前の力が欲しいんだよ。お前は俺と同じ境遇でしかも人間に騙されていたって訳だ。人間側に付く理由は見当たらないと思うが？」

「……」

以前とは違い、即答できなかった。もちろん、人間を滅ぼす、などと言う考えに賛同は出来ない。だが、それでも、人間の為に俺が命を賭けて戦う必要があるのかという疑問を持っていた。しかし、それは魔王の話が全て事実だった場合の考えだ。

「お前の話の全てを信じたわけじゃない。それに、クリミアの王妃の件を忘れたのか？ お前も同じような仕打ちを俺にしているじゃないか」

「まあ、それについては否定できんな。最善の方法とは言えなかったが、お前が俺の仲間になりやすいようにしたんだがな」

「その為に、王妃を殺し、殺害の嫌疑を俺に掛けたって訳か」

俺は出来るだけ魔王に対し嫌悪感を抱いている表情を浮べた。事実、俺自身魔王のその行動に理解を示すことは出来なかった。いや、

そもそも魔王なのだから事情が在って人間を殺す訳ではないのだから。俺の概念は魔王と話す前に比べると基準が変化している事だと気付く。

「俺の行動には理由がある。人間のようにはただ醜いから、理解できないから殺すなんて安直な考えは持ち合わせていないんでね。まあ、理由が在っても正当化するべきではないと思うが」

奥歯に物を挟んだように感じる物言いは俺の疑念を解消してはくれなかった。魔王はその全てを話す気は無いようだ。いや、そもそも話している内容にも嘘を含んでいる可能性もある。鵜呑みにしてはいけない。だが、その全てを否定するべきでもないと感じていた。

「どうも、事の全てを話す気は無いようだな」

「悪いね。俺は嘘は嫌いだが、黙っておく事は美德だと思っている。そもそも、全て教える必要も義務も無い」

「それはそうだな……。とにかく、さっきの問いだが即答は出来ない」

「……確かに急過ぎたな。いいだろう。人間の世界に戻ってしばらく考えてみる。返答はその後でも構わない」

「…ああ。判った」

俺は渋々頷いた。それでも返答出来なかったのは人間に対する猜疑心を魔王の言葉によって生み出していたからだ。

「つと、最後の一つ」

「あ？ なんだよ……」

「お前日記は？」

「日記？ 何の事だよ？」

俺の問いには答えず、魔王は俺の言葉に満足そうな笑みを浮べ頷いている。俺はその意図が判らず、苛立ちを隠せないで居た。

「ちっ！ もう行くぞ」

思わず舌打ちをする。魔王の態度に業を煮やした俺は踵を返し、扉へと向かった。

「……いい兆候だ」

魔王が何か呟いたことは判ったが、その詳細までは聞き取れなかった。聞き返そうとするも、何か物思いに耽っているのか、完全にこちらを認識していない。

俺は嘆息し振り返ると、エリスの拘束は解かれたただ立ち尽くしていた。所在なさげに視線をきよろきよろさせている。

「リリア。送ってやれ」

「はい」

何時の間にか魔王は先の時と同じ体制で此方を見下ろしていた。リリアは魔王の言葉に恭しく頭を下げた。着いて来る様にこちらに合図を送ってくる。俺はリリアの跡に着いて行く。

肩口に後ろを振り返ると、俯き加減にエリスも後を付いてきていた。

「魔王様の話が信じられないかしら？」

「どうかな。自分の目で見てみない事にはなんとも言えないな」

「そう……。ならば、プロルフエルの図書館に行きなさい。そこ  
の最奥部にある書物にあなたの知りたい情報が記載してあるわ」

「……一応覚えておく」

リリアは不満げに頷く俺を見て興味なさげに正面に視線を向けた。俺の胸中は穏やかではなかった。というより、混乱している思考をどうやって正常に戻すか思考している所だった。その時点で正常なのだとは気付くのに幾許かの時間を要した。どうかしている。

暫く進むと、見覚えのある魔方陣を視界に入れた。

「さ、入って」

俺は言われるがまま、魔方陣に足を踏み入れた。それに倣ってエリスも足を踏み入れる。

「この魔方陣はあなた達を送った後消失するわ。暫く経ったらこちらから連絡するから、そのときに返事を頂戴」

「暫くつてどのくらいだよ？」

「そうね……。2ヶ月つて所かしら？ あなたにも時間は必要ですよ？」

「そう、だな」

リリアの言葉に頷いた瞬間情景は一瞬で変わっていた。気を利かせてか郊外へと転送してくれたみたいだ。クリミアの街の外壁が遠くに見える。月の明かりにのみ照らされ夜の帳を下ろしている。先に感じた嘔吐感を一切感じない程、地に足が着いていない感覚を覚えた。

俺とエリスは只管、無言で歩を進めた。暫く歩いた後、ふと足を止め、エリスも釣られて足を止めた。

「……さっきの話、本当か？」

「……」

俺の言葉に返してきたのは沈黙のみだった。苛立ちを隠せず、それでも表面上は平静を装い冷静に言葉を繋げた。

「話したくないのか？」

「……話せないの」

「……そうか」

エリスの言葉で全てを理解する、なんていう事は不可能だ。何が理由で話せないのか、ひよっとしたら、深い事情があるのかもかもしれない。だが、そんなことは俺の知る所ではない。例えのつぴきならぬ事情であろうとも、俺を騙していたと言う事実はエリスの態度によって白日の下に晒された。

記憶を失くし、何も無かった。それでも今迄進んで来れたのはエリスの、仲間のお蔭だった。一人で居たなら途方に暮れていたかもしれない。

信じていた。それは、エリスも同じなのだと思っていた。それは記憶を失くす前と失くした後の俺の傍にはエリスが居てくれたからだ。だが、それは違っていたらしい。俺の一方的な思いは虚空に消え、ただ自己満足として存在していただけに過ぎなかったのだろう。

俺は歯噛みした。俺と言う人間は、なんなのだろうか。なぜここにいるのか……。

混濁した意識に依る自問自答は終わりを知ること無く、俺の足は何処へ向かっているのか自身でさえも見当が付かなかった。

\*\*\*\*\*

どのくらい歩いただろうか。空は白んできている。朝日が昇り、頬には暖かい光が射している。臃げな足取りで進んでいた道程を振り返る。何時の間にかクリミアはまるで陽炎のようにその輪郭を明確にしなくなっていた。それ程距離を離していたのか。

ふと、視界の端に何か動くものを認識した。エリスだった。終始無言で足を動かしていた俺に只管着いて来ていた様だ。

そんな様子を見ても俺の心はなにも感じなかった。

「そうまでして監視したいのか？」

「……」

「なぜ何も言わない？」

「ごめんなさい」

「なぜ謝る？」

「……話せないから」

激昂しそうだった。俺を騙していた事実に対して、その理由も言わない。ただ後を着いて来るエリスに憤りを感じた。それは俺を監視する為、ただそれだけの為に着いて来ているのだ。俺の記憶が無いのを知っていて、表面上は何も知らない振りをしていたのだ。それはエリスだけではない。メアもシルフィもアガムも皆、知っていたのだ。知らなかったのは俺だけ。俺だけだった。

ああ、そうだ。ひよっとしたら、エリスは何も悪くないのかもしれない。俺を騙していたのも、今監視しているのも、記憶消失に対して気付かない振りをしていたのも、全て誰かの、何か大事なモノの為なのかも知れない。でも、だからと言って、それを受け入れる事なんて出来ない。俺は何も知らない。知る事も出来ない。なら、誰を信じて、誰を信じないか、決めようが無いじゃないか。

記憶が殆ど無いのだから。



家族の顔も、友人の顔も知らない。誰かと共に培った時間を持たない俺には、何があるというのか。

「……何も無いな」

「え？」

自嘲気味に答える俺の言葉は呟きとして喉を鳴らしていた。俺の言葉を聞き取ることが出来なかったのだろう。エリスは聞き返してきた。だが、俺の耳にはその言葉でさえも響いては来なかった。

「ど、どこに行くの？」

エリスの言葉にふと我に返る。無意識のうちにクリミアから相当の距離を歩いている。確かに何処に向かっているのだろうか。自信の動揺の程を感じ取り、自嘲気味に笑みを浮かべた。

その様子を不安そうにエリスが見ている。その胸中を俺には知ることが出来ない。知ろうとさえ思えなかった。自暴自棄になっているのか、無気力になっていく自分の心を冷徹に見詰めていた。

「何処だつていいだろ。もう一人にしてくれないか？」

「そ、そんな訳にはいかないわ」

「何故？」

「それは……」

「話せないんだろ？ もう、うんざりなんだよ！」

エリスの肩がびくつと揺れた。俺の声は辺りに響き木霊する。少しずつ、今迄鬱屈していた感情がにじみ出て来るのを感じた。必死に其れを抑える。なぜ、こんな時でも理性で感情を押さえ込むのか。

「お、落ち着いて」

「ぐっ！」

急激な眩暈に激しい頭痛を覚える。余りの激痛に足が折れ、倒れ込みそうになるのをエリスが支えてくれた。耳鳴りで辺りの音が蹂躪され、規則的な痛みを持って俺を苛んだ。こんな事が前にもあったような

気がしたが、記憶は曖昧すぎてその疑問もすぐに露と消えた。

エリスに抱き締められる。突如溢れた感情に伴う痛みは俺の理性の箍を緩めた。

「なんで俺がこんな目に遭わなきゃならないんだ……」

「……」

「俺が何をした？ 何も知らないのに。何も無いのに。何もかも信じられないのに。何の為に戦ってるんだ？ 記憶を失っても、傷ついても、其れを疑問にも思わず、なんで戦ってきた？ 教えてくれ……。俺は何なんだ、誰なんだ……？」

「ヤマト……」

俺の嘆きを伴う問いにも頑なに口を開かないエリスを見て今まで抑えていたものが溢れた気がした。

そうだ。なんの意味も見出せないなら、意味を持つていたと勘違いしていた頃の俺に戻ればいい。簡単な事だったんだ。

俺は無言で立ち上がり、歩を進めた。

「ヤマト……？」

エリスの声を無視して、左腕を前に出す。肘から先に感覚が無くだらりとしている。それをなんの感慨も無く見据え、代わりに右腕を正面に差し出す。同時に見慣れたゲートが目の前に現れた。無機質な物でしかない異常なそれに身体を預けることに躊躇しなかった。

俺の所作を見てエリスが慌ててこちらに走り寄ってくる音を聞いた。俺の近くに来たと思っただけならすぐさま俺の身体を羽交い絞めにしてゲートから腕を取り出そうと四苦八苦している。

「なにをしてるのよ！」

「記憶をさ、消そうと思っただけ」

「なっ！」

「馬鹿みたいに魔王を倒そうと思ってた頃の自分に戻ろうと思っただけ」

「そんな事してどうなるのよー！」

「楽になれる。何も考えなくていいから。それにお前もその方がいいんじゃないか？」

「どういう事よ？」

「監視しやすいだろうって事さ。希望通りの勇者に戻る」

「なんで、そんな事言っただけ……」

嗚咽を含んだ声色を耳元で聞いた。なぜ、悲しむのか判らなかつた。それはエリスの希望通りのはずなのに。俺の記憶が無くなるだけなのだ。なんの問題も無いはずなのに。

俺は動揺したのか、無意識にゲートから手を離し呆然と立ち尽くしていた。瞬時に跡形も無くゲートは消えた。

「以前のあなたはそんな事を言わなかったわ！」

その言葉を聞いた瞬間俺の何かが音を鳴らして壊れた。他に何も考えられないほど、無気力にただ自暴自棄に全てに対して関心を失った気がした。

「以前の俺ってなんだよ？」

「あっ……。それは」

「知らねえよ！ お前も知ってるんだろ、俺は記憶が無いんだからな！」

「ご、ごめんなさい」

確かに記憶を消しても何も変わらない。判っている、現実逃避なんだって事は。だが、記憶に無い過去の自分を引き合いに出されて平静で居ることは出来なかった。しかも、今迄騙っていたエリスの口から聞いたのだから、無感情で受け止めることは出来なかった。沈黙が辺りを占める。もう、無駄なのだろう。何を言っても解決しない。ここで、何をしても何も変わらない。

俺は抑えきれない感情を少しずつ和らげることにして、無言で歩を進めた。慌てて後を付いてくる気配を感じ、それを意識しないように足を動かした。

リアアが言っていたブルフィールドへ行つて確かめるしかない。全ては其れからだ。俺は何も知らない。知ろうともしなかった。ならば、今なのだろう。知るべき時は。

やり切れない思いを抱きつつ、凡庸な景色を眺めていた。

\*\*\*\*\*

どの位歩き続けたのだろうか。機械的に足を動かし続けて尚、俺の足は疲れを知らない。勇者の恩恵、強化の魔術。逸れは、以前感じていた高揚感を伴わず、今では呪いのように感じる。

一日中は歩き続けたみたいだ。辺りは再び夜の帳を下ろしている。其れほどまでに心ここに在らずといった状態で時を費やしていたみたいだ。

そんな事を考えながらも足は規則的に動き続ける。俺の歩幅は身長から行ってそれ程広いとは言えないが、それでも歩調は速い。しかもその調子を遅くする事は無い。

ふと後ろを振り返った。視界から消えそうになりそうな距離でエリスが息も絶え絶えで後ろに着いてくる。足元が覚束無いが、逸れは徒歩ではなく、もはや駆け足であると言えた。長時間、遅めとは言え俺の速度に付いてきている事に驚きを隠せない。

「もう着いて来なくていいって！ クリミアに戻れ！」

俺は何度言ったか判らない言葉を放った。今迄、何回もエリスに戻るように言った。それでも、俺の後を付いてくることを止めない様子を見て胸の奥がチクリと痛んだ。

何故ここまでするのか判らなかつた。其れほどまでに俺を監視しなければならぬ理由があるのか。判る筈も無い。エリスは話さないのだから。それでも、譲れない理由がある事だけは判った。

俺は少しだけ罪悪感を感じていた。エリスを信じた訳じゃない。許した訳でもない。けれど、それでも今のエリスを見て何も感じずに居れるほど無感情ではいらなかつた。今迄一緒に居た時間だけは無くなったりしないのだから。

足を止めていた俺の元に漸くエリスが辿りついたと同時に倒れこんできた。俺は其れを抱きとめた。足が痙攣を起こしてしまっている。当たり前だ。一日中、遅めとは言え走り続ける事はこの少女には荷が重すぎた。

意識を失っているのか、荒い呼吸を繰り返して何かを呟いている。

「う…めんなさ…い」

只管、反芻している言葉を聞いている内に頑なに閉ざした心が少

しだけ氷解した気がした。

ただ、俺を監視するためならここまでする必要は無いだろう。やはり、特別な理由があるらしい。例え俺自身の思いを無視した理由だとしても、ここまで健気に真っ直ぐに遂行としようと言うならば、無理に拒絶しなくてもいいのかもしれない。

それにエリスは俺の問いを流す事無く真面目に答えていた。嘘も何も無く、ただ答えることが出来ないこと、謝罪を繰り返していた。

「真面目だよな。エリスは」

不器用で、真っ直ぐな少女に好感を抱く。判っている。それも一方的な物なのだ。だが、荒んだ心で受容する気も無く、エリスを見習って自身の感情をただ受け止めた。

「それに、俺は単純だ」

先程まで憤りを感じていた自身の感情は薄れ、見る影も無い。自分でも思う、単純思考ですぐに感化される。だからこそ今迄の過程である、という事か。

思わず笑みが毀れる。自身の道化つぷりに自嘲気味な表情を隠すことが出来ない。だが、それでもいいのだろう。複雑に考えすぎて猜疑心の塊になるよりは、俺は単純馬鹿で居ることを選ぶ。

信じる事は難しいけれど、拒み続けることは止める事にしよう。

俺は意識を失っているエリスを背負って先を進んだ。背中に感じた鼓動は早鐘のように鳴り響き、それはまるで俺の心臓が鼓動を速くしているかのように錯覚させた。

過去の記憶を（前書き）

エリス視点です。

## 過去の記憶を

夢を。夢を見ていた。それは過去の記憶。忌々しく苛む病魔のよ  
うに未だに私を蝕んでいる。

決して忘れる事の出来ない記憶を忘れる事が出来れば、どれ程心  
は軽くなるのだろうか、何度も考えた。けれどそれは決して許され  
無い、許さない。それは私の存在する理由、ここに居る理由。

私は貴族として生まれた。それなりに上流階級の家元に生まれた  
らしい。けれど私にとってその記憶はほとんど無い。両親の顔も、  
家族の顔も臙げにしか思い出せない。ただ一人だけ、妹が居た。そ  
の顔も声も鮮明に覚えている。

妹の名前は、セドナ。病弱で、生まれてからもずっと寝たきりの  
生活を送っていた。片手で数える事が出来るくらいの年齢のセドナ  
は部屋の中から出る事は滅多に無く、其処だけがセドナにとっての  
全てだった。

私はそんな妹といつも一緒にいた。他愛も無い話をし、本を読み、  
時間を過ごした。思えばその頃が一番幸せだったのかもしれない。  
その記憶は薄れ、鮮明さを失っても尚、輝きを失う事は無い。

どのくらい経っただろうか。数年後、私とセドナは孤児院へと預  
けられた。その時は幼かったし理由も解らず、ただ周りの大人達に  
連れて行かれたのを覚えている。その間、セドナと私はお互い手を  
握り締めていた。お互いの存在を押し寄せる不安で消されないよう  
に。頼りない私達の存在を繋ぎとめて置けるように。

気付けば陰鬱な雰囲気建物の前に立っていた。そこは孤児院と  
は名ばかりの収容所。監獄。知らない大人達に連れられ、私達は殺  
風景な一室に存在していた。周りには見知った人物は一人も見当た  
らない。そこには様々な容姿の、私と同じような年齢の子供達が数



十人押し込まれ生活していた。

種族、性別、髪の色全て異なる年端もいかない少年、少女達は皆一様に不安そうにしていたのを覚えている。半分程の子達は泣き叫びただ両親の名前を呼んでいた気がする。

セドナも不安そうに私の手をぎゅっと握っていた。微かに震える暖かみのある小さな手を私も握り返していた。

「静かにしなさい」

見ると部屋にある唯一の扉が開け放たれ、一人の老婆と大人の男性二人が立っていた。

落ち着いた声色でそう言い放つ老婆は厳粛とした雰囲気醸し出していた。その時の私はただ震え、老婆を見据えていた。

老婆の言葉を聞いて感情の抑制を失った子供達が泣き喚き、声を張り上げていた。その様子を全く動じる事無く老婆はその冷徹な瞳で突き刺すように視線を送る。

「二度は言いません。言う事を聞かない者には処罰を与えます」

処罰、という言葉聞いて理解した者が何名居たのか。その言葉にも沈黙を齎す力は持ち得なかったらしい。先程と変わらない状況のまま暫くの間が過ぎた。

「よろしい。では、貴方達は別室行きです」

そう指し示された子供達は老婆と共に現れた男達にどこかへと連れられていく。慟哭と言っても過言ではない程の音量で子供達が拒否感を露にする様子を歯牙にも掛けず、無表情でただ連れ去っていく男達に恐怖感を抱いた。

「あなた達は従者候補生として選ばれました。勇者の従者としてここで訓練を行います」

まるで何も無かったかのように振舞う様子は、同じ人間なのかという疑問を齎すには十分過ぎた。無機質な物、人形ではないかと疑いたくなる程、表情にも態度にも感情を感じない。

私たちは呆気にとられた様子で老婆の声を耳に入れる。まだ字を覚えてたの子供に教えるような言葉使いではない。

「初めに言っておきますが、ここから出る事は出来ません。貴方達は許可が下りるまでここでずっと暮らすのです」

「あ、あの」

淡々と言葉を紡ぐ老婆に意を決して声を掛ける。その瞬間、無感情な瞳が私を見据え心臓が飛び跳ねる。

「なんですか……?」

「きよ、許可が下りるまでって何時までなのでしょう?」

普段から言葉遣いに気をつけるように教育されていた私は比較的流暢な敬語で疑念を伝えた。けれどその声は震え、その瞬間、自身の動揺を知る。

「一人前に成るまでです。そうですね……。早くてあと十年くらいでしょうね」

十年。十年間、ここに居なければならぬ。その途方も無いほどの時間を言葉で聞いて目の前が真っ暗になった。何処かも分からない、知らない大人達に囲まれ、従者の訓練とやらをこなす生活を十年も。

ふと、先程の子達が気になった。連れて行かれた子達はどうなったのか。

「質問は以上ですか？」

「は、はい」

「そうですね。疑問を持つことは良い事です。私達は感情を持った生き物なのですからね」

満足そうに抑揚に頷いた老婆には感情を感じない。けれど、先の言葉から、それは勘違いなのかもしれない。当たり前だ。生きているのだから、例え乏しくとも感情が消失する事は無いのだから。

それから私達は訓練所での生活を始めた。長い、途轍もないほど長い日々を過ごした。辛く凄惨な日々。何度逃亡を計ろうと画策したか分からない。それでも逃げ出さずに居たのはセドナが居たから。妹の存在が私を励まし、私をこの場所に拘束した。

セドナは訓練所に来てから、体調を良くしたのか、以前とは考えられないほど健康になっていた。元気に走り回る妹の姿を眩しく見つめる事が出来る事実だけには感謝の念を抱いた。

今までの鬱憤を晴らすかのように、セドナは走り回っている。その首には私の物とは違う異色の宝石を嵌め込まれた首飾りが掛けられている。碧色の宝石。それが何を意味するのか見当も付かなかった。

\*\*\*\*\*

泣いていた。頬を擦る感触は瞳から溢れ出る涙のものだったのだと気付いた。

あの頃の自分に戻れるなら、もっと違う選択をしただろう。その傍には妹が居て、きつと二人とも笑える未来が在ったはずなのに。分かっている。後悔なのだ。悔やんでも仕方の無い事だと。それでも思ってしまう。それが人間と言うものなのだと思う。

体が揺れる感覚を覚えてやっと自分が背負われているのに気付いた。目の前に見える黒髪はただ一人の少年を指し示していた。

ヤマトの左手は肘から先が動かないようで、右腕で刀を持って私の全身を背負っているらしい。異常な筋力だと思う。それを可能としているのは、勇者の恩恵だと言う事は既に知っている事実だった。再び、左手を視界に入れる。見ていられない。触れない様にしていたけれど、やはり気にならない訳がない。治せるものならすぐに治すのに、見るだけで分かる。あれは、治らない。治せない。やり切れない思いを抱いたまま、再び黒髪の少年を見据える。置き去りにしても良かったのに……。

私の自嘲気味な思いとは裏腹にヤマトは堅固な足取りで歩を進めている。

お人好しで、他者の為に自分の危険を厭わない勇敢さも持っている。強くて、勇敢で、そして弱い人。いつも、壊れそうな心を繋ぎとめるのに必死でその存在の理由を探している。気付いていた、知っていた、それでも話せなかった。そんな自分に嫌気が差す。

ふと首飾りを視界に入れ、洪面を浮かべる。赤々と光を放つ美麗な宝石は私にとっては美しさを感じる事は出来なかった。私を縛る鎖と同義であるその首飾りの触れる感触に嫌悪感を抱く。けれどもそれは私を縛る物であると同時に救う物でもあるのだと知っていた。

ふと気付く。体が暖かい。他者の肌に触れると安心する。先程ま

で感じていた重たい感情を払拭していく。けれども誰でも、という訳ではない。セドナにも感じていた思いをヤマトにも感じ出しているからだろう。触れた背中中は広く、逞しさを感じた。以前にもこんな事があった。けれどもその時には今みたいな感情は持たなかったはずなのに。瞬間、自分の考えに気恥ずかしさを感じて急激に顔の温度が上がる。

「ん？ 起きたのか？」

思ったより身体を動かしていたのだろうか。ヤマトが声を掛けてきた。先と同じ状態で動きを止めた。狸寝入りに耽る。私の演技を事実と受け取ったのか、何も無かったかのように再び足を動かしました。

私はヤマトの体温を身体に感じながら、安寧な時間を過ごし、再び眠りに着いた。あと少しだけ、このままでいたいと思ってしまった自分に罪悪感を抱きながら。

## 出会い

「ねえ、プロルフエルドまでの道は分かっているの？」

「……知らん」

これ見よがしに嘆息するエリスに対して踏ん返り返る俺。正直勢い込んでここまで来たが行き当たりばったりで進んでいたと言う他無い。

あの状況では冷静で居る方が難しいと思う。そう思いたい。俺は自分に言い訳をしつつエリスに視線を向けた。

今ではさっきのように殺伐とした雰囲気は全くない。あの状態から今の状態に落ち着いたのはお互いの歩み寄りがあったからこそだろうと思う。俺はエリスを完全に信用したわけじゃないし、エリスも俺に全てを話さない。けれど、俺はエリスの今までの所業を許し、エリスは俺の先の憤りに依る所業を許した。そうして今の俺たちが居るって訳だ。

心なしかエリスの言葉に親しみを感じる。今までは無感情に思える場面が多かったが、今では地に近いのだろうと思える声質に変わっている。かくいう俺も見えない壁を感じる事は少なくなっていた。お互い心の内を少しでも吐き出すことが出来たからなのかもしれない。ほんの少しではあるけれど。

「クリミアからだったら方向は合っているわね。距離も徒歩なら十日で着くくらいのものだし」

「ん？ じゃ、間違っていないんだな」

「けれど着の身着のまま来たから、食料は現地調達だし、それに」

上着の袖を引っ張って此方に全身を見せてきた。その格好は決して暖かそうには見えない。

「服も薄いわ。ここら辺ならまだいいけど、ブロールフェルド周辺なら凍えちゃうんじゃないかしら」

「そだな……」

そういつとエリスは腰に着けていたポーチから地図を取り出した。俺と違って常備しているらしい。それに倣って一応俺もポーチ内を探る。

「ん、なんだこりゃ？」

中には見覚えのない日記のような物が入っていた。それ以外には身分証明書のようなものが入っている。まるで他人の持ち物を探るような感覚に違和感を覚える。

俺の思考を無視してエリスの言葉が鼓膜を揺らす。

「それより、これ見て」

「ん？ なに？」

地図上にはブロールフェルドとクリミアの間にちらほらと建物のような物が見える。どうやら、途中に村があるみたいだ。俺はエリスの意図を汲み取り返答した。

「ここに寄るしかないか」

「そうね。幸い、まだお金には余裕があるし。そこで必要なものを揃える方がいいかも」

「了解」

辺りは針葉樹が茂りだしている。俺達は目の前に存在する森林へと足を踏み入れた。

\*\*\*\*\*

「そろそろ野営の準備しよっか」  
「そだな……」

辺りは日が落ち始める時間帯になっていた。日が落ちてから移動するのは危険だ。今の時間から野営の準備をする事は必須であると言える。

エリスはそういってポーチから、小さな石を取り出した。俺は逸れに倣って、辺りから適当な薪を集める。枯れ木を十数本ほどエリスに手渡すと、薪に石を投げ入れる。瞬時に発火し、焚き火を起す。

以前ランタンを灯火した時と同じようなものだろう。石にも発火の術式が描かれているのだと思う。エリスは折りたたみ式の調理具を取り出している。何度か目になっているが、どういう仕組みなのか未だによく分からない。掌大の軟体物が一瞬にして鍋へと変貌する。其れを何回か繰り返し、調理器具と食器が揃った。

確か物体の硬度と質量を変える魔術と元の形を記憶する魔術を掛けていたとか言っていた気がする。厳密には錬金術に相当するらしいが。

けれども、そんな魔術にも弱点は存在するらしい。物質に対しても生物に対してもその性質を変えることは出来るが、物量を変える事は出来ないらしい。要は在る物を失くしたり、無いものを増やしたりは不可能だった事だな。前にプロルフエルドでメンテルが矢を増やしていた気がするが、あれは神力だったのかな。それに転移に



関してはその限りではないのか。あれは移動であって変化ではないのだから可能なのだろうか。科学より便利なんじゃないか、という俺の思いを言葉に表すことはない。

それよりも今は食事の調達と薪の調達をしなければならない。

「んじゃ、飯取ってくる」

「ん、頑張つて」

あつけらかと答えるエリスに手を振って辺りを探索した。

\*\*\*\*\*

焚き火を介在して二人地面に座っている。両手には暖かいスープが握られている。

「……緑が欲しいわね」

「贅沢言つな。山菜の知識は無い。適当な植物入れてみるか？」

「遠慮しておくわ」

洪々スープに口をつけるエリス。具は俺の獲つて来た猪の子供、うり坊のみだった。料理酒などが無いため、やや臭味があるが美味い。唯の肉のみの煮込み鍋なら食べられた物ではないかもしれないが、エリスが調味料も持つて来てくれたので助かった。固形状のスープの素を入れたお陰で味に深みが出ていい感じだった。というかこの世界にも存在するのか。さすがは味のも……。いや、皆ま

で言っまい。

空腹を感じていたのかエリスも俺もすぐに平らげた。

「ああ。そういえば近くに入れそうな泉があったぞ」

「ほ、ほんと？」

「ああ。案内しようか？」

「うん！」

目をらんらんと輝かせ何度も頷く。嬉々とした表情に思わず笑みが毀れる。それほどまでに嬉しかったのだろうか。まあ、旅に出たら数日沐浴出来ないからな。男の俺は我慢してもいいが、女のエリスにとっては苦痛だろう。こういう機会でないと体の汚れを落せない。普段は湯に浸した布などで身体を拭くのだがそれでは綺麗に垢を落とすには至らない。

そういう俺もいい加減、体の汚れを落したいと思っていた所だ。立ち上がる俺に続いてエリスが着いて来る。その足取りは軽い。

「ふんふくん。おつふる〜」

「いや、お風呂なんて豪華なものじゃないけどね……」

「じゃ、みっずあつび〜？」

「風呂わるっ！」

いつの間にか人格が変わっている気がする。いや、間違いなく変わっている。其れほどまでに風呂、基水浴びがしたかったのだろうか。軽くステップを刻むその姿は年相応の姿だった。俺は苦笑を浮かべてその様子を横目で見ていた。

そもそも、この世界では風呂と言う概念が存在しない。と言うより、高価な物過ぎて一般民にとっては手の届かないもので在るらしい。入浴をするのは専ら上流階級の貴族のみ。それも限られた者だけと言うのだからその貴重さが分かる。

水や食料などの資源は重宝されているので、風呂に使うなんて持  
つての外らしい。

「ここだ」

「ん〜、ここなら……そんなに気にしなくても大丈夫かな」

目の前にはそれなりの広さの泉が広がっている。先程調べたが、  
水質は上々。動物も飲み場になっているらしくかつたし問題ないだろう。  
辺りをきよるきよると見回す様子は小動物を思わせた。愛らしい  
仕草とは異なりその表情は真剣だった。俺はそれを見て思わず噴出  
しそうになる。

「ん？ 何？」

「ぶ……いや、なんでもないぞ？」

「む、なんか気になるんですけど？」

「思い出し笑いだ。気にすんな」

訝しげな表情で目を細めて此方に視線を送ってくる。俺は慌てて  
取り繕う。ごほん、と業とらしく仕切り直す様に一拍置いた。

「というか、そんなに気にしなくてもこんな辺鄙な所に誰も来ない  
だろ」

「そだけど。ヤマト覗かない？」

「覗くか！」

今迄もこう言う事があった。男女一緒に旅をしているとこういう  
場面に遭遇するものだ。いや、そんなに多くは無いが。以前、プロ  
ルフェルドに向かう途中に数度あったくらいだ。

「ぶ〜ん、覗かないんだ……」

「当たり前だろ」

ちよつと残念そうに聞こえるのは俺の幻聴、思い違い、勘違いだ。そうに決まっている。そうでなくては困ります。

沈黙が訪れる。瞬時に変わった雰囲気嫌な物を感じる。

何故か心臓が内側から強く主張し始める。その頻度は次第に多くなり、まるで体中が早鐘を打つように五月蠅く感じた。同時に背中から嫌な汗が伝う感触がする。

なんだこれ。何がいったいどうなってこんな状態になっちゃったの？

こんな状態よりも、命懸けの戦いの方が気が楽だ。ただ戦うか、逃げるか、目的は簡単ではないが単純明快だからだ。

だが今はどうしたらいいか分からない。というか何もしなくてもいいのかもしれないが、何か言わないと駄目な気もする。正体の分からない緊張感に体中が弛緩する。

混乱してきた思考状態の俺を置いて、エリスが口を開いた。

「じゃ、入るからあっち行ってて」

「わ、分かってらい！」

普段使ったことも無い江戸っ子気質もどきな言葉使いをする俺を怪訝そうな表情で見据えるエリス。

それを横目にそそくさとその場を後にする。少しでも早くその場から離れたかったから。

\*\*\*\*\*

「きゃああああ！」

突如鬱蒼とした森林に響いた奇声は俺の見知った者の声だった。瞬時に其方に駆け出す。走りながら降ろしていた刀を手に取り、直ぐにでも臨戦態勢に入れるようにする。焦りの為か、中々刀を帯刀出来ない。もどかしい思いで右手を動かす。

俺は軽く舌打ちをした。エリスにはではない。自身の軽率さに対してだった。こんな場所に危険など無いだろうと高を括っていた。そもそも、人間が居なくとも魔物は居るかもしれない。猛獣の類の懸念も忘れていた。

「エリス！」

険しい表情で泉を見回す。どこに危険があるか分からない。そもそも、今のエリスの状態が心配だ。直ぐにでも確かめたい一心でその姿を必死で隈なく探す。

「ヤマト……？」

声の主を見つけた。よかった無事だったのか。傷一つ無い白い肌が月明かりに照らされている。まるで物語りに出てくる妖精のように幻想的な絵画のような情景だった。その時、一つの言葉が俺の脳裏を掠める。さっきなんて思ったっけ。白い肌？

「こ、これはどういふことかしらねっ！」

「さあ、俺にも検討がつかない。不思議なもんだ。俺はエリスの悲鳴を聞いて駆けつけた。そしたら……」

エリスは座り込んで半身を泉に沈ませ、両手で上半身を隠してい

る。

「エリスさんは裸でした！ すみませんでした！」

「とにかくあっち行って！」

「い、イエス」

動揺しすぎて言葉使いが片言の外国人みたいになっていた。俺の中のジョンが覚醒した瞬間だった。いや、ジョンって誰だよ……。なにかよく分からない葛藤をしている俺はエリスの言葉に素直に従い早々に立ち去ろうとした。

「え、えっと、大丈夫なんだよな？」

「だ、大丈夫だから」

「そか、ほんとごめん」

視線を向けず肩口にエリスに声を掛けた。とにかくエリスに大事は無かったらしい。俺は俺自身の信頼の失墜と人格崩壊の一端を垣間見たと言う大変な痛手を負ってはいたけれど。

先の事があつた為に、出来るだけ近くに位置取っていた俺はエリスが居る方向に背を向けて何度目かの溜息を吐いた。それは深く、とても剣呑なものだった。

ふと、肩に感触を覚える。

「結局、覗くんのだ」

「あ、あれは不可抗力と言うか、致し方無い……」

肩に置かれた手に力が込められるのを感じる。それだけならば決して恐怖を抱かないものだったが、ぎろっ、と此方を睨みつけてくる瞳の力は言葉を繋げることを許さなかった。一も二も無くただ謝

罪の念を伝える。

「すみませんでした」

「……よろしい」

満足そうに頷く表情は不満そうだった。どっちなんだと言いたかったが、それを言える勇氣は俺には無かった。内心未だ動揺していた俺は平静を装って言葉を放つ。

「えと、さっきの悲鳴は？」

「ああ。あれは」

そういうと、後ろから一人の少女が現れた。年端もいかない、恐らく十歳ほどだろうか。幼い容姿に、背格好は容易に凡その年齢を読み取らせた。

「迷子かしら」

「迷子？ こんな場所です？」

ブルルフェルドとクリミアの中間程に位置するここは子供が立ち入るには何も無い。近くの村、たしかにも徒歩で辿りつくには数日を要する。なぜこんなところに？

「えと、君は何処から来たの？」

俺の問いかけにもきよとんとした表情で反応を示さない。言葉が分からないのか？

疑問は答えを見出す事は出来ず露と消えた。エリスに視線を送ると、首を横に振る。どうやら、エリスも話しかけたが無駄だったみたいだ。

「とにかくこんなところに置いては行けないな」

「そうね。近くの村、えとオルクスだったかしら。そこまで連れて行きましようか」

「そだな。さすがにそれ以降までは面倒見るのは出来ないけどな」

— 先ずの算段をつけた。俺たちの会話をまったく分からないのか先程と変わらない表情で俺とエリスに交互に視線を送っている。とにかく名前だけでも知りたいな。

「ヤマト」

俺は自分を指差し名前を告げた。次いでエリスに指を向ける。

「エリス」

続いて少女に指を向けて少女の言葉を待つ。俺の意図を理解したのか表情に笑みを浮かべ白い歯を覗かせた。快活な印象を受ける表情は少女の性格を表している。小さな口から明るい声が響いた。

「セドナ」



## 微かな軋轢

その少女の名前を聞いた瞬間のエリスの表情を忘れること無いだろう。今までに見た事が無いほど驚愕に満ちた表情。呆気に取られたように行動を停止している。

「エリス？ どうした？」

「あ……。いえ、なんでも無い」

俺の言葉に我に返るように一拍置いて返答をして来た。怪訝そうにエリスを見ると、俺から視線を逸らす。なんだ？

「とにかく今日は休もう。歩き続けて疲れたし」

「そうね……」

セドナに手招きをして野営地へと連れて行った。セドナをちらちらと見ながら一緒について来るエリスの表情は硬い。知り合いなのだろうか。其れにしては言葉を放つことは無い。言葉を話せないって理由も在るかもしれないが。

どちらにしても、余り詮索するのはやめる事にした。話すべき事なら話すだろうし、話せないことは決して話さない。エリスはそういう性格なのだから。

素直に着いて来るセドナは全く警戒していないようだった。というか大丈夫か？この子。

野営地に着いた途端大きな音が辺りに響いた。その音の主を目を向ける。

「えへへ」

セドナの頬がほんのり赤くなっている。どうやら、お腹の虫が鳴いたらしい。

その仕草に思わず俺は笑みを浮かべる。

「確か、まだ晩飯残ってたよな？」

「うん。暖めなおそっか」

そう言つと、エリスは再び鍋に火を掛ける。焚き火を中心に俺達は地面に座つた。自然の暗幕包まれた森林に暖かな炎の明かりが照らされている。

\*\*\*\*\*

それから数日後やつと途中のオルクス村に行き着いた。

「あゝ、やつと着いたか」

「意外に遠かつたわね」

辺鄙な場所にあるせいか、村の様子は寂れている印象を受けた。どうやら、この世界では主に三国を中心に人間達は居住しているらしく、都心を離れた場所に住まう者達は余り多くないようだ。一応領土としては機能しているみたいなのだが、都市から離れた場所に住まう者達を都心部の住民はあまり快く思っていないみたいだ。俺の知っている国の成り立ちとは大きく違う。

税収などはどうなっているのか気になって聞いてみたが、村に対

する税は特別掛けられていないみたいだった。それで、国が成り立つのか甚だ疑問だったが、国政を知る気も無く深くは突っ込まないで置いた。

ただ、村自体に問題が出てきた時も国が介入する事も無いらしい。受容と供給を絶っているという事らしい。以前ギルドに魔物の討伐依頼が来たのもそれが理由みたいだ。

変な世界だ。それで成立っているのだから不思議だと思う。まあ、俺の少ない知識では計り知れない事柄もあるし、深くは考えないで置こう。

「さて、これから、どうする？」

「そうね。まずはセドナ……を知っている人を探すしかないわね」

「居なかつたら？」

「あるかどうか解らないけど、ギルドに預けるか、或いは……」

「或いは？」

「言葉を話せない、保護者の居ない子供の行く先は決まっているわ。孤児院か、奴隷商人に買われるか」

「どっちも願いたいだな」

「そうね。私もそう思うわ」

俺たちの話を全く理解していないセドナは周囲を見回している。

明らかに初めて来た場所での反応だった。あの様子ではこの村にセドナの知り合いがいるとは思えない。

俺とエリスは軽く嘆息して視線を交錯させる。

「まあ、そうなったら、暫く連れて行くしかないか」

「そうね……。それに、この子、奴隷じゃないと思う。焼印も無いし、服も奴隷にしては清潔だわ。恐らくただの迷子だと思うけど」  
「変な所で迷子になるなよな」

俺はそう言うと、頭にぼんつと手を載せた。セドナはきよとんとした表情で頭に載せられた物を見上げて居る。

「言葉話せないのは不便だな……。ん？　なんで話せないんだ？」

「耳が聞こえない訳でも無さそうだし、声は発していたわね。ただ単に学んでいない……？」

「いやでも、エルフも人間も共通言語だろ？　これくらいの子供が話せないっておかしくないか？」

「確かにそうね。なぜかしら？」

「考えても解らないな。当の本人が話せないし」

ちらりとセドナに視線を送る。俺たちが話している間、何が珍しいのか村中に視線を動かしている。

まるで、初めて見た物に興味を示すような態度に疑念を抱く。

「とにかく知人がいるかどうか、探すだけ探すか」

「ええ。解ったわ。それに衣服と旅の支度もしないとね」

俺の意見に頷くエリスの表情は未だ思考に耽っているかのように見えた。

\*\*\*\*\*

結局オルクス村にはセドナの知り合いは居なかった。村の者一様に首を横を降るだけだった。

「はあ、お前何処から来たんだ？」

俺は思わず嘆息を漏らす。それ程広くない村ではあるが、半日歩いて精神的に疲労を感じてしまった。

ちなみに、衣服と食料を用意したお陰で懐は寒々しい物になって  
いる。

村にある唯一の宿に宿泊手続きを終えて荷物を二階にあるお互いの部屋へ置いてきた所だった。

やっと一息付ける状況になって、俺達は一階にある酒場の円卓に付く。硬い腰掛に体重を預け体の力を抜く。

「結局見つからなかったわね……」

「ブルルフェルドまで連れて行くか……？」

「あまり賛同は出来ないわね。連れて行くには幼すぎるし、危険も多いわ」

「だよなあ、かと言って」

「ここに置いていく訳にもいかないわね」

俺たちの視線を感じて此方に寄ってくる。態々自身の座っている椅子も横付けしてきた。何を思ったのか笑顔で俺に擦り寄ってくる。俺の腕に絡み付いて離れない。

「ちよ、くっ付くな」

「良かったじゃない。懐かれて」

「いや、何故に？ ってか顔怖いよエリスさん」

「別に、普通ですけど？」

怖い。敬語が怖い。冷めた表情が怖い。何故怒るのか理解できない俺は動揺した所為か愛想笑いで誤魔化そうとした。

「何を笑っているのかしら？」  
「……すみません」

即座に謝る。何が何だか分からないが謝らなければならないと思っただのだ。男って弱いね。

「なあ、お前どうしたい？　ここに残るか？　俺達に着いてくるか？」

言葉が通じないとは分かっているのだが、何とはなしにセドナに声を掛ける。

予想通りきよとした表情のまま俺の意図を汲めては居ないように思えた。

身振り手振りでなんとか意思を伝えようとすると、何か伝わったのか、セドナがごくごく頷いた。

「着いて行きたいみたいね」

「これ伝わってるのか？」

「……多分」

俺たちの会話を他所に、頷きながら俺とエリスを指差す。

「ジェスチャーだけじゃ複雑すぎて伝わらないな。せめて文字が書ければ」

「書かせて見たら？」

「そだな……。一応試してみるか」

その言葉を聞くと、俺は先日見つけた日記のようなものを取り出そうとした。それよりも早くエリスがポーチから可愛い造りの小柄の記帳と万年筆を出す。

「これになにか書いてみて」

そういうとセドナにそれを手渡す。意図を理解したのか万年筆を受け取りなにやら書き出した。

「しかし、言葉と話さないのに、文字が書けるかね？」

「本来なら有り得ないわね。何かしらの言語を話す事が出来るからこそ文字が生まれたんだし」

「だよな〜……」

そうなのだ。セドナはまったく話さない。言葉を発することはあるのだが、それは感情だったり単語、要は俺たちの名前だけだった。つまり、言語と言うものを習得していない可能性を示唆している。

同様に文字を掛けないと思うのも当たり前だろう。それでも何かを書き連ねる様子を見て、俺は紙面上に視線を移した。

「ん？ あれ？」

「どうしたの？」

俺の言葉を聞いてエリスも俺と同様の行動を取った。俺達は紙面に書かれた物を見てお互いに目を見合わせる。

「何だこれ……。見たこと無い文字だな……」

「……」

エリスは俺の言葉に微動だにせず、その文字を只管見ている。その横顔を見詰めると、今まで何度か見た顔をしていた。それは、俺に真実を話せないと、言っていた張り詰めた表情。

俺はその顔を見て内心嘆息した。  
また俺の知らない事が……。

それでも、今の二人の状態を崩す気には到底ならず、俺は閉口した。やはり完全に受容することは難しいみたいだ。心を荒んだ感情が侵して行くのを感じる。

書き終えたのか満足そうな表情で俺に視線を送ってくるセドナ。思わず苦笑してしまう。少々幼い印象を受ける少女からは純粹さが溢れている。一切の濁りを感じない瞳に見据えられながら、何故か心の奥が暖かくなるのを感じる。俺の刺々しさを和らげてくれた。頭を撫でてやると、嬉しそうな笑顔を顔に浮かべている。釣られて俺も笑った。

暫く、沈黙が辺りを満たしていた。

先の出来事もあるし無理に話せとは言わないが、この状況は頂けない。いい加減空気を変えたいと思い俺は口を開く。

「で、読めるのか？」

「……え？ あ、少しは」

俺の言葉に我に返ったエリスは慌てて返答する。深く聞くつもりは無いが、それでも内容だけでも聞かない事にはこれからの動向を決断しきる事は出来そうに無かった。

「なんて書いてある？」

「え、ええと。……どうやら、セドナはシャーロンという所から来たみたいね」

「シャーロン？ 聞いたこと無いな。どこかの集落かな？」

「さあ、どうかしら。あと書かれているのは……行く、遠い、お願い、かな。それ以外は読めないわね」



「ん〜、シャーロンに行きたいけど遠いから連れて行って欲しいって事か？」

「多分それで合ってると思う……。どうする？」

「放っておく事は出来ないだろ」

「ブロールフェルドへは行かなくていいの？」

「すぐに知らなければならぬ訳じゃないし、この子を放っておいてまで優先する事じゃないだろ」

「ひよつとして行きたくないの……？」

「それは、どういう意味だ？」

「いえ、何でもない……」

恐らく、シルフィやアガムに会いたくないのか、それとも真実を知りたくないのか、という問いだろう。ここ数日でメアとシルフィの件は一応エリスにも伝えてある。

魔王に聞かされた事が真実ならば、メアもシルフィもアガムも、今まで会った全員が俺を騙していたと言う事になる。会いたいかと言われれば、今は……。よく分からないな。会っても気まずく感じそうだけど、会いたいと思わないでもない。

真実を知りたいとはそれ程強く思っていないのだろうか。

自身の感情を整理しきれない俺は大した意味を持たないと思われ葛藤をしていた。

思わず思考に集中していた事に気付き、慌てて返答する。

「いや、別に行きたくない訳じゃないけどな」

「そう……。ヤマトがそう言うなら私は構わないけど」

なにやら不満そうに口を尖らせるエリス。セドナが扱う文字に関することだろうか。だが、やはり放って置く事は出来そうに無かった。

「んじゃ、一緒に行くか」

俺は言葉が通じない事は構わずセドナに話し掛けた。意図が伝わったのかは分からなかったが元気に頷いて来た。

エリスが何故読めたのか、セドナが何故その文字を書けたのか、疑問はあつたけれど、それでも俺は何も言わなかった。聞いても返ってくる答えは分かっていたから。

## 黒衣の剣士と深紅の剣士

既視感というのだろうか。記憶に無い出来事に遭遇したはずなのに、過去に経験した事のあるような感覚を覚える。だが、曖昧だ。明瞭にさせない記憶はその前後を失い、その輪郭を掴めない。

俺は目の前の情景に見入っている。魅了ではない。ただ呆然と理解できない物との遭遇に脳が働かないだけだ。

「なんだよ、これ……」

「半壊……している……わね」

オルクスから出発し数日後、目的地に着いた。だが目の前に広がっている景色は見るに耐えないものだった。

それは廃村といっても過言ではない。けれどその傷跡はまだ真新しい。建造物は破壊されて間もないのだろう、辺りには土煙が上がっており、炎が舞い上がっている。自然の力ではなく、故意に起こされた惨事である事は火を見るより明らかだった。

「誰がこんな事を……」

「とにかく生存者を探しましょう」

動揺を隠し切れない俺に反してセリスは表面上は冷静だった。内心を伺い知ることは出来ない。

俺たちの後ろではセドナが呆然としている。自身の故郷がこのような惨事に見舞われたのならば、平静を保つことは困難であるだろう。

今迄見たこと無いほど動揺している。同情を禁じえない俺は声を掛けようとするが、言葉が通じない事を思い出し、正面に視線を移した。今はここで呆けていても仕方が無い。とにかく村内を調査す

るのが最優先だ。

「あ、ちょっと！ 危ないわよ！」

エリスの言葉を聞いたと同時にセドナの後姿が目に入った。そのまま何やら叫びつつ奥へと入って言った。

俺たちも慌ててその背中を追いかける。

辺りは死体と残骸。生き物は存在しているとは思えない。少なくとも村人が生存している可能性は限りなく低いだろう。

何かが焼ける臭いは生理的嫌悪感を抱かせ、俺は思わず顔を顰めた。

数秒後鼓膜を揺らすのは金属音。聞いた事のある荒んだ打音。空気を揺らす原因に焦燥感を抱く。

俺はすぐさまセドナに追いつくべく足を全力で動かした。

「ヤ、ヤマト」

後ろから聞こえるエリスの言葉に構わず、瞬時に加速する。辺りの景色流れていく。

意外に速い。セドナは見た目よりも足が速いらしい。だが、俺の速度の比ではない。瞬時にセドナに追いつく。

「セドナ！ 止まれ！」

もう既に金属は間近に聞こえる。俺は慌ててセドナに声を掛け手を掴み強引に止めた。

「ほう。生き残りが居たのか。都合がいいな」

声が聞こえる。思いの他動揺していたのか、視野が狭くなっていた俺はセドナから視線を外し声の主に視線を移す。

赤い様相。全身赤で彩られたその風貌に思わず息を飲む。その体躯は巨大で、それ程低くない俺の身長でも見上げなくてはその面を拝むことは出来ない。

思わず目を向ける深紅の瞳は何か強い意志に満ち、見るものを圧倒する威圧感を持ち合わせていた。

その手に握られた大剣の重量は如何程なのか。並みの膂力ではない。恐らくは人間。俺と相違ない容姿に違和感を覚える。同じ人間とは思えない程の原因の判らない力の本流を感じた。

二人いる。先程の金属の打音は戦闘の背景音。ならば、戦闘を行っていた人物がもう一人いるはずだ。

俺の視線は深紅の剣士の正面へと移った。

此方は黒い。漆黒の鎧に包まれた容貌は異様な空気を醸し出していた。その手には漆黒の長刀が握られている。その長さは持ち主の身長と大差ない。

全身黒衣の剣士は奮然と事の成り行きを見据えている。だが、全く隙を感じさせない。今この瞬間も正面の二人は双方に対して気を削いでは居ないようだった。

「ヤマト！」

エリスが声を張り上げ呆然としていた自分に気付く。

我に返った俺はすぐさまセドナを後方に移す。同時にエリスが俺の傍に辿りついた。

「ふむ。まだ居たのか。ん？ お前勇者か？」

「……なぜそう思う？」

「従者が居るからな」

深紅の剣士はエリスを指差しさも当然と言った表情で肩を竦めた。

「まあ、どっちでもいい。とりあえず、その娘は殺さなきゃならない」

「な、何を！」

セドナは突如向けられた殺意に身体を竦める。小刻みに震える体は自らの生命の危機に対しての物だろう。

俺は首筋が粟立つのを感じた。瞬時に右手で抜刀し構えた。

「ふむ。お前に用は無いらんだが……」

「セドナに手を出すようなら無関係という訳にはいかないな」

「ほう。その娘が何者か知って……。いや、お前が分かるはずが無いか。無知なる者よ」

「……何を知っている」

「さあ、知らん、な！」

言葉尻を放った瞬間、深紅の剣士が愚鈍な印象に反し俊敏な動きで大剣を側面に構えた。刹那、黒衣の剣士の一閃が大剣と交差する。その動きを俺は完全に見失っていた。動いたと思ったら、一瞬で深紅の剣士に一閃していた。

「話の途中なのだがね？」

「拙者には関わりの無い事」

「成る程。まずはお前を黙らせ無いと駄目か」

その言葉を最後に深紅の剣士が動く。動きを制限していた黒刀を力任せに弾き飛ばそうとする。

漆黒の長刀は細い。強度は明らかに不利。対して大剣はその重量

から愚鈍な所作を余儀無くされるが頑丈さでは比較する必要も無いだろう。

確実に折られる、と思った俺の考えに反して、黒衣の剣士は正面から受けた強大な力を受け流すように後ろへ飛んだ。跳躍したとほぼ同時に深紅の剣士に対して横薙ぎに払う。有り得ない動きに深紅の剣士も反応した。

「ふっ！」

肺から出される音と共に仰け反り黒衣の剣士の一撃を避ける。背筋を伸ばす瞬間を見逃さず、黒衣の剣士は着地と同時に正面へと疾走する。

「流石に速いな！」

たった一言でさえ、言い放つ事を許さない程の速度で距離を詰める。

俊足を生かした刺突を避ける事は常人には不可能だろう。

だが、その速さに着いて行く深紅の剣士は回転しながら身を屈めると同時に、大剣を振り上げた。

深紅の剣士の背中に黒刀が掠め、大剣が空中へと聳え立った。

「むう！」

初めて放った黒衣の剣士の動揺を耳にする。

足元から迫り来る大剣をすんでの所で避ける。だが、その為に一瞬の隙が生まれてしまった。

「ここだ！」

言葉と共に放った一撃は大剣を握る手とは反対の手、左手から放たれた。

傍から見れば唯の素手に依る突き。だが、その一撃によって黒衣の剣士の身体は吹き飛ばされ、後方の建造物を貫いた。

深紅の剣士の左手は赤々と燃え滾る炎を纏っている。力の奔流を視界に見て取るだけで感じる。畏怖を感じざるを得ない程。

思わず奥歯の摩擦音を鼓膜に響かせる。身体中に滲む冷や汗を鬱陶しく感じる。

勝てない。少なくとも全力で戦わなければ勝てない。俺の全記憶を代替に召喚を行っても勝てるかどうか。

内心、黒衣の剣士が勝つことを望んでいた。味方ではないかもしれないが少なくとも俺たちを敵視しているのは深紅の剣士だけだったように思えたからだ。

あざとい自身の思考を叱咤し、刀を握る右手に力を込める。

「それでは、続きをするか」

改めて此方を見据える深紅の剣士に恐怖を抱く。だが、身体は思いの他冷静に俺の意思を組んでいた。震えも起こさず平常時のように滑らかに動く肢体に今は感謝する。

「ほう。無駄だとは思うがね。抵抗するか？」

「当然」

「ならば、片手で私と相対すると言う訳か」

「諸事情でね。右手だけで相手を務める事にする」

「成る程……。愚かな従者には困り物だな」

「何だと？」

「沈黙を守る者。無知なる者」

「何を言っている！」



何がおかしいのか。抑え切れない、嬉々とした感情を表情に滲ませる。苛立たしくおれは舌打ちを打つ。

「教えてもいいのだがね。困る者が居る。私はそれでも構わないのだが……私も役割を演じなければならぬのでね」

「役割……だと？」

「戯言が過ぎたな。安心しろ殺しはしない。殺すのはその娘だけだ」  
指差す先にはセドナが震えながらエリスに捕まっている。エリスも必死にそれ拠所として此方の様子を見守っている。

「じゃあ、安心は出来ないな」

「さすがは勇者。事情を知らずとも助けるのだな」

「黙れ！」

俺は感情に任せて地を蹴る。跳躍中、身体に染込んだ動きで滑らかに脇構を取る。後方に投げ出した右手に意識を分ける。

一瞬で深紅の剣士の目の前に着く。俺は後ろに下げた右手をそのまま右から横に薙いだ。

一閃を放った瞬間に見えた相手の表情は呆れ果てたものに見えた。一瞬であるはずなのに嘆息したのが目に入った。

俺は自身の目を疑った。深紅の剣士は俺の刀を左手で握っている。先程のように炎を纏わず常人の腕に見える。

「なっ！」

「驚く事じゃない。そこらの凡庸な武器で私を傷つける事は困難だと言う事だ。それにその程度の技量で私に立ち向かうとは」

再び嘆息を漏らす。言いよつの無い苛立ちを覚える。明らかに格

下と言われている、その事実には憤りを覚えた。

「愚かにも程があるぞ！」

何が起こったのか分からなかった。分かるのは腹部に感じる激痛と、深紅の剣士の動きから恐らくは蹴りを放たれたのだろうという事だけだった。

「ぐっ……！」

地を立つ柱に力を伝えることは叶わず、俺は跪いた。

一撃。たった一撃で意識を繋いでいる事がやっとの状態だった。

「そのまま、頭を垂れている」

深紅の剣士は俺の存在を無視してセドナへと迫る。

「や……める」

完全に俺の言葉など耳に入っていないのか、その歩を緩める事は無い。

ただ土を蹴る音だけが響く。

「こ、来ないで！」

「退け。お前には用が無い」

必死で立ち上がるエリスを無感情で見据える深紅の剣士は、左手を振り被ったと同時に振るった。

見えなかった。それでも、エリスは側方に吹き飛ばされ、半壊した建造物にその身体を打ち付けられた。完全に意識を失ったのか、

微動だにしない。

「愚かな……。お前はただその役を全うすればいい」

そう言うつと興味を失ったのかセドナへと視線を移した。

「お前も不憫な娘だな。安心しろ。痛みも無くその身を滅する」

「あつ……。ああ」

言葉にならない声で反応するセドナは今にも気を失いそうなほど我を見失っている。目の前の恐怖になす術も無くただ刈り取られる命を差し出している。

動かない身体に叱咤する。ただの一撃。だが体の心まで受けた致命的な重みに怒号を放つ。

「止めろってんだよ！」

俺の言葉に深紅の剣士はその所作を一瞬止める。  
振り返る表情は何故か楽しげだった。

「ほう？ 動けるのか」

「あんなの全然効かないね！」

「そうか。ならばもう一度受けてみるか」

「二度は無い」

俺はそう言うつと右手に意識を集中した。瞬間ゲートが開く。ざわざわとした感触を抱く。それは俺の感情の奥深くに潜む何かを起こすかのような、原因の分からない感情。

「ふむ。それが召喚魔術か。成る程、強大な力の奔流を感じるな」

俺はその言葉を無視してゲートに右手を入れた。こいつを倒すには圧倒的な力が必要だ。力が欲しい。こいつを滅するだけの力が。

刹那、深紅の剣士の体がブレた。横に体重を動かされたように見える深紅の剣士の表情は苦虫を潰したようなものだった。

「くっ……。まだ生きていたか！」

「拙者を殺す気ならばあれでは足らぬな」

「流石は混沌よ！」

「そういうお主は……秩序か」

「お互い難儀な制約を押し付けられたものだな」

「戯言を。言わずとも知れた事」

「違い無い」

声はすれど黒衣の剣士の姿は見えない。だが、確かに深紅の剣士は手傷を負っている。腹部に血が滲んでいる。

突如、黒衣の剣士が深紅の剣士の後方に現れ、その手に握る黒刀を首に添えていた。

「……。私の負けみたいだな。呆気無い物だ」

「引き分けのようではあるが」

そういう黒衣の剣士の腹部に深紅の剣士の左手が添えられている。その周辺には先程とは比にならない程の力を秘めているだろう、炎の塊が漂っていた。

「さて如何様にするか。仕切り直すか、或いは」

「今回はお前に免じて引くでしょう」

「左様か。拙者としてもその方が助かると言う物」

「ふ、お互い大変だな……。ではな」

深紅の剣士の体軀は巨大な炎に包まれその影を無くした。数瞬後、跡形も無く炎は消失し、深紅の剣士の姿も消え去っていた。

俺は呆気に取られて事の成り行きを見守っていた事に気が付き、目の前のゲートを消した。

すぐさま、エリスに駆け寄り、状態を確認する。どうやら、気を失ってはいるが傷は大したことが無いらしい。安堵の息をつく。

エリスを連れてセドナの所へと行くと、極度の緊張を感じていたのか、その糸が切れたと同時にその意識を絶った様だ。地面へと倒れこんでいる。

改めて安堵する俺は改めて佇んでいる黒衣の剣士へと視線を向けた。

「……あんだ、何者なんだ？」

余りに突飛な出来事に処理しきれない思考は稚拙な質問を放つ事しか出来なかった。

知れど、それは意味を成すか

沈黙が辺りを占める。俺の言葉に黒衣の剣士は無反応で返してき  
た。

まったく微動だにしない。全身漆黒の鎧に包まれた様相は感情を  
一切出さない。

俺はエリスをセドナの隣に横たわらせ、改めて黒衣の剣士に向き  
直った。

突如背筋に悪寒が走った。俺は身を屈め、得体の知れない危機を  
回避する。数瞬前まで俺の首が存在していた空間を風斬り音のみが  
通り過ぎた。

心臓が鼓動を早くする。今更ながら、命辛々逃れた生命の危機に  
体が反応した。

すぐに元の体勢になって目の前を見据えた。

「……何をする！」

「ほう。あれを避けるとは侮れぬな」

「死ぬ所だったぞ！」

「そうであろう。殺す気だったのぞな」

さも当然と言った口振りでそう言い放った。

俺はその口調に戦慄を覚える。愚鈍にも相手を味方だと思い込ん  
でいた。

再び沈黙が訪れ、俺の行動を戒めた。この状態から動作を起こす  
のは至難の業。動けばそれを皮切りに戦いの火蓋が切って落とされ  
る。

額に冷たい汗が滴る。ほんの数秒で状況は一変した。適応しきれ  
ない思考に苛立ちを感じた。

漆黒に残像が生まれた、と意識が理解した瞬間、目の前に黒衣の

剣士が現れた。

無意識の内に身体を擦らせる。瞬間左肩に微かな痛み。掠った黒刀が目端に視線に入る。微かに漏れる声は俺の痛みに対する呻き声だった。

刹那、黒い刀の軌道が変わる。刺突を避けたと思ったら、切り払いに変化する。

「ぐっ……！」

済んでの所で避けた体勢では避けることは難しいと瞬時に判断し、脚の力を完全に抜き右手の刀を振り上げた。

目と鼻の先に迫っていた黒刀を俺の刀が空へと流す。前髪を斬りながら彼方へと消える黒刀はまるで死の象徴とも思えた。

地面に尻餅を付き、すぐさま後転し、体勢を整える。

正眼に構えた俺の目の前に黒衣の剣士が佇んでいた。少し離れた場所にエリス達が倒れているのを確認する。

荒い息をつきつつ、左肩を見やると裂けている。決して軽傷とは思えない程の深さ。痛みで一瞬意識が奪われる。

俺の頭には疑問符が浮んでいた。

「何故だ……」

「ふむ。やはり知らぬのだな。よからう、丁度邪魔者もおらぬしな。話してやるう」

周囲を占めていた殺伐とした雰囲気は霧散した。

俺は内心、胸を撫で下ろす。

「そりゃ助かるね」

「その前に……少し歩くか。拙者としてはここでも構わないが」

黒衣の剣士の視線はエリス達に向いていた。セドナを殺すのは本意ではないのだろう。

俺は頷いた。

歩を進める黒衣の剣士に着いて行く。暫く歩くと突然立ち止まった。

「拙者は混沌。或いはカオスと呼ばれておる者」

「カオス……？」

「うむ。その名の通り、この世界を混沌とさせるのが拙者の役割」

「さつきも言ってたが、役割ってのはなんなんだ……？」

「無知。沈黙。真実。混沌。秩序……他にもあつた気がするが、忘れたな。それぞれの称号を持つ者はその役割に縛られると言うもの。お主は無知。魔を倒す力を得る代わりに、記憶を失い、無知で居ることを余儀無くされる。他の役割に比べ代償が大きいかその力は計り知れない。其れが勇者。無知なる勇者……哀れな勇者」

「てめえ……」

苛立ち。見下されたと感じた俺の感情は幼稚な自尊心を傷つけられたと刺々しく反応した。肩の痛みも忘れ激昂しそうになる自身を諫める。

「厭、失敬。話の続きをしようか。お主が何故勇者となつたかその経緯は拙者には知る由も無いが、この地に置ける事ならばある程度は説明しよう。それぞれの役割には制約、制限がある。お主なら記憶の消失。拙者にも他の役割の者にもある。その従者にもな。それを代償に力を得るのだ」

そこで言葉を切った。それは葛藤か、或いは唯単に言葉を選んで居るのか。



「お主、記憶はどれ程消失しておる？」

「どれ程って、回数か？」

「否。今から数えてどの位まで記憶を遡る事が出来るのか聞いておる」

質問の意図が理解出来ない。俺の過去の記憶がどの位まであるのか聞いているのは分かる。だが、それに何の意味があるのか。

「それは、ちょっと待て」

「うむ」

記憶を遡る。最近の記憶。魔王に会う前にミリーに助けてもらった。そのまま遡る。アガムとの訓練の日々。その前は確か決闘してメンテルと、あのム力つくエルフとも戦った。名前忘れたな。まあいいか。それ以前は、盗賊に襲われていたシルフィに会った。その前は、その前は…。

「あ、あれ？」

「如何した？」

「いや、待てよ」

その前が思い出せない。あれ、俺その前どうしてたっけ？  
突如、得体の知れない恐怖を感じた。動揺し、頭痛がする。

「落ち着け。深呼吸せい」

「あ、ああ。……分かった」

言葉どおりに深呼吸し、肺に空気を送る。次第に冷静になっていくのを他人事のように見据えていた。感情を強くする時に自身の異

常を感知した。

「三ヶ月だ」

「……左様か。短いな」

「気付かなかった」

「そういう風になっているのでな。他者に言われねば分からぬだろう」

「そうか。そうだったのか……」

「お主の制限は、力を使わずとも三ヶ月のみしか記憶が持たない、という物も在るといふ事だな。加えて、恐らくは感情の制限、思考の制限。これは異常であるな……」

「そういうと、カオスは何やら考えに耽る。ただ、それも数秒のことだった」

俺の言葉にその思考を遮られる。

「異常だと？」

「過去に前例が無い、という事。過去の勇者においてもお主のような制限は加えられておらぬ」

「……代償が大きいのなら」

「見返りも大きい、はずである」

「……何故過去の事を知っている？」

「さてな」

「……じゃあ、エリスの事を教える」

「沈黙を守る者、であるな。詳しくは教えられん。当人では無い者には教える事は出来ぬ。ただ一つ、従者は勇者を守る存在である事だけは覚えて置くとよからう。恐らく唯一の……味方であろうかな」

「訳が分からないな……。まるでエリスしか味方じゃないみたいだ」  
「そう、言っておる。飽くまで、拙者の考え。信じる信じないはお

主が決める」

「……何故ここまで教える？」

「お主が聞いたのであるう？」

「そりゃま、そうだけど」

「それに、無知なまま手に掛けるのは忍びない」

髪の毛が総毛立つのを感じた。一瞬の内に肌に感じる空気が変化し、筋肉が弛緩する。

「拙者はカオス。役割はこの地を混沌とする事。秩序とは、有り体に言えば、勇者が魔王を倒し、何の疑問も無く平穏が訪れる事。だからこそ秩序の者はお主達を殺さなかった。その娘は別であるが」

「セドナが……何だっけ言うんだよ」

「この村の者、であろう。その娘は、即ち……今の世界に成る前の者達、つまり古代人の末裔。其れはこの世界にとって秩序を乱す者達に他ならない。故に拙者はその者達を手に掛けることは叶わん」

「古代人……？」

「今の言葉、文字、文化様々なもの、その変化を成す前。そこに存在していた者達。これの存在は、秩序を崩壊させる可能性を秘めているのでな。だが、お主は……勇者。秩序の根底にある存在。其れを滅ぼす事は拙者の役割を達する事と同義」

「だから、殺すのか」

「故に殺す。それに、そのまま生きていても意味が無かるう？ どうせ三ヶ月しか記憶が持たぬ身。魔王を倒し、役割を全うしても、お主を待っているのは、生き地獄か或いは無残な死。ならば、一思いに散るのも一興であろう」

「ふざけんな！ 俺は」

俺の怒号を遮る言葉は今迄に聞いた中でも強く感情を含んでいた。苛立ち、或いは、拒絶だろうか、その感情の出所を勘繰れるほど俺

には余裕が無い。

「死ねない、か？ 或いは死にたくない？ 何故？ 生きていて何を成す？ 押し付けられた役割を演じ、何を得る？ 何を残す？ 自身が何者かも解らぬお主に何の意味を持ち、生にしがみ付く？ 己を見よ」

厳粛とした動作で俺を指し示す。その所作は自然と俺の目を奪う。

「満身創痍であろう。拙者に与えられた物、以前受けた物の名残、そして、これからはそれ以上に傷つく。何の為に、何故そこまでする必要がある？」

俺の心を抉る言葉は矢継ぎ早に紡がれ、俺自身の動揺を誘う。だが、俺はその言葉に対して拒否する思考しか生み出せない。同意できない。

死にたいか？ 死にたい訳が無い。

生きたいか？ 生きたいに決まっている。

生きて何を成すか、分からない。押し付けられたら、使命感、義務感に従って魔王を倒すのか。それでいいのか。

「……だからって、頷けるか……！ 俺は今確かに生きている！

殺されるのを良しとする程、自分に絶望しちゃいねえ！ 命をただ投げ出す事に意味を見出せるほど死に陶醉もしてねえ！」

「押し問答は趣味では無い。成る程、双方の意見が合致する事は叶わぬのだろう。そしてお主を殺すことは拙者の役割」

「ああ。あんたとは気が合わないね。恐らくこれからもそうだろう。そして、お前は俺を殺そうとするんだろう」

「故に」

「だから」

俺達の言葉は重なりお互いの主張をその声量で競う。お互いの思  
いは食い違い、それでも磨耗する事無く、辺りの空気を振るわせた。  
無意識にだろうか。お互い同時に構え、同時に地を蹴った。そし  
て同時に怒号を放つ。

「殺す！」

「止める！」

一瞬で視界は闇の衣に纏われ、一瞬で白銀の世界に変貌した。

## 勝利の条件

「勝てんよ」

聞きなれた声。その響きに懐かしさを覚える。懐かしいのは、何故だろう。それ程久方ぶりに会う訳では無いのに。まどろんでいた意識がようやく邂逅する。

辺りは只管白で埋め尽くされている。以前にも訪れた場所だった。

「今のままでは勝てんよ。ヤマト」

「……シャル？」

「ああ。何だ？」

目の前にシャルが居た。黒い様相は先のカオスを彷彿とさせたが印象は決して重ならない。俺は胸心地に温か味を感じる。

「えと、なんでいるんだ？」

「俺はお前の武器だからな。いつでも近くに居る」

「そうだったっけか……」

「そうだったんだ」

自然と笑みが漏れる。お互いを渦巻く空気は緩やかに流れる。

「さて。本題だが。今のままでは勝てんよ。カオスにはね」

「そんなもの、やってみなくちゃ分からんだろ」

「力量の差がありすぎる。相手は古代の遺物。その歴史は生半可な物ではない。その世界でも奴に勝てる者は数えるくらいしか居ないだろう。恐らく召喚魔術を使用しても、中途半端な意思では勝てんよ。それこそ、全てを賭して漸く五分ではないかな」

「そんな怪物が何で居るんだよ……」

当然の疑問。勇者より強い、魔王より不調和な存在。それこそ、存在を疑う。だがその怪物にも引けを取らない評価を俺は得ている。そもそも俺はそれ程強いのだろうか……。実感が湧かない。

「必要だからだ。世界にな。お前も、魔王も、従者もな。お前達が成している事、全てが必要だから存在している。世界には不必要な者は居ないし、不必要な物は存在しない」

「相変わらず引つ掛かる言い方するな」

「癖だね。気を悪くしたなら謝るが……」

「いや、良い。続けてくれ」

「ああ。単刀直入に言うが、私を召喚しろ」

「何故……？ いや、嫌とかではないけど」

「私とお前ならば勝てる。記憶を失わずにな」

「……以前、お前を召喚した時に記憶を失わなかった理由が知りた  
いね。何か裏がありそうで勘繰るんだが」

「もう気付いているんだろう」

今迄、俺の力には全て代償が伴っていた。だからこそその力。

「代償、だろ」

「ああ。だが、気にするな。お前は何の代償も必要無い。だから、  
思う存分使え」

「そんな都合の良い事があるわけ」

「在るんだよ。使えば分かる」

俺の言葉を遮って力強く答える。俺は鷹揚に頷いた。シャルの言葉は俺を素直にする。それは自身でも理解出来ない信頼、というの  
だろうか。それ程その言葉に疑いを持つことは無い。だが、それで

いいのだろうか。俺は、手放して他者の言葉を鵜呑みにする事に猜疑心を抱きだしていた。

今迄様々な者達から、様々な情報を聞いた。だが、全てが真実だという裏づけは無く、何より俺自身が実感が無い。お前は勇者だ、と言われた事でさえ、それは真実なのか。

疑いから生まれるのは回答ではなく、ただ疑念の渦を生み出している。

「……カオスに言われた事を気にしているのか？」

「え？ あ、いや……」

数秒の沈黙で俺の胸中を理解したのか、シャルは俺の不安を言い当てた。的中してはいないが、的外れでもない。

「不安、なのだろうな……すまない」

「なんで、お前が謝るんだ？」

「……私はお前を……救えない」

「救うって、何から？」

「全てから、だ」

そう言うとシャルは俺の視界を手で覆った。

「お、おい。話は終わって無いぞ」

「いいな？ 忘れるなよ。俺を召喚しろ」

手を払おうとするが体が微動だにしない。俺の叫びは白光の世界に虚しく響いた。

シャルの手が右から滑り、俺の視界を徐々に明瞭にした。遮る物を完全に失くすと、先程と同じ情景が見えた。



\*\*\*\*\*

背中を強かに打ちつけ呼吸が困難になる。

そうか、俺はカオスに吹き飛ばされた瞬間にあの白い世界に行っていたのか。

突然の激痛に顔を顰め、状況を確認する。

正面にはカオスが奮然と俺を見下ろしている。

「力量の差は明白であると思うが」

「……う……るさい」

頭は確りと働いているにも関わらず、俺の喉は思う様に声を発しない。軽い呼吸困難に陥っている。

それに、構わず身体を起こす。脚は震え、地に足が付いていない。

「諦めるが良からう。抵抗するなら、更なる痛みを伴う」

「抵抗するのは当然だ、つての！」

「ふむ。然らば、一刀の元、切捨ててやろう」

そう言うと、カオスは腰を下ろし半身に構える。前方に切っ先を据え、俺の視覚では黒刀は一つの点となった。

生死を分かつ状況にも拘らず俺は目を瞑った。背中に悪寒が走る。俺の正面にゲートが現れるのが分かる。例え視界を遮ろうとその感覚は忘れる事は出来そうに無い。

無意識の内に右手がゲートに誘われるように其方へと向かう。

「召喚魔術か。させん！」

地を蹴る音が鼓膜を揺らす。だが、それでも俺は目を開く事は無い。分かっているのだ。この力の本質を。出所は判らない。だが、それでも分かる。

風を肌で感じる。それはカオスが此方に猛然と向かっている事を表している。

距離は詰り、恐らく黒刀の餌食になるであろう長さ。その寸前で突如風は止んだ。

「ぬう！」

カオスは俺と距離を取る。

「お、お主！ なんだ其れは！」

そう、分かっているのだ。これは、勇者の力なんて高尚な物じゃない。唯の力。異能の力。誰にも理解出来ず、扱えず、触れる事も許されない。

カオスも知っているのだ。理解はしていない。だがこれは、俺以外の者は触れてはならない物だと知っているのだ。

俺の右手が徐々に抜き出される。首筋に言い様の無い感覚を覚える。それは、嫌悪感、だろつか。ざわざわとしたざらついた感情を抱いている俺は顔を顰める。

漸く抜き出した手には槌が握られていた。

「……異な事よ。召喚魔術とはな。廃れた魔術だと思っておったが。この目で見るとはな」

「それとは別だと思っけどな」

「然り。召喚とは微細に異なる。だが、その様な事は今は良からう」

「賛成だな」  
『私も賛成だな』

俺の脳に響く声。それに激しく動揺する。

「え？ 誰？」

『私だ。シャルだ。お前の掌にいるだろう』

「え、と？ あ？」

『落ち着け。私が顕現した場合、お前と思考で会話が出来ると言うだけだ。其れと言葉には出さなくても良いぞ』

「……誰と話しておる？」

俺の態度を訝しく思ったのか、尋ねて来たカオスはご丁寧にも攻撃の手を休めている。

「いや。気にするな。独り言だ」

「左様か。然らば」

その言葉と同時にカオスは姿勢を低くし此方に突進する構えをする。瞬発力のみを欲したその構えはその動作を見るだけで脅威を感じさせる。

俺も其れに倣って構えを取る。槌の攻撃手段は振り下ろし、振り上げ、振り払いが主だ。主流に振り払いを選択した。

身体を捻り後方にシャルを構える。肩越しに漆黒の鋼鉄が佇んでいるのを視界に入れ、その構えのまま停止させた。

『気をつける。先程から戦いを見ていたが、あいつの力は恐らく風の精霊の使役だ』

『風の精霊、って使役できるものなのか？』

『通常は不可能だな。精霊は飽くまで手を貸す程度の事しかない。』

使役出来るとなればそれは唯の人間には出来ないな』

『唯の人間、じゃない……んだよな？』

『ああ……。しかも使役しているのは上位精霊のジンだな。厄介だ……。まともに戦えば切り刻まれる』

『だけど、あいつ魔術使つてないみたいだけど？』

『所作の初めに微弱だが魔力を感じる。要所で使い分けているみたいだが、上級魔術を使う仕草は無いな。使えない理由があるのか。お前と同じく、代償があるのは間違い無い』

『成る程な。要はあいつの早さに着いて行ければ良いんだな』

『そういう事だが……。そろそろ来るぞ』

脳内での会話は通常の物に比べると時間は掛からないが、それでも数秒は停止していたはず。俺に対して警戒していたのかその間仕掛けてこなかったカオスが姿勢をやや低くした。

と、思った瞬間目の前に黒い点が迫ってきた。

早すぎる。常人ならば気付けば死んでいるだろう。

俺は無意識の内に右方に回転し、構えていた槌の柄頭で黒刀の横っ腹を弾いた。

無理な体勢からの所作の為、力を余り込められなかったが、それでもその重量から得られた力は十分働いていた。俺自身驚愕を抱きながら回転し終え、正面に視線を送る。

すでに体勢を持ち直したカオスが地面の砂埃を残し、消失した。右側を感じる悪寒に従い前方に跳ぶ。

「ぐっ………！」

俺は足に微かな痛みを感じ思わずぐもった声を出した。

空中で宙返りしながら後方を見ると、切り払った体勢でカオスが佇んでいる。

『私を振り下ろせ！』

その一瞬の声に体が反応し、思考する暇も無くシャルを振り下ろした。

俺の体勢は宙返りしている途中だったため、上下逆の状態。カオスから見て振り上げる形で振るう。

だが、思ったより距離が開いてしまっている。これでは届かない。そう思った瞬間、柄の部分が急激に伸びた。延長された柄は俺の振り下ろしの力を伴って、遠心力を得た。突如加速した、変則的な動きにカオスが付いていけない。

黒刀とシャルが交錯し、黒い刀が後方に弾かれた。勢いを緩めず、そのままカオスの顎に直激する。耳を劈く二つの金属音を断続的に発し、カオスは上空へと吹き飛ばされた。

俺は空中で捻りを加え、着地と同時に前方上空に漆黒の鎧を見つけた。

『まだまだ！奴がその気になる前に意識を断て！』

分かる。シャルの力が。扱い方が。

俺は肩幅よりやや広めに足を広げ、シャルを振り被る。掌に感じる熱い程の力の奔流を溜める。その間、数瞬。すぐさま力の脈動を得、眩いばかりに白光した。刹那、俺の足が地を蹴る。

一瞬で空中のカオスの目の前まで来た。顔を漆黒の兜で覆われた表情は視界に入ることは無いが、それでも驚愕の表情である事は明白だった。

俺はシャルを振り下ろす。その速度に相手が反応し、両腕で防御の姿勢を取る。

俺の一撃はカオスの体を弾き飛ばすことは無く共に地面へと向かう。長さを変化させ、身体の一部のようにカオスから只管離れる事は無い。その漆黒の身体を地面に達するまでシャルが伸び続け、終

には地面へと叩きつけられた。

轟音を辺りに響かせ、小型のクレーターが出来た。その中心に大の字で倒れたままカオスは微動だにしなかった。

## 覚醒

自身の鼓動が早鐘の様に脈打つ。荒い息を肩でしながら、カオスを見据える。

緊張の糸が途切れたのか、突如として脚に痛みが走り、目をやると、足首から先が血で染まっていた。先程付けられた傷は思いの他深いようだった。

「終わった、か」

『従者を起こせ！』

頭に突然響いた言葉は切迫感に満ちていた。今迄に無い声量に思わず体が反応する。

「驚かすなよ。なんなんだ？」

『いいから、早く従者にその傷を治させろ！』

有無を言わさない物言いに若干の苛立ちを覚えつつもその言葉に従った。俺が知らない理由があるという事に対して問いただす気にもなれなかったからだ。半ば自棄になりつつ、足を引き釣りながら、エリスへと近づく為足を動かした。

「ふむ。中々どうして。甘く見ていたようだな」

クレーターの方から聞こえた声の主はまるで何も無かったかのようにならなかつた口振りで言い放った。

有り得ない。先の戦闘で得た手応えは確かな物だった。決して無傷では済むはずも無い。厭、少なくとも口が聞ける状態に居るはずが無いのだ。

俺の葛藤を知りもせず、カオスは何事も無かったかのように軽い足取りで此方に向かってきた。

『気にするな！ 早くその傷を癒せ！ 手遅れになるぞ！』

『手遅れって…。さっきから何言ってるんだよ』

『分からないのか！ お前の傷は従者でしか完治できないんだよ！』

『左手がその証拠だ！』

俺の左手？ 未だ微動だにしない俺の左手に意識を傾ける。確かに左手の傷はエリス以外のヒーラーに治して貰った筈。それが原因…？

『分かっただろう！ 急がなければ、その右足も動かなくなる…』

ぐっ！』

『お、おいどうした！？』

『気にするな……。少しばかり禁忌に触れたただけだ……。早く、しろ』

痛みに耐えるかのような口調に促される様に、俺の脚はエリスへと向かう。

「させぬよ」

「なっ！」

いつの間にか後方にカオスが佇んでいる。

『ぐっ………！』

『シャル！？』

『すまない……。先の言葉で侵食されつつある。この借り物の身体で現世に滞在する時間はもう無いみたいだ………』



その言葉を皮切りに右手の感触が消失する。

禁忌を侵したと言っていたが、危険を伴う事だったのだろうか。安易に疑念をぶつけた自身に後悔の念を浮かべる。

突如、地面の砂を蹴る音が鼓膜を震わせる。

カオスが地を蹴った。瞬時に腰の刀を抜き反応する。一瞬で俺と交錯し、済んでの所で一閃を弾く。

行き着く暇も無く浴びせられる斬撃。脚を、手を、腹を、至る所に無数の傷を作っていく。最早、目で捉えるのはほぼ不可能の域まで達している。致命傷になる傷が無いのが幸이었다。

「速度を上げるぞ」

「ぐっ！」

呻き声を上げる。思わず漏れた声は体中に浴びた斬撃の痕に起因する。

痛みを感じる暇も無く、次いで新たな一撃を浴びる。

永続的に生じる痛みは、振るわれる命を刈り取る黒刀は、俺の意識を緩慢にさせた。

俺は生きているのか、それとも死に掛けているのか。混濁する思考は曖昧な現状を把握させてくれなかった。今のままならば、恐らく恐怖心も抱く暇も無く息絶えるだろう。それ程、相次ぐ生死の駆け引きは俺の意識を刈り取って行った。

「死ね」

その言葉は何故か戦いの最中でも俺の耳に明瞭に聞こえた。

ああ、死んだ。流石に、死を覚悟した。今迄の事が走馬灯の様に脳裏を過ぎる。

思わず目を瞑る。無意識に諦めたのだろう。体中が迫り来る激痛

に耐える為に弛緩する。

数瞬後。数秒後。幾ら待っても痛みは訪れなかった。いや、微かに、腹部に鋭い痛みを覚える。だが、それだけだった。

何が起こったのか。目を恐る恐る開く。

「……え？」

美しい金色の頭髮。柔らかな風に揺らされる様は幻想的で、儂げで、俺の思考を奪った。

何が起こっているのか。理解出来ない。

唯、目の前に小柄な少女が立ち尽くしている。その背中から伸びる黒い物は何なのか。

「ヤ……マト……」

「エリス？」

お互いの名を呼び合う。俺の言葉は間の抜けた口調で、エリスは必死に声を絞り出して。

唯、目の前の情景を見据えた。

ゆっくりと此方に倒れ込んで来たエリスを抱き止める。

暖かい。エリスの体温を感じた。

「無事で……良かった……」

「エリス……？」

「ごめん。ご……めんね。なに……も出来なくて」

「いいんだ。いいから。喋るなって」

「……楽しか……った。ヤマト……と一緒に……いれて」

「ああ。ああ！俺もだ。俺も楽しかった」

「ほん……と？ ……よかった」

「ああ。これからも一緒に旅しような」

「そ…だね…」

「エリス…？」

「わ…たし、もう…一緒に…居られな…いね。ごめん…」

「大丈夫だって。また一緒に」

その先に行く言葉を発する事が出来なかった。嘘でも続けるべきなのに。けれど、言葉を紡ぐ事が出来るほど平静で居られなかった。沈黙が辺りを占めた。エリスの呼吸は緩やかにだが着実に停止し始めている。

エリスの瞳が一滴の涙を生み出した。頬を伝わる美しい宝石の様に思えた。

「約束…守れな…かった…な」

「…約束？」

「ごめ…ん。ヤ…マト。ごめ…ん。セ…ドナ」

エリスの肩に置いていた手に感触を覚える。

頬から伝わる涙は俺の手に落ち、只管溢れている。

俺の瞳から溢れる物は留まる事は知らず、エリスの瞳にはもう涙は浮ばなかった。

泣いていた。いつの間にか鼻頭に痛みを覚え、自身が泣いている事に今更気付いた。

「嘘……だろ？」

疑問。許容出来ない。当たり前だと、傍に居ることが当然だと思っていたのに。こんな呆気無く、命を落とすのか？

有り得ない。こんな事は有り得ない。在っては成らない。許されない。

エリスが何をした？ 唯、俺と共に旅をした。唯、従者として俺の傍に居た。それだけだ。なのに何故死ななければ成らない？ 動かない。もう、動かない。俺が触れている肩は、全く動かない。息遣いも感じない。

「……愚かな。端で震えていれば生きながらえた物を」

「……………」

頭は真つ白で何も考えられなかった。唯、只管繰り返す疑問、疑念。自問自答を繰り返し得られるものは何も無い。その最中カオスが発した一言に俺は反応した。

「ふむ。よく聞こえないな。何と言ったのかな？」

「殺してやる……！」

憎悪。醜悪な感情は溢れ、枷は無く、只管垂れ流されている。

沸騰する血潮は俺の身体を動かした。

衝動に駆られる。単純な物。ただ憎悪に突き動かされた衝動に思考を委ねる。

俺の体が跳ねる。右足の傷など気になりもせず、カオスに猛進した。

「……愚の骨頂であるな。お主の攻撃は拙者には届かぬよ」

その言葉を無視して、刀を振り下ろす。

当たったと思った瞬間俺の刀は明後日の方向へと弾き飛ばされた。

目に見えない速度で刀を振り払ったらしい。カオスは刀を振り終えたままの体勢で止まっている。

顔面に鈍器で殴られたような衝撃を覚える。どうやら、空いている手で殴り飛ばされたらしい。

その力は俺を後方へと吹き飛ばした。背中から地面へと叩きつけられ。呼吸困難へと陥る。俺の視線の先には横たわるエリスが居た。痛みは無い。あるのは一つ憤りを感じるのみだった。

「哀れな……。藻掻き苦しむ様は見るに絶えぬな」

それに答える余裕は俺には無かった。思考は止まり、目の前のエリスを見詰める。

未曾有の感情の波に現実感が薄れていく。

機械的に身を起こす。腹から滲み出る負の感情に身を委ねた。思考は邪魔だ。

「ふむ。立つか。もう十分であろう。息の根を止めてやろう」

「……命を何だと思っている」

「何だと、思っている？ 何、この冥府に置いてたった一つの命が消えただけの事」

「……消えた、だけ？」

「大した事ではなからう？」

「貴様あああああ！」

俺の怒号と共に突如、辺りに複数のゲートが現れる。

俺は地を蹴りカオスへと疾走し、ゲートが俺に追従してきた。

憎悪に彩られたものか、体中の肌に拒絶感を覚える。それには構わず猛然と足を動かす。

今迄に感じた事の無いほど、体中に力の脈動の存在を認識した。

「無駄よ。もう良からう。死ね」

一瞬にして目の前にカオスが迫っている。異常とも言える速度で黒刀を振り払ってきた。

此方は空手。だがそれでも俺の手は止まる事無く振るわれた。交錯する二つの影。一つは吹き飛ばされ、一つは立ち尽くす。何が起こったのか。確実に黒刀に捕らえられたと思ったが俺の攻撃の方が数瞬早く相手へと届いた。

拳を振るったままの体勢でカオスの動向を探る。

吹き飛ばされたと思ったら、すぐさま体勢を建て直し両足から着地している。

「……………お主その姿は……………」

「ぐっ……………うう……………！」

熱い。体中が熱を発し、脳を溶かすかのように、俺の思考を妨げる。何も考えられない。怒りのみを残して。

ゲートから黒い粒子が徐々に溢れ出して、俺に纏わり着いている。俺に付着した粒子は曖昧だった様相を確実にしていく。

「覚醒……………厭、暴走したか」

「ぐあああああああ！」

鬱積した感情に身を委ねる。もう、何もかもどうでも良かった。自暴自棄になるほど、絶望していたのだろうか。

粒子が体全体を覆うと形を成した。

鎧。カオスとは異なる漆黒の鎧が形成され、俺を纏っている。重量の有る物ではない。要所に厚みを持って作られた物。重みは感じない。押し寄せる負の感情のみが俺を侵食していく。

右手には漆黒の大鎌が握られている。

無表情で全てを見届ける。表層は穏やかでも淀んだ感情を消化させる相手を見据えた。

「……………おぞましき姿よな。勇者とは思えぬ。その姿は……………魔王にし

「か見えぬ」

最早、言葉を紡ぐ必要を感じない。

一切、構えを取らず、そのままの体勢でカオスの目の前に一瞬で移動し、その目の前に動かないはずの左腕を据える。

「なっ！」

驚愕の言葉を聞く。意味の存在する言葉は、俺にとって唯の文字の羅列であると認識された。

刹那、俺の掌打がカオスの顔面を捉え、彼方へと吹き飛ぶ。

俺は其れに追従するように自身の身体を転移させた。

吹き飛ばされたカオスの上方に一瞬で辿りつき間髪居れずに横回し蹴りを加えた。地面へと向かうカオスを追いかけて蹴り上げる。

追いかけて、攻撃を加える。ただ只管単調な作業に従事した。

速度が尋常ではない。コンマ数秒の内に一つの攻撃は終了する。

何度も何度も其れを繰り返して行った。

「がっ！……調子に……乗るな！」

何度目かの攻撃を避け、カオスは漸く連撃の網から抜け出した。

互いに地面へと降り立つ。相手は肩で息をしている。有る程度の傷は負ったようだ。

何の感慨も無く其れを見据える。先程まで感じていた激情は何処へ行ったのか。俺は無感情で居る自身になんの違和感も無く、ただ作業的に手を動かしていた。

カオスが此方に跳躍する。風を纏いその速度は増しているように見えた。

「手加減は最早せぬ！ 全力で行かせて貰う！」  
「どうぞ」

まるで詰まらぬ者を見るかのように冷徹な俺の視線。  
俺の言葉が怒りに触れたのか、怒号を放ちながら疾走する。

「おのれええ！」

遅い。牛車のように遅い。まだか、と思うほどカオスの動きは遅く、俺をやきもきさせた。

漸く此方に辿りつき、一閃を振るって来た。俺は大鎌の柄頭を地面に突き刺し、その一撃を柄で止める。鎌は少しばかり衝撃に動かされただけで大樹の様に微動だにしない。

「な……んだと！」

「それ、全力？」

嘆息する俺に肩をわなわな震えさせ怒りを抑えきれない様子だった。

後方に跳躍するカオス。着地したと思ったら、何かに意識を集中しだした。

「お主、もう逃避は出来ぬぞ」

「いいから、早くしろよ。面倒臭い」

刹那、カオスの周囲の空気が歪み始めた。

水中に居るかのような感覚を覚える。光の屈折は何を表すのか。

「空気圧縮。気体を操る事は拙者には容易なこと。物理攻撃はもう



効かぬ。そして」

俺の周囲の空間が歪む。カオスの周囲に存在する物と同じ物だ。突如、肺に送り込む物が枯渇する。

「お主の周囲に存在する空気圧を変化させる事も可能。ちなみにその歪みは気圧変化の物ではないがな。精霊の足跡のような物だ。力を介在させるには現世に影響を及ぼすのでな。まあ、どうでも良い事であるうが」

自身の勝利を疑って居ないのだろうか、口振りに余裕が見える。俺は嘆息した。と、同時に転移する。

それを見越していたのか、カオスは右手に空気の塊を出現させる。球体の其れを出現したばかりの俺へと飛ばしてくる。

俺は球体を済んでの所で側方へと避けた。球体が後方の建造物に触れると、その周囲、広範囲を消失させる。

「避けたか。これは触れるだけでお主の命を食いつぶすぞ」

そついうと再び球体を周囲に複数出現させる。

複数の球体を俺へと飛ばして来た。どうやら、触れるのは危険なようだ。俺は転移を止めて、自身の足で跳躍する。

「やはりな。転移は連続して行えないのであるな。そして、長距離を飛ばない」

「ご名答。と胸中で呟いた。

よく見ている。俺自身の力を見極める意味合いもあつての攻撃手段と言うわけか。

球体を飛ばし、すぐさま新たな球体を作る、という作業を繰り返

す。

辺りは瓦礫の山が散在していた。最早、存在していた筈の村は跡形も無い程破壊されていた。

只管、足を動かし、回避に意識を集中する。

「逃げてばかりでは勝てぬよ！」

「……飽きたな」

そう言っていると俺は足を止める。

俺へと迫る球体の軍団を見据え、大鎌を振り被ると、すぐさま振り下ろした。

何かに気付いたのかカオスが右方へ跳んだ。

俺の目の前の空間に亀裂が走る。切り裂いた部分が断絶し、その前方にある物全てを切り離れた。俺へと向かって来ていた、球体は殆ど霧散し、残った一つを回避する。

「その力……自身を転移する能力。お主の能力は召喚魔術ではなく、自身をも対象とする心象の具現化……？」

「何を言っている？」

「……厭、意味の無き事、であるな」

カオスの周囲に空気の流れが生じる。先程とは比べ物にならない、空気の渦は辺りを巻き込み、瓦解させていく。カオスの上方に風の渦が集まっていく。

俺は鎌を構え停止した。漆黒の刃身に徐々に黒い炎が生み出されていく。

「これが最後の攻撃。先の従者と同じ目に遭わせてやろう」

「貴様……」

「拙者も殺す気は無かったのだがな」

「殺す気は、無かった？」

「お主の所為ではないのか？」

嘲笑。冷静だった感情に火が付いた。俺の所為だと。

「お主が今ほど強ければあのような目に会うことも無かったであろう？ 自身を省みすぎて、他者の命を踏み躪った、とは思わんか？」

「手を下した本人が何言ってやがる！」

「何。別に言い訳はせんよ。些細な事であるからな」

「ああ、そうかよ！ もう喋るな耳が腐る」

準備を終えたのかカオスは右手を掲げる。その先には巨大な球体が存在している。色は無く、ただ周囲を歪ませ強風を生み出している。

姑息な。会話で時間を稼いでいたのか。

俺の大鎌は黒炎に纏われその刀身を見えないほどになっていた。

両手に感じる熱から流れ込んでくる物は負の感情、拒絶。何を意味するのか、理解出来ない、したくない思いに駆られる。

完全では無い。だが、十分では有る力を感じる。

「拙者の全力をその身に受けてみよ！」

「その身を塵と化す！」

お互いの意の異なる言葉を同時に発し、同時に力を振るった。

俺の大鎌から放った一撃は見上げるほどの高さにまで達した斬撃の軌跡としてカオスへと猛然と向かう。

巨大な球体と黒炎の斬撃が交錯し、その力の鬨ぎ合いから生じる余波を周囲に存在させる。辺りは眩いばかりの光に包まれ俺の視界を遮った。

巨大な力同士が生み出した爆風に俺も、エリスも後方へと吹き飛

ばされる。

俺は転移し、エリスを抱き止めた。まだ、温か味の有る身体を確りと抱きしめた。

視界の端に、漆黒の鎧が砕かれるのを見た。

## 疑念と事由

俺の周囲の弛緩していた重苦しい空気が霧散する。纏っていた漆黒の鎧は消失し、元の服装に戻った。

激しい頭痛に襲われ、意識が混濁する。

だが俺はそれに構わず、出来るだけ優しく、柔らかな手つきでエリスを横たわらせた。

頬に触れる。先程まで流していた涙の後が胸を締め付けた。顔に掛かっている金色の髪をゆっくりと払った。

表情は柔らかい。死を迎えた瞬間、謝罪したエリスの思いを窺い知る事は出来ない。

記憶の有る、三ヶ月は常にエリスが傍に居た。短いと思うかもしれない。だが、俺にとっては其れが全てだった。その記憶だけが俺の全てだったのに。

エリスはもう不機嫌そうに喋る事も、慌てふためく事も、怒る事も、少女の様にはしゃぐ事も、笑う事も、俺の傍に居る事も無い。

俺は驚愕を隠せない。俺にとってエリスはこれ程大事な存在になつていたのである。

だが、もう遅い。後悔してもどうしようもない。

動く事は出来なかった。何をしたらいいのか分からなかった。

「おい」

突然声を掛けられた。その声は俺の直ぐ傍で聞こえた。これ程近くに来るまで気が付かなかったのか。

「お前……」

肩口に緩慢に振り返る。

何故、魔王がここにいるのか。だが、今はどうでも良かった。何もかもどうでも良かった。

魔王の視線はエリスに向けられている。

「診せてみる」

魔王は無遠慮にエリスに手を伸ばす。

俺はその手を勢い良く払った。

憤怒の表情を俺は浮かべているのだろう。魔王は俺の行動に驚きを隠せない様子だった。

エリスの肩を抱き、魔王から守る様に自身の身体で隠す。

「……何もしない。ただ診るだけだ」

優しく、諭す様に俺に語り掛けて来る。いつもならその態度に苛立ちを覚えただろう。

だが、何故かその時、俺は素直に魔王の言葉に従った。

魔王は俺を安心させるように頷いた。その瞳には魔王とは思えない慈しみのような物を感じた。

俺を優しく押しつけ、エリスに触れる。

「息は……していないな。心拍停止してそれ程立っていないようだな」

冷静に状況を判断する。慣れた手つきでエリスを触診していく。

「このままだと不味いな……ちょっと能力を使うぞ」  
「能力……？」

俺の問いに答える事無く、魔王の周囲に光球が現れ始める。

温か味を帯びた光は魔王を包み、その右手に収縮していく。  
集束した右手をエリスへと翳す。

刹那、エリスが停止し、周囲に氷の様な透明の固体に包まれる。  
エリスを形作る、身体、髪、服、全てが辺りの影響を全て遮断し、  
完全に停止していた。風も、重力さえも拒絶する空間が其処に存在  
していた。

透明の固体に触れる。感触はあるが冷たくは無い。氷とは違う物  
質で形成されているようだ。

「な、何をした？」

「停止させたただけだ。従者の現実をな」

「どう言う事だ……？」

「このままだと、確実に死に至る所だったからな。まあ、仮死状態  
だと思ってくれていい。一先ずは死ぬ事は無い」

安堵する。最悪の事態は避けられる、という事実には体中の力が抜  
ける。

だが、最悪でないだけで、事態は変わっていない。

「助かるのか……？」

「まあ、今の所は無理だな」

「……じゃあ、意味が無いじゃないか」

「さてね。それはどうかな」

相変わらず引つ掛かる言い方をする。シャルと言い、何故疑問を  
持たすような言い方をするのか。

「何か方法があるのか？」

「……俺としては気が乗らないが、お前は助けたいんだろ？」

「当たり前だ！」

俺の怒号が辺りに響く。情けない、と思った。自信の力不足の所為でエリスを巻き込んでしまった。その苛立ちをぶつけてしまっている。

「そうか……。じゃ、仕方無いな」

「仕方無いって……」

「お前が望んだ事だ。仕方無いだろ？」

まるで、手助けしてやると言わんばかりの物言い。魔王は肩を竦め、やれやれ、と呟いている。

「なあ、お前魔王なんだよな？」

「何言ってるんだ？ 当然だろう？」

「俺勇者なんだよな？」

「何言ってるんだ？ 当然だろう？」

鸚鵡返しでそう答える魔王の表情は至って真面目だ。訝しげに此方を見ている。

「なんで助けるんだ？ 本来なら敵対する立場だろ？」

「ん？ まあ、そうだけど。俺にとってはあまり関係無いな」

素っ頓狂に話す魔王はまるで旧知の仲だと思わせるほどの親しみを感じさせた。

「そろそろ、宜しいでしょうか？」

聞き覚えの有る透き通った声が聞こえる。

声の方に視線を送ると、リリアがセドナを抱き抱えて此方に歩み



寄ってきている。

「あなた。従者が大切なのは分かるけど、この子の事完全に忘れていたでしょ？」

「あ……。いや、忘れて無い……。よ？」

明らかにしどろもどろに話す俺に説得力を感じないだろうリリアの視線は冷たい。

俺は言い訳がましい自身に苦笑する。

「ごめん。忘れていた。最低だな」

「まあ、仕方ないわね。あの状況ではね」

「見ていたのか……？」

「言い訳と思うかもしれないが、俺達が来たときは既に事態は收拾しかけていた。一足遅かった……。な」

すまなそうな表情を浮かべる魔王は人間臭かった。そこには感情があり、相手を労わる優しさを含んでいる。リリアも苦虫を潰したような表情をしている。

本当に魔王と魔族……。なんだよな？

「お前が気にする事じゃないだろ。少なくともエリスを助けてくれた」

「現状維持だけど……。一先ず、従者は俺の城に連れて行くが、いいか？」

「……。ああ。頼む」

以前、エリスを攫った上に無傷で解放した事実がある。それに今も魔王によってエリスの命は救われたのだから、今更疑っても仕方がないだろう。ならば、魔王に頼むのが吉だろう。

「その娘も連れて行ってやるう。古代人の唯一の生き残りならば、命を狙われる事もあるだろうしな」

「……そうだな。そうしてくれると助かる」

魔王の言葉に引つ掛かる思いをしながらも、俺は頷いた。

俺の返答を聞くと、魔王はリリアに頷く。

固まっているエリスに近づき、リリアが触れる、と、同時にエリスの姿が消失した。

「では……」

魔王に頭を垂れる、とそのままの姿でリリアとセドナも姿を消した。

「転移、か？」

「俺の城には帰還魔方阵を敷いているからな。俺とリリアは何処からでも転移できる」

「それでここまで来たのか？」

「帰還魔方阵とは違う形式の魔術だけだな。まあ、基本は一緒だ」  
「よく分からん」

「分かって貰っちゃ困る。一応俺達魔族の専門魔術だ。人間に伝えるのは禁忌だからな」

「まあ、深くは聞かないよ」

「そうしてくれ。さてと、じゃあ、行くか」

颯爽と俺を横切り、歩を進める魔王。

「ど、どこに行くんだよ？」

「ブルルフェルドだよ。リリアから聞いてないか？」

「いや、プロルフエルドの図書館に行けとは言われていたけど……  
今じゃなくても良くないか？」

「基本的にお前は物を知らない」

「……だからなんだよ？」

「まずは知る事が急務だつて事だ。知ってからでも遅くはあるまい？ 従者の事なら大丈夫だしな」

「何もかも知っているみたいな口振りだな」

「知ってるよ。だが、全ては話せない。面倒臭いもんだ」

「はあ。またそれが……」

「まあ、道すがら話せる事は話す。行くぞ」

「はいはい……。つて、お前も行くの？」

「そのつもりだけど？」

さも当然だと言いたげに此方に向き直る。

深い嘆息を禁じえない。全身脱力する、気がした。

魔王と勇者が連れ立って旅をするなど想像していなかった。

俺は覚悟を決めて、魔王と共にプロルフエルドへと足を進めた。

「それに時間が無いからな」

魔王が呟いた言葉は俺の耳には届かなかった。

## 世界の在り方

線の細い背中を追いかける。

全身黒い。外套で頭部まで覆っている為、顔を伺う事が出来ない。黒い瞳と頭髪を隠すためだろう。魔王は終始その格好を崩す気は無いみたいだ。まあ、当たり前だろう。黒髪の人間は俺と魔王しか居ないのだから。

沈黙に耐えられなくなった俺が口を開いた。

「エリスとセドナは……大丈夫だよな？」

「前にも言ったが、従者の方は現状維持だ。だが、蘇生方法を模索しなければならぬがな。古代人は……人間の近くに居るよりは安全だろう。まあ、リリアに任せておけば問題無いだろう。あいつ、世話好きだからな」

「そ、そうなのか……？」

「ああ……。お節介、と言い換えてもいい。細かいんだよ。脱いだ服を洗濯籠に入れないと怒るしな。この前なんて、服を裏返したまま入れたら……いや、すまん。なんでも無い」

「……結構大変なんだな」

深い嘆息をする。それは俺と同年代くらいの少年とは思えない程若さが足りない。老け込んでいるかのような錯覚を覚えてしまう程だった。

魔王も色々大変なのかな……。

「で？ 身体に異常は？」

「……いや、特に……無いと思うけど」

「そうか……なら、大丈夫か」

俺の返答から何を感じ取ったのかそれ以上追及して来なかった。あれだけの力の放出に対して何の代償も無いのが俺の不安を掻き立てた。

厭、ただ自覚が無いだけなのかもしれない。

「今日はここまでにするか」

鬱蒼とした森林の中、上空を見上げると日が沈みかかっている。意外に時間が経っていたらしい。

魔王はその場に座り巨木に体重を預けている。

その体制から動く気配が無いと言う事は全ての準備を俺に任せると言う事だろうか。

思わず嘆息しながら、野営の準備を進める。

エリスの荷物は持って来ている。正直女の子の持ち物に手を付けるのは気が引けたが背に腹は変えられない。俺は心中で謝罪しながら鞆の中を探る。

全く手伝う素振りを見せない魔王にやきもきしながらテキパキと食事と焚き火の準備を始める。

「なあ」

「ん？ なんだよ？」

「……その、なんだ」

「だから、なんだよ？」

「て、手伝おうか？」

「は？」

「いや、すまん。その、よく分からないんだ」

「分からないって……野宿した事無いのか。まあ、そうか」

「ああ。で、手伝おうか？ 邪魔かと思って端に座っていたんだが」

「あゝ、じゃあ、火をくべてくれ。俺は食材とって来るから」

「お、おう。任せろ」

俺は火打石を魔王に手渡す。まあ、火属性の魔術が使用できるのなら不要だろうが、如何せん俺は魔王の能力を知らない。だが心配だ。とても不安だ。しかしながら任せると言ったからには任せるしかないだろう。

後ろ髪を惹かれる思いで俺は獲物の気配を探りながら歩を進めた。

\*\*\*\*\*

「成る程。分かった」

俺の背中には小鹿が背負われている。近くに鹿の群れが居たのは幸이었다。

辺りは暗い。夜の帳が降り、暗黒に包まれた空間で男二人会話をしている様は、少々薄気味悪い空間だった。

そう、暗かった。

「で、なんで、火が付いていないのですかね？」

「うん。今、分かったんだが」

「ほう？ 何が分かったと？」

「そう、分かったんだ。生木じゃ水分が多すぎて、火が付かないと言っ事がない！」

「え、本当か。お前、天才じゃね？」

「褒めるな。褒めるな」

俺の嫌味にも天然と言う能力で前向きに受け止める魔王は最早、

手の付け様が無かった。

まあ、でも生木は燃焼の妨げになると言う事は知らない人も居るだろうから、一概に常識とは言えないのだけれど。

「……枯れ木探そうぜ」

「うん。そうだな」

何故か意気揚々と枯れ木を探す魔王の後姿を見ながら溜息を漏らす。

何か以前もこういう場面に出会った気がしたが、気の所為だろうか。

\*\*\*\*\*

「着いたぞ」

目の前の巨大なアルフヘイムの塔を見上げる。

「図書館って、ここ？」

「図書館っていうか書齋、かな。書物を保存しているだけだからな」

「へえ……。お前なんでも知ってるな」

「まあな。もつと敬え」

胸を張って自身の威厳を無理やり強調させる。

表情はなぜか優越感に浸っているように思えた。

「……火のくべ方は知らなかったけどな」  
「ん？ なんか言ったか？」  
「いや、なんでも？」

小さく呟いた俺の声は魔王には届かなかったみたいだ。  
まあ、聞こえないように言ったんだけど。

「じゃ、行くか」  
「ああ」

魔王と共に塔へと歩を進める。  
俺達を見た瞬間、門番達が扉を開いた。  
頭に疑問符を浮かべながらも塔の中へと足を踏み入れた。

塔の最上階に魔方陣で転移する。  
いつも思うが便利だ。現代にも転移魔方陣が敷かれていれば楽なのに。

一体どういう原理なんだろうか。今迄何度か使用していたがその概要は知らない。遠方の転移には大量の魔力が必要で、魔方陣自体作成する事は容易ではない、という事は知っているのだが。

「待ってましたよ。お二方」

俺の思考を妨げた少年の声は親しみを込めて俺たちに放たれた。  
預言者エシヤの付き人メイシヤがそこにいた。そちらに視線を送る。

「待ってた、か。まあ、そうだろうな」  
「ふふふ。まあ、分かってましたからね」  
「で、どうなんだ？」



「どござ」

俺を置いてけぼりにして会話を進める二人。まるで、全て知っているかのように話す二人の会話に着いて行ける道理は俺には無かった。

「……いいのか？」

「知りたいのでしょうか？ いえ、あなたは知る必要は無いですね。わざわざ此処まで来たのはヤマトさんに教えたいからでしょうか？」

「ああ。そうだ。だが、お前はそれでいいのか？」

「別に、僕は困りませんよ。まあ、正直同じ状況にもそろそろ飽きましたし。貴方達は、面白そうだ」

「面白い……か。俺達は」

「ええ。期待してますよ」

口を挟む余地は無い。只管、二人の会話に耳を傾ける。俺と付き人のメイシヤは同じ様に振舞っていた。

「メイシヤ」

「……はい」

「二人を書斎へ連れて行ってあげて」

「しかし、いいのですか？」

「はあ。いいから連れて行けて。二度言わせないでよ」

「……畏まりました」

明らかに不服だと言う表情のまま俺達に近づいて来た。

「お二方、此方へどうぞ」

その言葉に頷くとメイシヤの後ろに着いていく。

視線の端に見えたエシヤの表情が気になっていた。その薄気味悪さを禁じえない笑みが。

## shuffle memory

そこは書斎というよりは宝物庫のようだった。

広い一室には様々な宝石が飾られている。

研磨されてはいるが飾り気は無く、形は統一されていない。

そこら中に陳列されている様子は幻想的に思えた。

「……宝物庫？」

「いいえ。宝石のように見える物は記憶の欠片。紙面に記載されている物とは違います」

「よく分かりません」

「使えば分かります」

そう言うと、メイシャは一つの宝石を手にする。

薄碧色のそれを此方に手渡してくる。

「これは？」

「トルマリンです。その宝石に付随するあなたの記憶を呼び覚まします」

「……記憶を？」

「ええ。本来ならあなたは過去の記憶を消失していますが、その宝石を触媒に消失した記憶を取り戻すことができます。この世界の間人に触れさせるような物ではないのですが……」

ちらり、と魔王に視線を送るメイシャ。

半眼でその視線を受け止める魔王の表情は感情を読み取ることは難しかった。複雑そうな表情にはその胸中を窺い知る事は俺には出来ない。

「仕方ありません。エシヤ様の命令は私にとって絶対ですから」

「……で？どうすればいいんだ？」

「覗き込むだけです」

「……分かった」

その言葉に倣って瞳にトルマリンを映そうとする。

「いいのですか？」

「え？何が？」

「記憶を呼び覚ますという意味を理解しているのか、と聞いています」

「失くした記憶を取り戻すって事だろ。他に何かあるのか？」

「あなた……。アイデンティティが全く無いんですね。薄っぺらい」

「なんだと？」

突然の罵倒に心がざわざわと軋む。俺の言葉には苛立ちを含んでいた。

「ですから、自分があるのか、と言う事です。他人に言われるがまま行動していると思えません。考え無しに、他人の言葉を鵜呑みにして。あなたはそれでいいのですか？」

「俺は俺の考えで行動している。お前に言われる筋合いは無い」

「そうですか。ならば私から言う事はもうありません。どうぞ、記憶を取り戻してください」

そう言うのと、もう俺には興味が無いとでも言いたげに視線を逸らした。

内心苛立ちを覚える。

けれど其れは自身を否定されたからなのか、的を得た言葉だったからなのか、自分でも分からなかった。

そう、分からない。俺は俺の意思でここに居るのか。俺は何を望んでいるのか。

散々悩んだ。今迄、何度考えたか分からない。俺の意思。俺の望み。俺の記憶。けれど、答えは得られなかった。知らないからだ。何も知らないから、答えを出せない。ならば、俺は知るべきなんだと思う。

俺は胸中で漸く決断すると、瞳に薄碧色の宝石を映した。

宝石の美しさに魅入る。視線を外すことも出来ず、只管トルマリンを見詰めた。

吸い込まれるように視界全てに宝石が映るかのように錯覚を覚える。

否、錯覚ではない。確実に視界を薄緑色が覆い、意識が朧気に成っていった。

\*\*\*\*\*

声が聞こえた。無機質で感情を含まない。だが、不快ではない。懐かしさを感じるそれは俺を安堵させる。眼は開いているのか閉じているのか分からない。ただ視界は暗闇で覆われている。

「此の世と彼の世の境目に存在する世界。幽界、三途とも言われる場所。名をプルト。魂の罪人が集う場所であり選定される場所。試練を与えられ、乗り越えた者のみが望みを叶えられる。冥界と言えど現世と然程変わらない。土地は、広大ではない。魂が犇く場所ではあるが、人口は多くは無いからな。三国に統治され、人間同士の

争いは余り起こっていない。土地柄、魔族が闊歩する領地が多い為か。技術的には中世辺りか。科学は推進されていない。魔術の成長が著しいからな。とまあ、こんな所か」

次第に視界が開けていく。暗闇は徐々に色を醸し出し、映像を映し出す。

辺りは見覚えの在る白い世界。

奥行きも全て白に覆われている。そこには何も無い。唯白い空間が広がっている。

「では、最後にお前がどういう立場になるか説明しようか」

聞きなれた声に振り返る。

其処には全身白に覆われたシャルが肘掛け椅子に座っている。

そう、白い。俺の知っている容姿とは違い、服装も、瞳も、髪の色さえも白かった。

「別に、必要ありませんけど」

シャルの正面に一人の少年が長椅子に座っている。黒髪に黒い瞳。疲れた表情を浮かべる少年は興味無さ気にシャルの言葉に返答した。あれは、俺だ。記憶に無い自分の姿を見る事に違和感を覚える。

「まあそう言うな。必要事項だからな」

「どうぞ。記憶は無くなるんですよ？」

「そこはちよつと違うな。俺と話した内容は覚えていて。後に消失する記憶は全てではない。まあ、今後のお前の行動にもよるけどな」  
「………そうですか」

敬語で話す自身の姿は他人行儀で今の自分とは似ても似つかない。

これは、本当に自分なのだろうか。

「さっきも話したが、プルトにはお前と同じ立場の者達が数人存在する。ちなみにそれ以外にも多数の者達が居るが、其方はお前達のように選定される者とは違う。選定された者だ。魂の行く末は決まっている」

「……行く末？」

「一概には言えないがな。まあ、転生待ちだったり、色々だ。それより、お前たちの事だが」

「……無知、英知、沈黙、混沌、秩序、真実でしたっけ？」

「そうだ。それぞれ背負った罪と役割を強いられ、それを代償に力を得る。内容はそれぞれだな」

「俄には信じられませんが……」

「その内、嫌でも分かるさ。罪に伴って役割も強いられる。お前は、無知だから、勇者だな」

「なんで、無知が勇者なんですか？」

「さてね……。ただそういう物だと思ってもらえればいい」

「無責任な……」

「興味が無いんじゃないのか？」

ほくそ笑むシャル。悪戯っぽいその表情には邪気は感じない。

「一応聞いただけです。興味はありません」

「そうか……。まあ、他は英知は魔王、沈黙は従者、混沌は暗躍者、秩序は英雄、真実は監視者、だな」

勇者は俺、英知は魔王、沈黙はエリス、混沌はカオス、秩序は深紅の剣士、真実は……？

「役割を与える意図が判りません……」

「神の考える事は人知を超える。理解しようと思っても、理解できない物だよ。だが、それは必要だから存在している。無意味な物は一切無い、はずだ」

「……それで、勇者は何をするんですか？」  
「魔王を倒す。それだけだ」

鷹揚に頷く。無表情、だろうか。だが、俺には憂いに満ちた物に思えた。

「……本当に良いのか？」

「何がですか？」

「お前の望みだ。本当に記憶を消すのか？」

「元々、僕の能力は記憶を消失する物なのでしょう？」

「……やり様によっては、記憶消失は抑えられる。何も自身で消さなくても」

「もう、決めた事ですから。それより、目的を達した時の事です」

「ああ、安心しろ。記憶消失とは別に、其方の願いも叶う」

「……そうですか。安心しました」

「……そうか。お前はお前が嫌いなのだな」

「……ちよつと違いますね。許せないだけです。僕自身を」

「記憶を消すと言う事は人格さえも変わるといふことだぞ。お前自身を、黒井大和という人間を失くすかも知れない」

「名前を呼ぶのは止めて下さい」

俺は顔を顰め、明らかに不快感を表していた。

「自身の名さえ嫌悪するのか」

「大和、なんて居なかつたんです」

「ご両親が付けた名だろう」

「ええ。僕の所為で死にましたけどね」



死、と言ったのか。俺の両親は俺の所為で死んだ？どういう事だ。だが、その疑問に答える声は聞こえない。

その時のシャルの顔を俺は忘れる事が出来ないだろう。悲哀に同情に満ちた表情は泣きそうにも見えた。なんて、悲しい表情をするのか。

その思いとは裏腹に俺は忘れるのだろうか。そして、俺は……。

「……お前の所為ではないだろう」

「もう、この話はいいです」

「……そうか」

そう言つとシャルが俺へと歩み寄っていく。

俺は瞳を閉じ、ただ動向を見守っている。

少し躊躇したのだろうか、正面で動きを止めた。

数秒後シャルの掌が俺に触れ、体中の力が抜け背凭れに体重を掛ける。暫くした後、俺の姿が消失する。

「お前は……それで、救われるのか？」

シャルは空を仰いでいる。涙を溢れさせない為か、天空に居る何かに祈る為なのか。其れはそこに存在しない俺に対する疑問。だが過去の俺はそこにはもう存在しなかった。

意識がまどろみ現実感を取り戻す。言い様の無い浮遊感は薄れ、体中に重力を感じる。

俺は地面に尻餅を付き呆気に取られて虚空を見据える。

「おい。大丈夫か？」

魔王は俺に声を掛けながら視線の先で手を振る。

漸く意識が覚醒していく。

「……だ……いじょうぶだ」

「大丈夫には見えないが……」

「記憶を得た反動ですね。制限された記憶を無理やり弄ったのですから、当然でしょう」

「……やはり強引すぎたか」

明瞭になった思考は俺を無意識に行っていた深呼吸に気付かせた。

「おい。話せるか？」

「……ああ。もう、大丈夫だ」

少々舌つ足らず感は否めないが言葉を紡ぐには問題無いだろう。

俺は自身の状態を伝えるべく、魔王に手を振った。

「そうか。じゃあ、早速だが、知りたい事は分かったか？」

「少しは。とりあえず、この世界がプルトと言う名で、魂の選定が行われている場所だと言う事は分かったが、俺の能力の正体とかは分からなかった」

「そこまで分かれば十分だ。で？ 疑問は？」

「魂の選定ってどういう意味だ……？」

「そのままの意味だ」

魂の選定という言葉は安易に違う言葉を連想させた。

知っていたのだろうか、俺は。

だからこそ然程動揺も無く佇んでいるのか。

「死んでいる……という事か？」

「……さあな」

俺の問いに答える気は無いようだ。

それ以上を追及する気にはならなかった。

何かを知る為に誰かを頼りにしては駄目だ。自身で真実を知る事が急務なのだと思っていた。

だが、知りえる事があるならば、と俺は話を変えた。

「なあ、俺が色々知るべきなのは分かるが、エリスの蘇生方法はどうするんだ……？」

「それについてはお前の記憶に手がかりがあるはずだ。恐らく、だかな」

「英知は魔王……だったか」

「知ったのか。その通りだ。俺は知っている。お前が知らない様々な事をな」

「何でも知っているならこんな回りくどい事しなくても、お前が教えてくれればいいじゃないか」

「知っているからと言って全て教える事は出来ない。前にも言っただろ？」

「……じゃあ、一部なら教えてくれるのか？」

「そうだな」

「エリスの蘇生方法を教えてくれ」

「さあな」

「……俺の能力って、一体何なんだ？」

「さあな」

「そうか。なら、俺の名前は？」

「黒井大和」

そうか。今更ながら分かった。俺と同様に魔王も制限を掛けられているみたいだ。

たぶん、他者の質問に答える事が出来ない、って所だろうか。だが条件を満たせば、答えられる。たぶんだけど。ん？ だが、以前話したときはこれ程頑なに答えなかっただろうか。

まだ、曖昧だな。俺は再度質問した。

「お前は何を代償に力を得ている？」

「……やれやれ。具体的に来たな」

「恐らく、具体的に言えば答える事が出来るんだろう？」

「半分正解だ。まあ、制限はそれだけじゃないがな」

「半分？」

「ああ。答えられるが、答えなくてもいいんだぜ？」

「都合の良い……」

「そうでもないがな」

魔王は意味深な言葉を放ち、俺の質問には答えようとしなない。

俺は勘違いをしていたのだろうか。

「さて、どうする？ 問答を続けるのか？」

「いや……。いい」

なにやら不穏な空気を感じ、継続を拒否する。

先の様にはぐらかされる事も考えると、ただ時間を費やすことは無益に思えた。

「話は終わりですか？ もうそろそろ戻りたいのですが」

呆れた様子で此方に声を掛けるメイシヤ。

今の今まで、その存在を忘れていた。

「……もう一度違う記憶を思い出す事は出来るのか？」

「ええ、出来ます。ただ貴方自身無事かどうかは保障しませんが、正常な人間でも障害が出る可能性もあるのに、貴方は記憶消失の上制限を掛けられている。どれ程危険なのかはお分かりでしょう？」

「やはり、危険なのか？」

「下手をすれば、思い出した記憶以外全て忘れるかもしれませんね。或いは思い出した記憶も……」

「それでも、それしか方法が無いみたいだからな」

ちらりと魔王に視線を送る。

肩を竦め、俺の意見に同意しているかのような仕草をする。

「そうですね……。ならば止めはしませんが」

メイシヤはそう言うと、その指先に水晶を摘む。

結晶が積み重なり、派手さは無いが美しい。

「この宝石はあなたの過去をより深く見ることが出来ます」

「それでいい。貸してくれ」

俺は掌を差し出し、水晶を渡すよう促す。

「……どうぞ」

躊躇しながらもこちらに水晶を手渡ししてくる。  
何を思ったのだろうか。

俺は気にしない。淡々と作業のように先程と同様に水晶を凝視する。

次第に意識が薄れていく。

「勘違いしていたみたいですね……」

メイシャが何か言っている。思考が緩慢になっていく最中、その言葉は上手く聞こえない。

「貴方は流されやすい、考え無しの人間なのかと思っていましたけど、違うみたいですな」

だめだ。もう、言葉の意味さえ理解出来ない。

だが、何かを喋っているという事だけは分かった。

「感情が麻痺しているみたいですな。いえ、貴方は貴方自身に興味が無い……?」

「おい。もういい」

「本来なら記憶を失ってからは消失前の人格は無くなる筈。けれど、記憶を失って尚、以前の思いを受け継いでいる、という訳ですか」

「もういいと言っている!」

魔王が怒鳴りつけているようだ。憤慨している理由は全く判らなかつた。

「……失礼しました」

肩で荒い息をする魔王。激昂したその様子は切迫感を滲ませている。

何故、感情的になったのか。

その答えを得る事は無く、俺の意識は薄れていった。

## 解放（前書き）

約一ヶ月ぶりの投稿です。  
遅れまして申し訳ございませんでした。



## 解放

重い瞼を開くと記憶に新しい天井が見えた。  
意識が覚醒して間もない為、視界がぼやけている。

「起きたか」

「……ああ」

魔王の言葉に軽く返答する。

寝起き掛けに聞くその声にぞんざいに対応する。

慣れた物だ。本来なら有り得ない状況であるというのに。勇者と魔王の関係を逸脱している気がしてならない。

だが俺にはそれは瑣末の事だと思えなかった。この時は。

「それで、どうだったんだ？ 記憶の方は」

「……それなんだが、何も無かった」

「は？」

「だから、何も無かったんだ。ただ真っ白で」

嘘ではない。俺は何も見ることが出来なかった。ただ白い世界を傍観していただけだ。

最初の記憶はシャルとの掛け合い。けれど二度目は無かった。

「そんなはずは……。ここにある記憶はどんな記憶をも記録していません。何も無いなどとそのようなことは……成る程、そういう事ですか」

メイシャは突如、自己完結したように呟いた。

普段の齒に衣着せぬ物言いをする様子とは打って変わって、なに

やら曖昧にぶつぶつと言っている。

此方を無視して完全に自分の世界で思考中のメイシヤを呆然と見据える俺に代わって魔王が声を掛ける。

「一体どういう意味だ？」

「あ、いえ。なんでもありません」

「何でもない事はないだろう？」

「ふふふ、魔王にも分からない事があるんですね」

「うるさい」

メイシヤは魔王の言葉を歯牙にも掛けず部屋を後にした。

「お、おい！……ちっ！」

軽く舌打ちをしながら仕方なしといった様子でメイシヤの後を追う魔王に俺も追隨した。

俺自身の事なのに、今も全く蚊帳の外だった。

そう、今も。

「ずっと、じゃないか」

「あ？　なんか言ったか？」

「いや、何でもない」

そう。ずっと、俺は流されてただここに立っている。そこに意思はあるのか。恐らくは無いのだろう。

結局誰かの言いなりになって行動している。ならば俺は、なんでここに居るのだろうか。

お互い無言で機械的に足を動かしている。

魔王も何か思うところが在ったのか物思いに耽っている。

「やはり、駄目か……」

「……何の事だ？」

「大和」

「な、なんだよ？」

「お前、まだ俺の仲間になる気にはならないか？」

「……人間を滅ぼすんだろ？ なら答えは決まっている」

「この人間はもう死んでいる。魂だ。それを知っている上で言っているんだよな？」

「……そうだ。でも関係あるか？ 俺達は生きているのと変わらない。事実、魂だとしても、関係無い」

「そうか」

沈黙が互いを包む。

正直、気まずいと思った。

だが、魔王の望みに答える事は出来ない。

なぜ、そうまでして、人間を滅ぼそうと考えるのだろうか。

役割だから、としても簡単にそう言い切れはしないと思う。人間を滅ぼそう、等と。

「過去を見れば、人間に失望する物だと思っていたが、甘かったか

……。大和」

「なんだ……？」

「ここでお別れだ」

「ちょ、ちよつと待て！ エリスを助ける方法を教えてくれるんじゃないのか？」

「気が変わった」

突然、身勝手な振る舞いをしだした魔王にしばし呆気に取られた。

数秒後、俺を襲った感情は戸惑いと怒り。

身体をわなわなと震わせ声を荒げる。

「ふざけんな！」

「ふざけてなどいない。そもそも勇者が魔王に助けてもらおうと思  
う時点でふざけているとしか思えないが？」

「なっ……！」

正論だ。だが、今迄、俺達は魔王と勇者という立場だったと思え  
なかった。

行く道を示し、危機には手を差し伸べてくれた存在は、まるで友  
人のように思っていた。

思っていたのに。

怒りの余り、顔が熱を持っている。

俺の感情など気にもしていない、と言った様子で無遠慮に此方に  
歩み寄ってくる。

想像だにしなかった魔王の行動に俺は反応できなかった。

目の前には魔王が翳した掌が見えている。

五指は柔らかな光に包まれ、何かしらの力を感じた。

「何を」

「……セーブ」

ぼそり、と呟いた言葉は聞いた事のある言葉だったが、その意味  
を考える前に目の前が真っ暗になった。

肩膝を地面に付き何とか意識を保つ。

何をされた……。

「お前の記憶を保存した。力が暴走しなければ、記憶が消失する事  
は無いだろう。それに従者が居ない今なら、もう抑制もほぼ無い」

「な、何を……」

「……ああ、そうだ。従者は人質として預かっておく。どうせお前

には助けられないだろう？」

「なんだと……？」

「これから、人間の醜さを嫌と言うほど見る事になるだろう。その時、お前はどうするんだろうな。願わくば、俺の……」

そこで言葉は終わり、続きを紡ぐ事は無かった。

分からない。魔王は何がしたいのか。エリスを助ける手段を見つめる、と言った癖に今は人質にすると来た。今の力も何の為に行使したんだ。

魔王は困惑している俺を放置して、俺に背を向けその姿を消した。言いよつの無いもどかしさ。納得のいかない現状に、俺は頂垂れていることしか出来なかった。

\*\*\*\*\*

「嘔吐き魔王に騙されましたね」

第一声は俺を酷く不快にさせた。

その声は明らかに卑下した、或いは面白かった意味合いを含ませていたから。

そして、表情は見るだけで嫌悪感を抱くほど、笑みを浮かべていたから。

「ふふふ。だめですよ。魔王を信じちゃ。ま、でも記憶が無いんじゃない仕方ないですよね」

「嫌味な言い方だな」

「すみません。不快にさせてしまいました？ でも事実ですよ」

エシヤは小首を傾げこちらに笑いかけてくる。

無邪気な容姿で、邪気を含んだ仕草は違和感を覚えさせる。  
まるで全て知っているかのような。

「これからのあなたの行動が楽しみですね。今までは無自覚で見たくないものは見ていなかった。これからは見たくない物も見えていかないかね」

「記憶消失の事を言っているのか？」

「ええ、それもありますね。部分的、制限付きとは言え、記憶消失も無くなり、従者が制限していた、あなたの今までの不可解な部分も明瞭になっていくでしょう」

「エリスの所為だったと？」

「あら、知りませんでしたか？ そうですよ？ ま、本人は知らなかったみたいですけどね。あなた自身理解できなかったでしょうし。これから徐々に分かかっていきますよ」

苛立ちを覚えずには居られない。エリスを卑下された気分になった。

俺が今迄背負ってきた事に自覚が無いからだろうか。事実、未だ何を俺は失っていたのか分からない。

記憶だけではない何か。以前何か聞いたような気がする。気がする？

そもそも、エリスが俺の何を縛っていたというのか。

もうエシヤと話すことは無い。だが、目的も無い。

やはり行き着く場所は……。

「あなたの世界は色を取り戻します。それが白か黒か。実際にご覧になるとよろしいでしょう」

その言葉の真意はよく分からなかった。

けれどこのままここに居る気は毛頭無い。

俺は無言でその場を後にした。

肩越しにエシヤとメイシヤが見えたがすぐさま視線を逸らす。

満面の笑みで居るエシヤと、無表情でこちらを見据えるメイシヤに心寒さを感じた。

## 真実の世界に

アルフヘイムの塔を後にした俺はしばし足を止めていた。

後方を感じる気配は俺に向けられている。塔の門番が俺を不審がって居るのだろうか。

それもそうだろう、何も無い場所。辺りに広がっているのは鬱蒼とした森林のみなのだから。

そんな場所で立ち止まっている者を不審がっても不思議ではない。以前よりも明瞭になったように感じる。視界に入る物を情報として脳へと伝えてくれた。

色が付くとはこの事だろうか。今迄より視界が広い気がする。いや、今迄より、辺りに注意が行くという方がいいだろうか。

「……これが普通だろ」

少しだけ分かったのは、今までが何かしらおかしかったという事だけだった。どこがどんな風かというとのは説明が出来ないのだが。

そう言えば、服がボロボロだ。厚着するのは嫌いだから、インナーに一枚肌着を着ているだけ。外套は着ているがそれも所々朽ちていた。そろそろ、服も買わないといけない。

腰に付けたポーチには路銀が入っているが、心許ない額しかない。よく、今迄持ったものだ。

中を探ると路銀の他に、手帳が入っていた。見覚えの無いそれは明らかに俺の文字が羅列されている。

内容は、記憶の確認のためだろう。俺の力について事細かに書かれていた。他にはその日あったことも。

……記憶に無い。俺は日記を書くような性格ではないし、例えば必要に迫られていたとしても、俺はその記憶が無い。俺が書いたんだよな？



どれだけ考えても分かりそうに無かった。

ここで立ち止まっても仕方が無い。そう思い俺はプロルフエルトのサウス村へと歩を進めた。

内心、会うのは気が進まない。それは、俺が追われている身だという事を思い出させる。クリミアから脱出して今迄、全く音沙汰が無かった所為か、実感が薄い、その事実は俺の気を重くさせた。

だが、会わなくては。その思いで足を動かす。

\*\*\*\*\*

サウス村へと足を踏み入れる。

そう言えば以前プロルフエルトに入国する時は結界を解除したはずだが、魔王と一緒にその時はそのような物は無かった気がするが。どうやって入ったのだろうか。正直今迄の記憶が飛び飛びで細かい所が思い出せない。これも制限って奴なのかな。

村中、当たり前だが人間は俺だけだった。

辺りはエルフのみ。俺を珍しそうに見ている者。或いは不審がつて居る者が殆どだった。

以前にここに世話になっていた期間が在ったはずだが……。忘れられているのだろうか？

然程前でも無いはずだけど。

「おい。お前止まれ」

野太い声に振り向く。その声には見覚えがあった。

エルフには珍しい鍛えられた体躯。銀髪にシルバーの瞳には勇猛

さが灯っている。

アガムだ。俺を鍛えてくれた恩師とも言える。寝食の世話もしてくれたサウス村の村長。

懐かしい顔に思わず笑顔になる。

ほんの少しだが一人で居た所為か、友人とも言えるアガムに会えた事が純粹に嬉しかった。

感情が伴って、駆け足でアガムに近寄った。

「止まれと言っている！」

有無を言わさぬ声量に思わず足を止める。

アガムの顔は明らかに警戒心を持っていた。

まるで、不審者に対する態度だ。

心臓が早鐘を打ち、呼吸が荒くなる。明らかに現状に対応し切れていない。

何が何だか、分からない。俺を忘れたのか？

「ア、アガム？ 俺だよ。大和だよ？」

「貴様……！何故、俺の名前を知っている！？」

俺の言葉に明らかに警戒心を増した行動をとる。俺と距離を取り、いつでも対応できるよう腰を落として構えた。臨戦態勢である事はその構えを何度も見ている俺にはすぐ理解できた。

何故？ どうして？

俺の問いは露と消え、誰も答えない。

思わずアガムに手を伸ばす。まるで縋るように。

理解出来ない状況、対処できない事象に俺の身体は震えて反応した。

「本当に……覚えていないのか？ 俺を鍛えてくれただろ？」

「お前の事など知らない！ 貴様、なんの目的でここに来た？ 誰から俺の名前を聞いた？ 答える！」

「そ、そんな……嘘だろ？」

「……とにかくこの村から出て行け。村人も怖がっている。人間は……この村では受け入れられない」

辺りを見渡すと多くの村人が遠巻きに此方に視線を送っている。いつの間にかそこら中村人が集まっていた。

受け入れられない？ 前はあんなに優しくったのに。確かに人間に嫌悪しているエルフも居た。けれど、アガムはシルフィはそうでは無かったはず。

「そ、そうだ。シルフィは？」

「貴様……。娘に危害を加えたら殺すぞ」

「危害なんて加えるはずが無い！ 俺達は仲間なんだから」

「仲間……だと？」

「そう。仲間だ。魔王を倒すために一緒に……」

その魔王とさっきまで一緒にいた事実自身の滑稽さが浮き彫りになる。

思わず自嘲の笑みを浮かべる。

「仲間になつた覚えはありません」

毅然とした、そして敵意を持った声色は見知ったもの。

けれど、それはまるで別人であると認識せざるを得ないほど違すぎていた。

アガムの後方から此方に歩み寄ってくる容姿は美しく凜としてい

る。微風に揺らされる銀髪は温かな光を反射しより美しく際立たせて

いる。

その小柄な体格に沿わない儼かな雰囲気は俺が今迄見た事が無いものだった。

違う。その視線は俺に向けられていた物じゃない。そんな敵を見るような眼でこちらを見てくるはずが無い。

「そんな……。忘れたのか？ シルフィ」

「あなたに名を呼ばれる謂れはありません。しかもそんな友人の様に……」

シルフィは両手で自身を抱きしめ嫌悪感を露にする。

その様子は見るに耐えなかった。思わず眼を逸らす。

「何が目的でこんな事を。そもそもどうやってここまで」

「ちよつと待て……。あいつ、指名手配されている人間じゃないか？」

「指名手配？ 他国の手配書まであまり眼を通さないから……。」

「そうなのか？」

「間違いない。黒髪でやや小柄、痩せ型。似顔絵も似ている！」

周囲の村人が騒がしくなる。穏やかじゃない雰囲気思わず後ずさる。

何がどうなっているのか分からない。けれどここに居てはどうなるか判らない。

逃げるしかない、のか。

視線をアガムとシルフィに向ける。

その表情は俺に親しみは全く持っておらず、赤の他人どころか、敵対しているかのようなもの。

胸を射す痛みは無視できなかった。下唇を噛み感情を抑制する。そうしなければ、二人に歩み寄って縋ってしまいそうだったから。

掴み掛かって叫んでしまいそうだったから。

その時全員の意識が俺に向けられたのが分かった。明らかに俺を捕らえる気だ。殺人容疑が掛かっているのならば、捕まるか、ひよっとしたら生死は問わないと御触れが在ったかもしれない。

先程から感じていた鼓動はさらに早くなり耳鳴りを伴ってきた。体中、冷や汗で衣服が肌に絡みつく。

俺に向けられた敵意、或いは殺意に体中が震える。恐怖を感じ、足が動かないのではないかと思う程、体が硬直している。

「捕らえるー！」

アガムの言葉を皮切りに一斉に村人が襲い掛かってきた。半分は後方で支援するつもりなのだろう。魔術を詠唱しているものも居る。エルフならば例え村人でも魔術が使えてもおかしくは無い。

眼前へと迫る村人の強襲に俺は恐怖で萎縮した。怖い、と感じている。今迄感じた事が無い感情に戸惑いを隠せない。

だが、考える暇は無かった。

「あああー！」

あらん限りの叫びで漸く体が動いた。俺は距離を取ろうと後方へと跳躍する。

常人には有り得ない跳躍力で空中へ身を投げ出す。

空中でバランスを取ろうと、両手を広げようとした時に左腕が動かない事に気付く。忘れていた。あまりに自然に、だが明らかに異常な事に今気が付いた。

以前から動かなかったはずの左腕を今更再認識する。

右腕を伴った上半身だけで何とか平衡感覚を保ち、腰を見る。武器が無い。カオスとの戦闘で俺の刀は何処かへ行ってしまったんだ。った。

武器を持って戦うのか？ シルフィ達と。違う。そうじゃない。俺の身を守る為にも必要なだけだ。

内心、舌打ちをする。甘すぎる。危機感の無さ。驕り。なんとかなるだろうと言う希薄な根拠。

これでは駄目だ殺されてしまう。

……誰に？

地上に眼をやると殺意に満ちた表情で俺を睨むのはエルフ達。アガム。シルフィ。

後方にあつた家屋の屋根に着地し、迫り来る魔術を回避するためそのまま翻し再び跳躍した。

俺が先程まで居た場所に炎の魔術がその足跡を刻む。至近距離で耳を劈く音を放ち屋根の先端を吹き飛ばした。

一時期落ちていた力は回復したのか思い通りに体が動く。

背中越しに聞こえる怒号は聞くに堪えなかつた。アガムの「殺す」という言葉が俺の胸を締め付けた。全力でその場を後にする事しか出来ない自分に齒噛みするしか出来なかつた。

\*\*\*\*\*

呆然としていた。しかし、足は止まる事を知らない。

速度は落ちる事無く機械的に動いている。最早俺の意思は動いて

おらず、何か焦燥感に駆られ動いているに過ぎない。

怖かった。捕まるのが？ それも怖いと思った。始めて恐怖を抱いた。以前ならば冷静に反応していただろう。けれど今の俺は明らかに自身の力量が勝っている相手でも恐怖を抱くだろう。

だがそれだけではない。アガムとシルフィのあの眼が俺を恐怖させた。明らかな拒絶。俺の事を忘れたかの言動、拳動に恐怖した。その事實は、俺の心を揺さぶるには十分すぎる。

これがエシヤの言っていた事なのだろうか。

分からない。分からないが、もしそうなら何でこんな事に……。

気付けば歯噛みし、奥歯が五月蠅いほど音を鳴らしている。折れそうな心を叱咤する。

止まらない。止まれば、もう動けない。動き続けないと、俺は。得体の知れない圧迫感に俺は足を動かし続け、それだけに集中した。

\*\*\*\*\*

体力の限界を超えた。俺の身体能力も無尽蔵では無い。荒い息を肩で吐く。

最初に比べると、速度が目に見えて遅くなっている。

そろそろ限界か。俺は倒れるように近くの巨木に寄り添った。

暫く止みそうに無い呼吸音を聞きながら、先程走ってきた道程に視線を送る。

道は無い。ただ樹木に囲まれている場所は距離感を伺い知れないが、それでもサウス村からは相当の距離は稼げたはず。追手は来ないだろう。

ブルルフェルド周辺に比べるとそれほど鬱蒼としていない。その為か、茂った葉は隙間を作っており、空を覗く事が出来る。

空には星空が瞬いている。空気が澄んでいるのだらう。満面の星空が顔を覗かせている。

呼吸と心は少しだけ落ち着いていた。

空腹を感じていたが、それよりも疲労の方が強い。火を炊かず、そのまま瞳を閉じた。

「つ……かれた」

俺は泥のように眠った。

色々な事が起き過ぎて、今は何も考えたくなかった。



## 双対の巨塔

突然、地面が揺れ、俺の意識は現実へと戻された。  
まどろんだ意識はすぐ明瞭になり、身体を跳び起こす。  
辺りは既に白んでいた。

「なんだ？」

地震、では無い。地鳴り、だろうか。断続的に伝わる振動は徐々に大きくなっている。

樹木に止っていた鳥達が空へと逃げ、幹は振動で揺さぶられ葉を落としている。

思わず身構える。明らかに何かが近づいて来ている。

足音。巨大な何かが近づいてくる足音。

鼓動を早くする。体が震える。

感情を抑える事が出来ない。まだ見ぬ何かに恐怖を抱き始めている自身に苛立ちを覚える。

「見い〜つけた」

傍目は魔物にしか見えないその巨漢が眼前に現れた。だが確実に人間の風貌をしているスキンヘッドの男を見上げる。

俺の身長を優に超える巨躯は到底人間とは思えない。

剥き出さんばかりに蠢く眼球は別の生き物のようだ。思わず身震いする。

体躯から伸びる丸太のような腕には俺の身長程の戦斧が握られて  
いる。

「兄者〜〜!!」

「おお、居たか」

樹木を薙ぎ倒しながら現れた兄者と呼ばれた男は同様の体軀をしていた。完全に瓜二つの二人は双子だと認識せざるを得ない。

全く同じ容姿だが一つだけ違ったのは握られている武器が大剣だという事だけだった。

突如、双子はそれぞれの背中を合わせ、対の体制を取り、なにやらポーズを取り出した。

兄の方が空を仰いだ。と、思ったなら機敏にサイドチェスト。ボデイビルで言うサイドチェストの構えを取り此方に直る。

「泣く子も黙るいぶし銀、大剣のジェイド!」

これがアニメならば派手な効果音が鳴っているだろう。

だが、現実には辺りに響いているのは風に揺られた葉の摩擦する音のみだった。

というか、いぶし銀って、華やかさに掛けるって前提だったような……。自分で言ってる意味は判ってるのだろうか。

次いで、弟の方が機敏に動く。

肩幅ほど足を広げ、両手をしなやかに動かす。両腕が停止した、と思った刹那両腕を顔の横へ折り曲げた。

上腕二頭筋が山々のように盛り上がる。

ダブルバイセツプス。フロントである。これが現代ならば高得点を得られるであろう肉体美。加えて口元から覗く太陽光を反射せんばかりの白い歯は審査員へのアピールだろうか。

「正道に行く、鯨背な男、戦斧のゲイル〜!」

どこから突っ込めばいいのか。とりあえず、鯨背ではないと思う。というか名前と容姿が合っていない気が……。

思わず嘆息する。正直どう反応すれば困ってしまった。とりあえず拍手でもすればいいのかな。

「二人合わせて！」

「ブラックリストハンター！」

声を発すると同時に全く同じ動作を取る。

それは見事に合致していた。左右対称に容姿が瓜二つな二人が回転し俺に背中を向ける。

『双対の巨塔！』

決まったとばかりに此方に笑みを投げ掛ける。

すっごい、ドヤ顔……。

しかし、相も変わらず、空気は冷え切ったままだった。双子にとつてはそうではなさそうだけれど。

「はい。そんじゃ、死んで〜」

「おらあ！」

同時に違う言葉を放ちながら同じ動作を行う。それは俺に武器を振り下ろすという事だった。

俺は呆気にとられていた意識を瞬時に取り戻し、後方へと跳躍する。

鼻先を掠める。薙いだ風は俺の額に一筋の裂傷を作る。

双子の一撃は先程まで俺が居た地面を粉々に砕いた。

着地したと同時に止めていた息を吐く。

抑えていた動悸は叫びだし、体中に汗が滲む。

呼吸が難しい。身体を動かした所為ではない。ただ、現状に思考が混濁しつつあった。

焦燥感を抱かずには居られない。

「な、何をする！」

「何って〜？ 殺そうとしたただけだけど〜？」

間延びした口調に似合わない殺伐とした答えに思わず息を呑む。

殺す、と言ったのか。

呆気にとられた俺を差し置いて、なにやら自身の胸元をこそこそと探っている。

目的の物を見つけたのか、その手をこちらに翳した。

「賞金首、黒髪の殺人鬼。クリミア王妃殺害の罪。生死は問わない」

翳した手に握られている紙面上に記載された文面をこ丁寧にもそのまま音読した。

双子は嫌な笑いを浮かべながら此方を見下ろしている。

「兄者、優しい〜！ わざわざ賞金首にも〜、教えてあげるなんて〜」

「褒めるな、弟。当たり前的事をしたまだよ」

なんだこの茶番は。

とにかく、俺は指名手配犯から賞金首に昇格していた事は分かった。

こいつらは賞金稼ぎ、といった所だろうか。俺の首目当てで俺を探していたのだろうか。

だが、こんな森の奥深くで見つかるとは、どういう事だ。

「さてと。説明も済んだし、殺そうか」

「賛成〜！」

そう言つと各々の武器を振り被る。

天を突く程、高らかに聳え立つ二本の武器はそれだけで絶望を表す事が出来るほどだった。

少なくとも俺にはそう思えた。

「ちょ、ちょっと待って！」

「なんだよ。もう死ねよ」

「まあ、待て、弟よ。なにやら疑問があるようだ。余裕の在る漢ならば答えてやるのも一興」

「さ、さすが兄者。輝いてる。あ、頭じゃないよ」

「……一言多いぞ」

「ごめんなさい」

もう気にするのはよそう……。

とにかく俺の質問に答える気はあるようだ。

内心、胸を撫で下ろす。一時的には言え、身の安全は保障されたのだから。

俺は額の傷から滴る血を服の袖で拭った。

「で？ まだ何かあるのか？」

「い、いや。俺、勇者なんですけど……」

「ふむ。知っている。勇者候補生なのだろう？ だが、犯罪者だという事には変わりはない」

あ、あれ？ 俺が勇者候補生？ 魔王の話では、俺が勇者だといふ事は既に知られている事では無かったのか？

「いや、勇者です。ほ、ほらこの髪」

自身の髪を指先で摘み、黒髪を指し示す。

口元に手を当て俺の髪を見詰めている。記憶を探っているようだ。

「黒髪がどうした？」

「い、いや。どうしたって。勇者の証」

「……確かに珍しいな。だが、それが、なんだ？ 人間の中には赤髪の者も居たりするぞ」

「なんだ、って……。勇者は黒髪だという予言が」

「聞いた事無いな。預言者エシヤ様もそのような事は言っていないと思うが？」

つまりは、魔王が嘘を付いていた、という事か？ そしてエシヤも嘘を？ いや、それは早計か。俺に勇者だと伝えた時は明確な予言の言葉から俺が勇者だと定義していた。

そもそも、それを世界中に伝達しているか、までは聞いていない。ならば、知られていない？

そもそも、魔王の言葉が本当なら、エシヤも嘘を付いていた事になる。

……つまりはどちらかが嘘を付いているのか。或いはどちらともか。

とにかく考えても仕方ない事だ。当事者はどちらとも居ないのだから

「……小僧。貴様は一介の候補生に過ぎんだろ。それに勇者が現れた等と言う話は聞いては居ないな。虚言も大概にしなければ潰すぞ。まあ、あとで潰すが」

嘘を付いている様には見えない。

明らかに、俺が何を言っているのか分からない、といった様子だ。エシヤが言っていた、魔王が俺を騙していたという事は、エリス

を助ける手段を教えなかった事だと思っていたが、まさか、全て嘘だったのか？

いや、それでは説明が出来ない部分も多い。真実に嘘を織り交ぜていたという事だろうか。

「それだけか？ ならもう殺すが」

「あ、あと一つ」

「なんだ？ これで最後にしろ」

「なんでここが分かったんですか……？」

「それは、気合だ」

「……気合？」

「そう。成せばなる。成せねばならぬ。そう言う事だ」

コミュニケーション能力はとても大切なのでですね。

筋肉用語の習得の難しさに俺は頭を悩ませた。

「では、いざ尋常に死ねい！」

もう会話をする事も困難だと認識した俺は、構えを取った。

双子が獲物を振り被ったのが視界に映る。

内心、どうすればいいか分からなかった。戦うか？ 戦う？ ど

うやって？ 武器は無い。ならば、肉体のみで戦うか。それとも…

…。

俺は頭を振った。無理だ。出来ない。召喚は、出来ない。

怖いのだ。記憶を失うのが。例えそうならないとエシヤや魔王が俺に伝えたとしても、それが真実だと断定出来る程、今の俺は魔王もエシヤも信用していなかった。それでも命を失うよりはマシなはずだ。はずなのに、俺は力を使う気には到底なれなかった。

震えて自分の命令も満足に遂行できない四肢を伴って何が出来るのか。

俺は溢れ出る恐怖心を必死に堪えながら、眼前に迫る二本の巨塔を眺めていた。



## 双対の巨塔 2

眼前に迫る二本の無骨な鋼鉄を眼にして、否が応にも死を意識した。

動け。だが動かない。震えて筋肉が弛緩している。

動かなければ死ぬぞ。さっきは動いただろう。

まるでもう一人の自分が居るように震えている俺に語りかけてくる。

声では無く、ただそう意思が伝わった気がした。きっと幻聴なのだろう。それは感情を失った声質。

時が止まっているかのような感覚。だが、確実に何もしなければ俺は死ぬ。

そう思った瞬間身体が飛び跳ねた。

振り下ろされる鋼鉄を寸前で避ける。双子の一撃は地面を抉り、周囲に砂埃を生み出した。

逃げるなら今しかない。

俺は踵を返し、一目散にその場を離れようとした。

「逃がさな〜い」

何時の間に回りこんだのか、俺の目の前にはゲイルが仁王立ちで立ち塞がっていた。

巨体にも関わらず機敏に動けるらしい。

地面擦る音が後方から聞こえる。ジェイド方もこちらを視界に入れたようだ。

どうする。思わず息を呑む。

今迄感じていた根拠の無い自信は今全く持ち合わせていない。

死を恐れる感情は俺の思考を混乱させた。俺は、何故何の戸惑いも無く、今迄戦えていた？

「逃げてても無駄だ。もし俺達から逃げる事が出来ても、一生追われるぞ」

「そうぞ。だから、ここで死のう？」

はい、そうですね。なんて言える訳が無いだろう。

恐怖に震える。耳を塞いで塞ぎ込んでしまいたい。だが、理性が生への執着心がそれを止めるのだ。死にたくなければ立ち向かうしか無いのだと。

俺の思考を待つ事無く前方のゲイルが戦斧を振り下ろしてきた。さっきは気が付かなかった、というよりその余裕が全く無かったのだが、早い。単純に拳動が早いのだ。如何にも重量の在りそうな武器を軽々と振り回す所作はその腕前的一端を伺わせる。

後方へは避けれない。俺は済んでの所で左方に跳躍する。身体を捻り着地と同時に視界に双子が入るように位置取る。左方にはゲイル、右方にはジェイドが位置している。

「何故戦わない？」

「何故つて……」

「……武器が無いからか？」

俺の今の外装は薄手のシャツに綿のパンツ。後は外套で覆っているだけの軽装だった。武器は勿論所持していない。

俺の返答を待たず、腰元に携えていた長剣をこちらに投げて寄越してきた。

慌てて受け取る。軽やかな所作で投げて来たが、意外に重い。

「狩り用に使っていた物だ。意外に業物だぞ。使え……手入れはしている」

訳が分からず頭に疑問符を浮かべた表情でジェイドを見た。

「……それで戦えと言っている。無力な者を斬るのは後味が悪いからな」

「さすが兄者！ 剣士の鑑！」

「ふっ。褒めるな弟よ」

「でも、それなら最初に渡した方がもつと格好よかつたね〜！ いきなり攻撃しちゃったから格好良さ半減だね〜。気が付くのが遅かつたね〜」

「……うっさい」

双子の茶番は置いておいて俺は受け取った長剣を鞘から抜き出した。

無骨ではある。だが、言っていたように手入れはしているようだ。刃毀れはしていない。

右手に握ってみる。片手だと重い。

「さて、これで心置きなく戦えるな」

これで戦うのか。戦う？ 俺が、目の前の巨躯の男達と？

視界に認められる巨躯の双子。体格からして俺が敵う様には見えない。何を以って戦えるのか。技術も経験も然程無いのに。

あるのは、人より少し優れた身体能力と理不尽に与えられた召喚魔術だけ。

……もういいだろう。考えるな。考えれば恐怖に身体も思考も動かなくなる。

ただ、目の前の男達を倒す事だけを考えればいいのだ。召喚魔術だけは使わない。使ってたまる物か。

半ば自暴自棄になりつつも俺は意識を戦闘へと集中する。

恐怖は無視しろ。今迄やってきたようにやればいい。感情は捨て

ておけ。今は邪魔だ。

正眼に構え、深呼吸をする。自身の息遣いに集中する。そうすると次第に辺りの音が俺の呼吸音しか聞こえなくなっていく。だが、視界は明瞭だった。正面の敵の拳動が全て見える気がした。

双子が構える。両者共、武器を振り被ったまま静止した。

俺の纏った空気を感じ取ったのか先程と表情が違う。

双方とも感情を浮かべず、ただ無表情で集中する。

沈黙。どのくらい経ったのか。二対一、しかも明らかに体格が劣る俺に対しても警戒心を緩めていない。俺の腕前を侮れないと測ったのか。それとも俺のような実力が下だと思える者にも油断をせず対峙できる程の腕前の持ち主なのか。

辺りは風が葉を揺らす音しか響いていない。

刹那、鳥が樹木の枝から羽ばたく音が周囲に響いた。

ゲイルの気が削がれた。その瞬間を見逃さず、俺はゲイルへと疾走する。

俺の拳動に気付くのに遅れを取った。俺が眼前に迫ると同時に漸くこちらに意識が向けられる。俺はその瞬間に屈みながら左方、つまりジェイドと俺との間にゲイルを介在させる位置に移動した。

ゲイルは俺の動作に付いて来れず一瞬俺を見失う。

俺はその隙を見逃さず、足に一閃を繰り出す。この角度タイミングで避ける事は困難だろう。

当ると思つた瞬間、その巨体に似合わぬ速度で跳躍した、と同時にこちらに戦斧を振り払ってきた。

俺は屈みその一撃をなんとか避ける。頭上を風を切り裂く音が通り過ぎる。

着地と同時にゲイルが屈み、その上をジェイドが飛び越え斬りかかって来た。

俺は回避しつつ、そのまま斜め正面に跳躍し、屈んでいるゲイルの顔面に跳び膝蹴りを加えた。

完全に顔面を捉えた、と思つたが腕の硬い筋肉で顔面を防御され

てしまう。

「ぐっ……」

俺は跳躍の勢いが死んでしまう前にそのまま前方へ宙返りする、と同時に空中で逆さの状態で捻りを加え、ゲイルの顔目掛け振り払う。流石に避けれる訳が無い。

俺の攻撃を見越していたのかゲイルが戦斧でそれは受け止めた。両手ではなく、片手で。

交差する武器を支点に力を加え少し距離を置いて着地する。間髪居れずジェイドがこちらに追撃してくる。

ゲイルも早いと思っただが、こちらはもっと早い。

体勢を整える暇も無く振るわれる大剣を頭上で剣で受け止める。

瞬間、首筋に悪寒を感じた。これでは剣が折れる。

俺は剣の刃では無く、腹で受けて、右足を地に付き剣を肩に担いだ。

正面から加えられる筈の力は剣先へと流れ地面へにその足跡を残した。

右肩に重い痛みを感じるのを奥歯を噛み締めながら堪える。

頭上に上げた手首を左方に捻る。同時に腰を捻り、斬れるだけの溜めを作る。足を踏み出しながら、腰、肩、肘、手の順に溜めを一気に解放し剣をジェイドに向けて振り下ろす。

全ては一瞬。

予想しなかつただろう一撃にジェイドは避ける動作もしなかつた。肩口から腰に掛けて俺の一撃の軌跡が残っている。

空気が停止した。

「見事……」

その一言を漏らすと、ジェイドは大剣を振り下ろしたままの姿で

後ろへと倒れこんだ。

「兄者をよくもあー！」

絶叫しながらゲイルは突撃してくる。だが、動揺しているのだろう。先程まで見た清廉な動きは見られず、ただ感情のまま此方に戦斧を振り下ろしてきた。

俺はそれを避けながら、前に出された右足を斬り払った。

負った傷ゲイルの足は巨軀を支え切れなくなった。そのままの姿勢のまま正面に倒れこむ。

「ぐ、ぐおー！」

斬り払った体勢のままジェイドとゲイルを見据える。

ジェイドの惨たらしい傷跡を見る。耳を劈くゲイルの罵倒を聞く。嫌な気分だ。どんな正当な理由があるかと、俺が手を下した事には変わらない。

ジェイドは死んだのだろうか。死んだのであれば、俺が殺した……。

人を殺した、のか？

自身の身の危険を感じた時に浮んだ思いと同じ、或いはそれ以上の感情がじわじわと俺を蝕んでいくのが分かった。

恐怖を。恐ろしい、という事を感じずに居られなかった。

今更ながら、心臓が五月蠅いくらいになっているのを感じた。

「あ、兄者ー！ お前、殺してやるー！」

その言葉に思わず身を竦める。完全な殺意を一身に受け。それを受け止めなければならぬのだらうという冷静な自分と、仕方が無いじゃないか、俺は悪くない、という言い訳を言う自分が同時に囁



## 迷探偵ジェイド

「あゝ、痛てえな」

声の主に振り返る。

ジェイドが上半身を起こし気だるそうにしていた。

俺は思わず素っ頓狂な声を上げた。

「い、生きていたのか？」

「あれぐらいで俺の筋肉をどうにか出来ると思うのか？」

思うのか？と聞かれれば、頷くでしょうね。人間なら当たり前でしよ。

俺の内心は置いておいてどうやらジェイドには常識が通用しないのが分かった。

傷口はもう既に出血が止っており、生々しい傷跡が見えるだけだった。よく見ると傷口が塞がっている。完全では無いけれど。

一体どういう事だ。魔術だろうか。けれど魔力を感じた覚えは無い。

「魔術ではないぞ。鍛え上げた筋肉は不可能を可能にする、それだけだ」

あれ？ 俺喋ってないと思うけど。

読心術の心得でもあるのだろうか。それとも、日頃言われているのか。そっちの方が妥当そつだ。

「それだけって……。常軌を逸していると思うんですが」

「常識に捕らえられては強くはなれないぞ」



何やら決め台詞調で言われたが、そうですね、と尊敬のまなざしでも向けるべきなのだろうか。

無理。本当無理。だって、なんか気持ちわる……怖いし。という  
か理解不能？

俺の事は完全放置で自分の世界に浸っている。俺、格好良いとでも言わんばかりの表情。

「あ、兄者〜！ 生きていたんだね〜！」

「当たり前だ、俺が死ぬ訳が無いだろう。というか足大丈夫か？

弟よ」

「うん。 もう大丈夫〜」

もう、大丈夫？ いや、手加減はしたが直ぐに治るような斬り方はしていない。

だが、ゲイルの脚を見ると俺が付けた傷はジェイドと同様に塞がっていた。

傷が治っているのではなく、周囲の筋肉が膨張し、傷を覆っている。先程ジェイドが言っていた事はどうやら本当の事らしい。

……やだ、どうしよう。気持ち悪いんですけど。

っていうか、それじゃ、生半可な攻撃は意味を成さないという事か。

正直、安堵しなかったと言えば嘘になる。人を殺していないという事  
う事実は俺の心を軽くした。

この世界に来て、様々な相手と戦った。人間と魔物とエルフとも戦った。けれど、魔物以外の命を奪った事は無い。

オークを殺した時も不快感を感じた筈だ。例え魔物でも大型の生物を殺す事には抵抗がある。

……オークと戦った？ いつだったっけ？

どくんと、心臓が高鳴るのを感じた。

分らない。記憶が無い。でも確かにそれは事実だと告げる自分が居る。

頭を振るって意識を外へと出す。このまま熟考していると頭がおかしくなりそうだった。

とにかく、人間やエルフなら尚の事だ。道徳心と同調、自身に近い形をしているのならば、その相手を殺す事に抵抗を感じない筈は無い。もし、何も感じないなら、それは人間では無いと思う。人間の形をした、表現のしようがない何かになるのだと思う。俺はそうは成りたくないし、成れない。

いや、単純に怖いのだと思う。人を殺した瞬間、俺は俺で無くなってしまう気がする。ただの黒井大和ではなく、殺人者の黒井大和になるのだから。

だが、俺の思い等、関係無いだろう。目の前の賞金稼ぎにとって

ジエイドもゲイルもこちらに向き直る。

俺の攻撃など歯牙にも掛けない、とでも言わんばかりに、機敏に動いた。

思わず俺は身構えた。手負いであると考えない方が良さそうだ。

「……お前、名は？」

「へっ？」

思いも寄らない質問に呆けた口調でに聞き返す。

「お前の名前だ。俺達は名乗ったが、お前は名乗っていないだろう？ 礼を欠いていると思うが？」

「というより、名乗る前に僕達がいきなり襲い掛かったんじゃないかっ たっけ？」

「……………じゃかましい！」

まあ、確かに名乗っていなかったな。でも、名乗ってもいいのか……………？

なんだかつる覚えだけど、最初の頃は名乗る事も、名を聞く事にも抵抗があつた気がするけど。

気のせいかな。

俺は今のやり取りは完全に無視して質問に答えた。

「あ、えと、すみません。俺は黒井大和です」

「……………黒井大和。珍しい名前だな」

「まあ、そうかもしれないですね」

「ふむ……………。まあいい。大和」

いきなり、名前で呼ぶんだな……………。まあいいけど。

とりあえず、今は攻撃してくる事は無いみたいだ。ならば、乗っけて置くのも悪くは無いだろう。今はとにかく時間が欲しい。どうするか、その指針が全く決まっていなかったから。

「なんですか？」

「……………本当にお前が王妃を殺したのか？」

「……………何故、そんな質問を？」

「何。お前が殺したとは思えなくてな。王妃はどうやって死んでいったのか知っているか？」

「いえ……………。知りません」

「……………お前はその現場に居たのだろうか？」

どうやら、俺が王妃の死体の傍に居たのは知られているらしい。ならば、隠す必要も無いか。

本当にいいのか？ 今迄なんの疑いも無く、厭、多少は訝しんだ

かもしれないが、それでも大した根拠も無く、信用した相手に裏切られた。それも、早計かも知れない、全て嘘ではないかもしれない。だが、確実に俺は騙されたのだ。

生まれた猜疑心は相手を選ばない。

それとも最初から持っていたのかも知れない。ただ盲目的にその感情を押し殺していたのだとしたら。それは、何故だろうか。それは俺の杞憂なのだろうか。

だろう、かもしれない。その言葉ばかりが浮ぶ。全ては推測で真実ではない。

押し問答は終わりを知らない。このまま、黙っている、もしくは誤魔化すという選択肢もあった。

だが、それでは……変わらぬ。あいつらと。

俺は自身に生まれた、対象が曖昧なままの反発心から素直に返答した。

「いきましたけど、近くでは見ていません。うつ伏せに倒れて、呼吸はしていなかったと思いますけど」

「……原因は、何だと思う？」

「さあ……。俺は、死んでいるのを確認した訳ではないので。それに外傷は無かったと思います。ただ、呼吸をしていなかった様子だったので、死んでいるのか、と思っていたんですけど」

「おかしいな」

「え？ 何がです？」

何かおかしな事でも言ったのか。いや、俺は俺が感じ取った事実を伝えただけに過ぎない。

「王妃は斬殺されたんだよ」

「そんな……俺が見た時は」

「ただ倒れていただけ、だろうか。ならば、その後誰かに殺された

のか、或いはその王妃自体偽者だったのか」

「……なぜそんな事を」

「その前に聞きたいのだが、お前は何故あそこに居た？」

「それは……」

言い淀んだ。それは全てを話さなければ話の辻褄が合わないと思っただから。つまり、エシヤから俺は勇者だと伝えられ、使節として王妃へ謁見し、何故か牢屋に入れられたあの日の出来事を話さなければ成らないという事。

それには、俺が勇者だと自身で訴える必要がある。なんだか、おこがましい気もする。そもそも、俺は勇者じゃないってジエイドに言われているし。

話すしかないか。ああ、もう！ どうにでもなれ！

俺は半ば自棄になりながらあの日の出来事を全て話した。

「……ふむ。成る程」

そう言うつとしばし考え込む。意外にも俺の言葉を真摯に聞いてくれたようだ。

巨軀の男が物思いに耽る様子は彫像を思わせる。現実離れた肉体はまるで作り物の様に思えた。

「そうなると余計に違和感があるな」

「違和感？」

「何故牢屋に入れられた？」

「何故って……」

何故だろう？ 確かに色々おかしい。けれど、それほど深く考えていなかった。何故だろう？

「そもそも、牢屋に入れたあとお前だけ直ぐに解放している。その後で……あゝ、リリアだったか？ そいつが謁見の間に居たのならばそいつが主犯なのは間違いないだろう。その能力は恐らくテンプテーションだろうな。他者の心を操る。それで兵士の様子もおかしかったのだろう」

俺の話だけでこれだけ推理できるもんだと感心した。  
巨体に似合わず意外に頭が切れるのか。

「お前が牢屋に入れられていた時間。その間だけお前が邪魔だったのかもしれないな。何、とは断定出来ないが」

「邪魔……俺が」

「まあ、それについては今の時点では分からないな。情報が少ないとにかく、なぜ王妃が殺されたか、が重要だ。そうだろう？」

「ああ……俺もそれが知りたい」

いつの間にかジエイドの言葉に耳を傾けている。

それほど、その言葉には心引く物があった。俺が渦中に居るからと言う事も作用しているのだろう。

というか、何故か敬語ではない自分に気付いた。

「飽くまで俺が今浮ぶ考えだが、二つある。一つはお前を貶めるため、まあ、これは誰でも浮ぶな。この場合倒れていた時点では死んでいなかった、もしくは、偽者だった説が考えられる。殺すつもりは無かった場合もある。これはその場ではお前を犯人に仕立て上げ、後で無事な姿を現す。そこから考えられる事は何だと思う？」

「……さあ」

分からん。分かる訳無いじゃん。たぶん魔王が仕組んだ事だろうけど。リリアも居たし。

だが、最初に話した時、その事には触れなかったような気がする。ローウエルを襲った事は認めていたのに。

「嘘が付ける」

「……はい？」

「いや、言い方が悪かったな。嘘に信憑性が増す、かな」

「それも意味が分からないんだけど」

「ふむ。つまりだ、王妃が生存していた場合、王妃は操られている可能性が高い、って事だ。今迄の話からしてな。その上でお前を犯人にする事も、冤罪にする事も、他者を犯人に仕立て上げる事も出来るって事だ」

「ああ……成る程。被害者なら例え嘘を付いても信憑性が増すって事か。それが王妃なら尚の事だと」

「まあ、そういう事だな。王妃自身をいきなり操ってもいいが、それでは突然変わった王妃に猜疑心を抱く者も居るだろう、って事だろうが。なんとも、慎重な奴だな」

「……その、仮説が事実ならね」

「俺もそれで正しいとは思っていない。ただ、可能性の一つとして話している訳だ」

「だけど、それが事実なら、どんな嘘を言おうと思ってたんだろうな」

「さてね……飽くまで仮説の域を出ないからな」

肩を竦め過剰に反応する。

一つ一つの所作が人を惹きつける。こいつ、政治家に向いているんじゃないのか？

「それで、もう一つは？」

「予想外の事態が起こった、かな」

「なんだ……曖昧だな」

「俺もそう思うが。もし、倒れていた王妃自体が不測の事態だったとしたら」

「……だけど、すぐ兵士が現れたけど？」

「ふむ。そこが疑問だ。まるで、計った様に現れた兵士。しかしその時点ではお前は王妃に気が付いていない。その事実はお前を貶めるためという事実を浮き彫りにしている、かの様に見えるが、もしそれが単純な勘違いだったとしたら？」

「勘違い？」

「そう。例えば、王妃が見られる予定ではなかった。そしてお前は見ていなかったが、見られたと思いついた、としたら？」

「……俺自身が兵士を呼んで事情を説明する、かもしれないな」

「ならば、その前に状況証拠を作り上げようと……するかもしれないな  
い」

「かもしれないな。それしか言っていないけど」

「仮定だからな。必然とそうなる」

「なんか、説得力に欠けるな。それなら、俺を貶めようとする方がしっくり来る」

「引っ掛かるのは、お前を牢屋に入れた事だ。それが無ければ俺もそう思うんだが、なにか他の意図があったように思える。そして恐らくその場合、リアの他に、もう一人誰かいた」

「……ただのミスじゃ？」

「みす？ ってなんだ？」

「あ、ああ。単純な手違い、って意味……だけど……？」

あれ、なんか違和感。なんでだろ？

俺は頭を捻り、疑問符を浮かべる。

そんな俺の様子を勘違いしたのか、ジェイドは勝手に話を続ける。

「手違いの可能性は低いだろう。一国の主を操ろうって奴がそんなえらくと、みす？ を犯すとは思えないな。まあ、ありえない事で



は無いが、恐らく俺は無いと思う」

「まあ、そうかも」

「こっちの説は穴だらけだが……俺はこっちの説が正しい様な気がする」

「その根拠は？」

「勘だ」

「勘とか気合とか好きだね……」

先程まで理路整然と話していた人物とは思えぬ曖昧さ。こいつはよく分らん。掴めない男だ。

直感に頼るのか、理論に頼るのかどっちかにしてくれ。

「まあ、好きだな。なんか格好良いだろ？」

「……それより、なんで俺にそんな話を話した？　まるで俺の話を……」

信じているように。俺の話を中心に鵜呑みにしている。何を持ってその考えに行き着いたのか

先程まで俺達は殺しあつて居たんだぞ？　その相手の話を信じようとする物だろうか。そんな人物は馬鹿か相当のお人好ししか居ない。

「だから言っただろう。お前が王妃を殺したように思えない、ってな」

「いや、その根拠をだな」

「お前が俺達を殺さないように手加減していたからだ。お前が本気なら、俺も弟も無事ではすまなかった。違うか？」

違う。そうじゃない。俺はそんな善人じゃない。ただ、怖かっただけだ。記憶を失う事が、誰かを殺す事が、誰かを信じる事が。

「そんな事は……」

「ある。まあ、正直剣士の端くれとしては少々腹が立ったが、それでもお前はいい奴だ。そう思った。だから話を聞いた。そして信じた。俺は俺の直感を信じている。あ、あと俺の筋肉もね」

馬鹿か。筋金入りの馬鹿だこいつ。

だが、気持ち悪いまでの満面の笑みを見てもそれほど不快感を抱いては居なかった。

ふと視線を動かす。完全に空気と化したゲイルは何時の間にか寝ていた。難しい話は苦手、なのだろうか。それともあまり興味が無かったのか。

だが、敵だった俺に隙を見せている様子は、なぜか俺を安堵させた。

## 歴史と現在

「さてと……」

呟いた、と表現出来る程の小さい音量にゲイルが反応した。

地面から起き上がり、こちらに向き直る。

話は終わった。完全にではないが、俺の話せる事はもう無いとい  
って良い。

此方に視線を向ける双子は何を思っているのか。

勘違いするな。奴等は敵なのだと自分に言い聞かせた。そう、仲  
間ではない。味方ではない。俺の首を狙う賞金稼ぎなのだと心中で  
反芻する。

「行くか」

「あ、やっぱりそうなるんだ」

「え？」

馬鹿みたいだ。目の前の双子では無く、俺の反応が、だ。

何度目かの呆けた言葉に思わず自嘲する。

双子の、特にジェイドの言動は俺の予想を遥かに超えている。思  
考が理解出来ない、というか、同調出来かねる思考の持ち主なのだ  
と思う。

俺の呆けた様子に、ジェイドはこれ見よがしに大きく嘆息する。

手を広げ大げさに、全く困った坊やだ、とでも言いそうだ。

……それは言い過ぎかもしれないけど。

「ここに居ては不味い」

「不味い？」

「俺達以外の賞金稼ぎが此方に向かっている可能性が高い、って事

だ

双子以外の賞金稼ぎが此方に迫っている？

目的は俺以外に考えられないが、何故ここが分かった？

「いや、実はな。俺達のギルドは至る所に党員を潜入させていてな。お前の情報は俺達以外の奴等にも知られているんだ」

俺がさっきまで居たのはサウス村だった。という事はあそこに党員が居た、と言うことか。

ん？ 待てよ？ それじゃ……。

「……気合じゃ無いじゃん」

「……そこは流せよ」

「兄者は、いつも気合と筋肉で事を済ませるからね」

「ふむ。今日は反抗的だな。よかろう。雑巾絞りの刑に処してやる  
う」

「そ、それだけは勘弁。腕の筋肉が弾けちゃう！」

両手を握っては開き、握っては開きを切り替えている。何と無く卑猥な動作に見えるが、相手はゲイル。その対象の表情は引き攣っていた。

対してジェイドのは嬉々としている。ゲイルを追い込んでるのが楽しいのだろうか。怖い怖い。

何やら分かり易い刑罰が浮んだが、再度無視を決め込んだ。

だが、このままでは俺が放置されかねない。先の言葉も気になる。俺は咳き込んで、自身の存在を強調した。

「む？ すまん」

「いや、いいけど」

俺の行動に自我を取り戻したのか、漸く此方に視線を送ってきた。その様子を見て自身の安全が保障された事に安堵したのか、ゲイルは大袈裟に胸を撫で下ろしている。俺と視線が交錯する、と、よくやったとばかりに親指を立て、満面の笑みを浮かべている。

「とにかく行くか。距離的にクリミアが一番近いが領土に入るには手続きが面倒だな。関所は堅固だし、審査も厳しい上に時間が掛かる。だとすると、プロルフエルド内で身を隠すか。近場にケレスという村があるがそこは近すぎるし、党員がいる可能性が高い。少し足を伸ばした場所にクライドという街があるからそこまで行くのが妥当だろうな。中々の領土を誇る街だし、領主も比較的人間にも寛大だ。多民族が居住しているはずだから身を隠し易い」

「へえ、博識なんだな。というかそんな近場に村が点在していると知らなかった」

「博識、では無いと思うが……。どちらかと言うと常識だな」

じゃ、それを知らない俺は非常識って事ですが……。

いや、当たり前じゃないか。この世界くらいの文化レベルならば国には領土が在り、それぞれ領主が存在し、統治する領土には住民が居るといふ絵図を描いている筈。領主は住民から様々な税を徴収し国へと献上する。それで国費、工費を賄い、国として成立っている。

以前確かエリスに聞いたが、この世界は三国を中心に形成されており、各国の民衆も都心を中心に居住している。

つまり、領土内と言えど、村々が余り存在していないはずなのだ。又聞きだけど、そう聞いている。

だが、ジェイドの話からすると、それ程少なくも無さそうだ。徒歩でそう遠くない場所に存在しているくらいだし。そう言えば、俺がここに来てから結構経つが、三国とオルクスと言う小さな村にし

か行っていない。……なんか変だな。そんなに村があつただろうか？ それ程まじまじと地図を見た事が無いから分からない。

ふと疑問が生まれる。

そう言えば税収を行っていない、とも聞いた……。おかしい。国費はどうやって賄っている？

いや、その考え自体間違いないのか。ここは現実であり現実では無い。ならば常識では考えられ無い方法を取られている可能性もあるのか？

言葉では聞いた。ここは冥府であり、俺達は魂であり、選別されし者だと。

だが、それは本当なのか？

分からない。何か重大な見落としがある気がして、状況が判断出来ない。

考えれば考える程、泥沼に嵌って行く。底無しの沼の正体は一体何なのか。

「おい。大丈夫か？」

「あ？ ああ。ごめんちょっと考え事してた」

ジェイドの声に我に返る。

いつの間にか無言で思考に耽っていたようだ。

「そうか……。思う所は色々あると思うが、行くぞ。追っ手が来る」  
「で、でも」

「信用なら無いか？ それも分かる。だが俺はお前の言葉を信じた。ならば少しは俺のことを信用しても良いのではないか？」

確かにそうかもしれない。ジェイドにとって俺を助ける事は利益にはならないはずだ。それでも助けようとしてくれるのは、俺を信じてくれたから、だろう。ならば、俺も信じるべきなのだと思う。

思うが、疑いの目を向けてしまう。

善意で俺を助けるだろうか？ 自身も巻き込まれるのに。

だがそうは言っても実際問題ジエイドの言う通りにするのが一番妥当だと理解していた。

……信じてみるか。少しは。

「そつだな……。分かった行こう」

今は疑問に蓋をしよう。まずはここから離れればいい。

道すがら、ジエイドに聞いてみよう。それが正しいかは置いておいて。とにかく様々な観点から情報を得る事が必要なのだ。一面性しか持たない情報は偏る。依存すればそれは真実を覆い隠す可能性が高くなるのだから。

俺はそう思い、先に行くジエイドの背を追った。

今最も疑問に思っている言葉を喉まで出し掛けながら。

なんで、一緒に行動する流れになってるんだろう。

\*\*\*\*\*

この世界には幾つかのギルドがある。

勇者ギルド、冒険者ギルド、魔術師ギルド、商人ギルド、そして賞金稼ぎギルド。他にも幾つもあるらしい。

ギルドに俗称は無い。呼称が無いのは味気無い気がする。俺だったら名前を付けるけど、それ程重要な事でも無いのかな。

ギルドの存在理由は、仕事の斡旋、職業内において地位の向上を

促進、身元保証の体裁、あとは情報の確保、共有が主立つての物らしい。

魔物が往来しているのならばそれを討伐する者や対処方法が必要だ。元々は各国の兵力でそれを補っていたが、それだけでは手が回らなくなった。そこで、ギルドを設立し、軍に所属せずとも気軽に討伐を行う事が出来るようになった訳だ。無償で魔物討伐なんてする人間は奇特だ、という事だろう。

気軽は言い過ぎかもしれない。要は無駄な縛りを無くしたという事だ。

事実ギルド設立に際して、登録者は後を経たなかった。

軍に所属するのを敬遠していたが腕に覚えのある者、犯罪遍歴がある為、軍に所属できなかった者、魔物に憎悪を抱いている者、単純に金銭に困っている者等々。

今ではそれぞれのギルドが取り仕切り魔物討伐の指揮を取っていると云っても過言では無い。

ふと魔王の顔を思い出す。

魔王が魔物に人間を襲わせているのか、という疑問はあったが、それを言葉にした事は無かった。

怖かったのか、頷かれる事が。

矛盾しているとは思う。

魔王は俺に人間を滅ぼそうと誘って来たという言うのに、魔王が人間に危害を加えていると言う確証を得る事が怖かったのだと、今なら思える。

「ま、そんな感じだ」

ジェイドの声で我へと帰る。

思わず思考に耽っていた意識を現実へと戻す。

ここまでのジェイドの話を読んで整理する。主としてギルド関連の話を書いてきたのだが、今の今まで知らなかった事も多くあった事



実に若干の驚きを抱いていた。

俺は何も知らないんだな。

自嘲気味に笑みを浮かべる。

「で？ 他に知りたいのは国の成立ちについて、だったか？」

「ああ。どうやって成立っているのか理解出来ないんだけど……」。

「税金が掛けられていないって聞いたけど、国費はどうやって賄っているんだ？」

「いや、税は掛かっているぞ」

「え？ いや俺は掛かっていないって聞いたけど？ 村から搾取はしていないって」

「確かに住民には掛けられていないな。以前はそれぞれの領主が領民に税の徴収を行っていた。だがなそれでは上手く行かなかつたんだ」

「と言うと？」

「各国併せての総人口数が知っているか？」

「……知らない。それ程多くなさそうだとは思うけど」

無言でこちらに地図を渡してきた。

世界地図には三国と地理が詳細に描かれている。

まず思ったのは狭いという事。それに三国に足を踏み入れた時にも思ったが文化水準に対して人口が異常に少ない。これだけの水準ならば総人口は2000万前後は存在している筈。

中世西洋の総人口は年代毎で変わるが4000万から7000万。国数は現代では50くらいだったかな。

ブルトは狭い。実際、三国しか存在しないし人間が住める陸地はそれほど存在していない。

ローウェルからブルルフェルドまで馬車で約一週間。速度が約10から20kmくらいだろうか。休憩も必要だし夜は走っては居なかつた。一日12時間走つたとして150kmくらいか。そうする

とローウェルからブルルフェルドまで1050kmくらい。位置的にローウェルは東側でブルルフェルドは西側。それぞれの国から海岸までの距離は二国間より長くない。

地図を見て計算するに、目算だが、1,200,000キロ平方メートルくらい。西欧の約10分の1くらいか。

思いの他知識がある事に自分でも驚いた。その知識は正しいのかどうかは見定める事は出来ないが、強ち間違つては居ないと思う。

比較対象を西欧とすると、西欧の50国に対してプルトは3国、1000万キロ平方メートルに対して120万キロ平方メートルと言つた所か。

今までの統計からすると、自ずと答えは出てくる。明確では無いがそれ程外れても居ないはずだ。

「5、600万人くらい？」

「ほう、意外に近いな。約100万だ」

「はい？」

これでも気持ち少なく見積もつたつもりだった。

予想に反して少なすぎる返答に思わず聞き返した。

「少ないだろ？ さて、その住民に今の国が成立つだけの税収を行えばどうなる？」

「重税になるのは目に見えている……よな？」

「ああ、重税を掛けた当初は今より人口は多かつたらしいが実際そうだった。貧富の差は激しくなり、虐げられる者も多く居た。それによつて人口も徐々に減つていき今の数に成つて行つた。まあ、それだけが原因じゃないがな。とにかく死活問題だと考えた三国は各国間会議を行い、税収を取り止め、一つの新しい税を掛けたのさ」

「新しい……？」

「税と言つても金銭を徴収する訳じゃないが」

「何を徴収するんだ？」

「財産さ。死者のな」

「は？」

「元来、親族に相続させる財産を国が完全に貰い受ける、っていう法律税を作った」

「い、いや。無茶苦茶だろ。それ……。聞いた事無いぞ、そんなの」  
「重税を掛ければ死者は増える。だが人口が少ない分死者は減らしたい。ならば重税を掛けるのでは無く、死んでしまう者から搾取すれば良い、と考えた訳だな。ここでは死者が多い。原因は様々だが、疫病、人災、不慮の事故、そして特に魔物によるもの。死人に口なしとはよく言った物だ」

「……そもそも、財産なんて把握できる物なのか、今の調査技術でそれが出来るとは」

「そこでギルドの登場って訳だ。知っているか？ どの仕事をするにしてもギルドに所属する事は必須だ。そして、建造等の高価な売買には保障が居る。つまりギルドを通さなければ成らない」

「それで、財産の管理を行っている……」  
「そういう事だ。財産を搾取されたくは無い、だがギルドに所属しなければ仕事を請け負う事も出来ない。それが今の国の成立ちなさ」

「信じられない……。それで国が成立つのか」

「成立つんだよ。それ程、今この時も誰かが死んでいるんだ。この世界では」

何も言えなかった。厭、何を言えば良いのか分からなかったと言う方が正しい。

この世界の構造が間違っているのかと言われれば、頷けるだけの根拠が無い。

そうやって成立っているのだ。ならば、それを享受するしか無いのだろう。それが時代に生きるといふ事。不満ならば、抵抗するし

かない。国と戦うしかないのだから。

だからか？ だから都心から離れ、国に寄らず営んでいる村々が存在するのだろうか。

国から完全に独立は出来ない筈。国の監視下の元、生活しているのはどのような気持ちなのだろう。

疑問に思い、ジェイドにそういう村の状態はどうなっているのかを問う。だが、そこまで詳しくは知らないらしい。

以前にオルクス村に足を踏み入れた事を思い出す。

皆、一様に疲れたような表情をしていた気がする。

俺の思い過ごしか、それとも……。

頭を振る。考えすぎるな。俺の悪い癖だ。考えすぎればどつばに嵌るのは目に見えている。

知る事。その重さを改めて認識出来た、と思う事しか出来なかった。

## クリス

目の前の正門は巨大で見上げる程だった。

思っていたより規模が大きい。街と言うよりは城郭と言える造り。左右に伸びる外壁は端が霞んで見える。周囲には鬱蒼とした草原が広がっており、見晴らしは良い。しかし疎らではあるが雑草の高さが俺の胸辺りくらいある為、視界は良好とは言えない。

クライドという街はブルルフェルドに存在しているが、独立している。その為か警備は厳重みたいだ。

門の横にある監視塔に門衛が数人。視界に入るだけで、外壁上や小塔にもちらほら見える。

独立もそれ程簡単な事ではないだろう。だが、ブルルフェルドは他国に比べると融通が利くらしい。

「ここがクライドだ」

隣でジェイドがそう呟いた。

後ろではゲイルが眠そうに欠伸をしている。

ここにくるまで約一週間。長旅とは言えないが精神的にも肉体的にも疲弊しきっていた。

「じゃあ、入るか」

「あ、ああ。了解」

ジェイドは言うや否や門の正面に仁王立ちした。何故か偉そうに腕組みまでしちゃって。

数秒経つと、正門の傍に在る扉から門番が出てきた。

無骨な鎧を纏っている門番は俺よりも小柄だった。ちなみに俺は中肉中背。それほど背は高くない。

門番を見据え、片手を差し出した。

「通行証だ」

「拝見します」

門番は高めの声で返答した。

少年、だろうか。成人男性の特徴的な野太い声質は感じられない。なんとなく、容姿が気になり視線を向ける。だが大きな目の兜で隠され、顔の造形を拝む事は困難だった。

ジェイドから受け取った通行証を確認している為か俺の視線には気が付かないようだ。

「あなた方二人は問題無いようですね。そちらの方は？」

俺の方に向き直る。視線が交錯すると、少年か少女か判断し難い中世的な容姿をしているのが分かった。

いやそれより、通行証って……俺の分は入っていない？

思いも寄らない事体に動揺を隠せない。ジェイドに視線を送り、救援を要請する。

「む、そうか。ならば仕方無いな」

ジェイドは背中越しに此方に手を振っている。

地鳴りの様な音を響かせ緩慢に正門が開いた。

完全に俺を放って置いて、ゲイルと共に門を潜っていった。

放心状態でその様子をただ見る事しか出来なかった。

ちよ、ちよっとマジで行っちゃうの？

ジェイド達が入った事を確認したと同時に門は閉まっていった。

門番が俺を一瞥し、興味が無さそうに出て来た扉に戻って行く。

「え、つと……」

俺、完全放置。え、いや、何これ？

全く予期せぬ出来事に混乱する。心臓は回りに響いているのではないかと思う程、高鳴っている。

呆気に取られたまま、何も出来ずただ立ち尽くしていた。どうする？ どうしよう。

必死に冷静になるように自身に言い聞かす。深呼吸を繰り返すと少しだけ動悸が治まった。

とりあえず辺りを確認する。周囲には何も無い。在るのは草原の絨毯とクライドの外壁と正門だけ。

……一先ず、周囲を探索してみるか。何も無いかもしれないが、このままここに居ても仕方が無い。

何と無く寂寞な思いを抱く。

又一人なのだと思傷に浸り、沈鬱な表情をしてしまう。

情けない。一人になった途端、物悲しさを感じてしまう自分に苛立ちを覚えてしまう。

自嘲気味の感情を振り切り足を踏み出した。

\*\*\*\*\*

念の為、クライドの外壁を周回してみたが、何も無い。矮小な期待からは予想通りの結果を得られた。

そろそろ宵の口だ。完全に暗闇の帳が降りてはいないが時期に闇に覆われる。

ポーチから地図を取り出す。エリスの持ち物だった物だ。

空気に触れ、羊皮紙がやや風化しているが実用に問題は無い。

地図の表面に視線を滑らす。

クライドから一番近い村は……やはりケレスか。ジエイドが言っていた場所だな。

だが、近郊とは言え徒歩では数日はかかる距離だ。

……行くしかないか。

それしか方法は無さそうだった。このままここに居ても仕方が無い。

俺は踵を返しクライドに背を向ける。

「何処に行くの？」

決心を阻む声は背後から聞こえた。閑静な地は呟く程の音量でも明瞭に空気を振動させた。甲高い声は少年か、少女か判断が付かない。

慌てて振り向く。閑散とした草原に突如として聞こえた声の主は存在していない。

ん？ 何処だ？

辺りを見回す。日は沈み辺りは暗闇に包まれている。視界は明瞭とは言えなかった。

「し、失礼だな。ここだよここ」

む？ 目の前から聞こえる。と言っか下？

正面を見下ろす。居た。

子供、か？ 身長は俺よりかなり低い。頭部の先端は俺の胸辺りまでしか無い。

黒い外套に身を包んでおり、様相をうかがい知ることは困難だ



「えと？ 誰？」  
「僕？ 僕はクリスだよ」

快活に答える。辺りの様子と相まってその明朗さは際立っていた。それより、どうしてこんな所に子供が？ 呼称からすると少年のようだ。

「あ、俺は大和」

「うん、知ってる。あなたを探していたんだ」

「俺を？ 何故？」

「ジエイド兄ちゃんから言われてきたんだよ」

完全放置な訳じゃなかったのか……。良かった。まあ、半分は放置だったけど。

胸を撫で下ろす。安堵感から深い嘆息をした。

「え？ ジエイド兄ちゃん？」

「ん？ そうだよ？ 兄弟だから」

嘘。こんな事って信じられない。突然変異か鳶が鷹を生んだのか。あのジエイドとゲイルの兄弟？

目の前の小柄な少年の容姿はぼやけてしか認識できないが明らかに端正な顔の造りであるのは分かる。

……ちよつと言い過ぎたか。いや、思い過ぎたか。

「じゃ、いこつか？」

「行くって何処へ？ クライドには入れないんじゃない？」

「ん？ まあ、大丈夫じゃないかな？」

軽い。軽すぎる。本当に大丈夫なのだろうか。

内心付いていくのを憚れる思いを抱いたが、先に行く小さな背中を振り切る程、無常にもなれなかった。とにかく、付いていくだけ付いていく事にした。

小さい歩幅で歩く姿は愛らしさを表現していたが、頼もしさは感じない。まあ、面と向かつては言えないけど。

無言で付いていく。クリスは門を遠巻きに通り過ぎた。辺りの警備を確認しながら外壁に沿って進んでいく。

「大和さんがクライドの周囲をうろろしてたから警戒態勢が少し嚴重に成ってるね」。外壁から離れないで付いてきて」

「あ、ごめん……」

素直に謝罪する。全く嫌味を含まないで事実を語る物言いに俺も思わず返答した。

子砂利を踏みしめる音だけが辺りに響く。俺の足音に比べクリスの足音は格段に小さい。何か特別な歩法なのだろうか。

ただ付いていっているだけだが、クリスは軽微の状態を確認しながら的確に死角を通っているようだ。時々足を止めては身を屈め再び歩を進める。俺はそれに倣い同様の動作を行っていった。

「ここだよ」

「ここ、って……」

目の前には何も無い。在るのは外壁だけだった。

騙された？ いや、早合点するべきでは無い。そもそも、ここまで連れてくる意味が無い。

俺はそう思い直し辺りに視線を動かす。無い。外壁しか無い。外壁？

俺は目の前の壁を観察する。暗い中で暫く過ごした為夜目が効いている。なんとか眼を凝らし周囲に視線を巡らせる。

よくよく見ると壁の一部分が明らかに風化している。

「お、気が付いた〜？ 洞察力は在るみたいだね〜」

俺の視線に気が付いたのか、クリスは感嘆の声を上げた。  
やや上から目線なのが気になるけど。

クリスは風化した一石に手を伸ばし、押し込んだ。  
すると、傍の壁が減り込んで行き、一人が屈んで何とか通れる程の穴が開いた。

「ささ、行こう〜」

「あ、ああ」

いや、何これ。なんでこんな物があるの？ という疑問はあつた  
が落ち着ける場所まではその疑問にふたをして置いた。一応、不法  
侵入な訳だし、見付かったら不味いもんな。

クリスに付いて行き中に入ると通路の奥に光が見える。中に繋が  
っているのは間違い無いと思うが、どこに繋がっているのだろう？  
俺達が入ると数秒後扉は閉まり完全に暗闇が辺りを覆う。

通路は暗い。眼を凝らし奥へと進む。四つん這いになり徐々に這  
い進んで行く。

気温は低く肌寒い。薄着のまま長らく旅をしていた。今の季節つ  
て、秋？ ていうより季節あるんだっけ？ ブロルフェルドは年中  
冬のように気温が低いと聞いていたがクライド周辺はそれ程寒くない。  
この辺りはやや寒い程度で外套を羽織っているだけで少しは快適に  
過ごせている。俺は愛着が湧きつつある厚手の黒い外套に顔を埋め  
た。

サウス村は寒かった。とても、寒かったという思いは薄らぐ事は  
無かった。

「ひゃっ！」

ん？ なんだ？ 何か柔らかい物が顔に触れる。物思いを巡らせていた所為で反応が遅れた。

「ちよ、ちよつと。離れてよ〜！」

「んあ。すまん」

どうやら、クリスが止っていたらしい。

という事は位置的に触れたのは……。よせ。考えるな。貝になるんだ。精神的ダメージが甚大だろう事は火を見るより明らかだ。男には興味が無いです……。

何故か動きを止めてそのままの体勢で何かを伺っている。

「なんだ？ どうした？」

「……なんかおかしい。音がしない」

「音？」

確かに水を打ったように静かだ。

だがそれがなんだと言うのか。

俺の疑問を理解したのかクリスは言葉を続けた。

「この通路、実は酒場に続いてるんだよ〜。でも、喧騒が全く聞こえない。今は夜なのに」

確かに、それならば疑問に思うのも無理は無い。

むしろ疑いを持たない方がおかしいだろう。

何かあったのか？

「……とにかく近くまで行ってみて中の様子を探るしか無さそうだ

ね

「そうだな……。何か問題ありそうなら戻るしかないな」  
「うん。じゃあ、行くね」

そう言うのと再び二つの地面を擦る音が辺りに響く。

いつの間にか光は周囲へと溢れ中の問う巣が探れる位の位置にまで来た。

クリスが手で合図をしてくる。掌を此方に見せている仕草は俺の所作を停止させた。

「な、なに、これ」

「どうした？」

中を覗き込んだクリスの慌てた声に、思わず身を乗り出し、俺も中を覗き込む。

酒蔵、だろうか。一室には棚が敷き詰まっております酒瓶が理路整然と並べられている。

部屋にある唯一の扉は開かれており、奥の様子が見て取れた。奥は酒場のフロアだろうか。円卓が見える。

クリスは先の状態とは打って変わって機敏に中へ入り奥の扉を潜った。俺も後に続く。

そこには誰も居なかった。

## 怪狼フェンリル

「誰も居ない……」

酒場は閑散としている。人っ子一人存在しない空間は不気味な雰  
囲気を醸し出していた。

「今日は店が閉まってたとか？」

「それは無いよ。だって、さっきここを通った時は沢山人が居たん  
だもん」

クリスは訝しげに辺りを見回した。

確かに周囲は人が存在した形跡がある。飲み欠けの酒、そこかし  
こに雑多に並べられた料理。窓の硝子は割れており破片が室内に広  
がっている。多数の椅子は倒れており、切迫した事態を想像させる。  
クリスが戻ってくる間に何かあったという事だろうか。

そもそも、俺達がああ通路を通る前に警備の連中の様子は変わら  
なかった事を考えると、暗がりの通路を通っていた数分の間に関  
起こったのか？

「何があつたんだろう……」

「硝子の破片が室内にあるって事は、外で何かあつたのかも」

俺の言葉にクリスが頷く。

外からの何かしらの衝撃が伝わらなければ破損する訳が無いのだ  
から。

入り口の扉へと疾駆する。俺達は共に外へと飛び出した。

辺りを見回しても酒場内と同じく人気は全く無い。猥雑な通路が  
正面と左右に並んでいる。

想像通り広大な領地。石造りの建築物が数本の通路に沿って敷き詰められている。かなりの人口を誇りそうな家屋の数。全体を見た訳ではないけれど……。

肌寒い微風が頬を撫でる。

俺達が途方に暮れていると、耳を劈く遠吠えが聞こえた。動物の声。狼か、それに近い種の声帯。

「な、なに？」

「……あつちだ」

声が聞こえた方角に疾走する。衝動に脚が無意識に動いた。嫌な予感がする。この時点で何も無かった、と言う可能性は俺の頭に全く存在していなかった。

しんと静まり返った街中を二つの乾いた足音だけが響いていた。

何やら人の声が聞こえる。話し声では無い。これは、怒号？

言葉になら無い雄叫びが聞こえてきた。それ程遠くない。焦燥感に駆られ、速度を上げる。

「おおああー!!」

聞いた事のある声の主はジェイド。

気迫に満ちた叫び声と得体の知れない轟音が鼓膜を揺らす。

何かと戦っている？ 何と？

一つの影が横を通り過ぎ俺を追い越していった。クリスだ。

その速度は肉体強化の魔術を掛けている俺の身体能力を凌駕している。

「ジェイド兄ちゃん！」

「来るな!!」

一足先にジェイドの元に辿り着いたクリスに漸く追い付く。

突然視界が広がる。広場のような場所に出た。周囲の建物は損壊している。いや、燃えている？

無数に倒れている人。無残に切り裂かれ、焼死している者も居る。見るに絶えない惨状がそこには存在した。円状に空間が造られており、中心には噴水……らしき残骸が見える。その上にはこの惨状の原因だと思われる物が見えた。

「な、なんだよ、あれ」

毛むくじゃらの生物は畏怖を抱きそうな唸り声を挙げている。

白い体毛。口角は頬まで裂けており、だらだらと唾液が滴っている。

四つん這いの体勢から身を低くし、すぐ様こちらを襲撃しそうな勢いだ。

大型の狼。そう形容するのが的確だと思う。

「フェンリル」

北欧神話に出てくる狼の名前だったはず。いや、おかしいだろ。神殺しの怪狼だぞ。

待て。落ち着け。そもそも名前が一緒だからってそのまま同じとは限らない。

ん？ なんだ？

何かの既視感を抱いたが、その正体は分からない。今はそんな事を考えている場合ではない。

それなりに距離が開いているにも拘らず、見上げなければ顔を拝めない。圧迫感を抱かずには居られない。

ジェイドに眼をやる。体中煤で汚れており、身に着けていた頑丈な鎧は所々破損してしまっている。



致命傷は無いが、慢心相違。肩で息をしている様子を見るだけで、疲弊し切っているのは明らかだった。

クリスはその様子を見て心配そうな表情でジェイドを見ている。

「ゲイルは!？」

「市民を安全な場所まで先導している！ 魔物はこいつだけじゃない！ 兵とここでこいつを足止めしていたが俺以外全員殺された！」

よくよく見ると、そこら中に在る死体は殆どが武装している。

中には市民が混じっているが、全て無残な死に様だった。

「……来るぞ！」

ジェイドの声に思わずはっとする。地面を走る音が聞こえたと思っただら目の前にフェンリルの顎が現れた。余りの事態に息が一瞬止まる。早過ぎる。

全力で上へと跳躍する。間に合うか。

閉じられる口に並べられた鋭利な牙は俺の足に触れそうになる。

慌てて空中で膝を抱える

間一髪、噛み付きをなんとか避けた。俺の真下にフェンリルの頭部が見え、耳をひくひく動かしている。俺を見失っているのか。

周囲に視線を滑らすと、二人とも先の噛み付きを回避していたようだ。

腰の剣を鞘から抜く。やはり手ぶらでは不安だろうという事でジェイドから譲り受けた物だ。

右手を逆手にし地面へ剣先を向ける。このまま落下すれば致命傷を与えられる筈。

瞬刻にフェンリルの頭が俺の方を向いた。機敏な動きに全く対処できず身が固まる。

喉奥で唸る獰猛な狼はその姿を見ただけで畏怖を覚えた。まだ動

いていない、だが死が頭を過ぎる。

殺される……！

と、思った瞬間、フェンリルの体躯がぶれた。クリスが右足を空中に投げ出した体勢のまま静止している。回し蹴り？ それだけであの巨体にあれだけの衝撃を？

側面から衝撃を受け巨躯がよろめく。体勢を整えるため俺に向いていた顔を正面へと戻した。同時に。後方へと跳躍する。

刹那、ジェイドの大剣が地面を抉る。

「ちい！」

ジェイドの舌打ちが辺りに響いた。

どうやら、ジェイドの一閃を回避する為の行動だったようだ。二人とも早い。俺が視界に入れた瞬間には攻撃に移っていた。

俺は地面へと着地しつつフェンリルの動向を警戒する。

突如、フェンリルが仰け反り、空を仰ぐ。膨大な吸引音が辺りに響く。

息を吸っている？

「来るぞ！ 横に跳べ！」

頭が理解するより早く、脚が動いた。俺は左方に跳躍する。

フェンリルが背を伸ばし、同時に口腔を開いた。瞬間、口内から轟々とした炎が放射される。家屋が丸ごと包まれるほどの規模。巻き込まれば命は無い。俺が先程まで居た場所は、異常な光量を持つ豪炎に巻かれた。

首筋をひやりとした汗が伝う。炎は辺りの気温を急激に高めて居るはずなのに、体温は低く保っている。

九死に一生を得た。ジェイドの言葉が無ければどうなっていたのか……。

内心、慄然としていた。だが俺の感情など関係無く、事態が收拾する気配は無い。

地面へと着地し、フェンリルへと身構える。数瞬後にクリスが横に着地し、すぐさま構える。

半身にし右手を顔の位置まで挙げた構え。空手に近い構えのようだが、肉弾戦を得意としているのだろうか。体格からしてそれは考え難かったが、先程の攻撃を見ると俺の考えは正しそうだ。

反対側にはジェイドが見える。フェンリルを介在してジェイドと別れてしまったようだ。

どうする？ フェンリルは巨体にそぐわない俊敏な動き、肉体を溶解しそうな程の炎を吐き、鋭利な牙、爪を持つ。ジェイドやクリスがかなりの手練れであろうと、勝てるとは思えない。

クリスとジェイドが同時に疾走した。一瞬でフェンリルの元へ辿り着く。クリスの方が早く攻撃へと移っている。

完全に出遅れたが、俺も慌てて地を蹴った。

クリスが掌打を繰り出した、と思う。早過ぎて動きに着いていけない。フェンリルもそうなのかまともに攻撃を喰らった。衝撃に体がよるめいた。一撃では終わらない。クリスは蹴技と手技を駆使し連打を加えていく。跳躍する隙を与えていない。

その隙を見逃さず、ジェイドが大剣をフェンリルの顔面に向けて振り下ろした。

ジェイドの一撃には鋭利な牙が待ち受けていた。異常な程、発達した閉口筋で無骨な鋼鉄を噛み砕いた。在り得ない。あいつの牙はどのくらいの硬度を持っているのか。

ジェイドは自身の愛剣を無残に砕かれ一瞬呆気にとられていたが、瞬時に身を翻し、フェンリルから距離を取った。

クリスの猛攻を受けながらのジェイドへの対応。まさか、歯牙にも掛けていないのか？

「ぐう……！」

クリスが呻き声を上げた。身体に受けている衝撃は小さくは無い筈だが、フェンリルの表情は痛みを感じているようには思えない。対してクリスの顔色が変わっていく。拳骨には血が滲み、先の回し蹴りで腱を傷めたのか脚を引きずっている。攻撃を繰り返すクリスの方が負傷していた。

「くそ！ あいつ俺の剣を！」

その様子を眼にして俺の足が止る。手元の剣に視線を落とす。

この武器じゃ……何も出来ない。あの化け物相手では。

召喚しろ。武器を具現化しろ。そうしなければ死ぬ。お前も、クリスも、ジエイドも、皆。

誰かがそう囁いた気がした。焦燥感に駆られる。何に對して？

冷静になれ。確かにこの状況では召喚しかない。生命の危機を感じながらも比較的冷静に取捨選択を行う。

「くそっ！」

幼稚な反抗心を捨てるしかない。それだけではない。怖かった。

記憶を失ってしまうかもしれない。その恐怖は俺の身体を小刻みに震わせた。

だが、それしか、そうするしかないのだと半ば諦めの念を抱いた。

葛藤している時間が無い。手遅れになる。

俺は自身を叱咤し意識を集中させた。

手を正面に翳し、願う、望む。力を欲する。ぞわぞわとした感覚が背中に生まれ、言いようの無い嫌悪感を抱く。久しぶりの感覚に思わず顔を顰める。

頭痛に頭を抱える。異常な状況だと思い始めていた。いつもならば正面にゲートが開くはずなのに、現れない。徐々に増す頭痛に歯

噛みする。

「うう……」

耐え切れず呻き声を出す。

分からない。何が……起こっている？

視界が歪み、情景が精巧さを失う。鈍痛と焦燥感と絶望を抱き俺はただその場に蹲った。

## 紅蓮の炎を纏う

痛みに体の自由を奪われ、俺の意識は現実を拒否するかのようになり、不得要領な情報を垂れ流しにしている。混濁する思考は現実感を曖昧にさせた。

それは鋭利な爪を前に呆然としている自分を他人事の様に客観視させた。何時の間にかフェンリルが俺に標的を定めていた。

俺、死ぬのか。

何の感慨も無く、ただ漠然とそんな事を考えていた。

死を目前にして走馬灯の様に過去を思い返す事は起こらない。不意に思い返すほどの記憶など無いのだと、自嘲する。

案外呆気無い物だ。そして、思いの他淡々としている。慟哭すると思っていたが、俺は平静だった。

時間の流れが緩慢に感じる。

視界の端には、ジエイドが何か叫んでいるのが見えた。逃げる、とでも言っているのだろうか。今迄に見た事の無い表情に胸を射す痛みを感じた。

クリスは俺の方に猛然と疾走している。必死な表情で。俺を助けるようにしているのだろうか。出会ってそう経たない相手を救おうと言っているのだろうか。だが、間に合わないだろう。距離が開き過ぎている。クリスがここに着く頃には俺は惨殺されているのは間違い無い。回避は不可能。対処も不可能。ならば、もう。

俺は目を瞑った。迫り来る死を受容しよう。せめてその最後は見ずに安楽な死を。

「何をしているのだ？ お前は」

軽々しく言うその言葉に反射的に瞳を開く。

気温が上がった気がする。フェンリルによる業火が原因ではない。

目の前に雄雄しく屹立する一人の男がその要因だろう。深紅の様に無骨な大剣。赤い前髪から覗く瞳は獰猛さを醸し出している。不適な、或いは軽侮した表情で俺を見下ろしている。

深紅の剣士……。なぜここに？

突然の来訪者にクリスとジェイドの行動が止る。

剣士は相棒である大剣を背中に担ぎ、フェンリルの一撃を阻止している。異常な光景だった。自身の数十倍は巨大な体躯を持つ猛獣の攻撃を、明らかに体格の劣る剣士が瑣末な事の様に対処している。フェンリルは突然目の前に現れた相手に動揺を隠せない様子だった。攻撃を防がれたと思いきやすぐ様後方へと跳躍し距離を取る。だが、視線は剣士に固定されている。この場で最も厄介な相手と認識したのか。

剣士は興味が無さそうにその様子を横目で見据えている。

「あ、あんたが何でここにいる？」

「ふむ。それより、助けてもらって置いて何も無しか？」

「……助かった」

「ふむ。まあいいだろう。っと！」

言葉を完全に終える直前にフェンリルが突進してきた。全体重を掛けた一撃を正面から大剣で受け止めた。異常な金属音が辺りに響く。膨大な衝撃を受け止めた剣士を支える両足は地面へと減り込んでいる。あの勢いを何故止める事が出来る？ 物理的に在り得ない。だが事実その場を微動だにせず猛攻を止め切っている。何かの魔術、か？

突如、剣士の両腕の筋肉が膨張し、大剣を猛然と振るった。その一撃にフェンリルの巨躯が後方へと吹き飛ばされる。完全に体勢を崩されたにも関わらず、空中で平衡感覚を取り戻し綺麗に着地した。剣士は片手で大剣を携え、緩慢にフェンリルへと歩み寄る。得体の知れない重圧に気圧されたのか、フェンリルは後退る。

「ふむ。怪狼フェンリル、では無いな。弱過ぎる」

弱い？ 違うだろう。お前が強すぎるんだ。この男は何者なのか……。

正直、勇者であると言われた時に思った。俺は何者よりも強いのだ。勇者なのだから当然だろうと。愚かにも矮小な優越感を感じていた。事実、在り得ない力を有し、魔を滅ぼす事を目標に歩んでいた。だが、蓋を開ければ、仲間を助ける事も出来なかった。

突如、脳裏に金髪の少女が浮ぶ。エリスは無事だろうか……。俺の軽率な判断が今の状況を招いたという事は曲げようの無い事実。エリスを助ける事が出来なかった。その生死を他人に、魔王に委ねてしまった自身の過失を今迄思い起こさないで居たのは後ろめたかったからか、それとも俺が冷徹な人間なのかは判断できなかった。メアはどうしているのだろう。何処に居るのかも検討が付かない。

シルフィと同様に俺の事を忘れてしまっているのか。セドナは……。死を目前にして、俺と言う人間は生を放棄する弱い存在なのだと認識させられた。無力だ。俺は、何をやる為にここにいるんだろう。目の前に奮然と立ち尽くす一人の男に劣等感を抱かずに居られなかった。

俺の葛藤など関係無く、剣士と怪狼の戦いは続く。

突如、フェンリルが大きく仰け反った。再び辺りに響く吸引音。炎を吐くつもりだ。

俺は慌てて剣士に声を掛けようと口を開いた。剣士の登場で面食らっていたクリスとジェイドもフェンリルの動作を見るや否や直ぐに攻撃へと移る。

回避を促す俺の言葉が放たれるより剣士の声が俺の鼓膜を揺らす。

「そこから動くな」



剣士の声が辺りに響く。有無を言わさぬ口調にただ頷いた。その言葉に従ったのは俺だけでない。クリスもジェイドも咄嗟に行動を停止した。そうするのが得策だろうと思つての事だろうが、二人とも無念そうな表情を隠せずに居た。悔しさを持つても仕方が無い状況だとは分かっているだろうけど。

その様子に気付いているのか、それとも無価値だと思つているのか素知らぬ振りで剣士は佇んでいる。肩口にこちらに視線を送つて来ている剣士は俺の所作を見ると改めて正面に向き直る。

フェンリルの動きが仰け反つたままの姿勢で停止する。刹那、膨大な炎を口腔から放射する。真つ直ぐ俺と剣士を巻き込む軌道を描き豪炎は地を這う。回避出来る速度では無い。対処方法は俺には全く無く、ただ動向に身を委ねた。

眩いばかりの光量に辺りが包まれ思わず眼を瞑りそうになる。

だが、何故だろう。死なないという確信を俺は持っていた。だからこそ、視界を塞ぐ事無く正面を見据えていた。

急激に気温が高まる。暑い。だが焼け焦げる程ではない。

剣士に視線を送る。俺は驚愕した。炎は剣士を境に半分に分れ、側方へと流れて行っている。

「温いな。私を燃やしたいなら、後、数千度は必要だ」

轟音が空気を振るわせる中で確かに聞いた。

炎を物ともせずフェンリルへと徒行する。

自身の猛攻に対し、まるで所用を片す様に迫ってくる剣士に対し何を思つたのか、突如放射を止めた。次いで、剣士に飛び掛って行く。逃走する気はさらさら無いのか、正面切つて戦いを挑む様子は勇猛さより無謀さを持っていた。

「愚かだな……。引く事も時には必要だ」

大剣を肩に担ぎ大きく嘆息する、と同時に大剣は朱色に変化し周囲に煙霧を生み出した。熱を持っている？ 厭、そんな生半可な物では無い。もはや大剣自身が発火しているように見えた。

刹那、フェンリルの爪牙が剣士へと迫り来る。その攻撃を気にもせず、袈裟斬りを繰り返す。その一撃はフェンリルに比べ鈍重な動きに見えた。だが遙か後方に位置取る俺の耳に確かに大剣が空気を切り裂く音が届いた。

剣士が剣を振り下ろした体勢のまま停止する。同様にフェンリルもその行動を停止している。

数秒間、空気が停止し、フェンリルが轟音を辺りに響かせ地面へと倒れこんだ。

一撃。何らかの魔術を用いたとしても、結果として単純な斬撃で決着は付いた。

呆気にとられ反応が出来ない俺達に剣士が一言声を上げた。

「終わったぞ」

何の感慨も無く、ただ結果を告げただけの口調で言い放つ言葉は俺の現実感を阻害していた。

こちらに剣士は歩み寄ってくる。何事も無かったように軽い足取りで歩く男に抱いた思いは複雑な物だった。感謝と劣等感。おこがましいのだろうか、だが俺は勇者なのだ。勇者……だよな？

自問自答を行っても、明確な答えは出ない。

「さて、聞きたいのだが」

「聞きたい、って何？」

「カオスを見なかったか？」

聞いた覚えのある名前に思わず息を呑んだ。

俺が殺したはず……。あれ、でもなんだろう？ 突然抱いた違和

感に首を捻る。

「カオスは……俺が」

殺した。殺した？ 本当に？

俺の暴走した力は漆黒の剣士を飲み込んだ。はずなのに、そう思えなかったのか。事実俺はジェイドを殺しかけた時、初めて人を殺したと思っていた。無意識に生きていると思っていた？

「殺した、か？ あいつは死なんよ。そういう風に出来ている」

「死なない？」

「そっだ」

その時、俺が抱いた思いは安堵でも恐怖でもなくただ理解したという事だけだった。俺の無意識下の認識は間違いではなかったのだろっ。

思えば対峙した時、人間を相手にしているとは思えなかった。兜に覆われた顔を見ていないから？ 違う。その存在感が皆無だと感じていたから。まるで幽霊を相手にしているような思いに駆られていたから。

「……見ていないようだな」

ならば用は無い、と言わんばかりにその場を後にしようとする。

俺はその背中に声を掛けようと手を伸ばす。何を言えば良いのか分からず俺は虚空を掴んだままの体勢で力なく頂垂れた。

突如、剣士が足を止め肩口に声を掛けてきた。

「そう言えばお前の従者はどうした？」

「……あんたには関係ない」

「ふむ。お前に掛けられている魔術に関係が？」

「分かるのか？」

「以前にお前から感じた魔力とは別の物を感じる。……魔の者か」

俺の返答を待たず一人で思考に耽る。その答えは的確なものだった。

俺を放って何を考えているのか。しばし、そのまま時間が過ぎとうするか俺が戸惑っていると、突如剣士が言葉を紡ぐ。

「ふむ。お前、名前は？」

「は？ 大和だけど」

「そうか。俺は……フレイだ」

突然の自己紹介の来訪に思わず真つ正直に答えてしまった。

というより、今更名前を聞く意味が分からない。まあ、内心、深紅の剣士って呼び方は長いからどう呼べばいいか困っていたのだけれど。

「暫く、子守でもしようと思っただけ」

一瞬何を言っているのか分からなかった。身の上話でもしだすのかと思っただけ、会話の流れからしてそれはおかしいだろう。

え？ どういう事？ まさか……。

「まあ、よろしく頼む」

「は、はい!？」

「何だ？ 分からないか？」

「……流れからして俺と一緒に旅をしようと思っただけ、って意味だよな？」

「ほう。そうだ。意外に飲み込みが速いな」

「いや！ 飲み込んで無いから！」

必死に否定する俺に呆気に取られた表情をするフレイ。  
なぜそこで呆れる？

「状況からして飲み込んだ方がいいと思うが？」

フレイはそう言うのと辺りを指指す。

残骸。死体。惨状。悲惨な情景はどの表現を取っても的確だと思える。

フレイは全てを語らない。物事を端的に理解させようとする性格のようだ。要はまどろっこしいのが嫌いなのもかもしれない。

言うなればお前がもっと強ければ、的確に判断すれば、危機を感じていればこつはならなかった、と言いたいのか。俺ならば防げた、と。

洪面を浮かべる。正しい。正しいが納得はいかない。

それに信頼関係が築けるとは到底思えない。

「何故？ 意図が判らない」

「気にするな。単なる気まぐれだ」

「……信用できない」

「信用？ そんなものは要らない。ただ、そうするしか無いと思うが？」

「……俺に選択の余地は無いと？」

「あるのか？」

しばしの間、熟考する。

あるのか。無いのか。俺には何が必要で何が不必要なのか。どうするべきで、どうしないべきか。

考えた。それでも、どうするべきかは分からなかった。

ただ……力が欲しかった。俺に力は無い。常人を遙かに凌駕する力があっても俺が欲しているのはそれでは無い。

強ければ仲間を、この人間を、自身の命を助けられた。だが俺は助けられた、フレイによって。

「気が向いたら鍛えてやつてもいい。お前の力にも興味があるしな。そのままでもいいなら何も言わないが」

その言葉は俺の揺らいでいた意思を固めさせるだけの力を有していた。

「俺は強くなれるのか？」

「さあな？ お前次第だが。で、どうするんだ？」

その言葉は不思議と頂垂れた心を奮起させた。

何故、俺に力を貸すのか。俺の味方なのか。それとも敵なのか。

分からない。こいつはセドナの故郷の村人を殺した本人な筈。そんな人間を信頼出来るはずも無い。だが、それでも確かに信頼出来る部分がある。フレイの強さだけは見紛う事無い、本物なのだ。

俺は緩慢に頷いた。

## 英雄譚 前編

豪華な一室というのが最も適当な表現だろう。

客室と言われ通された部屋は絢爛な様相だった。二十畳は在りそ  
うな空間に在る寝具は俺一人で寝るには広すぎる。配置されている  
家具は一目見るだけで高価な印象を受けた。

箆笥から用意された服を取り出し身に着けた。

簡素ではあるが綿密な造りを思わせる。肌触りからするとその素  
材は廉価の物では無いだろう。

薄白い細めのボトムスに簡素なシャツという出で立ち。箆笥に入  
っている上着は煌びやかな造りで手の凝った刺繍が施されている物  
と簡素だが丁寧な造りの物があつた。俺は即刻、簡素な衣服の方に  
手を掛けた。堅苦しい衣服に思わず嘆息する。

フェンリルを倒した俺達に対し、領主は褒美を与えようと考えた  
らしい。

あの後、俺達は舞い戻ってきたゲイルとクライドの兵士達と共に  
死者たちを弔っていた。フェンリルは広場だけでなくクライド中で  
惨憺たる足跡を残していた。退避していた市民達は惨状に慄然とし、  
そして呆ける事無く街の復興に奮起した。

そんな折、やっとこさ見つけた比較的無事な安宿で休んでいた俺  
達を訪ねて使者が現れた。

街を救った英雄として迎えるのは当然だという使者からの言葉に  
仕方なく頷いた結果が今の状態を生み出した。正しくはフレイが倒  
したのだけれど……。

ちなみに俺の不法侵入は今回の功績で罪には問われないように配  
慮してくれた。内心安堵したのを覚えている。

しかし、正直気が進まない。

フェンリル討伐の立役者はここにはいない。フレイは俺に功績を譲ってこの場を後にしたからだ。後で連絡する、という一言を残して。

有無を言わさないフレイの言動と動向に否定する隙は無く、あれよあれよと言う間に何時の間にか俺が主役へと昇格してしまった。

俺は深い嘆息をする。

どうも俺は流され易いらしい。そういう性分なのか、それとも機会を逃す星の元に生まれたのか。

自嘲気味な思考に耽る俺の耳に扉を叩く音が響く。

「準備できた？」

快活な印象を受ける口調。

クリスは俺の返答を待たず、戸を開け室内を覗き込んでいる。俺の姿を見つけると人懐っこい笑顔を浮かべた。

「おっ！ 似合うね〜」

「褒められても、素直に喜べないんだけど」

「僕も正直気が進まないけどね〜」

そう言うクリスも正装で身を包んでいる。

肩までの長さだった髪を後頭部で結っており、ドレスに編みこまれたレースは凝った造りで可憐さをより際立たせている。

……ドレス？ ドレス！？

「……女、だったのか？」

言った直後、失言に思わず口を紡ぐ。

自らの失態に冷や汗がじわじわと溢れ出てきた。

そもそも、根本から間違っていたらしい。



だって、僕なんて言うし、口調も格好も少年っぽかったし、勘違いしても仕方ない、と思う。

「今、すごい失礼なこと言ったよね？」

怒ってる。表情は笑顔だが口元が引き攣っている。

眉根は八の字の変化し、明らかに感情を抑え切れていない状態だ。

「ごめんなさい」

「……いいよ。もう。よく勘違いされるし」

クリスは力無い表情で嘆息した。心成しか、目尻には涙が溜まっているように見える。

傷つけてしまった。なんだか居た堪れない。完全に俺の所為なんだけど。

俺は何とか言い繕おうと、しどろもどろに成りながら口を動かす。

「た、確かに勘違いしてた。僕って言うってたしさ。殆ど暗がりの中だったから。本当ごめん。でも今はすぐ女の子だって分かったよ。格好が女性だったって言うのもあるけど、似合ってるし！ 可愛いからさ！」

無理でした。女の子を励ますことなんて無理。完全に言い訳だ。たとえ本心を含んでいたとしても俺がクリスを傷つけた事実は変わらない。

内心冷や汗を掻いた。フェンリルと対峙した時よりも動揺しているのではないだろうか。

正直、戦闘は怖い。自分が死ぬかもしれないのだから。でも、それは違う恐怖をこっという時は抱く物なのだ。

「……可愛い？」

思わぬクリスの反応に即答する。

「あ、ああ。そう思うけど」

「えへへ。そっか。可愛いかな」

さっきまでの意気消沈した様は何処へ行ったのか。打って変わって嬉しそうにはにかんだ笑顔を浮かべるクリスに安堵する。

この子はなんて分かり易いんだ。

まるで百面相の様に表情が変わる目の前の少女に釣られて俺も笑顔になる。

「おい、そろそろ準備できたか？ ……お前達何をしてるんだ？」

二人とも笑い合うという不思議な空間が生まれている中、野太い声が部屋に響いた。

俺たちの様子を見て呆気に取られているジェイドも正装に身を包んでいる。

引き締まった体躯には、恐ろしい程似合っていない。というよりそもそもサイズが合っていない。胸元ははちきれんばかりに伸びている。

その様相に思わず笑みが毀れる。今度は俺に釣られてクリスも笑い声を漏らしていた。

「なんだ？俺も笑えば良いのか？」

流石に笑い声を上げはしなかったが、ジェイドも自然に笑顔になっていた。

\*\*\*\*\*

厳かな雰囲気の中、勲章授与式は執り行われた。

謁見の間の中央には俺達三人が跪き、領主の登場を待っている。

赤々とした絨毯の道は豪華な扉から玉座へと敷かれており俺達は  
その上で静寂の中を過ごしていた。

道に沿って整然と騎士達が立ち並んでいる。その様子がより厳肅  
な空気を作り出している。

奥の扉が開き凜とした印象を受ける女性が肅々と玉座へと歩み、  
着座した。

「顔を上げてください」

言葉通り俺達は一斉に視線を玉座へと向ける。

若く美しい女性が視界に入る。煌びやかな衣服に負けないほど絢  
爛な雰囲気醸し出している。

長く艶やかな頭髮はその魅力をさらに引き立てている。

予想とは違う人物像に思わず眼を見開く。男だと思っていたから  
だ。

「私はエミリア・クライド。この街を統治しています」

「俺……私は大和と申します」

「大和。不思議な響きですね。良い名前です」

「有難う御座います」

思わず観察してしまつ。

一挙手一投足が優雅に彩られ、見る者の心を奪うようだ。  
俺の視線に気付いたのか、小悪魔のような笑みを浮かべエミリア  
が問いかけてきた。

「予想とは違ったかしら？」

「い、いえ。滅相もございません」

何か失礼な事を言い様物なら罪に問われかねないと言う強迫観念  
を抱いていた所為か俺の声はしゃくりあげていた。

俺の情け無い返答に領主が上品な笑い声を上げる。

「ふふふ。緊張しなくても良いのですよ？ 貴方達はこの街の英雄  
なのですから」

違う。胸中で否定する。俺では、俺達ではない。この街を救った  
のは。

思わず洗面を浮かべる。が、すぐさま自身の表情に気付き平静を  
取り戻した。

「どうかしましたか？」

「いえ、怪狼と対峙した瞬間を思い出してしまいました」

思わず言い繕う。真実を語るには遅すぎた。今の段階で俺達の功  
績を否定しよう物なら、どうなるか分かった物ではない。情け無い  
とは思いつつも虚実に身を委ねる。それで良いとは思えないが、今  
はそうするしか出来ないとも思えた。

人の功績を奪うなんて事はする物じゃない。望む望まぬに関わら  
ず不快感が押し寄せる事には変わりが無い。もしそれで満足出来る  
のならそれは余程の愚か者だと思う。

俺に卑下する資格は無いか……。

「そうでしたか。あれだけ高位の魔獣ですから。戦慄しても仕方ないでしょう」

「恐縮です」

俺は恭しく頷く。クリスもジェイドもそれに倣った。

どうも位置が悪い。俺が真ん中なのだ。心地が良く無い。俺は何もしていない。この三人の中ならば、俺が一番功績が無いと言っている。

ジェイドはフェンリルを足止めする為に自身の身を省みず奮闘した。クリスも同じだ。事実、俺はほぼ無傷で二人は重症とは言えないが手傷を負っている。

居心地が悪い。何でこんな事になってしまったんだっけ。

「では、貴方達に褒美を与えます。ジェイド・オーサット」

「はっ！」

「オーサット卿はご健在ですか？」

「ええ。元氣過ぎて困っております」

「あら」

領主はクスクスと上品な笑い声を上げる。

知り合い、なのだろうか？

オーサット卿と言うのはジェイドの親類を指すようだが、父親かな？

「貴方にはこれを」

何時の間にかエミリアの傍にはか細い少女が佇んでいた。世話人だろうか。その手には体格に不釣り合いな大剣が握られている。見るだけで相当な重量を持つ事が分かる大剣を、重そうな素振りさえ見

せずジェイドの元へと持ち運んでいる。見た目とは違い軽量なのだろうか？

ジェイドは跪いたままの体勢で大剣を受け取る、と思わぬ重量に前につんのめりそうになった。

やはり重い、のだろうか？

何とか持ち前の筋肉で堪えたようだ。

「帯剣を許します」

「はっ」

言葉通りに背中に帯剣する。

俺は訝しげに少女に目を向ける。あの体格でなぜ重量の在る大剣を持ち運べたのだろうか。

「その剣の名はドラゴンスレイヤー。精霊族の名工が造り出した物です。外装は無骨ですが巨大な魔力が秘められています」

「そのような物を頂いても宜しいのでしょうか？」

「構いません。この国に扱える者はほぼ皆無ですから。力が巨大過ぎます。後、単純に重過ぎますからね」

「……有難く頂戴致します」

ジェイドは恭しく頭を垂れる。

精霊族って……あの精霊、か？

聞くだけで相当な物なのだとは思っけど、実感が余り無い。

「クリスティヌ・オーサット」

「は、はい」

「貴方にはこれを」

再び少女が現れた。文字通り、突然現れたような錯覚を覚える。

何かの魔術？ それとも単純に身体能力が異常に高い、のか？  
少女の手には小振りな耳飾が握られている。簡素な装飾だが見る者を惹き付ける雰囲気を持っている。何かの魔術付与が成されているのだろうか。

と言うか、クリスってクリスティー又って言うのか。ちゃんと名前聞いていれば女の子だって直ぐ分かったのにな……。

「それは数人の錬金術師が造り出した、魔力抑制のタリスマンです」  
「抑制、ですか」

「ええ。貴方はトランゼン、ですよね？」

「……はい」

「その耳飾が貴方を守ってくれるでしょう。永続的ではありませんが」

「有難う御座います。それでも、嬉しいです」

トランゼン、って何？

という俺の疑問は投げ掛けられる雰囲気では無い。

クリスの表情は悲哀に満ちており、安易に触れる事は憚られた。何か深い事情があるのだろうか。

「最後に、大和」

「はい」

「貴方にはこれを」

三度現れた少女の手には一切装飾が施されていない刀が握られていた。

刀。以前アガムに譲って貰った事が在った。この世界にも刀が在るのは何でなんだろう、と疑問にも思ったが……。

何時の間にか目の前に佇んでいる少女と視線が交錯する。

幼い顔の造形。恐らく俺とそう歳は変わらないだろう少女の表情

は皆無だった。

思わず怖気に見舞われる。しかし、すぐ様、感情を抑制した。初対面お相手に嫌悪感を抱くなんて失礼にも程がある。俺は自身を叱咤し、表面上は平静を心がけた。

胸中を億尾にも出さず、差し出された刀を手取る。  
思ったより軽い。触れた瞬間、直ぐに手に馴染んだ気がした。

「それはドワーフの宝刀だった物です。抜いてみなさい」  
「いいんですか？」

「構いませんよ。もし、貴方が私に危害を加えよう物なら、私に触れる前にその首は離れていますから」

不意に傍に佇む少女に目が行く。

強い。恐らく俺よりも、ここにいる誰よりも。

エミリアの言動に信憑性を感じずに入られない。

俺は頷くと、抜刀した。



切り立った丘に俺は立っている。

断崖絶壁。谷底は深く底が見えない。

湿った風が肌に触れ、纏わり付く。好んで着ている薄手のシャツはいつもの様な着心地を感じさせてはくれない。肌に滲んだ汗の所為で不快感を感じた。身体の要所要所を覆った漆黒の鎧は自然の力までは防げない。

空は積乱雲に覆われ、太陽の恩恵を妨げている。辺りは薄暗く日中とは思えない。

「どうかしましたか？」

従者の一人であるドワーフのダーフィが心配そうに声を掛けてきた。

俺は向き直ると、小柄な散切り頭の従者に視線を送る。愛くるしい容姿は見る者に父性、或いは母性を抱かせる。人間に比べるとその容姿は幼い。ダーフィはこれでも成人している。

長い旅路で幾度と無く助けられた従者の顔を見る。

「いや、何でもないよ」

「……お気持ちは、分かります。僕も同じ気持ちですから。でも」「分かってるよ。分かってる」

俺は何度も頷いた。ダーフィに理解した事を伝える為でなく、自身を納得させる為に。

正面を見据える。断崖には巨大な城砦が聳え立っている。

俺達はお互いの視線を合わせる事無く城へと歩んでいった。

\*\*\*\*\*

城の中には魔物が溢れかえっていた。

流石は魔物の巣窟。ここはその最深部なのだ。強敵が現れるのは必然だった。

俺は黒刀を一心不乱に振り下ろし、振り払った。

ダーフィが背中を守ってくれている。手に握られた大槌を振り回し魔物を近づかせない。

だが、こちらは二人。足を止めて戦っては不利だ。俺は意を決して声を張り上げた。

「埒が明かない。押し通るぞ！」

「はいっ！」

そう言つと俺達は疾走する。

広めの通路を疾駆しながら邪魔な魔物を切り払う。俺達にとっては比較的広いが魔物達にとってはそれ程広くない。巨躯の魔物は存在しないのが不幸中の幸いだった。

石畳の廊下を暫く行くと視界が開けた。広間か？

蔽かな雰囲気を醸し出した装飾が壁中に飾られている。薄暗い所為で人の造りし物とは違い、より悪趣味な印象を受ける。

周囲に敵の気配はしない。目の前には長路の階段が見え、その先に重量の在りそうな巨大な扉が見えた。

俺達は一息付かず扉へと急ぐ。

長い。数百段は在りそうな程の道程は俺の呼吸を荒くするには十分だった。すぐ後ろに着いてきているダーフィも先の戦闘に加え、

常に足を動かしている所為で体力を消耗している。

漸く、扉へと辿り着き、息も絶え絶えで鈍重な鉄扉を押し開けた。

「遅かったな。おや、戦う前からそんな状態か？」

奴は嫌味を含んだ笑いを浮かべながら俺達に言葉を投げ掛けた。  
偉そうに玉座に踏ん返り返っている。

突如、全身の血が滾る。今迄感じていた疲労感は一切消え感情の  
奔流に身体が支配されていく。

「ふむ、二人か。という事は、他の仲間は死んだか？」

俺達の満身創痍の状態を見て、嘲笑していた時とは違い、何故か  
真摯な視線を投げ掛けてきた。

俺は答えない。口火を切る前に、飛び掛りそうだったからだ。  
出来るだけ感情を抑える。そうしなければ愚直に突進してしまう。  
後ろに感じるダーフィの気配も俺と同じ憤りを抑えきれない様子  
だった。

「そうか……。それは残念だ」

その時、俺の耳に確かに聞こえた。張り詰めた糸が弾け切れるそ  
の音を。感情を戒める糸が完全に引き千切れた。

俺は激昂しながら、魔王へと猛進した。

「魔王！！」

眼前に迫る魔王の顔は様々な感情を含み複雑そうに見えた。

「また、同じ結末、だな」

魔王は俺にとって理解不能な言葉を呟いた。俺の耳に届きはしたが、その言葉を気に留めるほど平静ではいらなかった。

\*\*\*\*\*

「あつ……」

ふと気付くと眼前に無表情な顔が視界を覆っていた。視線が交錯し、時間が停止した。

「大丈夫ですか？」

「え、えと」

さっきのは俺、だった。

俺の記憶に無い場所で俺の知らない仲間と俺の知っている魔王と戦っていた。

今のは一体なんなのだろう。過去の記憶？ 俺の無くしてしまつた記憶、だろうか。だが、魔王と戦っていた。それに漆黒の鎧に身を包み、手には黒刀が握られていた。カオスの持っていた物に似ていた気がするけど。

意識が混濁しそうだった。だが、今、この時は確かに現実だと自分に言い聞かせ、体内に空気を取り込む。次第に五月蠅いくらいの鼓動は落ち着きを取り戻し、視界が広がる。いや、広がらない。目の前に少女の顔がある。近すぎる。

「あの、大丈夫なんで、ちょっと離れてもらえませんか？」  
「そうですね。失礼しました」

ちよつと、突つ慥貪な言い方だったかもしれない。慌てていた為か、相手を気遣う余裕が無かった。

だが、俺の失礼な物言いにも少女は無表情で返答した。掴み所の無い子だ。大剣を軽々と持ち運んだり、表情が乏しかったり。一体何者なんだろうか。

「本当に大丈夫？　なんか、数秒間だけ意識が飛んでたみたいだったけど」

その数秒の間にあの記憶を垣間見たという事だろう。誰かの記憶なのか、或いは何かのまやかしか。だが、俺は確かに存在していた。全く記憶には無いけれど俺の体質を考えると過去の記憶と考えるのが妥当だと思えた。じゃあ、俺と魔王は過去に対峙していた、という事になるが、そうになると矛盾だらけになってしまう。ひよつとして、今迄の事柄が虚実でさっきの記憶が正しい、のか？

「あ、ああ。大丈夫」  
「そか」

俺の言葉を聞いて、ほつ、と胸を撫で下ろすクリスに感謝の言葉を伝えた。

「大和。体調が優れない様子ですが……？」  
「あ、すみません。大丈夫です」

忘れていた。今は謁見の間で褒章を授与している最中だった。辺りには張り詰めた雰囲気漂っているのを今更に感じる。

さっきの記憶を垣間見る直前、俺は刀を抜こうとしていたのを思い出す。

「そうですか。それでは刀を抜いてみてください」

見ると、未だ抜刀されていない。柄に手を掛けた瞬間意識が途絶えてしまったようだ。

執拗に抜刀させたがるエミリアを怪訝に思う。然程気に掛ける必要も無いかもしれないが、変に勘繰ってしまう。どうも、疑心暗鬼になっているのかもしれない。

胸中の邪念を振り払う。別段困るような事は無い。ただ刀を抜くだけだ。

俺は再び刀に手を掛け抜刀した。

「こ、これ、って」

漆黒の刀。刀身は全て黒く、光を一切反射しない。金属の筈なのに刀身には全く何も写り込まない。日本刀独特の反りで形作られており、側金の部分が無い。刀身の腹部分に角度が無いのだ。それだけを見ると武器としての強度を疑う。柄の部分から刃先を出来るだけ真っ直ぐに見るとその薄さに驚愕した。これで何か切るう物なら折れてしまう。

それに似ている。さっき見た、俺の持っていた刀と。

周りの兵士達が何やら囁き合っている。厳粛な雰囲気は突如、混乱に彩られた。

この刀の異様さに動揺しているのか。

「静まりなさい」

エミリアの一言は一瞬で静寂を訪れさせた。

「その刀は、勇者が使っていたと言われている物です」

「勇者が、使っていた？」

「はい。真偽の程は定かではありませんでしたが……。その刀を抜ける者は今迄居りませんでした」

つまり、どう言う事だ？ 俺を試したという事だろうか。

じゃあ、兵士達がざわめいていたのも黒い刀に対してではなく、刀が抜けたことに驚愕したからなのか。

俺が怪訝そうな表情で居た事所為か、その疑念に答えようとエミリアが言葉を続けた。

「まさか、抜けるとは思っておりませんでした……。貴方の話はジエイドから少々伺っておりまして」

ジエイドの方を見ると、何故か申し訳無さそうにしていた。

という事はつまり……。最初に会った時に俺が勇者だって言ったのを覚えていて、それをエミリアに言った訳だ。それで試しに刀を抜かせてみようと思ったって事か。だが、俺の話は全く信じていなかった様に思えたが。

責めるような視線をジエイドに送ると、口笛を吹くような仕草をして誤魔化そうとしていた。こいつ、俺を笑い者にしようとしてやがったのか。

後で散々詰ってやろうと心に決めて正面に向き直る。

「思いも寄らない事態になりました。まさか、この街の英雄が勇者であったとは。これも運命であると思わずにいられません。これからの旅路、勇者大和の助力を惜しまないことを約束致します」

「……有難う御座います」

何か腑に落ちない。刀が抜けたから勇者だとか、言われても。

勇者、か。勇者ってなんなんだろうな。

魔王を倒せるから勇者なのだとわかれたが、本当に俺しか出来ないのか？ それに俺は勇者なんだろうか？

俺以外の誰かが俺を勇者だというが、それは事実なのだろうか。

俺より強い奴等は沢山いるのに、俺が魔王を倒す理由があるのか？

魔王は確かに結果的にはエリスを攫った。だが、倒さなければならぬのか。本当に。魔王といた時間が長かった所為か感情移入してしまっているのだと思う。エリスも迎えに行けば返してくれるんじゃないのかも思った。ただ、今はエリスを治療する方法を見つけて出せていない。俺の力に関係があるみたいな事を魔王は言っていたが。

当初の思考とは別の方向に考え耽っている俺は、何時の間にか勇者として最も必要な感情が抜け落ちて居る事に気付いていなかった。



それでも尚……

クライドの町外れにある平野には厳めしい青年が佇んでいる。

周囲には何も無い。ただそこに一人佇む青年の背中は何故か凜然さと共に悲哀を感じさせた。

思わず立ち止まっていた自分の足を意識的に前へ動かす。

フレイの間近まで距離を詰めると足を止めた。足音は耳に届いているはずだが、俺の存在に気付いていないのか、フレイは全く微動だにしない。声を掛けようとするが、何と声を掛けるべきか分からない。

「無言で俺の後ろに立つな」

俺の気配を感じ取っていたのか肩越しに話し掛けてきた。

「気付いていたなら、振り向けば良いのに」

未だ、俺に背中を向けているフレイの正面に回り顔を拝む。

瞳を閉じ、瞑想しているかのように見えた。

一人黄昏る自分に浸っていた、という訳ではないようだ。

緩慢に瞼を開き、俺に視線を移す。

「遅い」

「うっ……。ごめん」

脱力しながら謝罪を述べた。

遅れた理由はある。昨日、エミリアが俺を勇者と認めた事が町中に広まった。その所為で、一躍、有名人となってしまう為に、通りすがりの人に話しかけられたりして時間を割かれた訳だ。何故か

拝まれたり、崇められたりした俺は遅々として進めずにいた。

宿屋の主人からフレイからの書置きを渡されて直ぐに出発したのだが、それでも数十分は経ってしまっている。

「まあ、いいだろう」

胸を撫で下ろす。そもそもフレイが俺の為に時間を割く必要は無い。気まぐれなのだ。気分を損ねてしまえば全て無かった事にされても仕方ない。フレイにとって何の徳も無いのだから。

「さて、それでは始めるか」

「始めるって、鍛錬を、だよな？」

「そうだが、なんだ？ 書置きを読んだのでは無かったのか？」

「読んだけど、街外れの平野に來い、としか書いてなかったけど」

「私がお前を呼ぶ理由が他に無いだろう」

「それはそうかもしれないけど」

言葉が足りない。原因、要因、理由が無い。主語が無い言葉は端的だが高度な理解力を必要とする。フレイの話はいつも回りくどくなっている。それは文面に置いても例外ではないみたいだ。

納得のいかない思考を振り払う。

「大和、お前、召喚魔術は使えるのか？」

「……今は、使えない」

「やはりな。愚かな。魔王と戯れたか」

「どういう事だ」

「言わなければ分からないか？」

二の句が継げない俺に矢継ぎ早に捲し立てた。

「魔王の力も知らず、その人格を知らず、ただ歩み寄って来たから受け入れたのだろう？　魔王なのに、だ」

何も言い返す事が出来ない。その通りだと思った。けれど、心中では魔王に対して敵意を持つ事が出来なくなつて来たのも事実だった。

よくある話。勇者が魔王を倒す。それは定められた役割であり、揺ぎ無い話。

俺が間違っているのか。けれど、魔王は、魔王と言う名前のただの少年に思えた。

「……これ以上は言うまい。これからどうするかはお前が決める事だ。魔王と戦おうが安穩と暮らそうが私の知った事ではない。だが、覚えておけ。お前の、お前自身の存在する意味を。結局は取るべき道は、無いという事を」

真意を測りきれない言葉は何故か耳に残った。

何を知つてその言葉を言い放つたのか。

「話が逸れたな。本題に入ろう。お前は強くなりたいか？」  
「なりたい」

即答した。先の会話で心は沈んでいたにも関わらず、俺の意思はただ正面を向いて突き進むべきだと告げていた。

何のために？

「何故？」

「分からない」

そう分からない。何故強くなりたい？　仲間を助けるため？　死

ならないため？

強くならなくてもいい。他にも手段はある。多くの人間は強さだけではなく、生き抜く術を見出す。根幹にあるのは危地に赴かないだが、俺は。

「分からないのに強くなりたいのか？」

「そうだ」

そう。その思いだけは譲れない。幼い自尊心ではない。ただ、そうするべきだと、俺の中で確固として形作っていた。

「お前はおかしいな」

「そう、だろうな」

「だが、それで良い」

「良い？」

「そうだ。それで良い。無知だが、無謀では無い。それは必要なのだ」

知っている。やはり、俺より遙かに現状を理解し、必要な事を知っている。

記憶が無いという事は不便だ。何より、恐ろしい。過去の自分を知らないのだから。今の俺は本当に大和なのだろうか。俺自身が培ってきたものが無い事が俺の不安を掻きたてる。俺の名前でさえ他者から聞いた。それは真実なのかさえ根拠を持たない。ただ、信じるしかない。俺の名を告げた、エリスを。

「では、現状を理解した上で俺の知識と併せての見解を言っとだな、お前の能力は異常だな」

「異常って……。酷くない？」

「すまん。悪気は無いんだが」

すぐ様謝罪してくる。

表情に然程変化は無いが、即答した所を見ると、真摯なものだと思っただろう。

真面目なんだな。意外に。

「いや、いいけどさ」

「つまり、お前の能力は私達とは違っただけだ。具体的に教えるつもりは無いがな、私達は世界に存在するものに手を加える能力だ。

だが、お前は違っただろう？ お前の能力は召喚魔術。いや、具現化魔術か？」

「気付いていたのか？ 召喚魔術ではないって事を」

「ああ。魔王がお前の能力を封じていたからな。本来、召喚自体は魔力を殆ど使わない。召喚した者、或いは物を存在させるのに多大な魔力を消耗するものだからな。血の盟約を行い召喚が可能になる。要は主人だと思わせる事だな。そんな物は封じれない。例え神でも直接盟約を解除しない限り不可能だ。という事は具現させる能力だと考えるのが妥当だろう。まあ、この眼で見た訳ではないがそれぐらいは想像出来なくは無いら」

「成る程……」

こいつはそれだけの事でそこまで考えを巡らせていた訳だ。

「そしてもう一つ。肉体強化の魔術、だと思っていたのだが。どうやら違うみたいだな」

「どういう事だ？」

「役割を持つものの能力は一つしかない。加えて魔術が使えない」

「つまり、俺の能力は具現化能力のみだってこと？」

「の、はずだが。お前は肉体強化がなされている。つまり、それも能力に因るものだという事だ。そうなると具現化よりも高位の……」

そこで、言葉を止めた。何を言い淀んでいるのか。フレイは口を噤み言葉を切った。

辺りには障害物は何も無い。その為、風が遮られる事無く俺達を煽る。

少し肌寒さを感じる。

「それよりもこれからどうするかだが……」

新たに話した言葉は先程の続きでは無い。まるで誤魔化す様に言葉を紡いだ。

もやもやした感情を抱きつつもその言葉に耳を傾ける。

「ふむ。お前、力を使ってみる」

「無駄だと思うけど」

フェンリルとの戦いの最中、力は発動せず、拒絶反応を起こした。恐らく魔王の掛けた、セーブ、とやらの所為だと思う。

記憶の欠落を失くす代わりに、俺の力は使用出来なくなったのだらう。

だが、無理だと決め付けるにはまだ早い気もする。

俺はフレイに言われた通り、力を発動した。

右手を正面に翳した途端、力の奔流を感じる。俺の周囲に重苦しい霧囲気が流れ出すのを感じた。

徐々に、何かざわめく物が体内に存在し始め、得体の知れない拒絶感を感じた。

やはり駄目だ。

背中に感じる寒気は、怖気に変化し、身体は震えだした。

「分かった。止める」

フレイの言葉に力を擲った。  
突如、脱力し地面へとへたり込む。肩で荒い息をし早鐘を打つ心臓を落ち着かせようとした。

「力を使いすぎだ。もう少し抑えろ」

「お、抑えろって」

「考えても見る。お前の身体能力は以前と変わっているか？」

「いや、変わっていないと思うけど」

「という事はお前自身の力全てを封じられている訳じゃない。具現化する容量は少なくともはいるが、使用は可能なはずだ。恐らく、お前は無意識に力を使っている。だから、お前の身体能力はそのままなのだ。ならば、その力を具現化……召喚に覚え。徐々に、肉体強化に使っている魔力を召喚に使う魔力に変換すればいい」

言うは易し、だ。体現するのは難しい。大体、俺自身魔術を使用しているという意識が無いのに、その魔力を召喚に使えとか言われても。

召喚魔術を使う時もなく使用している。ただ、力を欲しているだけなのだから。

「瞑想しろ。分かる筈だ。魔力の流れを。何度か魔術を使ったのだろう？ ならば分かる筈だ。その道筋が。何と無くで魔術は使えない。意識している筈だ。そこに存在している筈だ」

俺は瞳を閉じた。出来得る限り脱力し、俺の中に存在する魔力を感じ取る、ただ其れだけを考える事が出来るように。

ただ無心に魔力を探した。どうすればいいか分からない。探すといつてもただ眼を瞑っているだけだ。だが、そんな考えも次第に無くなり、俺の鼓膜を揺らす音は自身の呼吸音しか聞こえなくなり、

次第にそれさえも聞こえなくなっていた。

どれくらいの時間が経ったか。数秒、数分か。違和感を感じ、こちらに意識を向ける。暗闇の中、一筋の光が見えた。その光に手を伸ばす。遠い。だが届く。光に手が触れ、心地良さを感じた。

光に触れた瞬間、脳裏を過ぎった光景があった。

項垂れた俺の後姿が視界にちらついていた。その時の俺は漆黒の鎧を着ていた。

何故か胸を射す痛みを感じ、妙な感傷を抱いた。そして、ただただ悲しかった。

視界が開ける。無意識に瞼を開いた。

辺りは、何時の間にか、宵の口になってしまっていたようだ。

数時間、同じ状態だった、ということか。

なぜか呆けたままその現状を理解した。気のせいか体が重い。愚鈍な身体が重力に引き摺られている感覚。

「見つけたか」

俺が意識を集中する前と全く一緒の体勢で佇んでいるフレイが何の感慨も込めず言い放った。

「分からないけど……」

「魔術を使ってみろ」

改めて召喚魔術を使用する。

内心、こんな事で変わると思えなかった。

だが、それでもフレイの言葉に従ったのは、知りたかったからだ。フレイをどの程度信頼すべきか。



手前勝手ではあるが、自信の物差しで計ろうとしていた。まだ、決め付けるには早過ぎる。フレイを頼るかどうかを。

俺は再び右手を翳す。いつもより鈍重な動きに違和感を覚えた。瞳を閉じ、ただ欲する。力を。

数瞬後、感じる嫌悪感。背中に感じる、寒気は慣れた物ではあったが受容しきれぬ物ではなかった。

ぞわぞわと全身を駆けずり回る何かに必死に堪える。

力の奔流と共に現れるその感覚を無視し、正面を見据える。

突如、空間が歪み暗黒の深淵が浮かび上がる。だが、いつもの大きさではない。片手が漸く入るほどの大きさのまま虚空に存在している。

俺は疑問を抱きながらもゲートに手を入れる。

いつもなら、肩まで入る深淵も今回は肘までしか入らない。肘から先の感覚は無い。仕方なくそのまま腕を抜き出す。

「な、何だこれ？」

堪えきれなかったのか、喉で笑い声を挙げているフレイの顔を身ながら、呆然と立ち尽くしている俺の片手には短剣よりもさらに短めのナイフが握られていた。

## 新たな力

俺は片膝を地面に着いて荒い息を吐いている。

体の所々に痣が出来、痛みを伴う所為で満足に動けない。

試しに右手を動かしてみるが自分の物では無いと思っほど緩慢にしか動かず、痛みの抵抗ですぐさま動作を停止した。

「どうした？ もう終わりか？」

冷徹な口調で話し掛けてきフレイは俺を見下ろしている。

その瞳には何の感情も含まず淡々と言葉を並べ立てているように思えた。

息さえ切らしていない。

「……………のっ！」

痛みを無視して無理やり体を起こす。

右腕に握られているのは短剣よりもさらに短い。刃先6cmくらいのナイフ。凡庸な剣の一太刀を受けよう物なら粉微塵になるのは明らか。

意味も無く柄を握る手に力が入る。これでどうしろと言うのか。

「さて、どうするか。お前はその矮小な武器を無闇に振り回すだけのようだが」

何も言い返せない。先程まで無様にナイフを振り回していただけ。そんな攻撃が有効な訳も無く、呆気無く避けられ吹き飛ばされる、という下りを繰り返していた。素手のフレイに対して。

だが、こんな物でどう戦えばいいのか。これなら素手と変わらな

い。

「おい。その手に持っているのは何だ？」

「ナイフ……だろ」

「そうだ。だが違う」

「違う？」

「考える。今まで通りに使うな」

考える、か。つまりは教えるつもりは無いという事でもある。

このナイフが、何だっけ言うのか。

「分からないのなら、ここで死ぬか？」

「……は？」

「二度は言わない」

「い、いや。意味が分からないだろ。これは鍛錬……」

「鍛錬だとしても、死ぬことはあるだろう。手加減すると言ったつもりは無い」

「冗談、では無いらしい。それはフレイの瞳を見れば分かる。なんの感情も含んでいない。それに冗談を言う性格でもない。ならば、本気なのか。」

そう思った瞬間、背中に冷たい汗が溢れだして来た。恐怖を徐々に抱き、突如として変化した張り詰めた空気に全身が粟立つ。

刹那、フレイが地を蹴った。こちらに疾走してくる。受身に徹していた先程までとは違い、自らから仕掛けて来た。

状況に対応仕切れない思考を無理やり切り替える。

ナイフを正面に構える。刀身の短さから言えば突きを主にすべきだという考えからの構えだった。

「……愚かな」

俺の思考など読んでいる、と言わんばかりの口調。その言葉は俺の焦燥感を煽った。だが、俺は揺れる感情を勇め、対峙する。正解、不正解は関係無い。

フレイが俺の範囲に入る前に一歩踏み出す。寸前で自らの距離を詰められるのは相手の虚を突く事が出来る。以前何度か行った方法を取った。

だが、それを気にせずフレイは速度を緩めない。そのまま直進して来た。無謀とも言えるその行動に僅かばかり戸惑う。しかしそのまま俺は得物でフレイに刺突を繰り返した。

当たった、と思った瞬間フレイの姿が消失した。目の前の情景に一瞬俺の行動が止る、と同時に右方から衝撃を受けた。

俺はそのまま吹き飛ばされ、硬い地面に強かに背中を打つ。

背中を打った所為で呼吸困難に陥った。まるで、深い海の底でもがき苦しむように必死で空気を取り込もうと肺が運動する。

「終わりだな」

規則正しい足音は俺に向かってきている。本当に殺すつもりなのか。フレイから殺意を感じた。それは俺の誇大妄想の産物なのか、俺の思考は冷静に判断できる状態ではなかった。

まだ、呼吸が整っていない。加えて徐々に迫る深紅の死神の足音は俺の平静さを失わせるには十分だった。思わず地面に座ったまま後退した。

「無様だな。勇者の所業とは思えない」

その言葉に反応する事が出来ない程俺の意識は混濁していた。いや、恐怖と言う感情に支配されつつあった。残ったのは僅かばかりの生への執着心のみ。

目の前にフレイが佇む。

「さよならだ」

右手を振り被りこちらに振り下ろす様子が緩慢な映像として知覚された。

様々な感情が行き交う状態で俺は自分でも理解出来ない行動を取った。

掌が赤くなるほど握り締めていたナイフをフレイへと、投げた。

放たれたナイフは一直線にフレイの眉間へと向かう。眼前に迫るナイフを前にフレイは僅かに笑みを浮かべていた。

触れる寸前で首を傾げ、ナイフの軌道から逸れた。

そのまま前方へと跳んで行くナイフは次第にその速度を増し、遙か遠く前方にある大岩へと向かう。

「は？」

数秒間、沈黙が辺りを支配する。フレイは最早こちらを見ておらず、後方のナイフの行方を見守っている。

刹那、辺りに轟音が響いた。その原因の大岩は石礫と成って辺りに飛び散った。

確か、かなりの大きさだったと記憶している。俺の背丈よりも巨大だった。あれ程の規模である岩を破壊するには相当の衝撃が必要だ。

あれは俺のナイフが破壊した？

「スローイングナイフだな」

「何？ それ」

「投擲前提の短剣だ。分かりやすく言うと」

「えと、つまり投げたからあの威力だったって事？」

「そういう事だな」

「普通の短剣みたいに使っていたから、武器の強さを引き出せなかったって事？」

「恐らく、そういう事だな。何故かは分からないが」

「……でも、何と無く分かった？」

「まあ、そういう事だな」

「というか、まさか、其れを教えるために業と殺す様な事を言った……？」

「まあ、半ば本気だったかな」

「おい、ちよつと待て。それくらい教えてくれても良いだろ！」

俺の詰問に、フレイはやれやれと仰々しく反応した。

「そもそもが、だ。少し考えれば分かるだろう。今のお前のオドでは強化魔術と召喚魔術を併用できない。つまり、召喚魔術を使っている間はただの人間な訳だ」

それは分かっている。だからこそ、ナイフを所持していた時フレイの動きに全く着いていけなかったのだから。

「ならば、召喚魔術もそれを補う武器が召喚される可能性もあると考えるのが妥当だろう」

「……なんでそうなる？」

「お前の召喚魔術は、特殊だといっただろう。召喚と言うよりは具現化魔術。魔術、という表現が正しいのか些か疑問だが……。そもそも、具現化というものは得てして自分の望む物が反映される物。ならば自分の都合のいい武器を考えるのが当然だろう。自分の身体能力の乏しさを補えるとなると武器自体の能力が今までと異なるのは必然。だが、武器は飽くまで武器。所有者が何らかの行動を取らなければその威力は発揮されない。私はダンシングソード辺りを予

想していたのだが……」

「ダンシングソード？」

「勝手に戦ってくれる武器だ。まあ、それは無理か。ダンシングソードは糧となる堅固な意思を持った剣士の魂が必要だからな」

「意思？」

「まあ、気にするな。お前には関係の無い話だ」

「そ、そうか」

「実際には予想に反して、飽くまでお前の意思で振るわれる武器が召喚されたわけだが……予想以上だな」

そう言うのと先程まで存在していた大岩の残骸に眼を向ける。

確かに、その威力は凄まじい。俺の今迄使用していた武器に勝るとも劣らないのでは、と思えるほどだった。俺の記憶は、消失されていないのに。

「凄まじいな。人間のオドでこれだけの威力……。まるで何かを犠牲にして得たかのような……」

「何も失っていない、と思うけど」

「……そうか。ならば、お前自身の力なのだろう」

何か言いたげ、にも見えたが気のせいだろうか。

だが、記憶は失っては居ない。少なくとも俺自身認識できる程には。

魔王に封じられた今迄の俺の能力は記憶を代替として使用できた。だが、今は代償となるものは俺の

オドのみ。そう、そのはずだったが、目の前の情景は俺の心を不安にさせた。

本当に、そうなのか？

「さて、そろそろか？」

「そろそろ、って、なに……が……？」

あれ、呂律が回らない。

というより、意識がまどろんで来た。

「あれだけの力だ。身体に異常が来すのは当然だろう」

頭が揺れる。視界がぼやけ、フレイの顔が歪んで見えた。耳鳴りが発生し、徐々にその叫びは増大していった。

「やれやれ。私が運ぶのか？」

そして、俺の意識は完全に途絶えた。



魔王城にて（前書き）

魔王視点です。

## 魔王城にて

大丈夫。そう言ってあげたかった。

その言葉には効果は望めないのは分かっている。それでも、少しでもその気持ちが伝われば、きっと心は軽くなるだろうと、そう思った。

だが実際は掠れた声しか出ず、俺の思いは伝達できなかった。

悔しかった。何も出来ない、そして自らの所為で大事な人間を泣かせてしまっている。

最早、俺の身体は長く持たないと悟っていた。死を目前にしても恐怖心は抱かなかつた。ただ、心配だった。俺が、俺達が居なくなれば、このか弱く、心許無い少年は生きていけないのではないかと杞憂であつて欲しい。だがその行く末を見守ることも、手助けする事も、もう叶わない。それだけを考えていた。

電話口で慟哭する少年に何も伝える事は出来なかった。

意識が現実から剥離される直前に聞こえた声は今でも耳から離れない。

「う…めん……」

何を謝る必要があるのか、俺には見当も付かなかつた。ただ、どんな理由でも俺は許すだろう、と思っただけだった。

\*\*\*\*\*

自らの呼吸音で目を覚ます。俺は何時の間にか眠ってしまったらしい。無骨な玉座に腰掛け、頬杖を付いたまま眠りに落ちたようだ。その所為か身体の節々が緩慢な痛みを訴えていた。

軽く嘆息する。まさか過去の夢を見るとは思わなかった。しかも、生前の死に際の映像。忘れたくても忘れられない光景は未だ俺の意識を苛んでいるようだ。

「魔王様……大丈夫ですか？」

凜とした声色は明らかに俺を心配している色を含んでいた。

リリアに視線を送ると、案の定、表情にまでその感情は浸透している。

今は戦闘時の服装とは違い、私服に着替えている。

身体の線を強調する細身のパンツに、キャミソールを着ている。

以前、露出の激しい戦闘時の服装を嫌った俺が送った服を着ている。最初は着るのを嫌がっていたが、今では城内においては私服で居る事が多くなった。意外に気に入ったらしい。

こちらに来てからずっと傍に居てくれる心配性な側近は俺を気遣いながらも距離を保っている。長く一緒に居るが、敬意を失っては居ないようだ。

「ああ、大丈夫。変な夢を見ただけだ」

「夢……ですか」

「ああ。ただの夢だ。気にするな」

俺の断定的な物言いにも納得していないのか、まだこちらを心配そうに見ている。

魔族の表情とは思えない。と、人間ならば思つかもしれない。安心させるため、笑顔を見せると、何故か視線を逸らされた。

……なんか、ちょっとだけ、傷ついた。

「あ、えとですね。あの従者の娘ですが」

少々しどろもどろに成りながら話を切り替えてきた。なにか、誤魔化しているようにも見えたが、まあ、そこは指摘しない方がよさそうだな。

「ああ。エリス、とか言ったか。従者がどうした？」

「いえ、言われた通り、魔王様に保存された状態で客室に置いて来たんですが、古代人の娘が離れようとしませんでした……」

ああ、大和と一緒に居た娘か。名前は……なんだっけ？ 聞き忘れたな。まあ、必要ないと思うが。

別に従者の傍に居ようが然程問題ないように思えるが。

だが、俺の考えとは裏腹にリリアの表情は硬い。

「なんだ？ 問題でもあるのか？」

「あります！ 大有りです！ あの娘、何を思ったか、従者を覆っている氷を壊そうとしたんですよ！」

成る程。それは少々危険だな。

俺の能力はあらゆる物の保存、詰りはその状態を停止させる事が出来、保存した物を再度、元の状態に戻すことが出来る、という物だ。その力は時間、物理、自然など様々な法則を全て無視し思いのままに保存できる。保存した物は全ての法則から解き放たれる。例えば重量のある物を保存すれば、非常に軽く持ち運べたりする。

まあ、かなり異常な能力な訳だが、弱点もある。単純に衝撃に弱い。それは物理的にでも、自然的にでも同じ。非常に脆い温度の無い氷に覆われている。さらに言えば保存数や対象の質によってその効果や俺へと影響も変わってくる。身近にある無機物を保存しても、

俺自身に対し然程、悪影響は及ぼさないし、外部の衝撃に対してもある程度耐性はある。またその分多数保存が可能だ。だが、生物になると格段に変化する。勿論、悪い方へ。身体が重くなったり、激しい頭痛に見まわれたりする。その脆さも勿論変わる。

人間ならば、更に……。

もしも俺の能力を解除せず、強制的に破壊されれば、対象は無事では済まないだろう。

「助けようとしている、みたいだな。従者の状況は説明してやったのか？」

「説明しました！ けど、言葉が通じないので……」

知ってはいたが、古代人に現代の言葉は通じなかったみたいだ。

大和も厄介な奴を連れていた物だ。

古代人の存在理由など知らないだろうに。稀有な存在と遭遇したのは大和が勇者だからだろうか。それとも偶然か。いつでも波乱の渦中にいる様に思える不憫な勇者の姿が一瞬脳裏を過ぎった。

「今は放っておいているのか？」

「いえ、アニが取り押さえています」

天真爛漫なメイドの姿が浮んだ。小柄な体躯の持ち主であると同時にその膂力は凄まじいものがある。だが、少々考え無しな所があるのが玉に瑕だった。

「大丈夫なのか？」

「大丈夫です！ 傷つけないように釘を刺しておいたので。たぶん

……」

たぶん、って。

嘆息する自身を禁じえない。

さて、どうするか。

流石の俺も、古代人と話す事は出来ない。俺が知っているのは事実だけであって、知識では無い。

英知、というのも高が知れている。思わず自嘲気味に笑みを浮かべた。

知っている。力は所詮、力なのだ。それを使う者がその力を上手く扱えるかどうか、ただそれだけ。

「俺が行くよ」

「魔王様直々に赴かなくてもよろしいです。私が……」

「でも、解決出来なかったから、今ここにいるんだろ？」

言い方が少し嫌味だったかもしれない。だが、其れ位言わないとリリアは納得しないだろう。

俺の言葉に、うつ、と言葉を詰まらせた。

それを肯定と判断し、返答を待たず俺は客間へと歩を進めた。

慌てて後ろから付いて来る足跡がする。

\*\*\*\*\*

「想像以上の状態だな」

「……ですね」

数人居ようが狭いと感じられないほど、比較的広い客間の中心には氷付けの従者が存在している。そのすぐ、正面で暴れている娘を

小柄なメイドが羽交い絞めにしている。全く微動だにしていない。部屋に入ってきた俺達に気付いたアニは満面の笑みを浮かべた。

「あゝ、魔王様。待つてましたよ」

待ち合わせをしていた友人のような口調でこちらに話しかけてくるアニの手の中には未だ暴れ続けている娘が居る。その様子は正常とは言いがたいものだった。

「あれ、なんだ？」

「……私が、娘を捕まえて動くな、って言ったからだと思います」「ふむ、成る程」

見ると、全くその場から動いていない。命令を忠実に守った、という事だろう。守り過ぎている感は否めないが。

「あゝ、ご苦労さん」

「いえゝ、暇ですから」

「暇じゃ、駄目だろ」

「えへへ。そうですね」

メイドが暇なんて所はここくらいだろう。まあ、実質暇なんだけど。リアが俺の身の回りの世話を頑にしたがる所為でアニも時間が空いてしまっている。超人的な身体能力を持つメイドにとって広大な城においての家事はそれほど時間をくわないみたいだ。

俺は羽交い絞めにされた娘へと歩いていった。

何やら不穏な空気を感じ取ったのか異常に暴れだした娘を、歯牙にもかけず、アニは先程と同様の状態を維持している。

俺が正面に立つとぴたり、とその動きを止めこちらを凝視してきた。瞳には俺に対する恐怖心と僅かばかりの反抗心が見て取れた。

身を低くし目線を娘に合わせた。

「別に危害は加えないよ」

出来るだけ優しく、娘を気遣うように感情を込めた。その真意を読んだのか、感情を少しばかり抑制できたようだ。

俺の言葉に耳を傾けている様子が伝わってきた。

「その従者は別に捕らえている訳ではないよ。今は病気で休んでいるだけだ。無理に起こしたりしたら大変なことになる」

諭すように、飽くまで一片の邪気を含まず話す。

「だから、今はそのままにしてあげてくれないか？ 大丈夫。きっと、良くなるから」

笑顔で娘の瞳を真っ直ぐ見ながら真摯に答えた。

徐々に、だが確かに溢れた感情の姿は薄れていった。

落ち着きを取り戻したのか、じたばたと暴れる事を止めた。

「……あら？」

素っ頓狂なアニの声には何故か残念そうな色が含まれていた。こいつ、ちょっと、楽しんでいたんじゃないだろうか？

「離してやってくれ」

「は、はい」

拘束から解き放たれた娘はやはり暴れる様子は無く、じっと俺を見詰めている。観察でもしているのだろう。



「たぶん、もう大丈夫だ」

「大丈夫って……。伝わったんですか？」

「言葉の意味は伝わって無いと思うけど、抗う必要は無いと判断してくれたみたいだ」

「私も説明したのに……」

決して確実ではないが、言葉が伝わらずとも、真摯に答えれば伝わる物だ。そして、相手を敬う。そうすれば思いは伝わる。必ずそうなれば苦労はしないが。

頂垂れたリリアの様子を見て思わず笑いが毀れた。

「まあ、子供の相手は慣れてるから」

「……そうでしたね」

沈んだ心を更に沈ませてしまった自らの言動に後悔した。

過去の話はすべきではない。リリアの心労が高むだけだ、と。

重い空気が辺りを占めだした。そんな様子を気取る事無くその場に立ち尽くしているアニが口を開く。

「それで、どうします？ この子」

「あ、ああ。そうだな。アニが面倒見てくれると助かるけど……」  
「わかりました」

そう言うすぐさま娘へと歩み寄る。だが、その距離が詰まる事は無い。

娘は明らかにアニへと拒否感を示しており、警戒心を抱いているようだ。

何故か逃げるように俺の後ろへと隠れ、アニを睨み付けた。

「あ、なんか傷つく」

「まあ、あれだけ羽交い絞めにされたらそうなるか」

「じゃあ、魔王様が面倒見るしか無いっすね」

「は？ 俺？」

「ええ。だって、懐いているの、魔王様しかないし」

アニに指差されて俺は娘へと視線を降ろした。

こちらを見上げる様子の娘は何うような視線を送ってきている。思わず嘆息しかけ、自らを自制する。

子供は敏感なのだ。周りの感情に対し、自分を省みる傾向がある。少なくとも信頼されそうな状態の俺が疲れた様子を見せたならば、自分の所為だと思いかもしれない。

俺は娘の頭を撫でてやって不安感を少しでも拭った。

素直にされるがままになっている、娘の表情は柔らかい。

「ね？」

「……仕方ないか」

「仕方なくないです！」

憤慨しているリアの声は一室に響き渡った。その声に娘は思わず身を竦めた。

「おい。子供の前で大声出すなよ。怖がるだろ」

「あ、すみません。……じゃなくてですね。魔王様が面倒見なくてもいいでしょう。魔王様なんですよ！」

「ん、でも仕方ないと言うか。俺は別に構わないし」

「私が構います！ ええ、構いますとも！」

何をそんなに怒る必要があるのか。口を尖らせて一身に自分の不満をさらけ出したリアにどう対処するべきかと思いを巡らせた。

魔王のする事じゃないと思うんだけど。

「何か困る事でもあるのか？」

「こ、困りは……しませんけど」

「じゃあ、良いじゃないか」

「で、でも」

何故か後方で含み笑いをしているアニが気になる。

「魔王様も人が悪いですね」

「人じゃないけど、何だよ。俺が何したんだ？」

「乙女心を理解してあげないと。その子の面倒見るって事は二人の時間が減るって事ですよ？」

「だあ！ 何を言ってる、言ってますか！ あんたは！」

「くふふ。照れるリリアさんも可愛いな」

「……こ、殺す」

今にも飛び掛りそうなリリアに対し、楽しくて仕方ないと言わんばかりの表情のアニを見て思わず嘆息する。

子供の前ですよ。

「落ち着けて。従者が粉々になっちまうだろ。それに安易に殺すとか言ってるはいけません」

「う、すみません」

「ごめんなさい」

「やれやれ。とにかく俺が面倒見るから。まあ、ずっと一緒に訳でも無いし、いいだろ？」

リリアに念のため確認を取る。

俺の言葉に渋々頷いた側近はまるで子供のようになんげだった。

「出来るだけリリアと一緒に居るようにするから」

「わ、私は別に……」

「俺がそうしたいんだ」

俺の言葉に完全に萎縮してしまったリリアは顔中真っ赤になりながら沈黙を保った。

「魔王様。今のはヤバイっすね」

「そうか？」

「いやあ、相当の天然か、計算かどちらにしてもヤバイっす」

ヤバイ、ヤバイと連呼する。俺が教えた現代の言葉をアニは気に入ったらしく日常会話でも頻繁に使っている。完全に若者口調に染め上がってしまったメイドに思わず嘆息をする。

だが、不意に笑みを浮かべる。今のこの時間が俺の心を暖めているのは確かだった。

どのくらい過ごして来ただろう。

長い長い時間を共に過ごしてきた。

いつかこの時間も終わる日が来るのだろうか。

それは俺の望む事でもあり、望まない事でもあった。

限りある時間ならば、出来るだけ今を心に刻もう。

そうすれば少しでもこの寂しさを薄れさせる事が出来る。

例え其れが一時的な物だとしても。

感慨に耽る思考は何かの感触で停止した。

すぐ傍に居た娘が服の裾を引っ張りこちらを心配そうに見上げている。

大丈夫だ、その意思を伝える為、頭を撫でてやる。

擦ったそうにしている娘の名前を知らない事をふと思い出す。これからの生活名前が無いと不便だ。

「お前、名前は？」

と、言っても言葉の意味を伝えるのは難しい。

「セドナ」

どうするものかと頭を悩ませていたがこちらの真意を感じ取ったのか自らを指差しそう言った。

以前にも同じ様な場面に遭遇したのかもしれない。

セドナは俺を指差し疑問符を浮かべながら言葉を並べた。

「ヤマト……？」

セドナの言葉にリリアが顔をこちらに向けた。その表情は形容しがたい。ただ、動揺しているように見えた。

俺は首を振った。

「違う、魔王だ」

「魔王？」

「様を付けなさい！ 魔王様！」

リリアが会話に割り込んでくる。先の言葉を打ち消すように。俺は別に呼び捨てでも構いはしないが。

「魔王様？」

「ああ。それで、いい」

魔王。この世界に下りてその名を語り続けてきた。  
自身の名前はもう使うことは無いだろう。俺は、魔王でいい。  
俺は少しばかりの虚無感を抱きながら笑みを浮かべた。  
もうすぐだ。審判の時は近い。

## 裏と表

「……ているか」

まただ。どこかで聞いた事のある声。

暗闇に身を置き、聞こえる唯一つの声が鼓膜を揺らす。

分かっている。これは夢なんだ、と。

少なくともそう判断できる。何度も見た夢、夢幻。そう断言するには些か明瞭過ぎる意識の中、俺は声に耳を済ませた。

「覚えているか？」

何を。何を覚えているのか、と聞いているのか。

そう言葉にしようとしても声にはならない。もどかしい思いに駆られ身体を動かそうとするが、その感覚が無い。

身体が、無い？

「無駄だ。ここは意思だけの世界」

落ち着いた声。淡々と語る口調は無機質な印象を受けたが、不思議と暖かさを醸し出している。

声も出せず、身体も動かせないこの状況で俺は冷静だった。これが夢だと知っていたから。

「夢ではない。ここは狭間の世界。お前とお前自身の境界」

意味が分からない。謎掛けに答える気は無いのだが。

俺の意思を汲み取ったのか声は言葉を続けた。

「いずれ分かる」

言っている意味が分からないのに、その内理解できるとは思えない。

突如明瞭だった感覚が霞架かって来た。

次第に知覚出来なくなっていく。どうしようもない状況は不安感を煽った。

「思い出せ。時間が無い」

思い出せ？ 無理だ。俺には記憶が無い。無い物を、失った物をどうやって思い出せばいいのか。

「そうではない。あるはずだ、黒井大和の記憶で無い、お前の記憶が」

分からない。こいつは何を言っているのか。

俺の思いとは裏腹に鼓動が早くなる。得体の知れない感情を抱き俺は混乱していた。

次第に臆気に成って行く意識の中、ただ分からないと呟いていた。

\*\*\*\*\*

「起きろ」

それ程大きな声で無い筈なのに俺の意識に深く潜り込んで来た言



葉を放つたのはフレイだった。

寝起きに無表情な顔を拝むとは思っていなかった俺はやや面食ら  
いながら身体を起こした。

「なんで、ここにいる？」

「起こしに来たからに決まっている」

腕を組み仁王立ちになって俺を見下ろすフレイは起こしに来たと  
は到底思えない態度だった。

もつと、こうあるんじゃないの？ 身体揺らすとか。

なんか想像つかないけど。

ふとフレイの後方を見るとクリスがこちらの様子を伺っているの  
が見えた。

俺はそちらに手を振る。

「クリスもいたのか」

「う、うん。まあね」

「今日からトランゼンの娘と共に鍛錬をする」

「とらんぜん？ って、何故に？」

「ついでだ。暴走されたら困るしな。それに、お前の練習相手に丁  
度良い」

「暴走？ 練習相手？ 何を言ってる」

「行くぞ」

「って、おい！」

俺の言葉を完全に無視して踵を返すフレイに完全に出遅れた俺は  
部屋にクリスと二人残された。

何故か、微妙な沈黙が辺りに漂う。

「えと、ごめんね。僕が頼んだんだ」

「クリスマスが？」

「うん。その、フレイさんは魔術に詳しいみたいだし」

「そか。まあ、別に謝る必要は無いけど。クリスマスは十分強いと思うけど」

「そんな、全然だよ」

事実、フェンリルと戦った時、俺よりも確実に對抗できていた。今のままでも十分強いと思うし、何もフレイに助力を請わなくても良いのではないだろうか。

「ん？ そう言えば」

「何？」

「フェンリルって、何で街中に居たんだ？」

「ん。知らない。ジエイド兄ちゃんが言うには何時の間にか街の近隣に居たって言うてたし。そう言えば何でだろうね？」

「知らないって……。あれだけの魔物がいたら国家問題だろ。もっと騒いでもおかしくないと思うけど」

「フレイさんが言うてたけど、あれはフェンリルの偽者だって言うてたよ。フェンリルを模して造られた……。えと、人工生命体に近い物だって言うてた」

「なんだそりゃ」

「わかんないけど……。念のため領主様が近隣の諸国に伝令は出したみたいだけど」

それにしたって、あの獰猛さだ。倒したから終わり、で済まして良い物だろうか。

それともこれが日常茶飯事なのだろうか。

「クリスマスはあんな魔物見たことあるのか？」

「ん。無い、かな。オークとかは在るけど。あれ、たぶんドラゴ

ン級だよ。そんなのこの辺りにはいないし」

「ドラゴン、ってあのドラゴン？ 鋭い牙に巨大な体を持つ火を吹く魔物？」

「そだよ。って、当然でしょ？」

「い、いや。知ってるよ。うん。ただ吃驚しただけ」

完全に虚を付かれた為、明らかに挙動不審になっていた俺の言い訳を素直に受け取ったのか、クリスは納得したように思えた。  
本当に素直な子だ。

「そか。まあ、多分そのドラゴンと同じくらい強いんじゃないかな」  
「じゃあ、相当だろう」

ドラゴンと言えばどのような話でも何かにかけて伝説級の強さを誇るもの。  
創作の域は出ないと思っていた生物の存在になんとなく物怖じしてしまっ。

「相当だね。でもドラゴンの方がもっと賢いし、強いと思うけど」  
フェンリルの目の前に立っただけで震えが体を侵していた。

ドラゴンの前に立とうものなら……どうなるんだろ。

フレイなら、戦って勝ちそうな気がする。クリスも、ジエイドも戦いを挑む勇猛さを持っている。

俺が、戦う姿は何故か浮ばなかった。

「つと、そろそろ行くか。たぶんフレイが待ちくたびれて、やれやれ、とか言ってるだろうから」

「あ、それ言いそう」

お互いに思う所は一緒だったみたいだ。  
何と無く笑い合い、そしてフレイの下に向かった。

\*\*\*\*\*

「さて、帰るか」

「ちよ、ちよっと待って！」

そう言った本人を俺達は引き止めるため進路を塞いだ。

相手はフレイだ。どうも、俺達が来るのが遅かった所為で臍を曲げているらしい。

「私には遊んでいる暇が無いんでな。鍛錬をするつもりが無いならば、帰らせてもらう」

「ごめん！ 悪かった、つて！ つい話が弾んで」

「ほう？ それは悪かった。ならば歓談に没頭してくれ」

俺の言葉を見無視してそのまま帰路につくフレイをクリスと共に遮った。

「ごめんなさい。その、大和と話す機会あんまり無かったからちよっと嬉しくて……。その、本当にごめんなさい」

必死に謝る少女。顔を背け仁王立ちになり許す気配を見せない長身の男と言う構図に嘆息する。

確かに待たせたのは悪かった。こちらから頼んで鍛錬をして貰う

立場の俺が時間に遅れるなど腹も立つだろう。それについては反省している。事実、ここに着いて十数分謝り倒している。

だが、フレイは許さない。なんて、なんて頑ななのか。

明らかに自分より年下の人間二人に対してなんと大人気無いなのか。俺は自身の罪悪感が薄れて来ているのを感じていた。

「もういいじゃないか。許してくれよ」

「もういい？」

俺の言動に明らかに怒りを露にしている。

こちらを睨むフレイの瞳は明らかに俺に対して敵意を表していた。

「もういい、と言ったのか？」

「……そうだ。ちょっと待たされたくらいでここまで怒る必要が在るのか？ 確かに俺達はフレイに悪い事をした。だけど、そこまで怒るか？ 大人気無い」

「ほう、言うじゃないか」

冷笑。背中まで冷たくなる感覚を抱かせるその表情を見て俺の鼓動が早くなるのを感じた。

平静な男だと思っていたのに、こんな事で他者に敵意を持つとは思わなかった。

「二人とも止めてよ。遅刻したのは僕が悪いんだ。だからフレイさんも僕に怒ってよ……。大和も、やめよ？」

「五月蠅い」

クリスを一睨みすると、蛇に睨まれた蛙のようにその挙動を全て停止した。

意識的に、畏怖を感じた所為だろう。

クリスの表情は恐怖を滲ませていた。

「おい。幾らなんでも、やりすぎだろ。女の子だぞ」

「ああ？ 関係無いんだよ。そんな事はな」

口調が豹変した。今迄のフレイとは似ても似つかない。その表情は冷淡ではなく、明らかに激昂していた。

チリチリと焼け付くような殺気と共に胃が締付けられるほどの緊迫感を肌で感じた。

「お前ら解ってんのか？ ああ？ 時間が無いんだよ。俺にもお前らにもな」

「時間が無い、って。何を言ってるんだ」

「あゝ。お前はまだ解ってねえのか？ なんで俺がお前を鍛えてると思ってるんだ？」

「それは……」

あれ、なんでだ？

ただの気まぐれ？

そうフレイは言っていた。だが、それだけで俺を鍛えるか？

「お前。まさか、俺が善意で鍛えてやってるとでも思ってたのか？ まだ平和ボケしてやがる。俺がお前を鍛えてやってるのは時間が無いから仕方なくだ。カオスの野郎をぶっ殺す為の時間がな」

「カオスを、殺す？」

「お前の役割はなんだ？ 魔王を殺す事だろう。俺の役割もあつて当然だろうが。俺もお前もシユラトなんだからよ。カオスの野郎は三回殺さなきゃ死なねえ。一回は殺したが、もう一回はお前が殺した。あと一回って所で逃げやがった」

それで、カオスを探していた。と言う訳か。  
シユラト、って役割を持つ者達の総称、か？

「だが、あいつの目的はお前を殺す事。だから、お前を鍛えてやっ  
てるんだ」

完全に蚊帳の外になっているクリスはおろおろと事の成り行きを  
静止しようか、傍観しようか迷っているようだ。

少し頭の中で整理した。

カオスは俺を殺す事が目的、だがそれに俺を鍛える、という事と  
どう繋がるのか。

いや、簡単な事だ。俺が弱ければ一瞬で殺される。

特に今は魔術の多くが封じられている。その状態で戦えば俺が勝  
つ事は皆無だろう。

どちらにしても目的を達するまでの時間があればフレイがカオス  
を倒す事も可能になる。

「……時間稼ぎ？」

「ご名答。意外に頭は切れるみたいだな」

「まあ、俺が一瞬で殺されたらカオスの役割を真つ当する事になる  
わけだからな」

「少し違うが、まあいいだろう」

少し話した為に落ち着いたのかいつもの口調に戻っている。

あの、粗暴なフレイは、なんだったのかな。まさか、あれが地？

「それにその娘もそうだろう。お前周期は？」

「……二週間です」

「そろそろだな。お前も時間が無いことくらい解っているだろう」

「はい……」

「周期……て？」

聞いていいのか。聞かなくていい事なのか。恐らく後者だろうとは思っていた。でも、聞かずには入れなかった。単なる好奇心で無い。ただ、知って置かなくてはならないと感じた。

「ふむ。どうする？」

「……ごめん」

その謝罪は拒否を露にしていた。

雰囲気から察するに容易に話せる内容でも無さそうだ。

俺は軽率な自身の言葉に後悔した。

「いや、ごめん。無理に話さなくて言いから」

「ごめん。ありがとう」

しばしの沈黙。

クリスは恐らく俺に対し罪悪感を抱いているだろう。

けれど、そんな物は抱く必要が無い。俺は土足で他人の領域を踏み荒らしかけたのだから。罵倒されてもいいはずだ。

安易に踏み込んではいけない領域は誰もが持っている。

解っている。だけど、それでも、知りたいと思う事はそれだけで罪なのだろうか。

無知であるという事は罪なのだと、思い始めた自分が居る。知っていれば、と思う事も多かった。だが、知る事もまた罪であるのではないだろうか。ならば、罪でない物は存在しないのではないだろうか。

何が贖罪であるのか。

何を以って俺たちはここに居るのだろうか。いつか解る日が来るのだろうか。



何とはなしにそんな事を考えていた自分に違和感を感じていた。

## 干渉

規則正しい呼吸音が俺の鼓膜に響く。

次第に周囲の雑音は聞こえなくなっていく。

景色がぼやけて見え出す半面、その姿は、より鮮明に映し出された。

数秒の間隔の後、対峙する人物、クリスが前傾姿勢になる。

刹那、一瞬でこちらへと距離を詰め、一呼吸を数えない間に手の届く距離に移動した。

速い。

その速度に着いて行くには自身の身体能力を強化しなくてはならない。

瞬時に肉体強化の魔術へと意識を変える。

その瞬間、時間の流れが緩慢に感じる。肉体強化は知覚作用までも鋭敏にするらしい。意識的に強化魔術を使うようになってからその変化に敏感になっていた。

こちらに拳を振るおうとしているクリスの動きさえも緩慢に感じ、それに反応するように俺は首を一寸だけ動かし、クリスの攻撃の軌道から逸れる。

耳元を掠る拳の風切り音が五月蠅いくらいに鼓膜を揺らした。

次いで、拳の雨が俺へと降り注ぐ。

拳動を見据え、全て避ける俺には余裕が無かった。

「何をしている。そのままでは何れ捕まるぞ」

フレイの落ち着いた、だが明らかに俺に対する警告を含んだ言葉に内心焦りを覚えた。

肉体を強化しようとも、所詮素人の動き。

幾度かの戦闘の経験はあれどまともに鍛錬をした覚えは殆ど無い。

加えて相手は明らかに俺より格上。避けるので精一杯だった。

反して、クリスの方は余裕があるのが見て取れる。明らかに手を抜いている。だが、それでも俺は対抗しうる術が浮ばなかった。

半ば、おざなりになりつつある回避行動に終わりが来た。

徐々に、だが確実に速さを増すクリスの攻撃に俺の動きが着いていけなくなった。

回避しそこねた、回し蹴りを済んでの所で防御する。だが、予想以上に重みのある一撃に体勢を崩した。続けざま繰り出された掌打をまともに顔面に受け、俺は吹き飛ばされた。

背中を地面に強かに叩きつけ、もんどりを打つ。

軽い呼吸困難に陥り、地面に倒れこんだ。

「止めだ」

「は、はい」

フレイの制止に、クリスが慌てたように返答する。

俺はというと、未だ呼吸を整えるのに必死だった。

「これで何回目だ？」

「……三回目です」

「全く進歩しないな」

言われたい放題だが、反論しようも無い。それに、言葉に出そうとしても、苦し過ぎて紡ぐ事が出来ない。

事実、手加減してもらっている。

肉体強化の魔術と召喚魔術への力の移行は以前よりは円滑に行えるようになったし、ナイフを使っても意識を失う事は無くなったが、それでも進歩を感じなかった。全く歯が立たない。

「やはり私の見込み違いか。望む通りに事が運ぶ訳ではない様だな。

特定の条件下のみなのか、或いは見当違いなのかは解らないが」

俺の能力の事を言っているのだろう。

だが、そんな能力があるとは到底思えない。自身が望む結果が現実にかかるなんて能力は。」

「おい、お前」

「は、はい」

「何割だ？」

「はい？」

「だから、何割の力で戦っているのか聞いている」

主語無しに言うな。という突っ込みも未だ言えないで居る俺を置いて話は進む。

「えと、八割……」

「嘘を付け。何割だ？」

「……七」

「何割だ？」

しつこい。フレイは執拗に同じ言葉を繰り返す。

その異様な圧力に負けてか、渋々クリスが答えた。

「……五割くらいです」

「やはりな。半分とはな」

短く嘆息するフレイの視線は俺に向けられている。

「何が……言いたい？」

漸く呼吸が整い話せるようになる。  
内心、苛立ちを隠せずに居た。

「情け無い、と言いたいな」

「ぐっ」

「見る。このちっこいのを」

そう指差す先にはクリスがキョトンとした表情で居る。

まるで、誰の事を言っているのか察しが付いていない様だ。

一拍置いて、漸く自分の事を指し示している事を理解したのか、  
不満そうに口を尖らせた。

「ち、ちっこいって失礼な！」

「その、ちっこいのに負けるとは……。しかも半分の力で。これを  
情け無いと言わず何と言う」

何も反論出来ない。

クリスには悪いが、情け無いという表現は俺の心情を言い当てて  
いた。

俺は男だ。古臭いかもしれないが、女の子に負けるというのは些  
か誇りが傷ついてしまう。

俯いて、不快感をなんとか消化しようとした。

「まあ、トランゼン相手だからな。見た目通りとはいかないが」

トランゼン、ってなんなんだろう。

何度が聞いた言葉に関心を抱くのは当然だった。

だが、深くも聞けない。その言葉を聞く時のクリスの表情は明ら  
かに沈んでいるから。

見た目にそぐわない身体能力はそれに起因しているのは間違い無

いだろう。

「だが、前にも言ったが時間が無い」

「なあ。時間が無いって、結局何の時間が無い訳？」

俺の言葉に驚愕の表情を浮かべるフレイ。

何かまずいことでも言ったのだろうか。

「本気で言っているのか？」

「本気、だけど」

「最初に説明を受けたらどう？」

最初、つてのはここに来る前って事か？

そういえば過去の記憶を垣間見た時にそういう場面があったような。

フレイの反応からすると俺の記憶が無いことは分かっているみたいだ。いや、以前カオスが俺の記憶消失を知っているような素振りを見せていた。ならば、フレイが知っていても不思議は無い。だが、今の反応は嘘では無さそうだ。とすると、過去に渡って、或いはこの世界に来る前の記憶が消失する事は有り得ないと思っている可能性もある。

どうする？ 素直に話すか？

話した所で、不利益になる事は今は浮ばない。少なくとも味方だと思える今は。

「え」と

「覚えていないのか」

疑問、ではなく断定的な言葉は俺の不明瞭な返答で事実を浮き彫りにした結果だった。

「こつこつ駆け引きは苦手だ。どうも、俺は嘘を付く事が出来ないみたいだ。」

「おい。確実にある記憶は何時まで遡れる？」

「……俺の今覚えている範囲で、って事か？」

「違う。お前がこの世界に来てどう過ごしたか何処まで分かるか聞いている。何かの媒体で知った記憶でも確実な物ならばそれでも良い」

「え〜と、ちょっと待って」

そう言つと俺は自分の荷物を探す。

少し離れたばつんと置いてあるポーチを見つけやや急ぎ足で駆け寄つた。

「記憶が、とか言っているのはどういう事です？」

「お前は知らなくていい。いや、知つても直ぐ忘れる」

「直ぐ忘れる？」

「そういう風に出ているんだって事だ」

「はあ。よく解りませんが、聞かない方がいいんですか？」

「余計な労力を使いたくないのでな。聞かないで居てくれ」

「……解りました」

何やら話し声が聞こえるが何を話しているのだろうか。

俺は目当ての物を見つけるとフレイ達の下へ戻つた。

何故か、クリスは俺たちから距離を取り、少し離れた所で地面に座り込んでいる。

気を使ったのだろうか。

フレイは俺の手に握られている物を見て意外そうな声を上げた。

「日記か？」

「ああ。ある時期から付けてる」  
「ある時期？」  
「記憶を失ってから、だと思っ」  
「ふむ、見せてみる」  
「あ、ちよつと！」

返答を待たず、フレイは日記を奪った。  
俺の非難の声を聞きもせずそのまま、読み入る。  
自分の日記を他人に読まれるとなんとなく恥ずかしい。

「これを見ると、約四ヶ月前からの記載になっているな」  
「そうみたいだな」  
「そう、みたい？」  
「俺にはその頃の記憶は無いから」  
「なんだと？ たった四ヶ月の記憶を持たないと言うのか」  
「あ、ああ。俺の記憶は三ヶ月しか持たないみたいだから」  
「三ヶ月……。短すぎる」  
「カオスもそう言っていたな。それだけ、力が強いとか何とか」  
「いや、おかしい。それにその期間の短さ。力の強弱に記憶の継続は関係在るかは疑問だ」  
「へ、なんで？」  
「前にも言ったが、魔術とは代替だ。その使用によって何らかの代償は必要だが、常に代償が強いられる事は無い。現にお前は召喚魔術を使用した時にも記憶を消失している。二重代替と成っている訳だ。これは造語だが」  
「詰り、召喚魔術を使用する時に記憶を消失する事と、記憶が三ヶ月しか持たない事と同時に起こり得ない、って事か？」  
「本来ならな。代償は一つ、力は一つ。それが我々シュラトの原則の筈、なのだが……。境界での記憶が無い事となにか理由があるのかもしれん」



「でも、強化魔術の使用もしているし、その代替なんじゃ？」

「それはおかしいだろう」

「何故？」

「お前の記憶の消失の仕方だ。召喚魔術と強化魔術は同一の物であるはずなのだから、その代償も同じ。つまり、記憶の後半、が失われるはず。そう考えると常にお前は記憶を失っている事になる。それに、前半が失われるのはおかしい」

フレイは首を傾げ、思考を繰り返している。

確かに、おかしい点は多くある。だけど、それに理由があるとは考えていなかった。それが当たり前なのだと思っていたから。

当たり前？　これが？　この異常な状況が当たり前になっている？

やがて、考えに煮詰まったのか、フレイはこちらに視線を送ってきた。

「解らん。だが、何か理由がありそうだな」

「理由、か……」

それが解れば今迄の矛盾や疑問も解消できるのだろうか。

だが、今はこれ以上は解りそうに無い。

エリスを救う事は出来るのだろうか。

魔王の言った事を信じる事。それに意味があるのか、俺は判断が付かなくなっていた。

思考を切り替える。これ以上の問答は意味を成さないようだ。

「なあ、その境界、だっけ？　そこでの説明について聞きたいんだけど」

断られたらこれ以上知る術は無い。ある意味フレイは頼みの綱だった。

恐らく、だがフレイが俺に嘘を付く利点は無い筈。ならば聞き出せたならば真実である可能性が高い。

俺の記憶を探る事は、エリスを助ける術を見つかる事にもなるかもしれない。

力が必要だと思った。仲間を助けられるだけの力が。だからフレイに師事を仰いだ。

エリスを助けられるだけの力が欲しかった。だから、記憶を求めた。そこに答えがあると信じて。

それは魔王の言葉を信じる事と同義ではあるが、それ以外に選択の余地が無いのもまた事実だった。

「お前は知りたいのか？ 失った記憶を。その全てを」  
「知り……」

突如襲った焦燥感に言葉を止めた。  
よせ。

誰かの声が聞こえた気がした。

俺は知りたい筈だ。失った記憶を取り戻す事は必須な筈だ。だが、体が拒絶を表したのか、小刻みに震えだす。

息苦しさを感じ、呼吸が荒くなっていく。  
やめろ。

再度聞こえた声は確かに俺の耳に届いていた。  
だが振り払う。正体の解らない恐怖を。

「知りたい」

搾り出すように出した声は霞んでしまっていた。それでも、俺の

意思是伝わったはずだ。

不意にフレイがこちらに歩み寄ってきた。手の届く所まで来たと思うと俺の頭を鷲掴みにする。

「何すんだ！」

「騒ぐな。握りつぶしたりはしない」

確かに、腕に力は入っていない。頭に掌を乗せているという表現が正しいだろう。

一体何がしたいのか。頭でも撫でるつもりか。

俺的的外れな考えに反して、手は微動だにせずそこに存在していた。

「暫く、そうだな三十秒程我慢しろ」

「なんの意味があるんだよ」

何かを考えているのか辺りが静寂に包まれた。

一瞬の逡巡の後、フレイが切り出した。

「……まあ、話してもいいだろう。私の能力は干渉だ。生物、物質に関わらず、触れた者に干渉出来る」

「干渉？」

「様々だ。物質を変化させる事も出来るし、生物の思考を変える事も出来る。ちなみに触れていた時間によってその効果は違う。数秒なら然程の変化は与えられない。また、飽くまで変化の域は出ない。銅を鉄には出来ない。だが、銅と言う性質を持ったまま、限りなく鉄に近い物質には変える事が出来る。まあ、そこまでの変化となると数日は触れて居なければならぬだろうが。私が纏っている衣服は最早、衣服の域を出ているがな」

じゃあ、フェンリルの炎がフレイを避けていたのはその力の所為か？

という事は、干渉と言うのは予想以上に万能な能力なのでは無いだろうか。

いや、待て。ならば俺に触れているこの手は……。

「おい、それなら俺に何をしようとしている？」

「安心しろ。ただ、お前の記憶を探っている」

そこまで干渉できるのか。じゃあ、人格を変えたりも出来るんじゃないのだろうか。

フレイの話からするとそれだけの变化ならば長時間触れていなくてはならないだろうか。

「記憶は消失しているはずだけど……」

「さて、どうだろうな……。ふむ、やはり魔王に力を抑制されているな。これは、流石に干渉できない。ん？　なんだこれは」

「なんだよ？」

「解らない。干渉できない部分がもう一つある」

「有り得ない事なのか？」

「……干渉出来ない事はある、が何に干渉出来ないかは判る筈なのだが」

「詰り、干渉出来ない対象が不明、だと」

「ああ……。考えてもしょうがないな。それより……。見つけたぞ。意識を集中しろ」

「え？　集中って」

返答を待たずして、視界が真っ白に変化した。

頭の中に無理やり何かを押し込めたような圧迫感。

表現しようが無い。現状を把握することが出来ず、現実感が無い。

今居る場所さえ判らず、意識がはっきりしない。瞬時に切り替わる  
場面に思考が付いていかない。

混濁した意識の中、緩慢になっていく情景はやがて、一つの世界  
を映し出した。

## 遅れてきたプロローグ

鼻腔を擽る線香の臭いが少しだけ不快だ。

まず思ったのはそれだけだった。

それ程広くない一室に全身黒の衣服に包まれた人達が数十名居る。状況を理解はしていた。目の前に存在する確かな物が幼い僕にとっても何を意味するかは解っていたから。

しかし、僕はまるで夢現だった。

理解はしていた、だが十歳に満たない子供にとってその現実は何容出来ない事実として目の前に突きつけられた。

両親が死んだ。

見上げると遺影が見える。以前、京都に旅行に行った時に家族四人で撮った写真だ。

写真嫌いの父親が母に説得され漸く撮れた写真。厳格な父の表情は硬く、まるで証明写真のように固まってしまっている。横には柔らかに微笑む母の姿。間に僕と兄が満面の笑みで写っている。家族全員で撮った写真はその一枚しか存在しない。

写真は白黒で彩が無い。

葬式は厳粛に行われ、静寂の中で時折聞こえる鳴き声が印象的だった。

僕の隣には感情を必死で堪える兄が居て、葬式の間、手を握ってくれていた。

「大丈夫。大丈夫だから」

そういう兄の言葉は自分に向けられた物か、それとも僕に向けられた物か判断が付かなかった。

悲しそうな兄を見て、何だか無性に心配になった。兄がでは無い。

兄のことも心配だったが其れよりも気がかりだった。

何で僕は泣いていないんだろう。

大人達は必死で泣く事を堪えようとしている。中には堪えきれず  
嗚咽を漏らしている人もいた。

だが、僕は泣けなかった。感情の奔流も無く、呆然とこの場に立  
ち尽くしている。

それが無性に悲しかった。

\*\*\*\*\*

不快な気分で見目を覚ます。

嫌な夢を見た。

過去の記憶。忘れようとしても忘れられないその記憶は未だに僕  
の意識を苛んでいる。

自嘲気味に笑みを浮かべた。

カーテンの隙間から零れる朝日が眼に沁みた。

ふと、隣に眼をやる。時計は7時30分を指していた。

内心このまま再び惰眠を貪りたい衝動に駆られていたが、誘惑を  
振り切り上半身を起こす。体を動かせば不思議と眠気も治まる。

半ば惰性で、ベットから降りクローゼットの正面に掛けられている  
制服を視界に入れる。

本来なら、不安や期待を胸に抱くのだろうが、僕の思いは一つだ  
った。

「……面倒臭いな」

最早、着替えるだけと言う状態で逡巡した。このままさぼってやるのかという意識が生まれた所為だ。登校初日にしてサボタージュと言う暴挙に出ようと画策している僕の思考はけたたましい音に中止せざるを得なかった。

「大和！ あ、起きてたのか」

振り返ると完全に身形を整え終わっている兄が姿を現した。

「兄さん。ドアはノックしてよ。あと勢い良く開き過ぎ」

「ああ。すまんすまん。早く大和の顔が見たくてな」

「……それ、学校ではやめてよね」

今日から同じ学校に通う事になった僕は少し強めの口調で釘を刺しておいた。

家の中ではいつもこんな調子だ。

兄は僕の世話をやたら焼きたがる。毎朝起こしに来るのもその一つだった。

これで学校では生徒会長をやっていると言うのだから驚きだ。

僕にとっては家での兄の姿しか知らないから、どうも想像が付かない。

「ん〜、善処する」

「厳守で」

「弟が兄に冷たい！」

掌で顔を覆い、泣き崩れた兄を放っておいて僕はそそくさと着替えた。



「あ、リアクション無しなんだ」

「愚兄には付き合つてられないんで」

「ぐ、愚兄……。大和の毒舌も磨かれてきたな。兄は嬉しい」

「喜ぶ所じゃないでしょ」

こんな感じで何かにつけて僕を褒めたりする。

このやりとりもいい加減慣れた物だ。まあ、兄弟だから当たり前  
なんだけど。

内心嘆息する。正直疲れる。けれど、この時間も僕は気に入って  
いた。数少ない、心が楽になれる時間だったと思う。

「兄と言うのは弟のどんな部分も受け止めるものなのだ。解るかい  
？」

斜に構え、こちらを指差す兄の横を通り過ぎ、一階へと降りた。  
僕の完全無視な態度に対して反応に困ったのか気障な格好のまま  
停止した兄を尻目にそのまま、玄関へと歩を進めた。

「お、おい！ 突っ込みは？ ていうか飯は？」

「いらないよ」

「……偶には一緒に食べようぜ」

「いい。あの人達と一緒に食べたくない」

リビングを通り過ぎる時に発した声はあの人達にも届いているだ  
ろう事は解っていた。

情け無い。正面切つて言う勇氣も無いくせに。こつやって小さな  
反抗心を満たし、矮小な誇りを守ろうとしている。思わずしかめつ  
面になるのが解る。

慌てる兄の拳動を目端に捕らえたが、僕はそのまま家を出た。

\*\*\*\*\*

「1-Cは、つと」

校庭に立てられていた掲示板に自身の名前を見つけ、目的の教室を探していた。

当たり前だが、校内は新入生らしき人達で溢れている。

不安そうに教室を探す者も居れば、中学の同級生らしき友人と一緒に探している者も居た。

僕はそのどちらでもなく、ただ淡々と教室を探していた。

そう、思っているのは僕だけかもしれないけど。

暫く歩くと目当ての教室を見つけ、一呼吸も置かず戸を開け中に入る。

一足早く到着していた同級生が一斉にこちらを見てくる。

それに構わず窓際が一番後ろの席に座る。席は割り当てられて無  
いようだったので一番落ち着く場所を選んだ。

こちらちら視線を感じるが気付かない振りをして、校庭を眺めた。

興味が無い。別に仲良くやっていく気も無いし、自分から仲良くなるうとも思わない。

幾度も開かれる戸の音を聞きながら何と無く校庭を見ていた。

\*\*\*\*\*

止水学園。総生徒数千人のマンモス校。特徴は幅広い教育を行っている事。教育理念として、学ぶ姿勢の者は全て受け入れるという事を謳っている。その為、科によって学力、身体能力など審査の基準は大きく異なる。特別進学クラスともなると最低でも偏差値が75は必要だとか聞いた。事実かどうかは知らない。知りたいとも思わないし。

総生徒数が多い分様々な専攻がある。生徒間の能力も一律ではなく、クラスも普通科、特別進学科、専攻科の三つに分類されている。専攻科は様々な専門的技術を教える高等専門学校に属する。工学、技術以外にもスポーツ専門の学科まである、正に誰でも受け入れるの謳い文句通りと言う訳だ。

全国的にも有名な我が校で僕が所属するクラスは普通科だ。普通が一番。何事も。

そんな高校で生徒会長の任を担っている兄が壇上へと上がって来ているのに気付き視線を其方に向ける。

始業式の為に体育館に集まっていた所だった。

新入生は壇上に近い位置に並んでいる為、兄の顔が比較的鮮明に見えた。

家に居る時とは違い引き締まった表情の兄を見て、何故か孤独感を感じた。ほんの少しだけだけ。

どうも、親類の晴れ舞台を見るといっなのは気が気でない。

そわそわし出した僕の思いは、間違わないように、という物に満たされた。

「……生徒会長、黒井海斗」

耳を劈く拍手が辺りに響いている。

どうやら、何時の間にか式辞は終わっていたらしい。周りの様子を見る限り、挨拶は滞り無く終えたと解り、内心、胸を撫で下ろす。

兄の凜然とした姿勢に小さな誇りを抱いた。そしてその感情には少しの嫉妬が滲んでいた。

\*\*\*\*\*

教室に戻りしばしの歓談時間。教師が教室に来るまで時間が空いた。

同級生達は思い思いに行動している。新しい環境に早く慣れる為に周囲の人間に話しかける生徒、もうすでに仲良くなった様子の生徒もいた。僕は少数の同級生と同じ状態。所謂、一人ぼっちで奴だ。こちらに視線を送って来ている生徒もいたが、僕は完全に無視を決め込んでいた。

不愉快な奴等だ。

孤独を気取って居る訳ではない。ただ、他人が嫌いだった。いつものことだ。学校と言うのはそういう場であると僕は思っていた。

「ねえ」

不意に声を掛けられた。予想通りの展開に半ば苛立ちつつそちらに視線をやる。

女生徒二人がこちらを見下ろしていた。

茶髪ショートカット、黒髪ロング、金髪ショートの三人。

容姿を観察する気にも成らない。ただ、三人とも高慢な態度が見

て取れた。

「……なに？」

「あんだ、黒井って言うんでしょ？」

「だから？」

「生徒会長の弟らしいじゃない」

全くこいつらは個性と言う物が無いのだろうか。

何処に行っても湧いて出てくるこつという輩の相手は飽き飽きしていた。

しらばっくれてもいいが、どうせ後々解る事だ。僕は正直に答えた。

「それが、何？」

「紹介してよ」

「断る」

「そつか。……つて、え？」

即答である。

毎回同じ事を頼んでくる。ちなみにこいつとは初対面。

兄と同じ学校に通っていなくても、僕の名を聞きつけて頼んでくる奴も居たくらいだ。

こつという事態になるのは解っていた。

「いいじゃん。紹介くらい」

日常的に使われる嫌いな言葉が幾つかある。別にいいでしょ、ケチ、生意気等々。

どれも言った本人は何様だと思えて成らない言葉。

だが、それを日常的に使う奴が多いのも遺憾ながら真実だった。

「いいじゃん。紹介しないくらい」

「は？ 舐めてんの？」

「むしろ、こっちが舐められてるよ用に思えるけど？」

「こいつ……」

こちらを睨みつけている茶髪ショートの眼光は中々に鋭い。

今までもこうやって自分の意見が通らない時にも相手を屈服させようとしてきたのかもしれない。幼稚な思考の持ち主にこれ以上時間を費やす必要は無いな。

僕は無感情に淡々と言葉を並べた。

「自己紹介しに行けば？」

「マジ、お前何様？」

「その言葉。そっくりそのままそちらに返すよ」

明らかに表情が引き攣りつつある茶髪を横目に大仰に嘆息する。

「もう、いいじゃん。こいつ役立たずだよ」

「う、うん。違う人に頼もう？」

脇役の黒髪と金髪が怒りが抑えきれない茶髪を諫め様としている。ちなみに前者が金髪で後者が黒髪だ。

「む、むかつく！ お前、態度でか過ぎ！」

「そっちも頼む側の態度じゃないね」

「も、もう行こうよ。理愛」

「あんたが、生徒会長の弟だって信じらんない！ 落ち零れの弟に頼んだあたしが馬鹿だったよ！」

黒髪が茶髪の手を引つ張りこちらから離れていく。

やれやれ、今回はいつも以上に態度が大きい相手だったな。

まあ、どうでもいいけど。

漸く一人の時間が出来たと思ったら、始業のチャイムが流れた。

と同時に前側のドアが開いた。

「はい、席について。授業を始めますよ」

間延びした語尾に威厳は一欠けらも無い。

若い女教師の出現に嬉しそうな表情の輩を見て、再び嘆息する。

やっぱり学校は面倒臭い。

未だにこちらを睨みつけてくる茶髪の視線を感じながら無視する形で校庭を眺めた。

黒井海斗。眉目秀麗、らしい。弟の自分には解らないけれど。

文武両道を心がけ常に努力し、結果を残しているたった一人の兄の名前。

兄は天才では無いと思う。限りなくそれに近い秀才なのだと思解していた。

どちらかといえば不器用なのだ。だが、その不得手でさえも努力で得手に変えてしまう兄は努力の天才なのだと思う。

また、人望も厚い。他者を気遣い、率先して先頭に立つ事を厭わない兄を慕う者は多く、何処へ言ってもその立場は不動の物だった。反抗する者は必ず居る。だが、限りなく少数であると言えた。兄ほど腰の低い人間は見た事が無い。謙つていない、堅実な印象を持たせるその態度は好印象だと思ふ人間が多いのだろう。

黒井大和。僕の名前。兄と違いぱつとせず、所謂普通の学生。

学力は普通。体を動かす事は好きだったが、得意な分野は無い。一つを除いて。

友人と言える人間は皆無。

物語の主人公であるなら、無愛想であっても仲の良い友人が一人二人居るものだが、僕には一人も居なかった。だが、それは僕自身が望んだ事。今の状況が最も好ましい。

下校時間になり、帰路へと着く。

校庭を淡々と進むと視界の隅に人だかりが見えた。

野次馬になる気は無い。僕は無視して横を通り過ぎようとした。

「おーい」



幻聴が聞こえた気がしたが、僕は足の速度を緩めない。

「ちよ、無視かよ」

聞きなれた声だったが、鼓膜がおかしくなったのだろうか。

近いうち耳鼻科に行く事を硬く決意した。だが、速度は緩めない。

「やっまとく〜ん」

「じゃかあしいわい！」

思ったより音量のあった僕の声に大袈裟に反応する兄の姿を見ながら肩で息をする。

周囲の人間もその行動を停止してしまっている。

あ、反応してしまった。

「なんだよ。聞こえてんじゃん」

人だかりの中心に居た兄が少しだけ寂しそうにこちらを見詰めている。

そんな、どこぞの魔物みたいな表情をしても仲間にはしたくない状況である。

俺と兄のやり取りを見て周囲の生徒達は視線を、俺と兄に対して交互に動かした。

「………帰る」

「待ってくれよ」。あ、ごめんね」

周囲の人間をやりわり押しつけてこちらに歩み寄ってく兄から逃げる術は無い。

以前、強行的逃亡を試みたが兄に一瞬で追いつかれてしまった。

満面の笑みで、しかも大声で、やっまとくくん、といいながら追いかけてくる様を思い出しただけで身震いを禁じえない。

「なんで、逃げるかな」

「朝言ったよね」

「ん？ 何を？」

と、鳥頭が。

完全に忘れてしまっている様子の兄に思わず手が小刻みに震える。

「……学校では馴れ馴れしくしないでって言ったでしょ」

「そんな事も言ったような気が、しないでもない」

「……言いました」

「そかそか。でも、別に馴れ馴れしくして無いじゃん」

「いや、してるでしょ」

「え〜？ 声かけて、話してるだけで馴れ馴れしいの？」

「最初の、やっまとくくん、がまず駄目でしょ」

「え？ 何が駄目？」

「だから、やっまとくくん、って」

「ん？ もっかい言って」

「……わざとでしょ」

「ばれたか」

やっちゃった、と言わんばかりの表情に苛立ちを覚えます。

こ、この兄は何を考えているのか。

「ごめんごめん。考え無しに声掛けた訳じゃないんだけどな。俺の友人を紹介したくてさ」

「いいよ。気まずいし」

「まあ、そう言うなよ。家には連れて行けないから、今迄紹介する

機会無かつたし」

兄は結構強引だと思う。だけど、無理やり連れて行かないという事は兄の配慮があつての事だろう。

そんな風に言われたら断るのも難しい。兄の頼みだし。

「……解つたよ。紹介だけね。すぐ道場行くから」

「ほいほい。本当、剣術馬鹿になっちゃって」

「唯一の趣味だからね」

「まあ、俺としては嬉しいけどな」

柔らかい笑みを浮かべる兄に母の姿が重なる。

優しい、人を落ち着かせる表情をする兄は母の血を受け継いでいる事が容易にわかる。

俺の思考は露とも知らない兄に手を引かれて、友人たちの所へ連れて行かれた。

人だかりは何時の間にか解散している。兄が居なくなった所為だろうか。

今は三人の男女が立っていた。

「お〜い」

「もしかして前に言っていた弟か」

「そそ。俺の弟の大和。こっちの無表情君が山田樹、んで、このニヤニヤしている子が三枝瞳、んで、あの睨んでるのが瀬戸絵梨ね」

「黒井大和です。どうも」

ぺこりと頭を下げ挨拶をする。

長身の眼鏡を掛けた山田さんが無表情でこちらを観察してくる。嫌いな視線だ。

表情の動きが少ない所為か、綺麗な顔の造りをしているはずなの

に、無機質な銅像のような造られた美しさを感じさせた。

「へー、そう言われればなんとなく似ているかも」

「なんとなくじゃない。激似だ」

「……ブラコン」

三枝さんは呆れた表情をしている。肩まで伸ばした黒髪は手入れが行き届いており、清廉さを強調している。まあ、中身はわからないけど。

整った容姿は人を惹き付ける愛嬌も持ち合わせていた。

「なんかぱつとしないわね。本当にあんたの弟？」

「……よ」

瀬戸さんの言動に突然俯き加減になる兄。やや、気が強そうな吊り眼。整ってはいるが周りに対して威圧的な態度をとっているように思える。成る程、如何にもな容姿をしている。恐らく普段から、悪態を付いているのだろう。彼女からしたら軽口のもりなのだろうが、内容と対象が非常に不味い。

やばい。発作が起きたな。

「耳塞いでください」

「む？ こっか？」

「え？ あ、うん」

山田さんと三枝さんに警告を発する。

真剣な僕の表情に素直に応じた二人に頷いて返答した。ただ一人瀬戸さんには僕の声は届かなかったようだ。

「え？ 何？ なんか言っ」

「ざけんじゃねえ！ 大和が、ぱつとしないだと！ 馬鹿か！ 超可愛いだろうが！ いやむしろ、可愛がりたいたらうが！ 何？ 何言っただの？ 大和の何処見て言っただの？ 眼が腐っちゃってるんじゃないの？」

あゝ、五月蠅い。

余りの五月蠅さに、瀬戸さんは地面に尻餅を付いて耳を両手で覆っている。

兄はなんでも出来る。それは自身の努力によって培われたものだ。以前、沈みながら兄が帰宅して来た事があった。

友人に音痴だと言われた事がショックだったらしく、その日から毎日川原で歌の練習をしていた兄の後姿を思い出す。

川原で、歌の練習って。今思い出すとおかしいな。

その苦勞の賜物が、歌唱力とこの声量である。

完全に切れてしまっている兄に、おろおろとしている瀬戸さん。やれやれ、と嘆息する。

「兄さん。もういいから」

「は？ 良い？ 何が良いの？」

「僕は気にして無いし」

「俺が気にするの！」

「僕がいつて言ってるんだけど？」

「……すみません」

僕の言葉にしゅんとする兄を尻目に、友人達に振り返る。

「すみません。兄がご迷惑をおかけして」

「む、いや、気にするな」

「ちょっと吃驚した」

「……ど、どうってことないから」

瀬戸さんは完全に平静を保って居ないがそれに気付かない振りをして兄に振り返る。

「兄さん。友達に迷惑掛けちゃ駄目でしょ」

「う、ごめんなさい」

「じゃ、僕は帰るから」

「あ、ああ。又後でな」

友人達にも一応頭を下げて道場へと向かう。

「海斗のあんな姿は初めて見たな」

「仏の顔も三度までって言うけど、海斗の場合は大和君の悪口は一度で限界みたいね」

項垂れている様子の兄を見て会話は進む。

未だに少しだけ震えている瀬戸さんが不意に誤魔化すように呟いた。

「……こ、怖がって無いから」

「だれも、聞いてないが……」

瀬戸さんの強がりには山田さんに一蹴された。

強情なのも態度だけだけど。

そんな会話も聞こえなくなる位置まで来てふと思いつく。

兄にはいい友人が居るみたいで安心した。ただ、それだけだった。

明鏡止水、という言葉がある。本来、心が澄み切った状態などを表す言葉だが、剣の世界では少々異なる。対峙した相手に対し邪念を含まない心鏡で写し捕らえる。すると、僅かな感情も感じ取ることが出来、どのような行動を取ろうとも対処が出来る、という物。

発祥は中国の莊子らしいのだが、僕の通っている道場ではその明鏡止水を掲げている。

ちなみに師匠の苗字は明鏡、だ。完全な日本人。

改名した訳ではなく、昔からその名だったらしい。

まあ、わざわざ明鏡と言う名に改名する事由があるかは疑問だし、それが通るとは思えないからその通りなのだろう。

ちなみにだが、僕が通っている高校の名前と併せると明鏡止水になる。

止水学園の創始者と明鏡の曾々爺さんが仲が良かったとかなんか。その繋がりは今でも続いているらしく、師匠と学長は仲が良いみたいだ。

心を沈め、邪念を払う。

そんな事が出来れば苦勞はしないのだが。

胴着に身を包まれていると不思議と心が落ち着く。

洋服とは違い、引き締まった思いを感じるのは、何故だろうか。

それでも、明鏡止水には遠く及ばないのは解っていた。

腰に携えた刀には違和感が無い。道場では常に帯刀する事を余儀無くされている。

常に携える事で違和感を失くす為らしいが、現代に必要な事かどうかは疑問だった。

ちなみに僕が持っている刀は師匠のお下がり。学生の自分が買う

には些か高価すぎるからだ。

「たるんどる！」

それ程広くない道場に迫力の籠った怒号が響き渡った。半眼を開くと師匠が道場の真ん中で腕組をしながら戸を凝視している。

まるで鬼の形相と表現しても相違無い。強面の上、そんな表情をしようものなら、子供ならば泣いてしまふと思つう。

「何故、来んのだ」

苛立ち、と呆れを同時に感じさせる言葉。その気持ちも解る。

なんせ、道場には今は僕一人しか居ないのだから。

古臭い形式に捕われた剣術道場が流行る筈も無い。それでも、年に数人は希望者が来るのだが、如何せん、この師匠だ。

厳しさを全面に感じる雰囲気を出している師匠に着いて行ける、若しくは着いて行こうと思つ若者が然う然う居る筈も無く、閑散とした道場となつてしまつている。

かく言つ僕と言えば、性分に合つていたみたいで、一番の古株になつてしまつている。それでも五年くらいだけだ。

ちなみに師匠を憤慨させている原因はもう一人の門下生にある。

たぶんもう来ないと思つけど。

入門初日で、素振りを只管させて、常に叱咤されれば逃げたくもなるだろつ。本気で剣の腕前を上げたいつて人なら別だけだ。ちよつと体験してみたいつて感じだつたし。

半眼で師匠に視線を送る。



初老と言える年齢だが、その体軀は年齢相応ではない。

引き締まった身体は長い年月鍛錬を続けた結晶であることは明白だった。

眼光は鋭く、睨まれただけで身が竦みそつだ。まあ、僕は見慣れているんだけど。

「……止め！」

もう来ないと気を取り直したのか俺に指示を飛ばしてきた。

道場の壁に掛けられた時計を見れば最初に言われた通りの時間だ。その言葉に倣い俺は瞳を緩慢に開く。

「続いて、居合だ」

「はい」

「座りで始める。刀を」

座りとは、正座の状態という事。着座した状態からの抜刀を行う。他には立ち居合があり、そのままの意味で立った状態からの抜刀を行うって訳だ。

基本は鞘から放たれる一の太刀、つまり初撃の居合いで相手の攻撃を受け流すか加える。受け流した場合その流れの二の太刀で相手を斬りつける。明鏡流において基本稽古の一つだ。

元来、明鏡流は後の先を取る事を主にしており、正眼、八双、居合、脇構、霞の構えで構成されている。特に居合いは重点的に稽古を重ねてきた。居合いの明鏡と、言われている所以か。それは正しくないか、飽くまで、言われていたという表現が正しい。今は、こんなに廃れているし。

俺は腰に据えた刀を意識し、師匠の言葉を待つ。

張り詰めた空気に引き締まる。

いつでも反応できるよう神経を研ぎ澄ます。

「始め！」

声に体が反応する。

鯉口を切り、右足を正面に踏み出すと同時に、鞘から刀を抜く。

そのままの軌道を維持したまま逆袈裟で正面を薙いだ。

刀の風斬り音が耳に木霊する。

次いで、左足を踏み出し、左肩越しから袈裟斬りを放つ、これが二の太刀である。

「遅い！ 納刀！」

すぐさま納刀し、屹立する。

呼吸を出来るだけ押さえ平常を保つ。

「始め！」

先と同じ様に抜刀すると同時に逆袈裟を放つ。腕を伸ばしきつた反動のまま納刀した。最初はこの納刀に苦労した物だ。最初はゆっくり、徐々にその速度を早くし、今では一呼吸の間に全てを終える事が出来るようになっていた。

何度、腕を切ったか覚えてないけど。

「止め！ ふむ、駄目じゃな」

それでも、師匠には認められないけど。

「拳動がぎこちない。抜刀する瞬間が手に取る様に解る。脱力がまだまだだな。あとは力を入れすぎて刀の軌道がずれとる。刀の動き

を邪魔しとるな」

「すみません」

「まあ、数年前に比べると格段には良くなつとるよ。日々精進じゃな」

「はい」

「それじゃ、試合稽古でもするかの」

「うっ……はい」

顎に手を当てながら、ほくそ笑む師匠に言葉を呑んだ。

師匠に勝てるのは数十回に一回くらい。大体が圧倒されて終わってしまう。それでも、なんとか対抗できるくらいには腕前は上がっている、はずなんだけど。

また、今日も体に痣が出来そうだ。

少しずつ、強くなっている。その感覚は嫌いじゃなかった。痛いけど。

\*\*\*\*\*

「また、えらい絞られたみたいだな」

「毎度の事だけどね」

自宅に帰つての第一声はいつものような兄の言葉だった。

最初の内は心配して、道場に殴りこみに行きそうな程怒り狂っていた兄だったが、今では比較的冷静だ。

まあ、それでも、心配そうなのは変わらないけど。

帰りに寄ったコンビニで買った弁当を脇に置く。兄が目聡い視線

を送っていたが気が付かない振りをした。

毎回の事ながら、リビングで傷の手当てを行ってもらう。自分で出来るからと断った事もあったが、断固として兄が譲らなかつた。今では半ば諦めて為されるがままになっている。

「沁みるね」

「もっと、感情を込めてくれると兄も嬉しいぞ」

「痛いよ？」

「いや、なんと言つか、あるじゃん？ いってえよ！ とか、若干痛がりながら、沁みるよお兄ちゃんとかさ」

「兄さんの弟願望が怖いです」

「あ、敬語はやめて？ マジで傷つく」

短い嘆息。もう慣れたとは言え、受容した訳では無い日常風景。

兄は、いつからこれ程、僕に過保護になったのだろうか。

「ん、出来た」

「ありがと」

「おう。けど、前に比べると傷は少なくなってきたな」

「少しは強くなってる、筈だからね」

「そうか」

嬉しいような、寂しいような表現し難い表情を浮かべる。

まあ、自分の家族が毎回傷を負って帰って来ては余り気持ちの悪い物では無いだろう。

それとも、僕が剣術を続ける事を余り良く思っていないのかもしれない。たぶん、それは合っている気がする。

「ただいま」

嫌なタイミングで帰ってきたらしい、同居人が笑顔で言葉を放つ。僕にはではない。明らかに視線は僕を無視して、兄にのみ向かっている。

母、とは言えない。その同居人はその足で台所へと向かった。

「海斗君、今日はハンバーグよ。あなた大好きよね？」

「え、ええ。大和も好きですよ」

「あっそう」

兄の乾いた笑いがりビングに響く。

僕は凍り付いていく感情をそのままに二階へと向かった。

「お、おい。大和」

兄の言葉を完全に無視して足は動く事を止めない。

迂闊だった。あいつと顔を併せるなんて。

滲んでいく嫌悪感を拭えず、洗面のまま、部屋に入り、ベットへと寝転がる。

浮んでくる黒い感情に身を任せれば楽になれるのだろうか。だが、それでどうする。

解っている。僕は逃げられない。この状況を変える力はない。だから、耐えるしかない。例え何を言われようとも、されようとも。

突如腹の虫が鳴り、空腹であった事を思い出す。学校から道場へ直行。その上激しい稽古の後となつては腹も減る。

無機質なビニール袋から弁当を取り出し一口食べる。美味しいとは思えなかった。

### 日常 3

退屈な日々を繰り返していた。

学校に通い、道場に通い、帰宅、そして就寝。その繰り返し。

何の変化も無く、感情が揺さぶられる事も少ない。

僕が望んだ日常。幸せではないが不幸でもない。安穩とした日々。

入学から一ヶ月ほど過ぎた。

今は休憩時間。辺りは喧騒に包まれ、否が応にも騒音が耳に入ってくる。

不快な時間だった。

少しでも気を紛らわそうと暇つぶしにはなるだろうと購入していた本を取り出す。

「一人でも出来るサバイバル術」とやや矛盾した表題の書籍に眼を通す。

中身は意外にも実用性に長けた内容になっている。火の起こし方から、獲物の摂り方、果ては護身術の類まで。必要なかどうかは甚だ疑問だったが雑学としては面白いと言えるだろう。恐らく、一生使うことは無いだろうけど。

「ふざけてんの？」

自分の位置を探す、応用編まで読み進めた所で怒号が教室内に響き渡った。

気にせず続きを読む。太陽の位置で位置を把握する方法に眼を通す。こういうのは中途半端が一番不味い。最後まで読んで居ないことには役に立たないからな。

「別に、ふざけてないけど」

「ふざけてんじゃん！ 生意気言つて」

鼓膜を揺らした言葉に少しだけ反応する。

端目で教室の後方に居る、騒ぎの中心人物に視線を移す。

以前僕に噓けて来た、えと、名前なんだっけ？ 茶髪ショートでいいや。が、仁王立ちで腰に手をやり相手を威圧しようとしているみたいだ。

また、あいつか、よくも飽きもせず同じ事を繰り返すもんだ。

茶髪の後ろには黒髪、金髪が陣取っている。更に、何故か男子生徒、基、不良っぽい奴等も数人居た。下僕が増えたのだろうか。

数人に囲まれている所為で、責められている生徒は見えなかった。

「なんで、そんな事しないといけない訳？」

「は？ そんなの私が頼んでるからに決まってるじゃん」

自己中心的。地球は自分を中心に回ってる、か。どこのお姫様の考えかは知らないが、余程温室で育ったか、或いは、自分に相当の自信があるのか。まあ、根拠の無い後者と併せて前者って所か。最近の若者に多い考え方だな。……僕も若者か。

「意味が解らないんだけど。承諾する理由になつて無い」

「理由とか、何？ 私が生徒会に入れるよう推薦すれば良いじゃん」

「はあ、理解力の乏しい人との会話って難しいわ……」

成る程。騒動の原因は解った。あの茶髪が生徒会に入れるよう無理やり要求しているのだらう。ここからじゃ、相手は良く見えないが、恐らく役員の誰かか。兄さん目的なんだろうけど、ある意味一途とも言えるが、傍迷惑なものだ。

微妙に怯えを含みながらも、減とした口調に些か好感を持つ。一女生徒があれだけの人数に囲まれても怯む様子が無いのは驚嘆に値

する。ただ、処世術に長けているとは言いがたい。真つ向から衝突して、どうやってこの状況を打破するつもりなのか。

「あなた……」

空気が変わった。あれは、逆鱗に触れたか。

最後の言葉は完全に見下した上、罵倒している。あれで傷つかない誇りは持っていないだろう。特にプライド高そうな茶髪には。

野次馬と化していた同級生の面々は騒動を止める気は無いらしく、距離を取って傍観している。まあ、僕も同じなんだけど。正直、面倒臭い。

「なに、こいつ。一発殴つとく？」

茶髪の後ろに立っていた、悪趣味なピアスを付けた不良が下卑た笑いを浮かべながらそう言い放った。

隣に居た、やや体格の良い坊主の不良もそれに続いて、拳骨を作りこれ見よがしに指の関節を鳴らしている。相手を威圧しているつもりだろうか。

周囲の生徒達は萎縮してしまっている。見てみない振りを決め込むつもりだろう。

その時始業の金が辺りに鳴り響いた。と、同時に扉が開く。

「よし、お前ら席に、ってなにやってるんだ？」

「何でもないです」

教室に入ってきた先生に一言言つと茶髪は先程まで対峙していた相手に何やら耳打ちをして席へと付いた。それに倣って取り巻きも席に着く。

後に残されたのは、少しだけ項垂れ不快そうな表情の瀬戸絵梨だ



けだった。

\*\*\*\*\*

さて、どうするか。

僕は、葛藤していた。

以前紹介された、兄の友人がまさか同級生だったとは想像していなかった。というか、この一ヶ月それに気付いても居なかった訳だが。

まあ、瀬戸さんは休憩時間も教室に居ない事が多かったから仕方がないかもしれない。僕が周りに興味を全く持っていないのが一番の原因だけど。

閑話休題。

僕の悩みはそこではない。

終礼の後の出来事がその一端だ。

茶髪達に連れて行かれた瀬戸さんを見てしまった。

生意気な奴に制裁を加えろとか、安直な考えの下だろう。

抵抗する瀬戸さんを無理やり連れて行く茶髪達を止める者は一人もいなかった。傍観者を決め込み、見なかった事にする。それは恐らくは賢い選択だろう。誰だって、火種に近づきたくは無いらしく、関わりたくない。教師を呼べば一時的解決にはなるだろうが、少なくともこの一年は同じクラスなのだ。報復がある事は明白だろう。間違っっては居ない。自分の身を守る為なのだから。

「瀬戸さん、大丈夫かな」

「先生呼ぶ？」

「やめとけよ。ばれたら、お前、どうなるか解るだろ？」

まだ、マシな方だろうか。少なくとも、安否を気にするだけの言葉は聞こえた。

だが、それも表面上だけ。結局は何も行動せず、言い訳をする。そして、帰宅するのだろうか。仕方ないのだろうか。

だけど、腹の底から湧き上がるのは不快感だけだった。

正直、僕も他人の為に動く気には成らない。だけど、仕方ないみたいだ。兄の友人を放って置けはしない。

僕は嘆息を付きながら席を立ち、下校する生徒達と共に、校舎を後にした。

校庭に出ると外は夕日に照らされほんの少し幻想的に彩られていた。

この時間は嫌いじゃない。一日が終わる兆しが見えるから。朝の絶望感は薄れる。

立ち止まりそうになる足を無理やり動かし校門へと流れる人波から逸れ、体育館へと足を動かした。

この学校は中々に広い。この時間になると部活動に励む生徒が増えるが、それでも死角というものは存在する。有り体に、体育館裏、校舎裏がその場所だ。しかし、今の時間、人気が無いのは体育館裏の方だろうと目星を付けて来て見たのだが。

「な、何すんのよ！」

当たりだったらしい。まだ少し距離は在るが瀬戸さんらしき声が聞き取れた。

「生意気な奴にはお灸を据えないとね？」

不味いな。走るか。

今にも始まりそうな口調に焦燥感を抱く。正直、気は進まないが、ここまで来て踵を返す気は毛頭無かった。

今は素手。得物は無い。女生徒は数に入れなくていいだろう。なら、相手は二人か。自分より明らかに体格の良い相手。

「んじゃ、一先ず剥いところか？」

何処の世界にも屑はいる。

育った環境？ 親の教育？ 不幸な事情？ そんなのは言い訳だ。世の中、上を見ても下を見ても限が無い。だが、幸不幸問わず誠実に生きている人間は居る。僕は知っている。正義感なんて大層な物は持っていない。ただ、不快だった。

「いいね。ここなら、誰も来ないだろうし」

「や、やめて」

瀬戸さんの言葉には明らかに怯えが含まれていた。

「何してんの？」

僕の言葉に一斉にこちらに視線が集まった。

瀬戸さんを取り囲むように五人が位置取っている。不良の一人が瀬戸さんの腕を掴み今にも襲い掛かりそうな状態で硬直している。その様は僕の心を余計にざわつかせた。

「別に何でもねえよ。失せろ」

「そう。何でも無いなら、そっちが失せたら？」

「……あ？」

不良が目配せで合図した。不良の代わりに茶髪が瀬戸さんを拘束する。

「お前、あゝ、教室でいつつも一人で居る奴じゃね？」

「ああ、オタクだろ。いつも本読んでる」

「そいつもムカつくんだよね」。兄貴に免じて見逃してあげてただけど」

薄ら笑いを浮かべこちらに滲み寄ってくる。

真っ向から対峙するのは少々不利なのだが、まあ、些細な事だ。

「そいつもやっちゃって」

「おっ」

さてどうするか。

命のやり取りをする訳では無いし、瀬戸さんを人質に取られている、という段階でも無いだろう。精々が殴打するのが限界。ならば、問題は無い。

ピアス不良がこちらに歩いてくる。こいつは素人だな。

後ろの坊主不良の方は動く気は無いみたいだ。こっちの方が格上みたいだな。体格も中々良い。僕の身長は百六十一寸くらい。体格に恵まれているとは言えない。ピアス不良は百七十後半、やや痩せ型。体はそれなりに引き締まっているのを見ると中学時代も喧嘩に明け暮れていたのかもしれない。坊主不良は身長はピアス不良と同じくらいか。だが、体格はかなり良い。こいつは自宅でも鍛錬しているか何か格闘技でもやっているみたいだな。

次第に距離が縮み、ピアス不良が不意に前蹴りを放ってきた。鳩尾に向かって放たれた蹴りを真っ向に受け、僕の体はくの字に曲がる。

「なんだ、やっぱ口だけか」

「あんたが？」

「あ？」

僕は左腕で体を守り、右手でピアス不良の足を掴んでいた。その体勢から、体を左方向へ捻りながら、足を掴んだまま、回し蹴りをピアス不良の顎へと放った。

「あがつ」

外れたかな。まあ、それくらいは我慢しような。

地面をのた打ち回るピアス不良が邪魔なので鳩尾に正拳を食らわせ、静かにさせた。結構コツがあるんだこれ。力加減を間違えると致命傷になるし。

死んだように静かになったピアス不良と僕を唾然と見る面々に視線をやる。

「で？ まだやる？」

「……格闘技経験者か」

「まあ、徒手は専門じゃないけど」

剣術を学ぶという事は徒手訓練も行うと同義だ。素手で戦う事も多くなる事を想定しているから、当たり前なのだけけれど。

「……古武術、か？」

「へえ、少しは知っているみたいだね」

「齧った程度にはな」

まあ正確には違うけど。

坊主不良はそう言い、構える。脇を締め両拳を顎付近に持つていく構えはボクサーか。キックかシユートなら少し厄介だな。

ステップを踏んではいないし、半身では無い上に前傾姿勢であるから、ムエタイでは無いな。恐らくはボクサー。インファイターである事は明白だ。

それなりにやってそうだが、なんでこんな人が茶髪の下僕なんかやってるんだらう。

とりあえず、闘争の意思を汲み取って、僕も構える。

半身になり左腕を腰より少し高めに構え、右腕は拳を軽く作り、顎下で止める。

若干膝を柔らかく、重心を後ろに置く。

明鏡流徒手術。江戸から現代に至るまで様々な流派から得た知識を流用したのが今の明鏡流。古くに捕らえられる事無く、様々な進化を経て今の形になる。現在は、やや、フットワークを生かした形になっているため、重心を据え置くことはせず柔軟に膝で衝撃を抑える形が主流になっている。僕もこの構えが気に入っている。体格が恵まれていない僕にとって機敏に動ける構えは望む所だった訳だ

が。

ちなみに今構えている型が流水の構え。攻防優れているが、決め手に掛けるという、器用貧乏な僕にとっては最適なものだろう。

徐々に距離を詰めて居る双方。突如、坊主不良が動いた。中々に早い。

ステップと同時にジャブを放ってくる。僕は左手でそれを払い落とすと同時に屈みながら一歩踏み出す。僕の拳動にやや驚きながらもすぐに反応しストレートではなく右のショートアッパーを繰り出した。

だと、思った。

僕の予想通りの軌道に思わずほくそ笑む。

やや、内に向かった拳を更に屈み避ける。顔が地面に触れる寸前に右足で体を支え、無理やり体を引き起こしながら、掌底を坊主不良の喉へ放つ。

速さを重視したため威力は劣るが、急所を攻撃されては抵抗する事も出来ないだろう。

突然の喉の圧迫に呼吸困難に陥った坊主不良の顔面に間髪居れず後ろ蹴りを放つ。革靴の底は意外に固い。鼻血が噴出している。鼻骨、折れたかな。

呼吸困難の上に鼻の機能を満足に出来ない所為か若干パニックに陥っている坊主不良に近づく。

膝を折り地面に這い蹲る坊主不良を見下ろす。

「あゝ、大丈夫。落ち着いて何度か深呼吸すれば元に戻るから。死にはしないよ」

落ち着かせるために少しだけ笑顔を見せたのだが、逆に怖がらせてしまったのか、後退りしながら僕から離れようとしていた。

何が駄目だったんだろうか。

「さてと」

茶髪に視線をやる。

女生徒全員、完全に萎縮してしまっているようだ。瀬戸さんも含めて。

一寸、やり過ぎたかも知れない。

どうも関節技は苦手で、打撃を重点的に鍛えているため、どうしても、円滑に事を収められない。まあ、僕がやり過ぎた感はあるけど。

茶髪達に近寄る。蛇に睨まれた蛙のように硬直してしまっているようで、視線だけは僕から離せ無いみたいだ。

「で？ どうする？」

「ひ、あ、えと」

「僕、こう見えて男女平等主義なんだ。やるって言うなら、構わないけど？」

女だろうが、男だろうが関係無い。弱い者になら手心を加えるのは有り得るだろう。その考えから、老人、子供、女性を労わるという思考に至っている。だが、女性は弱者であるという考えには賛同しかねる。少なくとも現代では虐げられているという事実は男女共に存在し、また虐げる方も同じ。男でも女でも加害者に同情の余地は無い。

ただ、一方的に甚振るのは僕の趣味ではない。だからこそ、抵抗の意思を確認した。

僕の態度から察したのか、恐怖からか、勢い良く首を横に振る三人に苦笑してしまう。

「じゃあ、二度と瀬戸さんと僕には関わらないようにする事だね。



次は無いから」

そう笑いかけると、小刻みに震えながら立ち去った。坊主不良が気絶しているピアス不良を抱えてこの場を去った。意外に仲間思いなのかな。しかし、三馬鹿が全力で走っていったのが気に掛かる。そんなに怖かったかな？

嘆息する。

なんだか酷く疲れた。身体的には無い。精神的に。

どうも、性に合わない事はするもんじゃないな、と少しだけ反省した。

「あ、あの」

「ん？ 何？」

ああ、そう言えば、肝心の瀬戸さんの事を忘れていた。

目的である彼女の事を失念している自分に内心、苦笑する。

改めて実感したのは、それ程興味が無いんだな、という事だった。瀬戸さんに、では無く、他人に。

「ありがとう」

「ん、別にいいよ。気まぐれだし」

何気に初対面の時は敬語で離していた気がするが、まあ、それも変だろうと思い、普通に話した。

特になんの感慨も無く、淡々と。

「じゃあ、気をつけてね。あの三馬鹿はもう関わって来ないとは思  
うけど」

不良達に置いては解らない。

ああいう輩は存外しぶとい。そして学ばない。プライドだけは異常に高かったりするから厄介だ。報復に来ないとも限らない。

「う、うん」

「なんか、あつたら……兄さんに言つといいよ」

「海斗、に？」

「僕より、兄さんの方が強いから」

「そうは思えないけど……」

「それじゃ」

有無を言わず帰路に着く。

瀬戸さんの言いたい事は解る。

普段の兄を見ていたら僕の言葉は信用できないだろう。

だが、肉体的にも、精神的にも兄に勝っている部分は僕には見当たらぬ。

若干、自虐的だったかもしれない。

「あ、ちよつと待つてよ」

慌てて、追いかけてくる瀬戸さんの言葉には一切振り返らず歩を進めた。

## 変わり行く日常 1

「二つお願いがあるんだけど」

「え？ あ、なに？」

肩口に振り返り、後ろに居る瀬戸さんに声を掛ける。

「今日あった事は誰にも話さないで欲しい」

「……………どうして？」

「色々、面倒臭いから」

噂は直ぐに蔓延する。特に高校と言ったらその最たる物だろう。他人の恋愛事情、家庭の事情、口火を切れば瞬く間に広まる。

自意識過剰かもしれないが、目立つのは避けたかった。他人と関わるのはごめんだ。

「……………解った」

「あと一つ」

「なあに？」

「これを機に僕に話しかけたりしないで欲しい」

「はい？」

ぶつちやけどれだけ自信過剰なんだよ。と言われても仕方ないが。後顧の憂いは絶っておきたい。

オタクと呼ばれている（これはさつき始めて知ったけど……………）僕と、少々近づき難い雰囲気を持つが間違い無く美少女である瀬戸さんが仲良くすると色々不都合が起こる。というより、面倒臭い臭いがぶんぶんする。

「だから、今日の事は無かったかのように振舞って欲しいって事」

「意味が解らないんだけど……」

「僕は一人で居たいんだ。友人はいらない。それだけ」

「……そう」

「そう」

「無理に話す気は無いけど」

「なら、良かった」

瀬戸さんの返答にほっと胸を撫で下ろす。

これで大丈夫だろうと安堵した。

「じゃ、さよなら」

「さよなら……。って、え？」

別れの言葉を継げそそくさと帰る僕。

呆気にとられたようにその場に立ち尽くす瀬戸さんを尻目に帰路へと行く。

いやいや、良かった。これで、なんで、と問いただされでもしたら面倒な事この上なかった。

胸につつかえた不安を払拭出来たと満足げに頷いた。

\*\*\*\*\*

「……予想の斜め上に行くね」

深い溜息を一つ。

周りを見渡しして再び溜め息を出す。

「で？ 何の用？」

「言わなくてもわかんたろが」

ピアスは明らかに怒りを含んだ口調で居る。

今は、放課後。帰宅途中の比較的少ない路地で僕は通せんぼされていた。

まさか、昨日今日で報復に出てくるとは思わなかった。

ピアスは顎に大き目の絆創膏を張っている意外は五体満足で居る。どうやら、お灸が弱かったかな。

坊主不良は居ないみたいだ。とすると、こいつの単独か。

とは言え、正面に立ち塞がっているのはピアス以外に五人居るが。

「昨日の今日で報復とは、単細胞と言うか、何と言うか」

「ああ!？」

「何こいつ。マジムカつく」

「淳ちゃん。やっちゃおうよ」

「ああ。マジボコる」

淳ちゃん、と呼ばれたピアスが怒りの形相でこちらを睨みつけている。

後ろの五人の内四人は屈強とは言え無いが、僕よりは体格が良い。

まともにもやり合えば、まず間違いなく負けるだろう。

如何な格闘技の達人であろうと、数人に囲まれば勝てない。当たり前前だ。こちらの一手はあちらの六手なのだから、余程上手く立ち回らなければ勝てる筈も無い。まともにも立ち会えばの話だが。

あとの一人は……こいつはやばそうだ。

「じゃ、そゆことで」

「は？」

ピアスの返答を聞かず一目散に後方へと逃げる。

「ちょ、待てや！ コラ！」

僕に釣られて六人が後を追いかけて来た。

いやはや、単純ですね。

ここは僕の通学路だ。勿論、道は知り尽くしている。普段通る道を外れてもある程度なら把握しているから、地理は味方だ。念のため、付近を探索していて良かった。

暫く全速力で走り続ける。

こう見えて、体力には自信がある。

毎日の鍛錬に加え、自主トレも欠かさず行っているから、そこいらの不良に負けはしないだろう。

このまま人通りの多い、大通りに出てもいいが、その気は毛頭無かった。

後ろを振り返ると、既に三人脱落していた。

運動不足か或いは煙草でも吸っているからだろう。

僕に着いて来る三人の内二人は余程辛いのか表情に出てしまっている。足が止るのも時間の問題かな。ちなみに二人のうち一人がピアスだ。

あとの一人は。

「こいつは、撒けそうに無いかも」

足が速いとは言えないが、明らかに余力を持っているのが分かる。

僕も体力には自信があるが、それ程足が速い訳ではない。まあ、そういう鍛錬はしていないし。

という事は、相手も同じ穴の貉、か。  
同業者かな。

とりあえず、脱落しそうな二人を撒く為に暫く走り続けた。

「ここで、いいかな」

少し手狭な公園で足を止めた。

「もう、逃げねえのか」

「ん。あんたは撒けそうに無いしね」

「はっ。最初からそのつもりだった癖によ」

「あ、分かった？」

振り返るとそこに立っていたのは大柄の男。制服である事から高校生なのは間違いない。

短髪に威めしい顔の造形は見るものを圧倒する。

幾らかの修羅場を潜ってきているのか、滲み出る空気に圧迫感を感じた。

身長は百八十はありそうだ。捲っている袖から見える腕は鍛え上げられている。

これは、苦戦しそうだ。

「おい。マジでやんのか？」

「そのつもりだったんじゃないの？」

「あゝ。まあな。頼まれちゃったし、断れなかったからな。気は進まないが……」

「あ、そう」

あれ、意外に良い奴なのかな、こいつ。  
しかし、あんな奴に頼まれて断れないなんて。なんたる、茶髪の  
時も思っただけど、なんで従うのかな。

「正直一方的に甚振るのは好きじゃない。お前が大人しく淳に謝る  
なりしたらそれで済むと思うんだが」

「それは無理だね」  
「プライドか？」

「まあ、あんなカスに謝るのは確かにプライドが許さないけど。そ  
れだけじゃなくて、何の解決にならないからね」

「……少なくともリンチは免れるだろ」

確かに僕自身はどうにかなるかもしれない。正味な話、その後も  
同じクラスで生活するんだから、まともな学校生活では無いだろう  
けど。

だが、そんな問題でも無い。

「そうかもね。でも、まあ、僕だけの問題でも無いから」

「よく分からんが、やるしかないってことか」

「そゆこと」

「……冷静な奴だな」

面倒臭いけど。仕方が無い。

僕は流水の構えを取る。相手の出方が分からない内はこの構えが  
妥当だと思えた。

対して、相手は中腰に構え両拳を正面に構えている。

厄介だな。

ボクシングのファイティングポーズとは違いやや柔軟に両手を開



いている構えは、恐らく。

「総合格闘技……」

「柔術だがな」

余計に厄介だ。

打撃を中心とした古武術である、明鏡流の弱点は寝技にある。

柔術と言えば打撃が弱い、寝技に特化している格闘技。相性が悪すぎる。

どうする。組み付かれたら、そこで手札が一気に殆ど無くなってしまふ。

体格で劣る僕が、持ち直すのはまず不可能だろう。

ここはルールで縛られた試合ではない。禁じ手と呼ばれる技もあるが、如何せん急所を突く攻撃が殆どな為、相手に深い傷を負わせてしまふ。それでは、遺恨を根ざしてしまふし、不快だ。

突如僕の思考が停止した。

男が動く。何時の間にか距離を詰められていた。

内心する舌打ちをする。

低めの体勢のまま足に組み付こうとする相手の肩に手を据え、正面へと前方宙返りをする。

捻りを加え着地したと同時に相手を見据えた。

男は何時の間にかこちらに向き直っている。

「身軽なんだな」

「それは、どうも」

「見た事の無い型だな。拳法か古武術か」

「さてね」

会話をしている最中も相手から視線を逸らさない。集中する。相

手の拳動を見逃さない為に。  
辺りは再び沈黙で満たされた。

## 変わり行く日常 2

硬直状態が続き僕の中に少しだけ焦りが生まれた。

余り長引かせると他の不良達が追い付いてきてしまうかもしれない。

ここに来て二分ほど。そろそろ、辿りついてもおかしくは無い。ただ、これだけの時間が経っているのであれば、見失っている可能性は高い。希望的観測で言うと後、数分は持ちそうだと思う。

相手には余裕がある。

前後に体を揺らしタイミングを計っている。

僕もそれに対応し、体重を前後に映す。少しの動作でもフェイントにはなる。相手が、それなりに格闘技の経験を持っているなら尚の事。

お互い一步踏み込めば自分の射程距離になる。

嫌な感じだ。

相手は明らかに時間稼ぎをしている。

恐らく実力を図った上で、同じぐらいの力量と判断し、応援を待っているのだろう。

微かに浮かべた笑みでその意図が読み取れた。

気に入らない。

僕は突如動きを止めた。

お互い牽制し合っていた状態を、あえて隙を見せる事によって、相手の動揺を誘う。

一瞬。瞬きをすれば見逃すほどの一瞬、相手が動揺したのが見て取れた。

僕は体勢を低くし、大柄の男の足に組み付こうと足を踏み出す。その動きに虚を付かれたのか、前傾姿勢だった体を少しだけ仰け

反らせた男の膝に踵蹴りを放つ。

「うっ！」

大柄の男は、完全とは言えないまでも伸びていた膝に衝撃が走った事で、平衡感覚を失う。

皿骨を割るつもりで蹴ったんだけど、体格の差が激しすぎて予想通りには事が運ばなかった。

前に突き出した足を地面につける事無く体全体の回転で、そのまま回し蹴りを顔面へと振るう。が、すぐさま体勢を立て直した男が、右腕で顔を防御した。

体重を掛けた蹴りをいなす事が出来なかったのか、僕の蹴りで相手の上半身がぶれた。

その好奇を逃す手は無い。

回し蹴りの回転を利用し跳躍しつつ、反対の足で顔に向けて跳び蹴りをする。異様な速度でそれを避けた大柄の男に、続けざまに空中で回転蹴りを放つ。

だがそれも紙一重で上半身を前に倒す事で避けられてしまう。

経験則かそれとも余程眼がいいのか。どちらにしても回避を可能にしてしまう身体能力は眼を見張るものがあつた。

僕の体はもうすぐ地面へと到達する。そうすれば着地の衝撃で一瞬だけ隙が出来てしまう。

相手もそれが解っているのだろうか。前に屈んだ体勢から勢い良く顔を上げようとしている。

だが、僕はそのままの姿勢で着地するつもりは無い。

地面数十センチと言う所で構わず回転蹴りの流れで胴回し回転蹴りを上半身を起こそうとしている、男の頭に向けて振るう。

鈍い音が辺りに響く。

「三段蹴り、かよ……」

僕が地面に落ちる。一瞬の停止。数瞬後、糸の切れた人形のように男も倒れた。

大柄の男の上半身を起こそうとする力と僕の蹴りの力が合わさり、その衝撃は脳を揺らしたようだ。例え、堅固な頭蓋骨で守られていても。

それが執拗に顔面を狙った理由。体格の差が激しい為に、急所を狙わなければ相手を無力化できないと考えた為だった。

一連の攻撃を終え、止めていた息を吐く。

倒れこんだまま荒くなった呼吸を何とか収めて、男に視線を移す。全く動いていない。

内心冷や汗を掻く。

鼓動が早くなり、耳鳴りが激しくなっていく。今、自分の顔色は青ざめているだろう。

ひよっとして、死んだ……？

五月蠅いくらいの心臓をなんとか無視して、男に近づく。

見れば、呼吸はしているようだ。一応脈も計ってみたが、正常だった。

安堵の嘆息をする。

よかった死んではいないみたいだ。

軽度の脳震盪だろう。

相当の衝撃だったであろう攻撃も太い首で衝撃を吸収したみたいだ。

打撃系とは違って、寝技主体の格闘技は首が資本だから鍛え上げているのが幸いだった。

ほっとしているのも束の間。

辺りには慌しい足音が響きだしていた。  
追い付いてきたらしい。

「はあ、はあ……り、力也が」

漸く辿り着いたピアスが肩で息をしながらこちらを、いや、力也と呼ばれた男を凝視している。驚愕の表情を浮かべたピアスの方を見ずに体を起こした。

不味いかもしれない。

手狭な公園の入り口は二つ。それ以外は高い塀で囲まれている。乗り越える事は出来ないでも無いが、飛び越える事は出来ない。もたもたしている間に足を掴まれてもしたら、もう逃げられないだろう。

どうする？ 逃げるなら今しか無いけど。

一瞬の逡巡。

その迷いの内に後続の一人の足音が聞こえてきた。  
やるしかないか。

ピアスは仲間が加わった事で気が大きくなったのか、間違いない不良の中で最も強い力也を倒した僕に怒号を放った。

「てめえ！ マジ、殺す！」

「小物臭が凄いね……」

「なめんな！」

怒りの形相でピアスと仲間の一人がこちらに走ってくる。

一般の高校生だったら怯むかもしれないが、僕はそうではない。驚くほど冷静に相手を見据えた。

「やめろ」

力也の声が二人の足を止めた。  
見ると、何時の間に意識を取り戻したのか体を起こし、胡坐をか  
いている。

タフにも程があるだろ……。

「り、力也！　なんだよ、止めんなよ」

「お前達じゃ、こいつには勝てんよ」

「は？」

ピアスは力也と僕を交互に見る。

後ろの仲間も動揺しているのか同じ様な動作をしている。

「そんなヒョロい奴、余裕でボコれるって」

「俺に勝った相手に、か？」

その言葉にピアスは息を呑んだ。

明らかに僕と力也とは体格の差がある。その相手に僕は勝った。  
ただのヒョロい奴とは言えないだろう。

「さ、三人でやりゃ、余裕だった！」

「無理だな」

「は？　どんなに強い奴だって困んどまえば雑魚だろ！」

「少なくとも俺はやらない。趣味じゃないからな」

「何言ってるんだ、お前。俺に対する恩を忘れたってのか？」

「恩は返した。これ以上、馬鹿に付き合っているほど、俺は暇じゃ  
ないんでね」

あら、なんだ、これ。なんで仲違いが始まつちゃってるわけ？

まあ、正直、三対一じゃ勝てる気がしないから僕としては好都合

なんだけど。

察するに、力也は恩に報いる為にピアスに付き合っていたらしい。僕と戦った事でその恩は返したっていう事なんだろうか。

話を聞いていると、力也って奴はそんなに悪い奴じゃないみたいだけど、馬鹿に捕まっちゃったみたいだな。何の恩があるか解らないけど、律儀な奴。

「て、てめえ」

「やるか？ 俺と？」

圧倒的な強者と弱者の図がそこには描かれている。

力也を目の前に、腰が引けている時点でその勝敗は決まっている。

「く、っそ……」

「淳ちゃん、勝てっこないよ」

仲間の一人がピアスの袖を情けなく引っ張っている。今にも泣きそうな表情だ。

「お前ら……マジ、絶対殺す！」

言葉に反して、二人は一目散に逃げた。

追いかけてくる時より早いんじゃないだろうか。

「小物の台詞だな……」

「本当に言う奴居るんだ。逃げながらの捨て台詞……」

何故か同じような事を考えていた、力也と眼が合う。

「すまなかったな」



「え、あ、うん」

「俺は井戸力也。お前は？」

「僕は黒井大和」

「ふむ。聞いた事の無い名前だな。あれだけ強ければ名前くらい知れ渡っていても良いと思うが」

何？ その俺より強い奴に会いに行く、みたいな時代錯誤の発言。若干引き攣った笑いを浮かべる。

「いや、僕不良じゃないし」

「まあ、見た目も……あ、一般の学生だな」

「別にシヨボイって言ってもいいけど」

実際、僕の外見は貧弱そうに見えると思う。

かなり鍛えてはいるけど、着痩せするみたいだし。今は長袖で露出は殆ど無いから余計にそう思うだろう。師匠からも、貧弱にしか見えん、と言われてるし。

「いや、その、すまん」

「別に謝らなくてもいいけど。でも、いいの？」

「……構わん。あの馬鹿にはほとほと愛想が尽きていたところだったしな。良い切欠だ」

「そう……」

少しだけ、後悔しているように見えるのは気のせいなのかな。

「それじゃ、俺はもう行くぞ」

「あ、うん。えと、有難う」

「あ？ ああ、成り行きだ。気にするな」

力也は僕に背を向けて離れていく。

「ああ、それと」

「え？ なに？」

「学校で会ったら声でも掛けてくれ。こう見えて友人が少ないんでな」

「は？ 学校？」

僕の返答に呆気に取られている表情の力也に僕も首を傾げる。

「いや、お前、止水学園の一年だろ？」

「そうだけど……。え？」

「俺も一年だ」

「はいいいい！？」

え、いや、嘘。だって凄い老け……じゃない、大人に見えるから、3年と思っていたのに。しかも制服着てないから違う学校かと思っていた。

よくよく見ると上は簡素なシャツに下はうちの制服みたいだ。つてか、僕驚きすぎだ。

「……ま、よろしくな」

背中越しに手を振ってくる力也に力無しに手を振る。  
なんだろ、なんか色々疲れた……。

### 変わり行く日常 3

「……………ているか？」

ああ、これは夢だ。

慣れた感覚。それは夢だとはつきり自覚できた。

周囲に明りは無い。真っ暗の世界を漂っている。浮いているのか、立っているのか、全く解らない。認識できない。

だが、まったく恐怖心は無かった。

「覚えているか？」

誰の声か解らない。

聞いた事がある声。何度も聞いた声。

覚えている。この夢を見ている今だけは。

「気をつける。あと一度だ」

解っている。けれど、覚えていないんだ。夢から覚めたら、現実の僕はこの夢の内容を覚えていない。何度も何度も幼い頃から繰り返し返される夢の内容は記憶に残った事は無い。

現実の自分に願うしか無い。

淡々と聞こえる声は何度か聞いている内に僅かではあるが感情を含んでいるように感じていた。焦りか、それとも悲哀か。

「近づくな。近づかせるな。他人を。それしか方法は無い」

\*\*\*\*\*

「ねむ……」

目覚めた僕の顔には朝日が射している。  
けたたましく響く目覚ましを乱暴に止める。  
瞼を閉じても肌を透過する日光に否が応にも意識が徐々に覚醒していくのを感じた。

気だるい体を無理矢理起こし、暫くぼーっとしてから、深呼吸を何度か繰り返す。息を限界まで吸い込んで一度止める。そして、ゆっくり息を吐く。

師匠曰く、眠い時はゆっくり深呼吸すれば直ぐ眼がさめるわ、との事だった。それは、日曜日の朝の修練に遅れた第一声だったのを覚えている。頭をしこたま木刀で殴られて、一日中、頭がじんじんした。良く怪我をしなかったものだ。

これは息吹と言われている呼吸法だ。

うちの流派では呼吸法に重きを置いている。拳法で言う、気に近い観念だと言えはわかり易いだろう。ただ、呼吸法によって著しく身体能力が上がったりはしない。ちょっと体が軽くなったり、力が入れ易かったりする程度だ。僕の錬度が低いから、と師匠に言われたけど、本当かな。眉唾物だと内心では思っているけど。

意識がはっきりとしてきたのを機に、制服に手を通し身形を整えた。

突如、朝の恒例となっている足音が耳に入ってきた。

「やつまとく〜ん」

「起きてる。着替えた。降りる」

「俺。残念。しょんぼり」

相変わらずのハイテンションに落ち着いた口調で話す。

過剰な反応で返す兄さんは頂垂れていた。

正直だるい。

たぶん、何か夢を見たんだろうけど、覚えていない。いつもの事だと思っがいつも同じように覚えていないのは気持ち悪いとも思っていた。

どんな夢を見ているんだろうか。今の心理状態からすると良い内容だとは到底思えないけれど。

亡霊の様に上半身を前に倒した状態の兄さんを放っておいてそのまま家を出た。

すれ違い様、何か言いたそうだったが、面倒臭い雰囲気醸し出して断固として無視を決め込んだ。

\*\*\*\*\*

今日は悪夢だと思った。

恐らく実際の悪夢を見た後、兄の面倒臭そうな挙動を無視し、更に今も似たような事に苛まれている。

地面に視線を落とし、思わず嘆息する。

長い、途方も無く長い溜息をする。

すっかり忘れていた自分に若干苛立ちながら。

「おい。それは、傷つくぞ」

目の前には大柄の男が仁王立ちで立っている。

廊下を行き交う生徒達の視線が痛い。  
力也は若干戸惑いながら声を掛けてきていた。  
僕に関わらないでくれって言うの忘れてた……。  
昨日は色んな事が有り過ぎて言いそびれてしまっていた。  
視線を上げると、眉根を潜めた力也が目の前に居た。身長差が激しいため首を上へ傾けないと顔が見えない。

「なんだ、忘れたのか？ 昨日会ったばかりだろ」  
「いや、覚えてるけど……。ちょっと」

戸惑い気味の力也の袖を引っ張り人氣が少ない渡り廊下へと向かった。

視界の端にこちらを見詰める瀬戸さんを見たような気がするが、きつと気のせいだと思う。やや訝しげだったと思うがそれも気のせいだと思う。思いたい。

ちなみに僕の教室は二階。新校舎側だ。止水学園は旧校舎、新校舎で分かれておりそれぞれを繋ぐ渡り廊下が存在する。新校舎側には一、二、三年の教室と専攻教室があり、旧校舎には職員室や視聴覚室、放送室など、人の立ち入りが少ない場所が多い為か渡り廊下を使う生徒達は少ない。

「なんだ、こんなところに連れてきて」  
「あゝ、いや。実は言いそびれてただけど」  
「お、お前……まさか」

若干僕から後退りながら、額に汗が滲んでいる力也の表情は引き攣っている。  
なんだろ？ なにかしたかな。

「え？ 何？」

「そつち系か……？」

「そつち？ って、どつち？」

「こつち、か？」

そう言いながら、力也は半身の姿勢で腰をくねらせ手の甲を口元へ添えた。指先は気持ち悪いくらい伸びきっていた。引き攣った表情のまま。

「はあ？」

「お前は中々に端正な顔をしている。やや中性的だし、可愛いとも言えるかも知れんが、俺は男は、ちょっと……」

「馬鹿じゃないの？」

「ば、馬鹿って言うな！ せめて筋肉を前に付けろ！ 筋肉を！」

微妙に怒り気味の表情に何故か両腕とも力瘤を作って筋肉をアピールしました。

というか、せめての意味が解らない。

こいつ、真面目な馬鹿なのか？

「じゃあ、筋肉馬鹿。僕は男には興味が無い」

「そ、そうか。良かった。本当に、良かった……？」

なぜ疑問系になるのか……。

あえて触れないように話を戻す。

「そうじゃなくて、言い忘れてた事があった」

「なんだ、改まって」

「僕に関わらないで欲しいんだけど」

「ふむ……。何か理由が？」

「ただ、単に他人に関わりたくないだけ。面倒臭いし」

「それは……否に擦れた考えを持っているな。学校生活も友人が居たほうが楽しいだろう？」

「普通の人はそうかもね。僕は、そういう風に思えないから」

言葉を失ったのか、何かを考えているのか、力也は僕を真っ直ぐに見ながら沈黙している。

真摯な視線に居心地の悪さを感じて視線をそらした。

「っていう事だから。それに、あんた目立つ」

「う、お……辛辣な。気にしてる事を」

だと思って態と言ったんだけど。

「別に困らないでしょ。お互い干渉しないって事でいいよね？」

「……見た所、人が嫌いと言う風には見えないが。コミュニケーションが苦手でも無いだろう？」

「とにかく、僕の事は放っておいて。じゃー！」

半ば投げやりに言い放って、教室に早足で向かった。

視界を掠めた力也の表情に罪悪感を覚えてしまう。

同情かそれとも自尊心を傷つけられたか。ただ単に悲しかったのかも知れない。殆ど会話もしていないが、拳を交わした相手だ。その実直さは感じ取っていた。

いつから他人を遠ざけるようになったのか。そして、今も何故距離を作ろうとするのか理由が解らなかった。ただ、何かに、抗う事の出来ない、得体の知れない物に突き動かされていたのは解っていた。

教室に戻ると瀬戸さんと眼が合った。

何か言いただけな仕草をしたが気付かない振りをして、僕は席に着



いた。

苛立っている。

何に對してかは解らない。

瀬戸さんに？ 力也に？ それとも兄さん？ 或いは夢の所為？  
解らない。けれど、その感情が治まる事は無かった。

## 変わり行く日常 4

頬杖を突いて耳に入る音をただ聞いていた。

理解できない訳ではない。むしろもう既に理解している内容だったからこそ余計に気が入らない。

今は授業中。教壇では僕とそれ程年の離れていないだろう若い女性の教師 - 確か青葉とかいう名前だったかな - が必死に弁舌を振るっている。時々内容を忘れてしまうのか、授業が進まない事がある。まあ、研修中の教師なんてそんなものだろう。興味の無い事に思考を停止させた。

窓際の席を確保できたのは良かった。こういう時に暇つぶしが出るからだ。校庭の風景は然程面白味のある物では無いが、それでも、動きのある物を眼で追う事で暇潰し位にはなる。校庭では体育をしている二年生が走っている。一生懸命走っている生徒も居れば、だらだらと歩きながら話している生徒もちらほら見えた。そんな生徒の姿勢にも教師は全く叱りもしない。

腐ってるな。

これが授業なのだろうか。全く意味の無い内容にただ時間を費やすだけの日々は何の意味があるのか。早くて、数年後には社会に出る人間を教育している場とは思えない。

まあ、他人の事は正直どうでもいいんだけど。

全く授業に関係の無いことを考えていた時、再び授業が滞った。

また青葉先生が慌てて、教科書をぱらぱら捲っている。

何回目かの出来事に生徒達から溜息が漏れ、ざわざわと話し声が聞こえ出す。

「先生、何回目ですか？」

「いい加減授業進めてほしいんですけど？」

「ページも進んでませんよ」

生徒達、というより、以前僕に絡んできた茶髪三人組からの野次が教室に響いた。

それを聞いた青葉先生は余計に焦り、教科書を捲りながら謝っている。

「ご、ごめんね。すぐ始めるから」

泣きそうな声でそう話す青葉先生の手は震えている。

極度の緊張と、圧迫感に加えて本来なら実習中に居るはずの正規の教師が居ないのだから当然だろう。授業が始まると直ぐに、じゃあ、頑張つてと言い放ち教室を後にした教師の後姿を見て、途方に暮れていた事を鑑みると授業を進行しようとしている様は賞賛に値すると思う。

新任どころか実習生を一人で残すなんて教師の所業とは思えない。

必死で授業を進行しようとする青葉先生に野次を飛ばし続ける茶髪達。

内心辟易していただろう他の生徒もやや狼狽している。だが、だれも野次を止める生徒は居ない。

「ちよっと！ やめなさいよ！」

瀬戸さんの一喝が茶髪達の野次をピタリと止めた。

教室にいる生徒全員の視線は瀬戸さんへと向けられた。僕も例外ではない。

「青葉先生、頑張つて授業しようとしているじゃない。黙って授業受けたら？」

数週間前にあんな事があつたにも拘らず、自分を諫める気は無いのか、自分の意思を吐露した。

勇敢なのか、無謀なのかはわからないけど。

それとも、僕が又助けるとでも思っているのだろうか。

もしそうだとしたら、そんな仕草を少しでもしたなら、僕は決して助けない。

事の成り行きを傍観していた、僕の方を茶髪達がちらつと見る。

僕は手助けをするつもりは無いと判断したのか、すぐさま瀬戸さんに向き直った。

瀬戸さんを助けてから、茶髪達が教室で無闇に騒いだりする事は無くなった。極力、瀬戸さんにも関わらないようにしていた。度々茶髪達が端でこそそこそこちらを見ながら話していたのは不愉快だったが、僕の存在が抑止になっていたようだ。

ちなみにピアスと坊主の不良はこのクラスではない。

あんな事がなければ僕はそれさえも気付いていなかったかもしれない。

瀬戸さんも人当たりが良いのか、直ぐに友人を作ってそれなりに楽しそうに学校生活を送っていたのだが。

「委員長。じゃあ、この状態どうにかしてください」

「私達勉強したくても出来ないんですけど？」

「お金払ってるんだよ？ まともな授業をして欲しいって思うのがそんなに悪い事かな？」

嫌味な言い方だが、言う事は間違つてはいない。

そもそも、今回の過失は学校側にある。実習生を一人にした時点で茶髪達の言い分は真つ当に思える。

ちなみに委員長つて言うのは瀬戸さんの事だ。仕切り屋なのか、自ら学級委員に立候補していた。

心配そうに瀬戸さんに視線を送っている女生徒が数名。恐らく友

人だろう。

「で、でも、仕方ないじゃない」

「仕方ない？ 私たちが我慢するのが仕方ないって言うの？ おかしくない？」

「……そ、それは」

野次についてははっきり言って賛同出来ないけど。

このままでは事体は集束しそうに無い。

言葉を詰まらせた瀬戸さんに気を良くしたのか茶髪達が一様に瀬戸さんを攻め立てている。

渦中の青葉先生はおろおろとして、小声で止める様言っているがはっきり言って無駄だ。誰も聞いてやしない。

「ってか、何？ どうすんの？ あんた委員長でしょ？ どうにかしなさいよ」

「……先生呼んでくる」

「来るまで待たないといけないでしょ？ まだ我慢しろっての？」

徐々に増長してきた茶髪達の言動に無意識に苛立ちを感じる。

青葉先生の事に託けて、最早瀬戸さんに対する理不尽な罵倒に変わってきている。

正直、どうでもいい。どうでもいいが、腹が立った。

「おい」

それ程大きく無い声だったが、教室に響いた僕の声に喧騒はピタリと止んだ。

恐る恐るこちらを振り返る茶髪達を睨みつける。

生徒達全員の視線がこちらに向けられた。訓練された軍隊のよう

に一斉に首が動いた様に若干の気持ち悪さを感じつつ冷淡に話す。

「五月蠅い」

「で、でもこいつが」

「黙れ。喋るな」

殺すぞ、と言う言葉だけ何とか自制し沈黙する。

僕の言葉に震えながら、視線をそらした茶髪達から視線をそらす。原因は解らないが、苛立っていた。

五月蠅かったからだろうと、勝手に解釈して、青葉先生に声を掛けた。

「続けてください」

「ひゃ、ひゃい！」

僕の言葉に慌てて教科書を捲りだす。

周囲の視線が突き刺さるのを感じ、一人一人睨みつけてやろうかと思う自分を何とか抑える。

溜息と共に深呼吸をし、感情を制御する。

僕の耳には呼吸音と共に教科書を捲る音だけが響いていた。

\*\*\*\*\*

「あの、ありがとう」

「あ、ありがとうございます」

途中戻ってきた担任の教師のおかげかなんとか授業が終わると青葉先生と瀬戸さんが僕の席に来て最初に放った言葉がそれだった。

「いやあ、ごめんごめん。だいじょうぶだったよね？」という担任教師の言葉にちょっとだけ殺意が湧いたのは仕方の無いことだと思っ。

というか、噛み噛みだなこの教師は。教師に向いていないんじゃないだろうか。

い、が抜けてるぞ。い、が。

「気にしなくて良い。何と無く苛々しただけだから」

「そ、そう」

「でも、ありがとうごじゃ……です」

途中で諦めないで！ 最後まで言って！

なぜか敬語で話す青葉先生を、思わず励ましたくなる自分を何とか抑えて慥然と答える。

自分から巻き込まれたのだが、はっきり言ってこれ以上関わらないで欲しかった。

出来るだけ冷たい態度を取っていたのだが、腑に落ちないのかその場を去ろうとしない二人に視線を向ける。

「だから、気にしなくて良いから」

「でも……」

「約束」

以前した約束。僕が一方的に押し付けたみたいなものだが、瀬戸さんにはその言葉は効いた様だ。思わず言葉を詰まらせている。

僕達の様子を見て何故か焦りだした青葉先生を無視してそっぽを向いた。話はこれで終わりだと思表示を示した。

助けられた身とは言えこんな態度を取られたら怒っても良いと思うんだけど。二人は困ったような表情で立ち尽くしている。律儀なのか、それとも僕が冷たいのか。

数分その状態が続き二人はまだそこにいた。理不尽だと思う、けど僕は徐々に苛立ってきていた。

「あのさ。気にしなくていいって言うてるでしょ？　そこに立っていられると迷惑なんだけど」

出来るだけ感情を含まず言っただけだが言葉の後半は怒気が籠ってしまっていた。

僕の言葉に威圧されたのか若干後退りする。その瞳には恐怖が見え隠れしていた。

「う、ごめんなさい！」

一目散に教室を後にした青葉先生を横目で見る。だが、瀬戸さんはまだそこから動こうとしない。もう、無視する事を決めて、校庭を眺めた。

授業開始のチャイムが流れると辺りの生徒達が席に着いて行く。青葉先生の授業が終わるとすぐに教室を出た茶髪達も戻って来た。だが、瀬戸さんは未だに一人で立ち尽くしている。漸く席に戻る気になったのかこちらに背を向けた。

「絶対、無理してる」

ぼそつと言った言葉はその後の授業中も僕の耳に残っていた。



狭間の世界で（前書き）

少し短いです。

## 狭間の世界で

理解が出来なかった。目の前で何が起こっているのか。ただ立ち尽くすだけで途方に暮れていた。

確か旅行に来ていたはず。その道中に飛行機に乗った事は覚えている。母さんは旅行が好きだった。その為、年に一度家族で旅行をするのが恒例になっていた。今回は初めての海外旅行という事で父さんも含め家族全員緊張と期待を胸に日本を発った。

子供のようにはしゃぐ母に苦笑いを浮かべていた父を思い出す。父は不器用で厳しい人ではあったが、普段は温厚で不器用ながら家族を愛していたのだと今では思う。

狭い機内に悲鳴が響き、ただ五月蠅かったのは覚えている。

混乱していた？ 違う。解らなかった。ただそれだけ。

何故、兄は泣き叫んでいるのか。

何故、乗客が打ち震えているのか。

何故、父と母が倒れているのか。

母は僕を庇うように抱き締めそして動かなくなった。

父は機内に突然現れた男の人に飛び掛ろうとしたままの体勢で倒れている。

地面は赤々としていた。

解らない。

機内食を完食して満腹感に浸っていた時に突然、大声を張り上げた大人の男性数人が現れて、僕を連れて行こうとした男性に父が飛び掛って、母が僕を庇って大きな音が響いて、それで……。

虚ろな眼で辺りを見回す。子供は僕と兄さんだけだった。

僕を連れて行くこうとする男に兄が何やら泣きながら訴えていたと思っただら、殴られていた。

ただその時は兄を助けようと「大人しくしますから、兄に手を出さないで下さい」と言ったのを覚えている。男たちの手に握られている無骨な鉄の塊に視線を移しながら。

ハイジャック犯に日本人が混ざっていたのは不幸中の幸いだったのかもしれない。

それからは詳細には覚えていない。

気付けば父の部下だと言う警察の人達に解放されていた。

兄が無事な事を聞くと安堵したのは覚えている。

僕は生まれた時から一人だった。

僕を生んでくれた実の母は僕を生んだと同時に此の世を去った。

父はいない。死んだとも、生きているとも聞かない。

自分が両親だと思っていた父と母と兄は僕とは血が繋がっていないと知ったのは十歳の時。

育ての母の妹であると言乗った叔母夫婦に引き取られ、数週間後、叔母から罵倒とも言える言葉を投げつけられる日々の中で知った事。叔母は僕を憎んでいた。母が僕を庇った事を知っていたから。実の母が僕を産んで死んでしまった事を知っていたから。

お前は疫病神だと、周りを不幸にすると常日頃、顔をあわせる度に罵倒してきた。

幼い自分にとってそのような言葉は害悪以外の何者でもなかった。日々磨耗していく精神は次第に自嘲の思考を植えつけて行った。

自分が悪いのだと、自分さえいなければと。

命を絶とうと考えなかったのは僕の命は最早僕一人の物ではないと思っていたからだ。実母と育ての母の犠牲の上に僕が存在している。

ある日、兄と継母が歓談をしている場を眼にした。

継母は姉の実際の息子である兄を可愛がっている。それこそ、実の息子のように自慢げに他人に話している現場を何度か見かけた。

嫉妬、とは違う。ただ、自分と兄の現状との格差を思い知らされた。

何故僕だけこんな目に遭わなければならないのか。僕が何をしたただ、生まれて生きてきたただけだ。なのにこの差はなんだ、と兄を憎む感情が沸々と湧いて出てきていた僕はまともに兄を見る事が出来なかった。

頭が熱くなり、意味も無く暴れたくなる感情をなんとか抑え、二階に上がるうとした。

ふと、気になって再び兄たちを見る。

何を見ようと言うのか、ただ苛立つだけなのに。

それでも何かに後ろ髪を引かれ、僕は視線を動かす。

周りを見る余裕の無かった僕は初めて意識して二人を見た気がする。

笑っている兄と継母。だが、兄は笑っていないかった。表面上笑顔を作っているだけ。僕はそれに気付きさらに自分を責めた。

兄はひよっとしてずっと演じていたのでは無いだろうか。

期待に答え続ける事で僕を守ろうとしていたのでは無いだろうか。もし、僕と同じ様に継母達に敵意を持つものならここに居られない。

ここ数年まともに見なかった兄の顔は何かに疲れているように見えた。

僕はただ自分の事だけ考えていたのに兄は僕の事を考えてくれていた。そう思えてならなかった。事実、思い切って数年振りに兄に話しかけると満面の笑みで答えてくれた。心配するな、兄ちゃんが

守ってやる、と答えた兄の偉大さが身に染みて解った。

遅すぎる理解。それでも兄はなんでもない様に接してくれた。

血の繋がりの無い自分を庇って死んだ母、勇敢にも乗客全ての為に犯罪者に立ち向かった父、そして、義弟の為に自らの命が奪われるかもしれないのに抵抗して、今も僕を守り続けてくれている兄。

愛していた。両親を兄を。例えば血が繋がっていなくても。

だからこそ、許せなかった。両親の死を悼む事が出来なかった自分を。理解していなかった自分を。無知で愚かな自分を。

数年後の僕は兄以外の人間には心を開く事はなくなっていた。

「あと一度だ。もう既に二度起こっている。同じ過ちは繰り返すな」

何度も聞いた落ち着いた声音が脳に直接響く。

そう、だから、僕はこの言葉に従うしかないのだ、と夢の中で何度も何度も反芻した。自身の存在とその意味を呪いながら。

## 変わり行く日常 5

息が苦しい。

鍛えた体の体力も無尽蔵では無いのだから当然だろう。

肩で荒々しく息をする。酸素を欲する肺を無理やり落ち着かせ、ゆっくりと深呼吸を繰り返した。肺を酸素で満たし、一度呼吸を止める。そしてゆっくり吐き出す。

呼吸は徐々に落ち着いてきた。

それを機にゆっくりと辺りを見回す。

地面に倒れている人の数は約十名。皆、一様に気絶している。

下校中、再び待ち伏せられていた。執拗に僕に固執してくるピアスの原動力は何なのか。ただ、気に入らないからか、それとも茶髪の指示か。理由など知る由も無いし、知る気も無い。

僕は自らの失態によって袋小路に追いやられた。狭い路地ではなかったのが唯一の救いだった。

体中に痛みが走る。激痛では無いがそこかしこが痛む為、最早何処に怪我を負っているのか解らない。

狭い空間で一人五体満足で呆気に取られた様子のピアスに近づく。

「く、来るな！ 化け物！」

腰が引けている状態にも関わらず口の悪さだけは健在だった。

無視してそのまま足を動かす。

ピアスは逃げる事さえ出来ないのかその場に立ち尽くし、唇を震わせながらこちらを凝視している。

「これで何回目だっけ？」

僕の問いに答える気は無いのか、ただこちらを見詰めてくる。半ば呆れ気味、半ば怒りを覚えつつ僕は言葉を繋げた。

「三度目だ。これは、構わないって事だよな？」

「ひっ！ か、構わないって、な、なんだよ」

ピアスは自身の嬌声を誤魔化すように開き直りながら叫んだ。僕は出来るだけ不敵にニヤリと笑う。

ピアスは眼を見開いていた。確実に恐怖を宿して。

「何をされても構わないって事だよな？」

ゆつたりとした足取りで距離を詰める。

強者が獲物を狙うかのように。

「や、やめ」

「無い」

僕は弱い。だから、こんな奴に舐められるんだ。どれだけ脅しても、力を見せても相手は引こうとしない。それは、僕を舐めているからだ。なら、仕方ないだろう？

まるで他人事のように見ていた。

泣き叫ぶピアスの声もまるでテレビでも見ているかのように感じていた。

骨が折れた音が何度も聞こえた。

泣いて謝るピアスの様子を気にせず痛めつけた。

殺しはしない。だが、恐怖を植えつけるにはまだ足りないと思った。

弱者を虐げる自分と、それを客観的に見ている自分。まるで二人

自分がいるような感覚にとらわれた。  
冷静に事の成り行きを見ていた自分が少しだけ、ほんの少しだけ  
嫌悪感を抱いた。

ピアスを殴りつけていた自分は笑っていた。

\*\*\*\*\*

「RPGだよ」

「RPG?」

「そう。ロールプレイングゲーム。物語の主人公になるゲームだな」  
「あゝ、勇者が魔王を倒す、とか?」

「そうそう。まあ、最近はそういう王道的な物ばかりじゃないけど  
な。結構練りこまれた話も多いし、ハッピーエンドばかりじゃない」  
「ふゝん」

「まあ、やってみようぜ」

「僕が?」

「ああ。俺はもうクリアしたから」

「んゝ、でもなゝ」

「何? こういうの嫌いか?」

「嫌いじゃないけど、なんかそういう正義感持った主人公とか感情  
移入できないというか。なんか、偽善っぽいじゃん」

「んゝ、そうか?」

「うん」

「じゃ、これは?」

「何それ?」



「異色のRPGだな」

「異色？」

「王道とは違う。だぶん邪道だ。でも俺は嫌いじゃないかな。こう  
いうストーリーも。システムも結構斬新だ」

「へえ……。どんな話なの？」

「勇者が主人公で魔王を倒すって話」

「王道じゃん」

「まあ、やってみろって。勇者がこれまた似てんだ」

「似てるって、誰に？」

「お前に似てるんだよ」

「相当捻くれてるんでしょうね」

「敬語やめて。怖い。お兄ちゃん泣いちゃう」

「……で、どこが似てるの？」

「やってみたら分かるよ」

洪々、兄から差し出された物を受け取る。

渡されたゲームソフトのパッケージには『記憶を無くした勇者と  
優しい魔王』と書かれていた。

\*\*\*\*\*

はっ、と気付く。意識を取り戻し、すぐに辺りを見回した。

自分の教室。僕以外には誰もいない。

何時の間にか寝てしまっていたのか。

深呼吸をし、意識を覚醒させる。

外を見ると、日は落ちかけている。時計を見ると六時を過ぎよう

としていた。

記憶が飛び飛びで現状を把握しきれない。

覚えていない。何時寝たのか、今日受けた授業は何だったか、何時の間に学校へ来たのか。何気ない日常は僕の中で無価値に近いものになっていったのか。それでも、今日の記憶がほとんど無い事を怪訝に思いながら、教室を後にした。

校庭では部活に勤しんでいる生徒達と顧問の教師以外には誰もいない。それほど遅い時間でも無いのに  
すでに帰宅部の生徒は全員帰ったらしい。

「やっと来た」

校門を潜ろうとしていた時、その声は聞こえた。

塀に体重を預け、瀬戸さんは若干不機嫌そうにしている。

「……部活は？」

「今日は休み」

何気ない会話の中に僕の意図が伝わったかもしれない。第一声が部活は？ だったのは、部活があるのに何でここにいるんだ、という意味。そのままの意味だが、僕が言えばその意味は違ってくるだろう。関わるな、と言った張本人なのだから。

「そう……。で、何？」

「一緒に帰ろうと思って。学校じゃ話してくれないし」

「は？ いや、何で一緒に帰るの？」

「な、何でって」

突き放した僕の口調に戸惑い気味に言葉を詰まらせる。

この娘は何がしたいのだろうか。全く解らない。

何故か恨めしそうにこちらを睨みつけてくる瀬戸さんにたじろぐ。少しかだけ涙目になりながらも妙な威圧感を醸し出している瀬戸さんを見て、内心狼狽してしまった。

何？ 何なの？ 何でこんな事になってるの？

解らない。解らないが、何か自分が途轍もなく悪い事をしたんでは無いかと思ってしまった。

「い、一緒に帰りたいから！」

瀬戸さんは頬どころか耳まで真っ赤になっている。

その言葉に呆気を取られた。

一緒に、帰りたい？ 僕と？

「な、何で」

「何でも何も無いの！ そうしたいの！ 駄目？」

「駄目、じゃ無いけど」

腰が引けつつも、瀬戸さんの迫力に思わず返答した。

「じゃ、じゃあ、帰ろう？」

内心自分の失態に舌打ちする。

だが、一度了承した手前断る事も出来ない。

少しかだけ投げやりに成りながらも鷹揚に頷いた。

僕の反応に満足したのか、瀬戸さんはこちらに近づいて来た。

観念して、僕は足を踏み出す。僕に合わせて瀬戸さんも横を歩いている。

下校中は終始無言だった。瀬戸さんは何か話したそうだったけど、

僕は決して口を開く事は無かった。正直、空気は重かったと思う。それでも、別れ際に瀬戸さんは嬉しそうに笑って手を振っていた。何なんだ、と思いつつも僕も手を振り返す。瀬戸さんの背中を少しだけ見詰めていた自分に気付き、すぐさまその場を後にした。

「またね、か」

バイバイ、でも、さよなら、でも無く。

その言葉を思い返し、少しだけ心が暖かくなる気がした。けれど、それは一瞬で冷えた物に変わっていったのを僕は感じていた。

## 変化の兆し

喧騒から離れた路地には二つの足音が響いている。

僕と瀬戸さんの足音。

ここ一週間毎日一緒に帰っている。

ただたどしい会話が時折流れる以外は無言。

よくわからない。なんで、瀬戸さんは僕と一緒に帰っているんだろっ。

横目で瀬戸さんを見る。会話が無いことで空気が重いと思っていた僕とは違って、別に気兼ねしていかないのか、表情は柔らかい。もっと不機嫌になってもいいだろうに。

内心嘆息する。一緒に帰りたくなければ正門から帰らなければいい。或いは断ればいい。だけど、僕はそうしなかった。仕方ないと何の理由も無い妥協をしていた。

正直この空間は嫌いじゃない、と思っているのか。今は沈むような気持ちは無い。理由は解らないが心が楽な気がした。

「ねえ？」

帰り道の中間を過ぎた頃、瀬戸さんが話しかけてきた。無理に話している感じは無く、軽い調子で話しかけてきている様に思えた。

「なに？」

ぶっきら棒に答える。

瀬戸さんは僕の態度を気にした風も無く言葉を繋げた。

「その、怪我は大丈夫なの？」

「怪我って？」

「え？ この間の怪我よ」  
「僕、怪我なんてして無いけど？」

怪訝な表情をしているだろう僕を見て瀬戸さんも同じ様な表情を浮かべた。

「からかっているの？」

「いや、本気で言ってるんだけど……」

「え？ ほんと？」

瀬戸さんが何を言っているか全く解らない。

何故か心配そうな顔をしている瀬戸さんは何を思ったか、突然僕に近づいてきた。手が触れそうな距離でびたと止ると顔を覗き込んできた。一瞬だけ眉根をひそめて、何か思い立ったのか頷くと背伸びをして顔を近づけてきた。僕はそれ程背は高くないが、瀬戸さんはかなり小柄だから踵を上げなければ顔を近づけられなかったのだろう。

しかし近い。近すぎる。

鼻が触れそうなくらい近い。あまりに突飛な行動に思考が付いていかず、頭が真っ白になってしまった。

大きめの瞳は幼く感じさせるが真剣な表情をしている瀬戸さんは大人っぽく見えた。

長い睫に掛かる前髪は艶やかで手入れが行き届いている。

まるで妖精のようだと、呆けながら思っていた自分に傍と気付き、頭を振るう。

どこを見ているんだ僕は……。

眼と鼻の先。文字通り目の前に顔がある。

目と目が合い、数秒間、時間が止ったように思えた。

瀬戸さんの頬が徐々に朱色になり、目を見開いた。と、突然、僕を突き飛ばした。

「ち、近すぎ！」

「近づいてきたのはそっちなんだけど……」

頭をカリカリ掻きながら気恥ずかしさから視線を横にそらした。

瀬戸さんもこちらを見るのは恥ずかしいのかそっぽを向き唇を尖らせている。

「あ、頭でも打ったのかと思って」

「それで、なんで顔を近づけるのさ？」

「目は口ほど物を言うって言うし、誤魔化してるかもしれないじゃない」

「なんだそりゃ……」

「でも、嘘じゃないみたいね」

「分かるの？」

「勘よ」

「アバウトだな」

「理由なんて突き詰めれば感情論だったりするのよ」

「なんか、哲学だね。誰の言葉？」

「私！」

「……ですよね」

つまり、なんとなく本当っぽいから、まあ信じるか。という暴論な訳だけだ。

「話は戻るけど、本当に覚えてないの？」

「たぶん、覚えてない、かも……」

「なんか、曖昧ね」

「全く記憶に無いんだ。覚えていない、という表現も適当かどうか」  
そう言い、言葉の内容に寒気を感じた。

僕は今、怪我を負ってはいない。痛みも無いし、治療の後も無い。  
もし、瀬戸さんが言っている事が事実なら、僕は怪我を負って、  
怪我が治るまでの記憶が無い事になる。

自分が知らない自分自身の事を他人が知っていると云う事に恐怖  
を感じた。

鼓動が早くなり始めるのを感じる。

落ち着け。

「大丈夫……？」

瀬戸さんは俯き無言で立ち尽くしていた僕に心配そうに声を掛け  
てきた。

徐々にだが確実に平静さを取り戻していく。押し寄せた感情の波  
は漣なみ程度だ。

いつもの様に呼吸を意識すると、感情は治まっていった。

「……大丈夫」

「ね、ねえ。病院行った方がいいんじゃない？」

「いい」

「でも……」

「いいって！ 病院は、行きたくない」

まるで駄々をこねる子供のようだ。

でも、行きたくないんだ。怖いんだ。あそこは嫌だ。あそこ空  
気は吸いたくない。



「何かト……何でもない」

何かを言いかけて言い淀む。

正直なのだろう、そして自分を抑える理性的な部分もある。

これ以上踏み込む事は出来ないと思ったのか、瀬戸さんはそれ以上言葉を口にする事は無かった。

胸中で安堵する。人には踏み込またくない領域がある。僕は、恐らくその領域が広いのだろう。だから他人を寄せ付けない。寄せ付けられない。

この話を続けるのは憚られたが、自分の事を知らないと言つのは気持ちが悪い。

「聞きたいんだけど。僕が怪我したのは何時？」

「……二週間くらい前、だったかな」

「二週間……」

「本当に覚えて無いんだ」

「……そう言つた。で、なんで？」

「前に絡まれた、あのピアスの不良は覚えてる？」

「うん」

「あなたはあの人達に絡まれてた生徒を助けた。その時に怪我した、つて聞いたわ」

「どうしよう。全く覚えていない。そもそも、誰かを助けた覚えが無い。」

本当に僕の事なのか？

「十人位に囲まれていたのに大した怪我を負っていなかった、って学校中で噂が」

「ん？ おかしいな。耳の錯覚かな？ もう一回言ってみて」

「十人位に囲まれてた？」

「いや、最後の方」

「学校中で噂？」

「噂になってる？」

「え、ええ」

「そんなヴァ力な！」

衝撃の事実の下唇を噛んで発音してしまった。

面倒臭い。他人嫌い。

「それで、気になって話し掛けて……って、ここら辺は省いちゃダメ？」

「出来るだけ詳細に聞きたいんだけど……」

「あんまり話したくない」

嫌な内容なのか。と、思ったが、なんとなく拗ねている様な照れているような表情を浮かべているのを見て自分の考えは間違いだと分かった。

何があつたか気になるけど、深く聞くと地雷を踏みそうだ。

「じゃ、そこはいいよ」

「そ、そう。ありがと……。初めて、笑ってくれた」

消え入りそうな声だった所為か内容まで聞き取りづらかったが、なんとなくお礼を言っているのは分かった。あれ、少し嬉しそうにはにかんでいる。僕の方を見て。

「で、まあ、色々あって、一緒に帰るようになりました」

「ほうほう。まるで分からないけど」

「あんまり気にしすぎると禿げちゃうよ」

「そこら辺、男にとって繊細な所だから、言葉に気をつけよう?。」

「……なんか、キャラ変わった?。」

「え?。」

え? 僕は何を言った?

あれ? なんで、親しげに話してるんだ?

「私はその方が嬉しいけど……。」

ぼそつと小声で言った言葉は僕には届かない。

動揺していた。ただ、動揺していた。

だから、その後何を話したのか覚えていなかった。ただ、気の無い返事を繰り返していたような気がする。

記憶が無い事はショックだった。けど、自分が誰かと親しげに話していた事はもっとショックだった。

## タイムリミット

明らかに心配そうな表情の瀬戸さんに別れを告げ一人で路地を歩く。

何故、話した。

何故、一緒に帰った。

何故、……笑った

分からない。僕は他人が嫌いなんじゃないやなかったのか。あれじゃ、まるで友達のように。

違う。そんなんじゃない。ただ、調子を合わせていただけ。そうに決まっている。だから、違う。

誰に言い訳をしているのか自分でも分かっていなかった。ただ、必死に否定した。自分の行動を正当化しようと。

ふと足を止める。

考えながら歩いていた所為か普段通らない道に出してしまった。異様なほど閑静な路地。耳鳴りがしそうなほどの静寂に包まれている。

硬い物で地面を打ち付ける音が辺りに響き渡った。

それが足音だと気づき、何故か身構えた。

徐々に迫る足音に耳をすます。

「やあ」

曲がり角から現れた少年を凝視した。

突然声を掛けられ意表を付かれたというのも理由だろう。だが、

それ以上の何かがあるように視線をそらせない。なぜなら、声を掛けられる前から僕は少年を見ていたから。

明らかに年齢に沿わない格好。全身真っ白の出で立ちが周りから浮いている。服も肌も髪も瞳さえも白い。日本人ではない。かと言って外国人でもない。ならば、何だというのが。

「あれ？ 思った反応と違うなあ。分かるの？」

「お前誰だよ」

「あゝ、やっぱりそうだよね」

勝手に納得した様子の少年に対し警戒態勢をとり続ける。

何がそうさせるのか、分からないまま。

「本能、かな？ 記憶には無いけど、体が知っている、みたいなの？」

「何を言っている？」

「ま、今はそんなものかな。でも、他の奴よりは面白そうだ」

「話を聞け！」

自分より明らかに年下の少年に声を荒げる。

言いよつた無いらに不安に駆られ、感情を抑制できない。

「おっと。ごめんごめん。ちょっと、予想外だったから。本題に入るね」

「本題、だと？」

「そぞ。君さ。もう、後が無い訳。身の程を知らないかね。まあ、僕としてはどっちでもいいけど。あの御方は平等が大好きだから。

あ、これ、悪口じゃないから」

「何を言っている？」

「ま、覚えて無いだろうけど。一時的に覚えてるでしょ。そろそろ溢れるよ」

「だから、何を言っているか聞いてみる！」  
「うるっさいな〜……。一応、親切心で言ってるのに、何？  
その態度」

へらへらと笑っていた表情が凍りつく。瞳には見慣れた感情が浮  
んでいるのを見た。

あれは、敵意だ。

「ま、試しに。顕現させて見ようか。君の器ってのはどんなのかな  
〜？」

そう言うと左手を翳した。

突如、掌を翳した空間に小さい黒い霧もやのようなものが出現し、一  
瞬の静止の後、少年の二倍ほどの高さまで肥大した。

霧に少年が手をつまむ。肩口まで入るとそこで停止した。

その霧を境に少年の手は消えている。まるでそこだけ異次元の世  
界のように。

よくよく見ると霧と言うよりは、以前ゲームで見た異次元の入り  
口のように見えた。

「何が出るのかな〜。このゲートもそれっぽいな〜」

所用を済ますような軽口で話す少年を見る。

何なんだこいつは。それにあの空間。あれは、何だ？

「あ、これ？ 僕は分からないよ〜。君の方が詳しいんじゃない？  
あ、出てくる」

少年は何かを引っ張るように後退る。

意味も無く、体中が弛緩している。これは、恐怖？ 震えている

のか、僕は。

非現実的な情景を目の当たりにしても客観的に自分を見ていた。

「重いな。これ。よいしょ、っとー」

完全に引き抜かれた少年の手には日常的によく見るものが握られていた。

「これ、刀か」

少年の手に刀が握られている。

異様だった。その様相が。

黒い。漆黒に彩られた刀。何で出来ているのか刀身全てが真っ黒だった。

「真っ黒だね。まるで君みたいだね」

見下したような物言いに苛立ちを覚えた。

だが、それよりも、少年の手に握られている刀から目が離せない。刀だ。異様な造りをしているが、光を反射している刀身は正しく刃物だった。用途は一つしかない。殺す為の道具。

道場で見慣れてはいるが、状況が違う。相手の意図が判らないのだから余計に焦燥感を抱いた。

僕を殺すつもりか。

「じゃ、使ってみようかな」

使う、と言う事はそういう事だ。

僕は身構えた。

馬鹿げてる。何の理由かわからないが、いきなり刀を持って襲い

掛かって来ようとしている異常者と戦おうなんて。しかもあの力。現実とは思えない。だけど夢とも思えない。

だが、何故か感じていた。逃げられないと。

戦えばひよつとしたら抗えるかもしれない。

だが、背中を向けてしまえば、その可能性は0になる。

相手は明らかに自分より力が劣る少年だ。けれど、そうは思えない。

「へえ……。本当に面白いね君は。戦うつもり？」

僕は答えない。話せば気が削がれる。その間に殺される事もあるかもしれない。

少年との距離は決して近く無い。普通なら、その距離を詰めるには数秒掛かる。だが、この相手に普通は通じない気がした。

だから、話さない。油断もしない。出来る限りの力を持って抗う。戦う。戦う理由なんて無い。殺されるくらいなら、殺す。ただ、それだけ。

徐々に感情が冷めていく。何も感じない。ただ、集中した。

少年がゆらつと体重を横に傾ける。

と、思った次の瞬間、背筋を悪寒が走りぬけた。

無意識に足を即座に曲げる。刹那、僕の頭があつた空間に一筋の光が通る。

「ありや？ 避けられちゃった」

何時の間に目の前に移動したのか、少年は刀を振り払ったままの体勢で小首を傾げた。

今更ながら冷や汗がどつと湧き出てくる。



五月蠅いくらいの鼓動を無視すると、後方へ跳躍し少年と距離を取る。

少年がいた場所の地面は抉れていた。

「あんた本当に人間？」

そのままそっくり返したかった。

あの動き、早さ。人間の物では無い。

こいつは、何なんだ？

「まだだよな？ でも兆しは出て来てるのかな」

気にするな。

どんな意図があろうとも気にしては駄目だ。

どうせ、何を言っているのか分からない。

「ちょこつと本気出しちゃおうかな」

相手との距離は二歩踏み込めば手が届く長さ。

短い。この少年が相手ではこの距離でさえ目と鼻の先と変わらな

い。

だが、後方へ即座に移動する事は出来ない。

その隙に斬られてしまう。

摺り足で徐々に後ろに移動する。

出来るだけ離れなければ対処が間に合わない。

三步ほどの距離が開いたと思ったら、少年が少しだけ動いた。  
来る！

全神経を少年に集中させる。

ゆったりとした時間の流れを感じた。

スローモーションの様な動きの早さ。錯覚だとしてもそれを活用しない手は無かった。

少年が前傾になり停止した。

動いている部分は右足だけ。ほんの少しだけ足を上げると、地面へと振り下ろす。地面は何の抵抗も無いようにへこみ、その反動で少年の体がこちらに向かってきた。

下はコンクリートだぞ！

場違いなツツコミを胸中で浮かべ猛然とこちら向かってくる少年を見据える。

右手を左側に持って行き、振り払うつもりらしい。

辺りはゆっくりとした時間の流れだと言うのに、少年の姿だけは目を見張るほど早かった。

出来るだけ冷静に対処する。感覚的に体が付いていかない。まるで夢の中で自分の意思が無視される状況のようだ。

少年が足を動かしたと同時に僕は屈む動作を始めていた。

手の届く距離まで少年が来ると、刀が振るわれる。

済んでの所で刀の軌道から逸れた。髪が数本切り離されるのを感じる。

屈み切る前に無理矢理体を起こし、前へと踏み出すと共に右手を正面に打ち据える。タメを殆ど造らない腰の回転のみの掌打は威力は無いが、速さに長ける。

緩慢な拳動は焦燥感を浮き彫りにした。

早く、当たれ！

僕の思いとは裏腹に右手はのろのろとしか動かない。

「驚いたな〜」

ぎょつとして少年を見る。

この時間の流れを気にするでもなく、普通に話している。

「でも、付いてきてるのは意識だけか。ま、現状はそんなもんだよね」

変わりなく話す少年にゆっくりと動いている自分。

まだ、右手は届いていない。

「けど、認識までは出来るんだね。凄い凄い。本当は殺そうと思ってただけど、君は面白そうだから止めとくよ」

満面の笑みを浮かべる。

その表情には邪気は無い。

まるで悪戯好きの子供が浮かべるようなそれに、僕は戦慄した。

「ま、あと少しの余生を楽しみなよ。もう、どうしようもないんだしね。じゃ」

手をこちらに振り、一瞬でその姿が消失した。

途端に時間の流れが元に戻る。

僕の右手の先には何も当たらなかった。

そのままの体勢で数秒が経ち、膝を折る。

荒い息を肩でし、なんとか呼吸を整えようとした。

今更になって体が震えてきた。

何だ、あいつは！

意味が分からない。何を言っているのか、何故あんな奴が存在し

ているのか。

まるで以前やったゲームのよう。

それが現実で起こった。

それから数分。呼吸も落ち着き、混乱していた頭も通常の状態に戻ったはずの僕は、まだそこから動けずにいた。

## 安らげる場所

「あつ」

「ん？ どした？」

「もう終わっちゃった……」

僕の目の前にあるテレビ画面にはスタッフロールが流れている。所謂エンディングだ。

「何なの？ このゲーム。システムはまあ面白かったけど、ストーリーが無茶苦茶じゃん。全部中途半端の内に終わったし、主人公は何考えてるか解らないし」

僕は不満だった。正直、何度途中で止めようと思ったかわからない。

記憶を無くした少年が魔王を倒す事で全てを知ろうとする、と言った内容。そもそも、魔王を倒す明確な理由の無いまま、ただ「魔王を倒す、それが俺の使命であり義務だ。記憶は無いが、それだけは分かる」という一言だけで、戦う意思を固めている。なんというか、考え無しと言うか、プレイヤー置いてけぼりと言うか、何で？ と言う思いを抱いたままエンディングを迎えてしまった。

ちなみに主人公が喋った言葉はそれ以降もその一言だけだ。

「ん？ そうか？」

「そうだよ。というか何も喋らない上に意思表示は頷くか首を横に振るかだけじゃん……。しかも、自分の命が掛かっているのに平気で巻き込まれに行くし。一昔のゲームと変わらないと思うけど」

子供の頃にしたゲームは主人公の目的なんて物は存在しなかった。

というより、作中には語られていないものが殆どで、説明書に記載しているのみというのもざらだった。

だが、現代ではある程度は作中で登場人物の心理描写があるものが多い。RPGならば特に。

「まあ、そういう見方もあるけど。俺はそうは思わなかったかな」「どう言う事？」

「男なら行動で表せてね。言葉には表さなくても、主人公の選択には本人しかわからない葛藤があったと思うぞ」

「ってか魔王は？ 魔王と戦う理由は？」

「ま、そこら辺も含めて後々だな」

「へ？」

怪訝そうに見る僕に向かって少し困ったように苦笑しながら画面を指し示した。

スタッフロールは終わっておりタイトル画面に戻っている。何かあるのかとよくよく見ると、新たな項目が増えている。

『リセット』

そう書かれていた。

「周回前提のゲームだ。まだまだ先は長いぞ」

そついう兄は何故か嬉しそつだった。

\*\*\*\*\*

入学式から三ヶ月。

学校生活にも慣れ、平穏な日常を送っている。

理想通りだ。何者にも阻まれず、一人気楽に青春を謳歌する。

ああ、なんてステキな響きだろう。一人っでいいよね。

「お〜い。大和くん？」

「どうしたの弟君？」

「ふむ。やはり無理矢理連れてきたのではないか？」

「ち、違います！ 一応、意思を確認して連れてきたんだから！」

耳に入る音は僕を現実へと誘おうとする。

だが、抗う。ここで反応しては駄目だ。僕は家具に、或いは貝になるのだ。

例えここが生徒会室で、兄の友人と同級生に囲まれ、今から昼食という状況でも。

「な、なんかぶつぶつ言ってるけど」

「たぶん、大人数で昼飯を食べるって事から逃避してるんだな」

明らかに動揺している三枝先輩に、兄さんはうんうんと頷きながら答えた。

ちなみに以前はさん付けで呼んでいたが、今は先輩と呼称している。便宜上、さん付けはまずいかなという意図からだ。学校内だとそういうのちよつと気を使う。

実際に名前を呼び出したのは関わりが増えだした最近だけだ。

「……やはり、瀬戸が色仕掛けて騙してきたのでは」

「だ、騙してないから！ しかも、色仕掛けて何？ 私普段どう

「いつ風に見られてるの!？」

毒舌気味の山田先輩に、瀬戸さんは両手を振りながら必死で否定する。顔が赤くなっているのはその手の話題が苦手だからだろうか。しかし、ツツコミのキレがいいな。

瀬戸さんへの認識が少し変わった。いい意味で、だと思う。

「……その容姿で大半の一年生を惑わせてると聞いたが、違っのか?」

「何!？ その情報!」

「まあ、絵梨ちゃん是自己評価低いからね。そこがいい所でもあり、悪い所でもあるよね」

「あゝ、確かにそうかもな」

「海斗が言っな」

山田先輩は言葉に抑揚は無いが、心底呆れ果てたと言わんばかりに嘆息する。

「へ？ なんで?」

意識を瞬時に取り戻し、ぱっと顔を上げる。

鈍感な兄を持つ弟のみとしてここははっきりと自覚させてやるべきだ。

「それは、兄さんが成績優秀。容姿端麗。しかも、他人に優しい兄貴肌だからだろ」

「復活と共に、兄自慢とは、弟君も大概だね……」

「おい、瞳。今の聞いたか?」

「……今の?」

「や、大和が俺を褒めた」



「そ、そうね。褒めた、んじゃないかな」  
「ひゃほ〜い！」

座った体勢から、椅子を後方に押しつけると同時に飛び上がる兄を全員がぎよつと見る。

あの動き。さすが兄さんだ。最早、常人の域を超えている。

「ブラコン兄弟……」

「僕はブラコンじゃないです。ただ、事実を言っただけですよ」

「したり顔でその言葉が出るなら文句無しのブラコンだな」

「ちよつと引いたわ……」

呆れた様子の三人に納得のいかない僕は只管、抗議する。

何故だ？僕はなにか間違った事を言ったのか？

「それより、早く食べましょう。時間無くなっちゃう」

「ああ。そうだな」

「兄さん。もう跳ぶの止めて。そして、食べる」

いまだ飛び跳ねる兄を一喝する。

僕の言葉を聞くや否や、何時の間にか椅子を元の位置に戻し、姿勢正しく座っていた。

「はい。止めます。食べます」

宛ら、訓練された軍隊のように無表情で弁当を頼張る。

ちなみに手作りだ。兄さんの……。

「逆の立場だね……」

「全くだ」

「私、この兄弟への接し方が分からないわ」  
「気にしなくていいよ。私たちも同じだから」

三枝先輩の言葉に安心したのか瀬戸さんは笑顔で返す。  
それに釣られ、山田先輩もニヒルな笑いを浮かべていた。  
そこには確かに同志との共感が存在していた。

「で？ 色仕掛けで連れてこられたのかな？」  
「そこに戻るの!？」

漸く、箸に手を付けた頃、瀬戸さんの的確なツツコミが生徒会室に響き渡る。

「いえ、一応、昼食を一緒にどうかと誘われたので、渋りましたが承諾しました。あと、瀬戸さん意外に馬鹿っぽいんだね。あ、これ褒めてるんだけど」

「ちょっと正直すぎない!? しかもフォローになってないよ!」

ガタツと椅子を後ろに倒しながら必死でツツコミ……いや、弁明する瀬戸さんに冷静に対処する。

「今日の絵梨ちゃん、キレイだね。キャラ変わったちゃってるよ」  
「確かに。ツンデレ気味だとは思っていたが、ツツコミデレだとは新しい」

「色々混ぜすぎて意味判らない言葉になってるよ」

「む？ 駄目か……」

「……ま、でもいいんじゃない？」

「ツツコミデレが、か？ 流行るか？」

「そっちじゃなくて! あっちよ」

「……そうだな」

「あんなに楽しそうな見た事無いよ。海斗も、絵梨ちゃんも」

何か二人で話しているのは判っていたがその内容までは聞き取れなかった。

如何せん、瀬戸さんの荒々しいツツコミの数々に僕は圧倒されかけていたからだ。

ここで引くわけにはいかない。飽くまで、表面上で平静を装う。何と戦ってるんだ、僕は。

ここ数週間で瀬戸さんと過ごす時間が長くなってきた。

初めて一緒に帰った日以降、何故か、得体の知れない強迫観念のようなものを感じなくなっていた。何より、朝が清々しい。いつも見ていただろう悪夢を見ていないせいだろうか。内容も覚えていない夢。だけど、起きた時には分かる。またあの夢だ、と。その夢から解放されたからか、心が軽い。だからだろう、以前よりも自然に接する事が出来るのは。

それでもふと不安に思う事がある。

まるでそこだけ抜け落ちたように記憶が無い一週間と数時間。

瀬戸さんと帰ったあの日。何時寝たのかさえ覚えていなかった。

だが、杞憂だろう。

今はなんとも無い。何の支障も無い。

ならば、この変わり行く日常を享受するのもいいだろう、と樂觀的な思考を抱いていた。

この数年感じる事の無かった感情に驚きながら、未だこちらに必死で抗議している瀬戸さんと生暖かい目をこちらに向けている山田先輩と三枝先輩に視線を移す。

もくもくと食事をしながら、ちらちらとこちらを伺うように見て

くる兄さん。もう、喋っていい？ という意思表示だろうが、あえて無視する。

その様子を見て、微笑を浮かべる自分自身に気付いた。

## 名前

楽しい。この数ヶ月の間、そう思えた。

生徒会室で昼食を摂る事は何時の間にか恒例となっていた。

冷めた感情は終ぞ消え、今は相応の年齢に沿う生活を過ごしている。

笑う事も増えた。何が楽しいのかおかしくて、嬉しくてただ自然に込み上げる。そんな時間。いつまでも続けばいいなと考えていた。

「最近、笑う事が多くなったわね」

「ん？ そうかな？」

いつも通り一緒に下校している瀬戸さんを見た。

自覚はしている。僕は楽しいと感じている。

「そうよ。最初は無表情で何考えてるか解らなかつたし」

「そっちだって、初めて会った時、睨んで来たくせに」

「あ、あれは別に睨んでた訳じゃ……」

「睨んでたじゃん。しかも、結構毒舌だった」

「うっ。ごめんなさい……」

「いや、謝らなくてもいいんだけどね」

「私、人見知りだから……。その、初対面の人と距離を取っちゃうというか」

分からないでも無い。僕も似たようなものだから。本当は仲良くなりたくても、何故か興味の無いような態度を取ってしまう。

……精神的に幼いんだろうな。僕も瀬戸さんも。

他人を寄せ付けることに臆病なんだ。

何故か、と言われれば、解らないけど。

「ま、昔の事だし気にしなくていいよね」  
「そ、そうよね。今は……その」

瀬戸さんはもごもごと何か言いたそうにしている。

「友達、かな」

「そ、そうね」

すんなりと言う。

違和感を感じず、友人という言葉を喋る事が出来る時が来るとは思っていないかった。

何が変わったのか。恐らく僕が変わったんだ。

まるで満たされているような不思議な感覚。それは当然の事の筈なのに、僕の心を締め付けた。感慨、と表現しても良い。

当たり前の日常。それは頑なに拒み、そして望んでいた物。

たまに一人の時間が欲しい時もあるけれど。根っこの部分は変わっていないのかもしれない。

無言で歩く。だけど、空気は軽い。僕の中で居心地の良い空間がそこにはあった。

「道場には行っているの？」

「ん？ ああ、週に二、三回は通ってるよ。相変わらず僕しか門下生いないけど」

「ふ〜ん。なんか、イメージと違うのよね。強いのは知っているけど」

「オタクっぽい、って事？」

以前不良に言われた事を思い出した。

僕は意外に気にしているらしい。

確かに着痩せするし、顔も厳つくは無い。背もそれ程高くないし。

「違う違う。なんか、そう言うのに無縁そうに見えるというか、争い事を好まそうというか」

「それって褒めてる？」

「うん。一応、ね。そもそも、暴力的な人は私好きじゃないし」

「じゃ、僕みたいなのは好きなんだ」

「……え？ な、なんでそうなるの！？」

「違うの？」

僕はしたり顔で瀬戸さんに視線を送る。

瀬戸さんは慌てふためきながら首をぶんぶん横に振っている。

「ち、違うわよ！ なんで私があんたの事好きになるのよ！」

「……違うんだ」

項垂れて明らかに落ち込んだような反応を業としてみた。

瀬戸さんは僕の様子に一瞬呆気にとられて必死で弁解する。

「そ、そうじゃなくて。好きは好きなんだけど。そうじゃなくて！」

「やっぱり好きなんだ」

「だあかあああ！ 違うって言うてるでしょ！」

「どっちなのさ」

表情をころころ変える瀬戸さんを見ながら冷静に話す。

内心、面白がっていたのは心に仕舞っておこう。

「す、好きよ！」

「好きなんだ」

「そつよ！ 悪いの!？」

完全に開き直っている。

最早、目は真剣だ。息を荒げて顔を真っ赤にしている様子に、少し反省した。

「悪くないよ。僕も同じだし」

「へ？ そ、そつなの。え？ 何？ なんでこんな空気なの？ これじゃあ、まるで」

「告白したみたい？」

「き、きやああああ!！」

その場に座り込み両手で顔を覆っているその姿を見て僕は嘆息した。

自分の行動を思い返し、羞恥の余り混乱しているようだ。いじめ過ぎたかな。

小刻みに震えている瀬戸さんを見て、罪悪感に駆られる。

からかっただけじゃないんだけど、ね。

「ねえ」

「いやああ!！」

これじゃ、完全に僕が悪者だ。

というか、友人に悲鳴を上げられるなんて経験、忽々する物じゃない。

「ちょっと、落ち着こうよ」

「なんで、そんなに落ち着いてるのよ!！」

「いや、だって事実を言ったただけだし」



「そ、それじゃ、私が馬鹿みたいじゃない」

「大袈裟だとは思うけど、その反応が正しいとは思ってよ」

「そ、そうよね。そうなのよ」

瀬戸さんは呪文のようにその言葉を反芻している。

「ま、友達に好きとかはあんまり言わないだろうしね」

「う……ん？ 友達？」

「え？ 友達、でしょ？」

呆気にとられている瀬戸さんを怪訝に思う。

何か間違った事を言っただろうか。

「じゃ、さっきの言葉は」

「え？ 友達として好き、って意味でしょ？」

「……あ」

「え？ 何？」

声が小さくて聞き取れなかった。

再び聞こうと顔を近づけた。

「馬鹿ああ！」

頭突きである。

花の女子高生がヘッドバットを繰り出してきたのは余りに予想外だった。僕は反応する事も出来ずまともに鼻に直撃を受けた。

痛い。痛すぎて涙が出そうだ。

「い、いたひっ」

「いたひっ、じゃないわよ！」

「何を怒ってるんだよ」

「怒って無いわよ!」

「怒って………ませんよね。私の見間違いでした」

完全に目が据わっている。

その姿に得体の知れない何かが語りかけてきた。逆らうべきでは無いと。

本能が、直感が、僕の全てがそう語っていたのだ。

「はあ。もう、いいわ」

怒りを通り越したのか、疲れ果てた様にとぼとぼと歩き出した瀬戸さんの後ろを恐る恐る着いていく。

「何してるの？ 横に来たら？」

「あ、すみません………」

「何で敬語なのよ」

「いや、おこがましいかと思って」

「訳が解らないわ」

重い。雰囲気が。

自分の所為だとは思っていたが、まさかこんなに激怒されるとは思わなかった。

無神経な自分を戒めるべきだと堅く決意をする。あの憤怒の形相は二度と見たくない。

女の子怖いよ。

解っていた。僕もそこまで鈍感じゃない。

瀬戸さんが僕に好意を持ってくれているのではないか?とは思っていた。

素直じゃない彼女の事だ、さっきのも勢いで言ったのだろう。そう仕向けた感があった。知りたかった、という考えもあった。僕も同じだ。今の生活を齎してくれた彼女には感謝をしているし、たぶん好意も持っている。

でも、解らない。好き、と言う事が解らない。好意とは違う、異性として好きという感情が解らない。

友人としては大事だけど、女性としてどうかと言われたら、好きと言える自信が無い。

解らない。そんな気持ちになったことが無いから。

だから、誤魔化した。卑怯だと思いながら、途中で逃げた。怖かったから。解らないまま、流されていくのが怖かった。相手の思いだけ知ろうとした。

……最低だ。

「ねえ」

沈んだ心を何とか持ち直す。表面上は普段と変わらない僕が平然と答えた。

「なに？」

「私達、友達なのよね？」

「改めて言うとなんか恥ずかしいけど。僕はそう思ってるよ」

「そ、そう。じゃあ……」

「……何？」

嫌な予感。

大した事じゃない。ただの日常の会話。まだ先は聞いていないが、その先を聞きたくはなかった。

けれど、話を逸らす事も出来ず、先を促す。

何も無い。ただ、の会話だ。

「何で――の？」

聞こえない。聞き返してはならない。聞くな。聞いては駄目だ。踏み入るな。踏み入られるな。逸らせ。知覚するな。忘れる。何も無い。会話など存在しない。気付け。

「え？」

「だから、何で名前で呼んでくれないの？」

「……名前？ 呼んでるじゃん」

瀬戸さん、って。

あれ？

いや、何度か呼んだ事がある。間違い無い。生徒会室で何度か忘れてしまったのか、気付いていないのか。

「あんた、とか、そっち、とか、ねえ、とかしか呼ばれた事無いわよ。というより、名前、聞いた事無いわよね？」

「へ？ え？ 何を言ってる？」

兄さんがいつも僕の事を呼んでるじゃないか。

「海斗も名前呼ばないし」

何を言ってる？

視界が歪む。理解しがたい現実に意識が揺らぐ。

何だ、名前くらいで何を動揺している。いや、それよりも瀬戸さんは何を言っているんだ。

「兄さんはいつも僕を名前で呼んでるし、最初に自己紹介したでしょ」  
「いつも、おーい、とかだけでしょ？ それに、紹介は弟だ、で終わったわよ。だから、山田先輩も三枝先輩も名前で呼ばないんじゃない」

何がどうなってる？

思い出せ。いや、確かに僕の名前を兄さんが言っている筈だ。何度も、皆の前で。なのに、なんだ？この違和感。何故、気付いていない？

待て。僕は井戸力也に自分で名乗ったぞ。それは間違いない。何故か息を呑みながら答えた。

「井戸……力也は？」

「誰、それ？」

「えと、ほら同じ学年でやたら体がでかい爺つい奴いるだろ」

あの身体だ。目立たない筈が無い。

現に力也と話している最中、他の生徒の視線が痛かったのを覚えてる。

それに、瀬戸さんも見ていたはずだ。一瞬ではあったが確かに力也の姿は見ている筈。

「そんな人いないと思うけど」

「いや、見てたでしょ？ ほら、二ヶ月前くらいに、廊下で僕と話してたあいつだよ」

小首を傾げ、何とか思い出そうとしている。

だが、頭を振るう。

「……ごめんなさい。解らないわ」

あれだけ印象深い人間を忘れる？

有り得ない事ではない。けれど、おかしい。何かが、或いは何もかも？

「嘘だろ……」

「ねえ？ 黒井君？」

ぞくつと背筋が凍る。

ただ、名前を呼ばれただけなのに。まるで、刃物を突きつけられたように、身体が硬直した。

瀬戸さんの瞳には何故か感情が見えない。

「名前、教えて？」

優しく微笑むその姿に畏怖を感じた。

相手は先程まで友人と言っていた少女なのに。

怖かった。

「名前、教えてよ」

先程の言葉を繰り返す。

瀬戸さん、だよな。

当たり前の事を疑う。僕は混乱していた。まともな思考は働かず、何時の間にか、瀬戸さんの瞳を凝視している。目が離せない。

「あ、ぼ、僕は」

「うん」

「僕の名前は」

「うん」

「黒井……」

やめる。

『やめる』

やめてくれ。

『言うんじゃない』

聞いた事のある声が聞こえた気がした。

「大和」

その言葉を放った瞬間。世界は止った。

## 始まりと終わり

名前を言った瞬間、辺りの景色が動きを止めた。

風も吹かず、音も響かず、瀬戸さんも笑顔のまま微動だにしない。

呆然としたまま数秒間が過ぎ、途端に身体が重くなってくるのを感じた。

高熱に魘されている状態のように気だるい。身体は思うように動かないのに意識ははっきりしていた。

押しつぶされそうな程の圧迫感に、思わず膝を折る。僕は硬直した瀬戸さんに跪く様な体勢になっている。

「なんだ……これ……」

自分の声なのに思うように出せない。

焦りも、恐怖も感じずただあるのは疑問だけだった。

理解の出来ない現状に対する疑問。

だが、答える者はいない。

息を荒げる。

何か、自分の中から出ていくような感覚。

嘔吐感にも似たそれに必死で抗う。

だが、込み上げてくる物は胃からではなく背中から。何かが這いずる。内から外に出たがるそれを必死で押し留めようとした。

どうすれば良いのかわからず、ただ耐える。

何時の間にか痛みを伴っている。訳の解らないそれに、ただ身を任せつつあった。



「ぐう……！」

突如、背中を引つ張られる。いや、背中を開かれた。

僕は膝を付いたまま背中を反った体勢になる。

幻覚だろう。だが、それと思い込むほどの激痛が背中に走った。

痛い、なんて物じゃない。痛みを通り越して火傷をしたように熱を持っている。激流のように流れる知覚は僕の意識を遠ざけていく。

あまりの痛みに呻き声を上げた。

痛みの奔流が突如止り、数瞬の後に轟音と共に背中から何かがあふれ出す。

鼓膜が破れそうな程の風切り音。

先程と同じくらいの激痛の所為で身体が動かず両耳を塞ぐ事も叶わない。

数秒か、数分か、そのままの体勢で痛みに絶え続けていた。

身体から全てが出切ったのか、やがて終わりが来た。

解放された途端に両手を地面に付き荒く呼吸を繰り返した。

苦しい。意識があるのが不思議なくらい、体中が悲鳴を上げている。

呼吸を落ち着かせる事に意識を集中する。

何度かの呼吸を終えた時に気が付いた。

「瀬戸さん……？」

眼前に居たはずの瀬戸さんが何時の間にか忽然と姿を消していた。見回すが周囲には誰も居ない。

辺りは夜のように暗く、空は黒一色で覆われている。

今は夕方だ。

「さつきまで、明るかったのに」

誰に言うでもなく思わず呟く。

路地に街灯は存在しない。不明瞭な視界は近距離の障害物さえ視界に捉える事は困難だった。

何故、夜に？

空を見上げる。何も無い。在るのは黒のみ。月も星も見えない。

ただ黒のみ。

暗い、いや、黒い空。

閑静では在るが、静寂が訪れる事は無い筈の通学路は、暗闇に包まれ、異様さを醸し出している。

無音と暗闇。

それは恐怖を感じさせるのに十分な効果だった。

正面、数メートル先の十字路から誰かの足音が響きだした。

異常な状況で自分以外の誰かの存在は自然と警戒心を生み出した。規則正しい音が無音の路地に響き渡る。その音は徐々に大きくな

り、確かにこちらに近寄ってきている。

呼吸も忘れて音に聞き入る。

息を呑み、何も行動を起こさそうとしない自分に気付けなかった。

「やあ」

暗闇から現れたのは白髪の少年だった。

視界は闇で覆われているはずなのに、少年の輪郭は明瞭に描かれている。

全身白い風貌の少年は黒い世界から異常に浮いている。

「見付かったよ。予想通り」

「見付かった……?」

「そうだよ。君自身の選択によってね」

「何を言っている?」

「前もそう言っていたね。ま、覚えてないか」

何を言っているのか解らない。

「名前って言うのは疎かにする物じゃない。名は体を現すって言う  
だろ?」

突然話を切り替えられ困惑した。

僕の様子など気にもせず少年は言葉を繋げる。

「名前は存在そのものさ。それがあからこそ君という存在が現実  
に感じ取られる。そこに居ると分かる。だからさ」

「何を……」

「だから、君は見付かった。孤独に生きていれば良かったのに、見  
付かった。そしてこの世界は崩壊する。君の所為でね」

「名前を……言っただけだ」

「君は存在しては居ない筈の人間なのさ。この世界にとっては何」

何が面白いのか満面の笑みを浮かべている少年を呆気に取られた  
ように見えていた。

分からない。意味もなにもかも。

「ま、この話は後にしようか。君もそうしたいだろ?」

僕もそうしたい?

何もかも分かった風に言いやがって。

理解の範疇を優に超えた状況に苛立ちを隠せない。

思考を全て投げ打ってその感情に身を任せてしまおうかとも考えた。

だが、何かが引つ掛かる。何か忘れている。

「君は酷いなあ。さっきの子はいいの？」

「瀬戸さん……」

「今更思い出すなんて、忘れてもしたのかな？」

嫌味をたっぷり含んだ口調。

怒りに我を忘れそうになる。冷静になれない。

ぐっと堪えて、なんとか言葉を搾り出した。

「どこに……いる？」

「たぶん、君がいつも居る場所じゃない？」

その言葉を聞いて、すぐに踵を返す。

学校だ。

信じるに値するかどうかは考えなかった。

手がかりなんて何も無いのだから。

「じゃ……またね？」

もう、会いたくは無い。

その願望は叶わないと、何故か思った。

\*\*\*\*\*

校門まで全速力で走った。

平坦な道程だった筈だが、途中なにか障害物に躓きそうになるのを幾度か繰り返し走り続けた。

さすがに長距離を走り続けるのは無理がある。途中から明らかに失速していたが、何とか学校へと辿り着いた。

学校は静まり返っている。

明りが全く無い。月も星も出ていないのが、目が慣れたのか少し離れた所ぐらいなら視認出来る。

僕の足跡と呼吸の音だけが辺りに響いている。不気味なくらい静かな学校。

さすがにこんな状況で冷静で居られる訳も無い。正直怖い。だけど、行くしかない。

僕は意を決して校舎に入ってしまった。

当たり前だが中も真っ暗だ。

ホラー映画のワンシーンの様に見える。

玄関の曲がり角から何かが出てきそうな気がしてならない。

恐怖は想像力によって掻き立てられる。考えるな。今は前に進む。

どこに行くべきか。

僕がいつも居る場所、と言ったら、教室か？

何しろ情報が少ない。行き当たりばったりだが、行動しないよりはマシだ。

僕は正面の階段を上った。

足音が反響音となっている。余計に恐怖心を煽る。

怖い。

誰も居ない。

僕だけだ。

震えそうになる身体を必死で抑え足を踏み出す。

瀬戸さん。

本当にここに居るのか？

あいつの言葉を信じず、家に帰って居ればよかったんじゃないか？  
そうすれば、いつも通り兄さんが笑顔で迎えてくれていたんじゃないか？

そんな甘い考えを浮かべては掻き消す。

落ち着け、冷静になれ。

こんな状況で、いつも通り、が有り得るとは限らない。

異常な状況。黒い空も、無音の住宅街も、明りの無い路地も、あの少年も、いつも通りでは有り得ない。

それに、突然消えた瀬戸さんの安否も確認せずに一人でのこのこ家路に付くなんて出来ない。

脳内での葛藤のお陰か何時の間にかすぐ近くに教室が見えた。

扉の前に立って、少しばかりの逡巡の後、思い切って扉を開いた。

中からは何の反応も無い。

念の為、教室に入ってみる。

やはり誰も居ない。

いつも通りの教室だ。

僕の机の中を見てみると、変わりなく置き去りにされた教科書たちが敷き詰められていた。

やはり、異常なのは状況だけで、ここは間違いなく僕のいた学校

だ。

僕だけ異次元に飛ばされた、とかそんな状況では無い事だけは分かった。現実的に有り得ないと考えられる事も今は思考の範疇に入れてしまっている。

……とにかくここに居ても仕方ない。

あとは生徒会室、か？

そこくらいしか学校内にはよく足を運ぶ場所は無い。

もし誰も居ないなら、自宅に戻るか、道場に行くしかない。

最初に比べると冷静になりつつある自分に多少驚きつつも生徒会室に向かった。

新校舎にある僕の教室から、旧校舎にある生徒会室までは少し距離が在る。

ここに居ても何も始まらない。

とにかく歩き始めた。

暫く歩くと、ふと何かに引っ掛かる。

ん？ 歩きづらいな。

無意識に蛇行している自分に違和感を感じ、ふと足を止めた。

自分が避けていた場所に導かれるように視線を送る。

何かがある。

見た事のある何か。

なんだろう？

よく見えない。そういえば、学校に向かって走っていた時も何度か見たような気がする、それを眼を凝らしてみた。

集中してみていた所為か思わず其方の方に足を踏み出してしまっ  
た。

ピチャ、っと水溜りを踏んだ時に出る音が廊下に響き渡る。

なんだ？ 水か？

足元を見ても暗すぎてそれが何か判らない。

理解は出来なかった。だが、何故か心臓が五月蠅いくらいに響い  
ている。

少し近づいたお陰で廊下にあつたそれが見えた。

「ひっ……!!」

見慣れたモノ。

毛嫌いしていたモノ。

探していたモノ。

人が死んでいる。

制服を着ている。学校の生徒。女生徒。

惨い姿から目を逸らせない。足元の液体はその女生徒を中心に広  
がっていた。幸いにもうつ伏せになっているため、傷は見て取れな  
い。

ガチガチと、不快な音が鼓膜に響いてきた。その音を生み出して  
いるのは僕自身だと気付いた。

身体が震えている。半開きになった口からその音は響いている。

無意識に辺りを見回す。

見える。

遠くは視認出来ないが、近くにも数人。



皆、一様に目を見開き、全く動かない。  
死体、だ。

「あ……あ……」

見知った顔は居ない。

だが、一人の生徒と目が合った。

死んでいる生徒は恐怖に表情を引き攣らせたまま、死んでいる。

叫びたい衝動に駆られ、その場に蹲り、現実から逃避しそうになった。

「……瀬戸さん、兄さん」

縋るように二人を呼んだ。

誰も答えない。

何かに誘われるように足元も覚束無い状態で生徒会室に辿り着いた。

そこら中に死体が転がっている。

何故今まで気が付かなかったのか。

無意識に現実から目を反らしていたのか。

これは、僕の所為？

違う。違う！

高が名前を言っただけでこんな事になる訳が無い。

そんな不条理、許されるはずも無い。有り得ない。

頭を振り、生徒会室の扉を開ける。

## 白昼夢に似たそれは

暗闇から突如として何かが見前へと迫る。

無意識に身体を捻りながら首を傾げ顔へと向かってくる物を何とか避ける。

すぐさま体勢を立て直し、生徒会室の開け放たれた扉を睨み付けた。と、同時に此方に再び棍の様なものが迫ってきた。後方へと跳び寸前で何とか避けた。

相手と距離が少しだけ開く。とは言えその相手の姿は未だ見えていない。

相手の武器は恐らく長物。勿論刃物は付いていないが、棍に近いもの、棒だろう。学校にある物と言えば、掃除道具が妥当だろうが、それは人の使う者だ。

僕は若干迷いながらも声を上げた。

「止める！」

脳裏に先程の生徒達の姿が浮ぶ。

ひょっとして対峙している奴が犯人なのか？

いや、それは無いだろう。あれ程の人数を猟奇的に殺害するのは常人には不可能だ。少なくともそれ相応の武器が必要だ。対して、相手の得物は殺傷能力の低そうな打撃武器。

僕の声に反応したのか、攻撃が止んだ。

「大和……か？」

「兄さん？」

声には明らかに動揺が滲んでいる、

暗闇から現れたのは間違いなく兄の姿だった。

弛緩した空気が緩むのを感じながら、ほら、やっぱり名前呼んでるじゃないか、と場違いな考えを浮かべていた。

「良かった……。生きていたんだな」

「兄さんも」

お互いの表情がわかる距離まで近づくと、どっ、と力が抜けてしまっ。

気が緩んだ所為だろう。先程まで意味の解らない状況に置かれ、尚且つ一人だった事から解放され安堵した。

僕と同様に、兄も大きく嘆息し、ほっと胸を撫で下ろしているようだ。

「とにかく中へ。化け物が来る」

「……あ、うん」

その言葉に一瞬身が竦む。

違う。違うんだ。兄さんが言っているのはその事じゃない。

すぐに頭を振り、自分の考えを否定した。

『化け物』について詳しく聞きたかったが今は安全を確保する事が優先だ。

そう思い、兄さんに続いて中に入る。兄の手には恐らくモップの柄の部分だろう物が握られている。

あれで、攻撃してきたのか。

僕が中に入ると、兄さんは扉の鍵を閉めた。明らかに強度の無さ

そう一枚戸は非常に頼りない。

そんな僕の考えを汲み取ったのか兄さんは苦笑した。

「何か押さえる物があると良いんだけどな」

見ると室内はがらんとしており、家具や生活用品の類は見つける事が出来ない。

机や椅子くらいはあったのは覚えてる。

何も無いのはなぜだろうか。

よくよく見ると壁際に並んでいる窓の前にそれらは猥雑に並んでいた。入り口の戸より窓のほうが脆いという考えからだろうか、ここは二階だぞ？

「外から一回襲撃されてな。それで補強の為に仕方なく配置した」

僕の表情だけで全てを理解したかのように説明をしてくれた。

やれやれと肩を竦めている様子は状況に合わない、が僕の心を軽くさせる。

「兄さん一人？」

「いや、端に瀬戸と三枝がいるよ」

よかった瀬戸さんは無事だったのか。

その言葉を聞いて端の方に駆け寄る。

近づくに連れてようやく視界に捉える事の出来た二人は震えながら肩を寄せ合っている。

「瀬戸さん、怪我は無い？」

僕の言葉に対する返答は無かった。ただ反応はあった。明らかに

警戒している、その反応が。三枝さんも同様の反応だ。

眉根を潜め瀬戸さん達に詰め寄ろうとすると、肩を捕まれた。振り返ると兄さんが首を横に振っている。

その様子に素直に従う。

何か、あったのか？

兄さんは瀬戸さん達とは反対の端に行き声を潜めて話し出した。

「ちょっと、色々あってな。軽いショック状態みたいで、俺にも同じ様な反応をするんだ」

「なにが、あったの？」

「……樹が、目の前で殺された」

思わず息を呑む。

山田先輩が……死んだ？

何を言っているんだ。

「化け物が窓から侵入してきて、幸い一人だったからなんとかあったが、樹がその時に……」

兄の視線を追う。

教壇、つまり教室の前方に布に覆われた何かがあった。恐らく力ーテンだろう。

布を纏った膨らみは人の形をしているように見えた。

「正直、どうにかしてやりたいが、こんな状況じゃ吊る事も出来ない。瀬戸も三枝も、樹の最後を見てしまっているし、近くに居ない方が良いと思うんだが、かと言って廊下に放って置くような事も出来ない。悔しいけど、そこに寝てもらっている」

どんな状態なのかは解らない。

けれど、その布越しに居るはずの山田先輩は全く動いていなかった。

絶句する。

言葉にならなかった。

人の死を目の当たりにするのは初めてではない。けれど、そうそう慣れる者でもない。何度、目にしても。それに感情を抱く事が出来なくなつた人間は最早、人格が欠損していると思つても良い。それも平和な日本で過ごしている僕の主観的な考えに過ぎないのだと思ふ。それでも、慣れてはいけない。

山田先輩とはそれ程親しい関係ではない。けれど、それでもその人間の死は、先程の同じ学校に通う生徒の死よりも衝撃だった。

床を踏みしめる足は震えている。

兄の顔を見る。

険しい顔つきだが、そこにあるのは悲しみや恐怖ではなく、何かに立ち向かう意思。

対する僕も表面上平静を装い、兄さんと会話をしている。

こんな状況で？

瀬戸さんや三枝先輩の様子は明らかに異常な状況に動揺し、震えている。それが、普通のように思えた。

何かしらの違和感を感じずにはおれず、無意識に山田先輩へと近寄る。

「……見ないほうが良い」

兄の言葉を見殺して山田先輩に掛かっている布を剥いだ。

「思わず呻き声を上げそうになる。  
体中赤に染まった凄惨な状態だ。凝視する事を躊躇う程の酷い傷。  
上半身は二本の刃物で切り裂かれたような傷跡がある。」

何かの情景が重なる。誰かの姿と同期する。  
フラッシュバックのような物に見舞われ頭を抱え込んだ。  
何だか解らない。  
けれど、それと同時に嘔吐感が湧き出てきてしまう。

咳き込みながら、山田先輩から視線をそらした。

それ以上見る事を憚られた僕は布をかぶせた。

深呼吸をする。

落ち着け。冷静になれ。焦れば何も出来なくなる。  
師匠の言葉を胸中で反芻する。何度も。何度も。  
混濁しそうな思考を無理矢理、平時に戻し、兄に振り返った。

「……化け物、って？」

「解らない。少なくとも人間じゃない。表現が難しいが、人型の何か、だ」

「なんだよ、それ」

「ゲームに出てくるモンスター、みたいな。化け物、か」

その言葉を聞いた瞬間、どくんと、心臓が一際高鳴った。  
世迷言を言っている、と思う筈の言葉に何故か酷く動揺した。  
何故？

「そいつが学校に居る人達を殺したのか？」

「人達？ と言う事はやはり、樹以外にも死んだ人間が居るのか…

…」  
「……うん」

廊下の様子を見る限り兄さん達以外の生存者が居るとは考えにくい。

とすると……。

総勢三人か。

「なんで、こんな事に……？」

今のこの状態を僕が起こした物なんて信じたくなかった。

あの出来事があった後に今がある。

それを岐路としているならば、原因は……僕にしかない。

何故、理由は、そんな問いかけを何度したか解らない。

自身に対する言及と否定。

だが答えは得られない。こんな異常事態に対する答えを持っているのは、恐らくはあの少年だけだ。

何かを知っているような言動。それに、ここに誘導したのはあの少年だ。

「解らない。さっきまで皆で議題に対して話し合っていたんだ。日が落ちてきたからそろそろ解散しようって事になって、そしたら、突然辺りが真っ暗になって、雨でも降るのかな？ って思ったら、空が曇じゃない何か黒い物に覆われていた。その直後さ、化け物が

……」

「もついいよ」



話すをしている中、徐々に感情が高ぶってきた兄を制止する。表面上、平静を装っているが兄もただの高校生だ。先程の状況を思い出し、冷静で居られなくなっているのだろう。居た堪れなくなつて思わず声を掛けた。内心、兄の人格を疑っていた自分を叱責したい気持ちが生んでくる。

「それから、今みたいな状況のまま、つて訳だ」

「……瀬戸さんは？」

「瀬戸？」

今の話には瀬戸さんの事が抜けている。

そもそも、僕と一緒に帰った時からそれ程時間は経っていないのだから、途中で瀬戸さんがここに逃げ込んだ描写が無いのはおかしい。

日が落ちてきた時間とほぼ同時期に黒い世界に変貌したのなら、瀬戸さんは既にここに居た事になる。

「ずっと、ここに居ただけ？」

「え？」

何を言っている？

僕と一緒にさっきまでいたのに。

「今日は生徒会活動日だぞ」

「え？ あ……」

毎週、水曜日。生徒会が活動している日。

それ以外の日は自由行動が出来るという話を瀬戸さんから聞いた

時、奔放な会合に半ば呆れていたのを思い出す。

そういえば、いつもは一人で帰っていた曜日だ。

曜日に対する認識が強くなかった所為か、今日に限って瀬戸さんと帰っていたのに、校門で待っていた瀬戸さんを疑問に思わなかった。

「瀬戸はずっとここに居た。活動中は生徒会室から一度も出て行ってもいないぞ」

「え？ じゃ……」

さっきまで居たのは誰？

瀬戸さんが二人いたって事？

僕の勘違い、なんて事は無い。

確かに話したし、そこに居た。

白昼夢でも見ていたって言うのか？

兄を見ると怪訝そうにこちらを見ている。

嘘を言っているようには見えない。それに兄はこんな嘘を付くような事はしない。

それじゃ、あれは誰？

## 外と中

止水学園は静かだった。部活に精を出す生徒の声も今は聞こえない。暗闇に覆われているため時間の感覚が狂っているが、今はまだ日が沈む前か、沈んで間もないくらい。

兄との会話に納得のいかない部分が目についた。だけど、今は疑問を解く事よりも皆の安全の方を優先させるべきだろう。

「……………で、どうするの?」

「どうするか……………」

兄さんも切迫した状況に戸惑っているみたいだ。いつもなら、多分な最良な判断を即座に下す所だが、さすがに難しいようだ。

「状況確認からするべきかもね」

「あ? ああ、確かにそうだな……………」

「まず、恐らく学校の生徒はほぼ全員生きていないと思う。それと、ここに来るまで住宅街も通ったけど、家の明りは何処もついていなかったよ。そう! 電気は?」

「何故か点かないんだ」

「そっか……………。多分だけど、学校の人達だけじゃなくてこの街、全域で生存者は少ないと思う」

「電気が点いてなかったからか? それなら俺たちと同じ状況の人もいるかもしれないだろ」

「そうかもしれないけど。多分その可能性は薄いかも。だって、全く物音がしなかったし」

「……………息を潜めてる、とか」

「この、現代社会で? まず、警察に連絡するか、或いは外に出て状況を確認するんじゃないかな? 学校みたいな人が多くいる建物

じゃ無い限りはそう思うと思う」

「電話は使えないぞ」

「え？」

兄さんはポケットをぐそぐそしたと思うと、僕の目の前に携帯電話を出してきた。

圏外。画面左上にそう書かれていた。

「……じゃあ、やっぱり外に出た人間が大半だと思う」

「その根拠は？」

「ここに来るまでに……見た。多分」

多分、というのは記憶に無いからだ。思い返せば、走っている最中、無意識に避けていたあれが恐らく……。

「多分って……」

「暗かったから」

言い訳。暗かったから死体が見えなかった、なんて苦し紛れにも程がある。

でも、そう言わないと。街中に転がっている人間に気付かなかつたなんて、言えない。

「そうか……」

兄さんはそれ以上追求してこなかった。

沈黙。僕らの会話が無ければ、辺りは静寂に包まれるだけだった。少しかだけ聞こえるのは、瀬戸さんと三枝先輩のか細い泣き声だけだった。

泣いている。

友人、少なくともそう言える間柄の人が泣いているのに、僕は兄と状況整理なんてしている。しかも、淡々と冷静に。恐らく兄は必死に感情を抑えての事だろうが、僕は沸き起こる感情は殆ど無かった。さつきまで、死体を前に狼狽していた筈なのに、今は成りを潜めている。

……僕は、まともだよな？

「二人の事は気にするな。今はそっとしておくのが一番だ」

僕の視線に気付いたのか慰めの言葉を掛けてくれる兄の表情は柔らかかった。

「ん」

軽く首を縦に振り同意を表す。  
少しだけ、心が軽くなった。

「携帯は？」

「え？ 持ってるけど」

いつもポケットに入れてそこから出す事も無いけど。  
掛かって来ないし、掛ける事も無い。

精々が、兄さんに帰る時間を伝えるだけ。

新品同様の、傷一つ無い黒い色の、二つ折り携帯を取り出す。これでも、二年使っているんだけど。

「掛けてみる」

「圏外なのに？」

「掛かるかも知れないだろ？ 念のため、な」

電子音が辺りに響く。兄が僕の番号を探しているみたいだ。というか、プッシュ音くらい消せば良いのに。機械音痴な兄には難しいかもしれないな。兄さんはゲームは出来るのに、その他の機械類は苦手という人種だ。電話なら、通話とメールは出来るけど、アラームの設定さえ出来ない、という。

一瞬の静寂の後に、僕の携帯が震えた。

「うわ。掛かってきた」

「あれ、通じる。警察と家には繋がらなかったのに」

二つ折りになっている携帯を開くと画面上に、兄さん、という文字と電話番号が浮かび上がっている。

兄さんの携帯と同じ様に圏外の文字が浮んでいるが、なぜか僕の携帯と兄さんの携帯は繋がっている。

「ん。じゃ、決まりだな」

「え？ 何が？」

「ここに居ても埒が明かないから、俺は外の様子を見て来ようと思う。連絡の手段が無かったからどうしようかと思ってたけど、それも解決だな」

「いやいや。外は危険だ、って兄さんも言ってたでしょ。だから、ここに閉じこもってたんでしょ？」

「まあ、二人が居たしな」

最後の言葉は声を抑えた。

二人が居たから身動きが取れなかったと良いらしい。けれど、一人だから良いっていうものでも無い。

「今は大和も居るし、二手に分かれたほうが良いだろ？」

「そうかもしれないけど、ここに居た方が安全なんじゃ」

「おいおい。ここで、何時来るか解らない、いや、来ないかもしれない助けを待つのか？」

「……それは」

「食事もトイレも、どっちにしても外に出ないといけない。だろ？」

「それなら、僕が行くよ」

「おいおい。弟を危険な目に合わせろつてのか？」

「僕は、昔の僕じゃないよ」

反抗心、のような物もあったかもしれない。

言葉に棘があったと、自分でも思った。

「そうかもしれないが」

「今は、僕のほうが強い」

子供だ。自分の方が優れていると、そう言いたいだけだ。

けれど、その自負もあった。この数年間でそれなりの鍛錬をこなして来たのだからその自信も満更ではない筈。

自分の矮小な誇りを守るための発言に言い訳しているのは痛いほど理解していた。

でも、兄さんを危険な目に合わせたくないという思いもあったから。譲れないという思いもあったから。僕は前言を撤回しない。

「……そう、だな」

兄さんは少しだけ寂しそうな表情をした後、そう言った。

「じゃあ、大和に任せるか」  
「任された」

勢い良く頷く。

死体が転がっている外に出る。それだけで足が竦みそうな恐怖を感じるはずなのに、僕は全く物怖じしていなかった。

冷静に客観的に見る。

異常、なんだろうな、僕は。

「じゃ、行って来る」

「お、おい。武器は？ 何も無しでいくのか？」

「刀は無いし、慣れない道具は邪魔だから、このままでいいよ。何かあったら連絡する」

「そうか……」

「まずは道場に行つて見る。その後、コンビニとかで飲み物と食事があるか見てくるから」

「……解つた。あ、ちよつと待て」

兄さんは暗闇に消え、少しの後にまた現れた。

「これ、持って行け」

手渡された物は小さめな棒状の電灯だった。

「ん？ 懐中電灯？」

「ああ。生徒会室に常備していた奴だ」

「なんで、使わなかったの？」

「外に出た時に使うだろ？」



ここまで想定していた、って事か。  
試しに、スイッチを入れると辺りが明るく照らされた。すぐ、電源を切る。

明りが無くても困らない状態のときはあまり使わない方が良いでしょう。勿体無いし、夜目に慣らして置く方が柔軟に対応できる。

「そか。じゃ、有難く使わせてもらっよ」

「ああ。気をつけてな……」

「うん。それじゃ」

戸に手を置く。先程の外の光景を思い浮かべ、少しだけ、怖くなってしまう。

「待って」

振り返ると何時の間にそこに居たのか、瀬戸さんが近くに居た。何故か、僕を睨みつけている。まるで、最初に会った時のようだ。

「私も行く」

「……は？」

「私も行くから！」

え？　なんで？　さっきまで、泣いて、錯乱していたのに。

動揺する僕を更に睨みつけてくる。いつもの瀬戸さんの態度だった。

内心、少しだけ安堵した。

「いや、危ないし」

「ここも危ないわ」

「まあ、そうだな」

いやいや、兄さんも止めてよ。なんで、同意してんの？ この人しかも、ちょっとニヤニヤしてますよ。なんか、むかつく……。

「大丈夫。足には自信あるし。足手まといにはならないから」

「そういう問題じゃないでしょ……。そもそも、なんで着いて来るの？ さっきまであんな状態だったのに」

「……あんだ、私たちの為に外に行くんでしょ？」

あんだ、か。

そういえば、そう呼ばれた事しかなかったかな。

「僕の為でもあるんだけど」

「……どっちにしても同じよ！ 私も行くから！」

勢い込んで僕の方に歩いてくる瀬戸さんに少しでも気圧される。

さっきまで泣いていた人間とは思えない。いや、今も、少し泣いている？

何故かは解らないけど、思わず動揺してしまう。

こうなったら、瀬戸さんは首を縦に振るまで譲らない。強行して外に出ようものなら、走って着いて来るだろう。

無意識に溜息を漏らした。

「解ったよ……」

「んー！」

さっきの僕と同じ様に、勢い良く首を縦に振る瀬戸さんに、苦笑を浮かべてしまう。

何故か満足そうだ。

「じゃ、行きますか」  
「そうね」

やっと、外に出る事が出来る。

ふと、振り返ると、複雑そうな表情の兄が目に入った。

やはり、心配、なんだろうな。

「気をつけてな」

「うん。じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

必ず帰るという意味を込めた言葉は兄に届いたようだった。

## 不理解

暗闇の中、瀬戸さんと一緒に廊下を歩いた。

真っ暗と言うほどでも無いが、明りが殆ど無い通路を歩くには足元が覚束無い。

「ちょ、ちょっと待って……」

少し後ろから聞こえた声は若干の焦りを含んでいた。

どうやら、少し早く進みすぎたみたいだ。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ。よく、そんなに早く歩けるわね……」

感覚的に、と言った方が良いか、なんとなく辺りを認識できる。

何故かは解らないけど、瀬戸さんの状態を見る限り、僕に限ってという域を出ないのかもしれない。

なんなんだろう。これは。

瀬戸さんの所まで戻ろうかとも思ったが、こちらに辿りつくまで待つ事にした。

周囲にはまだ、あれは無いみたいだし。

『……………れ……』

突如、何かが頭に鳴り響いた気がした。ノイズの混じった音声のよう。

怪訝に思いながら、少しばかり耳を済ませてみたが、聞こえるのは恐る恐る此方に歩いて来ている瀬戸さんの足音しか聞こえなかった。

「……ん？ 気のせいか」

小首を傾げ、そう結論付けた。

「うん？ どしたの？」

「いや、なんでも無いよ。行こうか」

「え？ ちょっと、待ってよ」

瀬戸さんは不安そうな声を上げる。

明りを灯そうかとも考えたが、現時点ではそれほど困っている訳でもないし、点ける必要に迫られた時の為に取っておきたい。僕は、  
だけど。

手元の懐中電灯を点けようか一瞬迷ったが、頭を振ると、瀬戸さんの手を握った。

「は？ え？」

「危ないしね」

「で、でも。ちょっと、手を……」

「非常事態だし。あんまり、ゆっくりもしてられないから」

了承を得る前に足を動かした。

瀬戸さんは僕に引き摺られる様に着いて来る。

やはり抵抗があるのか最初はもごもご何か言っていたが、やがて大人しくなった。

拒絶されなくて良かった。

この先の廊下には、先程僕が遭遇した生徒達が横たわっている。出来る事なら気付かないで欲しかった。

それに、少しだけ怖かった。

誰かの手を握れば心が落ち着く、そう思ったのかもしれない。

笑みを浮かべてしまう。それは自嘲を伴っている。

他人と関わらないようにしていた僕が今は他人に縋っている。

「もう、落ち着いたの？」

「え？ さ、最初から落ち着いてるわよ！ た、たかがこれくらいで動揺なんてしないから！」

明らかに動揺しているんだけど。

見えないけど、多分顔を赤くしてるんじゃないだろうか。現実には羞恥心で顔を赤くする人は早々いないと思う。

何となく想像して、思わず笑みが毀れた。  
でも、それは僕の質問の意図とは違う。

「そうじゃなくて。さっき、生徒会室で」

「あ……なんだ、そっちな」

ほんの少し残念そうに聞こえたのは気のせいかな。

「その、掘り返すのは性に合わないんだけど……」

「……大丈夫。今はもう落ち着いたから」

「そか」

そこで会話を止めた。

これ以上追求すれば、恐怖心を煽る事になりかねない。

今は、落ち着いているなら、追及する必要も無いだろう。

「怖かったから」

ふと、疑問に思った。

生徒会室に侵入してきた化け物は外に出る方が遭遇する確立は上がるはず。なのに、瀬戸さんは僕に着いて来た。恐怖の対象は化け物じゃない？ なら、死人と一緒の場所に居たくなかった？

いや、そもそも、あれだけの恐慌状態だった人間がすぐに立ち直るだろうか。何の切欠も無いように思えたけど。

嫌な予感。理解はしていない。けれど、それは確実に踏み込まない方が良いと確信していた。それと同時に無意識に口を開く。

「化け物が？」

「違うわ」

「じゃあ……なに？」

一瞬の逡巡の後、瀬戸さんは透き通る声で言った。

「海斗よ」

「兄さん……？」

沈黙が辺りを占める。

良い淀んでいるのか、表情は見えないが、明らかに迷っているような雰囲気醸し出している。

「化け物が窓から入って来たのは言ったわよね？」

「あ、うん」

「海斗と山田先輩は私達を守るように前に出てくれた。でも、勝てる訳が無い。あんな、化け物に……。一瞬で樹先輩が殺されてわ。その時に……」

搾り出すように言葉を紡ぐ。

その情景を思い出してしまっているだろう。  
僕は辛抱強く、次の言葉を待った。

「海斗は笑ってたわ。表情は見えなかつたけど、声が……聞こえた。その後に化け物に近づいて、何か喋ったと思つたら、すぐに化け物が窓から外に出て行つたわ」

「なんだ、それ……。そんな事兄さんがする訳が無い！ それになにか喋ってたって、何だよ」

思わず、握っていた手に力が入る。

兄さんは、友達が殺されて笑うような人じゃない。

化け物に話しかける？ その後に化け物が去つた？

瀬戸さんの狂言としか思えない。

「知らないわよ！ でも、確かに……目の前で見たんだもの。仕方ないじゃない！」

瀬戸さんの叫び声に、次いで反論しようとした言葉を飲み込んだ。  
声は震えていた。

「私だって、訳が解らない。でも、でも！ そんな事があつたら、怖い、って思つても、仕方ないじゃない……」

何と言えば良いのか解らず、ただ黙っていた。

兄を侮辱するなと言えば良いのだろうか。

それとも、気持ちは解ると、おざなりに言えば良いのだろうか。

どっちも違う気がした。僕はその場にいなかったのだから、何が正しくて、何が間違っているのか判断できない。

今までの僕なら、無条件に兄の味方をしていただろう。けれど、今は瀬戸さんの言葉を無視出来ない。



思った以上に僕は瀬戸さんに好意を抱いているらしかった。

「海斗が、怖かったの。だから端で海斗から離れてた。あんたが来るまでずっとそんな状態だった。何でか解らないけど、海斗がこっちに来る事は無かったわ……」

「だから、僕が最初に近づいた時警戒していたの？」

近しいと思っていた人間の人格を疑うような事があれば、警戒心を強めてもおかしくは無い。僕もそうなのでは無いか、と思っても仕方が無いかもしれない。

「ええ。ごめんなさい……。でも、あんたは樹先輩を見た時、そのまともな反応だったから……。ごめん。それで、あんたが出て行くとした時に一緒に行きたい、って言ったの」

だから、有無を言わさないな言動だったのか。

瀬戸さんも必死だったのだろう。

でも、本当に、そうなのか？

兄さんがそんな行動を取るとは思えない。瀬戸さんの話を聞く限り兄さんの行動は異常だ。

兄を信じたい気持ちと、瀬戸さんを信じたい気持ちが揺らいだまま結論を出せない。

「別に信じなくても良いわ。兄弟を悪く言っているいい気もしないだろうし。ただ、私が今ここに居るのはそういう理由があったって事だけ言いたかったの」

「……なんで？」

「知りたかつたんじゃないの？」

「まあ、気になってはいたけど」

「でしょ」

態度に出ていたのか、それとも現状から僕の心理を読み取ったのかは解らないけど。それを行動に表すのが瀬戸さんらしいとも言えた。

それは少し前の話だ。瀬戸さんの状態を見ていた僕は罪悪感を覚えた。

瀬戸さんは僕の事を考えて、話してくれたんだ。嫌な事を話させてしまった。

「気にしなくて良いわよ。少し気持ちが楽になったし。誰かに話したかったのかもね」

今は瀬戸さんのその言葉に甘えておこう。例え僕に気を使っているとしても。

「三枝先輩は……いいの？」

瀬戸さんと一緒に居たはずの三枝先輩はここにはいない。

あの状態のまま生徒会室に置いて来て良いのだろうか？

「誘ったんだけど……来なかった」

「来なかった？ 瀬戸さんと同じ考えだったんじゃないの？」

僕を信用しろ、と言うわけではない。あそこに居るより僕と一緒に居る方が危険なのは間違い無い。けれど、瀬戸さんと同じ思いを抱いていたのであれば、兄さんからは離れたがるんじゃないだろうか。

……瀬戸さんが言ったような行動を兄さんが本当にしたかどうかは別として。

「いいえ。瞳先輩は海斗の……その……おかしかった所に気付かなかったらしいの。だから、怖がっていたのは単純に樹先輩が死んでしまった事に対してよ」

「気付かなかった？」

「ええ。そう言っただけど？」

瀬戸さんと一緒に居たのに？ 気付かなかった？

そんな事有り得るのだろうか……。

あの状況ではまともな精神状態でいたかは甚だ疑問だが、それでも、気付かないものだろうか？

「瀬戸さんと一緒に居たのに？」

「え、ええ」

僕は瀬戸さんを見据えた。

瞳は揺れている。誤魔化しとは少し違う気がする。ただ単に戸惑っているだけか。

嘘を見抜くような技術は僕には無い。

それに、瀬戸さんが嘘を言っているとは思いたくなかった。

「そか……。そういえばさ、瀬戸さんはずっと生徒会室にいたの？」

誤魔化すように話を摩り替えた。

「え？ あ、うん。今日は授業が終わってずっと居たわよ」

慌てふためく様に返答する様子は気のせいか、ほっとしているようにも見えた。

訝しげな視線を送りそうになる自分を何とか抑える。

瀬戸さんに気付かれないように嘆息した。

おかしい。

思えば最初からおかしかった。

こんな状況でまともな事等、無いかもしれないが。

何の情報も持っていない僕が考えても仕方ない。答えは出ないに決まっている。

考え込まないように視界に意識を向ける。

辺りにはそこら中に生徒が横たわっている。足元に注意しながら、先へと進む。死体に触れないよう、血溜まりを踏まないように身長に歩いた。

今は落ち着いている。さっきは狂いそうな程の恐怖を抱いたのに、信じられないくらい落ち着いている。冷静に、淡々と廊下を進んでいく。

\*\*\*\*\*

僕達は学校を出て、道場へと向かっていた。

見慣れたはずの住宅街。けれど今は、まるで異世界のようだ。

瀬戸さんの家には行かなくて良いのかと聞いてみたが、別にいいとぶつきら棒に答えられた。踏み込んではいけない家庭の事情でもあるかもしれない。

道中、多少なりとも会話をしていたが、無音の中、二人の音が響

く、という状況の所為で徐々に言葉を交わす事は無くなってしまっていた。

自然に思考に耽る。

今、考えられるのは三つ。

一つ目は、僕達のような生存者は殆ど居ないだろうと言う事。学校までの道程で、人の気配や姿を見つけられなかったから。この状態になってから数時間は経っているのに全く見ない警察や自衛隊も当てになるかどうか……。そもそも、電気が通っていないのが相当の痛手だった。

でも、携帯は繋がったな……。電気が通っていないのに、何故？ 停電しているのはこちら辺一体だけなんだろうか？

試しに、携帯を開く。相変わらず圏外と書かれた画面が目に入る。慣れない動作でTVと書かれたボタンを押した。

……やはり、ワンセグも使えない。電波も飛んでいないのか。

インターネットも使えなかった。

情報を得るには電気を必要としない、ラジオくらいしかない、か。テレビも見れないし、ネットも繋がらないのに聞けるかどうかは知らないけど。

そこら中に転がっている死体を見るに生きている人は皆無とは言えないが、多くも無いと思う。たぶん、化け物とやらが原因だろう。僕自身化け物を見たわけでも無いし、殺された現場を見たわけでも無いので必然的に仮定の域を出ないけど。

しかし、なんで僕だけ見ていないんだろう？

二つ目は優先順位だ。今何を成すべきか。

兄さんとの話で出た、食料と武器の確保。まずはそれだろう。

この状況がどれ位続くか解らないのだから、衣食住の確保は必須。今から向かう道場で刀を、帰り道にコンビニかスーパーで食料の入手が最優先、か。ついでにラジオも探してみよう。

状況を把握して行動するべきだが、情報が足りない。テレビも使えないし、ネットも無理。ラジオも無い。

……校内なら放送室で聞けるのかな。入った事が無いからわからないけど。

まあ、死体だらけの校舎を探索するのは遠慮したい。化け物も居るかもしれないし、外も校内も変わらないだろう。

本来なら、他の生存者を探すべきだろうが……この惨状では、その望みは薄いだらう。

三つ目はこの状況。

黒い空、化け物の存在、死体の山。……兄さんの行動。それに、なぜ、僕達が生き残ったのか。

偶々？ 運が良かったから？

そうかもしれない。けれど、僕にはそう思えなかった。

何故かは、解らない。もう何度繰り返したか解らない。解らないのだから、解らない。

言葉遊びをしているわけでは無い。すべてが解らない。

恐らくは、あの少年にもう一度会う必要があるのだろう。気は進まないけれど。

こつこつと革靴で地面を踏みしめる音が聞こえる。暗闇の中、唯一響く音は徐々に恐怖感を煽るには十分だった。

頭を振り平静を保とうとする。

外も中も関係無く、暗い。視界が閉ざされた状況なのは変わらな  
いのだから自然に手を握ったまま僕たちは歩いていった。

無言で瀬戸さんも着いてきている。微かに震えているのは僕と同  
じ様な心境だからだろう。

手に微かなぬくもりを感じる。握り締めないように少しだけ、強  
めに握った。大丈夫、という気持ちを込めたつもりだった。少しで  
も瀬戸さんの心が軽くなれば、そう思った。

瀬戸さんも握り返してくれたのが、なんとなく嬉しくて、自然に  
笑みが零れた。

世界は狂い、異常な状況に陥っている。

そこで正気を保つ方法は暖かな感触に浸る事しか無い様に思えた。

## ジレンマ

道場への道筋は決して楽な物ではなかった。

単純に暗い道を進むという事は大変な労力を使う。

僕はそれ程難なく歩けるが瀬戸さんはそうはいかない。常に手を握っているとは言ってもよく見えない状態で歩くのは精神的に多大な負担を要するし、未知の危険性が多すぎて警戒心を緩める事も出来ない。

手から伝わる感覚は明らかに疲れを感じさせた。

加えて、そこらに転がっている死体を避けて、或いは瀬戸さんに気付かせないように注意を払っていた僕も疲弊していた。

本来なら数十分で着く距離だったが二時間は掛かってしまった。

見慣れた日本家屋が目の前に見えた。

良く言えば趣のある、悪く言えばボロい見慣れた建物は、普段とは違い不気味な雰囲気醸し出している。辺りは真っ暗なのだからどこも同じ様なものだけだ。

やはり人の気配は感じない。静寂に包まれたまま、僕達は立ち尽くしていた。

師匠なら……無事だと思っけど。

「……ここっ？」

「あ、うん」

佇んだままの僕に不安げな顔を向けている。

「入ろうか」



「ええ」

疲れているだろうに言葉からはそれを感じさせない。こういう状況で落ち込んでも仕方ないと思っっているのだろう。色々あって怖いだろうに。

僕もそれに倣って出来るだけ普通に振舞った。

引き戸が開かれる音が周囲に響く。

当たり前だけど中も暗い。

本来なら声を掛けるべきだが、あまり大きな音を立てるのは憚られた僕はそのまま中へ入った。

靴のまま上がろうか迷ったが、思い切って靴を脱ぎ廊下を進む。

非常時とは言え道場に土足で踏み入るのは憚られた。

瀬戸さんも僕の行動を止める事無く同じ様に靴を脱ぎ後を付いてきた。

一時離していた手を再び握る。一瞬、瀬戸さんの身体が強張るのを感じたが、手を振り解く事は無かった。まあ、それは慣れないよな。

廊下を進む度に床が軋む音がする。

「とりあえず、道場に向かうね」

「ええ」

と言ってもそんなに遠い訳でもないけど。

家の造りは生活部分の方が明らかに少ない。師匠は今は一人で暮らしているし、元々亡くなった奥さんも質素な生活を望んだ人だったらしいからそれで十分だった見たいけど。

なんて事を考えていたら道場に着いた。

……矢張り、人の気配を全く感じない。

若干気落ちしながら中に入る。

五十坪ほどの広さには何も無い。壁には竹刀が立てかけられている。かなりの数が並んでるけど、その殆どは使われた事が無いために新品同様だ。それでも、手入れが行き届いているため埃も被つてはいない。……まあ、全部僕が全部掃除してるんだけどね。

神座には一本の刀が飾られている。

「誰も……いないのかな？」

「そつみた……」

瀬戸さんに同意しようと思った時に視界の隅に何かが映った。

道場の端に見えたそれに何故気が付かなかったのか。

衝動的に足が動いた。

「きゃつ。ちよつと！」

後ろから聞こえる非難の声を無視してそれに走り寄る。

瀬戸さんは両膝を付いて固まっている僕に心配そつに声を掛けてきた。

「その人つて」

「……僕の師匠だよ」

短い言葉を出したと思ったたら口を噤んでしまった。思わず出てしまったみたいだ。

けれど何を言っただいなのか解らないのか、そのまま沈黙を守っている。

恐る恐る手を伸ばす。

仰向けに横たわる師匠は無念そうな表情のままだ。傍らには自慢の愛刀が半分に折られ無残に飛び散っている。あんなに大事にしていたのに……。

体中赤に染まり、呼吸音も聞こえない。それは、最早事切れている事を物語っている。

右手は刀の柄を握っていた状態のまま固まっている。僕はその手を両手で包んだ。堅い、ごつごつとした感触は長年の鍛錬を物語っている。

「師匠は……さ」

「うん」

「とても厳しい人だったよ。自分にも門下生にもね。初めて道場に来た時いきなり怒鳴られたよ。挨拶はどうした！ ってね」

瀬戸さんは僕の言葉を遮る事も無く聞いてくれている。

「驚いたよ。僕は、色々あつて荒んでいた。両親が死んで親戚を盥回しにされて、大人の悪意を真つ向に受けて疲れていた。師匠はそんな大人達とは違ってまともな人だったんだ。だから驚いた。真つ当な理由で怒る大人なんて両親しかいなかったし、そもそも怒られる事も無かったから。蔑まれたり、罵倒されたりはしたけど」

何故、とは聞いてこなかった。話の腰を折るべきではないと思っただのか。瀬戸さんの配慮だろう。僕はそれに感謝しつつ言葉を繋げた。

「だから、かな。厳しくてもこの道場に通い続けた。正直辛かったけどね。普通なら大体の事は数ヶ月もすれば慣れるものだろと思うけど、慣れたと思ったらさらに厳しくされたりしたしね。途中何人か

入門者が来たけど、あまりの厳しさにみんなすぐに辞めて行ったよ。これで生活できるのかって位」

乾いた笑いが響いた。聞こえて初めて気付いた。それは僕の声だった。師匠の手を握り締める。

「強かった。厳しかった。そして優しくかった。僕みたいな……奴にも親身になってくれた。だから……」

「……うん」

「初めてかもしれない……今、凄く悲しいんだ。凄く悲しいのに……泣けないっ！」

思わず心情を叫んだ。

感情の行き場を何処に持って行けばいいのか解らない。持て余した感情をどう処理したら良いか解らない。こんなに動揺した事がないからか、混乱してしまっていた。

目の前に恩人とも言える人が死んでいるのに、どうしたらいいか解らない。

「僕は……冷たい人間だ」

「き、きつと、ただ、混乱しているだけよ……」

「両親が死んだ時も同じだったのに？」

「……それは……」

それ以上言葉を繋げることは無かった。何を言ったら良いか解らないんだろう。客観的に見てもそうだろう。

「客観的……ははっ」

思わず胸中を吐露した。

客観的に見ても？ 何を考えているんだ。こんな状況でなにを冷静に分析しようとしているんだ。

気持ち悪い。道徳心の欠如を感じずには居られない。

「……ねえ、大丈夫？」

「大丈夫……」

そう、大丈夫。もう、大丈夫だった。

さっきまで混乱していた思考は通常のように澄んでいる。

「で、でも」

師匠の手をそっと胸の上に下ろし、見開かれていた目をそっと閉ざした。

神座に向かい飾られていた刀に礼をすると抜刀する。

師匠は代々伝わる名刀だと言っていた。美しい刀身と柄の紋様。

手入れが行き届いているのは師匠のお陰だろう。名刀は美術品としても価値があると聞いた事があるが、正にそうだと思えた。

見惚れそうな自身を諫め鞘に収めた。

「行くう」

「え？ こ、この人はどうするの？」

「弔ってあげたいけど、僕達には時間が無い。目的の物は手に入れたからここには用は無いよ」

「用は……無いって……」

「行くよ」

何か言いたげな瀬戸さんを見無視して道場を出る。

「……どうしちゃったのよ」

その疑問に答える事は出来ない。僕自身も理解出来ない。  
まるで人が変わったように思考が変わった。僕の心なのに、まるで解らない。

師匠を見て、すぐさま踵を返し玄関へと向かう。

その時にはもう殆ど悲しいとは思わなかった。

## トラウマ

道場を出ると、近くのコンビニに向かう。  
暗闇に躊躇する事無く歩いた。

「ちょっと、待って！」

「なに？」

僕は無感情に答えた。

その反応に若干気後れしたのが、瀬戸さんが言い淀む。

「そ、その……暗いから、先に行かれます……」

「……ああ、そうだったね」

何の気遣いも無く、瀬戸さんの手を引っ張る。ただ、淡々と作業を行うように。

戸惑うような表情のまま、付いてくる瀬戸さんを気にせず歩いた。

表情……？

ふと辺りを見回す。

先程よりも広範囲が認識できるようになっている。

「なんだ？」

「え？ どうしたの？」

振り向くと瀬戸さんの表情を見て取れた。

いや、見えない、けど解る。手に取るように。

見えないはずが見える。視界は暗いままなのに、解る。鮮明に脳

裏に浮ぶ、という表現が正しいかもしれない。

得体の知れない能力を得た人間はどう思うのだろうか？ 自分は特別だと幼稚な優越感に浸るのか。それとも普通ではない自分に絶望するか、或いは悩み苦しむのか。僕はそのどちらでもなかった。ただ、便利だな、と思っただけで思考を停止する。

この黒い状況に陥って、自分の感情が著しく乏しくなっているのを感じた。

だから、なんだ？ という程度にしか思えなかった。

戸惑いながらも無言で着いて来る瀬戸さんを引っ張りながら僕はそんな事を考えていた。

「ね、ねえ？」

「なに？」

「何か聞こえない？」

足を止め耳をすました。

確かに、何か聞こえる。

硝子を引掻いた不快な音。それに近い。ただ、その音はまだ遠いのか微かにしか聞こえない。だが、確実に近づいてきている。徐々に大きくなる音は次第に此方に近づいてきている証拠だった。

手から瀬戸さんの緊張が伝わってくる。ぎゅっと手を握って来た。僕はただ聞いていた。徐々に迫るその音に何の感慨も無く聞き入る。

「ゴブリン」

「え？」

「ゲームに出て来た魔物の名前」

「それが何！？」

「ああ……見えないんだっただね」



不快な音の正体はそいつの鳴き声だった事に気が付いた。

距離にして数十メートル。細かな部分は解らないが輪郭は見て取れる距離。だが、僕にはその姿が鮮明に見えていた。

身長は約二メートルくらい。理性を感じさせない瞳は獰猛さを感じさせた。口角は頬まで避けており口から唾液が垂れている。腰に布を巻いた以外は何も衣服を身に着けていない。骨格は人間に沿っているが、明らかに人外の生物は無骨な斧のような物を持っている。

「ギャギャアツ！」

何処から出しているのか、到底生物の声とは思えない音がその口から聞こえる。

「きゃっ！ な、なに？ 何なの？」

まだ、事体を把握していない瀬戸さんを一瞥すると再びゴブリンに視線を移す。

ゴブリンは此方に疾走して来た。

「見付かった」

「な、何に？ 何なの？」

「だから、ゴブリン」

僕は瀬戸さんの手を離すと右手に持っていた刀を左手に握りなおす。制服だから腰に帯びる事は出来ない。下げ緒を襷代わりに腰から下げる方法もあるが作法としては正しくは無いし、そもそも抜刀し辛い。加えて、居合いに置いて鞘を固定する事は前提としているのだから無理なだけ。

と、思考を数瞬だけ現状に割いた後に改めて正面を見据える。

後、五秒くらいか。

「五歩後ろに下がって」

「え？ 何で？」

現状を未だ把握できていないのかおろおろとしている。

「早く！」

「わ、わかったわよ！」

漸く下がった、と思ったら、ゴブリンは既に眼前に迫っていた。

僕は瞬時に腰を落し右足を踏み出す。半身にし、柄に手を据える。まだ、まだだ。握るには早過ぎる。

膝から下を固定する感覚で上半身を脱力する。

居合いは、瞬発力が物を言う。と言う師匠の言葉が脳裏を過ぎる。ほんの少しだけ胸が痛んだ。

「ギヤアギヤ！」

意味不明の言葉を言い放ちながら斧を振り被った。

まだ、早い。

僕は頭蓋を確実に砕くだろうそれを見据えた。

遅く感じる時間の流れの中、斧の軌道だけに集中する。

ゴブリンが斧を振り下ろした。遅い。だが、当れば確実に訪れるのは死だろう。

僕はその瞬間を待っていた。振り下ろし始めた攻撃を止める事は出来ない。相当の筋力と反射神経があれば出来るかもしれないけど、

腱を傷めるのは間違い無いだろう。ただの人間に出来る物では無いだろうが目の前の人外ならば可能かもしれない。だが、出来ても精々途中で止めるくらいだろう。それは一瞬の隙を意味する。

僕は僅かに左足を摺り足で前に出し、次いで大きく右足を踏み出す。同時に腰を限界まで右に捻りながら、肩から肘、手首、の順に円運動を行い回転力を増していく。視界の隅に斧の軌道を捉えつつ、焦点はゴブリンから離さない。

全ての回転力を余す事無く刀へと伝え、抜刀する。

何故か身体が異常に軽い。

ゴブリンの一撃が僕のすぐ横を通り地面へと振り下ろされた。同時に僕の一閃がゴブリンの脇腹を通る。

「浅い、か」

踏み込みが甘かった上に角度が深すぎた為か。

若干気後れしたのかもしれない。本来なら肩を掠るくらいで無ければ致命傷になるくらいの攻撃は加えられない。

一撃一殺を基本とする居合いには致命的なミスといえる。

だが、僕の抵抗を予想していなかったのか、ゴブリンは膝を突きうるたえている。

その隙を逃さず、僕は後方へと跳躍すると同時に刀身に付いた血を振り払い、空中で刀を鞘へ納めた。

返す刀で二撃目を加えても良かったかもしれないが、如何せん距離が近すぎた。踏み込む空間が無かった状態で無理に二撃目を繰り出しても、反撃されるのが落ちた。

着地した場所のすぐ隣には瀬戸さんがいた。

「な、なんなの？ 何してるの！？」

「ゴブリンと戦ってる。もう少し下がって。そこ邪魔」

「じゃ、邪魔って……」

言葉が続く前にゴブリンが此方に迫ってきた。

「ギャー！ ギャアツァー！」

明らかに怒りを含んだ声色に瀬戸さんが身を強張らせた。漸く少しは現状を理解したのか表情に恐怖を滲ませている。

突然感じた身の危険に対し出来る事はただその場に蹲る事だけだったようだ。小刻みに震えながら見えない対象を必死で目に捉えようと視線を動かしている。

その様子を視界の隅に捕らえながら正面から目を離さない。

刹那、ゴブリンが跳躍した。

先程と同じ攻撃で無駄だと思ったのか、縦の攻撃から変更して、斜め、つまり右肩からの袈裟に斬り付けてきた。

その手は好手だ。僕は胸中で呟いた。

居合いは、回避と攻撃を同時に行う。それを可能とするのは右足の踏み込みを抜刀と同時に行う事。

相手の攻撃を見極める事が出来れば一瞬で、そして無傷で相手を殺す事が出来る。その反面、使い勝手が悪い。回避を行うのは前方、しかも右前方に限られるからだ。

刀の軌道は使用者の中心のやや左から斜め前方奥に向かって行く。つまり右方には強いが、左方には弱い。僕は右利きだから必然その軌道になる。

回避を行う必要が無いほどの初速を誇れるならば別だろうが、僕には無理だ。そもそも、師匠も無理だと言っていた。それ程の速度が必要となる。

だが、それは正攻法での話だ。  
内心の賞賛を破顔し打ち消す。

空中からゴブリンが迫ってくる様子は鬼気迫るものがある。

奇声を上げながら放たれた袈裟斬りが振り下ろされる直前に僕は左足を左前方へと大きく踏み出す。それはただ単純な回避。抜刀に繋がる歩法では無い。

大きく回避を行った為にゴブリンとの距離が大きく開いてしまっている。凡そ一歩くらい。丁度良い距離だ。

踏み出した左足を軸に回転しながら、後方に体重を移動させ背を伸ばす。安定した重心を膝を曲げ落す。と、共に目の前にある障害物を潜るかのように姿勢を低くし大きく右足を踏み出す。一繋ぎで放たれた一閃をゴブリンへと繰り出した。

着地と同時にこちらに向き直ろうとするゴブリンの側方から光が凪いだ。暗闇の中、何故か見えたその光の軌跡はゴブリンの腰の深い部分を通った。

「グツ、ギャ……」

断末魔としては短い言葉を放って、倒れた。

刀を振り、血を払った。完全に拭う事は出来ない。  
使えるのは後、何回だろう。

僕は刀を鞘に納めながら、頭を振る。今考えても仕方が無いことだ。

肩で大きく息をする。  
身に着いた呼吸法を行い、高ぶった感情を諫める。  
振り返ると、瀬戸さんはまだ地面に座り込んだままだ。  
直ぐ横にはゴブリンの死体が転がっている。  
実際、一撃で決めなかつたら瀬戸さんが危なかつただろう。

「終わったよ」

「え？」

「だから、死んだよ」

「……ころ、したの？」

「殺されそうだったからね」

「淡々と事実だけを述べる。」

「近づくと、瀬戸さんは後退さった。」

「恐らくは困惑と不安、それと恐怖、からか。」

「ち、近づかないで」

「言い訳するわけじゃないけど、殺さなければ殺されていたんだよ」

「？」

「そういう問題じゃないわ！」

「尚も僕から距離を取ろうとする瀬戸さんは踵を返し方向を変えた。」

「きゃっー！」

「動揺からか、瀬戸さんは何かに蹴躓き転んだ。」

「痛っ……え？ ひっ！」

転んだ原因のそれに気付いたのか短い悲鳴を上げ、座ったまま後退さった。

そのゴブリンの死体から視線を外さない。暗い中でも、近距離ならばその輪郭くらいは見えるのだろう。

「大丈夫？」

「あ、あう」

「……死んでるよ。襲っては来ないから」

「な、なんで……」

「僕が殺したからだけど……。さっき言わなかったっけ？」

「そうじゃなくて！　なんで、そんな冷静なのよ」

「え？」

「こんな状況で、あんな化け物が現れて、それを平然と殺したって

……普通じゃない」

普通じゃない？

「まるで、その化け物より」

化け物よりも？

「あんたの方が、化け物みたいじゃない」

唇を震わせながら瀬戸さんはそう叫んだ。

僕が、化け物？

何を言っているんだ。僕は普通だ。僕はまともだ。僕は人間だ。

僕は、化け物なんかじゃない。

『化け物！』

「違う」

『お前が殺したんだ!』

「僕は殺してなんかいない」

『お前の所為で、唯香も正臣さんも死んだんだ!』

「僕は何もしていない」

『身寄りの無いお前を息子として育てた二人を殺したのはお前だ!』

「僕は……」

『何故お前が生きているんだ! 化け物のお前が!』

「止める、僕は……」

『人殺し! お前には名前なんて必要ない!』

「五月蠅い!」

激昂して振り切る。何かは判っている。これは幻聴だ。過去の記憶。その原因も、要因も解っている。僕を化け物呼ばわりする大人達の、継母の罵倒。

「だ、大丈夫?」

頭に響いていた声に混じったノイズに苛立ちを覚えた。その原因の瀬戸さんを睨みつける。

「黙れ」

「……い、言い過ぎたわ。ごめんなさい」

慌てて謝罪している。

どの口が言うんだ。

人を化け物呼ばわりした本人が、何もせずただ座り、怯えていただけの人間が。

落ち着け。僕はあの時の自分とは違う。師匠に教わった通りに実行しろ。呼吸を、ゆっくり、身体にしみこませるように行う。



そうすると自然に落ち着いていく。  
激しい感情の波は平坦になっていった。

無言で歩を進めた。

慌てて、僕についてくる瀬戸さんを無視するかのように見慣れた  
街道を歩いた。

再び不快な音が鼓膜に響いた。

全ては語られず

その数は片手で数えられない程の量だった。数十を有に超える数のゴブリン。

大群が押し寄せてくる情景は生理的拒絶感を促すに十分だった。見るに、瀬戸さんも目の前の光景に身を竦ませている。

だが、僕は無感情にその様子を観察していた。正面切って戦える数じゃない。

「逃げよう」

「え、ええ」

こつなつたら、まずは身の安全が第一だ。

食料の調達はその後によれば良い。

幸いにして、ゴブリン達は歪な体型をしている所為か、走る速度はそれ程速くない。

僕はゴブリン達に背を向けて駆け出した。

\*\*\*\*\*

暫く走ると足を止めた。

呼吸は余り乱れては居ない。

「……撒いたか」

誰に呟くでもなく、声を漏らす。

兄から話では聞いていたが、本当に存在するとは。自身の目で見て初めて実感した。ここは最早、僕のいた世界ではない、と言う事を。

しかし、あの化け物。やはり似ている、以前兄から借りていたゲームの敵に。

何かしらの因果関係があると言う事だろうか。

その考えに行き当たり、鼻で笑った。

高がゲームに？

それは無いだろう。根拠がある訳では無いが、荒唐無稽すぎる。

そこまで考えてふと周りを見た。そういえば、瀬戸さんが居ない。

「逸れたか」

全力で走っては居なかったが、普段走り慣れていない人からしたら、付いて来られ無い速度だったのかもしれない。

どうやら、気遣いが少し足らなかったみたいだ。

そう思いながら嘆息し、来た道に戻ろうと足を踏み出した。

「君は酷い奴だね」

突如、背後から聞こえた声に反応し正面へと飛び去りながら後方に向き直った。

白髪の少年。

苦笑を浮かべこちらに視線をやるその両手には瀬戸さんが抱えられている。

「この子、友達なんでしょ？ 化け物に襲われそうだったよ」

「そうか」

「……それだけ？」

「それ以外に何が？」

「君は……もう、欠如しているね。抗うのは止めたのかな？」

「何にを言っている？」

「運命、って奴かな？ いや、宿命かな」

「訳が解らない……。それよりも聞きたい事がある」

「へえ、何？」

「全て。この状況と、僕に起こっている事」

「君、口調変わったね」

「変わってないと思うが」

「……そう？ まあ、いいや。君が知りたいなら教えてあげるよ」

そう言いながら、瀬戸さんを地面へ横たわらせた。その所作は優しく、壊れ物でも扱うようなものだった。

「けど、いいのかな？ 本当に」

何を聞いているのか解らない。解らないけど、何故か、そこは触れてはならない場所なのでは無いかという不安に駆られた。

言い様の無い焦燥感。

もう、気にする事は無い。何度も感じてきた事だ。

「……良い」

「なら話すよ。所で君は神様、という言葉は聞いたことあるよね？」

「馬鹿にしているのか？」

「うっん、真面目に」

「あるに決まってる」

「その概念は？」

「……一概に言えない。神と言っても一人じゃない。一人という表現は正しいか解らないけど。日本にも八百万の神がいるし、司る種も様々だ。ゼウス辺りが最高神、か？ 宗教は余り知らない」

「そう、まあ、僕等からしたらそれは神ではないんだけど。まあ、いいや。神はね、いないんだよ」

「いない？」

「そう。存在が認識できない、って言うのが正しいけど」

「認識できないなら、居ないんじゃないのか？」

「ううん。居るよ。それだけは解る。僕達は神に近い存在だからね」

「……お前、人間じゃないのか？」

「ん。まあ、君達からしたら神に近い存在かな。僕たちはそういう肩書きみたいのは気にしない。神の使いだから、君達で言う、天使みたいなものかな」

「天使……」

「話し戻すね。神様は秩序が好きなのさ。バランスを取る事は全ての摂理に繋がっている。それが偏れば崩壊の一途を辿る。需要と供給の関係と同じだね。神様は全てのバランスを取る事が仕事なんだ」

「なんか地味な仕事だな」

「そうかもね。でも、その対象は莫大なものだよ。一人で全ての世界の影響を操作しているんだから。君たちが居る世界もその一つ。でも神様にも干渉出来ないモノがある。それが人間さ」

常軌を逸している、と思った。

だが、一先ずは話を全て聞く事にする。

鵜呑みにする事はしないが、事情を知っているのは目の前の少年しか居ないのだから。

「神様は困った。自分がバランスをとっても人間がその均衡を崩す事は少なくなかったからね。だから、人間も管理する為の存在を生み出したんだ。そうだな、 balans、って所かな」

「balans……」

「外面は人間と同じ存在。けれど、神の半身であるその存在は人間

とは到底言えない力を有している。例えば、これとかね」

そう言いながら、空を指差した。

釣られて見上げる。そこには青さは全く無く、あるのは黒一色のみだった。

「これは、前兆だよ。世界崩壊と、誕生の」

「僕が……」

「そう、君がやったんだよ。バランスー君」

信じられる訳が無い。

突然、お前は人間じゃない、等と言われて、信じられる訳も無い。

「あ、疑ってる？ 思い出してみなよ。君、思い当たる節があるでしょ？」

「思い当たる節……」

「知ってるよ。幼い頃、君の義理の両親がどうなって、そのあと何があったのか」

何を、何を言っている。

解らない。解りたくない。

拒絶するように両耳を掌で覆った。

『何を、人間の真似をしているのかな？ 君にはそんな感情は無いはずだけど』

耳を塞いでも脳に直接声が響いた。テレパシーと言う奴だろうか。気持ち悪い。まるで、頭を弄られているみたいで。

『君は両親を殺された後、犯人達を虐殺したね。』

そんな事、子供に出来る筈が無い！

『君の能力は幾つかある。バランスが崩れそうになった時の世界の  
改変。創造した世界での認識力、これは知覚していなくても状況が  
解つたりする。あと、基礎能力が異常に高い。君の存在は自然から  
逸脱しているから、他者に認識されてその存在を世界の一部になる  
事は崩壊を意味する。この言葉解る？』

「五月蠅……い」

『一時的な関係なら、問題無い。長期的、或いは特別な感情を君に  
抱いた人間が居たら、どうなると思う？』

「黙れ……」

『その対象を排除する事象が起こる。例えば、殺されたりね』

「止める！」

『君の所為で、両親は死んだんだよ』

この問答に一体何の意味があるのか。

何を望んでいるのか、解らない。

思考が錯綜する。目の前の少年の言葉は次第に僕の疑念へと変わ  
って行った。

何故、どうして、何が理由で、何の為に、両親が死ななければな  
らなかつたのか。

答えの出ない問いが、脳内を駆け巡っていた。

「さてと、そろそろかな？」

何が、と問いかける直前にふと気付く。

辺りが歪み、風景の輪郭が不鮮明に成って行くのを見た。

「さあ、崩壊の始まりだ」

楽しそうに笑う姿は、全く場にそぐわなかった。

まるで、寝起きに見る情景のように辺りは歪み、夢か現か、自分は正気なのかさえも解らなくなる。

そんな状態にも拘らず、漫然と成り行きを見守っている僕は平常心を失っていた。何も感じない。ただ、その身を任せた。

「君の作り出す世界はどんな風になるのか、楽しみだ。まあ、何と無くは想像できるけど。ここでも既に漏れていたしね」

小首を傾げ、此方に尋ねてくる様子は、なにかの同意を求めているようにも見えた。

「君の心象風景を現実に見せさせる、って事さ。解らないかな？」

少年は一方的に話しかけてくる。

僕は何を言っただけか解らずに口を噤んでいた。いや、違う。思考が付いていかなかったただけだ。

「擬似的に作り出された世界は様々な矛盾を生じる。まるで、適当に作ったゲームの様にね。それが、また面白いんだけど」

現実感を欠いている状況に頭が混乱しそうになる所で、効きなれた電子音が耳に入った。

少年を見ると、電話に出るように促してきた。慌てて携帯電話を取り出す。

『ヤマト！』

聞いた事のある声に安堵の思いを抱いた。



『限界だ。戻れ!』

限界? 何の限界だって言うのか。現状は最早どうにもならない所まで来ている。

そもそも、戻る場所など何処にも無い。

兄さんの所へ、か?

あれ? そもそも、僕は誰と喋っている?

『戻れ……? あんた、誰?』

『何を呆けているフレイド!』

『フレイド?』

誰だつけ?

聞いたことあるような。と言うか外国人の知り合いなんていたかな?

海外の人の割りに日本語上手いな。

『くっ! 過去の自身に囚われたか。それにしても、感覚が違っ…』

…。まるで、他人のような』

『他人?』

『それより早く戻れ! 帰れなくなるぞ!』

さつきから、何を言っているのか解らない。

何をそんなに焦っているのか。何を望んでいるのか。

でも、何故だか、その言葉を無視する事は出来なかった。だから、通話を切る事もしなかった。

会話の最中も景色は歪み続け終には直線は湾曲し、まるで、子供の描いた落書きのようになってしまっている。

正面に居るはずの少年の姿はボケてしまっている。

『もう時……………い。……………理に……………戻す……………』

『え？ よく聞こえない』

突如、視界が逆転する。黒から白へと。

眩いばかりの光に視界を覆われ、顔を顰め、目を瞑る。

「じゃあ。またね」

意識が途絶える直前に聞いた少年の言葉は耳にこびり付いて離れなかつた。

## 目覚め

それは恐らく夢だと思う。

夢だと断言出来ないのは余りに現実的だったから。

でも、それは夢なんだと、そう思う。

なぜなら、僕の視線は幼い僕自身を映していたから。

僕の横には母と父がいる。二人の表情は笑顔だったが、瞳の奥には微細ながらも不安が見え隠れしていた。

誰かの視界を乗っ取ったかのような情景のまま夢は続く。

自分で言うのもなんだけど無表情の幼い子供だった。恐らく三歳くらいの時か。無愛想と言うよりは、感情そのものを何処かに置き去りにした、その表現が適当に思える。

まるで、人形だ。そう思った。僕が、では無い。僕が乗り移っている子供がそう思っている。

だけど、こうも思っていた。この子はなんでこんなに寂しそうなんだろう、と。

子供は幼い僕の手を取って何処かに連れて行き、話しかける。毎日だ。

子供の気まぐれか、それとも心根の優しい子供だったのか。

無反応の僕に対し、めげずに何度も何度も。直向に、ただ、僕を思い、寄り添おうとしているのが解る。

そう、それだけ。だが、それ程とも言える。

次第に少しずつ表情を豊かにしていく僕を見て、その子供も嬉しそうに笑っていた。

楽しかった、そして嬉しかったのだろう。

だが、その時の僕はこう思っていた。

ああ、こうするのが人間らしいのか、と。

そうだ。あの少年の言った通りだ。

僕は、元々、人間らしさなんてなかったんだ。

それから僕はずっと演技をしているんだ。そう、人間の。

\*\*\*\*\*

世界が揺れる。いや、違う。自分の身体が揺れている。

肩を誰かが掴んで居る。その相手が僕の身体を揺さぶっているみたいだ。

目を開けるのが酷く億劫だった。

「起きろ！」

鼻先三寸で声を荒げている男の口調は焦りを含んでいる。

最初は優しく揺さぶられていたのだが、徐々にその力が強くなつていく。

僕の頭は前後に傾いて、否応無く意識を覚醒せざるを得なかった。

「……って」

「おい！ 起きろ！」

僕の言葉は見事に掻き消され、肩を掴む力が一層に高まった。痛いんですけど。

「……るって」

「起きろ！ 目を覚ませ！」

二度目の言葉も露と消え、僕の中で苛立ちが沸々と湧き上がる。更に揺さぶり続けられ、首は限界だ。

このままでは首が肉離れを起こしてしまいそうだ。

「起きてるって言ってるだろ！」

僕の叫びに相手の手がびくつ、と震えた。

「無事だったか……」

「いや、何度も言っただけど」

「すまない。動揺してて気が付かなかった」

力なく笑うフレイの表情は安堵で満たされていた。

何時の間にか領主に宛がわれた自室の寝具に横たわっている自分に気付いた。

「ここは、宿屋じゃない……」

以前領主から部屋を用意されたが、断ったはずだった。

単純に宿屋の方が気兼ねせずに過ごせるという理由だったのだが、何故ここにいる？

「ああ、それには理由があつてな。お前を起こしたのも同じ理由なんだが」

「理由？」

僕の言葉にフレイは顔を顰めた。腕を組みながら、若干の思考に耽る。恐らく、言い難い事なのだろうが、見当も付かなかった。

「見た方が早い」

そう言いながら僕の額に手を押し当てた。

僕は何の抵抗もせずそれを受け入れ、瞳を閉じる。多分、何かを見せようというのだろう。フレイの能力ならば、それが出来る筈だ。現に僕は過去の記憶を垣間見た。

額に感じる感触が一瞬の内に無くなり意識の所在が解らなくなっ  
て行く。

瞬時に景色が変わり、生い茂った草花が辺りに現れた。

草原だ。フレイと鍛錬をしていた場所だろう。

「大和はまだ起きないんですか？」

「ああ、記憶の深層まで行っている様でな。あと少し時間が掛かり  
そうだ。なに、問題無い」

「そうですか……」

僕の視点は全身傷だらけのクリスを映し出している。声からすると、フレイの視界を借りているみたいだ。

「それよりも今はお前だ。力は制御できるようになったのか？」

「は、はい……少しは」

「少し、では駄目だ。解っているんだろう？ 時間が無い事くらい  
「はい……。トランゼンが大人になれるのは極僅か、と聞いてます  
から」

「それには大きすぎる力の制御が出来るか否かに掛かっている」

「……なんでこんな身体になっちゃったんだろう」

「さあな。何故、と言われても、そう言う物だと受け入れるしかない  
だろう。実際、数百人に一人と言う高確率でトランゼンは生まれ  
るのだからな。愚痴は好かん」

「すみません……続きをお願いします」

『ああ。俺達にも時間は無いんだからな。では、行くぞ』

視点が低くなり突如クリスへと疾走する。余りの速さに、思わず目を閉じそうになるのを必死で堪えた。だが、実際瞳を閉じる事など出来ない事に同時に気付く。

一瞬でクリスの目の前まで移動し、拳を繰り出す。それに何とか反応したクリスは避ける事は叶わないと踏んでか、両手で防御の姿勢を取った。

フレイの拳がクリスに届きそうになる瞬間、突如として頭に声が響いた。

『あゝ、あゝ。聞こえるか？』

その声に反応し、フレイの手がクリスの目の前で停止した。

一瞬の沈黙、そしてお互い周囲を見回す。

『今、俺はお前たちの頭に直接思念を送っている。聞こえるか？』

まあ、反応は無いだろうけど』

『一体何だ？』

『さ、さあ？ 聞いたことの無い声ですけど』

寝耳に水と言った感じで呆然としているクリスが映る。

この声は、まさか。

『自己紹介が遅れたな。俺は、あんた達が魔王と呼んでいる者だが、一つ宣言をしようと思っただ。こうして態々、人間全員に、ああ、エルフも、ドワーフも含めてな、思念を送っているって訳だ』

『魔王……だど？』

『魔王……』

『あんた達が驚くのも仕方ない事だと思う。ああ、これは俺の想像

ただけだな。驚いている者が大半だろう。まあ、驚きついでに宣言したい』

フレイが混乱しているのが解る。何に對してかまでは解らないけれど。そりゃ、突然、魔王の声が聞こえてきたら誰だって動揺するだろう。そもそも、大半の人間は魔物と對峙する事はあつても、魔王と接觸する事なんてないだろうし。

数拍の沈黙。魔王の宣言とは何なんだろうか。それは、フレイもクリスも同じなように固唾を呑んで、次の言葉を待っているようだった。

『今から、人間を滅ぼします。抵抗してもいいけど、普通の人間じゃ、太刀打ち出来ないと思うよ。俺を倒せるのは大和という勇者だけです。以上』

端的、だが、突飛な言葉にその場にいなかった僕自身も呆氣に取られ、思考が中断されていた。

なんと言つた？

『人間を……？』

『滅ぼす……？』

フレイもクリスも鸚鵡返しをする事しか出来なかった。

クリスは大きく目を見開き、不安で瞳が揺れている。

『じよ、冗談……ですよね？ それに大和の名前まで言つてたし』

『いや、恐らくは、本当だ。ついでに言えば魔王は大和の事を知つていた』

『そんな、何故解るの？』

『私は知っていたからだ。魔王との開戦もな』



「知っていた、って」

「詳しい事は、話せないが。だが、思ったより早い。いや、早すぎる。何故だ」

「これが、フレイさんが言っていた、時間が無い、って言う事なの？」

「ああ、そうだ。この為だ。だが、間に合わなかった。おかしい。これでは、成立たない。それにあの物言い。明らかに含みが有る。大和に対する、宣戦布告、か？」

目の前のクリスを視界にも入れず志向に没頭するフレイ。

僕は、そんな二人のやり取りを見ながら、未だに平静を取り戻せずに居た。

魔王が、人間を、滅ぼす？

どうして？

解らない。

あいつは、いい奴だと思っていたのに。

\*\*\*\*\*

「戻ったか……。その記憶はつい先程の物だ」

フレイの言葉を聞いて漸く自分の意識を取り戻した。

何時の間にか、現実に戻っていたらしい。

僕はそれほどにも、魔王の言葉に心を揺さぶられていた。

身体が小刻みに震えている。

単純な恐怖？ 一抹の不安？ それとも、知りたくなかった現実

への拒否反応、だろうか。

解らない。自分の考えが整理できない。

得体の知れない物が心に湧き出るのを感じ、嘔吐感を伴う。

「うつつ」

「おい！ 大丈夫か？」

気持ち悪い。何なんだこれは。この感情は。

「大和、お前……」

僕を見るフレイの顔が心配そうな表情から、徐々に変わっていく。今まで見た事が無いくらいに目を見開いて驚いている。

「魔王おおおつつつ！」

憎悪と憤怒が入り混じった感情を口腔から吐き出す。

何故これほどまでに、感情が高ぶるのか解らなかった。ただ、僕は魔王を信頼していた事だけはわかった。それが一方的なものだったのだと、そう思った。

「大和、お前の感情は」

「……殺すよ」

「大和？」

「僕は、魔王を殺すよ。そうするべきだったんだ。最初から」

「お前は……それで救われるのか？」

「救われる救われないの問題じゃない。ただ、そうする」

「そうか。ならば、そうするしかない、な」

諦めとも取れる物言いにも僕は何も感じなかった。何も汲み取れ

なかった。僕の中には魔王への怒りと憎しみしかなかったのだから。

## 開戦

けたたましい複数の足音が聞こえた。明らかに、こちらに近寄ってくる音にフレイと僕は扉に視線を移した。

「失礼！ 大和殿はおられるか！」

ノックも無く乱暴に開かれた扉の前には数人の兵士が立っている。皆、表情が堅い。何かあったと言わんばかりだ。思わずフレイと視線を交わす。

「騒々しいな」

「無礼をお許してください。緊急を要する事です」

「何か、ありましたか？」

僕はそう言いながら、見当は付いていた。

恐らくは、魔王がらみだろうという事は。

「魔物の大群が此方に押し寄せて来ていると、監視の者から通達がありました」

「魔物、だと!？」

「はい。その数、五百以上、らしいです。しかも、高位種が数体」

「で、どのくらいで着く？」

「恐らく、明朝といった所かと」

「なるほど……。しかし内容が曖昧だな」

「監視役の数人は既に殺され、クライドに着いた一人も重傷でした。具体的な事までは把握できなかったのでしょうか」

「そうか……。こちらの兵力はどうなっている？」

「先日のフェンリル襲撃でかなりの兵が負傷、または殉職しました。」

現在まともに戦えるのは、百二十人くらいかと」

「成る程な。今のままではこの街は崩壊を免れない。それで、大和と私の下へ来たか。次はクリスとジェイドとかいう筋肉バカの所でも行くか」

ちなみにフレイの腕前は余り知られては居ないが、エミリアの耳にはフェンリル討伐の情報が少なからず入ったらしい。クリスから聞いた話だったが、それは真実だったようだ。でなければ、一冒険者と認識されているフレイに助力を求めては来ない。

それに、目の前の兵士が素直に情報を提供している事からも、フレイへの認識は正しく成されていると言う事の表れでも有った。

「はっ！ 自国の危機ですので、滞在者とは言え、協力を要請するのは当然かと……」

「で？ それがまかり通ると？」

フレイの強さを知ってはいる。だが、性格までは理解できていなかったようだ。

明らかかな上からの物言い。当然の如く手助けを望むその姿勢に、フレイが素直に応じる筈が無い。

せめて、平伏するか、もっと低姿勢でいるべきだったな……。

「は？ いえ、通る通らないの話では無いのでは」

「そういう話だ。私は手助けするつもりは無い」

「なっ!？」

「そもそも、何故お前達を助けなければならない？」

「それは当然、力を持つ者はそういうものでは……」

「ふむ、話にならないな。大和」

「え？ ああ、何？」

突然振り向いたフレイに、思わず素っ頓狂な返事をしてしまう。  
すっかり蚊帳の外だった僕は、ただ事の成り行きを見ていた。

「ここで、お別れだ。私の目的は達成出来無かったからな」

「多分そう言うと思っただけど、中途半端じゃないか？ 僕はまだ強くなってるよ」

「言っただろ？ お前次第だと。以前よりは力は増しているし、切欠は与えた。後はなんとかしろ」

「つまり、僕達だけで戦えと？」

「そうだ。何か不満が？」

「いや、無いよ」

無い。そもそも、フレイにとってこれ以上ここに居る事に何の利益も理由も無い。

僕を鍛え、過去の記憶を呼び覚ましてくれた。これ以上、手を借りるのはおこがましいと思った。

「と、いう事だ」

「ふ、ふざけるな！ それでも人間か！？」

「私は人間ではないのでな」

「はっ？」

「大和。お前が何処まで記憶を遡る事が出来たのかまでは知らない。だから一応教えておく。お前と魔王との決戦は本来ならあと三ヶ月先だった筈。境界での説明は、能力と役割に関するものだった。魔王との戦いについてもその時聞いている筈だ」

「それが、僕が忘れていた事、なのか？」

「おい！ 聞いているのか！」

フレイに無視された兵士が怒りを露にしている。

余りに感情的になりすぎて、兜から覗く顔面が赤く染まっている。

「そうだ。最後に教えておいてやる。お前が聞いた内容と私が聞いた内容は全てが一緒ではないが大元は一緒だ。我々はこの世界の理から切り離された存在。それぞれが抱えた役割を演じ、全うしなければならぬ。望みを聞かれた筈だ。全うし切れればその願いも叶う」

「……望み」

「お前の望みはお前にしか解らない。お前の役割もお前にしか解らない。ただ、演じる役名だけしか私達には伝えられていないし、また、教える事も出来ない。あるはずだ、お前の、お前だけの役割が」

魔王を倒す。それが役割のはずだ。そう、シャルも言っていた。

だが、なんだろう。何か心の中に引つ掛かる。

これは、魔王に対する信頼の、友情の残り火なのだろうか。

「……私が知っていて話せるのはこのくらいだ。後はお前次第だな」

「僕、次第か」

「そうだ。お前に構ってやるのはこれで最後だ。あとは精々頑張る事だな」

「ああ。有難う。十分だよ」

心からの感謝を込めてそう言葉にした。

たとえ、利己的な理由から来る親切心だろうと事実助けてもらったのは変わらない。

だから、素直に言葉に出来た。

僕の言葉に照れくさいのか視線をそらすフレイを見て、思わず笑みが零れた。

「いい加減聞けやあ！」

「五月蠅い」

完全に放置されていた兵士が激昂し、抜刀した。終に限界が来たらしい。

フレイが嘆息すると、兵士の身体が静止画のように止った。

何が起こったのか。フレイの能力は触れなければ発動しないはず。

「さて、では私は行く。ではな」

「え？ ああ。元気だな」

「お前もな」

フレイは固まっている兵士の横を通り過ぎ、後方に居た兵士達には目もくれずその場から立ち去った。

気圧されて何も出来ずに居た後方の兵士達は去っていくフレイの背中と、固まっている兵士とに視線をきよろきよろと忙しなく動かしている。

数秒後、漸く身体の拘束が解かれた兵士が荒い息を吐いている様子を嘆息しながら見る。

「じゃあ、行きますか」

「へ？ え？」

「対策会議でも開くんじゃないですか？」

「あ、はい、そうですが、言いましたか？」

「いえ。こういう場合は大体そうですね？」

「は、はあ」

思考が追いつかないのだろう。覇気の無い返答を聞きながら、僕は何とはなしに寝具から降り、身支度を始めた。

腰に携えた黒刀が妙にしっくり来た。

\*\*\*\*\*



両開きの扉を開くと、広い一室に出た。中央には会議机があり、殆どの席は既に埋まっている。

クリスやジェイド、それにエミリアはまだのようだ。先程の兵士が呼びに行っている最中なのだから当たり前なのだが。

両席が空いている腰掛に座る。

集まった顔ぶれを見ると殆どが知らない顔だった。クライドの内情に詳しくない僕にとっては当然なんだけど。若年層は少なく、初老から熟年といった面子。クライドの権力者の集まりだろうか。念のためそれぞれの顔を記憶していく。

重厚な鎧に身を包む物もいれば、小奇麗な格好の者も居る。皆、一癖ありそうだ。

順々に視線を移していくと見知った顔に目が止った。

エミリアの側近である少女が椅子に座っている。服装はシャツにスカートと簡素で、この場で浮いてしまっている。まあ、僕も、長袖のシャツに綿のパンツといった普通の格好だから、同じだろうけど。腰に携えた黒刀が非常に似合わない。なんとはなしに左手で刀の柄に触れる。そう左手で。

「あれ……？」

静寂で包まれていた一室に僕の間の抜けた声が響いた。

一斉に此方に視線が集まる。

「あ、いや。何でも無いです。すみません」

僕の言葉に返答は一切無く、複数の大きな溜息と舌打ちが帰ってきた。

いつもならそれに少しばかり苛立ちを覚える筈だったが、今はそれよりも左手が気になった。

何故、動く？

そう。僕の左手は確かに、動かなかったはずだ。カオスとの戦いで何故か動いた時もあったがそれ以降は一切動かなかったはず。なのに、今は動いている。しかも、自由自在に。筋力も落ちていないし、関節も固まっていない。

何故だ？

もしかして僕の力に何かしらの変化があったのか。

後で、試してみる必要が在りそうだ。

今は単純に喜びたいと思った。やはり、手が動かないのは非常に不自由だし、言いよりの無い消失感を感じてしまう。だから、嬉しい。その原因がなんであれ、そう思った。

全員が集まるまでの時間を、僕は左手の動かし方を思い出す事にあてた。

\*\*\*\*\*

数分の後全ての席が埋まった。

僕の両隣にはクリスとジェイドが。又隣に、ゲイルが座った。あ、ゲイル、久々に見たな。フェンリルの騒動の時にも居なかったけど、どこかへ行っていたのだろうか。

「皆さん。お集まり頂き有難う御座います」

よく通る声が会議室に響き渡る。

エミリアの声は凜として、女性ながら厳粛な雰囲気を持っている。

「まずは自己紹介から、私、クライドを統治させていただいております、領主のエミリア・クライドと申します。右は私の妹であり近衛兵隊長でもある、テレジア・クライドです」

「……よろしくです」

テレジアはペコリと首から上だけ傾けてお辞儀をした。

成る程。どうやら、あの怪力の少女はエミリアの親族で近衛兵の隊長だったわけだ。それなら、ジェイドの大剣を持てたのも頷けるな。……頷ける、よな。

「一人一人紹介する時間は御座いません。ここにいらっしやる方々はそれぞれ相当の功績と肩書きをお持ちの方ばかり。紹介するだけでも相当の時間が必要ですから」

数人は当然だとばかりに踏ん反り返る。

多少の持ち上げも必要だと言う事か。領主と言えども独善的ではいられないという事だろう。

「ですので、今回は新しい顔ぶれの方々だけ紹介させて頂きます。まずは、先日のフェンリル討伐を担った勇者大和。彼の事は周知の事実でしょうし、魔王の宣言にも彼の名前が出ていました。主戦力になることは間違いありませんし、魔王討伐に際しては彼は必要不可欠です」

エミリアは此方に手を翳し、挨拶を促す。

面倒臭いが、一応立って挨拶するべきだろう。

僕はその場に立つと軽く一礼しすぐさま着席した。

「彼の両隣に着席しております方々は、大和と共にフェンリル討伐に助力して下さったクリスティヌ・オーサットとジェイド・オーサットです。また、その隣にいるゲイル・オーサットは逸早く我が街の危機を近隣の都市に伝令し、援軍を要請してくれました。この街の復興が円滑に行え、被害が抑えられたのは彼のお蔭です。オーサット卿の名前は皆さんご存知だと思います」

場が騒がしくなる。

以前謁見の間に居合わせなかった面子からは驚きの声が上がっている。

オーサットって誰なんだろう？

「今回は彼らに助力をお願いします」

苦い顔をするものも居れば表情を明るくする者も居る。

それぞれの胸中に去来するのはどういいう意図なのかは判らない。

ただ、どちらにしても余り歓迎できる内容では無いように思えた。

「では、紹介はこのくらいで。始めましょう。我々の街の行く末を決める話し合いを」

淡々と話して居るにも関わらずその言葉の意味に、全員が息を呑んだ。

それは魔王との戦いが始まる事を意味していた。

## 序曲

「納得出来ません！」

室内にクリスの声が響き渡り、勢いよく立ち上がり長机を両手で叩いた。

部屋に居る全員の視線がクリスに注がれる。その表情は怒りに満たされていた。

「どうして、そんな作戦になるんですか!？」

「あら、何か問題でもありますか？」

「あ、あるに決まっていますでしょう」

怒りに身を震わせているクリストは対極的にエミリアの表情は平静で、何故憤慨しているか解らない、とでも言いたげだ。

「私も些か賛同致しかねます」

「お、俺も納得いかね……ないです」

「あら、ジェイド殿とゲイル殿まで」

ジェイドとゲイルもクリス程ではないにしろ遺憾を示している。

「何故、解って頂けないのでしょうか……」

「だって、おかしいでしょう!」

「勇者大和に殿を任せる事がそんなにおかしいかしら？」

事の発端は作戦内容を全員に伝える時に起こった。

対策会議かと思っていたが、その実、作戦内容は既にクライドの隊長格とエミリア含めた武官達で決定していたらしく、実質作戦内

容を伝達する為の会合としていたみたいだ。

しかし、その内容に僕達は驚きを隠せなかった。

まずは、クライドの位置を明記しなければならぬだろう。クライドはブルルフェルドの領地に存在しているが、その実、ブルルフェルドの領地とは違う。ちなみに解り辛いが、ブルルフェルドとは国全体を表す名でもあり、中心都市を表す名でもある。ブルルフェルド国ブルルフェルド市、みたいな形式だと言えば解りやすいだろう。

実質、ブルルフェルドを統治しているのは都市部の三長老なのだが、一般的な総統とは違い、国土全域を取り締まる形式は取られていない事から、都心部以外の土地はほぼ解放状態にある。クライドもそこに存在している街であり、国からの関与はほぼ無い。あるのは、広大な土地に掛けられた大規模結界による他国からの侵入を阻む防壁のみであるのが現状だ。そんな簡単に進入を阻む事が出来るのは単純にエルフの魔術が他国を大幅に上回っている事から来る。

魔術は会得が非常に困難で、魔術師を大量に抱えている国はブルルフェルド以外に存在しない。

肉体強化や初級のレベルの魔術ならばそれほど難しくは無いが、高位の魔術となると又別だ。

そういえば、と思い出す。僕が出会った人間はあまり魔術を使える人はいなかった気がする。

そういう事からブルルフェルドは不安定ながらも国土を一応保っているというのが現状だ。この先、結界が破られるだけの魔術を持った人間が出ないとも限らないが。

現に今、魔物達に進入を許してしまっているのだから。

話を戻そう。

魔物達の出所、ここが問題だった。

クライドはブルルフェルド内で、クリミアに最も近い街だ。

魔物達は何故かクリミアから出現し、ブルルフェルド内に進入を図った。クリミアの現状を知る事は出来ない。だが、あれだけの大群の魔物達が現れたと言う事は、無事とは言い難いだろう。王妃の殺害、エシヤの魔王はクリミアに居るといふ予言も関連性があると思えてならない。

そして、結界を物ともせず国内に侵攻してきている。高位の魔物が居るとの事だったので、そいつらの仕業かもしれない。

つまり、進行途中にこの街があるという事だ。

魔物達の目的はわからないが、クライドを経由する事はほぼ間違いないだろう。

現状から考えられる案は多くない。

魔物の規模から考えるとクライドの兵力だけで応戦するのは無謀だ。凡そ百二十と僕たち四人だけ、敵軍は五百以上。数だけで見ても絶望的だった。ならば、どうにかして、援軍を要請するか、どこかへ逃げるかのどちらかしかない。

前者はまず無理だ。ここはブルルフェルド国内ではあるが、ブルルフェルドから正式に認められた領地ではない。早く言えば、ブルルフェルドに黙って、建立した独立国なのだ。本来なら領地、国際問題、に発展しそうではあるがブルルフェルド国自体領地に対する見識は軽い。アルフ Heim 周辺に関与しなければ問題が無い状態であることから、クライド以外にも同じ様な街は存在している。つまり、ブルルフェルドへ応援を要請しても答える訳が無いのだ。そして、周辺の街も又同じだろう。それほど、交易も盛んでは無いし国交関係も友好かと言えば、そうでもないみたいだ。エルフ達は主立ってアルフ Heim 周辺に住んでいるし、その周辺の結界は国土を守るものより強力で、進入を許さない。エルフの協力が無ければ中に入る事さえ出来ないし、また入る事が出来てもエルフが人間に力を貸すとは到底思えない。

後者の撤退だが、問題は逃げる場所と、逃げる時間をどう稼ぐか、だ。

逃げる場所については詳しくは伝えられなかったが、エミリア曰く、確実に安全な場所があるとのことだった。それについての言及は僕達しかせず、クライド側の陣営からは一切の非難も無く無言で賛同を表していた。そこに一抹の不安を覚えながらのエミリアの一声にクリスの不満が爆発した。

大和様にはクライドに残って時間を稼いでもらいます、という言葉で。

そして今に至る。

確かに、時間を稼ぐ事は必要だ。領民数百人を逃がすにはそれ相應の時間が必要なことから。

だが、何故、僕だけ？

「大和一人に任せるのは何故ですか？」

「あら、妥当な判断だと思えますけど。大和様はお強い。それはフエンリルの件でも周知の事実ですし」

「しかしながら、何故一人に任すのですか？ それならば、私たちが一緒に、或いは兵力を割けば宜しい」

「自軍は百二十名程。少数を割いても大和様の足手纏いにしかありませんし、領民を守る者達はどうするのですか？ 逃走経路に魔物達が居ない可能性がない訳では無いのですよ」

「それじゃ、僕達が残るよ。それならいいでしょ」

「それも、無理です」

「な、なんで」

「貴方達はオーサット卿のご子息だからです。ブルルフェルド国内で唯一エルフ達に認められた程の英雄である方のご子息を、危険に巻き込む事は出来ません」

「な、なんだよ、それ」



「そういう物だと、認識していると思ったのですが、ジエイド殿とゲイル殿の身の振り方からして、ご存じなかったのかしら。それとも、反骨心かしら？」

渋面を浮かべるジエイドに視線を送る。

僕の視線に気付いたのか曖昧な笑みを浮かべた。

「まあ、いいでしょう。ともかく、私達はそれを認める事は出来ません。それに、恐らく」

「それが、最も生存率が高い、ですか？」

「……そうです。非情と思いますか？」

「いえ。賢明、じゃないですかね。それに、本当に非情な人間は、自分を非情な人間ですか、なんて聞かないでしょう。少しの罪悪感も無いなら、ね」

「すみません……」

無表情の中に僅かに浮ぶ悲哀を僕は感じ取っていた。

全く関係の無い僕を巻き込む事に罪悪感を感じているんだろう。

それが本心が演技かは僕にはわからないけれど、今はそれが事実なんだと思い込む事にした。そうすれば、危地に赴く事で覚える恐怖を少しは薄れさせる事が出来ると思ったから。

そう、僕の中で答えは決まっていた。

「行くよ」

「や、大和？」

「いいの……？」

「い、いやなら断るべきだと、俺は思う」

三者三様にそえぞれ僕を心配する声が拳がる。

いいんだ。どうせ、もう決まっているんだから。魔王と僕は対峙

するしかないんだから。戦う事が決まっているんだから。

それに、魔王の啓示から魔物の進行と流れが明らかに故意めいている。魔王の狙いは、僕なのだと思う。なら、むしろ周りの人を巻き込んだのは僕という事になる。その見解は強ち外れても居ないだろう。

だったらどうする？

一人で戦うしかない。

これは僕の問題なんだと、そう思うしかない。

僕の淡々とした言葉に周囲は沈黙に包まれた。

沈痛な面持ちの三人に微かに微笑むと、思い思いな表情を浮かべた。悲しそうな顔を見ればそれだけで心が軽くなるのを感じた。

大丈夫。そう、思った。

「ま、なんとかなるよ」

僕の声は少しだけ、ほんの少しだけ震えていた。

誤魔化すように笑みを浮かべたが上手く笑えたかどうかは解らなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2245p/>

---

リセット

2011年12月31日00時46分発行